スク水少女戦士ウテルス

暗闇魍魎

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。

このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】
スク水少女戦士ウテルス

【Ｎコード】
Ｎ９９６７ＩＬ

【作者名】
暗闇魍魎

【あらすじ】
突如現れた人間を捕食し人間に擬態する異生物ヴァギナ。人間はヴァギナの恐怖に怯えながら生活していた。その暗黒の暮らしのなか一筋の光がもたらされる。選ばれた少女の中から、特別な力を持つ少女戦士が誕生する。スクール水着でヴァギナと戦う少女は、いつしか「スク水戦士ウテルス」と呼ばれるようになっていった。ヴァギナ対人間だけではなく、人間の中でも闇に堕ちた者も多い。
性器拷問や性器破壊、拷問されて大小便か噴き出す酷い描写や汚物満載の描写があり、また設定上幼い女子が登場し酷い目にあいます。

人間が食べられていく残酷描写もありますので、苦手な方は読まないよう注意して下さい。

1、覚醒（前書き）

残酷な描写、特に女の子が性器を破壊されていき食べられてしまう描写等がありますので、苦手な方はご注意ください。他にも大便、小便等のスカトロ要素もありますので注意して下さい。

1、覚醒

1、覚醒

この世界に突然現れた異生物。人間と同じ姿に擬態し、人間を油断させては食料として食い尽くす。気が付いた時には多くの人間が、いつの間にかこの異生物に入れ替わり、餌食になっていた。人々はどこでこの異生物に襲われるか分からない中でも、生活を営む為には以前のように仕事をし暮らしていかなければならなかった。異生物は、人間を食べる時にはその正体を現す。それは人間の女性器を巨大化し何本もの触手が付いた形で、膣口にあたる部分が口になっており、そこから生きた人間を食い自分の養分として取り込むのである。異生物は、いつしかその見た目から〝ヴァギナ〟と呼ばれるようになっていった。

優子は仕事の帰り、最寄の駅を降りると夜道を自宅に向って歩き出した。この辺りは比較的安全な地域であったが、とうとう先日ヴァギナが現れ犠牲者が出てしまった。ヴァギナは視力はあまり良くないようで、むしろ暗い道の方が安全だとのネットの書き込みがあり、優子はそれを信じて、なるべく灯りの少ない道を選んで歩いていた。しばらく歩くと、優子の前をふらふら歩く会社員風の男の後姿が目に入り、優子は一応警戒する。男は酔っているようで千鳥足でふらふら歩いていた。ヴァギナは、酒の匂いも苦手という情報もあり、その為徒歩で外を歩く時には飲酒して歩く者がほとんどだったが、優子のように下戸の者は、酒の匂いのスプレーを体に吹きかけていた。

ふらふらと歩いていた男が振り返る。そして、優子の顔を見ると恐怖で表情が凍り付いていた。なによ、失礼なと優子は男を睨み返すが、男は優子を指差してガクガクと震え出し転がるように逃げ出した。さすがに優子も異常を感じ、恐る恐る後ろを振り返ると、それはすぐ近いところに居た。

「ぶしゅーーっ」

ヴァギナは優子に向って触手を伸ばすが、優子は間一髪触手を逃れ逃げ出した。学生時代陸上部だった優子は、あっという間にヴァギナとの距離をどんどんと離していく。

・・ふふん、私を舐めないで・・

優子は更にスピードを上げ夜道を疾走すると、先に逃げ出した男が倒れていた。

・・酔っ払って走るからよ、自業自得だわ・・

優子は男にばかり気を取られて前に立っていたものに気が付かなかった。もし、気が付いていれば、優子の走るスピードならば十分に逃げ切る事が出来ただろうが、この一瞬が優子の運命を決定付けた。優子は前に立っていたもう一体のヴァギナの触手に捕らわれていた。

「ひぃぃぃーーーっ」

優子の悲鳴が夜道に響き渡る。倒れている男の頭部はなくなっていた。

・・誰よ、お酒の匂いが苦手なんていった奴・・

優子は触手から逃れようと必死に抵抗するが、後ろから追い付いてきたもう一体のヴァギナの触手も優子の体に巻き付いてくる。そして、人間が食材の下準備で皮をむいたりするように、ヴァギナも食材の人間の着ている洋服を剥いでいく。優子はたちまち下着だけの姿にされていた。

「助けてぇぇーーーっ」

優子の叫び声が響き渡るが、助けに出てくる者は誰も居ない。拳銃で撃たれても死なない化け物なのだ。わざわざ殺されに出てくる者は居なかった。唯一、人間でいうところのクリトリスを攻撃すれば、ショックで死亡することが分かっているが、普段は小陰唇のような皮で厳重にガードされており、警官の所有している針が飛び出す特殊警防での至近距離からの攻撃でないと効果なかったのである。

「お願いぃぃ、誰かぁぁーーっ」

優子は必死に助けを呼ぶが、優子の形の良い胸の膨らみを隠すブラが剥ぎ取られ、下着の下からポロンと胸の膨らみが零れ落ちる。次に股間を隠す下着が触手で切り裂かれ剥ぎ取られた。全裸にされた優子は、二体のヴァギナの触手でギリギリと拘束され動くことも出来ず、泣き叫びながら倒れていた男の姿が目に入ってしまった。男もいつの間にか全裸にされており、すでに頭を食われている男の体は仰向けにされており優子はこんな時でありながら、つい男の股間に目がいってしまった。

・・ヴァギナは性器が大好物で、そこだけは食べ残しがないって書き込みがあった・・

優子は嫌な事を思い出し体が震えてきた。ヴァギナは男の性器の尿道に触手を突き刺し、ずるずると中に入れていく。どこまで入れていくんだろうと優子が見ていると、男の下腹部を突き破って触手の先端が顔を出した。

「ひぃぃぃーーーーっ」

あんな事、生きてるうちにやられたら。優子は恐怖し漏らしていた。優子の股間の割れ目から透明な液体が湯気を立てて溢れ出す。すると、その小便を漏らす優子の尿道に、うねうねと触手が集まってくる。そして、優子の尿道にいきなり五本もの触手が入ってきた。

「ひぎぃぃぃーーーーっ」

尿道が裂け、優子は血の小便を流しながら絶叫する。しかし、触手はさらに奥に入り優子の膀胱を串刺しにし、下腹部を突き破り、うねうねと顔を出す。

「ひぎゃぁぁぁーーーーっ」

再び絶叫する優子の膣に触手が入り込み、今度は子宮を串刺しにし、さらに他の触手が子宮に巻き付いていく。そして、そのまま子宮を膣から引きずり出す。膣口から赤黒い子宮が取り出され、ヴァギナは満足そうに口に入れると優子の子宮を口の中で磨り潰し呑み込んだ。更に優子の膣の奥から卵巣も取り出すと口に入れ食べられ、膣壁も剥がされ、当然、小陰唇、クリトリスも引き千切られると食べられた。

生きながら性器を食べられた優子は体をビクンビクンと痙攣させ天を仰いで絶叫していた。性器のあった場所からは大量の血が流れ出していた。

「おげげげっ」

力ない声を上げる優子の口にも触手が何十本も入り、涙を流す大きく見開いた優子の両方の目にも触手が突き刺さり目玉を抉り取られ食べられた。その後、優子は手足を付け根から千切られ食べられていく。ぐちゃぐちゃと優子を租借する音がいつまでも続いていた。けっきょく、優子は残さず食べつくされ、残ったものは切り裂かれた洋服と、大量の血だけだった。こうして、優子はこの世から消えた。

姫川菜緒は自分の部屋に鍵を掛け、勉強机の角に股間の割れ目を押し付けていた。

「おっおっおっおっ」

我慢しようとしても小さく声が洩れてしまう。まだ十一歳で初潮もない菜緒であるが、これが自慰というものである事はネットで調べて分かっていた。菜緒は毎晩こうして自分の性器を押し潰し快感に耽っていた。

この日も、いつものように臍の下まである女児用の綿の白い下着だけになり割れ目を押し潰して快感に耽っていたが、もっと快感を得る為に下着も脱いで全裸になった菜緒は1ダース入りの鉛筆を手に取った。

・・オマンコの穴に入れると気持ちいいってあったけど、ほんとかな・・

菜緒はベッドに横になると膣口を確認し鉛筆を一本入れてみた。別に痛くも気持ちよくもない。

・・大人にならないと気持ちよくないのかな・・

そう思いながら菜緒は二本目を入れる。今度は痛かった。それでも菜緒は奥まで鉛筆を入れてしまう。そして、三本目を入れていると、かなりの痛みに伴い血が出てきた。

・・オマンコから血が出てる・・

菜緒は性器から血を流し、自分が興奮してきている事に気が付いた。

・・もっと鉛筆入れてオマンコから血を出せば気持ちよくなるの・・

菜緒は、涙を流しながら一本また一本と鉛筆を膣に押し込んでいき、とうとう1ダースの鉛筆全てを膣に入れてしまった。

・・もっと、子宮にぶつかるまで奥に入れないと……・・

菜緒は両手で股間に突き刺さる鉛筆を力一杯押し込んだ。

・・ひぎぃぃぃーーーっ痛いのに気持ちいいぃぃぃーーっ・・

一本の鉛筆は、菜緒の子宮口から子宮内にまで深く突き刺さっていた。菜緒はそなまま立ち上がり机の角に鉛筆を入れたままの性器を押し当てると自慰を始めた。

「おっおっおっおっ」

・・何？　いつもより気持ちいい・・

「おぉぉぉーーーーっ」

菜緒の子宮が光り始めていた。

・・あぁぁぁ気持ちいいぃぃ・・

気が付くと菜緒は宙に浮いていた。そして、そのまま二階の部屋の窓から外に出て行く。

・・嘘っ、私、空飛んでるの・・

菜緒は頭の中で飛ぶイメージをすると、その通りに体は空を飛びまわった。

・・気持ちいいっ・・

スピードも自由自在だった。菜緒は、飛びながらおしっこしたら気持ちよさそうと思い下腹部に力を入れたが、ふと思いつき窓から出る時手に掴んでいた白い下着を頭に被る。

・・これで万が一誰かに見られても顔は分からないもんね・・

菜緒は、すーっと飛んだ後、空中で止まり足を大きく開くと、そなまま放尿した。そして、足を開いて放尿したまま飛び回る。

・・気持ちいいぃぃっ　うんちもしちゃおうかな・・

菜緒は、空中で逆さになると大きく足を開き、放尿しながら下腹部

に力を入れる。しばらくして、菜緒の肛門が大きく開き大便がぶりぶりと出てくる。逆さになっている菜緒は自分の小便と大便を体に浴びながら、これ以上ない程興奮していた。

菜緒の興奮は治まらず、そのまま空を飛び回り自分の部屋に戻ったのは明け方になっていた。

1、覚醒（後書き）

新しい力に覚醒した菜緒は、間違いなく変態であるがヴァギナとの戦いに飛び込んでいく。果たして菜緒はヴァギナとの戦闘に勝利する事が出来るのか？

スク水戦士ウテルスの誕生は、あと少し先の事になった。

2、初陣（前書き）

新しい力に覚醒した菜緒だったが、小学校では激しい虐待にあい性器と肛門を痛めつけられる。
それでも菜緒は自分の力を試す為、ヴァギナとの戦いに挑んでいく。

2、初陣

2、初陣

菜緒が小学校に登校すると同級生で幼馴染みの伊藤芳樹が話しかけてきた。何か非常に興奮していて、ちょっとちょっとと理科の実験室まで連れてこられた菜緒は、頬を膨らませて機嫌悪そうにしていたが、芳樹はそんな事にも気づかないようにランドセルからデジタル一眼レフカメラを取り出した。写真撮影が趣味の芳樹が自分の小遣いを貯めて親にも援助してもらって購入した自慢の高級機だった。ほら、見てみろと芳樹は菜緒にカメラのモニターを見せる。何枚かの星空の天体写真の後、少女が映った写真が出てきた。少女は白い下着を頭に被った全裸姿で宙に浮かんでいる。

「昨日の夜、星空の写真撮ってたら裸の女の子がパンティ被って空を飛んでたんだ」

芳樹は興奮した口調で菜緒に写真を見せながら解説する。

「夢かと思ったけど、こうして写真に残っているから本当の事だったんだよ。その空飛ぶ女の子をずっと写真撮影してたら、ほら見てごらん。この女の子、空飛びながらおしっこしてるんだよ」

カメラのモニターには、下着を被った全裸の少女が空中で足を開いて放尿している姿がはっきりと映っていた。そして、次の写真には、その少女の股間のアップ、性器から小便が勢いよく放出されている様子がくっきりと映し出されている。菜緒はその写真を見ながら今

度はオマンコ開いておしっこの穴もよく見えるようにしようと反省していた。

「このあとこの女の子、うんちもし始めたんだ。しかも最初逆さになってするから自分のおしっこやうんち塗れになってるんだ、ほら」

空中で足を開いて逆さになっている少女の股間から大小便が噴き出している写真に芳樹は興奮していた。どうやって撮影したのか少女の大便を出す肛門のアップがあり、肛門のシワまで鮮明に映っていた。

「こんな可愛い女の子が、おしっこやうんち塗れになっちゃって、僕が舐めてきれいにしてあげたいよ」

「えーっ」

菜緒は驚いて芳樹の顔を見るが、芳樹はうっとりしたように少女の写真を見つめている。

「もし、手が届いたらおしっこうんち手で取って飲んだり食べたりしたかったよ。こんな可愛い女の子のおしっこやうんちだったら絶対おいしいから…」

菜緒は呆れて聞いていた。芳樹が変態なのか、男の子がみんな変態なのか分からなかったが、菜緒も聞いていて悪い気はしなかった。

「そんなに言うなら、おしっこ飲ませてあげるし、うんちも食べさせてあげるよ」

多少恥ずかしそうに菜緒が芳樹に言うと、芳樹は烈火のごとく怒り

だした。

「誰が姫川の汚いおしっこなんか飲むかよ。考えただけで気持ち悪くなる。お前の、うんちなんか汚くて見るのも嫌だ」

ショックを受ける菜緒にかまわず芳樹は、さらに言い放つ。

「姫川みたいなドブスと、この女の子を一緒にするんじゃないよ」

菜緒はショックで涙ぐんでいた。

・・その女の子、私なんだよ・・

しかし、芳樹は怒りが治まらないのか菜緒のツインテールを乱暴に掴むと机の上に仰向けに寝かせ両足を開いたまま机の脚にガムテープで固定する。そして、何するのと驚いている菜緒の口にもガムテープを貼り、菜緒の体もぐるぐるとガムテープで机に縛り付けた。

「うぅうぅぅっ」

菜緒は恐怖で震えていた。

「姫川にお仕置きするのは久しぶりだな。今日はドブスの分際でふざけた事を言う姫川に痛い目にあってもらうよ」

そう言いながら芳樹は菜緒のスカートをまくり上げ、その下から現れた苺柄の可愛い下着をカッターで切り裂いていく。そして、剥き出しになった菜緒の性器と肛門を眺め、にやりと笑うと実験室にあった大きめの試験管を菜緒の膣にずぶっと入れていく。芳樹はさらに一本、また一本と菜緒の膣に試験管を容赦なく差し込んでいく。

「ふぅぅぅーーーっ」

・・やめてぇ中で割れたら私のオマンコ死んじゃうよぉぉ・・

しかし、芳樹は五本もの太い試験管を菜緒の膣に入れてしまった。
それだけではなく菜緒の肛門にも試験管を突き立て、三本の試験管を肛門に押し込んだ。

「さっき僕におしっこ飲ませてあげるなんて言ってたけど、僕が姫川におしっこ飲ませてあげるよ」

芳樹はガムテープで塞いでいる菜緒の口に漏斗を突き刺し、目を見開く菜緒の前で自分の性器をだすと菜緒の口に刺した漏斗の中に放尿しだした。

「うぐっうぐっ」

菜緒は泣きながら自分の口に強制的に入ってくる芳樹の小便を飲んでいた。

「よく全部飲めたね。それじゃ最後に相当痛い事をしてあげるかなね」

手にした木製のハンマーを菜緒に見せつけると芳樹は菜緒の開いた足の真ん中に立った。そして、ハンマーを思い切り菜緒のつるつるの恥丘に叩きつける。

「ぶひぃぃぃぃーーーーっ」

絶叫する菜緒に構わず芳樹はハンマーを恥丘に打ち込み、菜緒の膣内の試験管が割れ、膣壁に突き刺さり血が溢れ出した。それでも、打ち付けられるハンマーの衝撃で肛門の試験管も割れていく。菜緒は膣と肛門から血を流し泣き叫んだ。

「おっ、いけない授業始まる」

芳樹は、股間から大量の血を流し号泣する菜緒をそのままにして実験室から出て行ってしまった。

・・痛い、痛い・・

泣きながら菜緒はガムテープで机に固定されている両足に力を入れた。すると、ばりばりとガムテープが裂け足が動かせるようになった。そして、体にも力を入れ拘束から逃れる。実験室に立ち上がった頃には、あんなに大量に流れていた膣と肛門からの出血も止まっていた。菜緒は投げ捨てられている切り裂かれた苺柄の下着を手に取った。さすがに下着は元には戻らず切り裂かれたままだった。

・・お気に入りのパンティだったのに・・

菜緒は、ずたずたにされたお気に入りの苺柄の下着を見つめ悲しくなってきた。

菜緒は夜になると今日は初めから下着を頭に被り全裸で空を飛んでいた。試してみたい事がありぐるぐると空を周回していると、女性の悲鳴が聞こえた。

・・どこだろう・・

菜緒は悲鳴の聞こえた辺りを飛び回ると、それはいた。悲鳴を上げたであろう女性はすでに手足は食いちぎられ、体も胸から下はなくなっていた。

・・いた、いた・・

菜緒はヴァギナに向かって飛び降りると、手刀で女性を捉えているヴァギナの触手を切りつけた。

ズバッ

触手はあっけなく切断され女性の体が地面に落ちる。切断されたヴァギナの触手から黄色の体液が飛び散った。

・・うわっ汚いっ・・

菜緒は飛び散ったヴァギナの体液から避けるとヴァギナと堂々と向き合った。ヴァギナが高速で触手を伸ばしてくるが軽くかわし、体をくるっと回転させると回し蹴りを叩き込む。ヴァギナの巨体が、どうっと地面に倒れた。

・・やっぱり私、強いのかも・・

菜緒は両手を握りしめ力を込める。

「はあぁぁーーーーっ」

菜緒の下腹部、子宮の辺りが光り始め、その光がどんどん大きくなっていく。菜緒はそのままジャンプし、倒れているヴァギナの急所クリトリスに正拳を思い切り叩き込んだ。

「ぶひゅーーーっ」

ヴァギナは絶叫し、しばらく体を痙攣させていたが、やがて動かなくなっていく。

・・やった、ヴァギナに勝った。私ならヴァギナに勝てるんだ・・

菜緒は両手を上げ勝利のポーズを決めたが、ふと思い出しヴァギナに食われていた女性のもとに行く。頭と胸しかない女性は、まだかろうじて生きていた。ヴァギナが食事の際、人間に注入する体液には、人間が多少の事でショック死や出血死しないように働く成分が含まれているようだった。おそらく新鮮なまま食べたいという事ではと専門家が話していたのを菜緒は思い出していた。

「ありがとう…」

女性は菜緒がヴァギナを倒した事がわかり、涙を流しながらお礼を言うと、ガクッと事切れた。

菜緒は女性の目を閉じてあげると、ヂュワと空を飛び見えなくなっていった。

菜緒は気付かなかったが、その一部始終を撮影していたカメラがあった。

・・凄い、あのヴァギナに勝てる人間がいるんだ・・

それは人間にとって大きな希望と云える出来事だった。

2、初陣（後書き）

性器拷問の後、自分の力を認識した菜緒は、遂にヴァギナとの戦いに勝利した。
そして、次回スク水戦士ウテルスが誕生する。

3、スク水戦士ウテルス誕生（前書き）

小学校で激しい性器拷問を受け続ける姫川菜緒。
幼馴染みの同級生からのヒントで、遂にスク水戦士ウテルスが誕生する。

3、スク水戦士ウテルス誕生

3、スク水戦士ウテルス誕生

小学校に登校した菜緒は今日も芳樹に連れられて、別棟の旧校舎の理科実験室に来ていた。

「ほら、昨日も出てきたんだぜ、この女の子。それでさぁ凄いんだよ、この女の子。あのヴァギナと戦って、ヴァギナを倒しちゃったんだよ」

芳樹は興奮冷めやらぬという感じで、撮影した写真を菜緒に見せながら話す。菜緒は写真を見ながら、よく撮れてるじゃないと御満悦だった。それにしても下半身のアップが多いわねと芳樹の顔を覗き見る。

「ほら、見てみろ姫川。この可愛いマンコとおしりの穴」

芳樹が興奮している写真は、少女がヴァギナに回し蹴りを決めた時の股間のアップだった。足を大きく上げてキックしている為、少女の股間が丸見えで、桜色の小陰唇のビラビラや肛門のシワもはっきりくっきりと鮮明に撮影されていた。

「そしてさあ、この女の子。キックしながら、おしっこ漏らしてるんだよ」

芳樹が見せてくれた次の写真には、確かに少女の割れ目から噴き出

す小便が映っていた。

・・えっ、私、お漏らしなんかしたかな・・

菜緒は昨夜の事を振り返ってみたが、記憶になかった。でも自分が非常に興奮していたのは憶えている。きっと自分でも気付かないうちに漏らしてたんだ。菜緒は、どうせなら〝うんち〟も漏らせばよかった。今度からは〝うんち〟も漏らした方がいいよねと思っていると、案の定、芳樹が、どうせなら〝うんち〟も漏らしてくれれば最高だったのにと悔しがっていた。

・・ごめん、芳樹くん。今度から気を付ける・・

菜緒は心の中で芳樹に謝りながら、そういえばこの写真、いつもみたいにネットにアップしたのと訊いてみた。

「まだしてないよ。というかしない」

えっと菜緒は驚いた。自分で撮った写真をネットにアップする事を至上の楽しみとしている芳樹にしては考えられない事だった。

「どうして?。オマンコの修正とかめんどくさいから?」

菜緒が訊くと芳樹は、いいやと首を振る。

「この女の子の裸を見せたくないんだよ。この女の子の裸は僕だけのものだ、他の誰にも見せたくない。このペッタンコの胸のピンクの乳首、素晴らしい寸胴の体型、割れ目から見えるピンクのビラビラ、そして、ピンクのおしりの穴。ああ、ぺろぺろと舐めてあげたいよ」

菜緒は呆れたように、顔はどうでもいいの？と呟くと芳樹はとんでもないと語りだす。

「だって顔は見えないじゃないか。でも可愛いに決まっている。ああ、この女の子の体中を舐めたい。そして、おしっこ飲ませてもらって、うんちも食べさせてもらうんだ。もちろん、おしっこやうんちした後のマンコとお尻の穴も僕がきれいに舐めてあげるんだ」

芳樹は夢見るように語っていたが菜緒は、だから、その女の子、私なんだってと心の中で訴えていたが我慢しきれず、つい口に出してしまう。

「だから、おしっこ飲ませて、うんちも食べさせてあげると言ってるじゃない。今でもいいよ。まだ時間あるし。ちょうど、おしっこもうんちも出そうだから」

菜緒が屈んでスカートの下に手を入れ下着を脱ごうとした時、芳樹の蹴りが菜緒の顔面に炸裂した。

「ぶぎゃっ」

後ろに転がった菜緒は鼻血を出しながら起き上がるが、芳樹にツインテールを掴れ、また顔面を殴られる。二発、三発。続けて顔面を殴られ菜緒は泣き出していた。

「姫川、またふざけた事を言いやがって。そんなに、おしっことうんちしたいならさせてやるよ」

芳樹は菜緒のスカートと下着を剥ぎ取り、菜緒に命令する。

「手を後ろに回して、足を開いて立てよ」

菜緒は芳樹の命令通りの姿勢をとると、足はモップの柄にガムテープで縛られ開いたまま閉じられないように固定され、腕も後ろ手に縛り付けられた。そして、菜緒の開いた足の中心にバケツを置く。

「早くしろよ、姫川。早くしないと、また痛い事になるぞ」

「ひぃぃぃーーっ」

菜緒は芳樹の見ている前で放尿し始めた。菜緒の幼い割れ目から小便がチョロチョロと出て下に置かれたバケツに溜まっていく。

「早く、うんちも出せよ」

「はいっ」

息んでいる菜緒の肛門からぶりぶりと大便が捻り出され、ぼとぼとと落ちていく。菜緒は芳樹が自分の排便する姿を見ていると思ったが、芳樹は菜緒の方には目も向けずスマホの画面を見入っていた。

「私のうんちしている姿、見てくれないの？」

菜緒が悲しくなって芳樹に行ったが、芳樹の耳には入らないようで、芳樹は一人でぶつぶつ言っている。

「この女の子、服着ていればなあ。ネットにアップ出来るのに。セーラー服じゃ普通すぎるか…。スクール水着がいいな。そうだ、スクール水着にサイハイソックス。最高じゃん」

興奮した口調で一人で話す芳樹の言葉を菜緒はしっかりと頭に刻み込んでいた。

・・スクール水着かぁ・・

リアルで小学生の菜緒は当然スクール水着を持っている。サイハイはあったかなと菜緒が考えていると芳樹は菜緒の股間の下にあったバケツをどかし、そこに椅子を置いた。そして、何やらカチャカチャと準備している。

「何してるの？」

不安になって菜緒が訪ねると、芳樹はにやりと笑う。

「おしっこととうんち漏らして汚い姫川のまんことおしりの穴を消毒するんだ」

「消毒？」

「そう。火で炙って熱消毒」

芳樹は手に持ったアルコールランプを菜緒に見せる。菜緒の顔色が変わり、ぶるぶると震えだした。

「やめてぇ。私、女の子だよ。そんな事されたら、女の子じゃなくなっちゃう」

「大丈夫だよ。誰も姫川なんか相手にしないから。それに、もうおしっこ出しちゃったから、おしっこで消せないね」

芳樹は着々と準備を進めると、手にしたライターの火を点けた。

「それでは、姫川のマンコ火炙りの刑、始めるよ。点火」

芳樹はアルコールランプに火を点けると笑い出した。アルコールランプの火が菜緒の性器を焦がしていく。

「ひぎぃぃぃぃーーーっ熱いよぉぉぉーーーっ」

菜緒が泣き叫ぶと芳樹は、うるさいよとガムテープで菜緒の口を塞いでしまった。

「ぶひぶひぶひぃぃぃぃーーーっ」

菜緒の性器が焼ける臭いが辺りに漂うなか、芳樹は実験用の大きなピンセットを使い菜緒の小陰唇を摘まむと左右に大きく拡げた。膣口や尿道口など菜緒の性器の中身が直接、火で炙られる。

「ぶひぃぃぃぃぃーーーーーーーっ」

菜緒が絶叫するが、かまわず芳樹はピンセットで菜緒の性器を拡げていた。そのうちにピンセットが熱で赤くなってくる。

「熱伝導って云うんだっけ」

芳樹はそう言うと真っ赤になっているピンセットの一本を菜緒の膣に突き刺した。じゅーっという音がして肉の焦げる臭いがする。膣に焼き印を押された菜緒は白目を剥き失神していたが、芳樹は菜緒の頬を激しく何度も打ち覚醒させる。

「なに、気を失ってるんだよ姫川。まだもう一本あるんだぞ」

泣きながら嫌々と首を振る菜緒のツインテールが左右に激しく振れている。芳樹は真っ赤に焼けたピンセットを持ちながら菜緒の肛門に指を当て開いていく。

「もっと、ケツの力抜かないと穴が溶けちゃうぞ」

脅かすように言いながら芳樹は、菜緒の肛門にずぶずぶと真っ赤に焼けたピンセット突き刺していく。そして、なんと菜緒の肛門にピンセットを全部押し込んでしまった。

「ぶひぃぃぃぃーーーーっ」

菜緒は絶叫し、また気絶した。その間もアルコールランプは菜緒の性器を焼き続け、菜緒のピンク色だった小陰唇は黒く焼け焦げてぶすぶすと煙を出していた。芳樹は気絶した菜緒の顔面を殴りつけ、また覚醒させる。そして、菜緒の口を塞いでいたガムテープをバリバリと剥がした。

「誰が気絶していいと言ったんだよ」

「もう許して下さいぃぃ。私、死んじゃう」

「死ねよ。姫川なんか死んでも誰も悲しまないし、むしろ喜ぶかもな」

芳樹は冷酷に菜緒に言い、菜緒は何でもするから殺さないでと大声で泣き出した。芳樹は菜緒の股の間の椅子をどかすと、足を固定し

ていたモップも外す。

「よーし、じゃあそのまま立ってろ」

「はい」

腕を縛られ下半身裸のまま菜緒は震えながら立っていた。その菜緒の顔面にモップの柄が叩き込まれる。

「ぶぎゃっ」

菜緒は奇声を上げて後方に転がった。

「駄目だよ、姫川。目を瞑っちゃ。目を最後まで開けていられるまで続けるからな。」

両手を縛られなかなか立てない菜緒の腹に芳樹は蹴りを入れる。

「げぼぅぅぅ」

腹部を思い切り蹴られた菜緒は、ゲロを吐いてしまった。苦しそうに涙を流しながら、げえげえと吐いている菜緒に芳樹は冷たく言い放つ。

「早く立てよ、姫川。いらいらするな」

芳樹の菜緒に対する虐待は果てしなく続いていた。

自分の部屋で菜緒は探し物をしていた。スクール水着はすぐに見つかったが、サイハイソックスがなかなか見つからなかった。

・・オーバーニーはたくさんあるんだけど・・

菜緒はなおも箪笥の引き出しを引っ張り出しクロゼットの中を漁り、ようやく一足の黒いサイハイソックスを探し当てた。そして、さっそくスクール水着とサイハイソックスを身に着け、姿見に映してみる。クラレＫＫ６０．古典的なスカートタイプの濃紺のスクール水着だ。それに太ももの付け根近くまである黒いサイハイソックス。頭には白い女児用の綿の下着を被り左右からツインテールの黒い髪が垂れ下がっている。

・・可愛いかな？・・

菜緒は姿見の前でポーズを決めてみた。そして、ポーズを決めながら名前も名乗りたいなと考えていた。

・・セーラー戦士だって名前あるもんね・・

菜緒は色々悩んだ挙句に顔を輝かせて、これがいいと自画自賛した。菜緒は自分のこの力の源は子宮だと考えていた。子宮が光ってから空を飛べるようになったし、パワーも上がり回復力も増した。だから、今度ヴァギナから助けた人に名前を訊かれたら、こう言おう。

「スク水戦士ウテルス」

3、スク水戦士ウテルス誕生（後書き）

激しく性器拷問され、泣き叫びながらも従順に拷問を受け続ける菜緒。
遂にスクール水着を着用し、スク水戦士ウテルスと名乗る事を決意し、菜緒はヴァギナとの戦いに飛び込んでいく。

4、人類の希望（前書き）

今回、菜緒が性器拷問されるシーンはありません。楽しみにしていた人、ごめんなさい。スカトロ要素はありますので、その方面が苦手な方はご注意下さい。

4、人類の希望

4、人類の希望

スクール水着にサイハイソックスで頭に白い女児用下着を被った菜緒は、夜の空を飛んでいた。どこかでヴァギナに襲われている人間がいたら助けるつもりだった。菜緒が、人間愛に溢れた素晴らしい女の子かと云うとそうでもなく、菜緒は自分が有名になりたい、ただそれだけだった。

・・有名になったら、きっと芳樹くんも見直してくれるもんね・・

菜緒は空を飛びながら、幼かった時のように二人で手をつないで仲良く歩く姿を想像していた、その時、うわーっという男性の悲鳴が聞こえた。菜緒は、はっと我に返り悲鳴の聞こえた方向へ急いで飛んでゆく。

・・いた。あそこだ・・

上空から見ると、全裸の女性が道路に横たわり、やはり全裸の男性がヴァギナの触手に捕らわれてもがいていた。男性は手に特殊警棒を持っている。おそらく、先に襲われた女性を助けに駆け付けた警官なのだろう。あの特殊警棒でヴァギナの急所クリトリスを突き刺せれば、なんとか逃げる事が出来るだろうが、ヴァギナもそれは十分承知していて男性を自分に近付かせずに、まず腕を切断するしようと何本もある触手を振り上げていた。

・・急がないと、間に合わない・・

菜緒が、そう思うと何か下腹部子宮の辺りで力が湧いてくる感覚があり、空を飛ぶスピードが更に上がった。

・・私、凄いんだけど・・

自分でも驚くほど高速で飛び、まるで光のように輝く菜緒の姿は、遠くから見たら流れ星のように見えたに違いなかった。そして、菜緒はあっという間に現場の上空に到着する。

「たあぁぁーーーっ」

雄たけびと共に菜緒は空中から手刀を繰り出し、男性を捕らえているヴァギナの触手を切断する。男性は地面に転がり、切断されたヴァギナの触手からは黄色い体液が飛び散った。そして、菜緒は続けて前方転回を繰り返しヴァギナとの間合いを詰めると、強烈なかかと落としをヴァギナに浴びせた。

「ぶひゅーーーっ」

ヴァギナの体が、ぐしゃっと潰れ動きが鈍くなる。菜緒は腰を落とし手を握り拳に力を込めると、菜緒の拳が赤く輝きだす。まるで菜緒の拳が燃えているようだった。それを見たヴァギナが、まるで恐怖に怯えているように、ぶるぶると震えだした。

「レェェッド・センセイション」

菜緒は赤い拳をヴァギナの急所クリトリスに叩き込んだ。その菜緒の必殺技は、あまりの凄まじさに拳はヴァギナの体を突き抜け背後

から赤く輝く菜緒の拳が見えていた。菜緒は突然頭に浮かんだ技の威力に自分でも驚いていた。菜緒の拳で急所のクリトリスを貫かれ、ビクンビクンと痙攣していたヴァギナの体が燃え上がり、道路に崩れ落ちる。菜緒はめらめらと燃えて灰になっていくヴァギナを油断なく見つめ、そして、ヴァギナがすっかり燃え尽きると、ようやく肩の力を抜いた。

「ふぅっ」

菜緒は息を吐くと振り返り、地面に倒れている男性に近付くと手を差し出した。そして、片手で軽々と男性を立ち上がらせる。男性は前を隠すのを忘れていた為、菜緒の目に大きく勃起した男性のモノが映った。

・・えっ、この男の人、私を見て興奮してる？　駄目だよ、私まだ小学生だから・・

そう思いながら菜緒は、怖い思いしたんだから私がおしっこするとこくらいサービスで見せてあげようかなと思い、下腹部に力を入れた時だった。

「あ、ありがとうございます。是非、お名前を教えてください」

男性が固く菜緒の手を握りしめ、涙を浮かべながら言う。

・・き、きたーっ・・

菜緒は興奮でどきどきしながら、男性から手を放すと軽く足を開き、左手を腰に当て、右手を頭上に伸ばし人差し指で天を指さす。そこには丸い満月があった。

「私は夜空に舞う天使、スク水戦士ウテルス」

・・決まった・・

ポーズも散々考えてきた菜緒は感無量だったが、そこで気が抜けたのか先程途中で止めた小便が漏れ出していた。スクール水着の股間からチョロチョロと小便が漏れ、それに気付いた男性が慌てて菜緒の前に跪くと両手で菜緒の小便を受け止める。

「天使様。私に天使様の聖水をお恵みくださったのですね。ありがとうございます」

そうゆうと男性は菜緒の小便を、ごくごくと飲み始めた。菜緒は男の人ってみんな変態なんだと確信したが、そこへもう一人道路に横たわっていた女性も慌てて駆け寄ってくる。しかし、菜緒の小便は男性に全て飲み干されていた。

「お願いします、天使様。私にもお恵みをください」

二十歳くらいの綺麗な顔をした女性が必死に菜緒にお願いする。とはいえ、もうおしっこは出ない。菜緒は困ったという顔をしながら女性に言う。

「もう、おしっこは出ませんので”うんち”でいいですか」

「はい、お願いします。天使様の”うんち”恐れ多いです」

涙を浮かべていう女性に少し待っててと告げると菜緒はスクール水着を脱ぎだした。頭に被った下着とサイハイソックスだけの姿にな

った菜緒を二人の人間は、まるで神々しい触れてはならない神を見るように菜緒の姿を眩しそうに見ていた。

「じゃあ、手を出して」

菜緒が言うと、女性ばかりか男性も手を出してきた。まあ、いいか。二人分くらい出そうだしと菜緒は後ろを向くと尻を突き出し二人の手の上にぶりぶりと大便を出した。そして、大便を出し終わった菜緒の肛門を二人は争うように舐め始めた。

「ひっ」

思わず菜緒は腰を引いたが、菜緒の肛門は洗ったようにきれいになっていた。

「ありがとうございます、天使様。いただかせていただきます」

二人は手のひらの菜緒の大便を美味しそうに食べ、顔に塗り付け、性器にも塗り付けていた。男性は大便塗れになった性器をしごき始め、女性も性器を大便塗れにし、さらに膣の中に大便を押し込み自慰を始めた。

・・大人の人ってわからない・・

小学生の菜緒は大人になれば解るのかなと思っていたが、それは大人になっても普通の人には理解できない事だった。

自慰を始めてしまった二人の前でスクール水着を着用した菜緒は、それではと二人に告げると、たぁーーっと空を飛び見えなくなっていった。残された男女はいつまでも手を合わせ菜緒の飛んで行った方向に頭を下げていた。

空を飛びながら菜緒は、これで少し有名になれるかなと内心嬉しくなっていた。ネットの情報は早いから朝には話題になっているかもしれない。
有名になったら、芳樹くんにだけ自分の正体を明かすんだ。菜緒は想像すると嬉しくて気を失いそうになっていた。そうだ、帰ったらオナニーしよう。菜緒は気分よく空を飛んでいた。

そして朝、菜緒の予想は当たっていたが、それは菜緒の予想以上の大きな話題になっていた。

ー　現れた人類の救世主、スク水戦士ウテルス　ー

ー　スク水戦士ウテルス、ヴァギナを瞬殺　ー

ー　人類の希望の星、スク水戦士ウテルス　ー

ー　スク水戦士ウテルス、大解説　ー

朝のニュースはスク水戦士ウテルスに関する事で埋め尽くされていた。

4、人類の希望（後書き）

菜緒の考えていたものより、世の中に熱烈に歓迎されていくスク水戦士ウテルス。
今後の彼女の活躍に全ての人類が期待していた。

5、処刑前の前戯（前書き）

今回、スク水戦士ウテルスの活躍はありません。菜緒の幸せ一杯の回になります。普通の幸せとは違うかも知れませんが、菜緒にとっては嬉しくてたまらない状況です。ささやかな菜緒の幸せを一緒に喜んでください。

5、処刑前の前戯

5、処刑前の前戯

スク水戦士ウテルスに関するニュースは朝の時間を独占していた。それまで、一体倒すだけで多大な被害と犠牲に見舞われていたヴァギナを、あっさりと倒す人間が現れたのだ。人々が興奮しない理由はなかった。空を飛び、ヴァギナを一撃で倒すパワーなど人間離れした能力に包まれた〝スク水戦士ウテルス〟は超人類と呼ばれ、その謎を推察するサイトが数多く立ち上がった。その中でも、助けられた男女のコメントを掲載したサイトのアクセス数はうなぎ登りだった。

「ウテルス様の、聖水を飲み聖便を食べ体に塗り付けると、あっという間に怪我が治り体力が回復したんです。ウテルス様は本物の天使に違いない。ウテルス様に御命令されれば私はそれがどんな命令でも躊躇なく従うでしょう」

「私はウテルス様の聖水は飲めなかったのですが、聖便を頂き食べてから体に塗り付けました。私も、あっという間に回復して歩けるようになったので、家に帰る途中に実はもう一体のヴァギナに狙われたんです。でも、そのヴァギナは私を見て震えながら逃げていったんです。おそらく、私がウテルス様の聖便を体に塗り付けていたからだと思います。だから、私はウテルス様の聖便をこうして小瓶に詰めて持ち歩くようにしました。私はウテルス様に絶対の忠誠を誓います」

この後、この女性のコメントを見た大勢の人間から、自分たちにも聖便を分けてくれとのコメントが殺到し、回線がパンクしたサイトは閲覧不能になっていた。

小学校への通学路を歩きながら菜緒はスキップして歩きたいほど、うきうきした気持ちのなっていた。児童の保護の為、周囲を警戒する警官がいなかったら菜緒は踊り出していたかもしれなかった。現在、中学校までの児童は集団登校は勿論だがマイクロバスの送迎と徒歩通学があり、徒歩の児童には警官が警護の為、付き添っていた。

「なあ、姫川。ちょっと姫川に試したい事があるんだけど、いいかな？」

教室に入ると芳樹が菜緒を素早く見つけ走ってきて言う。芳樹は普通に登校している菜緒に疑問を持っていた。膣を割れたガラスで血だらけにされ、性器を燃やされ膣に焼き印まで捺されたのに、普通に登校してくるなんて考えられなかった。

「なに？　まだ、時間あるからいいけど」

菜緒が答えると芳樹は、ちょっと痛い事なんだけどと、ひそひそ声で顔を近づけて言うと菜緒の手を取り、いつもの理科室まで連れてこられた。

「痛い事って？　もう私、あまり痛いのは嫌だよ」

「もし姫川がオーケーしてくれたら、チューしてあげるよ」

えっ。菜緒は顔が赤くなって、どきどきしてきた。チュー。芳樹く

んと。しかし、菜緒はここで冷静になる。もし、後にしたら忘れてチューしてくれないかも知れない。

「わかった。先にチューしてくれたら何してもいいよ。私、痛くても我慢する」

期待を込めた目で菜緒が言うと芳樹は、分かったよと近付いてくる。そして、菜緒をぎゅっと抱きしめると菜緒の唇に唇を重ねてきた。菜緒は気を失いそうなほど興奮していた。

・・もう私、死んでもいい・・

幸せに包まれて夢見る菜緒だったが、この後何分後には本当に死ぬほどの苦痛を味わう事になる。

「よし、それじゃあ。手を上げて足を開いて立ってくれ、姫川」

「うん」

菜緒は火照った顔で、言われたとおりに万歳して足を大きく開いて立つ。その、菜緒の開いている足の中心に芳樹は蹴りを入れる。

ズガッ

「痛いぃぃっ」

菜緒は悲鳴を上げ、両手で股間を押さえる。

「やっぱり、痛いのか」

「当たり前でしょ、私、女の子なんだよ。オマンコ蹴られたら痛いに決まってるじゃない」

菜緒が涙ぐみながら口を尖らせて言うが、芳樹はまったく気にせず早く同じ格好をしろと急かせる。そして、また大きく足を開いた菜緒の股間に蹴りを叩き込んだ。しかも今度の蹴りは足の甲で打った一発目と違い、爪先で菜緒の股間を思い切り蹴り上げていた。

「うぎゃぁぁぁーーーっ」

性器に爪先がめり込み飛び上がり絶叫した菜緒は両手で性器を押え、ごろごろと床の上を転がり回るが、芳樹はイライラしたように菜緒のツインテールを掴むと、早く起き上がって服を全部脱げと命令する。菜緒は、素直にうんと返事をすると洋服とスカートを脱いで下着一枚の姿になる。まだ膨らんでいない為、ブラを着けていないので両手で胸を隠していた菜緒だったが、早くパンティも脱げと言われ下着を脱ぐと芳樹に下着を奪われクロッチ部の匂いを嗅がれてしまう。

「返してよぅ。そんなとこの匂い嗅がないでぇ」

「姫川のパンティ、汚れてるし、ツンとした匂いするな。おしっこの匂いか」

芳樹は菜緒の下着の匂いを嗅ぎ、臭そうな顔をするが、その汚れた染みを舐めていた。菜緒は恥ずかしさで顔が真っ赤になる。

「いつもはもっとキレイなんだよ。今日は朝おしっこしたから」

芳樹は菜緒の下着のクロッチ部を口に入れてしまった。それを見て

菜緒は少し嬉しくなっていた。

・・私のおしっこ、汚くて飲めないなんて言ってたのにパンティの汚れた所、口に入れてくれてる・・

菜緒は嬉しくなり、裸も見て下さいとばかりに、腕を上げ足を開いてツルペタの胸とツルツルの恥丘を晒す。そして、芳樹は全裸になった菜緒を、いつの間に用意したのか天井の梁から吊るしたロープで足を大きく開いたまま固定し開脚逆さ吊りにした。菜緒のツインテールがだらりと下がり、菜緒は不安そうな顔をしている。

「本番はこれからだ。死ぬほど痛い事をするから姫川が暴れないように手を縛っておくよ。それから口も塞いでおくからね」

芳樹の狙いは菜緒にはすぐ分かった。菜緒でなくても、こんな格好で吊るされれば無防備に丸見えになっている性器に何かするのだと容易に想像がつく。

「私のオマンコに何するの？　あんまり酷い事されたら私、女の子じゃなくなっちゃうよお。オマンコじゃなきゃダメなの？」

震えながら言う菜緒を無視して芳樹は、カチャカチャと銀色に光る器具を並べている。よく見ると、理科の授業でカエルの解剖に使うメスやクーパーだ。それに鉗子も見える。

「嫌だぁぁぁ。私のオマンコに何するの?。やめてぇぇぇ怖いぃぃぃ」

芳樹は無言で菜緒の頭を押さえるとキスしてきた。

・・えっ、えーーーっ・・

大きく開脚され性器を丸見えにされながら逆さに吊られた状態なのに菜緒は幸せに包まれていた。しかも、菜緒の口の中に芳樹の舌が入ってきて、菜緒の口の中を舐めてくれる。菜緒も恐る恐る芳樹の舌に自分の舌を絡ませる。

・・このまま時間が止まって欲しい・・

菜緒はあまりの幸せに涙ぐんでいた。そして、まるで逆上せたように顔を火照らせる菜緒から口を離した芳樹は、菜緒の唾液が光る口を押えるとガムテープを何重にも貼りつけていく。

「最後かも知れないからサービスしておいたよ、姫川。　もし、して欲しいなら姫川のマンコも舐めようか」

夢のようだった。口を塞がれた菜緒は激しく何度も頷くが、そういえば朝トイレに行った事を思い出し一瞬躊躇するが、性器を舐めてもらいたいという誘惑には勝てなかった。芳樹は逆さに吊るされた菜緒の股間に顔を埋めると菜緒の性器を舐め始めた。クリトリスは勿論、小陰唇のビラビラの隙間や膣口には舌を入れて膣内も入念に舐めてくれた。菜緒は興奮で息が荒くなってきた。

・・オナニーよりずっと気持ち良いよお・・

菜緒は、大人の人は毎日こんな気持ちいい事しているのかと羨ましくなった。そして、会陰部を舌先で舐められた時、体を電流が駆け巡った。

「もぅもぅぉぉぉーーーっ」

塞がれた口で思わず声が漏れてしまい、それと同時に小便も漏らしてしまったが、チョロチョロと小便が漏れる菜緒の尿道口に舌先が当てられ尿道口に舌先を入れるように舐められた。そして、ついさっき口に貼られたばかりのガムテープが剥がされる。

・・何っ？・・

菜緒が瞑っていた目を開けると、目の前に芳樹の勃起した性器があった。菜緒はすぐに理解し大きく口を開けると芳樹の性器が菜緒の口の中に入ってきた。芳樹は菜緒のツインテールを掴むと、菜緒の喉の奥まで自分の性器を突き入れ激しく腰を振る。

「うご、うご、うご」

菜緒は息が出来ず、そのうえ喉奥を突かれて吐きそうになり顔面は涙と涎で汚れていたが、心は今まで生きてきて一番の幸せに包まれていた。口を犯されながら性器を舐められ菜緒は、この時が永遠に続いて欲しいと願っていたが、激しく動いていた芳樹の腰の動きが止まると同時に菜緒の喉奥に何か熱いものが放出された。小学生でありながらネットで知識を得ていた菜緒は、それが男性の精液であると理解していた。

・・外に出さないで、私の口の中に出してくれた・・

菜緒は、今度はオマンコの中や、お尻の穴にも出してほしいと思っていた。そして、大人になったら調教されて、おしっこの穴にもチンチン入れられて中に出されたいと真剣に考えていた。菜緒は今、自分は幸せの真っただ中にいると感じていた。

しかし、菜緒が幸せでいられたのはここまでで、この後菜緒は地獄の苦しみを味わい泣き叫びながらズタズタにされていくのである。

5、処刑前の前戯（後書き）

幸せ一杯の菜緒。しかし、地獄はすぐそこまで来ています。
次回、菜緒が今までで最大の苦痛を味わいます。

6、凄惨…性器処刑される菜緒（前書き）

今回もスク水戦士ウテルスの活躍はありません。申し訳ないです。
今回、菜緒が酷い目にあっていきます。
残酷な描写が多々ありますので、注意してください。

6、凄惨…性器処刑される菜緒

6、凄惨…性器処刑される菜緒

まだ夢の中にいる菜緒の口に再びガムテープが貼られていき、これ以上ない程厳重に口が塞がれた。

・・こんなに厳重に口塞がれて、私、何されるの?もう、許しても助けても言えないよぉ・・

菜緒は夢から覚め震えだした。菜緒の予想通り、これから菜緒は地獄の苦痛を味わい、恐怖で絶望に叩き落とされていくのだ。そして、菜緒をその地獄に誘う芳樹が、クーパーと鉗子を手にし、残酷に笑みを浮かべ菜緒の前に立った。

「さあ、姫川のマンコ処刑の開始だ」

・・マンコ処刑って何?、手に持ってるの何?、私のマンコどうするの?、私、我慢するけど、あんまり痛いのは嫌だよぉ・・

菜緒は芳樹の持つクーパーから、嫌な予感しかしなかったが、まさかそんな事しないよねと考えないようにしていた。しかし、芳樹は菜緒の想像通り菜緒の左の小陰唇を鉗子で挟みビローンと引き伸ばすと根元をクーパーで挟み込む。菜緒は次に自分の性器に起こるであろう事態を想像し恐怖で体が震えて止まらなかった。

・・嘘だよね。本当にそんな事しないよね。だって、本当にそんな

事されたら私のオマンコ死んじゃうよ。嫌だよ。痛いのは我慢するけど、私のオマンコ殺さないで・・

しかし、菜緒の願いも虚しく芳樹は、菜緒の考えたくなかった想像通りクーパーでジョキジョキと小陰唇を切り取り始めた。

・・ひぎぃぃぃーーーっ、嘘だよぉぉっ、本当に切らないでぇーーっ、叩かれたり焼かれたりするのは我慢するけど、切られちゃったら、もう元には戻らないよ、私のオマンコどうするのぉ・・

菜緒は激しい傷みに塞がれた口で絶叫しながら、自分の小陰唇を切り取っていくクーパーの冷たい感触に恐怖していた。しかし、芳樹はまるで紙でも切るように菜緒の小陰唇を切り続け、容赦なく本当に切除してしまう。そして、切除した小陰唇を金属のトレイの上に乗せ、今度は右の小陰唇の切除に取り掛かった。

・・さっきまではあんなに優しく私のオマンコ舐めてくれたのに、どうしてこんな酷い事するの?、もう私のオマンコ元に戻らないよぉ・・

菜緒は自分の性器が破壊されていく衝撃に気が狂いそうだった。菜緒は性器を破壊される激痛に絶叫し続けるが、右の小陰唇もあっさり切り取られ血が噴き出す。

・・もお、やめてぇぇ、私、死んじゃうよぉぉ。マンコ処刑って何するの?私のオマンコ、このあと、どうなるの?・・

ぽろぽろと大粒の涙を零し菜緒は塞がれた口で必死に訴えるが、今度は芳樹は菜緒のクリトリスを鉗子で挟むと引き伸ばし、メスでクリトリスの根元を少し切る。

・・ひぎぃぃぃーーーっ、やめてぇそこは許してぇぇ酷いよぉぉオナニー出来なくなっちゃうよぉぉ・・

鉗子で強く挟まれただけで激痛が走るクリトリスを引き伸ばされ、メスで切れ目を入れられ菜緒は泣き叫ぶ。しかし、芳樹はそのままクリトリスを引き伸ばしていく。クリトリスはぶちぶちと少しづつ千切れていき、最後にぶちっと菜緒の体から千切れ血が噴き出した。女の子の体の敏感な部分を引き千切られ菜緒は絶叫し気を失ってしまったが、芳樹は菜緒の腹にパンチを入れ目を醒まさせる。

「まだ、マンコ処刑は終わりじゃないぞ、姫川。姫川のマンコは、徹底的に全部壊すからな」

・・全部って何?、まだ私のオマンコ何かされるの?・・

菜緒は、これだけでも、もう普通の人の性器ではなくなってしまったのに、これ以上何をするのか想像出来なかった。股間から血を流し泣き続ける菜緒に芳樹は、手に持ったメスを見せつける。そして、菜緒の尿道にずぶずぶと突き入れていった。菜緒の尿道が切り裂かれ血が溢れ出す。塞がれた口で菜緒が絶叫し、涙を流し嫌々と首を振る。

・・痛いよぉーっ。もう、許して下さい。マンコ処刑は嫌ぁ。助けてぇぇーーっ・・

しかし、芳樹はメスの先端が菜緒の膀胱に達したのを手応えで感じ、そこからメスを膣方向に向け力を入れ菜緒の性器を切り裂いていく。

・・ひぎぃぃぃぃーーーーっ、そんなとこ切られたら私、死んじゃ

うよぉぉ・・

凄まじい激痛に菜緒は過呼吸になり気が遠くなってきたが、芳樹は菜緒のマンコ処刑をまだ終わらせる気はなかった。菜緒の性器を完全に破壊する。それが目的の一つだから…。

菜緒の尿道から膣まで切り裂いた芳樹は、今度はそのまま膣から肛門へと切り裂いていき、とうとう、菜緒の尿道から肛門まで一直線に切り裂いてしまった。そして、その切り裂いた裂け目に手を入れ、グイッと裂け目を拡げる。菜緒の股間の切り裂かれた裂け目が、ガバァッと拡がり小便と大便と血が混じり菜緒の股間から溢れだした。

・・ひぎぃぃぃぃーーーーっもう死んじゃうぅぅぅーーーーっ・・

逆さに吊られた菜緒の体は、切り裂かれた性器から溢れ出る血で真っ赤に染まり、涙を流す菜緒の目は恐怖と苦痛で大きく見開かれ、助けを求めていた。しかし、菜緒の性器に対する処刑は当然まだ終了していない。芳樹は切り裂いた菜緒の性器に手を突っ込み左手で膣壁を押えると右手に持ったメスで膣壁の根元をぐるりと切っていく。そして、その膣壁の切り裂いた裂け目に指を入れ、膣壁をバリバリと剥がしていった。

・・ひぎぃぃぃぃーーーーっ、もう痛いのは嫌ぁぁぁ、殺してくださいぃぃーーーーっ・・

まだ小学生の菜緒が性器の膣壁を剥がされるという地獄の苦しみを味わわされている。激痛で苦しむ菜緒の姿を横目で眺めながら芳樹は、剥がした膣壁を金属のトレイに乗せた。そして、小陰唇、クリトリスに今剥がした膣壁、菜緒の性器から切除した菜緒の大切な性器の欠片にアルコールをかけ火を点ける。そして、燃えていく自分

の性器を菜緒の涙で霞む目の前に見せ、灰になっていく様を確認させると、最後に残った菜緒の女の子の部分、性器の奥の子宮の処刑を開始する。切り裂かれクリトリスも小陰唇も膣もなくなった性器の奥に見える子宮頸部にメスを入れ縦に容赦なく深く切開する。

・・痛いぃぃやめてよぉぉ、本当にそこはやめてぇぇぇ、私、女の子じゃなくなっちゃう・・

涙と鼻水で汚れた顔を、ぶんぶん左右に振り意思表示するが、芳樹は更に菜緒の子宮にメスを入れ今度は横に切開した。切開された子宮から血が溢れ出す。菜緒は女の子の根源の子宮を切り裂かれたショックと激痛で失神していた。しかし、菜緒の子宮に対する処刑はまだ終わらなかった。芳樹は鉗子で菜緒の子宮口にカテーテルを容易に抜けないように1メートル以上も挿入していき、カテーテルの反対側には漏斗を取り付け、そこから菜緒の子宮内に容赦なく塩酸を流し込んだ。気を失っている菜緒の体が、ビクンビクンと大きく痙攣するが、芳樹は構わず一本全部の塩酸を菜緒の子宮に注入してしまった。菜緒の子宮から煙と共に子宮が溶ける激しい異臭が漂ってくる。そして、芳樹はトドメをさす前に菜緒を何度も殴打し目を醒まさせた。

「さあ、トドメだ。姫川の子宮の最後だぞ」

芳樹はバーベキューで使う鋭い鉄串を手に取ると菜緒の子宮に容赦なく突き刺した。

ぐさっぐさっぐさっぐさっぐさっ

・・あがぁぁぁ、もう、私の子宮も壊されちゃうんだ。性器も子宮

も壊されて私も死んじゃう・・

自分の体の奥を襲う激しい痛みに菜緒は性器もろとも自分も殺されると確信した。何度も何度も繰り返し菜緒の子宮を突き刺し、最後に根本までズブズブと突き刺して子宮を串刺しにする。菜緒の子宮はメスで切り刻まれ、塩酸で焼かれ、鉄串でズタズタにされた後、串刺しにされた。

・・終わったの?、もうマンコ処刑終わったんだよね・・

菜緒は、ようやくこの苦しみから解放されると安堵した。まだ生きていられたと嬉しかったが、メスを持った芳樹が近づいてくる。

・・まだ、何かするの?、もう私のオマンコ、処刑されちゃったよ。これ以上、私を苛めないで・・

菜緒は、これ以上やめて、許してと力無く首を振る。ツインテールも小さく振れただけだった。
芳樹は、菜緒の切り裂かれた性器にメスを持ったまま腕を肘まで突っ込み、菜緒の子宮を切り取っていく。

・・ひぎぃぃぃ痛いぃぃぃーーーっ、本当に死んじゃうよぉぉぉぉーーーっ・・

しかし、芳樹は構わず菜緒の子宮を掴み引き擦り出す。そして、菜緒の切り裂かれた性器から、ずるりと子宮が顔を出した。芳樹は菜緒の子宮をそのまま取り出し、菜緒に見せつける。

「これが姫川の子宮か。ドブスの子宮は、子宮まで汚ないな」

芳樹は菜緒の子宮を床に叩きつけると、足で踏みつけ擂り潰していく。菜緒の子宮は、たちまちゴミの様な肉片になっていく。

「よーし、姫川の性器処刑終了だ。どうだ姫川、生きてるか?、これで姫川は女子じゃなくなったから、容姿なんか気にしないで済むな」

・・なんで?　どうして?　本当にマンコ処刑なんてされちゃったら、私　どうして生きていけば良いの?・・・

菜緒は、ただ泣き続ける以外なかった。

6、凄惨…性器処刑される菜緒（後書き）

徹底的に性器を処刑されてしまった姫川菜緒。
この後、菜緒の運命はどうなるのでしょうか？

7、凄惨…破壊される菜緒（前書き）

今回もウテルスの出番はありません。菜緒が前回以上に悲惨な目にあいます。
酷い描写が多いですので、苦手な方は注意してくださいね。

7、凄惨…破壊される菜緒

7、凄惨…破壊される菜緒

菜緒は、天井の梁からのロープで腕を縛られ口も塞がれ〝Y〟の字の形に吊るされていた。小陰唇やクリトリスの外性器だけではなく、膣や子宮の内性器も容赦なく徹底的に完全に処刑されてしまったショックと激痛で、菜緒は失神していた。小学生の菜緒がこれから将来必要になる大切な性器を、まだオナニーにしか使用していない性器を、もう二度と使用出来ないよう徹底的に破壊され大量の血を流している。その菜緒の処刑された性器を満足気に見つめていた芳樹だったが、ふと気付いた様に手を叩く。

「大陰唇がそのままなのは良くないな」

芳樹は理科室を出ていくと、戻ってきた芳樹の手には彫刻刀が握られていた。

「図工室にちょうどいいのがあったよ。これでドブスの姫川に彫刻して綺麗にしてあげるよ」

芳樹は、菜緒の大陰唇に彫刻刀を当てると木材を削る様に大陰唇を削っていく。菜緒は意識が無いのか、ぐったりと吊るされているままだった。そして、芳樹が離れた後には菜緒の左右の大陰唇に〝ナオノマンコ〟と刻まれ、その文字の周りには曲線や星の形が刻まれていた。更に止まらなくなった芳樹は、菜緒のツルペタな胸に〝ヘンタイナオ〟と文字を刻み、様々な形の図形も刻みこんだ。そして、

ついでに菜緒の二つの桜色の乳首を彫刻刀で削り取ってしまう。そこまで菜緒の体を飾り付けても、まだ足りないと感じた芳樹は、なんと菜緒の顔にも彫刻を始めた。頬に文字を彫ろうとしていた芳樹は、上手く彫れずにイライラするとモップで菜緒の顔を殴り付けた。そして、自分のイライラを発散するように何度も何度も菜緒の顔をモップで殴り付ける。

ぐしゃぐしゃぐしゃぐしゃ

そして、彫刻刀を置いてクーパーを手にした芳樹は菜緒の顔を壊していく。

じょきじょきじょき

まず、口を塞いでいるガムテープを剥がし菜緒の上下の唇を切り取り、鼻も切り落としてしまう。瞼も引っ張って切除し、耳も切り落とした。そして、唇を切り取られ剥き出しになった歯をペンチを使って抜いていく。

菜緒の顔は、もう人間の顔とは思えない状態になっていた。菜緒は意識がなくなっていたが条件反射で呻き声を上げながら、血に塗れてぐったりと吊られている。

「うぅうぅ、うるさいよ」

芳樹は呻き声を上げる菜緒の血だらけの口をテープでぐるぐると巻き、また塞いでしまった。

「ずいぶん酷い姿になったな、姫川。ドブスの姫川にはお似合いか。姫川の性器も完全に破壊したし、顔も二度と見られない顔にしたから、もう女の子じゃなくなったな」

しかし、芳樹はここまでされて生きている菜緒に恐怖を感じてきた。やはり、こいつは人間じゃなく、ヴァギナが擬態しているんじゃないか？そう思うと、菜緒の形をしたヴァギナが隙を窺ってるのかと考えてしまう。殺しとかないと怖いな。芳樹は、性器を処刑され血塗れで逆さ吊りにされている菜緒の息の根を止める決心をした。

理科室の隅から、誰が置いたのか埃をかぶった木刀を持ってきた芳樹は、菜緒の切り裂かれた肛門に木刀の切っ先を入れ、ズブズブと菜緒の体の中に押し込んでいく。そして、ある程度押し込んだ所で力を入れ一気に菜緒の体に突き刺していった。

「うおぉぉぉーーーっ」

芳樹は全体重をかけ菜緒の体に木刀を突き刺していく。木刀はぶちぶちと菜緒の内臓を突き抜け、遂に菜緒の口のテープを突き破り木刀の切っ先が血塗れで顔を出した。菜緒は肛門から口まで木刀で完全に串刺しにされた。

「おげぇぇぇっ」

自分の体を貫く激痛に意識が戻った菜緒は口からも血を吐き出し、その口から飛び出ている血塗れの木刀に驚愕する。

・・ひぎぃぃぃーーーっ！私、本当に殺されちゃうんだ。どうして？、私がブスだから？　ははっそうだよね、可愛い瑠美子ちゃんなら、こんな事される理由ないもんね・・

朦朧とする意識の中で菜緒は悲しかった。自分がもっと可愛かったら幸せな人生を送れたのかな、ブスだから、こんな残酷に何の価値

もないように殺されてしまうんだ。串刺しにされた菜緒の体は菜緒の意思とは関係なくビクンビクンと痙攣し、菜緒が動かそうと思っても指一つ動かなかったが、菜緒の意識が戻った事に気付いた芳樹は、まだ生きていると恐怖した。そして、慌てて図工室に行き工具箱を漁ると電動ドリルを発見し、急いで理科室に戻ってくる。

「トドメのトドメだ」

芳樹は電動ドリルの電源コードをコンセントに差し込み、スイッチを入れ菜緒の前に立つ。何やら不穏な気配を感じた菜緒は、これ以上まだ私の体は痛めつけられるのかと恐怖した。もう自分の体が取り返しのつかない状態になっているのは、下腹部の凄まじい激痛と自分の体を貫通し口から突き出ている木刀で理解していた。ここまでされたら、もう絶対助からない。それでも、これ以上まだ苦痛を与えられるんだ。私、完全に絶命するまで、ずっと痛めつけられるんだ。ううん、たぶん私、死んでからも体がぐちゃぐちゃになるまで痛めつけられるんだろうな。私、そんなに嫌われているんだ。芳樹くんは本当は私のことを殺したい程好きなんだ、そう思いたかった。菜緒の目から苦痛とは別の涙が溢れだした。そんな菜緒の一途な気持ちなど思いもせず芳樹は、菜緒のツルツルの恥丘にドリルの先端を押し当てていく。

ギュウゥゥーーン

菜緒の恥丘から血と肉片が飛び散り、ドリルの刃を抜いた丸い穴から血が流れだした。さらに取りつかれたように芳樹は、ドリルで菜緒の恥丘に穴をあけていく。そして、菜緒の恥丘に十か所以上穴をあけた芳樹は、さすがにここに穴をあければ死ぬだろうと、先程彫刻した菜緒のツルペタな胸に穴をあけ始めた。

・・ひぎぃぃぃーーーっ、嫌だよぉ、私まだ死にたくない。もお許してくださいぃぃっ・・

もう自分の体は手遅れだと分かってはいても菜緒は死にたくなかった。死ぬのは怖かった。そんな願いも虚しく菜緒の両方の胸に蜂の巣のように穴をあけられてしまう。胸の穴から血を流し激しく痙攣し、口や鼻からも、どぼどぼと血を流す菜緒を眺めなが芳樹は、これで呼吸も出来ないだろうから死ぬだろうと思っていたが、完全に殺すにはここだと、口から木刀が突き出る菜緒の頭部に狙いをつける。そして、まず菜緒の右眼をドリルで抉り潰し、続いて左眼も同じように潰していく。ハァハァと息切れしながら芳樹は菜緒のツインテールを掴み、脳天にドリルを当てる。

・・ゆ、許してくださいぃぃ。そんな事されたら私本当に死んじゃうよぉ。そんなに嫌いなら、もお近付かないから。嫌だよぉ、私死にたくないよぉ。私、何でもするから許してくださいぃぃ・・

しかし、芳樹はかまわず菜緒の頭にドリルを押し込んでいく。

ギュオォォォーーーン

菜緒の頭蓋骨に穴を穿つ高い音が響き髪の毛が飛び散り、その後に血と脳漿が飛び散った。芳樹はそのままドリルで菜緒の頭の中をぐちゃぐちゃにしていく。脳を破壊された菜緒の体は激しい痙攣を起こしていたが、芳樹は念の為、菜緒の後頭部にもう一か所穴を穿ち、その穴から用意していた塩酸を菜緒の頭の中に流し込んでいく。ぐちゃぐちゃにされた菜緒の脳が溶ける凄まじい刺激臭が漂い、危うく芳樹もそれを吸って倒れるところだった。

「さすがに死んだよな。姫川……」

でももし姫川がヴァギナだったら……。ヴァギナはほぼ不死身だ。一度芽生えてしまった恐怖は拭い去ることは出来なかった。芳樹は吊るされている菜緒の体を下に降ろし床に横たえ腕の拘束も外し木刀も抜いてみた。菜緒は足で突いてもピクリとも動かない。

「不死身の吸血鬼は心臓に杭を打たれれば復活できずに死ぬ」

怪奇小説の一節が頭に浮かんだ芳樹は、お正月用の餅つきイベントで使用する大きな杵があったのを思い出した。杭もどこかにあった筈である。芳樹は急いで旧校舎内を探し回り、ようやく杵と杭を見つけて戻ってきた。恐る恐る菜緒の様子を確認するが、菜緒は床に横たわったまま動いていなかった。

「よしっ」

芳樹は仰向けにした菜緒の体の心臓に杭を当て、椅子やモップを使い杭を動かないように固定すると杵を振り上げ思い切り振り下ろした。

ズギャッズギャッズギャッ

何度も杵を振り下ろす。嫌な音を立てて杭が菜緒の体にめり込む。杵で杭を打った瞬間、反動で菜緒の両腕と両足がぶわっと上に上がり芳樹はドキッとしたが、杭は菜緒の心臓を貫き背中にまで突き抜けていた。

「終わった」

芳樹は疲れたように杵を引き摺りながら理科室を出ようとした時、

行かないでと菜緒に呼ばれた気がした。

「嘘だろ」

芳樹は旧校舎の外れ迄走って行き、杵と一緒にあった臼を転がしてくる。そして、図工室からは回転ノコギリを持ってきた。

「初めから、こうすれば良かった」

芳樹は横たわる菜緒の首に回転ノコギリを当て切断する。菜緒の頭がゴロリと転がった。さらに芳樹は菜緒の手足を切断し、胴体も上下二つに切断した。バラバラになった菜緒の体を見つめた芳樹は、ツインテールを掴むと、菜緒の頭を運んできた臼の中に転がした。菜緒の壊れた顔面が上を向いている。それに向けて芳樹は思い切り杵を振り下ろした。

ぐしゃ、ぐしゃ、ぐしゃ、ぐしゃ

何度も何度も餅をつくように菜緒の頭に杵を振り下ろす。菜緒の頭は潰れていき、頭蓋骨も粉々に砕け、ただの肉片と化していく。芳樹が気付いた時には菜緒の頭は臼の中で汚い肉の塊になっていた。芳樹は、それをゴミ袋に入れると、次に菜緒の下腹部を臼に入れ杵を振り下ろす。性器を処刑され、ドリルで穴だらけにされた菜緒の下腹部が、更に破壊されようとしている。

ごきゃ、ごきゃ、ごきゃ

骨が砕け肉が潰れる嫌な音と共に菜緒の下腹部も、ただの肉の塊になっていった。頭部に比べ、大小便が詰まっていた為、匂いがキツかった。

「次は、姫川の胸だ」

芳樹は彫刻され穴だらけになった菜緒の乳首のなくなったツルペタの胸を臼に入れ、それを叩き潰し肉の塊に変えた。

旧校舎の理科室の床には、菜緒の両腕と両足だけが残されていた。つい一時間ほど前までは明るく幸せな気分で嬉しそうに顔を輝かせていた菜緒が、無惨に破壊され尽くし手足だけ残して無くなっていた。

芳樹は最後の仕事だとばかりに、残りの菜緒の手足を臼に投げ込んで杵を振り下ろした。

ぐしゃぐしゃぐしゃぐしゃ

こうして、哀れな姫川菜緒は、この世から完全に消滅してしまった。ゴミ袋に入れられた汚い肉の塊を見ても、それが姫川菜緒だと分かる人は皆無であるのは間違いなかった。

芳樹は、ゴミ袋を持って校庭の隅にある焼却炉に行き蓋を開けると、ごうごうと燃えている火の中にゴミ袋を投げ込んだ。ゴミ袋はあっという間に火に包まれ、数分後には姫川菜緒は白い灰になっていた……。

7、凄惨…破壊される菜緒（後書き）

徹底的に破壊され尽くし、最後には灰になってしまった姫川菜緒。
人類の希望スク水戦士ウテルスは、また活躍する事があるのか。
物語は加速していく。

8、エターナルリバース（前書き）

前回の激しい徹底的な破壊行為で、この世から消滅してしまった姫川菜緒。
しかし姫川菜緒の運命は巡る。
スク水戦士ウテルスは再び姿を現すのか？

8、エターナルリバース

8、エターナルリバース

「なあ、姫川。ちょっと姫川に試したい事があるんだけど、いいかな？」

教室に入ると芳樹が菜緒を素早く見つけ走ってきて言う。菜緒は芳樹の顔をじっと見つめてから、凄い痛い事するんだよねと呟いた。芳樹は、えっと言葉に詰まり、菜緒が続けて言う。

「私のオマンコを徹底的に壊すつもりでしょ　私、芳樹くんにならオマンコ壊されるくらいいいんだけど、その後殺されちゃうのは、さすがに嫌だから」

「殺す……。僕が姫川を？」

「そうだよ　私、凄い殺され方するんだよ。最初にオマンコ処刑されちゃってから」

菜緒が言いかけた時、芳樹がここじゃ不味いから他へ行こうと菜緒の手を握り旧校舎の理科室へ行く。菜緒は握られた手が嬉しくて有頂天になっていたが、至福の時間は短く、すぐに理科室に着いてしまう。

「ここ。ここで私、残酷にオマンコ処刑されて殺されるの」

「姫川、ちょっと待って。順番に話してくれ」

「うん。まず芳樹くんが私のオマンコを処刑するんだよ。子宮までグチャグチャにされて体から引き摺り出されて凄く痛かった。それで、その後私のおしりの穴から木刀突き刺して私の体を串刺しにするの。私の口から木刀が出てるのを見た時には気が狂いそうだったよ。それから、もっとひどい事されたんだ。ドリルで私の体に穴をあけられるの。恥丘や胸なんかを蜂の巣にされちゃったよ。そしてね……」

菜緒は言葉を切って唇を湿らす。きっと、この後姫川は殺されたんだろうと芳樹は思った。

「私の両目がドリルで潰されたの。その後……。私の頭にドリルで穴あけられたんだ。私の頭の中ぐちゃぐちゃにされて、そこで私、死んじゃったんだと思う。だって私、別の所から自分の体見ている感じだったから……。その後も酷いんだよ、芳樹くん。もう私死んじゃってるのに胸に太い杭突き立てたり、頭なんかも潰されて無くなっちゃったんだから…。それで最後は燃やされた灰になっちゃった…」

菜緒は言いながら泣き始めていた。芳樹は、ふうんと聴いていたが、姫川相手ならやるかもしれないなと納得していた。それに、姫川を殺したって事は、姫川は僕の予想通りヴァギナなのか?それを確かめる為に姫川をマンコ処刑して反応を確かめようと考えたんだけど…。姫川の話を信じるとすると、これは一体どういう事なのか?性器を拷問しても翌日には平気で登校してくる姫川。殺されたと言いながら目の前にいる姫川。芳樹は混乱している自分に、冷静になれと頭を振る。

「とにかくさ、姫川。一回、僕にマンコ処刑させてくれよ。実際、僕はまだ何もしてないんだから」

「芳樹くんなら、いいけど…。マンコ処刑、死ぬほど痛いんだよ。だから……」

「だから、何？」

芳樹が訊き返すが菜緒は、顔を赤くして俯いていたが、ようやく顔を上げて言う。

「私と、ちゅ、ちゅーしてください」

芳樹は思わず一歩後退る。姫川とチュー？そんな事あり得ないだろ。しかし、菜緒は、芳樹くんは私のマンコ処刑する前にチューしてくれたんだよと嬉しそうに芳樹の顔を見つめる。馬鹿な、僕は何てことしてるんだ。芳樹は自分を殴りたくなったが、菜緒は目を瞑って口を丸くしてチューを待っている。仕方ない、息を止めて一瞬で終わらせる。芳樹は大きく息を吸い込んで、菜緒の唇に自分の唇を重ねた。そして、すぐに唇を離そうとしたが菜緒は芳樹の頭を押さえ舌を入れてきた。菜緒の舌が芳樹の口の中を舐めまわし唾液が入ってくる。芳樹は、力尽くで菜緒を離し、廊下に飛び出ると手洗い場で口を何度も漱いだ。死ぬかと思った。芳樹が理科室に戻ると菜緒はまだ顔を赤くしたまま夢見るように天井を見ていた。

「よし。それじゃ始めるか、姫川」

「うん」

菜緒は素直に頷き、自分から服を脱ぎ全裸になると腕を背中にまわ

した。

「私が痛くて暴れて邪魔しないように腕を厳重に縛るんだよね。あと、泣き叫ぶ声がうるさいから口も塞ぐんでしょ」

菜緒は進んで自分のマンコ処刑の準備に協力する。そして、菜緒は腕を縛られ口を塞がれ足を大きく開いたまま、天井の梁からロープで逆さに〝Y〟の字に吊るされた。これから起こる事を知っている菜緒は体を震わせていたが暴れる事も、泣き叫ぶ事もなく目を閉じて静かに自分の性器が処刑されるのを待っていた。そして、芳樹が鉗子とクーパーを持ち、菜緒の前に立つと菜緒の小陰唇を鉗子で挟み、その根元にクーパーを当てる。その、クーパーの冷たい感触に菜緒はビクッと体を震わせた。

・・怖い、怖い、怖い・・

菜緒が身構えた瞬間、小陰唇がクーパーで切り取られ始めた。

・・ひぎぃぃぃぃーーーっ、痛い、痛い、痛い、痛いぃぃぃーーっ・・

一回経験したからと云って痛みが軽くなる訳ではない。菜緒は小陰唇を切り取られる激痛に泣き叫び体を捻り暴れまわる。しかし、芳樹は、もう片方の小陰唇を切り取り、クリトリスはメスで抉りとった。菜緒は気が遠くなってきた。まだ、これから残酷に子宮を処刑されるのだ。

・・早く、終わってぇ・・

菜緒は少しでも早く自分の性器に対する処刑が終了するのを願って

いた。そして、菜緒の子宮がメスやニードルでズタズタにされ容赦なく膣から摘出される。小学生の菜緒が、再び生きたまま子宮を抜かれる激痛に必死に耐えていた。摘出された子宮は菜緒の目の前で、丸く可愛い子宮頸部がトンと切り落とされた後、切り裂かれバラバラにされ、すり鉢に入れられゴリゴリと擂り潰された。

・・もう、終わりだよね。私、女の子じゃなくなっちゃったから・・

しかし、涙で滲む菜緒の目に木刀を握っている芳樹の姿が映った。

・・えっ、嘘。嘘だよね。殺さないって約束したよね。どうして？・・

・

恐怖で震える菜緒の肛門に芳樹は木刀の先端を入れると、ずぶずぶと木刀を差し込んでいく。そして、そのまま一気に菜緒の体の中に突き刺した。

ごばぁ

菜緒の口から木刀の先端が顔を出し激しく血を吐く。肛門から口まで完全に串刺しにされた菜緒の体はビクンビクンと大きく痙攣しだす。菜緒は涙を流しながら理科室の床を苦し気に見ていた。

・・嫌だよぉ、死にたくないよぉ。どうして私、また殺されるの・・

しかし、菜緒はその後、バラバラに解体され菜緒の頭は旧校舎に残っていた汲み取り式のトイレに投げ込まれ糞尿の中に沈んでしまった。

★
★
★
★

「なあ、姫川。ちょっと姫川に試したい事があるんだけど、いいかな？」

教室に入ると芳樹が菜緒を素早く見つけ走ってきて言う。菜緒は芳樹の顔をじっと見つめてから、凄い痛い事するんだよねと呟いた。芳樹は、えっと言葉に詰まり、菜緒が続けて言う。

「私のオマンコを徹底的に壊すつもりでしょ　私、芳樹くんにならオマンコ壊されるくらいいいんだけど、その後殺されちゃうのは、さすがに嫌だから」

「殺す……。僕が姫川を？」

「そうだよ　私、凄い殺され方するんだよ。だから、今日は嫌。でも、芳樹くん、私のマンコ処刑したいみたいだから、明日ならいいよ」

芳樹は、なんで分かるんだという顔をしたが、分かったと頷いた。

「明日、必ず姫川のマンコ処刑するからな。逃げるなよ」

「逃げないよ。だって、芳樹くん、わ・た・し・のオマンコを処刑したいんでしょう？」

「ああ、姫川のマンコ処刑しないと…」

「大丈夫だよ、私、逃げないから」

菜緒は、性器を処刑されるというのに嬉しそうに微笑んだ。

★
★
★
★

「たあぁぁーーーっ」

三体のヴァギナを相手に、スク水戦士ウテルスは余裕で戦っていた。なぜか何時もより体も軽く感じ、絶好調だった。

「ウテルスパワー」

ウテルスの下腹部子宮が光り始め、それはどんどん輝きを増していく。そして、辺り一面が光りに包まれた。ヴァギナはウテルスに向かって触手を伸ばしていたが、触手はウテルスの子宮から放たれる光で蒸発し消滅していく。ヴァギナもウテルスの光で、断末魔の悲鳴を上げながら燃えるように消滅していった。

「ウテルス様、ありがとうございます」

全裸の男女が涙を流して、ウテルスに礼を言う。もう一人倒れている男は、頭と性器を食べられ事切れていた。

「ウテルス様、是非、聖水と聖便をお恵みください」

男も女も口を開けて、その口の中にウテルスの聖水が注がれるのを待っている。

・・仕方ないなぁ、これもウテルスの勤めの一つかぁ・・

ウテルスはスクール水着を脱ぐと、足を大きく開き、それではここに順番に口を付けてくださいと自分の性器を指さして言う。

「そんな。ウテルス様の性器に口を付けるなんて恐れ多いです」

二人とも、滅相もないと辞退するが、ウテルスが早くしなさいと命令する。慌てて女がウテルスの性器に口を付ける。ウテルスは、じょーっと女の口に放尿し、一回放尿を止め次に男の口に放尿した。

「ありがとうございます、ウテルス様。あと聖便もお願いします」

二人に懇願されたウテルスだが、今はあまり便意がない。仕方なく女の方にお願いする。

「お姉さん、私のおしりの穴に指入れて大便を掻き出してくれる」

「ウテルス様、そんな事していいんですか」

驚いたような顔をする女にウテルスは、どうぞと尻を突き出した。女はウテルスの肛門に指を突き入れ、ぐりぐりと刺激する。それでも、なかなか便意は訪れない。

「遠慮しないで、もっと深く入れていいよ。指で難しかったら、手を入れてもいいからね。それでも出なかったら私のマンコの穴にも

手を入れて刺激してみて。それと私は回復力が高いから乱暴に扱ってもらっても平気だから」

はいと返事をした女は、ウテルスの肛門に手を入れ始めた。そして、手首までウテルスの肛門に入れてしまう。ウテルスの肛門が裂け血が溢れ出したが、女はウテルスに言われたように、ウテルスの膣の中にも手を入れ手首まで押し込んだ。ウテルスの膣も裂け血が溢れだす。下着を被った半裸の貧弱な体の小学生女児が膣と肛門に手首まで入れられて血を流している姿は、まるで激しい性虐待をされながら逆らう事が出来ずに耐えている女児のようだった。

「おしりの穴、もっと深く腕を入れて。マンコの方ももっと奥まで入れて子宮に指を突き刺して」

ウテルスの命令で女は肛門に肘まで腕を入れ、子宮に指を三本も突き刺した。それでも便意は催さず、ウテルスは男に向かって叫んだ。

「あなたも手伝って下さい。私のおしっこの穴に指入れて、私の膀胱グリグリして下さい」

男もウテルスに命令されるまま、ウテルスの尿道に指を入れようとするが、細い尿道になかなか指が入らない。早く帰ってオナニーしたいのにと、ウテルスはイライラしながら再び男に命令する。

「もう、私のおしっこの穴なんて裂けてもいいんだから、早く私の膀胱を串刺しにしなさい」

ウテルスに怒られたと思った男は、はいっと返事をすると力一杯ウテルスの尿道に指を突き入れる。ウテルスの細い尿道がバリバリと裂けていき男の中指が根本までウテルスの尿道に突き刺さった。

「ひぎぃぃぃぃーーーっ」

尿道からも血を噴き出しウテルスが悲鳴を上げ、男はビクッと体を震わせるが、ウテルスは早く私の膀胱を壊すつもりで刺激しなさいと命令する。そして、膣と肛門、尿道を同時に刺激され、ようやく便意が催してきた。

「あっ、出るよ」

女が膣と肛門から手を抜き、男も指を抜くと拡がったままのウテルスの肛門から大便がぶりぶりと勢いよく出てきた。

8、エターナルリバース（後書き）

ウテルスの底知れない力。
無敵の能力を得たウテルスがヴァギナとの戦いに再び飛び込んでいく！！

9、同級生（前書き）

今回、菜緒にとって悲しいお話になります。ウテルスにとっても転機となるお話です。
例によって凄惨なシーンがありますので、ご注意下さい。

9、同級生

9、同級生

お風呂から上がった律子はベッドに座り、ドライヤーで髪の毛を乾かしていた。

・・姫川さんと近藤くん、仲良くて羨ましいな・・

律子が見ると、いつも二人で話している菜緒と芳樹が羨ましかった。幼馴染みって姫川さん言ってたけど、それ以上に仲が良い気がする。律子も女子の友人はいるが、男子の友人はいなかった為、男子と仲良く話しているようにみえる菜緒を羨望の眼差しで見ていた。

・・今度、姫川さんと近藤くんの話に私もまぜてもらいたいな・・

律子は、明日二人を見かけたら思い切って声かけてみようと心に誓った。二人と仲良くなれたら嬉しいな。律子は教室で、三人で仲良く話している場面を想像し楽しくなってきたところで、あれっと思う。いつもはドライヤーをかけ終わると、ニャーと寄ってくる猫のブチの姿が見えない。

・・どうしたんだろ?。具合でも悪いのかな?・・

律子はベッドの下や、テレビの後ろ、家具の隙間を探すが、ブチの姿はない。律子は急いで白い下着を穿き、パジャマを着ると階段を下り母親に声をかける。

「ブチ、見なかった?」

しかし、母親の答えは、いいえだった。どこに行ったんだろうと、また二階の自分の部屋に戻った律子は、窓のカーテンが揺れているのに気づいた。

・・なんだ、そこにいたのね・・

律子が、サッとカーテンを開けると、窓が開いており外の冷たい空気が入ってきた。律子はドキッとして心臓の鼓動が早くなる。窓は閉めてあった筈だ。記憶にある。でも鍵をかけていなかったかもしれない。

・・ブチ、窓開けて外に出ちゃったんだ・・

親に言えば、ほっときなさいと言われるに決まっている。律子は洋服に着替えると見つからないように、そっと勝手口から外に出た。そして、家の庭を探したがブチはいない。律子は、そろそろと道路に出てブチを探しまわった。その時、道路の向こうで何か物音がしたので、ブチかもしれないと走って行って角を曲がると、その先にはブチではなくヴァギナがいた。

「ひっ」

律子は、ガクガクと震えながら後退りして振り向くと、いつの間にか後ろにもヴァギナがいた。

・・嘘だよぅ、なんでこんな所にヴァギナがいるのぉ・・

律子は足がすくんで動けなくなり恐怖で声も上げられなくなっていた。ヴァギナは律子に近付いてくると触手を伸ばし始め、律子の手足にぐるぐると触手が巻き付いてくる。

・・夢だよね。怖い夢なんだよね・・

律子は夢であってほしいと願うが、律子の服が剥ぎ取られ全裸にされる。小学生の律子の貧弱な裸体が晒され、その律子の手足にヴァギナの触手が突き刺さり、律子がショック死や出血死をしないように、それを防止する為の体液が注入される。律子は、もうこれは夢ではなく現実だと認識していたが、震えてしまって助けを呼ぶ声が出せなかった。

・・誰か助けてぇ、ウテルス様ぁ・・

ニュースで話題のウテルスが助けに来てくれないかと律子は祈っていたが、ヴァギナの触手は律子の腕の骨を砕いていく。

・・ひぎぃぃぃーーーっ・・

多少痛みは緩和されているのだろうが、それでも骨を砕かれる激痛に律子の目から涙が溢れだす。律子の細い腕はぐちゃぐちゃになり、骨も飛び出し、もう神経や筋肉も切れたのか指も動かなかった。

・・助けてぇ・・

律子は心の中では絶叫するが、口がパクパクするだけでまだ声が出せずにいる。

ヴァギナは、まず人間が抵抗や反撃する際に使用する腕を潰し、次に足を潰し逃げられなくしてから、ゆっくりと食事を開始するらし

いとテレビか学校で聞いたような気がした。案の定、次にヴァギナは律子の足の骨を砕いていく。そして、空腹だったのか二体のヴァギナが争うように律子の右腕と左腕を引き千切り口に入れた。

「ひぎゃぁぁぁーーーーっ」

ようやく口から声が出た律子だったが、この開いた口に何本もの触手が入り声が出せなくなってしまう。そして、次には両足が太ももから千切られ食べられた。四肢が食べられ無くなったショックで律子は気が狂ってしまったかのように呆けた笑いを浮かべていた。その律子に追い打ちをかけるように、幼い膣に十本以上の触手が集中し律子の一度も使われなかった膣に入り込み処女膜を貫通し子宮に絡みつく。そして、律子の小さな膣を切り裂いて子宮を引き摺りだそうとした。そして、涙を流し苦しむ律子の膣から、子宮頸部が顔を出したと思うと、ズボッと子宮が取り出され、二体のヴァギナが取り合い二つに切り裂かれてしまった。切り裂かれた子宮を、それぞれのヴァギナがゆっくりと租借し味わいながら律子の子宮を飲み込んでいく。子宮を抜き取られ大量の血を流す律子の膣へ触手はまた入り込み、今度は卵巣や膀胱も取り出した。律子は生きたままどんどん食べられていく自分の体を見て、その恐怖と苦痛で早く死にたいと願ったが、その願いは叶えられず律子の残りの性器、膣壁や小陰唇、クリトリスが食べられていった。次に、性器があった股間から太い触手が一気に突き刺さり律子の体を貫通し口からその血塗れの先端を現した。体を串刺しにされた律子だったが、それでもまだ生きていた。どうやらヴァギナは律子を串刺しにしたが、上手く急所を外して生かしたまま食事を楽しむつもりのようだった。手足を引き千切られ、串刺しにされた律子は、頭と胴体だけになりながら、号泣していた。その律子の涙を流す左右の目に、容赦なく触手が突き刺され眼球が取り出され食べられる。次に鼻が削がれ、唇も削がれ、耳も削がれると食べられていった。そして、桜色の乳首が

二つとも食べられると、わずかに膨らんだ律子の乳房も食べられ、その後、胴体が上下二つに切断され下半分下腹部が食べられた。あとは頭と胸だけが残っていた。どちらもそこが無くなれば律子は望み通り死ぬことが出来るが、それは、なかなかやってこなかった。

「…ちゃん、律子ちゃん」

自分を呼ぶ声が聞こえる。幻聴だろうと思うが、聞いたことのある声だった。

「律子ちゃん。聞こえる、律子ちゃん」

今度ははっきり聞こえた。この声はよく知ってる。

「ひ、姫川さん?…」

「うん、そうだよ。よく頑張ったね、律子ちゃん」

「でももう私、ほとんど食べられちゃったから死んじゃうよ。それでも、姫川さんと最後に話せて良かった。私、姫川さんとお友達になりたかったんだ。明日、姫川さんに言おうと思ってたの、お友だちに……」

そこまで言って律子は静かになっていった。ウテルスに傷を癒す力があっても、律子のこの状態はケガというレベルではなかった。

・・律子ちゃん、痛かったよね、苦しかったよね、私が元に戻してあげるからね・・

菜緒は捕らえていた一体のヴァギナに目を向ける。菜緒の目は怒り

に充ちていた。

「さあ、私を食べさせてあげる」

菜緒は全裸になるとヴァギナに近付いていく。菜緒はウテルスの力〝エターナルリバース〟を使うつもりだった。ヴァギナは恐怖に怯えながらも触手を伸ばしてくると菜緒の体に巻き付き、あっさりと手足の骨を粉砕する。そして、菜緒の手足を引き千切った。

「ひぎぃぃぃぃーーーーっ」

手足を千切られた菜緒は、血を噴き出しながら悲鳴を上げる。

・・律子ちゃんも、こんな痛み味わったんだ。怖かったよね。私がもっと早く着いていれば……・・

菜緒は律子を思うと涙が出てきた。その後、菜緒は律子と同じように性器や子宮を食べられ、最後に頭を食べられた。

★　★　★　★

学校で菜緒は律子を注意して見ていると、律子もチョコチョコと自分を見ている事に気が付いた。どうやら自分と友達になりたいと言っていたのは本当みたいと菜緒は驚いた。どうして、自分みたいなブスで取り柄もない女子と友達になりたいんだろうと不思議だったが、素直に嬉しかった。

「律子ちゃん、よく聞いて。今夜は絶対に家から外に出ないでね」

下校時、何か言いたそうな律子に近付くと菜緒は絶対に約束してと強く迫った。律子は驚きながらも、姫川さんが言うなら約束するよと嬉しそうに言った。それでも、菜緒は心配だった為、律子の家の上空から律子が外に出ないよう見張っていたが、律子は約束通り家から出る事はなかった。もう大丈夫だろうと、ほっと安心した菜緒だったが、念の為、律子が襲われた場所に行ってみると…。

「どうして？」

菜緒の眼下に、頭と胸だけになった律子が二体のヴァギナに食べられるところだった。菜緒は急ぎヴァギナを倒し律子を救出する。そして、律子にどうして部屋をでたのと問い詰めると、律子は姫川さんと約束したから出てないよという。そして、気が付いたらヴァギナに食べられていたと言い、泣きながら事切れた。

菜緒は気が付いた。ウテルスの力で自分は死んでも運命を巻き戻す事が出来る。だけど、他の人間の運命を巻き戻す事は出来ない。一度、死んでしまった者は何度巻き戻しても死んでしまうんだ。菜緒は、その残酷な事実に打ちのめされていた。今まで菜緒は自分が有名になればいいと考えていたが、私はヴァギナに勝てる力がある。その力を、力のない人の為、もっともっと沢山の人を救う為に使おう。もう、こんな悲しい思いをするのは嫌だ。菜緒は律子の体に、ごめんなさいと手を合わせた。

9、同級生（後書き）

遂に身近な犠牲者が出てしまい、助けられなかった菜緒はウテルスとしての自分に限界を感じていきます。
それでも戦い続けなければならないスク水戦士ウテルスの考えは……。

１０、ウテルスの正体（前書き）

今回は、性器拷問など凄惨なシーンはありません。律子の死に、ショックを受けた菜緒が決心します。
相変わらず菜緒は変態ですが、ウテルスの力で人々を救おうと奮起します。

１０、ウテルスの正体

１０、ウテルスの正体

律子の死が菜緒に深く影を落としていた。同じクラスの女の子を助けられなかった。エターナルリバースという無敵の能力が使える為、菜緒は楽観的になっていたが、自分は助かっても他の人は助からない。それまで一緒に話し笑っていた人が次の瞬間いなくなる。仲のいい友達になれたと思う律子を助けられなかった。菜緒は、もう自分一人では限界があると感じていた。

★
★
★
★

学校で芳樹を見つけた菜緒は、自分から手を引き旧校舎の理科室に連れてきた。

「なんだよ。マンコ処刑なら、もう済んだだろ」

菜緒は、芳樹に性器を破壊されたが、それはもう治癒していた。自分は、あんな酷い事や殺されても平気なのに、同級生の律子ちゃんはヴァギナに食べられ殺されてしまった。菜緒の気持ちは固まっていた。

「芳樹くんは、ウテルスのファンなんだよね？」

「当たり前だろ。僕はウテルスが最初に現れた時から追い続けているんだ。誰よりも詳しいぞ」

「じゃあ、芳樹くん。今夜もウテルスを応援していてね」

菜緒は、それだけ言うと、じゃあねと理科室を出て行った。何なんだと芳樹は訝りながらも、いつもと違う菜緒の様子に何かを感じていた。実際、芳樹も同じクラスの律子が殺された事はショックだった。子供は味が悪いから襲われないなんてネットに書かれていたが大嘘じゃないかと怒り心頭だった。以前から芳樹はヴァギナに対して何か有効な手はないかと考えていたが、自衛隊の一個小隊２１人でようやくヴァギナ一体を撃退出来るレベルである。もしヴァギナが大量に現れたら、師団で挑んでも勝敗は分からないだろう。そんな相手にウテルスは一人で戦い勝利を収めている。芳樹もウテルスの力になりたいと常々思っていた。

★
★
★
★

ウテルスはヴァギナに襲われている女性を発見し、上空から急降下し女性の前に降り立つ。すでに女性は衣服を剥ぎ取られ全裸にされていた。もう少し到着が遅かったら危なかったところだ。

「スク水戦士ウテルス」

この名前を聞けば女性も安心するだろうと、まず名乗ったウテルスはヴァギナに向かい鋭い眼光を浴びせる。ヴァギナは逃げる気配をみせるが、ここで逃がすわけにはいかない。少しでもヴァギナを倒して人々を安心させたい。ウテルスはヴァギナとの間合いを詰めよ

うと一歩踏み出した時、女性の悲鳴が響いた。
ウテルスが振り向くと、もう一体のヴァギナが現れ、女性の腕に触手を伸ばしていた。ウテルスは素早く後方転回すると女性の腕に絡みついたヴァギナの触手を手刀で切断する。黄色いヴァギナの体液が辺りに飛び散った。ヴァギナは触手を切断され、一瞬怯んだが、二体が同時にウテルスではなく女性に襲い掛かる。
ウテルス一人なら、二体のヴァギナを倒すことなど造作もないことであるが、女性を守りながらの戦いは苦しいものがあった。そこへ、さらに三体目のヴァギナが現れ参戦する。ウテルスは防戦一方に追い込まれた。前のように自分に攻撃を集中してくれれば楽に戦えるのに、女性の方を狙われてはヴァギナを攻撃する隙がない。一体を倒す瞬間に残りの二体に女性を殺されてしまうだろう。
ウテルスパワーを使えば三体同時に倒せるが、発動までに時間がかかる。

「ウテルス様っ」

突然、男の声が聞こえウテルスが声の方を振り向くと特殊警棒と拳銃を持った警官が二名、走ってきていた。

「ウテルス様、女性は我々が守ります。ウテルス様はヴァギナをお願いします」

警官二人は、特殊警棒でヴァギナの触手を叩き落とし、拳銃で応戦しだした。ウテルスはニコリと微笑むと右手を腰の横で構える。ウテルスの拳が赤く輝きだした。

「レッドセンセイション」

瞬時にヴァギナとの間合いを詰めたウテルスの赤く輝く拳が、ヴァ

ギナの急所を貫いた。一撃だった。ウテルスの一撃でヴァギナは崩れ落ち燃え上がる。急いで女性の安否を確かめると二人の警官が血だらけになりながら、女性を守っていた。ウテルスは安堵し残りの二体のヴァギナに向かう。二体のヴァギナは逃げ出そうとしたが、ウテルスは逃がさない。

「デストロイクロー」

ウテルスは、ヴァギナの急所クリトリスを握り潰し切り裂いた。ヴァギナは断末魔の悲鳴を上げると道路に崩れ落ちる。残り、一体。ウテルスは背を向けて逃げようとしているヴァギナの脚部に上空から飛び降り蹴りを入れる。そして、転倒したヴァギナの急所に狙いをつける。

「エレクトリカルハンマー」

ウテルスの右足のかかとが電気を帯びたようにパチパチと光を放ち、光速の勢いでヴァギナの急所に打ち込まれた。ヴァギナは一撃で弾け飛び道路に転がった肉片はブスブスと煙を上げていた。

「凄い。さすがウテルス様」

警官二人が感嘆の声を上げる。ウテルスが三人に近付くと女性が土下座するように頭を下げた。

「ウテルス様、ありがとうございます。この御恩は一生忘れません」

「お礼は、この二人のお巡りさんに言ってください。私、一人ではあなたを守ることが出来ませんでした」

ウテルスの言葉に女性は改めて警官二人にもお礼を言い、気が緩んだのか泣き出した。よく見ると三人とも傷だらけだ。ウテルスはスクール水着を脱ぐと、どうぞ、私のおしっこは傷を癒す効果がありますので飲むなり傷につけるなりして下さい。そう言い足を大きく開いた。三人はウテルスの裸体を神々しいものでも見るように目を細めて見ていたが、ありがとうございますとウテルスの股の下に手を出して、ウテルスの割れ目から溢れる小便を手ですくい飲んだり傷につけたりした。

「凄い、奇跡だ」

三人の傷が治っていき、三人ともウテルスの前にひれ伏していた。

「私の、うんちも効果あるみたいなので使ってください」

ウテルスは、立ったまま自分で尻の肉を左右に分け肛門を露わにすると排便し、それが終わるとスクール水着を着ようとした。

「お待ちください、ウテルス様。そのままウテルス様の水着を着られては汚れてしまいます。私が綺麗にいたしますので、お待ちください」

女性はウテルスの性器と肛門に舌を這わせ、性器のヒダの中や肛門のしわの中まで綺麗に舐めていく。そして、ウテルスが愛液を漏らし始めたのに気付くと女性は膣の中にも舌を入れ舐めていく。

「あっ…」

思わずウテルスが声を出し、さらに足を大きく開くと腰を突き出した。女性は優しくウテルスの性器を舐め続け、尿道にも舌先を入れ

て刺激し、肛門にも舌を入れてきた。

「あぁーっ、あっあっあっ」

以前、芳樹にされた愛撫とはレベルが違う。大人の人は凄い。ウテルスは両手を上げ天を仰ぎ、両足はガクガクと震え立っていられなくなっていた。警官二人が慌ててウテルスを支える。

「私の乳首を舐めてくれませんか」

息を荒くしながら警官二人にウテルスはお願いする。警官二人はウテルスを支えながら、勃起しているウテルスの桜色の乳首を口に含んだ。そして、ウテルスの乳首を舐め、吸い、噛んだ。ウテルスの息が更に荒くなってくる。

「お願い、私のおしっこの穴に指入れて膀胱グリグリして」

女性は頷くと、ウテルスの膣を舐めながら目の前の尿道に中指を突き入れていく。

「あひっ、あひっ、あひーーーっ」

尿道を串刺しにされたウテルスが声を上げガクガクと体を震わせる。女性はウテルスの尿道に突き刺した指を激しく回転させた。

「もう、らめぇーっ、いぐぅーーっ、いっちゃうぅーーっ」

ウテルスの体から、ガクッと力が抜け倒れそうになるが、三人の大人はウテルスの体を地につける訳にはいかないとがっしりと支えた。端から見ると、小学生の女の子を大人三人がかりで性的イタズラを

している様に見え、実際その通りなのだが、本人たちにはその自覚はなかった。

「も、もう大丈夫です」

まだ足が快感でガクガクしているウテルスは慌ててスクール水着を着用する。律子ちゃんは、こんな快感も知らずに殺されちゃったんだ。そう思うと涙が出てきた。そして、涙に気付かれないように、それではと手を振ると空に飛びあがり見えなくなっていった。

★　★　★　★

芳樹は、ウテルスの活躍をカメラのファインダー越しに見つめていた。今日もいい写真が撮れたからネットにアップしようと、わくわくしながら道路に残された三人の様子も撮影しておこうと思った時、急にファインダーが暗くなった。カメラの故障か、芳樹がカメラのファインダーから目を放し外を見ると、目の前に、あのウテルスが宙に浮かんで立っていた。

・・本物のウテルス・・

芳樹は緊張で声も出なくなっていた。ウテルスは芳樹の目の前で宙に浮きながらスクール水着を脱ぎ芳樹に手渡した。芳樹は震える手でウテルスからスクール水着を受け取る。

「私は正真正銘のウテルスです」

「はいっ」

芳樹はウテルスから受け取ったスクール水着を宝物のように胸に抱き返事をする。この神々しい裸体、間違いなくウテルスだ。芳樹は気を失いそうなほど興奮していた。僕の目の前に、あのウテルスがいる。芳樹は人生最良の日だと一瞬でもウテルスの姿を見逃さないように瞬きすら惜しんでウテルスの姿を見つめていた。その、芳樹の見つめる前でウテルスが頭に被った白い下着を外そうとしている。

・・えっ…。ウテルスが僕に素顔を見せてくれるの・・

芳樹は、かつてない緊張と興奮で体が動かなくなっていた。

１０、ウテルスの正体（後書き）

ついにウテルスの正体を明かす決心をした菜緒。ウテルスの正体を知って芳樹はどうなるのか？

物語は、次の展開に進んでいきます。

11、ウテルスネットワーク（前書き）

ウテルスの正体が明かされ、菜緒の覚悟に芳樹も協力を約束する。今回、ウテルスの活躍シーンや性器拷問シーンはありません。次回に期待してください。よろしくお願いします。

11、ウテルスネットワーク

11、ウテルスネットワーク

芳樹は心臓が早鐘の様になり、自分が倒れるのではないかと危惧した。目の前に本物のウテルスが居る。その事実が未だに信じられない。

「これから私の素顔をお見せします。驚かないでくださいね」

ウテルスは、芳樹の目の前で頭に被った白い下着を取っていく。グンゼの綿100%の無地の白いショーツ。間違いなく本物のウテルスだ。胸に抱えているスクール水着もクラレKK60、これも間違いなく本物のウテルスの物だった。

「ど、どうして、僕に素顔を見せてくれるんですか?」

「それは私一人で人間を守る事に限界を感じたからです。私に協力して欲しい。力を貸して欲しい。でも正体も知らない者に協力するのは嫌ですよね。だから、私の正体を教えます。そして、今日のようにもっと協力して貰いたいのです。今日、お巡りさんを呼んでくれたのは、芳樹くんだよね」

最後だけウテルスの口調が変わり芳樹は聞いた事のある声だと思いながら、どうして僕が呼んだと思うんですか?とウテルスに訊き返した。ウテルスの顔はもう半分近く見えていた。

「私のことをいつも見てくれて、私が何に困っているか分かるのは、芳樹くんしかいないから…。あの時、女の人を守るため私が困っている事をすぐに察して通報してくれたんだよね」

ウテルスは、ついに芳樹の前に素顔を晒した。芳樹は眩しいものでも見るように目を細めてウテルスの顔を見ている。何処かで見た。いや、いつも見ている顔のような気がするが芳樹の頭にしばらく名前が浮かんでこなかった。

「ひ、姫川……菜緒……」

やっと思い当たったという表情で芳樹が呟く。

「どうしたの、すぐ分かると思ったのに…」

「いや、違う。姫川菜緒じゃない。だって、姫川菜緒はドブスで卑屈で、喜んでマンコ処刑される頭のおかしい、ど変態のごみみたいな女子だ。ウテルスとは全然違う」

私ってそんな風に思われているの。菜緒は、かなりショックを受け涙ぐんだが気を取り直して、芳樹に頼みたいことだけは伝えておこうと口を開く。

「信じてくれなくてもいいけど、ウテルスに協力して欲しいの」

「いや、信じるよ。ウテルスは姫川菜緒だ。僕が言ってるのはそんな事じゃない。姫川菜緒はドブスで変態で頭がおかしい女子だけど、ウテルスの姫川菜緒は違う。同じ姫川菜緒でも違うんだよ。もちろん、僕はウテルスに協力するよ。ウテルスの為なら命も惜しくない」

「ありがとう。ものすごく複雑だけど、嬉しい」

ウテルスは、芳樹に自分の考えを話し、驚く芳樹に、明日この計画通り進めてね、よろしくと言うと夜の空に飛び立っていった。

★　★　★　★

翌日、学校で芳樹の姿を見つけた菜緒は嬉しそうにピタリと芳樹の体に自分の体をくっつけていく。

「なにすんだよ、姫川。離れろよ、気持ち悪い」

芳樹に冷たくあしらわれ菜緒は、ショックを受け涙ぐむ。

「芳樹くん、私、ウテルスだよ。なんで、そんなに冷たいの？」

「ウテルスの時の姫川は最高だけど、今の姫川はドブスで変態で最低だ」

「どうして？、どっちも私なんだよ。そんなの差別だよぉ」

芳樹はそんな菜緒を無視して先に歩いていく。菜緒は、ウテルスの正体を明かせば芳樹とも仲良くなれると思っていたが、それはどうやら菜緒が自分に都合よく思っていただけのようだった。それでも、菜緒は気を取り直して、芳樹を追いかける。

「昨日、頼んだ事はやってくれるの？」

「当たり前だ。ウテルスとの約束は必ず守る」

菜緒は取り敢えず安堵した。

授業が進み、給食も済んで、午後からのホームルームが始まると芳樹が立ち上がり担任の山岸桜子先生に提案する。

「この時間の議題と進行は、僕に任せてくれませんか」

「近藤君は委員長だし、いいわよ。何か、みんなで話し合いたい事があるの？」

「はい、みんなにとって、世の中にとっても重要なことです」

芳樹は、教壇の上からクラス全員を見回し話し出す。つい先日ヴァギナに殺された山中律子の事から、これ以上被害が拡大しないように、みんなで力を合わせる必要がある。そこで、ウテルスネットワークを作ったから、そこに情報を書き込んでほしい。そして、それを全員、いや全世界で共有してヴァギナに対抗しようと呼び掛けた。

「でも近藤くん。ヴァギナの情報ネットなら、もういくつかあると思うけど…」

副委員長の綾辻留美子が、いまさら作ってもあまり役に立たないんじゃないかしらと疑問を呈する。

「僕が作るウテルスネットワークは、あのウテルスが直接見てくれるんだ。だから、何かあれば直ぐに対応してもらえるし、間違った情報は訂正してもらえる。みんなも子供は襲われないなんてネットの情報信じてなかったか？　僕は信じてた。でも、それは間違いだ

った。ウテルスネットはそんな間違いを無くし正確な情報を共有出来るネットになる」

その言葉に担任の山岸も含めてクラス全員が驚いた。

「ちょっと、近藤君。ウテルス様が見てくれるってどういう事。あなた、ウテルス様と知り合いなの？」

担任の山岸が半信半疑で芳樹を問い詰める。冗談では済まさないという剣幕だ。

「はい。僕はウテルスの正体を知っています。先生にもお願いしたい事があるので、先生やクラスのみんなにもウテルスの正体を教えます。だから、先生、みんな、是非協力してください。もう山中律子のような可哀相な人を出さない為に…」

クラス中がシーンと静まり返る。芳樹は、みんなの顔を見てから菜緒に顔を向け頷き、いいぞと合図した。菜緒は席を立つと教壇にむかい芳樹の隣に立つ。

「姫川さん、どうしたの？」

担任の山岸が菜緒に尋ねるが、それには答えず芳樹がはっきりと言う。

「ウテルスの正体は、いま僕の隣に立っている姫川菜緒です」

えぇーーっ！！！！

クラス中にどよめきが起こる。

「これから、姫川がウテルスだという証拠を見せますので、先生、みんな、旧校舎の理科室まで来てください」

ぞろぞろと理科室まで移動すると、菜緒は服を脱ぎ始めた。

「ちょ、ちょっと、姫川さん、何してるの？」

担任の山岸の問いに菜緒は答えず、代わりにまた芳樹が答える。

「これから、姫川を拷問して処刑します。普通の人間ならとても耐えられないでしょうがウテルスである姫川なら問題ありません」

そう言いながら芳樹は、全裸になった菜緒を開脚逆さ吊りにし、両腕を後ろで縛り、口もガムテープで厳重に塞いだ。菜緒のクラスメイトの前で逆さに吊られている哀れな姿を見て、副委員長の綾辻留美子が手を上げる。

「近藤くん、姫川さんだけじゃ証明にならないわ。私にも同じことをして。私は普通の女の子だから、姫川さんがウテルスなら私との違いが分かると思う」

菜緒も芳樹もこれには驚いたが、留美子はあっという間に服を脱いでいき、白いブラとショーツだけの姿になる。留美子ちゃん、もうブラジャーしてるんだ。菜緒は留美子の膨らんだ胸を羨望の眼差しで見ていた。留美子は、その下着も脱いで全裸になると、芳樹にさあ早くと言い、自身も菜緒と同じように開脚逆さ吊りにされ、腕を拘束され口も塞がれた。芳樹は木刀を持ちながら、これから二人のマンコを木刀で叩き潰しますと告げ、留美子は、そんな事するのと顔を恐怖で歪めた。

11、ウテルスネットワーク（後書き）

ウテルスの正体を明かしたクラスのみんなに、それを証明する為、性器を拷問される菜緒と留美子。次回、性器拷問スタートです。

12、飯嶋量子の贖罪（前書き）

今回は、激しい性器拷問シーンがありますので、苦手な方は注意してください。
ウテルスである証明の為、菜緒と留美子が性器に拷問を受けていきます。
その時、思わぬ展開が……。

ウテルスはクラスメイトに認めてもらえるのか。

12、飯嶋量子の贖罪

12、飯嶋量子の贖罪

芳樹は、菜緒の開いた股間の中心に木刀をトントンと当てる。いくらウテルスといえど怖いものは怖い、痛いものは痛い。菜緒はこれから自分の性器に叩き込まれる木刀の激痛を想像し震えていた。

「まず、姫川から」

芳樹は菜緒の姿が、みんなから良く見えるように菜緒の後ろに木刀を構えて立つ。本当にそんな事やっていいのと半信半疑の山岸先生とクラスメイトたちが固唾を飲んで見守る。そして、芳樹は思い切り木刀を振り下ろした。

ぐしゃぁ

「ひぎぃぃぃぃーーーーっ」

菜緒の性器に木刀が叩き込まれ、菜緒はエビの様に体を反らせ塞がれた口で絶叫する。それを隣で見ていた留美子は顔面蒼白になっていた。

「それじゃあ、次に綾辻。いいか、綾辻。そうとう痛いからな。もしかしたら普通の女子の綾辻のマンコは、もう二度と使えなくなるかもしれないぞ、それでも、いいのか？」

留美子の決意は固いようで、コクッと頷く。それを確認した芳樹は留美子の後ろに立ち木刀を構えた。留美子は恐怖で泣き出していたが、芳樹は容赦なく木刀を思い切り振り下ろした。ビューンという鋭い風切り音のあと、留美子の性器に木刀が叩き込まれる。

ぐしゃぁ

「ひぎぃぃぃぃーーーーっ」

留美子は悶絶し、股間からピューッと小便が噴水のように噴き出し、肛門からも大便が少し漏れていた。留美子は性器への一撃で白目を剥いて気絶している。留美子の性器は木刀の一撃て、クリトリスは潰れてしまい血を流していた。残念ながら、クリトリスを刺激しての自慰はもう出来そうになかった。対して菜緒は同じ拷問を受けながら意識を失うことなくクラスのみんなの顔を見つめていた。だがこれで性器拷問が終わった訳ではない。姫川菜緒がウテルスであると証明する為には、かなり酷い事をして、みんなを納得させようと昨日二人で話し合っていた。

「次は姫川の子宮を、この鉄串で何度も突き刺した後、完全に串刺しにします」

芳樹は、手に持った３０センチ以上ある銀色に輝く鉄串を菜緒の性器の上で構えると、途中で気が付いていた留美子がうなり声を上げながら頭をぶんぶんと左右に振る。ポニーテールの髪も大きく揺れていた。

「大丈夫だよ、綾辻。さすがにこれは綾辻にはやらないよ」

芳樹が言うが、留美子はまだ頭をぶんぶんと振って何か言いたそう

にしている。芳樹は仕方なく留美子の口のガムテープを剥がした。

「近藤くん、私の子宮も串刺しにして」

「それは無理だよ、綾辻。どれだけ痛いか、分かるか?普通の女子の綾辻が、そんな事されたらショックで死んじゃうぞ」

そう言いながら留美子の涙と鼻水で汚れた顔を、ハンカチで拭く芳樹の姿に菜緒は悲しくなった。やっぱり可愛い女子には優しいんだ。胸も膨らんで女子らしい体をしている可愛い留美子が菜緒は羨ましかった。が、その留美子が次に言った悲愴な決意に菜緒は感動した。

「大丈夫、私は耐えられる。あんな風にヴァギナに食べられた、お友達の律子ちゃんに比べたら何でもない。姫川さんが本当にウテルスだって私も信じたいから…。それに姫川さんがウテルスなら私の性器も治せるでしょう?」

芳樹も留美子の覚悟に、分かったと了承し、またガムテープで留美子の口を塞いだ。その時、後ろの方から震える手を上げる女子がいた。いつも目立った事のない、飯嶋量子だった。

「委員長、私の性器も処刑して下さい」

普段、自分の意見を発した事のない、量子が震える声で訴える。黒髪を三つ編みにし左右に垂らして眼鏡をかけた大人しそうな量子が、自分の言葉を噛み締めるように言い、服を脱いで全裸になる。そこで、ハッと我に返った担任の山岸先生が、量子に駆け寄った。

「飯嶋さんまで、どうしたの?」

「私のせいで律子ちゃん、食べられちゃったんです」

量子は大声で泣き出した。どういう事なのか、突然の量子の告白でクラス全員が動揺する。

「あの夜、律子ちゃん電話かけてきたんです。猫のブチが外に出ちゃったから探しに行くって。私、危ないからやめなよって言ったんだけど、律子ちゃん、子供は襲われないから大丈夫だって……。私も、そうだねなんて言って律子ちゃん止めなかった。そしたら、律子ちゃん、ヴァギナに食べられちゃったんだよ……」

大声で泣きながら量子は、顔を押えてしゃがみ込む。芳樹は、無責任な確証もない情報を書き込む奴がいるからこんな事になるんだと、舌打ちし量子の震える細い肩に手を置いた。そして、わかった、じゃあここに横になってくれと言い、量子の両足首にロープを結びつけると菜緒と留美子と同じように開脚逆さ吊りにした。そして、両腕も二人と同じように背中にまわし厳重に縛っていく。

「本当にいいのか、飯嶋？　死ぬほど痛くて苦しいぞ」

「うん、いいの。私も少しでも律子ちゃんの痛みを感じないと律子ちゃんに怒られちゃうから」

「山中は優しい女子だから、怒らないと思うけどな」

「うん、律子ちゃんは優しいから怒らないかも知れないけど、私は自分が許せないの」

量子は断固として主張する。芳樹が量子の口をガムテープで塞いでいると、一人の男子が出てきて、芳樹に一人で大変そうだから手伝

うよと言って来た。顔を見ると、やはり普段目立たない、鬼沢博士だった。

「大丈夫か、鬼沢。やる方も大変だぞ」

「平気だよ。大好きな飯嶋量子の、夢見てたマンコを破壊出来るなんて嬉しくて興奮するよ」

博士は、陰湿な笑いを浮かべながら、量子の眼鏡を外し目もガムテープで塞いだ。

「目も塞いだから、これでもっと恐怖を味わえるだろう、飯嶋さん。量子と呼んでいいかな」

「ふぅふぅふぅぅぅーーーっ」

恐怖で量子の鼻息が荒くなってくる。博士は量子の耳元で残酷に囁いた。

「僕、前から可愛くて真面目で大人しい量子が大好きだったんだ。その三つ編みの髪も眼鏡も太い眉もみんな好きだよ。だから、量子のマンコを処刑したいといつも思ってたんだ。それが本当に量子のマンコを処刑出来るなんて夢のようだよ。もう助けてくれとも言えないからね。徹底的に容赦なく二度と使用できなくするのは勿論、形も残らないほどグチャグチャに処刑してあげるからね」

「ふうぅふうぅぅぅ」

震える量子の開いた股間の中心を、じっと見つめた博士は顔を近づけて匂いを嗅いだ。

「可愛い量子のマンコの匂い最高だよ。相当おしっこ臭いから、量子よく洗ってないな。でも、このツンとするおしっこの匂い興奮するよ」

そして、まだ濡れてもいない量子の膣に博士はいきなり人指し指を突き入れた。

「ふぐぅぅーーーーっ」

生まれて初めて膣に指を入れられて量子は、膣から血を流し痛みに体をくねらせる。

「一本しか入らないんじゃ子宮を処刑するの大変だから、量子の膣を切り裂いて拡げるね」

博士は、量子の膣にメスを突き刺し、スーッと膣壁を縦に切り裂いていく。

「ふがあぁぁぁーーーーーーーっ」

量子は絶叫し、吊られたままの体が激しくのたうち回り、小便が噴水のように噴き出し、肛門から大便もぶりぶりと漏れていた。しかし、博士はかまわず量子の膣の反対側も縦に切り裂き、バリっと膣を無理矢理拡げる。量子の性器が裂けていき、血が激しくあふれ出す。

・・嫌あぁ、律子ちゃん、ごめんなさい。やっぱり私耐えられない。もう、許してぇーっ。痛い、痛いよぉぉーーっ・・

量子は処刑から逃れようと必死に腰を動かそうとするが、博士はがっしりと量子の腰を押さえ付け、膣壁をどんどん切り裂いていき拳を膣に突っ込む。

「いいよ、いいよお、量子。おしっこもうんこも漏らして無様で最高だよ。もっともっと徹底的に苦しめてあげるからね」

博士は楽しそうに微笑んだ。その頃、隣では菜緒の子宮を串刺しにした芳樹が留美子の子宮の串刺しに取り掛かろうとしていた。

「綾辻、いいか。覚悟してくれ」

留美子は、子宮を串刺しにされた菜緒や、大小便を漏らし股間から大量の血を流し苦しむ量子の姿を目の当たりにして、遠目で見ても分かるほど大きく震えていた。特に、性器を処刑されている量子の姿がよく見え、その凄まじさに芳樹の声も耳に入らなかった。量子は、今、ツルツルの恥丘に太くて長い五寸釘を当てられ金槌で、ガンガンと打ち込まれていた。量子の口から絶叫が途切れることはなく、一本目の五寸釘が根元まで打ち込まれると、すぐに二本目の五寸釘が量子の恥丘に再び打ち込まれる。

・・あんなことされて、量子ちゃん、大丈夫なの・・

留美子は、量子の心配をしていたが、すぐに自分の体の中心の奥を襲う激痛に、それどころではなくなり、涙を流し絶叫する。体の奥を襲う激痛は一回ではなく、連続で休みなく続いた。

・・許してぇぇーーっ痛いぃぃーーっもう、やめてぇぇぇーーーっ」

留美子も激痛で、ぶりぶりと大便を漏らしていた。そして、それま

でよりも更に体の奥深くまで激痛が貫き、留美子は自分の子宮が串刺しにされたことを知った。まるで、子宮だけでなく体全体を串刺しにされたような激痛に留美子は無様に泣き喚いていた。

・・もう嫌ぁぁ、助けてぇぇ、許してくださいぃぃーーーっ・・

留美子の子宮を貫いた鉄串が更に奥まで押し込まれ、留美子の体を貫いていく。

・・あっあっあっあっ、私、死んじゃう、もう殺されるんだ・・

留美子は、女の子の大切な子宮を串刺しにされたショックと激痛で、無様に体を痙攣させて失神した。

12、飯嶋量子の贖罪（後書き）

性器拷問を受ける三人の中で、特に凄まじい拷問を受ける飯嶋量子。
彼女の罪は、そこまで重いものなのか？

三人の性器を襲う拷問は、まだ続いていきます。

13、擬態（前書き）

性器拷問を受け続ける菜緒たち。菜緒は処刑され、量子の性器は破壊されていく。

凄惨なシーンがあるので、注意してください。

13、擬態

13、擬態

芳樹は、子宮を串刺しにした菜緒の性器に再び木刀を叩き込み始めた。隣で失神した留美子の姿と対照的に菜緒は絶叫しながらも拷問に耐え続けている。菜緒の性器からは、木刀が叩き込まれる度に血が飛び散っていた。それでも菜緒は耐え続けている。血塗れになった菜緒の性器を見て、芳樹はようやく木刀を叩き込むのを中止すると、菜緒の耳元で囁く。

「いいか、姫川。ここからが勝負だぞ」

菜緒も泣きながら、コクリと頷く。芳樹は菜緒の後ろに立ち、木刀の切っ先を菜緒の膣に突き刺し、徐々に菜緒の体に突き刺していく。そして、一気に木刀を菜緒の体に押し込んだ。

「ごがぁぁぁーーーーーーっ」

絶叫する菜緒の塞がれた口からガムテープを突き破り血塗れの木刀の先端が姿を現す。芳樹はなおも木刀を押し込み、菜緒の口から30センチ以上木刀が飛び出した。菜緒はクラスメイトが見つめるなか、性器から口まで完全に串刺しにされていた。

「ちょ、ちょっと、近藤君。なにするの!。早くお医者っ!!」

ハッと我に返った担任の山岸が大声で騒ぐが、芳樹は木刀を上下に

動かし菜緒が本当に串刺しにされている事を証明する。菜緒の口と性器から、ごぼごぼと血が激しくあふれ出す。そして、今度は木刀を一気に抜きとった。菜緒の性器と口から大量の血が噴き出した。

「ごぶうぅぅーーっ」

菜緒は鼻と口と性器から血を流し、苦し気な顔で、ブラブラと揺れている。

その頃、飯嶋量子も凄惨な姿になっていた。恥丘に五本もの五寸釘を打ち込まれ、血塗れになった性器に博士は、最後の処刑を実行しようとしていた。右手の五本の指先にそれぞれメスを取り付け、切り裂いた膣に右手を突き入れ、まず量子の子宮を串刺しにする。そして、量子の膣の中でメス付きの指を激しく動かし、量子の膣内や子宮をグチャグチャに破壊した。

・・ひぎぃぃぃーーーっ!!!　もう嫌ぁぁーーっ。助けて、誰か助けてよぉぉーーーっ・・

目も口も塞がれ腕も縛られて吊るされている量子は、股間から激しく血を流しビクンビクンと大きく体を痙攣させていた。

「ひぃぃぃーーーっ」

菜緒と留美子と量子の凄惨な姿を見て、クラスのみんなから悲鳴が上がるが、芳樹は菜緒の耳元に、また口を近づけると次の指示を出す。

「いいか、姫川。ウテルスのパワーを全開にして傷を治すんだ。そして、綾辻と飯嶋の傷も完治させる。そうすれば先生もみんなも姫川の事を信じる」

菜緒は頷き体に力を込める。すると菜緒の体が白く輝きだした。そして、目を開けていられないほど輝きを増す。

「眩しいっ、なんなのこれっ」

山岸先生が下を向いて目を覆う。他のみんなも一様に下を向き目を覆っていた。そして、光が消え全員が目を開けてみると、菜緒が拘束を解き、みんなの前に立っていた。

「ウテルス様。本当に姫川さんはウテルス様なんだ」

一人が呟くと、全員から、うわーっと歓声が上がった。しかし、その歓声が上がる中、博士はまだ量子の性器処刑を続けていた。量子の膣に手首まで入れ、指先に付けたメスでグチャグチャに切り裂いた子宮の周りをぐるりと切断していく。そして、子宮をメスの付いた指でグサッと握るとそのまま膣口から量子の子宮をずるりと引き摺りだした。量子の膣口から血塗れの赤黒い子宮が抜き取られ、博士は取り出した量子の子宮を細かく切り裂いていく。そして、それだけで終わらず、またも量子の膣に手を入れ、今度は膀胱を握り締め、無理矢理膀胱も取り出した。膀胱についていた尿道は、ブチッと切断し、グチャッと膀胱を握りつぶすと、量子の膀胱の中にまだ少し残っていた小便がポタポタと滴り落ちた。

・・痛いよぉ、もう私、死んじゃうんだ。こんな事されて生きていられる筈ない。でも、律子ちゃん、もっと痛くて苦しかったんだよね、少しずつ食べられていって…。私がそっちに行ったら、また仲良くしてね・・

それまで、ウテルスに歓声を上げていた全員が、量子の凄惨な姿を

見てシーンと静まり返り、子宮と膀胱を抜き取られ、ブルブルとさらに激しく痙攣しだした量子の姿に悲鳴が上がる。それでもまだ物足りないのか博士は大きく開いた量子の股間の切り裂いた膣に、今度は両腕を入れた。凄まじい光景だった。開脚逆さ吊りにされ腕も縛られ、目も口も塞がれ抵抗も許しを乞う事もできない量子の切り裂かれた膣に、博士の両腕が肘まで入り血が溢れだしている。博士は楽しそうに量子の体の中をかき回すと、ずぼっと両腕を抜く。その両手には、それぞれに量子の卵巣が握られていた。

「お、おい、鬼沢。やり過ぎだ」

「博士くん、酷いよ。量子ちゃん、死んじゃうよ」

菜緒と芳樹が、博士にもうやめろと言うが、当の博士は二人の言葉が耳に入らないのか、量子の性器をまだメスで切り刻んでいる。そして、量子の血だらけの性器に顔を埋めるとクリトリスに噛み付き、食い千切るとごくりと飲み込んだ。

「ふへへ、もう我慢できないな」

博士は、量子の膣から取り出し切り刻んだ子宮と、握り潰した膀胱も口に入れくちゃくちゃと食べていた。菜緒も芳樹もクラスの一同も、その博士の異常な姿を見て背筋が凍りついていく。

「なに、やってるんだ、鬼沢？」

「量子ちゃんを食べてるの？」

信じられないという顔の菜緒に、芳樹が小声で言う。

「僕が鬼沢を引き離すから、姫川は飯嶋を急いで助けて治癒してくれ」

「わかった。芳樹くん、気を付けて」

二人は同時に飛び出し、芳樹が博士にタックルし量子から引き離し、菜緒が吊られている量子を降ろし抱きかかえて教室の隅まで運び、量子の酷い状態になっている性器にむかって放尿した。治癒効果のあるウテルスの尿が、少しずつ量子の性器を修復していく。そして、まだ吊られている留美子を助けに行こうとした時、博士にタックルした筈の芳樹の体が宙を飛んで菜緒にぶつかってきた。菜緒は芳樹の体を受け止めようとしたが、一緒に吹っ飛ばされ、ごろごろと二人で床を転がる。

「鬼沢っ！！　お前、鬼沢じゃないな。先生、早く綾辻を降ろして、みんなと避難してっ！！」

芳樹が素早く起き上がり叫び、菜緒に昨日渡されたスクール水着を手渡す。菜緒は急いでスクール水着を着用した。山岸先生が慌てて生徒たちを誘導している。

「芳樹くん、博士くんはどうしたの？」

「姫川、あれは鬼沢じゃない。鬼沢に擬態しているヴァギナだ」

「えっ」

「もう、多分、鬼沢は食べられてしまったんだよ。それで奴が鬼沢に擬態して鬼沢に成り済ましてた。そうか、お前が山中律子をヴァギナに食べさせる手筈も整えたんだな」

鬼沢は不敵に笑いながら、量子の子宮と膀胱を飲み込む。

「順番に下級ヴァギナの餌にしていくつもりだったんだが、あまりに美味そうな量子の子宮だったから誘惑に負けてしまったな。まったく、あの山中律子という馬鹿な女子は、僕が流した嘘の情報を信じているばかりか、小動物を殺しただけで、のこのこと誘き出されてくるからな、笑ってしまうよ。馬鹿なだけあって、味も不味かったみたいだがな」

「律子ちゃんの優しい気持ちを利用するなんて許せない。それに、そんな酷い事を言うなんてっ、やっぱり人間じゃないんだね」

菜緒が激高する。

「ふふん、まさか同じクラスにウテルスがいるとは思わなかったが、所詮、人間。下級のヴァギナには勝てても、上級国民である僕に勝てるわけがない。僕ら上級国民は人間の性器を食べればパワーアップする。今、食べた量子の子宮は非常に美味かった。おかげで更にパワーアップ出来たぞ」

いつの間にか鬼沢の体が一回り大きくなっていた。

「ウテルスの正体がわかったのは好都合だ。ここでウテルスを始末して、その子宮を御馳走になるとしよう」

鬼沢は余裕で菜緒に飛びかかると、凄まじい速さの拳と蹴りを放ってくる。菜緒はそれを受けながら芳樹に早くみんなを安全な所まで避難させてと、目で合図する。芳樹も心得たと頷く。

「ウテルス、気を付けろ。そいつは普通のヴァギナとは違うぞっ」

「わかった。ありがとう。でも、大丈夫。私はウテルスだから」

芳樹はにこりと微笑むと、すぐに量子を背負い教室から外に出て、廊下で見守っていたクラスメイトたちを引き連れて避難した。周囲に人がいなくなったのを確認した菜緒はウテルスの力を、さらに開放する。

「ほう、なるほど。これでは下級のヴァギナでは歯が立たない筈だ」

余裕の表情でいる鬼沢に、菜緒も余裕で微笑み返す。

「私は、スク水戦士ウテルス。律子ちゃんを殺し、博士くんも殺し、量子ちゃんにあそこまで酷い事をしたあなたを、私が許すと思いますか」

旧校舎の理科室で二人は、火花の散る視線をぶつけ合いながら、互いに隙を伺い睨み合っていた。

13、擬態（後書き）

ズタズタに性器を破壊されてしまった量子。
正体を現した鬼沢。
芳樹たちは逃げ切れるのか？
そして、ウテルスは、これまでのヴァギナとは違う鬼沢に勝つ事が出来るのか？

物語は終盤に向かっていきます。

１４、理科室の戦い（前書き）

今回も凄惨なシーンの連続になるので注意して下さい。
正体を現した鬼沢とウテルスの戦いが開始される。今までのヴァギナとは違う鬼沢の実力は…。

１４、理科室の戦い

１４、理科室の戦い

ウテルスは鬼沢の攻撃を掻い潜り、間合いに入るとパンチを繰り出したが、ウテルスの拳より早く鬼沢の拳がウテルスの下腹部にカウンターでヒットする。ウテルスは一撃で後方に吹き飛ばされた。

「おげぇっ」

この強力な一撃でウテルスは口からゲロを吐き肛門から大便を漏らして転がった。

・・このヴァギナ、さすがに強い。けど、負けるわけにはいかない・・

ウテルスは、すかさず立ち上がったが、そこへすでに間合いに入っていた鬼沢の蹴りがウテルスの股間に命中する。鬼沢の足がウテルスの性器にめり込んでいた。

「ひぎぃぃぃぃーーーっ」

ウテルスは両手で股間を押さえのたうち回る。鬼沢は悠々と近付いてくると、股間を押さえているウテルスの右手をとり残酷な笑みを浮かべると躊躇なく骨を折った。

ボキィボキィボキィ

「ひぎゃぁぁぁーーーっ」

涙を流し悲鳴を上げるウテルスの左手もとると、左腕の骨も折っていく。そして、両腕の使えなくなったウテルスの足を掴み大きく開くと、ウテルスの性器に再び蹴りを入れた。

ぐしゃぐしゃぐしゃ

何度も何度も蹴りを入れられウテルスの性器は激しく出血していた。それでも、容赦なく鬼沢は蹴りを入れ続ける。そして、性器を蹴るだけではなく、もっと下の肛門にも蹴りを入れ、恥丘にはかかとを落とした。

「ひぎぃぃぃぃーーーっもう、いやぁぁーーーっ許してぇぇぇーーーっ」

股間を徹底的に集中して攻撃されウテルスが悲鳴を上げながら許しを乞う。いかにウテルスの力が凄いものでも菜緒はまだ小学生の女の子である。精神的に弱いことは、致し方ないことであった。

「泣き言ですか。君も言ってたように僕が君を許すと思いますか。君はここで僕に殺されるのです」

鬼沢は冷静にウテルスに告げると、さらに激しくウテルスの性器に蹴りを叩き込む。ウテルスの股間の下に出来た血溜まりがどんどん拡がっていく。ウテルスの性器も肛門もぐしゃぐしゃに潰れていた。鬼沢はそこでウテルスの性器に蹴りを入れるのを止めると、今度は足を持ってウテルスの体を持ち上げ頭上でぐるぐると振り回し始めた。そして、だんだんと位置を低くしていきウテルスの頭が理科室

の丈夫な机に接触しそうになってきた。

「いやぁ怖いぃぃーーっお願いしますぅそんな事やめてぇーーーっ」

しかし、鬼沢はそのままウテルスを振り回し、机の頑丈な太い足にウテルスの顔面を激突させた。ぐしゃという嫌な音がしてウテルスの顔面が潰された。さらに潰れたウテルスの顔面を踏みつける。

「ふはは、脆いものだ。所詮、ウテルスも人間」

鬼沢は高笑いしながら巨大な鉈を手にする。

「これでウテルスをバラバラに解体してトドメを刺しますか」

鬼沢はウテルスの右手首に狙いをつけ鉈を振り下ろす。ダンという音とともにウテルスの右手首が切断され血が噴き出す。

「おがぁーーーーっ」

ウテルスの絶叫が響き渡るなか、鬼沢は次にウテルスの右腕を肘の部分から切断する。そして、次には肩口から切断した。ウテルスの絶叫が途切れることなく響き渡る。

「ふはは、どうです、生きながらバラバラにされていくのは、苦しいものでしょう。もっと、苦しめてあげますからね」」

鬼沢は、今度はウテルスの左手首を切断すると、続けて、ダンダンと連続で肘、肩と切断した。両肩から血を噴き出しのたうち回るウテルスの体を押さえ付け、重量のある机をその上にのせ動けないようにし、鉈を置くとのこぎりを手にし、暴れるウテルスの足をまと

めて縛り付ける。。

「次はここです。今度はのこぎりで、ゆっくりと引きますから相当痛いですよ。耐えられますかね」

鬼沢は、ウテルスの両足首をのこぎりでゆっくりと引き時間をかけて切断した。ウテルスはあまりの激痛に失神していたが、鬼沢は顔面を殴りウテルスを覚醒させ膝の上にのこぎりを当て引き出す。

「うぎぃぃぃーーーっ痛いぃぃぃーーーっもう許してっぇぇぇーーっ」

「いいものですねえ、ウテルスの悲鳴というのは」

鬼沢は喜々としてウテルスの両足をのこぎりで引き続け切断してしまう。

「だいぶ足が短くなってしまいましたね。ふふ、もう少し短くしますか」

今度はウテルスの太ももの付け根を、まるで物のようにのこぎりで引きながら鬼沢は楽しそうに笑い続けていた。ウテルスは何回にも分けて両足をゆっくり切断される激痛に気が狂ったように泣き叫び続けている。そして、とうとうウテルスの両足は太ももの付け根から切断されてしまった。鬼沢が、重しとして載せていた机をどけるとウテルスは胴体だけで芋虫のようにゴロゴロと悲鳴を上げて転げ回る。その姿を笑いながら見ていた鬼沢は、木製のコートハンガーの太いポールを半分くらいの長さで切り、先端を鋭角にするとウテルスの体を持ち上げ、にやりと笑う。

「さあ、今度も痛いですよ」

そう言うと鬼沢は、ウテルスの膣にコートハンガーのポールの先端を突き刺し、ずぶずぶと押し込んでいく。ウテルスは、標本のようにコートハンガーに突き刺され飾られた。

「これくらいの高さで丁度いいですかね。おっと、大丈夫ですよ。まだまだ殺しませんから。もっともっと苦しめてから絶望の中殺してあげます」

「もう、これ以上いやぁ。このまま串刺しにして早く殺してくださいぃ」

「まだ、殺さないと言ったろう。まったく馬鹿な奴だ」

鬼沢はイライラしたようにポールに串刺しになっているウテルスの体をぐるぐると回した。

「ひぎぃぃぃーーーっ痛いぃぃぃーーーっ」

体の中を抉られウテルスが悲鳴を上げる。手足を切断され、コートハンガーのポールに串刺しにされ標本の様にされているウテルスの姿を鬼沢はスマートフォンで撮影しだした。

「ウテルスのこの姿をネットにアップすれば、人類は絶望に包まれるだろう。非常に楽しみだ」

ウテルスは、そんな鬼沢の声も耳に入らず苦痛で呻き声を上げていた。ウテルスの肛門からは血と大便が混じった液状の便が垂れ流されていた。

★
★
★
★

ドアをノックする音に続き、ドアが開けられた。入ってきた人物は、中にいる人物を見ると慌てて頭を下げた。

「失礼しました。お食事中とは存じませんでした」

「なに構わない。私は少食だから、すぐに済む。少し待ってもらえるか」

「はい。どうぞ、ごゆっくりなさって下さい」

入ってきた男は、ドアを閉め、その前で直立不動の姿勢をとる。部屋の中では二人の人間が天井から逆さに吊り下げられていた。一人の女性は黒いビジネススーツでタイトスカートが腰まで捲られ足を大きく開いて吊られている。黒いパンティストッキングの下に白い下着が薄く見えていた。女性は腕を後ろ手に縛られ口も塞がれ震えながら涙を流している。もう一人の女性はまだ少女と呼べる年齢で、ビジネススーツの女性と同様開脚逆さ吊りで拘束され泣いている。こちらの少女はセーラー服を着ており、スカートと下着は剥ぎ取られ下半身を剥き出しにされていた。二人はお互いが見えるように向き合ってぶら下げられていた。中にいた男はスーツの女に近付くと股間部分のパンストと下着をナイフで切り裂く。そして、剥き出しにされた女の性器を眺めると小陰唇を掴みナイフで切り始めた。

「ふごぉぉぉーーーっ」

女は体を揺らして抵抗するが、男はかまわず女の小陰唇を切り取り口に入れくちゃくちゃと噛むと飲み込んだ。それを見ていた女子高生の股間から小便が噴き出した。

「死なないように注入しておくか」

男は二人の女性に指を向けると指が触手の様に伸び、女性の体に突き刺さる。そして、ドクンドクンと男の体液が女性の体に注入された。男は、これでよしとまた食事に取り掛かる。スーツの女のもう片方の小陰唇を切り取り、クリトリスも抉り取る。それを美味そうに食べながら、男はスーツの女の膣を切り裂き子宮を鷲掴みにすると膣から引き摺りだし、それも食べていく。女子高生は性器を食べられていく女の姿を見て失神していた。

女の子宮を食べ終わった男は、女子高生の方へ向かうと、気絶している女子高生の小陰唇を左右一度に切り取った。女子高生は、その激痛に意識を取り戻してしまう。

「ふがぁぁぁーーーーっ」

泣き叫ぶ女子高生のクリトリスを抉り膣を切り裂くと子宮を引き摺りだす。そして、女子高生の子宮を口が裂けたように拡がり一口で食べてしまった。

「お待たせ。私の食事は終わったが、君も食べたい所があるなら遠慮せずにどうぞ」

男の言葉に、直立不動で待っていた男は、ならば頭部を頂ければ嬉しく存じますと答えた。

「どうぞ。まだ二体とも生きてるから新鮮だ」

「はい。御厚意ありがとうございます」

男はスーツの女の頭に手をかける。ナイフを貸そうか、部屋にいた男が声をかけるが、いえ大丈夫でございますと答えた男は、女の頭をグルット回す。女の顔は一瞬で１８０度回転し背中を向く。そのまま、男は女の頭をグルグルと回し女の頭を捻じり切ると、裂けた口で一口で飲み込む。次に女子高生に向かうと、女子高生の涙を流す目が助けてと必死に訴えている。男はこの部屋に入ってから初めてにこりと笑うと、女子高生の目に指を突っ込み眼球を抉りだし口に入れる。そして、もう片方の眼球も抉りだし、更に鼻の穴に指を突っ込むと鼻も引き剥がす。女子高生の顔面が血塗れになったところで男は、女子高生の首を捻り引き千切る。女子高生は首から大量に血を流し絶命した。

１４、理科室の戦い（後書き）

完膚なきまでに叩きのめされたウテルス。このままウテルスは鬼沢に敗北するのか。
そして、新たに現れた人間に擬態したヴァギナ。
人間は再び絶望に包み込まれてしまうのか……

15、惨神、そして真髄（前書き）

人間に擬態しているヴァギナは何者なのか？
ウテルスと鬼沢の戦いの決着は？

15、惨神、そして真髄

15、惨神、そして真髄

食事を終えた男は、残りは下級ヴァギナにお裾分けだと言い女性二人の残った体を運ばせた後、部屋を訪れた男に席をすすめ、さて要件はと尋ねた。

「はい、我らが三人の神、惨神の一人ニヌルタ様の収めるこのエリアに、ウテルスなる人間が現れ下級ヴァギナを倒しているようでございます。お耳障りでしょうがご報告を…」

「そうか、ありがとう。まあ、人間ごとき気にする事もないだろう。それに、人間にも少し頑張ってもらって数を増やしてもらわないと我々が食糧難になってしまうからな」

「あら、だから私のように牧場を作って人間を繁殖させればいいのよ」

カツカツとハイヒールを鳴らして入ってきた女が言う。白いブラウスに黒いジャケット、黒のタイトミニスカートに黒のストッキングの女がソファに腰を下ろすと長い足を組む。

「これは、惨神の一人エレシュキガル様、ようこそお越し下さいました」

「どうした、エレシュキガル。珍しいな。まさか、パズスも一緒か

？」

「そんなわけないでしょ。誰が、あんな奴と…　それよりさ、暇を持て余して退屈過ぎるのよ。何か面白い事ないかと思ってさ」

「仕事をしろよ、エレシュキガル。人間が何で仕事をしているのか、分かるかい。意外に楽しい暇潰しになるんだよ」

「はあ、あんたみたいな変態と一緒にしないでくれる。私は仕事なんかしたくないの。ああ、暇すぎて自慰したくなったわ」

エレシュキガルは、ソファに座ったまま足を大きく開き股間に手を突っ込んで自慰を始めた。そして、声を出し始める。

「まったく。変態なのは、そっちだろう」

ニヌルタは、いきなり自慰を始めたエレシュキガルを呆れ顔で見つめ、手伝おうかと一応声を掛ける。

「頼むわ。早く私のマンコから串刺しにしてちょうだい」

「まったく、変態の考える事は分からんな。再生するのが面倒だろう？」

ニヌルタは、やれやれと本当に手をズルッと伸ばしソファに座るエレシュキガルを持ち上げテーブルの上に仰向けに乗せると、手が槍の様に鋭くなる。

「いくぞ、エレシュキガル」

エレシュキガルは自分の股間に当てていた手をどかし、タイトスカートを捲り上げると足を大きく開く。ハアハアと興奮で息が荒くなっている。ニヌルタは槍のように変化した腕を伸ばし、エレシュキガルの股間の穴を貫き、そのまま口まで貫通させた。

「あひぃ」

エレシュキガルは一声上げると、恍惚の表情で、串刺しにされたまま自分の体を上下に動かす。自分の体の中が抉られる快感でエレシュキガルは絶頂に達しようとしていた。ニヌルタはもう一本の腕も槍状に変化させ、エレシュキガルの頭に狙いをつけ側頭部に突き刺すと反対側まで貫通させた。

「あひ、あひ、あひ」

エレシュキガルは体をビクンビクンと痙攣させていたが、やがて静かになった。ニヌルタは突き刺した腕を抜き、仕事を始める。

「あぁ気持ちいい。死ぬ寸前の快楽は堪らないわね」

しばらくして起き上がったエレシュキガルが楽しかったというように一人呟くが、ニヌルタはまるで聞こえないように仕事に没頭している。エレシュキガルは、気にした素振りもなく、来たときと同じようにカツカツとハイヒールの音を響かせドアから出ていった。部屋にいた男は、ようやく嵐が去ったかの様に、深く息を吐き緊張を解いていた。

★　★　★　★

鬼沢は、コートハンガーに突き刺されオブジェのようになっているウテルスをスマートフォンで撮影しながら、もっとインパクトのある画像にしようと思い立った。そこで理科室にあった鉄串を持ってくると、これで飾り付けようと考えた。まずウテルスの着ているスクール水着を剥ぎ取り全裸にする。そして、ウテルスのほとんど膨らみの無い右の胸を無理矢理引っ張り、上から下に鉄串を突き通した。次には右から左へ横に貫通させる。続いて、右斜め上から、その次には左斜め上からと計４本の鉄串でウテルスの胸を飾り付け、同じように左胸も飾り付けた。

・・人間の女は胸が膨らんでいる筈ですが、ウテルスは女ではないのでしょうか。でも股間は女の性器ですが……・

鬼沢は不思議に思いながらも、さらにウテルスを痛めつけて飾ろうと、口の中から舌を引っ張り出し、その舌に鉄串を貫通させる。舌には一本だけではなく三本の鉄串を貫通させた。ウテルスの頬にも、右頬から左頬へ二本の鉄串を貫通させ、鼻の穴にも鉄串を突き刺し鼻の上に切っ先が突き出ていた。鼻の穴は片側二本の計四本が突き刺された。

その後、鬼沢の標的はウテルスの股間に移り、尿道に鉄串を突き刺し膀胱を串刺しにすると、そのままさらに押し込んでいきウテルスの臍（へそ）の下から血塗れの切っ先が現れた。

「いひゃい、いひゃい、もお、ころひてえ」

舌を串刺しにされてうまく喋れないウテルスが呪文のように繰り返すが、鬼沢はウテルスを殺さないように注意しながら鉄串をウテルスの体に突き刺していた。けっきょく尿道には三本の鉄串が突き刺されウテルスの下腹部から三本の鉄串の先端が突き出ていた。

「だいぶ良い感じになりましたが、まだ少し物足りないですね」

鬼沢は鉄製のハンマーを持って来ると、ウテルスの恥丘に叩き込んだ。ウテルスの恥骨が嫌な音を立て一撃で砕ける。が、鬼沢は、更にハンマーを叩き込みウテルスの恥骨を粉々に砕いていく。そして、グチャグチャになったウテルスの恥丘に鉄串を突き刺していき、臀部に貫通するまで強く押し込んだ。

「ひやぁ、いひゃいよぅ、だれか、たひゅけてよぅ」

何も抵抗出来ないウテルスが、好きなように体を痛めつけられ泣きながら助けを求めていた。

「まだまだ刺しますよ。もっと苦しんで下さいね」

鬼沢は続けてウテルスの恥丘に鉄串を突き刺していく。二本、三本。その全てがウテルスの体を貫通し、臀部に突き抜けていた。

「ふはは、無様な姿ですね、ウテルス。この姿なら、インスタ映えしそうですね」

鬼沢は喜びながらウテルスの苦しむ姿を写真に撮り続ける。ずっと、地獄の苦痛の中にいるウテルスは気が狂いそうだった。

・・ごめんなさい、みんな。私、もう我慢出来ない。いろんな所、壊されちゃった。死にたいのに殺してくれない。もう、気が狂っても許してくれるよね・・

ウテルスは永遠に続くかと思われる苦痛に心も砕かれようとしてい

た。鬼沢はウテルスの心を砕くため、更にウテルスを痛め付ける道具を探しに行こうと振り向いた時、教室の中に人影が飛び込んで来た。

「菜緒ぉぉーーーっ!!　負けるなぁ!!　ウテルスの力はこんなものじゃない!!」

飛び込んで来た芳樹は、鬼沢に体当たりしウテルスの前に立つ。

「こんな酷(ひど)い姿にされて…。でも大丈夫だ、菜緒。ウテルスの力を信じろ。僕はウテルスを、いや、菜緒を信じてる。それに、そんな姿になっても、カッコいいぞ、菜緒」

芳樹は、ウテルスの鉄串が突き刺さる痛々しい舌から鉄串を抜き、キスをする。そして、ウテルスの頭を撫でると微笑んでから、鬼沢を睨み付ける。

「逃げていれば助かったものを。委員長の責任感というやつですか？そんなつまらない物の為に命を落とすとは哀れですね」

「責任感？　鬼沢、お前には僕がここに戻った理由は分からないだろうな」

芳樹はウテルスを庇う様に両手を広げて立っている。芳樹は小さな声でウテルスに告げた。

「いいか、菜緒。人に擬態している時のヴァギナの急所はまだ判明していない。奴が、庇う場所を全て破壊するんだ」

そう言うと芳樹は、肩から提げたバックから小瓶を取り出す。

「鬼沢、今度はお前が怯える番だ」

「くくっ、ウテルスより、更に弱小な人間ふぜいに何が出来る？」

「人間を、舐めるなぁぁーーっ」

芳樹は咆哮し、小瓶を鬼沢に投げつける。鬼沢は余裕で小瓶を破壊するが、割れた小瓶から出た液体が鬼沢の腕にかかると煙を上げ、鬼沢の腕を溶かしていく。

・・これは塩酸か。小賢しいまねを・・

芳樹は、続けて蓋を開けた塩酸瓶を投げつける。鬼沢は体の至るところに塩酸を浴び溶け始めている。

・・凄い、芳樹くん。やっぱり、芳樹くんは私なんかと違って頭がいいよ・・

が、その芳樹の動きが、ヒュンという鋭い音の後、突然止まる。

「ごめん、菜緒。さよならだ…」

芳樹の頭がぐらりと揺れると、ごろんと教室の床に転がった。

「この程度の塩酸で僕を倒せる訳がないでしょう。愚かな人間だ」

大声で笑おうとした鬼沢は、目の前のウテルスを見てギョッとする。

・・なんだ？　何が起こっている・・

ウテルスの体が白く輝き、ウテルスの心を表す様にツインテールが天を衝く。そして、近付こうとしても近付けなかった。鬼沢は自分の体が震えている事に気付く。

・・馬鹿な、僕が恐怖している・・

そして、光が消えた後のウテルスの姿を見た鬼沢は、冷や汗が流れ、背筋が凍りついていた。

・・こんな事あり得ない。我らヴァギナでさえ、あそこまで体を破壊されれば再生に時間がかかるんだ。それを、この一瞬で完全に再生するだと？　たかが人間が？・・

「あなたには死ぬことも許さない。あなたには未来永劫、無の世界を彷徨(さまよ)ってもらいます。シナイ契約、または十戒とも呼ばれる拳を、あなたに打ち込みます」

「ふざけるなぁ」

鬼沢はウテルスに連続して攻撃を仕掛けるが、悉(ことごと)くかわされる。

「一の拳」

ウテルスの拳が鬼沢の顔面にヒットする。

「なんだ？　痛くも痒くもない。こけおどしの拳か」

鬼沢は、ウテルスに蹴りを叩き込もうとしたが体が動かなかった。

「なんだ？　どうしたんだ？」

続けてウテルスの拳が鬼沢に打ち込まれる。

「ニの拳」

「なんだ、これは？痛くも痒くもないのに体が抉り取られた感覚がある」

「三の拳」

「四の拳」

「五の拳」

「六の拳」

「やめろぉーっ。分かった、僕が悪かった。もう僕はここから消える。君たちにも手は出さない。だから、見逃してくれ」

しかし、ウテルスにはもう鬼沢の言葉など耳に入らない。

「七の拳」

「八の拳」

「許してくれ、頼む。お願いします」

「九の拳」

「嫌だぁ、永遠の無ってなんなんだ?僕は一体どうなるんだ?」

「十の拳」

最後の拳が鬼沢に打ち込まれた瞬間、鬼沢の体が世界から消滅した。
そして、魂も転生する事も叶わない暗く音もない無の世界に永遠に閉じ込められた。

ウテルスは、ただ一人残った理科室で立ち尽くしていた。

15、惨神、そして真髄（後書き）

現れたヴァギナの惨神。そして、鬼沢に勝利したものの大切な者を失ってしまったウテルス。

姫川菜緒は、どうなってしまうのか？

物語は波乱の展開を迎えていきます。

16、動き出す世界（前書き）

芳樹を失い悲しみに暮れる菜緒。一方、惨神は自分の組織を固めていく。
そして、人類も反撃の為に着々と準備を整えていった。

１６、動き出す世界

１６、動き出す世界

姫川菜緒は病院に来ていた。それも厳重に警備された巨大な総合病院である。姫川菜緒がウテルスであると世間に知れ渡った今、彼女の両親や知人、全ての関係者がこの厳重に隔離されたエリアに集められており、この病院には、綾辻留美子と飯嶋量子が入院していた。

「近藤くんの遺体がなかったって、どうして？」

留美子が菜緒に尋ねる。量子は隣でベッドで眠っているようだった。

「私、芳樹くんが殺された後の事、憶えてないの。頭の中が怒りと悲しみで一杯になって、気が付いたら教室には誰もいなくて、血だまりの中に一人で立ってた」

「あれから近藤くんを見た人いないし、鬼沢くんが何かの理由で連れて逃げたんじゃないのかな」

「でも私、芳樹くんが博士くんに首を切られて倒れるところ見た」

菜緒は、思い出すと涙が出てきた。自分の見たことが夢や幻だったら、どんなにいいかもしれない、でも菜緒はあれが実際に起こった出来事だと感じていた。

「私は、あの近藤くんが、例え鬼沢くんがヴァギナだったとしても、

そんなに簡単にやられちゃうとは思えないけどなぁ。それに、大好きな姫川さんを残して消えちゃうのもねぇ…」

「えっ」

菜緒が驚いたように留美子の顔を見る。

「普段、冷静な近藤くんがあんなに慌てている姿、初めて見たよ。私は、姫川さんはウテルスだから心配いらないよと言ったけど、近藤くんは、ウテルスは強いけど姫川はまだ小学生の女の子だって…。あいつ、一人で心細い思いをしてるからって…」

「そう、すごく慌ててた。姫川さんが心配でたまらなかったんだよ。羨ましかったな、私」

隣のベッドから目覚めた量子が口を挟む。菜緒の涙が止まらなかった。

「初めて名前で呼んでくれた。いつも、ブス、ブスって言ってるのに…」

留美子が困った様に、顔の事は気にしない方がいいよと菜緒の肩を叩き、量子も、うんうんと頷いた。

そこは否定してくれないんだ、と菜緒は留美子と量子の可愛い顔を見てショックを受けていた。

★　★　★　★

あるホテルの個室の中で一組の男女が絡み合っていた。全１５０室ある個室は満室で、すべての部屋で男女の営みが行われていた。その予定だった。

「エレシュキガル様、４０４号室の人間がもう二ヶ月になるのに何の兆候もありません。いかがなさいますか？」

「そんな人間はいらないわ。餌にしてくれる」

「はい、エレシュキガル様。それでは、すぐに餌にして次の人間を補充してまいります」

男は頭を下げると、エレシュキガルの前からスッと姿を消す。と思うとまた一人の男が現れた。

「エレシュキガル様、６０１号室の人間が交尾を始めません。餌にしますか？」

「交尾を始めない？まさか、同性を入れてないでしょうね」

「いえ、きちんとオスとメスであります」

人間の異性が一つの部屋に一緒にいて性交を始めない、エレシュキガルには理解出来ない事であった。

「私が見にいきます。ついて来なさい」

エレシュキガルが、部屋の中に入ると、部屋の隅に全裸にされた女が蹲り、ベッドの上でやはり全裸にされた男が横になっていた。何も問題なさそうに見えたが、何が悪いのか、やはりエレシュキガル

には分からなかった。

「早く交尾を始めなさい」

エレシュキガルは二人に命令するが、どちらも動こうとしなかった。エレシュキガルは女の方に近付くと髪の毛を鷲掴みにし立ち上がらせ、頬を平手で打ち付けた。

「痛いぃ、パパ助けてぇ」

「やめろぉ、娘はまだ中学生なんだぞ」

しかし、構わずエレシュキガルは少女の頬を打ち続ける。少女の頬は腫れ口からは血が流れ、涙と鼻水で顔は酷い状態になっていた。

「やめろぉぉーーっ」

男はエレシュキガルに殴りかかろうとするが、もう一人の男に取り押さえられ腕を後ろに回されるとガムテープで拘束される。少女の方も両腕を背中で拘束され、父親である男の股間の前に顔面を持っていかれた。

「殺されたくなければ、男の性器を舐めなさい」

エレシュキガルは少女に命令する。少女は泣きながら父親の性器を舐め始めた。

「やめろぉ、何て事させるんだ！麻衣、止めてくれ」

押さえ付けられ自分の性器を娘に舐められる男は、言葉とは裏腹に

その性器は固く勃起していく。

「もっと舌先で、この裏筋の所も舐めなさい。尿道にも舌先を入れて刺激するんですよ」

エレシュキガルは麻衣に命令し、自分は麻衣の性器に手を当てる。麻衣は、ビクッと体を震わせるが観念した様に父親の性器を舐め続けていた。父親の性器はまだ中学生の娘に丁寧に隅々まで舐められ、娘の唾液まみれになり固く大きく勃起していた。あああと声まで出す始末である。麻衣の性器も濡れてきたのを確認したエレシュキガルは、麻衣の太ももに手を当て、女子児童に小便をさせる姿勢で持ち上げる。そして、勃起している父親の性器を、娘の麻衣の性器に突き刺した。

「痛いぃぃーーーっ、パパァ、痛いよぅ」

麻衣の性器から血が流れ出す。父親の口は押さえ付けている男の手で塞がれており、ふごふごと何か叫んでいるようだったが何を言っているのか分からない。エレシュキガルは麻衣の性器に、父親の性器を根本まで容赦なくズブズブと突き刺すと、麻衣の体を上下に高速で動かし始めた。

「ひぎぃぃぃぃーーーっ」

悲鳴を上げながら麻衣は小便を漏らしてしまう。生暖かい液体が父親の股間に当たり、太ももを伝って床に溜まっていく。麻衣の性器からは血と白濁した愛液が激しく溢れている。

「痛い、痛い、痛い、痛いぃぃーーーっ」

呪文のように繰り返し、麻衣はぼろぼろと涙を流し泣き叫ぶ。あろうことか父親は、娘の麻衣の泣き叫ぶ顔に興奮しているのか息が荒くなり、射精を必死に耐えているようだった。エレシュキガルは残酷な笑みを浮かべると、更に高速で麻衣の体を上下に動かし、触手を伸ばすと麻衣の肛門を貫いた。太い触手で肛門を貫かれ、麻衣の肛門が裂け、肛門からも血が溢れ出す。更に麻衣の小さな胸の膨らみを二つとも触手で貫通し、その先の乳首は切断してしまった。人間の血を見て段々と興奮してきたエレシュキガルは、悲鳴を上げる麻衣の口にも触手を突っ込み歯を抜いていく。更に別の触手が、涙を流す麻衣の目を突き刺し、眼球を二つとも抉り取る。目の前で壊されていく娘の体を見て父親は涙を流し狂ったように何かを叫んでいた。

麻衣の二つの小さな乳房も抉りとってしまったエレシュキガルを見て、父親を押さえ付けていた男が心配そうに、上司であるエレシュキガルに伺いをたてる。

「よろしいのですか、エレシュキガル様。それ以上破壊すると、その人間のメスは死んでしまうと思いますが…」

エレシュキガルは部下の言葉で我に返るが、すでに麻衣は口から血の泡を吐き、体をビクンビクンと大きく痙攣させ意識を失っていた。取り敢えず自分の体液を注入し、早く父親に射精させる為、更に高速で失神している麻衣の体を上下させる。

「おがぁーーっ」

そして、遂に父親は我慢しきれず娘の中に射精してしまう。大量の精液が娘の麻衣の膣内や子宮に放出され、子宮まで父親の性器で貫かれ、高速で動かされていた麻衣の性器はぼろぼろになっていた。エレシュキガルは、これでこのメスが妊娠しなかったら私の食卓に

載せろと言い、父親の方はもう用がないので下級ヴァギナの餌にしろと命令し部屋を出ていった。

★
★
★
★

ウテルスが正体を明かし、はっきりと人類の希望が見えた事で、人類のヴァギナに対する反撃が始まろうとしていた。今までは何の希望もなく細々と活動していたヴァギナ対策委員会の人員が大幅に増員され、ウテルスの協力で、ウテルスの大小便が分析され、それを利用した武器や薬が開発されていく。平常時とは違い全世界が人類の存亡を賭けた意識でその開発スピードは、かつてない程であった。ウテルスの出現により、それまで恐怖で萎縮していた世界が確実に動き始めていた。

★
★
★
★

「ここが、君の自慢の牧場か」

一人の男が、ノックもせずにエレシュキガルの部屋に入って来た。入って来た男の右手には、エレシュキガルの部下の頭が首からネジ切られてぶら下がっていた。

「ちょっと、パズス。相変わらず失礼な奴ね」

ソファに寝転び自慰に耽っていたエレシュキガルは、露骨に嫌な顔をしたが、パズスは平気な顔でエレシュキガルの部下の頭を放り投

げるとソファに腰を下ろした。

「おそらく、君やニヌルタは気にもしていないだろうが人類が僕たちに反撃の狼煙を上げてきそうだぞ」

「はっ？　人間ごときが何が出来るの？」

「ウテルスという超人が現れて人類の希望になっている。あまり、人類を甘くみない方がいい。それに、こんな使えない部下ばかりでは、ここを襲撃された時に守りきれないぞ」

「大きなお世話だわ、パズス。人間ごときに襲撃されたところで何でもないわ」

「そうか…。忠告はしたからな、エレシュキガル」

パズスは腰を上げると、手を振りながら部屋を出ていった。エレシュキガルはパズスの忠告など気にもせずに、再びソファに寝転び自慰を始めた。

16、動き出す世界（後書き）

ついに登場した惨神の一人、パズス。彼の役割は何なのか？
人類は醜悪なエレシュキガルの牧場から、人々を解放するため、力を合わせていく。

17、少女の運命（前書き）

今回は、ウテルスも姫川菜緒も登場しません。悲惨な運命を辿る少女のお話です。
凄惨なシーンがありますので、苦手な方は注意してください。

１７、少女の運命

１７、少女の運命

エレシュキガルは地下の自分の空間で、一人の半裸の少女を痛めつけていた。少女は、白いブラと白い下着姿で開脚逆さ吊りにされ、腕も縛られた状態で目も塞がれながら、性器を鞭で打たれていた。すでに白い下着の股間部分は真っ赤に染まっている。しかし、エレシュキガルは笑みを浮かべ一本鞭を少女の性器に思い切り打ち込んでいた。

「ひぎぃぃぃぃーーーっ」

少女の絶叫が地下室に木霊する。

「もう、１００回くらい打ったかしら」

エレシュキガルは傍らに控えている男に質問する。

「はい、今、１１３回です。エレシュキガル様、なぜわざわざこんな事を?」

「ふふ、いい質問ね。昨日、妊娠しなかった女を食べたのよ。その女は前に私が痛めつけていて、そうしたら普通に食べるより遥かに美味だったわ。人間は痛めつけると美味しくなると気が付いたのよ」

「なるほど、さすがエレシュキガル様。美食の為には労を惜しまな

い訳ですね」

部下の男が尊敬の眼差しでエレシュキガルを見つめる。エレシュキガルは得意げに、更に激しく少女の性器に鞭を叩き込んだ。

★　★　★　★

セーラー服を着た少女が二人、郊外の畑の中の細い道を必死にヴァギナから逃げていた。少女の後ろから三体のヴァギナ追ってくる。ヴァギナは見た目通り決して足は速くないが、その体力は人間の比ではない。少女たちは息切れしてスピードが落ち、それまで離していたヴァギナとの距離がどんどん縮まってくる。そして、ついに一人の少女の足が縺れ道路に転がる。起き上がろうとするが、また道路に転がってしまう。もう一人の少女は手を伸ばし助けようとするが、迫ってくるヴァギナを見て、声を上げて逃げ出してしまった。

「助けて、お願いぃ、梨絵ちゃん、助けてぇぇーーーっ」

道路に転がった少女は泣き叫び助けを求めるが、その足にヴァギナの触手が絡みついてきた。もう一人の少女梨絵は、なんとか林の中まで駆け込み木の陰に身を隠した。そして、震えながら様子を伺う。

「嫌ぁぁぁ、助けてぇぇーーーっ」

泣き叫ぶ少女の両手両足にヴァギナの触手が絡みついていき、別の触手が少女のセーラー服を剥ぎ取っていく。あっという間に下着だけの姿にされた少女は、必死に抵抗するがその残された下着も剥ぎ取られ全裸にされると、そのまま触手に持ち上げられ空中で大の字

に晒された。

・・ごめん、秋穂ちゃん、ごめんなさい・・

ヴァギナに捕らわれ、全裸にされ泣き叫ぶ友人の姿を木の陰から覗き見る梨絵は、声を殺し泣きながら心の中で謝罪する。そして、梨絵の見ている前で秋穂の形の良い胸の膨らみに触手が突き刺されヴァギナの体液が注入された。

「嫌ぁっ、助けて、助けて…」

叫び過ぎて声の枯れてしまった秋穂は、力ない声で呪文のように呟く。その秋穂の両腕の骨が、バキバキと砕かれていく。

「ひぎぃぃぃぃーーーーっ痛いぃぃぃーーーーっ」

掠れた声で秋穂が絶叫する。秋穂は三つ編みの髪を左右にぶんぶんと振り、可愛い顔を涙と鼻水でぐしょぐしょにして泣き叫ぶ。しかし、秋穂が受ける苦痛はまだ始まったばかりだった。秋穂はこれからさらに激しい苦痛に泣き叫ぶ事になる。そして、腕の骨を粉砕された秋穂の足の骨も砕かれていく。

「あぎぃぃぃーーーっ」

秋穂の四肢の骨を砕き、ようやく準備が整ったヴァギナは、いよいよ秋穂の性器に狙いをつけ触手を伸ばす。秋穂の膣に数十本もの触手が入っていき、秋穂の子宮に絡みついていく。秋穂は、小便を漏らし、大便まで漏らしていた。すると、その秋穂の小便を漏らす尿道と、大便を漏らす肛門にも数えきれない触手が侵入していく。

「あわわわわわっ」

悲鳴を上げる秋穂だが、その後に更に激しい激痛が秋穂の股間を襲った。股間の三つの穴がヴァギナの触手で同時に切り裂かれ血が噴き出す。

「うぼぼぼぼぼぼぼぼっ」

秋穂は意味不明な悲鳴を上げながら苦しみぬく。その秋穂の切り裂かれた膣から、子宮が力任せにずるりと抜き出された。

「ぶひぃぃぃーーーっ」

自分の下腹部を襲う激痛と、自分の股間から出てきた臓器を見て秋穂は、もう自分の体が取り返しのつかない状態になった事を思い知り絶望でビクンビクンと大きく震え出す。その秋穂の子宮は三つに切断され、其々のヴァギナの口に入っていった。続いて膀胱も抜き出される。

「おげげげぇぇーーっ」

膀胱は好みがあるようで一体のヴァギナが嬉しそうに口に入れる。股間から激しく出血する秋穂は体を激しく痙攣させる。もう早く殺して欲しいと秋穂は願ったが、その願いは叶えられる事はなく、秋穂は、まだまだ地獄の苦しみに泣き叫ぶ事になる。

「おぼぼぼぼぉぉーーーーっ」

意味の分からない言葉を絶叫する秋穂の切り裂かれた股間から卵巣まで取り出し、次に太い触手が秋穂の膣に突き刺さり、そのまま秋

穂の体を貫いていく。

「あびゅっあびゅっあびゅっ」

触手が秋穂の体の中に入っていくにつれ血を吐き出す秋穂の口から血塗れの触手の先端が顔を出す。そして、その太い触手で秋穂の体を空中に固定すると、今度は秋穂の手足を簡単に引き千切った。肩口と太ももの付け根から激しく血を流し、もがき苦しむ秋穂。その秋穂のまだ無傷な胸が次に狙われ、まず乳首が切断され、それから、乳房も二つとも抉り取られた。秋穂はもう虫の息になっていた。ヴァギナは秋穂が死んでしまうと味が落ちる為、ここから急いで秋穂を食べ始める。

木の陰でじっと身を潜めて隠れている梨絵は、四肢を切断され子宮も卵巣も抜き取られ胸も抉り取られ串刺しにされている哀れな秋穂の姿に失禁しながら震えていた。その秋穂の最後の時が近づいてきていた。涙を流す秋穂の眼球が無惨にも抉り取られ、形の良い鼻と可愛い耳も削がれた。そして、残った胴体が臍から上下に切断され内臓が零れ落ちる下腹部がまず食べられ、その後、ついに秋穂の首が切断され乳房の無くなった胸が食べられていく。最後に残った秋穂の頭は、頭蓋骨が割られ脳を剥き出しにされると争うように脳を吸い尽くされたあと、頭も食べられ、秋穂の体は食べ尽されてしまった。

秋穂を食べ終えたヴァギナは、触手を伸ばして周囲の様子を探っているようだった。梨絵は身を潜めながら、生きた心地がしなかった。目の前で友人の秋穂が食べられていく様子を見てしまい恐怖で体が動かない梨絵だった。

・・お願い、気付かないで・・

梨絵は息を殺し祈りながら隠れていたが、一体のヴァギナが梨絵の方に動き始めた。梨絵は、ドキッとしてさらに身を縮める。

・・お願い、お願い、来ないで、来ないで・・

梨絵は両手を胸に当て祈り続けるが、今度は三体のヴァギナが何かに気付いた様に向かって来る。梨絵の所在がヴァギナに判明してしまったのは間違いなかった。

・・嫌だ、死にたくない・・

梨絵は逃げ出そうとするが足が震えて動かない。梨絵は恐怖で大便までブリブリと漏らしていた。普通なら女子高生が、服を着たまま大便を漏らしたりしたら恥ずかしくて生きていられないと思うだろう。しかし、今の梨絵は自分が大便を漏らしている事にさえ気付かなかった。

・・こんなの夢に決まってる。お願いぃぃ。私を助けてぇぇ・・

だんだんと近付いて来るヴァギナから目を背け梨絵は現実逃避し、これは夢だと自分に言い聞かせていた。その梨絵が背後からいきなり抱き上げられて、梨絵は心臓が止まりそうになる。恐る恐る振り向くと、スーツ姿の男性が二人いた。

「こっちへ来なさい」

男性に手を引かれ歩いて行くと、白いセダンが停めてあり早く乗りなさいと急かされる。ようやく安心した梨絵は、そこで初めて自分が小便どころか大便まで漏らしていてスカートも下着もぐしょぐしょだと気付いた。さすがに、そのまま車に乗るのは気が引けたので

躊躇していると、男性が緊急時なのだから何も気にする事はないと言い、押し込むように梨絵を車に乗せ走り出した。車の後ろで、だんだんと小さくなるヴァギナが見えなくなると、梨絵はほっとして男性に改めてお礼を言った。

車は市街地に入りビルの前で停まると、ここなら安全だからしばらくこの部屋にいなさい着替えも用意するからと男性は言い、梨絵を残して部屋を出て行った。梨絵は汚れたスカートでソファに座るわけにもいかず窓から外を眺めていた。

・・秋穂ちゃん、あんなにバラバラにされて食べられちゃった・・

残酷に生きたまま食べられた秋穂の事を思うと、また涙が溢れてくると同時に恐怖で体が震えてきた。

★　★　★　★

その時、同じビルの地下室で男が報告をしていた。

「エレシュキガル様、ちょうどいい年頃の人間を確保してまいりました。今、地上の部屋に入れてあります。多少、汚れていますので洗浄しましたら、こちらにお持ちいたしましょうか」

「おお、気が利くな。ちょうど、小腹が空いてきたところだわ。さっそく、痛めつけて食するとしようか」

エレシュキガルは、自慰を途中で中断すると早く持って来いと男に手を振って合図した。

１７、少女の運命（後書き）

この後に待ち受ける少女の運命を思うと胸が痛くなります。
少女はどうなってしまうのでしょうか？

18、地獄へ（前書き）

前回、助かったかと思われた梨絵が、残酷に食べられていきます。
残酷シーンばかりですので、気を付けてください。

18、地獄へ

18、地獄へ

「嫌ぁぁぁーーっ　許してくださいぃぃぃーーーーっ」

梨絵は、全身を痙攣しているようにブルブルと震わせ泣き叫んでいる。梨絵はもう逃げる事はおろか、動くことも出来ずにいた。全裸にされたうえに、大きく開脚され天井から逆さに吊られた梨絵は、両腕も縛られ恐怖で泣き叫んでいた。エレシュキガルは、そんな梨絵をどう痛めつけようか考えながら眺めている。

「死ぬ寸前まで痛めつけるのがいいけど、どこから痛めつけるか悩むわね」

エレシュキガルは一人でぶつぶつ言いながら、長い針を手に取る。それをクルクル回しながら梨絵に近付くと、梨絵の股間を見つめた。

「お願いしますぅ。何でもしますから助けてくださいぃぃーーっ」

梨絵が必死に懇願するとエレシュキガルは、何かを思いついたような顔でにやりと笑う。

「何でもする?。それが本当なら考えなくもないわね」

「はい、何でもします。エレシュキガル様」

梨絵は、藁にも縋る思いでエレシュキガルに媚びを売る。秋穂がバラバラにされて生きながら食べられてしまう残酷な様子を見てしまった梨絵は、それから逃れられるなら何でもする覚悟でいた。エレシュキガルは、梨絵の縛られていた両腕の拘束を解くと、その手に自分が持っている針を渡す。

「まずは本当に何でもするか試させてもらうわ。何、簡単なことよ」

エレシュキガルは、梨絵の形の良い胸の膨らみを鷲掴みにすると、笑いながら告げる。

「この膨らみに針を貫通させてもらいますか。はい、さっさとやりなさい」

梨絵は針を持ったまま固まっていた。自分で自分の胸に針を刺す。梨絵は左胸の膨らみを掴み針先を当てると呼吸を整え目を閉じて一気に力を入れた。

「ひ、ひぎぃぃぃーーーっ」」

ブスブスと梨絵の胸に刺さっていった針は、プツンと反対側に突き抜けていた。

「ぜひっぜひっぜひぃぃっ」

呼吸を荒くしながら梨絵は、私、やりましたとエレシュキガルに胸を突き出してアピールする。

「それじゃ、あと二十本くらい貫通させてもらいましょうか」

「ひ、えっ？」

梨絵は自分の聞き間違いかと思ったが、エレシュキガルは梨絵に二十本の針を渡してくる。梨絵は泣きながら自分の胸の膨らみに針を貫通させていき、ついに全ての針を自分の胸に貫通させる。梨絵の胸は無惨にも針山と化していた。

「次はこれをクリトリスに根元まで刺してもらおう」

エレシュキガルは３０センチはある針を梨絵に渡すと、メス、返事はと催促する。

「はい、エレシュキガル様」

梨絵は片手でクリトリスを摘まみ、針の切っ先をクリトリスの頂点に当てる。その手は、ぶるぶる震えていた。しかし、梨絵はそのまま針を押し込んでいく。

「うぅぅっぎぃぃぃぃーーーっ」

・・痛い、痛い、痛いぃぃーーっ・・

梨絵は、歯を食いしばり針を押し込んでいき根元まで突き刺す事に成功する。秋穂と同じ事にはなりたくない一心で梨絵は自分の体の奥深くまで針を突き刺していた。

「よし、次は会陰に刺せ」

エレシュキガルの容赦ない命令が梨絵に告げられる。

「は、はい、エレシュキガル様」

梨絵は股間に手を当てると、会陰部に針先を当て息を整え突き刺していく。

「うぅぅっぎぃぃぃぃーーーっ」

一日前までは普通の女子高生だった梨絵が、今は逆さ吊りにされ自分で自分の性器に針を刺している。梨絵はエレシュキガルの機嫌を損ねないよう必死に激痛に耐え針を刺し続け根元まで突き刺した。

「やるじゃない、メス。それでは準備運動は終わり。ここから本番、頑張るのよ」

エレシュキガルは梨絵に鋏を渡し、それで左右の小陰唇を根元から切るよう命令する。梨絵は片手で小陰唇を引き伸ばし鋏を当てたところで号泣する。

「もう、許してください。エレシュキガル様」

エレシュキガルは逆さに吊るされている梨絵の顔面に蹴りを入れる。

「ぶひぃぃーーっ」

悲鳴を上げた梨絵に、早く切らないと顔の皮剥がしてやるけどと楽しそうに言う。梨絵は恐怖で竦みあがり、意を決して小陰唇に鋏を入れる。ジョキジョキジョキ…。

「あぎぃぃぃーーーーっ」

悲鳴を上げながら梨絵は自分の左右の小陰唇を切り落とした。エレシュキガルは、さっそく切除された梨絵の小陰唇を口に入れる。

「ふむ、やはり本人に切らせた方が味が良いな」

満足したエレシュキガルは、梨絵の鋏を取ると代わりにカッターを持たせた。それで胸の先の突起、乳首を切り落としなさい、と命令する。梨絵は、乳首の後に命令される個所を想像し恐怖と激痛で震えながら二つの乳首を切り落とした。そして、案の定、梨絵の想像通りの個所を切り落とすよう命令がくだされた。

「いだぁぁぁぁーーーーっ」

梨絵は股間の敏感な突起にカッターの刃を滑らせていた。

「はぎっはぎっはぎぃぃぃぃーーーーっ」

梨絵は自分のクリトリスを切り取ってエレシュキガルに差し出す。エレシュキガルは、それを口に入れ美味そうに租借し飲み込むと、我慢できなくなったように梨絵に両腕を前に出し掌を拡げろと命令する。

「はい、エレシュキガル様」

梨絵が両手を差し出すとエレシュキガルは、ニッパーで梨絵の指を落とし始めた。右手の人差し指、中指、薬指、根元からニッパーで落とし口に入れていく。

「おっぱぁぁぁぁーーーーーっ」

梨絵の両腕を男ががっしりと押え、梨絵は両手の指十本を全て切り落とされてしまった。そして、次に押さえられた腕の手首から切断される。その後は肘、肩と梨絵の腕は切断されていった。

「あばばばばばぁぁぁっ」

エレシュキガルは梨絵の腕を食べ終わると、足の指も切断し口に入れる。そして、日本刀を持ってこさせ梨絵の肛門に切っ先を当てた。

「さあ、肛門からゆっくりと串刺しにしていきますよ。まだ殺しませんから存分に苦しんでください」

エレシュキガルは容赦なく梨絵の肛門から日本刀を突き刺していく。梨絵の肛門は裂け、日本刀がゆっくりと梨絵の体の中へ突き刺されていった。梨絵の体は押さえ付けられ、エレシュキガルは楽しそうに日本刀を突き刺していき、ついに梨絵の口から日本刀の切っ先が姿を現す。

「ぶぼぉぉぉぉーーーーっ」

エレシュキガルは、梨絵に更に苦痛を与える為、串刺しにした日本刀をグリグリと回転させながら上下にも動かし梨絵の体の中を抉る。

「ぶぼぼぼぼぼぼぼっ」

完全に致命傷であるがエレシュキガルの体液を注入されている為、梨絵は死ぬ事も出来ず地獄の激痛に苦しみぬく。エレシュキガルは、そんな梨絵の苦しむ姿を見て、そろそろ頃合いかと思ったが、いやまだもう少しと逸る心を抑えつけた。そこで、エレシュキガルは強力な一本鞭を手にすると、串刺しにされている梨絵の体を鞭で打ち

始めた。激しく打ち込まれる鞭の打撃で梨絵の体の皮膚は破れ出血しだす。楽しそうに鞭を打ち込むエレシュキガルだったが、鞭打たれる梨絵は地獄の苦しみだった。鞭の激痛で体をよじると、串刺しにしている日本刀が体の中を抉り、もう梨絵の望みはたった一つになっていた。早く死にたい。しかし、梨絵をまだ殺す気のないエレシュキガルは体液を注入し梨絵を生かし続ける。

「ごびゅっごびゅっごびゅっ」

呼吸もままならなく激痛の涙を流す梨絵の目に指を突き刺したエレシュキガルは、そのまま梨絵の眼球を二つとも抉り取り口に入れた。そして、針を抜いた梨絵の二つの胸の膨らみもナイフで抉り取り食べていく。両腕も胸の膨らみも目もなくなり、肛門から串刺しにされて苦しむ梨絵の哀れな姿を眺めエレシュキガルは、いよいよメインデッシュに取り掛かる。ナイフを梨絵の膣に突き刺し切り裂くと、ナイフを持ったまま腕を梨絵の膣に突っ込み子宮を切り取っていく。

「おぼぼぼぼぼぼぼぼっ」

ぐばあっと膣から子宮を取り出したエレシュキガルは、それを切り刻み口に入れると満足気に微笑んだ。続いて膀胱も取り出し、潰して中に残っている尿を飲んだ後食べ、二つの卵巣も取り出し口に入れる。梨絵はビクンビクンと体を大きく痙攣させているが、まだ死んではいなかった。エレシュキガルは梨絵の膣壁も剥がして食べると、串刺しにしていた日本刀を梨絵の体から抜く。

「ぶばあっ」

口から激しく吐血する梨絵。梨絵の最後の時が近付いてきていた。抜いた日本刀を梨絵の股間に当てたエレシュキガルは力任せに梨絵

を股間から縦に二つに切り裂いていく。そして、梨絵の体を首まで縦に切断したエレシュキガルは、そこで日本刀を抜き、今度は梨絵の首を横に切断した。梨絵のツインテールを持ち、首をぶら下げたエレシュキガルは、机の上に首を置き梨絵の顔面の中心に日本刀の刃を当てると頭蓋骨ごと縦に切断した。そして、あらわれた梨絵の脳みそを美味しそうに食べるのであった。

★　★　★　★

気が付くと姫川菜緒は椅子に縛り付けられていた。

・・ここは、どこ？・・

菜緒は何があったのか思い出そうとしたが、はっきりと思い出せない。菜緒は拘束から抜け出そうと力を入れた時、ドアが開き二人の男が入ってきた。見た目は人間であるが、ヴァギナが擬態しているのかも知れない。菜緒は警戒して二人の男から目を離さずにいた。

18、地獄へ（後書き）

地獄の苦しみを味わいながら食べられてしまった梨絵。あの世で秋穂と仲良く出来るよう祈らずにはいられません。
そして、菜緒を拉致した男たちは何者なのか？

19、人間の闇（前書き）

拉致された菜緒はどうなってしまうのか？
そして、男たちの正体は？

１９、人間の闇

１９、人間の闇

入ってきた男二人は、椅子に縛り付けられている菜緒を確認する。手元の写真と見比べ頷くと菜緒に近付いてきた。

「うん、間違いない。このガキがウテルスだ」

「こんなブスのガキが人類の希望ウテルスとはねぇ」

「まったくだ。ブスは引っ込んでいろってんだ」

男二人に、ブスブスと言われ菜緒は一言いってやりたかったが、口も塞がれているため睨みつけるくらいしか出来なかった。

「おうおう。このガキ睨んでるぞ。これから、どんな目にあうかも知らないで」

「まあ、そのうち泣いて許しを乞うさ」

男たちは、椅子に縛り付けられている菜緒を見下しながら下品な笑いを浮かべる。

「逃げられると厄介だから、足の骨折っておくか」

男の一人が大きな鉄のハンマーを持つと菜緒の右脛に思い切り打ち

込んだ。

「おばぁぁぁ」

「ははっ、痛かったか、ガキ。もう一本いくからな」

男は容赦なく菜緒の左脛にハンマーを叩き込む。

「おぶぅぅぅっ」

菜緒は両足の骨を砕かれて泣き出していたが、男たちはついでに腕の骨も折っておこうと、菜緒の腕の拘束を解くと肘の関節をボキッと折る。

「これでウテルスと云えど抵抗出来ないだろう。それじゃ殺す前に楽しませてもらおうか」

「ガキとはいえ女だからな」

男たちは菜緒の衣服を剥ぎ取り全裸にする。

「顔もブスだけど、体もブスだな。今時小学生でも胸あるだろう」

「穴はあるから、良いじゃねえか」

・・ヒィィ・・

菜緒は痛む手足で必死に逃げようと床をうつ伏せでズルズルと這っていくが、男は菜緒の髪を鷲掴みにすると顔面を床に叩きつけた。

「ほおら、大人しくしないと、この不細工な顔、塩酸で焼いちゃうぞ」

男は笑いながら菜緒の顔を何度も床に叩きつける。菜緒は鼻血をだし、前歯も折れていた。

「おい、何人か呼んでこのガキ押さえ付けとけ」

しばらくして何人かの男がやって来ると、菜緒を机の上に仰向けに寝せ押さえ付ける。

「もっと大きく足開かせろ」

男は菜緒の股間に顔を近付けると、菜緒の性器の匂いを嗅ぐ。

「くせえな。まだ、ガキだからツンとしたションベン臭いマンコだ」

男はそう言いながらも菜緒の性器を拡げ舐め始める。膣口から舌を入れ、尿道も舌先で刺激しクリトリスを軽く噛む。菜緒は必死に堪えていたが、段々と声が出てしまう。

「おっおっおっおっ」

・・嫌だ、殺していいから、それだけは止めてぇ・・

菜緒は逃れようとするが手足を折られて何人もの男に体を押さえ付けられて動くことが出来ない。

「うぼぉぉぉーーっ」

相手がヴァギナならウテルスの力を使って逃げられるが、人間相手では簡単に殺してしまう。菜緒は人を殺す事に躊躇いがあった。

・・私が嫌いなら殺していいから、お願いします。それだけは許してください・・

しかし、菜緒の願いなど聞き届けられる筈がなく、菜緒の幼い性器に男の凶悪な性器が突き刺され根本まで押し込まれ激しく腰が振られる。

「ふごぉぉーーーっ」

押さえ付けられ動けない菜緒は号泣しながら犯されていた。そして、男は菜緒の膣内に射精する。自分の膣内に射精されてしまった菜緒は、さらに激しく泣き出した。そんな菜緒に容赦なく次の男が菜緒の性器を犯し始める。

「ブスなガキだが、泣き顔は良いじゃねえか」

男の一人が菜緒の口に貼られたテープを剥がし、ほら口を開けと菜緒の顔面を殴り付ける。

「ぶひぃぃぃーーーっ」

菜緒の顔面はぼこぼこに腫れ上がりたまらず開けた菜緒の口に男の性器が突き刺され喉の奥の奥まで犯される。小学生の菜緒が性器と口、二つの穴を哀れにも泣きながら同時に犯されていた。

「おばっおばっおばぁぁーーっ」

菜緒の喉奥へ容赦なく射精されると、すぐにまた次の男が菜緒の喉を犯し始める。菜緒の口と性器は、それから何時間にも渡り男たちに交代で犯され続け、顔は口から溢れた精液で汚れ、股間も膣から溢れた精液で汚れていた。そして、口と性器に飽きた男たちは、今度は菜緒の肛門を犯し始めた。

「あっばぁぁーーっ」

何度も何度も肛門を犯され、菜緒は肛門が裂けてしまい、肛門から血と精液を溢れ出す。

「ふはは、このガキ、もう喉もマンコもケツの穴もガバガバだな。そろそろ殺すか」

「待てよ。まだ穴が残ってるだろう」

男が菜緒の尿道を指差す。

「ションベンの穴？　そんなとこ入らねえだろう」

「どうせ殺すんだ。切り裂いて無理矢理入れれば良いんだよ」

男は、口押さえとけと言い、菜緒の尿道に細いナイフを突き刺し、尿道の上下左右を切り裂く。

「ひぎぃぃぃぃーーーっ」

男は切り裂いた菜緒の尿道を拡げると自分の性器を突き刺した。

「ぶぎゃぁーーっ」

泣き叫ぶ菜緒の膀胱まで性器を突き入れ、激しく腰を振り菜緒の膀胱の中に射精した。その後も次々に菜緒は尿道も犯されていき、尿道からも精液が溢れ出した。

「ふはは、見ろよ、このガキ。股の三つの穴から精液垂らしてやがる」

男たちは、菜緒の無様な姿を見て爆笑する。そして、全員呼んで来いと一人が言い、すぐに呼びに行った男が数十人の男を連れてきた。男たちは、再び菜緒を犯し始め、全員が交代で菜緒の穴という穴を休みなく犯し続ける。しかも、媚薬を塗られ性具で休みなく攻められ、更に覚醒剤まで注射されてしまう菜緒。

「ほうら、もっと気持ち良くしてやるよ」

男は菜緒のクリトリスに注射針を奥深く打ち込み覚醒剤を注入する。

「ここにも打ってやるよ」

菜緒の性器の会陰部にも針が深く突き刺され覚醒剤が注射される。さらに菜緒は二つの乳首からも覚醒剤を注射されてしまう。

「あばばばばばばばばっ」

菜緒は体をビクンビクンと大きく痙攣させ、意味の分からない奇声を上げながら犯され続ける。

「もっと打ってやるよ。大サービスだ」

菜緒のクリトリスに一度に三本の注射針が刺されると、一気に大量の覚醒剤が注入される。

「おっびゅゅゅゅーーーーっ―

菜緒は目と耳から血を流しながらも容赦なく犯され続ける。

「これだけ打っても死なないって事は、本当にこのガキ、ウテルスなんだな」

笑いながら男たちは、まだ小学生の菜緒に覚醒剤を打ち、犯し楽しんでいる。

「面白いこと思い付いた。誰か日本刀持ってこい」

男は日本刀を受け取ると、動けないよう押さえとけと言い、菜緒の犯されまくった肛門に日本刀の切っ先を当てると、そのまま中に突き入れていく。

「あびゅっあびゅっあびゅっ」

押さえ付けられ動けない菜緒の口から日本刀の切っ先が突き出した。

哀れにも菜緒は、肛門から口まで日本刀で串刺しにされてしまう。

そして、男は串刺しになった菜緒を再び犯し始めた。

「おおっ、なかなか良いぞ」

菜緒は串刺しにされたまま男たち全員に犯され中出しされ続ける。

「おぼぼぼぼぼぼぼっ」

もう数時間以上犯され続けた菜緒は意識がなくなり男たちに犯されるがままになっていた。

「さすがに、このガキには飽きたな。そろそろ殺すか。おい、押さえ付けろ」

男は押さえ付けられた菜緒の肛門から突き出す日本刀の柄を握ると、仰向けになっている菜緒の腹の方に刃を向ける。そして、力を込めて一気に菜緒を切り裂いていく。

ズバァッ

菜緒は肛門から性器諸とも喉まで一気に切り裂かれ血が噴き出す。薬の作用で意識がはっきりしない菜緒は、それでも自分の体に与えられた凄まじい行為に激しく痙攣を始める。

「苦しいだろう、可哀想にな。楽にさせてやるよ」

男が笑いながら拳銃を構えて菜緒の頭を撃ち抜こうとした時、ドアが音もなく開き、何者かが室内に入ってきた。それも一体ではなく何体も…。気配に気付いた男が振り向き悲鳴を上げる。

「逃げろうっ、ヴァギナだっ」

男の声で全員がドアからぞろぞろと入ってくるヴァギナに戦慄する。もう一方のドアから逃げようとするが、ドアを開けると外にはヴァギナが待ち構えていた。男たちは、拳銃でヴァギナを狙い撃つが、拳銃程度ではヴァギナはダメージを受けず触手を伸ばしてくる。

「ヤバイぞ。ウテルスはまだ生きてるか!!確認しろっ!!」

男たちは慌てて菜緒の状態を確認するが、菜緒は大量に覚醒剤を注射されたうえ、肛門から真っ二つに切断され血塗れで体を痙攣させていた。この状態では、とても戦えるとは思えなかった。

「まったく、救いようがない奴等だな。殺そうとしていたウテルスに、助けてもらう積もりか。まあ、ウテルスは優しいから、それでも貴様らを助けるだろうな。だから、ウテルスが気がついて復活する前に貴様らを始末するよ」

ヴァギナの後ろから男の声がし、ヴァギナが男たちに攻撃を始める。それは、まったく一方的な虐殺だった。男たちは拳銃やナイフ等の刃物で応戦するが、それをものともしないで迫ってくるヴァギナの触手に捕らえられ手足を引き千切られ食べられていく。そして、あっという間に一人を残して全滅していた。

「一つ質問に答えてくれないか。なぜ人類の希望であるウテルスを、同じ人類の貴様らが殺そうとしているんだい?」

「知らない。俺たちは頼まれただけだ。ウテルスが邪魔な奴が居るんだろう。なあ、頼む。助けてくれ」

男は必死にヴァギナの後ろに居ると思われる男に向かって懇願する。

「呆れて物も言えないな。何も知らないなら用はない」

ヴァギナの触手が動きだし男の首をねじ切り口に入れる。

「気を付けろよ、菜緒。敵はヴァギナだけではないぞ」

姫川菜緒が気が付いた時、部屋の中には人影がなく、ただ至る所に大量の血だまりが出来ていた。

19、人間の闇（後書き）

凄まじい凌辱を受けた菜緒。哀れにも犯された後、惨殺される寸前で救いのてが現れる。
窮地の菜緒を救った男は何者なのか？

２０、綾辻留美子と飯嶋量子、二人の運命（前書き）

今度は、退院した綾辻留美子と飯嶋量子が何者かに拉致されてしまう。
二人の運命はどうなるのか？

２０、綾辻留美子と飯嶋量子、二人の運命

２０、綾辻留美子と飯嶋量子、二人の運命

「ねぇ、留美子ちゃん、量子ちゃん。どう思う？」

菜緒と、退院した綾辻留美子と飯嶋量子は特別区域の公園でベンチに座りハンバーガーを食べながら話していた。

「姫川さんを監禁した人たちは、何か緊急事態があって逃げたんじゃないかな」

「私もそう思うよ。たくさんの血だまりが気になるけど」

「私、あの時、芳樹くんの声を聞いた気がするんだけと」

「うん。やっぱり彼は生きてるんだよ。それで、姫川さんを助けたんじゃない」

「でも、あの男たちは拳銃とかも持ってたよ」

「そうだよねぇ」

菜緒の言葉に皆、うーんと考え込む。三人よれば文殊の知恵というが、いくら三人が頭を絞っても、上手い説明は浮かばなかった。

「姫川さん、これからも気を付けた方がいいよ。姫川さんがウテル

スだって知られちゃったんだから」

「そうそう、いくらウテルスでも不意を突かれたら危ないもんね」

二人の同級生から励まされ菜緒は大きくウンと頷いた。

★　★　★　★

留美子は気が付いた時、辺りは真っ暗で何も見えなかった。ただ、自分が全裸で大きく足を開かされ逆さに吊られている事は分かった。どうやら腕も後ろ手に縛られ、口にも猿轡が噛まされたいるようだった。〝Y〟の字よりも〝T〟の字に近いほど足を広げられており股関節がギシギシと嫌な音をたて、ジンジンと痛み続けている。自分が、非常に悪い状況に置かれている事は幼い留美子にも理解できた。いつも通りに日曜日の昼、ヴァギナは入れない隔離された安全な公園でベンチに座り、そよそよと気持ち良い風に吹かれて読書をしていた筈だった。その後の事が思い出せない。いずれにしても普通ではないこの状況を抜け出さなければ悪い結果が待っているのは自明の理だった。

・・駄目、全然動けない・・

留美子は、腕の拘束が解けないかと必死に動かしてみたが、よほど厳重に縛られているようで、ぴくりとも動かすことが出来なかった。その時、暗闇の中、近くで呻き声が聞こえた。

・・誰か居る・・

留美子は緊張するが、苦し気な呻き声は途切れることなく聞こえてくる。そこで留美子は思いついた。自分と同じように気を失っていた誰かが意識を取り戻し、おそらく同じように吊るされていている為、苦しくて声を出したのだ。そういえば、自分のすぐ前に誰かが居るような気配がする。

「おうぅぅ」

留美子が声を出すと、呻き声を上げていた人物も留美子の存在に気付いたようで、息を呑む雰囲気が感じられた。同じ境遇の者がいると分かり多少心強くなった留美子は、なんとかこの戒めから抜け出さそうと再び頭を絞る。

・・おしっこで腕を濡らせばロープから抜けるかも・・

留美子はこの際なんでもやってみるべきだと、シャーッと放尿し、尿が背中の方に流れるよう腰を突き出す。うまい具合に小便は留美子の尻から背中へ流れていき、腕を濡らしていく。

・・動いた・・

今まで動かせなかった腕が多少動くようになり、留美子は少しずつ腕を動かし隙間を拡げていく。そして、ついに腕が抜けた。留美子は体を起こして足の戒めを解こうと歯を食いしばる。足は太ももと足首の二ヶ所が縛られ吊るされている。留美子は必死になって右の太もものロープを解こうとするが、気が焦っているためなかなか解く事が出来ない。しかも、体勢を維持するのが苦しく、留美子は一旦またぶらりとぶら下がり体を休めてから再び太ももの結び目を解こうとしたが、その時パッと部屋の灯りが点いた。留美子は眩しさで目が眩む。

「おや、逃げようとしてるガキがいるぞ。お前ちゃんと腕縛ったのか」

「すいません。おかしいな」

男の声が聞こえ留美子の腕が掴まれる。

「面倒だから折っとけや」

ようやく目が慣れた留美子は自分の腕を掴む目出し帽を被った男の姿を見た。男は留美子の右手首を掴み腕を伸ばすと、そのまま勢いよく自分の膝を留美子の肘に当てポキリと簡単に留美子の腕を折ってしまった。

「ふごぅぅぅーーーーっ」

悲鳴を上げる留美子に構わず、左腕もあっさりと折ってしまう。留美子は両腕をだらりとぶら下げて、痛い痛いと号泣していた。

「抵抗出来ないように指も折っておくか」

男は留美子の右手首を掴むと、人差し指を握り躊躇なくボキッと折る。

「ぶひぃぃぃーーーっ」

豚のような悲鳴を上げる留美子にお構い無く男は、留美子の十本の指を楽しそうに全て折ってしまった。

「あふぅあふぅ」

留美子は涙と鼻水で顔面を汚し泣き続けていた。そんな、留美子の泣き顔が気に入ったのか、留美子の顔面を男は殴り付ける。庇うことも出来ない無防備な留美子の顔面を男は容赦なく殴り付け、忽ち留美子の鼻の骨や前歯は折れてしまった。

「あうぅぅうっ」

留美子の顔面はぼこぼこに腫れ上がり意識が遠くなってきていた。

「おいっ、馬鹿っ！。まだ、殺すな」

もう一人の男が慌てて止めるが、まだ死にはしないさと言いながら殴っていた男は最後に野球のバットを手に持つと留美子の顔面にバットを叩き込んだ。

バキャ

頬骨の折れる嫌な音がして、その衝撃で留美子の右眼が飛び出してしまっていた。

「ふごぉぉーーーっ」

絶叫する留美子の垂れ下がる眼球を握りしめた男は、そのまま眼球を引き千切り床に叩きつけた。そして、グシャッと潰れた留美子の眼球をグリグリと踏み潰す。

「おいっ、そっちの商品、もう使えないじゃねえか」

「顔にモザイク入れれば良いだろう。問題ない」

「まあ、もう一人のガキにその分も酷い目にあってもらうか」

留美子は涙で滲む左眼で、自分と同じように吊るされている少女を見た。そして、驚きで眼を丸くする。

・・量子ちゃん。どうして?・・

量子は留美子が拉致される現場を目撃し、警察に通報しようとしたところを他にもいた男の仲間に襲われ同じく拉致されてしまった。量子は留美子に加えられた恐ろしい暴力行為に、顔を強張らせ震えながら泣いていた。

「三つ編みに眼鏡か。真面目で大人しそうな顔もいいね。俺の好みだから、たっぷり痛め付けてやるよ」

男は言いながら量子の猿轡を外していく。

「俺の好みの顔だから猿轡外してやるよ。だけどな、鬱陶しいのは嫌いだから…。そうだな、豚の鳴き声以外の声出しやがったら殺してやる。分かったな。返事は?」

「ぶ、ぶひぃ」

「よしよし、頭のいい奴は好きだ。最初に自己紹介してもらうか」

男は量子の耳元で、何か量子に伝えるとビデオカメラをセットする。そして、量子が震える声で話し出した。

「飯嶋量子、１２才、小学６年生です。今日はこれから量子のマンコを処刑してもらいます。量子は真面目そうな顔をしていますが、超がつく変態なんです。量子のマンコにどんな酷い事されるかと思うと、もうマンコ濡らしてしまっています。量子のマンコがぐちゃぐちゃに壊されていき、量子が絶命する姿を楽しんで頂けたら嬉しいな。飯嶋量子でした」

量子は震えながら、男に言われた事を最後まで言いきった。

「よし、偉いな。最後まできちんと言えたな。それじゃあ、早速始めるか。最初は軽くいくからな」

男は赤く太い蝋燭を手に取ると火を点け、量子の股間に至近距離から垂らしていく。量子の性器が真っ赤に固まっていった。量子は歯を食い縛って耐えていた。量子の性器を一面真っ赤に蝋で固めると、男は固まった蝋を量子の性器から剥がし、次に量子の性器を指で開いて膣前庭窟に蝋を垂らし始めた。

「ぶひ、ぶひ、ぶひぃぃぃーーーっ」

量子があまりの熱さに悲鳴を上げるが、男は股間一面を赤く染めていく。そして、また固まった蝋燭を取り除くと、今度は膣鏡を量子の膣に突き刺し大きく開くと、膣内に蝋燭を垂らしだす。

「ぶひぃぃ、ぶひぃぃぃーーーっ」

量子は子宮に蝋燭を垂らされて泣き喚いていたが、膣内を蝋で埋め尽くされてしまった。その後、量子は大量に浣腸され肛門から液状の大便を噴水のように噴き出す。それを何度も繰り返された後、股間鞭打ちが待っていた。激しく性器に鞭を叩き込まれ量子は失神し

てしまったが、それで許される事はなく更に激しく鞭は叩き込まれた。

「ぶひ、ぶひ、ぶひぃぃぃーーーっ」

量子は泣き叫び続けたが、それはこれから量子が味わう痛みに比べたら何でもない、蚊に刺された程の痛みでしかなかった。

「よし、ここから本格的にいくぞ」

量子は逆さ吊りから下ろされると机の上に仰向けに足を開いて拘束された。そして、動けないように厳重に念入りに縛り付けられる。これから何が始まるのか、量子は不安でぶるぶると震えていた。カチャカチャと何か金属の音がする。そして、ヒュッという風を切る音が聞こえた次の瞬間、量子の股間から激痛が走り抜けた。

「ぶっぶひぃぃぃーーーっ」

悲鳴を上げた後、量子は体を痙攣させる。量子の股間、膣に金属製の矢が深々と突き刺さり、その鏃(やじり)が量子の下腹部を突き破り顔を出していた。量子はアーチェリーの矢で性器を撃ち抜かれていた。

「あばばばばばばばばっ」

量子は自分の性器から下腹部を貫く激痛に泣き叫んだ。

・・りょ、量子ちゃん・・

留美子は目の前で性器を処刑されていく量子の姿を見て震えていた。

・・この人たち、ヴァギナじゃない。人間なのに何でこんな事をするの?・・

すると再びヒュッという鋭い風切り音が聞こえ、量子の膣にまた矢が突き刺さり下腹部を突き破った。

「おぴゅーーーーっ」

もう量子は豚の鳴き声など忘れていた。自分の体を襲う激痛にそれどころではなかった。そんな量子に向かって更に矢が放たれる。

ドスッ、ドスッ、ドスッ…

続けて矢が量子の膣から子宮を撃ち抜いて下腹部を突き破り顔を出す。

「おっぱぁぁぁーーーっ」

一体、何本の矢を量子の性器に撃ち込むつもりなのか、続けて矢がどんどんと撃ち込まれていく。
哀れな量子は白目を向いて口から泡を噴いて意識がなくなっていた。

・・量子ちゃん、死んじゃうよぅ。ウテルス、助けてぇ・・

留美子は菜緒の顔を思い浮かべ祈り続けるが、その時ウテルスは幼い兄弟と母親を助ける為、ヴァギナと戦っていた。

２０、綾辻留美子と飯嶋量子、二人の運命（後書き）

謎の男たちに拉致され拷問される留美子と量子。二人の運命は…？
そして、親子を守るため戦うウテルスは間に合うのか？

21、飯嶋量子の絶望（前書き）

今回、ウテルスもヴァギナも登場しません。飯嶋量子に対する拷問がメインとなります。
酷いシーンが多くありますので、苦手な方は読むのをお控え下さい。

21、飯嶋量子の絶望

21、飯嶋量子の絶望

留美子は、目の前で行われている量子への残虐な行為に、息が止まるほどの恐怖を覚えていた。

・・量子ちゃん、ごめんなさい。私、助けてあげられない・・

留美子は涙が溢れて止まらなかった。もう量子は助からないだろう。残酷に痛めつけられて殺されていくのだ。その次はきっと自分の番だ。留美子は自然と体が大きく震えてきた。

・・嫌だ、嫌だ、嫌だ…。怖い、怖い、怖い、怖い…・・

留美子が涙を流し震えながら見つめる中、量子への残虐行為はまだ続けられていた。

「もう、矢を撃つとこがないな。よし、次に移ろう」

リーダー格と思われるカメラを構えている男の命令で、他の男たちが動き始める。量子の拘束を解き、股間に突き刺さっているアーチェリーの矢を抜いていく。量子は矢が抜かれる度に体をビクンと痙攣させ悲鳴を上げる。

「嫌ぁぁぁっ、許してくださいぃぃぃーーーっ」

大声で泣き叫ぶ量子の体が頑丈な机の上の乗せられ、再び拘束されていく。いつも大人しい量子が大声で絶叫する姿を見て留美子は、量子がどれほどの苦痛を与えられているのか考え恐ろしくて目を背けたかったが、留美子の目は量子に釘付けになっていた。量子は狂ったように頭をぶんぶんと振り、三つ編みのお下げが左右に激しく振れ眼鏡が外れそうになっていた。そんな量子が今度は机の上で四つん這いにさせられ、両方の足首と膝下、それに、手首と肘の八か所が机から出ている皮のベルトで厳重にきつく拘束される。量子は、尻を突き出した格好で机の上で動けないよう固定されてしまった。後ろから見ると量子の肛門と、矢で射貫かれ血塗れの性器が丸見えであった。

・・これ以上まだ量子ちゃんに何かするの・・

留美子は、もはや瀕死の重傷を負っている量子に更に危害を加えようとする男たちにヴァギナ以上の恐ろしさを感じた。ヴァギナは食料にするため人間を襲うが、それは人間が牛や魚を食べるため殺すのと、ある意味同じ、自分たちが生きる為にしている事だと留美子は考えた。しかし、この男たちは自分たちが楽しむ為に量子を痛めつけ殺そうとしている。何の罪もない、まだ小学生の量子をだ。真面目で可愛い量子なら、これから先きっと幸せに暮らしていく事が出来ただろう。それが、こんな窓一つない殺風景なコンクリートの部屋の中で男たちに拷問され殺されていく。留美子は、この世に神様はいないのかと思った。その時、前に芳樹が言っていた言葉を思い出した。神様はもちろん居るさ。でも、神様は多くの事を見なければならない。例えば僕たちがアリの巣を見ても、その中の一匹が僕たちを神だと思って助けを求めても分からないだろう。アリ同士の諍いなんて僕らにはまるで分からない。神様だって同じさ。僕ら一人一人の事なんて分からない。だから、アリはアリの世界、僕らは僕らの世界で解決するしかないんだよ。留美子はそれを聞いて、

いつも斜に構えている近藤くんらしいと思ったものだった。

「おい、もう少し、このガキの顔、痛めつけろ」

カメラを構えながら男が言うと、他の男がすぐに量子の髪を掴み眼鏡を外すと顔面を殴りつける。

「あひっ、あひっ、あひぃぃぃーーーっ」

悲鳴を上げる量子の顔は、たちまち腫れあがり鼻と口から血を流す。

「よし、それでいい。次にいくぞ。固定カメラの配置はいいか？」

男たちは量子の周りの色々な角度から撮影用のカメラを据え付けチェックする。カメラを構えた男は量子の顔の前に行き、このガキの顔、正面に向けたまま押さえ付けとけと命令し量子の号泣している顔をカメラに収める。

「いい泣き顔だな。これから地獄の苦しみを味わわせてやるから覚悟するんだな」

男は、量子の頭をそのまま押さえ付けとけと言い、量子の腰も動かせないように押さえ付けろと命令し、カメラを他の男に手渡すと撮影をその男に任せ、自分は部屋の隅から日本刀を取ると鞘を抜いた。日本刀の凶悪な刃が部屋の明かりで輝く。

・・う、嘘だよね。あれで量子ちゃん・・

量子は机の上に尻を突き出した状態で固定され、さらに男たちに体中押さえ付けられている。正面を向かされた量子の顔が、逆さに吊

るされている留美子からちょうどよく見えた。量子は、只ならぬ気配を感じ激しく号泣している。

「さあて、いくぞ。地獄の始まりだ。撮影ミスるなよ」

男は量子の突き出された尻の丸見えになっている肛門に指を突き入れた。

「あっひゃぁぁぁっ」

量子の肛門から指を抜いた男は、今度は日本刀の切っ先を量子の肛門に当てる。そして、そのまま量子の肛門に日本刀を突き入れていった。

「あびゃぁぁぁーーーーーっ」

今までにない絶叫が量子の口から飛び出し、量子の肛門は裂け血が噴き出す。男は構わずわざとゆっくりと量子の肛門に日本刀を突き刺していく。

「あびゅ、あびゅ、あびゅ」

男は途中で日本刀をグリグリと回転させ、さらに量子を痛めつける。

「頭、ちゃんと押さえ付けてるか。口も大きく開けさせろ」

男たちは量子の頭と顎を押さえ、無理矢理口を開けさせる。

「ほげぇぇぇーーーっ」

悲し気な悲鳴を上げる量子に容赦なく男は日本刀を突き刺し、日本刀の鍔まで量子の肛門に押し込んだ。

「あびゃぁぁぁーーーーーっ」

留美子の目の前で量子の口から日本刀の切っ先が飛び出す。

「あぶぶぶぶぶぶっ」

・・いやぁぁぁ、量子ちゃんーーっ・・

ぶくぶくと血の泡を口から噴き出し白目を剥いた量子の哀れな顔に留美子は号泣する。男は、しばらく日本刀を回転させたり抜き差しして量子を痛めつけて楽しんだ後、日本刀を量子の肛門から抜く。

「ようし、急ぐぞ。早く隣の処刑台に移動しろ」

男たちは瀕死の量子の体を担ぎ上げると、処刑台と呼ばれた机の上に量子の体を仰向けに置く。そして、量子の体を大の字に厳重に拘束する。

・・これ以上、やめてぇぇぇーーーっ・・

留美子は、串刺しにされて瀕死の量子にまだこれ以上苦痛を与えるつもりなのかと目を疑った。可哀想だけど、もう楽に殺してあげてと思わずにはいられなかった。大の字に寝かされた量子は、太ももの付け根、膝、足首と両足を固定され、肩口、肘、手首と両腕も拘束され、さらに胸と腰も拘束される。そして、二の腕と太ももにはギロチン台がセットされる。ギロチンの刃が落ちれば両腕、両足が簡単に切断される仕組みだった。当然、首にもギロチン台がセット

されるが、首にセットされたギロチン台は頭上にあるのは通常の刃ではなく大きなコンクリートの塊だった。縦横一メートル、厚さも一メートルもあるコンクリートのブロックは、それが落ちれば量子の首は切断され、そのままコンクリートの床と落ちてきたコンクリートのブロックで潰され原型がなくなってしまうのは明らかだった。これだけでも残酷な処刑であると云えるのであるが、さらに量子の臍の上にもギロチン台がセットされ、量子の体を上下に切断する仕組みだ。そして、大きく開いて固定された両足の間では、回転のこぎりが量子の性器を真っ二つにするため狙っている。量子の体を徹底的に破壊する恐ろしい処刑台だった。

「おい、せっかく膨らみ始めた胸に何もしないのは悪いから鉄串十本くらい貫通させとけ」

カメラを構えながら男が言い、他の男がすぐに量子の胸を鉄串で貫通させようとしたが、量子の胸はまだ多少膨らんだ程度なので苦労していると男がイラついたように、頭を使え乳首に釣り針刺して上に引っ張り上げれば楽に貫通出来るだろうと指示を出す。さっそく量子の二つの小さな桜色の乳首に釣り針が突き通され引っ張り上げられ、直径5ミリの鉄串が量子の二つの小さな乳房を貫通する。

「ふぎぃぃぃぃーーーっ」

処刑台に完全拘束されながら量子は処刑執行前に、さらに念入りに痛めつけられていた。ずぶずぶと量子の乳房に鉄串が次々に貫通されていく。量子の小さな胸は忽ち十本の鉄串を貫通され無様に飾られる。

「なかなか良いじゃねえか。あと、そうだな。マンコは真っ二つにしちまうが恥丘の脇に十本くらい五寸釘を打ち込んで飾ってみろ」

命令された男は嬉しそうに量子のツルツルの恥丘の脇ビキニラインに五寸釘の鋭い先端を当て金槌で打ち深く根元まで打ち込んでいく。

「あうぅぅぅーーっいだいぃぃぃーーーーっ」

量子は叫び過ぎて掠れた声で絶叫する。しかし、五寸釘はどんどん打ち込まれ量子の恥丘の左側に十本の五寸釘が打ち込まれ、次に恥丘の右側に五寸釘が打ち込まれていく。

「いだいぃぃぃーーーっゆるじでぇぇぇーーーーーっ」

量子の恥丘の両側に五寸釘が十本、計二十本きれいに根元まで打ち込まれていた。

「よおし、それじゃこのガキの処刑始めるぞ。いいか、一発撮りでやり直しは出来ねえから順番間違えるなよ」

男が周囲の男たちに号令すると、全員が所定の位置に散らばっていった。

「ゆるじでぐだざい、ゆるじでぐだざい、ゆるじでぇぇぇーーーーっ」

処刑台に拘束され身動きできない量子が、唯一動かせる口で必死に男たちに泣きながら許しを乞う。しかし、カメラを構えた男は、そんな量子の怯え震える姿を見て楽しそうににこりと笑う。

「レッツ　エクセキューション」

量子の、死へのカウントダウンが始まった。

21、飯嶋量子の絶望（後書き）

ついに処刑台に拘束されてしまった飯嶋量子。
量子は、このまま残酷に処刑されてしまうのか？

22、飯嶋量子の最後（前書き）

処刑台に拘束された量子の運命は？
同級生の留美子はどうなるのか？

今回もウテルスは登場しません。量子の処刑が執行されるシーンが中心です。

酷い描写が多いので、苦手な方は気を付けて下さい。

22、飯嶋量子の最後

２２、飯嶋量子の最後

処刑台に大の字に固定された量子は、両腕、両足、腹部にギロチン台をセットされ、首にも頭を潰すギロチン台がセットされていた。股間には量子の性器を真っ二つに切り裂くために回転のこぎりが用意されている。今までこの処刑台で処刑された女性は何人もいたが、全てこの処刑台に拘束され処刑具がセットされると、処刑される前に全員が、これから自分の体に加えられる凄まじい処刑の恐怖で発狂してしまっていた。量子が発狂しなかったのは、まだ幼い為に想像力が足りなかったからと思われた。そこで男は量子に以前この処刑台で処刑された少女の映像を見せる。

★
★
★
★

「初めまして今回処刑していただく吉田ゆかり、１５歳、中学三年生です。この残酷な処刑台で徹底的に処刑していただくので、どうぞゆかりが完全に絶命するまでお楽しみください」

震えながら涙声で話していたゆかりだったが、処刑台に拘束される段階になると激しく泣き喚き抵抗する。が、中学生の女子が、何人もの屈強な男に逆らえる筈もなく処刑台の上に仰向けに拘束されていく。手足を拘束され、胸と腰も拘束され、手足にギロチン台がセットされ、腹に太い杭、股間に回転のこぎりが準備される。そして、

ゆかりに今自分がどんな状態なのか頭を起こして確認させると、ゆかりはギロチン台や杭、回転のこぎりを見て絶叫する。その、ゆかりの絶望に歪む顔がアップで映し出されていた。
その後、ゆかりの首にもギロチン台がセットされ自分の頭の上にあるコンクリートの塊を見た瞬間、ゆかりはまた絶叫し、そのままぶるぶると体を痙攣させ涎を垂らし、目は焦点が合わなくなり意味不明の声を上げ始めた。

「おぼぼぼぼぼぼぼぼっ」

これから自分の体に加えられる処刑にゆかりの心は耐えられなくなり無様に発狂してしまっていた。しかし、発狂したからといって処刑が許されるわけがなく、処刑は執行されていく。まず、木製の槍が用意されゆかりの膣に突き入れられる。

「ひびぃぃぃーーーーーっ」

ゆかりは絶叫し小便と大便を漏らし始める。

シャーッ、ぶりぶりぶり…

激しく大小便を漏らしながら串刺しにされていくゆかり。その、ゆかりの性器のドアップが映し出される。

「おっばぁぁぁーーーーーっ」

ゆかりの口から木槍が飛び出し、それを合図にゆかりの左腕にセットされたギロチンが落ちる。ズガッという重々しい音が響きゆかりの左腕が切断され、次に右腕のギロチンが落ちた。

ズガッ

ゆかりの右腕も簡単に切断される。

「おびゃぁぁぁーーーーーっ」

ここで回転のこぎりが回転を始め、ゆかりの性器に迫ってくるが、回転のこぎりがゆかりの性器を切り裂く前に左足のギロチンが落ち、ゆかりの太ももを切断する。そして、次に右足のギロチンが落ちた。右の太ももが切断されたと同時にゆかりの性器を木製の槍ごと回転のこぎりが切り裂き始める。ゆかりの性器から血飛沫が上がる。さらにそれを合図にゆかりの腹部に杭が打ち込まれ始めた。

「おびゃ、おびゃ、おびゃ」

手足を切断されたゆかりの腹部に打ち込まれている杭は、ゆかりの体を貫通し、回転のこぎりはゆかりの恥骨と腰骨も切断し性器を真っ二つにしていた。

「ぶびゃぁぁぁーーーーーっ」

ゆかりの最後の絶叫が響き渡るなか、頭の上のコンクリートブロックが落ちてくる。コンクリートブロックはゆかりの首を切断し、そのままグシャとゆかりの頭をゴキブリのように押し潰す。ゆかりの頭はただの肉片になっていた。

「こんにちは。ゆかりが無様に処刑される姿、楽しんで頂けましたか。この音声が流れる時には、ゆかりはもう処刑されていると思います。それでは、さよならです」

震える声で挨拶するゆかり。映像は、そこで終わっていた。

★　★　★　★

映像を見て自分の運命を悟った量子は狂ったように泣き喚く。

「ゆるじでぐだざい、ゆるじでぐだざい、ゆるじでぐだざい」

肛門から口まで串刺しにされて、うまく喋れない量子が必死に許しを乞う。しかし、いくら量子が許しを乞うても、もう遅いし許されるはずもなかった。男は木製の槍を手にすると量子の膣に狙いをつける。

「前の女に使った槍は直径3センチだったが、今度のは倍の6センチだ。苦しみも倍増だぜ」

男は笑いながら量子の膣に槍を突き刺していく。

「今度はマンコから串刺しだ」

量子の膣が裂け血が溢れだす。男は、その血を見て更に楽しそうに量子の膣に木槍を回転させながら突き刺していく。

「あびゅあびゅあびゅあびゅあびゅ」

男は量子の膣に無理矢理、力任せで木槍を押し込んでいき、もう太い木槍が半分以上量子の体に突き刺されていた。

「頭、押えとけよ。一気にいくぞ」

他の男が激痛で苦しむ量子の頭を、がっしりと押さえ付けたのを確認し、男は足で思い切り木槍を蹴り込んだ。

「おばぁぁぁーーーーーっ」

量子の口から木槍の先端が顔を出し、なんと量子の子宮まで口から木槍に押し出されて飛び出していた。量子の口から子宮がだらりと垂れ下がる。

「おぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼっ」

白目を剥いて血を吐き出す量子の両手両足に待機していた男たちが、それぞれ量子の手と足の指をニッパーで一本ずつ切断し始める。

バチッバチッバチッバチッ

量子の手足の指は、あっという間に全て切断されると、次に量子の両腕にセットされたギロチンの刃が落ちる。

「ぶびぃぃぃぃーーーーーっ」

量子の両腕が、二の腕から同時に切断される。もう処刑は止まらない。量子に残された時間、生きていられる時間は、あと僅かだ。その残された僅かな時間も量子は苦痛でのたうち回る事になる。

ダダンッ

続いて量子の両足のギロチンの刃が落ち、量子の太ももが切断され

る。とうとう量子は四肢を切断されてしまった。まだ幼い量子が性器から串刺しにされたまま手足を全て切断されてしまう。処刑台の上が量子の血で真っ赤に染まっている。映画やアニメなら、このあたりでギリギリにヒーローが助けに現れるところだが、現実にはそんな者が現れる筈がなかった。そして、ついに股間の回転のこぎりが音を立てて回転を始め、量子の性器に向かって動き始める。

ギュバァーー！！

何の躊躇いもなく量子の性器が串刺しにしている木製の槍ごと切り裂かれ血飛沫が舞う。クリトリスは瞬時に切り裂かれ肉片となって消滅し、尿道と肛門も切断され血に混じって小便と大便も飛び散る。回転のこぎりは量子の性器をどんどん切り裂いていき、膀胱や膣、直腸も切断し、もう恥丘の半分以上切り裂いていた。ここまでくれば、もう量子に助かる道はない。残るギロチンはあと二つ。この二つが落ちれば量子の命は完全に尽きる事になる。が、ギロチンが落ちる前に量子の頭にベンジンが浴びせられ、ライターで点火される。量子の頭は火に包まれた。

「ぶひぃぃぃーーーっ」

量子が叫び声を上げる。凄まじい光景だった。処刑台に拘束され四肢を切断され、性器から股間を真っ二つに切り裂かれている量子の頭が燃やされている。辺りに量子の三つ編みの髪と顔面の皮膚の焼ける嫌な臭いが充満する。容赦がなかった。幼い量子が、これでもかという位、徹底的に痛め付けられ処刑されていく。そして、いよいよ量子の胴体にセットされたギロチンの刃が落ちた。

ズガッ

量子の体が上下二つに切断され、ちょうど回転のこぎりが量子の性器から股間の切断が終了し、量子の上半身と切断された下半身は、さらに左右二つに切断された。

「よし、良いだろう。最後のギロチンを落とせ」

体をバラバラにされ頭も燃やされている哀れな量子に最後のギロチンが落とされる。勢いよく落ちてきたコンクリートブロックは量子の首を簡単に切断し、量子の燃える頭をコンクリートの床に押し潰す。

ぐしゃぁ

量子の頭はぐしゃぐしゃに潰され跡形もなかった。首を切断された量子の体は、しばらくビクンビクンと大きく痙攣していたが、やがて動かなくなり飯嶋量子は完全にこの世から姿を消した。残された量子の体も、何人もの男たちが巨大なハンマーで叩き潰し、どんどん汚い肉片に変わっていく。

・・嫌だ、嫌だぁ。あんな死に方したくない。楽に殺してくださいぃぃ・・

残酷に殺された量子を見て留美子は恐怖で気を失いそうだった。この期に及んで助けてもらえるなんて甘い考えは持てないので、留美子はせめて一発で楽に殺してほしかった。拳銃で頭を撃ち抜かれて殺されれば、どんなに幸せだろうと考えていた。

「よおし、次のガキにいくぞ」

全員の視線が、それまでの量子から留美子に移る。留美子は、嫌ぁ

来ないでと祈りながら号泣していた。

22、飯嶋量子の最後（後書き）

残酷に処刑されてしまった飯嶋量子。せめて死んだあとは安らかに眠れることを願わずにはいられない。そして、今度は留美子にも、魔の手が伸びてゆく。

23、綾辻留美子の処刑（前書き）

量子が残酷に処刑され、次に留美子が処刑されようとしていた。
号泣する留美子は必死に許しを乞うが…

今回もウテルスや菜緒の出番はありません。留美子の凌辱、処刑シーンが多くありますので、苦手な方は気を付けて下さい。

23、綾辻留美子の処刑

23、綾辻留美子の処刑

「おかしいな…。綾辻と飯嶋の書き込みがない…」

安否確認の為、菜緒と同じクラスの皆はウテルスネットに毎日一言でも書き込むように伝えてあり、全員書き込んでくれていたが、真面目な留美子と量子の書き込みがなかった。今まで書き込みを忘れた事がないあの二人が揃って忘れる事など考えられない事だった。

・・何かよくない事が起こったのか？・・

ヴァギナは普通このエリアには入れない筈なので、また人間の仕業かと腰を上げた。人間の方がたちが悪い気がして仕方なかった。

★
★
★
★

同級生の飯嶋量子が残酷に処刑され、留美子は開脚逆さ吊りにされながら処刑されるまでの時間をぶるぶると震えながら待たされていた。処刑の様子を撮影するため、量子の血や大小便、肉片等で汚れた処刑台を綺麗に清掃する為、時間がかかっていた。留美子はその清掃の様子を逆さに吊られながら見ていたが、できればもっともっと時間がかかって永遠に清掃が終わらなければと思ったりもした。しかし、留美子の願いも空しく処刑台の清掃は終了してしまう。

「次の処刑始める前に、このガキ犯して一息つくか」

リーダー格の男の提案に全員が賛成し、留美子の拘束を解き、量子が肛門から串刺しにされた机の上に乗せられ、押さえ付けられる。留美子の腕と指の骨は折られてしまっているので、留美子の足がっしりと押さえ付けられた。男は留美子の股間の間に顔を近づけると、臭そうに顔をしかめ、さらに面倒くさそうに顔を上げる。

「おい、面倒だから媚薬と薬、持って来い」

男は媚薬を留美子の性器にたっぷりと塗り付け、さらにクリトリスに注射針を深く突き刺し覚醒剤を注入する。

「おばばばばばばっ」

覚醒剤を注入された留美子は意味不明な言葉を発し、性器からは愛液が激しく溢れ出す。

「この女、まだガキのくせに実は相当好き者みたいだな。サービスにもう1本、打っとくか」

男はニヤニヤ笑いながら小学生の留美子のクリトリスに、また深く針を突き刺し覚醒剤を注入する。

「おっ！ばぁぁぁぁぁーーーっ！」

留美子の意思と関係なく体がぶるぶる震え、膣からドクドクと愛液が溢れ出す。男は、その留美子の様子を見て下品な笑いを浮かべると、留美子の膣に自分の性器を突き刺す。留美子の処女膜が突き破

られ血が溢れ出すが、構わず男は根本まで突き刺し腰を激しく振る。
そして、小学生の留美子の膣内に射精した。

「さすがにガキだからきついな。口マンコの方が具合いいかもな」

男は、他の男たちに、最後だから犯しまくってやりなと言い、男たちは争うように留美子の膣を口を肛門を犯しまくった。留美子は三つの穴から白い精液を溢れさせ、ぐったりとしていたが、その体が持ち上げられ処刑台に移動させられると狂ったように泣き喚き始めた。

「許して下さい、許して下さい、何でもしますから許して下さい。お願いですぅ、怖いぃぃぃーーっ」

しかし、留美子は量子と同じように大の字に固定される。

「お願いしますぅぅぅ、許してくださいぃぃぃぃ、怖いですぅぅぅっ」

いくら留美子が泣き喚こうと、まるで聞こえないように処刑の準備が進められていく。もう留美子は両腕も両足も体も厳重に拘束され、身動き一つ出来なかった。そして、凶悪なギロチン台が用意され設置されていく。それを見て留美子は、激しくショックを受ける。

「嘘だよぅぅ、そんなのないよぅぅ、こんなの嫌ぁぁぁ、怖いよぅぅ、もう私を許してくださいぃぃーーーっ」

量子の時は、両手両足とも1ヶ所ギロチンをセットされての切断だったが留美子の腕には、手首、肘、肩口と3ヶ所、足にも足首、膝、太ももの付け根の3ヶ所。両手両足だけで12ヶ所ものギロチンが

セットされていた。それだけ留美子の体は小間切れにされる事になる。勿論、腹と首にもギロチン台がセットされる。その留美子の腹部にセットされたギロチン台も3ヶ所だ。そして、留美子の股間には回転のこぎりではなく、直径15センチはある巨大なドリルが置かれ、留美子の性器を狙っている。

「許してくださいぃぃ、私を殺して構いませんから、こんな処刑は許してくださいぃぃ、怖いぃぃぃ、嫌だぁぁぁぁ、助けてぇーーーっ」

涙と鼻水で顔を汚し号泣する留美子の傍らに置かれた木製の槍は、量子が串刺しにされた物と同じ直径6センチある太い槍だった。量子が、この槍で串刺しにされ、口から子宮を吐き出したのを見ていた留美子は、その木製の槍も恐怖以外の何者でもなかった。

・・もう嫌ぁぁーーーっ怖いよぉぉぉーーーっ・・

「びえぇぇぇーーーーっ」

留美子は泣きながら絶叫する。

・・嫌だぁ、嫌だぁ、誰か、助けてよぉぉぉ…　殺されていいから処刑は許してぇぇ・・

こんなの現実ではない。きっと公園のベンチでウトウトしている時の夢なんだ。留美子は無理矢理、現実逃避しようとするが、男の処刑開始の合図で現実に引き戻される。

「よし、準備いいか？　カメラも大丈夫だろうな」

男の言葉に全員が頷いた気配を感じて留美子は凍りつく。心臓だけが、ドクドクと鼓動が早くなる。

「許してくださいぃぃぃ、一生奴隷で構いませんから、助けてくださいぃぃーーーっ」

激しく号泣し、歯の根が合わぬ程震える留美子の顔がアップで撮影される。嫌だぁ許してぇと哀れに泣きながら首を左右に激しく振り、ポニーテールが左右に振れる留美子の恐怖に歪む顔が気に入ったのか、しばらく撮影していた男が、ようやくＯＫの合図を出す。

「よし、始めるぞ。まずは、これだ」

男がカメラの前に直径2センチ長さ1メートルの木製の串と直径5センチ長さ３０センチ程のやはり木製の串を映す。

「何時もはマンコから串刺しにしていくけど、この女は尿道と肛門を拷問してないからな。まずこれで2つの穴を串刺しにしてからマンコを串刺しにする」

男は、まず細い方の串を留美子の尿道口に当てる。

「あわわわわわわっ」

留美子はいよいよ開始される自分の処刑に過呼吸になり、無様に口から泡を噴いていた。

「おいっ、その顔も撮っておけよ」

笑いながら男は言い、留美子の尿道に串を突き刺していく。留美子

の細い尿道は裂け血が溢れだした。

「あびゃゃゃーーーーっ！」

留美子の尿道を切り裂いた串は、何の躊躇いもなく膀胱を串刺しにしていく。そして、男は今度は留美子の肛門に串を突き刺していく。留美子の肛門がビリビリと裂け、肛門からも血が溢れ出す。

「ぶびゃゃゃーーーーっ」

男は留美子の肛門に、楽しそうに串を全て押し込むと木製の槍を手に取った。

「まだ序盤なのに良い声で泣くじゃないか。ようし、槍いくぞ！頭、押さえ付けろ」

槍を膣に突き刺され、今度は留美子の膣がビリビリと裂けていく。留美子の頭の中は、もう何も考えられなかった。次々と襲ってくる痛みに耐える事だけで精一杯だったのである。

「あびゃ、あびゃ、あびゃ、あびゃ」

留美子の膣に木槍を、もう半分まで押し込んだ男は足を振り上げた。

「それじゃ、いくぞ！　頭、しっかり押さえ付けとけ」

男は木槍を足で蹴り、思い切り留美子の性器に突き刺した。そして、そのまま根本まで押し込んでいく。

「おぎょょょーーーーっ」

留美子の口から、量子と同じように子宮が押し出され、ガバァと血塗れで子宮が顔を出し、口の横にだらんと垂れ下がる。留美子は意識を失ったのか白目を剥いて、あばばばっと声を上げるだけだった。しかし、そんな留美子に構う事なく、留美子の両手両足で指が1本ずつ切断されていく。

「おばばばばばばっ」

バチッバチッと切断されていく指の激痛に留美子は意味の分からない悲鳴を無様に上げる。もし尿道や肛門を串刺しにされていなかったら、大小便を漏らしていたのは間違いなかった。無様に指のなくなった両手足に別れを告げるように、手首と足首にセットされたギロチンが4ヶ所同時に落ちる。

「おぎゃゃゃゃーーーーっ」

絶叫する留美子の今度は肘と膝の4ヶ所のギロチンが落ちた。

「ばびゅゅゅーーーーっ」

絶叫する留美子の手足が、だんだんと短くなっていく。そして、股間のドリルが回転し動き始めた。

「おぼぼぼぼぼぼぼぼっ」

意味不明の悲鳴を上げ続ける留美子の性器にドリルが穴を開け始める。血と肉片が飛び散るなか、また4ヶ所のギロチンが落ちた。

ダダーンッ!!

「ぶっひぃぃぃーーーっ！！」

一際、大きな音を残し留美子の手足が付け根から切断される。

「おっびゃゃゃゃーーーっ」

ついに完全に根元から四肢切断された留美子の股間では、巨大なドリルが留美子の股間のクリトリスや小陰唇を引き千切り肉片に変えていく。膣も、ぐちゃぐちゃに抉り取られ飛び散っていった。そして、ドリルは膀胱も膣も直腸も恥骨も腰骨も全てを粉砕し汚い肉片に変えていく。更に卵巣も巻き込まれ破壊された。留美子の大切な下腹部は哀れにも全て肉片に変わり消滅していった。そこへ、腹部の３ヶ所のギロチンが、ついに落ちる。

ダァーン！！

留美子の体はスライスされた様に無様に四つに切断された。

「ごっばぁーーっ、ごびゅ、ごびゅ、ごびゅ」

体が切断され激しく血を吐き出す留美子。もう留美子の体はほとんどバラバラにされていたが、更にチェーンソーを持った男が二人、留美子の左右に立ち、留美子の膨らんだ胸を切り取っていく。まず、乳首。次に乳房。そして、同じく回転のこぎりを持った男が留美子の頭蓋骨をぐるりと切断し、まるで帽子を取るように留美子の頭蓋骨をパカッと取る。留美子の脳が剥き出しになっていた。もはや、留美子は自分が何をされているのかさえ分からなくなっていた。ただ、留美子に残された時間は、ほんの少しであることは誰の目にも明らかだった。そんな留美子の胸部から、まだ微かに動いている心

臓が取り出され五寸釘が当てられる。そして、留美子の頭にベンジンがかけられ、剥き出しの脳にも念入りにベンジンが浴びせられる。もう留美子は死ぬ寸前だが、残った左目にペンチが突き刺され、そのまま眼球を潰された。そして、ついに留美子の頭に火が点けら、留美子の頭が燃え上がる。ベンジンをかけられた留美子の脳が、黒焦げになっていく。留美子は生きるために必要な心臓と脳も徹底的に容赦なく破壊された。

「あびゃびゃびゃびゃっ、あっ、びゅゅーーーーっ」

留美子の最後の言葉だった。留美子の心臓に五寸釘が何本も打ち込まれ、顔面も脳も焼け焦げていた。そこへ完全な止めの最後のギロチンが落ち留美子の首を切断し頭をグシャッと潰す。哀れな留美子は量子より更に酷い処刑を執行され、完全に絶命した。

そこへ、ドアが開き一人の女が入って来た。恐ろしく整った顔に漆黒のセミロングの髪。体にぴったりとフィットした黒い長袖のレオタードに太ももの付け根近くまである黒いサイハイソックスにハイヒール。突き出た胸、細くくびれたウエスト、形の良い尻に、むっちりとした太もも。部屋にいた男たちは、思わず女の姿に見とれていた。

女は、室内を見回し処刑台の上のバラバラにされた留美子の体に眼を止める。女の後ろにいた男が、女に耳打ちする。

「どうやら、間に合わなかった様ですね」

23、綾辻留美子の処刑（後書き）

徹底的に処刑され絶命した留美子。
留美子を救出に現れたと思われる女性は何者なのか？

読んでくださりありがとうございます。
参考にしたいので一言でも感想頂ければ幸いです。
宜しくお願い致します。

２４、混沌（前書き）

留美子を救いに入って来た女に、男たちは戦慄する。そして、パズスは次の一手を打つ。
見知らぬ場所に拉致された少女の運命は？
ウテルスは親子を守る為にヴァギナに立ち向かう。

24、混沌

24、混沌

男たちは、部屋に入って来た女に見とれていたが、ハッと我に帰る。

「なんだ、てめえ」

男が、凄みを込めて怒鳴り付けるが、女はまるで聞こえない様に後ろの男と話している。

「まったく…。これでまたパズスにグチグチ言われるかと思うと憂鬱だわ。いい、私が自慰していて遅れたなんて言うんじゃないわよ。とにかく、あの台の上のメスの体、回収して！」

男が頷き、一人で処刑台に向かって歩いていく。

「それにしても、食べるわけでもなく、体をバラバラにするなんて、何か意味があるのかしら？」

女は不思議そうな顔をしていたが、女の後ろにいるもう一人の男が、お伺いをたてる様に女に恭しく尋ねる。

「ここに居る男どもは、如何なさいますか？　エレシュキガル様」

「性器は私が食べるわ。残りは貴方達が好きにしなさい」

「はい、有り難き幸せ」

男たちは、一人で処刑台に向かって歩いてくる男に向かって拳銃を構える。

「おいおい、何、勝手に歩いてやがる。殺すぞ」

しかし、男は聞こえないように処刑台に向かって歩いていく。男たちは、拳銃を発砲したが、何発もの銃弾を浴びても男は平気で歩いていた。そして、エレシュキガルの背中から伸びた触手が一人の男を捕らえ服を剥ぎ取り全裸にする。男たちの中で一番若いと思われる男は、エレシュキガルの触手で空中に大の字に固定された。エレシュキガルは男の股間を見つめ、妖しく目を光らせると舌なめずりしながら近付いていく。

「ヤバい！こいつら、ヴァギナだ！逃げろっ！」

男たちは、慌てて逃げようとするが、時既に遅しだった。エレシュキガルの部下たちに捕らえられ服を剥ぎ取られ、触手で拘束される。エレシュキガルは自分が捕らえた若い男の前に立つと、男の陰茎をグッと握りしごき始める。そして、大きく勃起した陰茎を口に含むと、根元まで咥えてそのまま鋭い歯で男の陰茎を食い千切った。

「あぎゃーーーっ」

男が絶叫し股間から血が噴き出す。男の体がビクンビクンと痙攣（けいれん）しだした。

「いけない。美味しそうだったから痛めつける前に食べちゃったわ」

エレシュキガルは、口の周りを血で真っ赤にしながら苦笑いする。
そして、もうこいつはいいわねと男の睾丸も千切り取り口に入れる。

「ひぎゃぁぁぁーーーーっ」

男は白目を剥いて、口から泡を噴き出していた。

「あらあら、あなたたち。あの人間のメスに相当酷い事してたようだけど、自分がされるのは嫌なのね」

エレシュキガルは部下に命令し、留美子の体をどかした処刑台に男の一人を拘束する。拘束された男は泣き叫び続けるが、エレシュキガルの部下がカメラに撮影されていた映像をエレシュキガルに見せる。エレシュキガルは、この通りにやってみなさいと命令した。部下の男は木槍を手にすると拘束された男の肛門に突き刺しそのまま押し込んでいく。

「はぎゃーーーっ」

絶叫する男の口から木槍が突き出て、男の指が切断されていく。そして、ギロチンが次々に落ち男の四肢を切断していった。さらに回転のこぎりが男の股間を切り裂く。男の性器が真っ二つに切り裂かれ血が飛び散った。そして、腹部のギロチンが落ち、男の体を両断する。

「んぎゃーーーっ」

エレシュキガルは男の頭に火を点け、最後のギロチンを落とし男の首を切断し潰す。しかし、何が楽しいのか分からなかった。が、エレシュキガルは、ハタと気付いた。

「リリス、来なさい」

エレシュキガルに呼び出されたリリスは、見た目は中学生くらいの女子だった。

「何でございましょう、エレシュキガル様」

「リリス、貴方はなかなか味が解ると認識しています。あの台の上の人間の味をみてくれますか」

「よろしいのですか？私が頂いて」

リリスは処刑台に近付くと、バラバラになった男の性器にかぶり付く。

「これは…！！」

リリスは驚愕の表情でエレシュキガルを振り返り、非常に美味ですと伝える。

「やはり、そうですか」

エレシュキガルは、ニヤリと微笑む。

「前にパズスに聞いた事があります。人間の世界で食材の鮮度を保つ方法に〝活け〆〟というものがあるそうですが、これが、その装置なのでしょう」

「なるほど！！さすが、エレシュキガル様」

リリスが尊敬の眼差しでエレシュキガルを見つめる。

「よし、ここに居る人間全員、この装置で〝活け〆〟にして持ち帰りましょう」

エレシュキガルの言葉に、捕らえられていた男たちから悲鳴が上がる。それからは、この部屋は正に地獄の様相と化した。

★　★　★　★

その頃、パズスはニヌルタと、ニヌルタが代表を務める会社の応接室で会っていた。

「久しぶりじゃあないか。今日はどうしたんだ？」

「お前の部下の中で有能な者を一人くれないか」

「それは構わんが…。どうした？　いつも一人で好き勝手していた君が…」

「これから、僕たちヴァギナと人間が共存していく為に動くつもりだけど、僕一人では手が足りなくてね」

「共存？　」

「ああ、ここで…。僕たちが有利なうちに手を打っておかないと僕たちヴァギナは人間に滅ぼされる」

「まさか、人間に？　そんな理由（わけ）ないだろう？」

「ウテルスという超人が現れた。彼女には僕ら惨神でも敵わないだろうな」

「そんな事があるか！！　僕らは不死だぞ！！」

「不死だろうが関係ない。僕は彼女の恐ろしい技を見た。シナイ契約と言っていたな。上級ヴァギナが、手も足も出ずに消滅していった」

「消滅？　」

「そうだ。殺すのではない、消滅だ！！」

「ふーむ。パズス、君がそこまで言うのなら注意しよう」

ニヌルタは、内線に手を伸ばし一人の女を呼んだ。黒いセミロングの髪に、キリッとした眼。黒いスーツにタイトミニスカート、黒いストッキングに黒いハイヒール。どことなくエレシュキガルに似ている感じであった。

「人間界では、沖田十六夜（いざよい）と云う名で通っている。彼女を渡そう。その代わり情報の共有は頼むぞ」

「ああ、勿論だ。それでは彼女を借りて行こう」

「パズス様、よろしくお願い致します」

頭を下げる十六夜（いざよい）を連れ、パズスは部屋を出ていった。一人残ったニヌルタは、腕を組んで考え込む。パズスがあれだけ危機感を露にするのは珍しい。それだけ事態は切迫しているのか？
ニヌルタはエレシュキガルの番号を鳴らした。

★　★　★　★

美奈子は何処か分からない部屋の中で目を覚ました。調度品が何もない部屋で、さらに窓の一つもない。地下の倉庫という雰囲気だが、何故自分がそんな所に居るのか、まるで想像がつかなかった。それに何か下半身に違和感があった。正確にいえば、自分の性器の奥、子宮だ。寝ている間に何かされたのではと不安になってくるが、特に拘束されている訳でもなく、衣服も乱れている感じではなかった。美奈子は立ち上がり、鉄のドアを開けようとしたが、それはやはり鍵がかけられていた。とにかく落ち着いて何か思いだそう。美奈子は深呼吸して自分を落ち着かせようとした。

★　★　★　★

ウテルスは、幼い兄弟と母親を守り、苦戦していた。ヴァギナは四体、それがウテルスではなく親子を狙ってくる。応援に駆けつけてくれた警察官は四人とも頭をはねられ食べられてしまった。さすがにウテルス一人では、この親子を守りきるのが難しい状況になってきていた。そこへ、ウォーッと声を上げ盾を持った一団が飛び込んで、親子の周りを囲む。

「ウテルス様、この親子は我々が命に代えても守ります」

ヴァギナ対策委員会の面々だった。ウテルスネットでウテルスの窮地を知り、駆けつけて来てくれたようだ。

「ありがとう」

ウテルスは、お礼を言うと力を溜める。ウテルスの拳が赤く輝き始めた。

「レッドセンセイション」

まず、左拳で一体目。そして、続けて右拳で二体目。ウテルスは瞬時に二体のヴァギナを倒して、逃げ出そうとするヴァギナを追いかけると高くジャンプする。

「エレクトリカルハンマー」

逃げようとするヴァギナを脳天から粉砕したウテルスは、残りの一体のヴァギナの前に立ちはだかる。

「観念しなさい」

ウテルスはヴァギナとの間合いに入ると、ヴァギナの急所をがっしりと掴む。

「デストロイクロー」

ヴァギナは急所を切り裂かれ、黄色い体液を撒き散らし崩れ落ちた。

２４、混沌（後書き）

留美子救出に間に合わなかったエレシュキガルだが、処刑台を手に入れほくそ笑む。パズスと十六夜は、どう動くのか？
囚われた美奈子には悲惨な運命しかないと思われた。
そして、ウテルスは委員会との連携を密にしていく事が必要であると思い知った。

25、姉妹の受難（前書き）

十六夜が本格的に動き出します。そして、囚われた美奈子にも動きが…。

暴力シーンが多くありますので気を付けて下さい。

25、姉妹の受難

25、姉妹の受難

十六夜は、ハイヒールの音をコツコツと響かせながら夜道を一人歩いていた。深夜の住宅街は、シーンと静まりかえり十六夜の前後に人影はなかった。十六夜が左手の腕時計を見ると、もうすぐ日付が変わる時間になっていた。

・・今日は、このまま終わりそうね・・

十六夜が息を吐いた時、前方の路地から人影が飛び出すように現れた。黒いスーツを着た体格のいい男が四人。二人が十六夜の前方をふさぐ様に立ち、残りの二人が後ろにまわる。

「お嬢さん、こんな夜中に一人で歩いては危険だ。ヴァギナに襲われるかもしれないぞ」

「ここは特別区域の中ですから、普通、ヴァギナは入れないと思いますが」

十六夜が答えると、男たちはニヤリと笑う。

「そうだな。ヴァギナは居ないかもしれないが、女の夜道の一人歩きは危険だと思うがな」

そう言うと男の一人がいきなり殴りかかってきた。十六夜は男の攻撃をかわすが、後ろにいた男が、十六夜を羽交い絞めにする。そこへ、再び男が殴りかかる。十六夜は羽交い絞めにされたまま、殴りかかってきた男の股間を蹴り上げる。男は悲鳴を上げ地面に転がった。しかし、十六夜が優勢でいられたのはここまでだった。

「この、あまぁ」

男たちが本気になり、二人で十六夜に殴りかかる。しかも、地面に転がった男が十六夜の足を押さえ付ける。身動きできない十六夜の腹に男の拳はめり込む。

「ごがぁっ」

十六夜は、胃液を吐いて苦しむが、そこへさらに顔面に拳が入れられる。

バキャッ

涙と鼻血を流し怯える十六夜の顔面にさらに思い切り拳が入れられる。

「あぎゃぁっ、助けてっ」

悲鳴を上げ、助けを求める十六夜の顔面が容赦なく殴りつけられる。
一発、二発、三発、四発、五発…。

「お願いっ、もう、許してっ」

十六夜が泣きながら男たちに懇願するが、さらに十六夜の顔面が殴

りつけられる。そして、もう一人の男は金属バットで十六夜の体や足を殴り始めた。

「おい、まだ殺すなよ。お楽しみはこれからだ」

「分かってるよ」

金属バットで十六夜を殴っていた男は、バットを置きスタンガンを取り出す。そして、ぐったりしている十六夜のスカートを捲ると腰までずり上げストッキングに包まれた股間に当て電流を流す。

「あびゃぁぁぁーーーーーっ」

十六夜は飛び上がると意識を失い地面に崩れ落ちた。

「よし、運ぶぞ。けっこう、いい女だから金になりそうだな」

「金もそうだが、早く殺したいな」

男たちは、十六夜を大きなスーツケースに詰めるとガラガラと押していき夜の闇の中に消えていった。

男たちが、十六夜を拉致して消えてから、黒いパーカーのフード被った一人の人影が現れた。パーカーのフードを深く被っていて顔は見えないが、その体格から子供のように感じられる。パーカーの男は、男たちが消えた方角に向かって歩き出した。

★　★　★　★

美奈子は、どこか抜け出さる所はないかと部屋中探しまわったが、鍵のかかった鉄製のドア以外何もなかった。唯一、部屋の中央に置かれた赤錆びた机が目につくが、この部屋が何のために使用されているのか皆目見当がつかなかった。

・・嫌な感じ・・

美奈子は、この部屋が醸し出す異様な雰囲気に何かよからぬものを感じていた。すると、カチャッと鍵の開く音がして鉄製のドアが開いていく。美奈子は、咄嗟に机の陰に隠れて様子を窺った。ドアを開けて入ってきたのは一人の男と全裸の女だった。女の方は両腕を後ろ手に拘束され、首輪に付けられた鎖を男の手に握られよたよたと歩いている。その女の顔を見て美奈子は驚愕する。

「桃香お姉ちゃんっ、どうしてっ!!」

思わず美奈子は机の陰から飛び出していた。

「美奈子っ!!」

女の方も、美奈子を見つめ叫び声を上げる。

「お姉ちゃんを放してっ!!」

美奈子は男に向かって斜になり両手を上げ構える。

「美奈子は格闘技の大会で優勝しているんだから、男の人でも怖くないよ」

「おやおや、勇ましいお子様だ。少しお仕置きが必要かな」

男は、鎖を手放すと美奈子に向かって無警戒で歩いて来る。美奈子は男に向かって飛び出すと、さっと腰を落とし、男の足に回転蹴りを浴びせ足を払う。男は、うわっと床に転がった。そこへ美奈子が全体重をのせ男の顔面に肘を落としていく。男は両腕で顔面をガードしたが、美奈子は構わず肘を落とす。

・・いける・・

美奈子は勝利を確信した。いかに大人の男でも美奈子の全体重をのせた肘を顔面に浴びてはただでは済まないだろう。腕のガードなど簡単に破れる筈だった。

「ひぎぃぃぃぃーーーーっ」

しかし、悲鳴を上げ肘を押さえ床を転げ回るのは美奈子だった。

「まったく、やっぱり頭の中身は小学生だな。僕が何の準備もしてないと思ったのか」

男は笑いながら起き上がると袖をまくる。男の腕の服の下には鉄の小手が装着されていた。男は美奈子に近付くと、美奈子の腹に蹴りを入れる。

「おげぇぇーーっ」

美奈子は口から吐しゃ物を巻き散らし転げ回る。

「やめてぇっ、美奈子はまだ小学生なのよ」

桃香が叫ぶが、男は美奈子の髪を掴み顔面を殴りつける。さらに美奈子に馬乗りになってマウントをとると両手で美奈子の顔面を殴り続けた。

「許してぇ、ごめんなさいぃ、もう許してぇぇーーっ」

美奈子が号泣しながら許しを乞うが、男は美奈子を立たせると天井からの鎖に付いた首輪を美奈子の首に嵌め両腕を後ろ手に縛り付ける。そして、抵抗できなくなった美奈子をさらに殴りつけた。

「ふふふ、さあ、これから楽しい見世物だ。お前の姉がどんな目にあうのか良く見ておくんだぞ」

男は、桃香に近付くと体を持ち上げ机の上に乗せる。そして、腕の拘束を解くと四つん這いにさせ、机の上にそのまま動けないように拘束していく。首も正面を向くように固定し、口には口が閉じられないように開口ギャグが装着される。桃香は尻を突き出した格好で動けないよう厳重に拘束された。

「やめてぇ、お姉ちゃんを許してくださいっ」

美奈子が、机の上に固定された桃香を見て叫び続ける。

「ふむ。もっと痛めつけて二度と逆らえないようにするか」

男は、固定した桃香はそのままに美奈子の方に戻ると思い切り腹を殴りつけた。

「おびゅぅっ!!」

美奈子の体が浮き上がるほどの打撃だった。

「ごびゅごびゅごびゅ」

涙と胃液を吐き美奈子は、もだえ苦しむ。

「足を大きく開け」

男の命令に美奈子は泣きながら大きく足を開く。男は美奈子の開いた足の中心に思い切り蹴りを入れる。それも足の甲ではなく爪先でだ。

「ぎゃびぃぃーーっ」

美奈子は性器を痛打され失禁していた。男は苦笑すると美奈子の服をカッターで切り裂いていき全裸にした。そして、さらに美奈子の性器に蹴りを入れ、美奈子が逆らう気をおこさないよう徹底的に痛めつける。

「どうだ、大人しく姉さんがどんな目にあうか見ている気になったか?」

「……は、はい」

美奈子の返事に男は満足そうに頷いた。そして、男は机を回転させ、美奈子と桃香の顔がお互いよく見えるように調節する。二人の姉妹は、これから自分たちに降りかかる災難に震えながらお互いの目を見つめていた。

「さあ、お別れは済んだかな」

男の言葉に二人は、ビクッと体を震わせる。

・・お別れって何?・・・

美奈子は、その言葉に不吉な意味を感じ取り、桃香の顔を絶対に忘れないよう見つめ続けた。

・・お姉ちゃん・・

涙と鼻水を流し、開いたままの口からは涎を垂れ流している。美奈子は、こんな怯えた表情の姉を見たのは初めてだった。

25、姉妹の受難（後書き）

拉致された十六夜。その後に現れた男は…？
美奈子と桃香の姉妹の運命は？

感想頂ければ幸いです。よろしくお願いします。

26、十六夜の失敗（前書き）

拉致されてしまった十六夜に対する拷問が開始されます。
パズスの狙いは何なのか？

今回、ウテルスは登場しません。最近、影が薄いですがよろしくお願いします。

26、十六夜の失敗

26、十六夜の失敗

数日前、エレシュキガルは自室のソファに腰を下ろし、パズスの小言を聞いていた。

「エレシュキガルともあろう者が、人間一人も救出出来ないとは情けない。暇すぎて衰えたんじゃないか」

「まあ随分な言われようだけど、救出出来なかったのは事実だから仕方ないわね。それにしても、何故人間の女のガキなんかにこだわるの？」

「彼女は、僕の協力者になってもらう予定の人間だった。残念だよ。もう一人、居たと思うが彼女も殺されてしまったのか？」

エレシュキガルは黙ってパズスにデジタルカメラを渡した。

「もう一人は、もう何も残ってなかったわ」

パズスはカメラに残された量子と留美子の惨殺される動画を見て怒りを露わにするが、なんとか自分で気を落ち着かせる。そして、俯いて小さな声で呟く。

「ごめんな、二人とも…　怖かったろ、苦しかったろ。僕がこんな

世界終わらせてやる」

エレシュキガルは、そんなパズスを不思議そうに眺め、隣のリリスに、あなたはどう思うと訊いた。

「私には惨神の皆様の深いお考えは分かりません」

リリスが小声で答えた時、パズスが顔を上げて二人を見つめた。その目を見たリリスは白目を剥いて口から泡を吹き失禁し、気を失っていた。同格であるエレシュキガルでさえ、そのパズスの凄まじい気に押されていた。

「協力してもらうぞ、エレシュキガル。僕は、この世界を変える」

★
★
★
★

スーツケースに詰められて運ばれてきた十六夜は、とあるビルの地下の一室でスーツケースから出される。辺りを見回すと十六夜を襲った男たちの他に、さらに数人の男が加わっていた。部屋はコンクリートの打ちっ放しの殺風景な部屋で、何か良からぬ事に使用されている雰囲気が濃厚だった。

「気が付いたようだな、姉ちゃん」

男の一人が、辺りを見回している十六夜に気付き髪の毛を掴み立ち上がらせる。

「なるほど、いい女だ。これは金になりそうだな」

男は下品な笑いを浮かべると、十六夜の顔面を殴りつけた。

「あうぅぅっ」

床に転がった十六夜を、他の男が蹴り上げる。

「おごぅぅっ」

腹を押さえてのたうち回る十六夜の足を二人の男が持ち、ぐいっと足を拡げる。十六夜のスカートがずり上がり股間が露わになる。その股間の中心、十六夜の性器に男が革靴の硬い爪先で蹴りを入れた。

「ぶぎゃぁぁぁーーっ」

十六夜は絶叫し、小便を漏らして失神してしまった。

「ふはは、ションベン漏らして気絶しちまったぜ。ちゃんと録画してたか？」

「もちろん、オーケーですよ。漏らしている股間も、悲鳴を上げて失神するところもバッチリです」

男たちは、気絶している十六夜の衣服を脱がしにかかり全裸にする。そして、大きく頑丈な作業机の上に乗せると、仰向けにし大の字に固定する。そして、直径５センチ、長さ３０センチの鉄製の杭を十六夜のきれいな恥丘に、その尖った先端を当てる。

「よし、そろそろ目を覚まさせろ。いい悲鳴を上げてくれないと困るからな」

男は十六夜の顔に冷たい水をぶちかける。十六夜が、ぷはっと目を覚まし自分の恥丘に当てられている太い杭に目を見開く。

・・まさか、私の恥丘にあれ打ち込むつもりなの？　この人たち、人間とは思えない・・

案の定、十六夜が思った通り男が声を上げる。

「よーし、この女の恥丘に打ち込み開始だ」

男の合図で、巨大なハンマーが打ち下ろされる。十六夜の恥骨が簡単に砕け血飛沫があがる。ハンマーを持った男は、がんがんと十六夜の恥丘に太い杭を打ち込んでいく。杭が恥丘に打ち込まれ度に、ブシュと血飛沫があがる。

「ひぎゃぁぁぁーーーっ」

悲痛な叫び声を上げる十六夜の姿を何台ものカメラが撮影していた。もう十六夜の恥丘には杭が根元近くまで打ち込まれている。十六夜は、ぶりぶりと大便まで漏らしていた。

「いいねぇ、この女。ウンコまで漏らして最高だな」

男たちは、十六夜の無様な姿に爆笑する。

「ひぐっひぐっひぐっひぐっひぐっ…」

恥丘に太い杭を打ち込まれ大便まで漏らし号泣する十六夜に、さらに苦痛を与えるため電動工具のサンダーが用意される。十六夜は見

慣れない器具に、これでいったい何をされるのか分からず戸惑っていたようだか、それはすぐに判明する。十六夜の乳首に媚薬が塗られ無理矢理勃起させられるとサンダーの電源が入れられ、十六夜の乳房がギュッと押さえ付けられた。そして、サンダーがツンと天を向く十六夜の乳首に押し当てられる。

「ひぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぁぁぁーーーっ」

2台のサンダーで十六夜の左右の乳首が、同時に削り取られていく。乳首が全て削られ無くなってしまっても乳輪まで削られてしまった。

「ひばゃゃゃーーーーっ」

絶叫する十六夜の姿に大爆笑しながら男たちは、今度は電動釘打ち機を用意し十六夜の性器、まずはクリトリスに狙いをつける。

「まずはクリトリスだ。それから小陰唇拡げて大陰唇に釘付けだな。会陰や肛門にも釘打ち付けてやるよ」

男は笑いながらスイッチを押す。

ドスッ!!

「ぶびゃゃゃーーーーーっ」

十六夜のクリトリスに釘が深く打ち込まれた。そして、続けて男はスイッチを押す。

ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ

十六夜の小陰唇が大陰唇に釘で固定され、性器の中身が丸見えになる。男は丸見えになった十六夜の性器の中身に喜々として釘を打ち付けていた。

「ちょっと、あなたたち。その女は普通じゃない極度の変態だから、そんな事じゃ喜ばないわよ」

突然の女の声に男たちは、ぎょっとしてドアを振り向くと黒いミニスカートのスーツにストッキング、ハイヒールと十六夜と同じ格好の女が立っていた。女は、部屋の隅にあった巨大な鉈を軽々と片手で持つと、コツコツとハイヒールの音を響かせて歩いて来る。

「この鉈、少し借りるわね」

黒スーツの女は、男たちが呆然と見守る中、悠々と十六夜に近付き、鉈を振り下ろす。

「ぎひゃぁぁぁーーーーーっ」

十六夜の右腕が肩口から切断された。続いて左腕も切断してしまう。

「どお、これで少しは気持ちよくなった?」

黒スーツの女が十六夜に話しかける。

「新月、貴方の顔見たら、全然ダメ。もういいわ」

普通に会話する二人の女を見て、不審に思った何人かの男が、そっと部屋を抜け出していた。この抜け出した男たちの判断は正しかっ

たと云える。

「新月、貴方、来るの早すぎない？」

「ふん。あんた、ここで始末されるみたいだから、ここから先は辿れないわよ。残念ね」

「私はパズス様に大元を潰せと言われているの。こんな末端では終われないわ」

「そのパズス様が、迎えにいってくれと言われたのよ」

「パズス様が…　嘘よ。パズス様は平気で嘘をつきますから…。あの方は惨神一の嘘つきだとニヌルタ様がおっしゃっていました。それに、パズス様はあの体ですから人間の女には相手にされないようで私の事をエロい目で見たりしますから…」

「ちょっと、十六夜…」

新月が指さす方を見ると、黒いパーカーのフードを被ったパズスが苦笑いしながら立っていた。

「ひぇぇぇーーっパズス様。大変失礼を致しました。どうか、この罰に私を食べてください」

十六夜は、男たちに暴力を振るわれたり拷問されていた時よりも遥かに動揺し泣き出していた。

「僕の目ってエロいかな？　まあいいや、早くここ片付けて帰るぞ、十六夜」

「はいっ」

十六夜と新月が同時に返事をすると唇を合わせる。ここでようやく男たちが、不審な女と小学生くらいの男子に向かって銃を構える。その男たちの見ている前で、唇を合わせていた十六夜と新月が融合していく。二人は本体の十六夜が分裂して二人になっていた為、融合したことで十六夜の本来の力を取り戻す。男たちは十六夜に向け銃を撃ち続けるが、弾丸が十六夜に到達するより早く、十六夜が男たちの銃を持った腕を切断していった。

ダァーン

弾丸がコンクリートの壁に着弾する頃には、男たちは全員腕を切断され床に横たわっていた。

「あなたたちは食材として確保しますね」

十六夜は触手を伸ばし倒れている男たちに体液を注入した。

26、十六夜の失敗（後書き）

金の為に拷問動画を撮影するグループの1つを壊滅させた十六夜だったが、指示を出している黒幕までは辿り着けなかった。
パズスは新たな作戦を考えていく。

27、惨殺される桃香（前書き）

捕らえられた桃香と美奈子、小中学生姉妹のお話です。今回は桃香メインで、お話は進んでいきます。
桃香の拷問処刑シーンばかりなので、気を付けて読んで下さい。

27、惨殺される桃香

27、惨殺される桃香

恐怖で歪んだ姉の桃香の顔が美奈子の目の前にある。見開いた目からは大粒の涙を零し、鼻からも鼻水を流し、開口ギャグを装着され大きく開いたままの口からは大量の涎を垂れ流している。桃香は四つん這いで尻を突き出した格好で拘束され、顔も正面を向いたまま動かせないよう固定されていた。

「さあ始めますよ。お二人とも覚悟はいいですね」

男は桃香が固定された回転机をくるくる回し、美奈子に姉の桃香が完全に拘束され動けない様子を確認させる。そして、また二人が顔を合わせる位置で回転を止めた。

「最後に何か言う事があったら、今のうちに言ってあげてください。お姉さんはこれから大変な目に合うのでね」

「お姉ちゃん。大丈夫だから、私、一緒にいるからね」

桃香は美奈子の言葉に微笑んだようだった。美奈子も微笑み返す。

「そうですね。あなたも見ているだけでは退屈でしょうから、少し飾り付けておきましょうか」

男は美奈子に、舌を出しなさいと命令し美奈子の舌を摘まむと釣り針のように曲がった針を突き通した。針には錘が取り付けてあり美奈子の舌がだらんと垂れ下がる。男はさらに美奈子の舌の両側にも針を突き通し美奈子は舌に3つも錘を付けられ涙を流しながら耐えている。次に美奈子の膨らみかけた胸の先でツンと上を向く桜色の乳首にも錘が付けられる。一つの乳首に釣り針が三本突き通され錘が三つぶら下げられた。そして、性器にもクリトリスに3つ、小陰唇に左右3つずつ、肛門の括約筋にも4つの釣り針が突き通され錘が下げられた。美奈子は苦痛で涙を流していたが、男が桃香の背後にまわって手にした物を見た時、自分の苦痛よりこれから受ける姉の桃香の苦痛の方がはるかに上だと認識し顔が硬直する。その美奈子の顔を見た桃香も、これから自分が受ける苦痛がとんでもないものだと理解し同じように顔が硬直する。

「では肛門からいきますね」

男は手に持った日本刀の切っ先を桃香の肛門に当てる。そして、少しずつ日本刀を突き入れていく。

「ほごっ」

最初は切り裂かれていく肛門の激痛だった。それが、だんだんと体の中に入り耐え難いものになってくる。

「ほごぉぉぉーーーっ」

桃香の悲鳴が大きくなってくる。もう日本刀は桃香の体を半分近く貫いていた。

「ほごぉぉっ、ほごぉぉっ、ほごぉぉぉーーーーっ！！！！」

まさに獣のような絶叫だった。美奈子は苦痛に歪む姉の桃香の顔を目の前で見て、自分の苦痛など感じなくなっていた。

「ほごぉぉぉおげぇぇぇーーーーーーーっ」

一際大きな絶叫とともに桃香の開口された口から日本刀の切っ先が飛び出した。日本刀を桃香の肛門から鍔まで突き刺した男は、美奈子の前にやってくる。

「今度はこの器具で、お姉さんの性器を破壊します。もうお姉さんは串刺しにされた激痛で何も聞こえないでしょうから、あなたに説明しておきますね」

男は楽しそうに手に持った洋梨のような器具を撫でまわす。

「これをお姉さんの膣に入れてこのネジを回します。ほら、するとこの丸い部分が開いて膣を裂いてくれるんですよ。さらに開いた中から出た爪が子宮頚部に食い込み、さらに子宮口から中に入った鉤爪が子宮内部にしっかりと食い込みます。そして、この器具を引き抜くと子宮も一緒に取り出してくれるのですよ」

男は笑いながら桃香の後ろにまわり、桃香の性器に器具の先端を当て、桃香の膣に押し込んでいく。この時点で桃香の膣は裂け始めていた。

「ほぎゃぁぁぁーーーーっ」

さらに激しくなる桃香の絶叫に、美奈子はもう見ていられなかった。

「あなたが見ないならお姉さんをもっと痛い目にあう事になりますよ」

男は膣を裂かれている桃香の、肛門から串刺しにしている日本刀の柄を握りグリグリと回転させる。

「ぎゃびぃぃぃぃぃーーーーーーーーっ」

桃香は体の中を抉られ断末魔の悲鳴のような絶叫を響かせ、げぼぉと血を吐き出す。美奈子は首を左右に振り、見ますからもうやめてと必死に男に訴えた。男は、またニヤリと笑うと桃香の性器破壊に集中する。もう器具は桃香の膣に、すっぽりと入ってしまった。そして、男は器具に付いたネジを回し始める。すでに裂けている膣が、さらに大きく裂けていく。

「ぶぼぉぉぉーーーーっ」

肛門から串刺しにされながら、膣も裂かれる桃香は、大量の涙と鼻水を流し、もう人間ではなく獣のように咆哮する。

器具のネジを最大まで回した男は机を回転させ、美奈子に桃香の性器と肛門が見える様に位置をかえる。美奈子は桃香の凄惨な性器と肛門を見て激しく泣き出した。肛門は切り裂かれ血を流し、膣は３０センチまで拡げられ会陰部は裂け肛門とつながってしまい、膣の奥の子宮が丸見えになっている。その子宮に何本もの爪が突き刺さり、中心の子宮口にも太い串状の物が突き刺さっていた。

「さあ、それでは子宮を引き摺り出しますね」

男は拡げたままの器具を、力任せに引き摺り出す。それにつれて桃香の子宮も引き摺り出されてきた。

「おびょうぅ、おびょうぅ、おびょぉぉぉぉーーーっ！！」

桃香の顔がさらに苦痛で歪む。そして、最後に器具が桃香の性器からずるりと抜けた。

「おびゃゃあぁぁぁーーーーっ！！！」

器具には桃香の子宮がだらりと抜き出されていた。男は、取り出した子宮を丁寧に置くと、桃香の手足の拘束を解き始めた。

「拘束を解きますが、動かない方が良いですよ。串刺しにされたまま動いたら大変な事になりますから」

男は、桃香を拘束固定していた器具も含めて全て外した。そして、なんと鞭を手にしている。

「１０００回くらい打ちますか。どこまで耐えられますかね」

楽しそうに男は、桃香の体に鞭を叩き込んだ。

ビシィ、ビシィ、ビシィ、ビシィ、ビシィ、ビシィ…

鋭い鞭の打撃音が響き渡り、桃香の体にどんどんミミズ腫れが出来てくる。それでも桃香は、四つん這いのまま姿勢を崩さずに耐えていた。

「凄いですね。ここまで耐えたメスはいませんでしたよ。串刺しにされて、膣も裂かれ子宮も抜き取られてしまっているのに」

驚嘆した表情を見せる男だったが、それで桃香を許す筈がなく。さらに激しく鞭を叩き込んでいく。

ビシィビシィビシィビシィビシィビシィビシィビシィビシィビシィ…

桃香の全身に鞭が叩き込まれる。それは、日本刀が突き出る顔面や股間も例外ではなかった。むしろ、その部分を集中的に打っている様に美奈子には感じられた。

・・お姉ちゃん……、頑張って……・・

全身真っ赤に腫れ上がりながら必死に耐えている桃香の姿に、美奈子は涙が止まらなかった。

「これは凄い!!　１０００回耐えたのは貴女が初めてですよ!!　今まで皆さん、この地獄の苦痛から早く楽になろうと自分で体勢崩して真っ二つなっていくんですがこれは凄い。生きようとする執念が素晴らしい。これは是非、御褒美を差し上げないといけませんね」

男は心底敬服したという表情をする。

「あふっあふっあふっあふっ」

耐え抜いたとはいえ桃香は息も絶え絶えで今にも崩れ落ちそうだった。

・・もう、早くお姉ちゃんを楽にしてあげて…・・

美奈子が祈るが、男が手にした物を見て絶句する。

「いやあ、貴女は素晴らしい。御褒美にもう一振り突き刺して串刺しにしてあげます」

男は桃香の子宮を抜き取られた性器に日本刀の切っ先を合わせる。

・・やめてぇ、そんな事されたら、本当にもうお姉ちゃんは……・・

しかし、男は容赦なく桃香の性器に日本刀を突き入れていく。

「おびゃ、おびゃ、おびゃ、おびゃ」

桃香の手足が、ガクガクと震える。ここまで耐え頑張ってきた桃香の命も燃え尽きる寸前だった。

「おっびゃぁぁぁーーーーっ!!!」

ついに二本目の切っ先が桃香の口から飛び出した。ごはぁっと血も溢れ出る。そして、桃香の手足が力なく広がっていった。

「おっと、危ない。そのまま姿勢を崩したら体が真っ二つに裂けますよ」

男が桃香の体を支え、頭は机から出したまま仰向けに寝かせる。そして、今度は桃香の体を大の字に拘束した。

「さあて、次にいきますよ。まだまだ苦しんで下さいね」

・・まだ何かするの？　もうお姉ちゃんを苦しめないで・・

美奈子の願いも空しく男はカッターを持ち、桃香の二つの乳首を切り取っていく。桃香はもう悲鳴を上げる力もないのか体をビクンビクンと震わせるだけだった。

「当然、ここも要りませんね」

男は桃香の左右の小陰唇も切り取り、クリトリスも根本から切り取った。そして、恥丘にもカッターを当てると恥骨に沿って三角形に切り皮膚を剥ぎ取り恥骨を取り出す。

「ほうら、お姉さんの恥骨ですよ。これにこれを載せて、ほら、恥骨盛りの出来上がりです。なかなか素晴らしい。これなら、ニヌルタ様も喜んで下さるでしょう」

桃香の恥骨の上に切り取った小陰唇やクリトリスを並べる男の姿に、美奈子は恐怖で止めようもなく体が震え声も出せなくなっていた。

「さてと、もう一本いきますか。せっかく股間に3つの穴がありますからね」

男は、もう一振りの日本刀を持つ。そして、破壊された桃香の性器にまた狙いをつける。

「今度は尿道から膀胱を突き刺して串刺しにしますよ」

・・もう、やめてぇ！もう、お姉ちゃんを苦しめないで殺してあげて・・

震える美奈子が見つめるなか男は、桃香の性器の上部、尿道口に日本刀を突き刺していく。

「おびゅおびゅおびゅ…」

もう叫ぶ力がない桃香は小さく声を出し白目を剥いたまま尿道から体を貫かれていく。

「ごばぁぁぁっ」

激しい吐血と共に三振り目の日本刀の切っ先が桃香の口から飛び出した。

「あびゃびゃびゃびゃびゃびゃびゃびゃ…」

口から血の泡を噴き出し惨めに震える桃香の体を机を回転させ美奈子によく見せる。そして、尿道から突き出る日本刀の柄を握った男は、そのまま一気に桃香の体を切り裂いた。桃香は股間から喉まで、ズバッと一直線に切り裂かれ血が大量に溢れ出す。男はさらに膣と肛門に突き刺さっている二振りの日本刀の柄をそれぞれ両手で握り、また桃香の体を切り裂いた。その後、桃香の手足を切断していく。

そして、最後に桃香の首を切り落とした。

桃香は、ようやく苦痛から逃れる事が出来た。

27、惨殺される桃香（後書き）

処刑され絶命した桃香。残された美奈子はどうなるのか？
このままでは、残酷な運命しか残っていないが…。

感想、又は〝いいね〟でお願いします。その傾向で進む方向を決めていきたいと思います。宜しくお願い致します。

28、裏切り（前書き）

惨殺された姉の桃香の次に、当然のように美奈子に魔の手が伸びてくる。
拘束されて泣き叫ぶ美奈子の運命は？

28、裏切り

28、裏切り

男は、バラバラにした桃香の体を盛り付けるように飾っていく。そして、最後に桃香の頭を、ポンと置いた。

「それでは、ニヌルタ様の所へお願いします」

男は、桃香の体を運ばせると美奈子に向かって歩いてくる。

・・嫌ぁ、来ないでぇ・・

美奈子は必死に祈るが、男は美奈子の前に立つと涙を流す美奈子の顔を見つめる。

「さあて、お姉さんの次は貴女の番ですよ」

・・あああああああああああっ・・

美奈子は恐怖で声も出せず体も動かせなくなっていた。男は美奈子の突き刺さる釣り針だけ残し重りがぶら下がる糸を切断していく。そして、美奈子の拘束を解き、そのまま軽々と持ち上げると、姉の桃香を解体した机の上に乗せる。桃香の血は流されていたが、桃香が惨殺されるその一部始終を見ていた美奈子は体が震えて、机に乗せられたまま動けずにいた。

・・嫌だぁ誰か助けてぇ・・

美奈子は、四つん這いにされカチャカチャと厳重に拘束されていく。そして、顔は正面を向いたまま固定され、口には開口ギャグが装着され大きく口を開けたまま固定された。美奈子は四つん這いで尻を突き出した姿勢で正面を向き口を大きく開いたまま完全に固定されてしまった。美奈子は、自分の姉の桃香がこの机の上で固定された後、どんな目にあい惨殺されていったかを思い出し泣き出していた。もう自分も同じ運命を辿る。それは、逃れようのない間違いない事実だと認識し、せめて殺してから、あの残虐な行為を行って欲しかった。

「貴女にはお姉さん以上に苦しんでもらいますよ。これから、何されるか分かりますよね」

ぶりぶりぶり

美奈子は恐怖で大便を漏らし始めた。固定されて体は動かせないが、近くで見ると細かく体がぶるぶると震えている。

「じゃあ、お姉さんと同じに肛門から串刺しにしますね。せっかくだから、二本一遍に肛門に突き刺しますかね」

男の言葉に美奈子は号泣しだす。男は美奈子の大便を垂れ流す肛門に日本刀の切っ先を軽く当てる。美奈子は、ビクッと体を震わせ、さらに大きく号泣する。

「さーて、いきますよ。覚悟してください

男は、号泣する美奈子の肛門に二本の日本刀を突き刺していく。美奈子の肛門が裂け血が溢れ出した。

「ぶごぉぉぉーーーーーっ」

涙と鼻水を溢れさせ悲鳴を上げる美奈子の肛門に、男は日本刀をドンドン突き刺していく。

「ぶごぉぶごぉぶごぉぶごぉ」

涙を流し苦しむ美奈子の肛門に男は楽しそうに日本刀を突き刺す。それも一度に二本の日本刀を、わざとゆっくり刺していく。

「どうです。痛いでしょう。苦しいでしょう。もうすぐ、口から日本刀の切っ先が突き出ますよ」

「ぼごぉぼごぉぼごぉぼごぉぉぉーーーーっ」

激痛で大きく見開いた目から大量の涙を流す美奈子の、開口ギャグで強制的に開かされている口から2本の日本刀の切っ先が飛び出した。

「ぼごぉぉぉぉーーーーっ」

血を吐いて白目を剥く美奈子に容赦なく男は桃香の子宮を抜き取った器具を、美奈子にも挿入し始める。

「貴女の子宮には前もってある調味料を注入してあるのですよ。少し違和感があったと思いますが、そろそろちょうど頃合いの筈です。狙い通り良い味になっていると良いのですか」

男は、そう言いながら美奈子の膣に器具をねじり込む。美奈子の小さな膣が、ビリビリと裂けてゆく。

「あぼぉ、あぼぉ、あぼぉ、あぼぉ」

肛門から串刺しにされ、膣を裂かれる激痛に美奈子は、もう気が狂いそうだった。

・・お姉ちゃん、私はもう駄目だよ。助けてぇぇ・・

美奈子の子宮を抜き取る為のネジが回されてゆく。巨大な器具を挿入され、すでに裂けている美奈子の膣が、さらに裂かれてゆく。美奈子は耐える事が出来ない激痛に、言葉にならない悲鳴を無様に上げ続けている。と、そこへ何人かの男が現れ美奈子の顔を覗き込む。美奈子は子宮抜き取りが開始され、更なる激痛の為に、目の前の男の姿さえ認識出来なかった。

「ひゃばばばばばばぁぁーーーーっ」

悲鳴を上げ続ける美奈子の子宮が膣口から顔を出し、それはどんどん膣から抜き出されていく。そして、とうとうズルリと美奈子の子宮は無惨にも抜き取られてしまった。

「はぎゃ、はぎゃ、はぎゃ、はぎゃ、はぎゃ」

激痛と絶望で号泣する美奈子の前にいた男たちが、美奈子の子宮を抜き取った男に声をかける。そして、男たちは何か話していたが、困ったような顔になり部屋を出ていった。

美奈子は串刺しにされ、体を固定されたまま放置された。

★　★　★　★

黒いセーラー服を着た少女が歩いていた。メガネに三つ編みの黒い髪の真面目そうな少女である。中学生くらいの少女は学生鞄を持ち、真っ直ぐ前を向いて歩いている。まるで、自分の前途には何も障害物がないように…。

少女が歩いている歩道の横を広い道路が走っていた。その道路を走っていた白いセダンがウインカーを点滅させると歩道に寄って停車した。そして、助手席のドアが開き、小学生くらいの女の子が降りてきた。

「お姉さん、急いでるとこ、ご免なさい。道、教えてもらいたいんだけど」

歩いていた少女は、突然声をかけられて驚いた様子だったが、声をかけてきたのが小学生の女の子なので、にっこりと微笑む。

「良いわよ、どこに行くの?」

女の子は嬉しそうに少女を見つめ、ありがとうとお礼を言う。

「あのね、ニヌルタ商事ってゆうの」

少女は、その会社の名前を知っていた。

・・何してる会社か分からないけど、あの公園の近くの大きなビルだよね・・

少女は、その会社の場所はすぐ分かったが、そこまでの道のりを説明するのが悩んだ。細い路地や一方通行があり、なかなか複雑な場所だった。少女が困っていると女の子がだめ押しするように言う。

「お姉さん、分かり辛かったら車に乗って教えてくれない。お父さん、急いでるんだ。お願いします」

女の子に乞われて少女は、仕方ないなと云うように、白いセダンの後部座席に乗り込んだ。ちょっと無用心かなと思ったが、こんな女の子も一緒だからと不安を押し潰す。

・・困っている人は助けてあげないとね・・

少女は後部座席から、右、左と指示を出していくが、何か違和感を感じていた。自分が指示を出す前に車は、そちらの方向に進んでいるような気がするのだ。まるで道を知っているように……。

「そこの角を左に曲がって、左側の大きなビルです」

また、少女が言うより早く車のウインカーが点いた気がした。

「お姉さん、ありがとー。お名前、教えてくれる？　私は、美奈子」

「美奈子ちゃんね。私は、ゆかり」

ゆかりが美奈子と話しているうちに車は、ビルの地下駐車場へ入ってゆく。初めからここが目的地だったように、何の迷いもなく。ゆかりが不審に思った時には、もう遅かった。車は地下駐車場の一番奥に止まり、止まった車の周りを数人の男が取り囲んだ。そして、

ゆかりは無理矢理、車から降ろされ拘束される。車から降りてきた美奈子はゆかりを見つめ、お姉さん、ごめんねと呟いた。

「やめてぇ、助けてぇぇ」

ゆかりは、泣き叫び必死に抵抗するが逃げ出す事は出来ず、運ばれてきた車輪付きのポールに逆さに吊るされてしまう。ゆかりのセーラー服のスカートが捲れ、白い下着が丸見えになった。その、ゆかりの股間に針が突き刺され、針に今日の日付と今の時間を書いたプレートがぶら下げられる。そして、美奈子に男が近付いて来ると、ニヤリと笑う。

「この調子です。今日中に、あと二体のメスの確保お願いしますね」

男たちは、がらがらとポールから逆さ吊りにされたゆかりを運んで行った。

28、裏切り（後書き）

九死に一生を得た美奈子だったが、それは人間を裏切り、ヴァギナの為に食材を用意する事に従事する恐ろしい仕事だった。美奈子は、生き延びる事は出来たが、その心はどんどんと壊れていく。

29、広がる悪意

29、広がる悪意

美奈子は、白いセダンの助手席で歩道を歩く女性たちを物色していた。十代の女性を拉致するように指示されているため、その年代の女子を探していたが、このところ幼い女子が行方不明になる事件が頻発しており、外を歩く小中学生の数がかなり少なくなってきていた。美奈子が聞いた話では、自分たち以外にも女子を狙うグループがあるようで、それはどうやら人間らしいと云う事であった。

・・なんで、同じ人間なのに、そんな事するの？・・

美奈子には理解できなかった。こんな時に人間同士でそんな事しないで、私を助けて欲しいと思ったが、人間を裏切った自分には、もう助けてもらう資格などないと自嘲する。その時、窓の外に赤いランドセルを背負って歩いている一人の女子小学生が目に入った。高校生以上になると警戒心が強くなり拉致するのが大変だが、小中学生だと狙い目だ。美奈子は、歩いている女子小学生を指差して車を停めるように伝える。運転していた男は心得たように車を歩道の脇にスッと停める。

「ごめんなさい。ちょっと、いい」

助手席から降りた美奈子は慣れたように赤いランドセルの女子に声をかける。赤いランドセルの女子は、美奈子の顔と車の運転手の顔

を見る。美奈子は、どこかで見たような顔だと思いながらランドセルの女子に話し掛けようとした。

「おもしろい組み合わせ」

先にランドセルの女子が口を開く。

「人間とヴァギナが一緒にいるなんて…。ねえねえ、どういう関係なの？　親子じゃないよね」

「えっ」

美奈子は、自分の鼓動が早くなるのを感じた。

・・何?、どうして?・・

美奈子は改めて目の前の女子を見つめる。そして、気が付く。

「ま、まさか、ウテルス様?」

「今はウテルスじゃなくて、姫川菜緒。菜緒でいいよ」

美奈子は激しく動揺していた。自分が人間を裏切っている事がウテルスに分かったら…。美奈子は早くこの場を立ち去ろうとしたが、菜緒が、何の用?と訊いてくる。そこへ、美奈子が手間取っているとみた運転手の男が、菜緒を無理やり攫おうと近付いてきた。

「あっ、叔父さん、大丈夫だよ。今、行くから」

美奈子は慌てて男に駆け寄る。

「叔父さん、なんだ。叔父さん、ヴァギナだよね。私、前に人に擬態しているヴァギナに会ったことあるから分かるんだよ」

「叔父さん、私、このウテルス様にサイン貰ったら、すぐ行くから車で待ってて」

「サ、サイン？」

菜緒が照れて赤くなっているうちに美奈子は男を車に押し込む。

・・ウテルス？　あの少女が？・・

菜緒が照れながら書いたサインを持ち美奈子が助手席に乗り込んできた。

「早く、車出してください」

走り出した車の中で男が美奈子に問う。

「本当にあの少女がウテルスなのか？」

「そうです。間違いありません」

「ウテルスが何故、私の事を見逃したのだ？」

「ウテルス様は、人間を襲っているヴァギナ以外には戦いは仕掛けないそうです。以前、本に載っていました」

美奈子たちが乗った車が走り去ってから、菜緒はしまったと慌てた。

・・どうしよう、サインのスペル間違っちゃったよ・・

「ごめんなさーい」

菜緒は、走り去った車に向って頭を下げた。

★　★　★　★

中学生の真理は、自分がこれから酷い目にあうと認識していた。全裸にされ両手を頭上で縛り付けられいる真理の周りを大勢の人が椅子に座り寛ぎながら談笑している。明らかに普通ではない雰囲気に真理は、ぶるぶると震えていた。

「それでは、商品ナンバー４２番、吉川真理、１３歳です。まだ無垢な中学生。お手元の資料の吉川真理のページに価格表がございます。時間はこれから１２０分間、吉川真理の破壊したい箇所の金額を入金してください。入金された方のみが、吉川真理の破壊シーンをご覧になる事ができます。人数制限はありませんので入金された方は全員ご覧頂けますので、ご安心ください。それでは、スタートです」

天井のスピーカーからアナウンスされ、真理が縛られているステージ以外の照明が落とされる。そして、拷問を担当する男がずらりと現れた。全員顔を全て覆うマスクを装着し、体にピタリとフィットした黒いボディスーツを着用している。

「それでは、まず最初に破壊されるのは胸部。お手元のランプが点

灯している方のみご覧頂けます」

真理の手首を縛っているロープが、ギリギリと引き上げられていく。真理の足首はステージの床に縛り付けられているので、真理は手首を引っ張り上げられ全身を引き伸ばされる。

「痛いぃぃーーーっ」

暇異を上げる真理に構わず、真理の全身はピーンと引き伸ばされ関節がギシギシと音をたてる。そして、鋭い針を持った男が真理に近付くと、真理の乳首にその針を突き通し貫通させられる。次に、その針に交差するように、もう一本の針が貫通する。さらに乳首の先端から針が深く深く突き刺された。だが、真理の胸を破壊することが目的なので、この程度では終わらない。膨らみ始めた胸の膨らみにも長いニードルが何本も貫通する。そして、突き刺されたニードルが火で炙られ内部から破壊され、最後には胸の膨らみを二つとも切除されてしまった。

「はぎゃぁぁぁぁーーーーっ」

胸から血を流し絶叫する真理。その真理に無常なアナウンスが告げる。

「続きまして、吉川真理の性器破壊です。なんと今回は全員ご覧頂けます。沢山のご入金ありがとうございます。それではお楽しみに」

泣き叫ぶ真理の性器が破壊されるというアナウンスで会場が大いに盛り上がる。今までは真理は全身を引き伸ばされて固定されていたが、性器を破壊する為、両腕を後ろ手に拘束されたうえ開脚逆さ吊りにされた。そして、真理の性器破壊が開始される。まず、あっさ

りと左右の小陰唇とクリトリスが切除された。そして、その後、真理の尿道と膣に、それぞれ１０ミリと５０ミリの電動ドリルが同時に押し込まれていく。

「あびゃびゃびゃびゃびゃびゃ」

真理の尿道と膣から血飛沫が激しくあがり、尿道は膀胱までドリルを突き入れられ、膣も子宮まで抉り取られた。そして、膀胱と子宮に火薬が詰められていき、導火線に火が点けられた。

パァン

まず、導火線の短い膀胱が爆発し破壊される。

バァァン

すぐ後に子宮が爆発し、真理の下腹部が一瞬大きく膨らみ、股間から血が噴き出す。真理の性器は跡形もなく破壊されてしまった。真理はあっという間に性器を破壊され、次の破壊作業の為、また引き伸ばしの形に固定された。

「はい、次は吉川真理の顔面破壊です」

運営上の時間の制約がある為、真理の破壊はどんどんと進められていく。真理の舌が引き出されニードルが突き刺され、十本ものニードルが真理の舌を貫通する。次に、上下の唇にもニードルが貫通し、鼻も、鼻の穴からニードルが突き刺され鼻の上に貫通する。頬もニードルが右から口を突き抜けて左に貫通した。そして、目にはペンチが突き刺され両目とも眼球が潰される。さらに、そのまま液体燃料が顔に浴びせられ火が点けられた。

その真理の破壊されていく姿を、ステージの袖から一部始終見る事を強要された次の順番の青野萌は恐怖で号泣していた。

真理がステージ上で破壊されていった場所とは、また違う場所で同じようなステージが開催されていた。いや、そこだけではなく数え切れない程の一般の人々には知る由もない暗黒の場所で惨殺が繰り広げられていた。

３０、人に潜む悪魔

３０、人に潜む悪魔

幼い人間の女子を破壊していくステージを、楽しそうに見ている観客の中には女性客も多い。いや、むしろ泣き叫ぶ少女が容赦なく残酷に殺されていく姿に興奮しているのは女性客の方が多いような感じである。この吉川真理が破壊されていくステージでも、多くの女性客が大金を投じ、泣き叫ぶ真理がだんだんと無惨な姿になっていく様子に興奮し、身を乗り出すようにして壊されていく真理を凝視するなか、椅子に座ったまま腕組みし足を組んだ一人の女性客がいた。黒いセミロングの髪に黒いスーツ、黒いタイトミニスカートから伸びる黒いストッキングに包まれた形の良い足に黒いハイヒール。この女性客は、ステージ上で惨殺されていく真理の姿にも興奮した様子もなく、周囲の観客の様子や、真理に拷問を加えている男の姿を、その冷たい鋭い眼で見つめていた。

ステージ上では、真理の顔面破壊が進み、その顔に火が点けられたところだった。真理の顔が焼け爛れ、突き刺されていたニードルが次々に落下していく。火が消えた時には真理の顔面の肉は燃え尽き頭蓋骨が剥き出しになっていた。それでも、まだ真理はかろうじて生きている様子だった。拘束を解かれ床に転がった真理は、ビクンビクンと体を震わせながら、手足を弱々しく動かし必死に逃れようとしている。もう自分は助からないと分かっていても、なんとか生きたい、死にたくないという気持ちが伝わってくる。しかし、その真理の体が持ち上げられ、運ばれてきた頑丈な作業台の上に乗せられると尻を突き出す姿勢で押さえ付けられた。そして、まだ無傷である真理の肛門がニッパーでバチバチと切られていき、グイッと思

い切り拡げられる。真理の直腸が丸見えになり、そこへ先端を鋭角に尖らせた鉄パイプが突き刺され真理の体を貫いていく。

「ごばぁっ」

肛門から口まで完全に串刺しにされた真理は、今度は作業台の上で仰向けにされ押さえ付けられる。もう真理は押さえ付けられなくても動く事は出来なかったが、それでも真理は押さえ付けられ右腕を肩口から切断される。続けて左腕も切断された。さらに両足も太ももの付け根ビキニラインから切断されていく。四肢を切断された真理は、用意された巨大なガスコンロの上に、まるで豚の丸焼きの様に置かれ真理の体を串刺しにしている鉄パイプをクルクルと回され体中を火で炙られていった。真理の髪の毛がチリチリと燃え上がり消えていく。

「ほうっ」

ここで初めてそれまで冷静に真理が殺されていく様子を観察していた女性客が声を洩らす。

・・こうする為に捌いてきたのか？　いや、でも折角の子宮や膀胱を爆破してしまう意味が分からないわ・・

この女性客は、もう我慢出来ないとゆう雰囲気で席を立ち上がりコツコツとハイヒールの音を響かせながらステージに向かって歩いていった。

「すいません、お客様。座席にお座りになってご覧ください」

ステージに上がろうとした女は止められるが、構わずステージに上

がり焼かれている真理に近付いていく。

「お客様、そこで止まらないと大変な目にあいますよ」

その警告も無視した女に、男が殴りかかるが、その瞬間、男の体がフワッと宙に浮きステージに叩き付けられる。

「がはぁっ」

ステージを転がる男を見て、袖の方から数人の男が銃を構えて集まってきた。

「お嬢さん、これ以上おいたが過ぎると、お嬢さんにこのステージでバラバラになってもらう事になりますよ」

銃を構えた男が凄んで言うが、女はまるで気にした様子もなく焼かれている真理の体を素手で抉り取ると口に入れた。

「こ、この女。まさか、ヴァギナ？」

男が怯んだ時にはもう手遅れだった。女の背中から伸びた触手が男たちを捕らえていた。

「ひやぁぁーーーっ」

悲鳴を上げ観客席に座っていた人々が、一つしかないドアから逃げようと殺到する。しかし、ドアはピクリとも動かず、逆に外側から開けられた。そして、黒いパーカーのフードを被った子供の様な男が中に入ってくる。

「十六夜。男はエレシュキガル用に確保してくれ。女はニヌルタ用だ」

「はい、パズス様」

「ああ、それとここに捕まっている人間は解放してくれ。怖がらせない様にな」

「畏まりました、パズス様」

膝をついてパズスを見上げる十六夜の体が2つに別れていく。

「手伝いなさい、新月」

「まったく人使いが荒いなぁ十六夜」

新月はぶつぶつ言いながらも、人間達を仕分けしていった。

★　★　★　★

菜緒は、サインのスペルを間違った事に、まだグチグチと悩んでいた。

・・あの女の子に悪い事しちゃった・・

すぐに追いかければ良かったが、もう手遅れである。名前も住所も分からないので、どうしょうもない。

・・初めて書いたサインだったのに…。密かに何回も練習してたのに…・・

菜緒は赤いランドセルを背負って、溜め息をつきながらトボトボ歩いていた。

・・こんな時、留美子ちゃんや量子ちゃんがいれば元気になる事言ってくれるんだろうな・・

留美子と量子は、突然行方が分からなくなり未だに消息不明という事だった。菜緒は、芳樹や留美子、量子が次々に自分の前から姿を消していき、しばらくは意気消沈していたが持ち前の明るさで、みんな絶対帰って来るよと考える事にしていた。

・・そうだ。私の初サイン。間違ってるのって逆にレアじゃない。しばらくしたら価値上がるかも・・

菜緒は歩きながら一人、ブフフと気味の悪い笑いかたをしていた。芳樹が見ていたら、やめろブス、気持ちの悪い笑いかたすんなと言われるところだ。

翌日、どうしてもスペルミスのサインを渡してしまった事に納得出来ない菜緒は、ヴァギナ対策委員会に顔を出していた。

「あの…。人を探して貰いたいんですけど」

おずおずと切り出す菜緒に、ヴァギナ対策委員会の女性職員は、微笑みかける。

「ウテルス様の頼みなら何でも全力で最優先で取り組みますよ。遠

慮なさらないで下さい」

優しい言葉に菜緒は小躍りし、さっそく覚えている女の子の特徴を入力してもらい検索すると、何人かの候補が画面に現れた。

「あっ、この子です」

菜緒は画面に映し出された美奈子の顔を指差すと、操作していた女性職員があれっという顔をする。

「ウテルス様、本当にこの女の子でよろしいですか？」

「うん、間違いないよ。この女の子だよ」

「おかしいですね。この女の子は桜宮美奈子さんといいます。小学生ですね。おかしいのは、この女の子、捜索願いが出されているんですよ。現在、消息不明です。しかも、中学生の姉の桃香さんも一緒に…」

「えっ、でも昨日間違いなくこの女の子に会ったよ。普通に話してたけど…」

「何か事情があるのかも知れませんね。こちらで、もう少し調べてみます」

菜緒は女性職員に、お願いしますと頭を下げ委員会を後にした。

・・あの美奈子ちゃんは、私をウテルスと分かっていた。もし一緒にいたヴァギナに何かされているなら助けを求めてくる筈だけど…・

・

菜緒がいくら考えても上手い解答は見つからなかった。

・・ああもう、こんな時に芳樹くんが居てくれたらなぁ・・

トボトボ一人寂しく歩いていた菜緒は、ふと頭上に広がる青空を見上げた。その果てしなく広がる青空を見つめている菜緒の瞳から大粒の涙が零れ落ち、菜緒は自分でも気が付かぬうちに泣き出していた。

31、様々な思惑

31、様々な思惑

すんでのところで救出された青野萌と白鳥若葉の二人の少女は、パズス達と洒落たレストランの個室にいた。自分たちを助けてくれたのは、明らかに人間ではないと理解していたが、彼らは同じ人間以上に自分たちを大切に扱ってくれていると本能で感じていた。あの、真理を惨殺した恐ろしい人間達より、はるかに信頼出来ると心から思っていた。

「美味しいかい？」

眼前の自分たちと同じ年頃に見える少年が、優しい笑みを浮かべ、オムライスを食べている萌と若葉を見つめる。

「うん、美味しい」

二人は声を揃えて言う。そして、萌と若葉は顔を見合わせるとスプーンを置き、パズスと十六夜に頭を下げた。

「ありがとうございました」

十六夜は、初めて人間の女の子にお礼を言われ戸惑っているようだったが、パズスは嬉しそうに微笑んでいた。

「真理ちゃんも無事だったら、もっと良かったのに……。あっ、ごめんなさい」

萌は、助けてくれた人に向かって失礼な事を言ってしまったと涙目になっていた。

「気にしないで、彼女を助けられなかったのは僕の失敗だからね。確証を得る為に行動が遅くなってしまった。ごめんね」

女の子に頭を下げるパズスを見て十六夜は驚いた表情をするが、慌てて自分も頭を下げる。

「君たちにお願いがあるんだ。僕の仲間になってくれないかな？ちょっと危険なこともあるから、嫌なら断ってくれていいよ」

「危険なことって？」

パズスは二人に分かるようにゆっくり説明する。説明を聞いているうちに二人の瞳に決意の光が宿ってきた。

「うん、私はやるよ」

「私も」

二人は固い決意を胸に答えた。

「そうか、ありがとう。さあ、怖い思いをしたんだから美味しいもの食べて忘れちゃいな」

テーブルに色とりどりのフルーツがのったパフェが運ばれてきた。

萌と若葉は歓声を上げて、パフェに飛び付いていった。

★　★　★　★

「ウテルス様、彼女たちを補助につけますので、よろしくお願いします」

ヴァギナ対策委員会に顔を出した菜緒を見つけ、先日の女性職員がスクール水着にサイハイソックスの一団を引き連れてくる。菜緒よりも遥かに年上、ここで働いているからには勿論１８歳以上だろう。それが全員スクール水着を着用し並んでいる。

「あの…、なんでスクール水着を着ているんですか？」

菜緒は、子供ならともかく大人の女性がスクール水着を着ている姿に自分が恥ずかしくなってきた。しかも、スカート型と呼ばれる旧タイプのスクール水着だ。

「それは勿論、ウテルス様をリスペクトしているからです」

五人の中心にいる女性が答える。

「海やプールならともかく、そんな格好で外を歩いて恥ずかしくないですか」

菜緒は、自分は変態だから構わないけど、ここの職員がこんな格好させられるのはセクハラなんじゃないと抗議しようとしたが、当の女性たちは、ウテルス様と同じ格好で歩けるなんて光栄で興奮して

しまいます。と顔を紅潮させていた。

・・この人たちも変態か・・

菜緒は、それなら問題ないかと納得した。

「私はリーダーを務めさせて頂きます、野上佳乃と申します」

センターにいる女性が頭を下げる。そして、次に隣の女性が頭を下げた。

「私は副リーダーの嶋田三千代です」

菜緒も頭を下げると、次々に他の女性も自己紹介してくる。菜緒はリーダーと副リーダーの名前は、なんとか頭に入れたが、他のメンバーの名前はとても覚えきれなかった。

・・ごめんなさい。追々覚えていきます・・

菜緒は頭の中で謝罪する。

「ウテルス様の人探し、私たちもお手伝いしますので、さっそく出掛けましょう」

リーダーの佳乃が拳を握りしめて菜緒を促す。菜緒も、思わず拳を握りしめていた。

★　★　★　★

ニヌルタは応接室で、部下の男と美奈子に会っていた。ニヌルタの前に座っている男は、緊張して顔が強張っていたが、美奈子の方は、ニヌルタが何者か分からず至って普通の感じであった。

「ウテルスに会ったそうだな」

ニヌルタが、男の顔を見て尋ねる。

「はい、先日、食材を確保しに行ったおり街中で遭遇致しました」

「どんな感じであったか詳しく報告してくれ」

「はい、見た目は極普通の少女でありました。この美奈子がウテルスだと気付いたのですが、私はまったく気が付きませんでした。ウテルスは私をヴァギナだと一目で見抜きましたが、それほど脅威とも思わなかったのも事実です。もちろん、それは私を油断させる為なのかとも考えられますが…」

「ふーむ…。パズスの話では、ウテルスは好戦的という訳ではないらしいが、敵にまわすと危険だと言っていた」

「この、美奈子もウテルスは人間を襲っているヴァギナ以外は倒さないと言っていましたが…」

そこで、ニヌルタは美奈子の方に顔を向ける。

「お前はウテルスに詳しいのか？」

「ウテルス様に関しては、ある程度の情報は持っていますが、それ

はネットやニュース、本等の情報で、ニヌルタ様の把握している情報と変わらないと思います。ウテルス様のプライベートな事に関しては、ほとんど知りません」

美奈子は、もうこれで自分は用無しと見なされて殺されてしまうかもしれないと思ったが、ヴァギナの食材確保の為に働かされる位なら一思いに殺されたいと考えていた。ニヌルタは腕を組んで考えているようだったが、いきなり美奈子に向かって触手を伸ばしてきた。

「ひっ」

美奈子が思わず小さな悲鳴を上げる。

「よし、今からお前は食材の確保からは外れろ。これからはウテルスについて探れ。プライベートも含めて全てのウテルスの情報を僕にあげてくるんだ。これから、お前の体に僕の一部を埋め込む。これで、お前はヴァギナに命令出来る。何かあったら使うが良い」

「こんな小娘にニヌルタ様の力を…。ウテルスを探るなら私が御引き受け致しますが…」

「ウテルスは人間に擬態しているお前を見抜いたのだろう。これは人間でなければ無理だ」

ニヌルタは美奈子に、触手を突き刺すと自分の細胞を注入する。そして、すぐに取りかかれと命令した。

★　★　★　★

悪意と云うものは想像もつかない所で生まれるものであるが、それは周りにものを見抜ける人間が居なかっただけで、元々そこにあったものであるのは間違いない。凶悪犯が逮捕された際、あの人がそんな事をするとはとか、信じられません等とコメントする人間が居るが、それはその人の目が曇っていただけで、元々そういう資質が備わっていたのである。
ここにも、押さえてきた悪意を解放させてしまった者がいた。

「さあ、ゆっくり痛めつけてあげるからね」

男は、両腕を天井からのロープで拘束し全裸にした少女に優しく声をかける。少女は目を大きく見開き大粒の涙を流しながら震えている。まさか、この人がと信じられない思いで一杯であったが、この現実が全てを物語っていた。拘束され口も塞がれている少女は、嫌々と首を激しく振るが、それが無駄なことであるのは充分分かっていた。

「まずは優子ちゃんの体を針山にしてあげるね。１６Ｇの針だから痛いと思うよ」

男は笑いながら優子に近付いて、優子の乳首を刺激する。男の狙いが自分の乳首であると、嫌でも認識させられた優子は今まで以上に激しく泣き始める。

「ふふっ、可愛いよ、優子ちゃん。大好きな優子ちゃんを痛め付けるのが僕の夢だったんだ」

ごく普通のクラスメイトだと思っていた男の、突然の豹変に優子は自分の迂闊さを呪った。考えてみれば同じ教室で、同じ時間を過ご

してきただけで、この男の事は表面的な事しか知らないに等しかった。優子は激しく後悔したが、もう手遅れだった。

32、拷問と処刑

32、拷問と処刑

優子は自分の乳首に迫ってくる太い針から、見たくもないのに目が離せなくなっていた。

・・怖いぃぃ、拓也くん、やめてぇぇぇーーーっ・・

優子は必死に首を振って、やめてとアピールするが拓也は優子の薬で勃起させた乳首を摘まみ針先を当てる。そして、ぷつっと優子の乳首に針先が突き刺さり、ずぶずぶと乳首を貫通していく。

「ひぐぅぅーーーっ」

優子は、歯を食いしばり必死に痛みに耐えている。しかし、拓也は続けて優子の乳首に針を刺していく。二本、三本、四本。二つの乳首はどんどん針山になっていく。五本、六本、七本、八本。それでも、まだ終わらない。九本、十本、十一本、十二本、十三本、十四本。

「うっぎゃぁぁぁーーーーーっ」

ついに優子は耐えきれず絶叫する。その悲鳴をあげる優子の針の刺さった乳首を拓也は蝋燭の火で炙り始めた。優子の乳首は直接火で炙られたうえに、刺さっている針も真っ赤に焼け内部からも焼かれていく。優子は絶叫し続け体を激しくよじり抵抗する。

「拘束が甘かったようだね」

拓也は、優子の背後に〝木〟の字型の拘束台を設置すると、優子の体を厳重に拘束しだした。腕は天井からのロープを外され、手首、肘、二の腕と拘束台からのベルトで堅く締め付けられ、両足も開かされ、足首、膝、太ももに激しくベルトが食い込み拘束された。さらに、首、胸、腰も拘束され優子は身動き一つ出来なくなった。

「さあ、続きを始めようか」

拓也は、今度は鞭を手に持つと優子の針の刺さった乳首目がけて叩き込んだ。

「うぎゃぁぁぁーーーーーっ、だじげでぇぇぇーーーーっ」

助けを求める優子の胸に容赦なく鞭が叩き込まれる。膨らみかけの先端、針を刺され火で炙られた乳首に激しく鞭が叩きこまれていた。

バシィ、バシィ、バシィ、バシィ、バシィ…

「いだい、いだいよぉ、ぢくびどれちゃうよぉーーっ」

「どうせ後で切ってあげるから今千切れても問題ないだろう」

笑いながら拓也は優子の胸に鞭を叩き込む。

「ほらほら、優子ちゃん。どんどんミミズ腫れが出来てきたよ。血も出てきたねえ」

拘束台に大の字に縛り付けられ身動き出来ない優子は、胸に嵐のような鞭の打撃を受け血飛沫をあげながら泣き叫んでいた。

「ゆるじでぇ、もお、ゆるじでぐだぢゃいぃぃ」

「いいよーっ優子ちゃん。最高だ」

血塗れになった優子の胸から拓也は、鞭打つ場所を股間の割れ目に変えた。今度は優子の性器に激しく鞭を叩き込んでいく。

「んぎゃーーーっ、ゆるじでぇぇーーーっ、マンコじんじゃうよぉぉーーっ」

「何度も言わせないでよ。どうせ殺すんだから、マンコ死んでも問題ないでしょ」

「ひぃぃーっ、おねがいじまぢゅ。ごろちゃないでぐだぢゃい。だぢゅげでぇぇーーーっ」

「ひゃははははっ」

拓也は楽しそうに優子の性器を鞭で打ち続ける。優子の大陰唇や小陰唇が破れ、血が飛び散り始めた。それを見て拓也は、さらに激しく鞭を叩き込む。

「いだいぃぃぃぃーーーーっ、マンコじぬぅぅぅーーーっ」

「うんうん、殺してあげるよ。優子ちゃん」

拓也は自分の性器がかつてない程固く勃起している事に気が付いて

いた。

★　★　★　★

とある民家の地下に密かに作られた地下室。ごく普通の青年であった雄二は、ある事と、ある出会いがきっかけで精神状態が普通ではなくなっていった。最初はほんの興味本位で見てしまった動画だった。だが気が付くと、その動画にのめり込んでいた。毎日、時間があるとスマートフォンの画面に惹きつけられていた。そして、その動画を参考にある装置を自力で作り出していた。給料をつぎ込み半年かけて材料や部品を揃え、その装置が完成した時、雄二の心はすでに闇の中に沈んでいた。それから、彼が行動を起こしたのは数日後の事だった。

「可愛いね、凛ちゃん」

雄二は、全裸にされ後ろ手に縛られた凛を部屋の中に後ろから突き飛ばした。

「あうっ」

凛は部屋の中に転がる。雄二は凛の髪の毛を掴むと引っ張り上げて椅子に座らせた。

「僕は少し準備があるからこれでも見ててね」

凛が座った椅子の前のモニターに動画が映し出された。それは、雄二が常日頃見ている動画だった。凛は、初めは何か分からず動画をみていたが、すぐに正視できなくなっていた。モニターの中で凛と

同じ年頃の女子が酷い目にあっていた。

「ほら、凛ちゃん。ちゃんと見てなきゃダメだよ。見てないと痛い事するよ」

凛は、ビクッと体を震わせると見たくもない動画に目を向ける。凛が見ていたところでは女の子が性器に蝋燭を垂らされ泣き喚いている場面だったが、今、見てしまった場面は、その女の子が性器に矢を撃ち込まれている場面だった。矢は女の子の性器に突き刺さり下腹部に突き抜けている。凛は顔面蒼白になっていた。これはもう拷問レベルではなく、この女の子を殺すための処刑といえる。

「ようし、準備終わったから一緒に動画見ようか」

雄二が、凛の隣に椅子を持ってくると並んで動画を見始めた。

「おっ、ちょうど好きなシーンだ。ここが良いんだ。よく見てな、これから女の子が串刺しにされるんだ。両手両足を固定されてさ、頭も腰も押さえ付けられて口から切っ先が出るまで本当に串刺しにされるんだよ。無茶苦茶、興奮するよね」

雄二の説明通り画面の中で女の子が串刺しにされ苦しむ顔がアップで映し出された。

「ほらほら、この後処刑台に拘束されて本当に処刑されるんだ。一瞬でも見逃せないからね。もう僕はこの動画を見て以来、この処刑台が欲しくてさ。でもこんな処刑台売ってるわけないからね。それで何度も動画見直して自分で作ったんだよ」

そう言うと雄二は、ほらと指差す。そこには頑丈なスチールの作業

台にベルトを付けギロチンと回転のこぎりを取り付けた禍々しい処刑台が静かに置かれていた。

★　★　★　★

菜緒はスクール水着を着た一団を率いて、美奈子と会った歩道を歩いていた。そして、道行く人に美奈子の写真を見せながら情報を集めていた。その時、佳乃が「おしっこさせていただきます」と菜緒に言ってきた。

「ああ、トイレなら向かいの公園の中にありますよ」

「あっいえ、大丈夫です。このまましますから」

菜緒が、えっと驚いていると佳乃は軽く足を開くと本当にそのまま放尿し始めた。スクール水着の股間が濡れ始め太ももからサイハイソックスも濡らしていく。人通りも多いので佳乃が放尿しているのに気付いた人もおり、気付いた人は、ぎょっとしたように佳乃の顔と股間を凝視し固まっていた。ハイヒールを履いた佳乃の足元に尿が溜まっていき、佳乃の息が荒くなる。佳乃は自分がお漏らししている姿を見られて興奮しているようだった。

・・この人、真面目そうな顔してるけど間違いなく変態だわ・・

菜緒は、息を荒くし乳首を勃起させている佳乃を見て確信した。が、他の四人もスクール水着越しにポッチリと胸に二つの突起を主張し、股間には染みが出来ていた。

33、連鎖する殺戮

33、連鎖する殺戮

菜緒たちは、美奈子を探して歩き回ったが彼女を発見する事は出来なかった。そこで、佳乃の提案で全員別れて探すことになった。菜緒は別れる事に賛成ではなかったが、佳乃がこのエリアにはヴァギナは入れないからと主張する。いくら菜緒が、人間に擬態したヴァギナは居ると反対しても、そういうヴァギナは無茶な事をして目立つ行為は避ける筈だと譲らなかった。

「大丈夫ですよ、ウテルス様。私たちはウテルス様のおしっこから造ったヴァギナ撃退用の銃も待っていますし、ウテルス様のウンチから造った爆弾も持っています。正直、ヴァギナに負ける気がしません」

「真顔で言われると凄く恥ずかしいんだけど…。でも油断していると危ないですよ」

「心配して頂いてありがとうございます。では、私の顔や髪の毛にウテルス様の生ウンチを擦り付けて下さい。そうすればヴァギナが近付いて来ることはないでしょう」

菜緒は成る程と思い、ここでは歩く人の邪魔になるから公園に行きましょうと歩き出す。そして、公園の広場中央、往来の邪魔にならない所で下着を下ろししゃがみこむ。しばらく息んでいた菜緒だっ

たが、ぶぴぃーっと大きく放屁すると、ぶりぶりと肛門から大便が溢れ出した。こんもりと大量の大便を脱糞した菜緒はウェットティッシュで肛門を拭こうとすると佳乃がそれを止め、私に舐めさせて下さいと懇願し返事も待たずに菜緒の尻の双丘を押し開き肛門を舐め始める。そして、きれいに菜緒の肛門を舐め終わると、今度は肛門から舌を突き入れて舐め回す。

「あわわわわわっ」

足がガクガクと震え立っていられなくなった菜緒は、前にいる三千代にしがみついていた。その三千代も興奮した面持ちで菜緒の服を脱がし始め、菜緒は自分でも気付かぬうちに、ニーソックスとスニーカー以外全裸にされていた。

「お願い、私の子宮とおしっこの穴に指突き刺して…」

「やっぱり、ウテルス様も変態ですね」

佳乃は嬉しそうに菜緒の膣と尿道に指を突き刺すと、膣の方はそのまま拳まで入れ人差し指を子宮口に突き刺す。そして、肛門には別のメンバーが指を三本も突き刺した。

「あひぃぃぃ、そのままグリグリしてぇぇ」

菜緒は股間の3つの穴を責められ、更に乳首はそれぞれ吸われ絶頂に達しようとしていた。

「イグゥーーッ」

菜緒は股間と胸を責めまくられ真昼の公園で潮を噴いて果ててしま

った。

★　★　★　★

凛は画面を正視出来なかったが雄二に無理矢理視聴させられる。処刑台に拘束された自分と同い年くらいの女の子が、胸や恥丘にニードルを打ち込まれ手足を切断されていく。性器も真っ二つに切断され、胴体も切断された女の子は頭に火も点けられたうえ潰され絶命する。その無惨な姿に凛は恐怖で声も出せなかった。

「ほら、凄いだろ。この女の子、徹底的に痛め付けられて容赦なく処刑されるんだ。物凄く興奮するよね。だから、僕も自分でやりたくなったんだよ」

雄二の言葉に凛は震え上がる。まさかと思うが嫌な予感しかしない。

「凛ちゃんも、この女の子と同じように徹底的に処刑するから思う存分泣き喚いてね」

雄二は嬉しそうに、恐怖で固まっている凛を軽く持ち上げ処刑台に運んでいく。処刑台の上に下ろされ、その冷たい感触に凛は激しく泣き出した。雄二は更に楽しそうに凛の両足を開き処刑台に固定していく。そして、凛の腕の拘束を解き、処刑台に寝かせ腕を広げた格好で固定した。大の字に固定された凛は号泣するが、雄二はギロチンを凛の手足にセットし撮影用のカメラもセットする。

「さあ、処刑を始めようか」

「いやぁ、凛を許して下さい」

「大丈夫。あと一時間もすれば凛ちゃんはこの世にいないから」

「やだぁぁーーっ!!だずげでぐだぢゃいっ!!!!」

凛は頭をブンブン振り泣き喚く。

「いいよ、いいよ。もっと泣き喚いてよ、凛ちゃん」

雄二は、大の字にされている凛の平らな胸にポツンと存在を主張する二つの乳首に固形燃料を塗り付け火を点けた。

「あぎゃぁぁーーーーっ!!あづいぃぃあづいよぉぉーーーーっ!!」

「こっちも燃やしてあげるね、凛ちゃん」

雄二は大股開きされてる凛の股間の小さな突起クリトリスに固形燃料を塗り火を点ける。凛の3つの突起が燃やされていく。

「あづいぃぃーーっ!!げじでぇぇーーっ!!」

凛の乳首とクリトリスの焼け焦げる異臭が辺りに漂う。凛は、大切な所を燃やされ気が狂ったように泣き叫ぶ。

「ああ、もう待ちきれない。ギロチン、いくよ!」

雄二はギロチンの刃を落下させるスイッチを押す。凛の腕と足にセットされているギロチンの刃が一斉に落下する。

「はぎゃぁぁーーーっ」

凛が悲鳴を上げるが、凛の手足は切断されていなかった。どうやら、ギロチンの刃のスピードと重量が足りなかったようで骨を断ち切れずに途中で止まってしまっていた。

「ごめんごめん。僕の設計ミスだ」

雄二は巨大なハンマーを持ちギロチンの刃を上から叩いていく。ニ、三度叩くと凛の右腕がようやく切断された。雄二は次に左腕、左足、右足とハンマーを使い、順番に切断していく。

「ごめんねぇ凛ちゃん。却って痛かったよね」

しかし、四肢を切断された凛はそれどころではない。大小便を漏らし体を痙攣させながら泣き喚く。

「汚ないなぁ凛ちゃん。まあ良いけど…。じゃあ凛ちゃんの割れ目、ノコギリで真っ二つにしてあげるね」

雄二は回転ノコギリを作動させ凛の性器に近付けていき、笑みを浮かべながらノコギリの刃を性器に当てる。

ギュワーーッ!!

「おがががががががっ」

凛の性器が切り裂かれ血と肉片が飛び散る。ノコギリは性器を切り裂き恥骨も切断し始めたが途中で回転が止まってしまう。恥骨を切

断するにはモーターのパワーが足りないようだった。雄二は度重なる自分の設計ミスに愕然とする。

「まだ、凛ちゃんの子宮まで切断してないじゃないか」

雄二は、もういいとノコギリを退けると製作しておいた小型の爆弾を手に取り、凛の子宮口から中に入れ導火線に火を点ける。ジジッと導火線が燃えていき膣の中に消えていく。

ボスッ!!!

凛の下腹部が大きく膨らみ、その後、膣から血が噴き出す。

「あぎゃぎゃぎゃぎゃっ!!」

子宮を爆破され苦しみぬく凛の口に爆弾を詰めた雄二は、更に鼻の穴や耳にも爆弾を詰める。

「良かったね、凛ちゃん。やっと死ねるよ」

涙を流し雄二を見つめる凛の顔を何枚も撮影した雄二は、導火線に火を点けた。

ボンッ!!!!

凛の頭は木っ端微塵に吹き飛んだ。そして、雄二がドアを開けると、ドアの外にはヴァギナが立っていた。

「お待たせ。さあ、ご飯だよ」

雄二の言葉にヴァギナは嬉しそうに中に入ると、凛の体に触手を伸ばした。

「まだまだ改良が必要だな」

雄二は処刑台を見つめ腕を組む。凛の体はもう粗方食い尽くされていた。

そして、同時刻、別の場所でも同じ様な殺戮が繰り広げられていた……。

３４、暴走する狂気

３４、暴走する狂気

拘束台に拘束され胸を針山にされさらに鞭で打たれ血塗れにされた優子は、今は性器を鞭で打たれていた。開脚固定された無防備な性器へ容赦なく鞭が叩き込まれる。

「大好きな優子ちゃんを処刑する事が僕の夢だったんだ。いつも教室で優子ちゃんを見るたびに処刑したい衝動を抑えてきたんだ。やっと本当に処刑出来るんだ興奮してしまうよ」

「お願いします。拓也くん。何でもしますから処刑だけは許してください」

「だめだよ、優子ちゃん。優子ちゃんを処刑するのが僕の夢って言ったろう。僕は毎日優子ちゃんを処刑する妄想で自慰してるんだ。だから、優子ちゃんの可愛い体を破壊するよ。特にマンコは徹底的に壊すからね」

拓也は嬉しくて仕方ないという顔で微笑みながら優子の性器に鞭を叩き込む。

パシィ！パシィ！パシィ！パシィ！パシィ！

「あひぃ！あひぃ！あひぃ！あひぃ！あひぃ！」

連続で性器を鞭で打たれ、この時点で優子はもう号泣している。

「それじゃあ、優子ちゃんも慣れてきただろうから、今度はマンコの中身を直接鞭打ちするね」

「マ、マンコの中身？」

優子が泣き声で拓也に尋ねる。

「うん。優子ちゃんのマンコ、クリップで開いて固定して鞭で打つんだよ。柔らかい膣前庭窟に思い切り鞭を叩き込むからね。優子ちゃんのマンコ血塗れになるんじゃないかな」

「お願い、拓也くん。そんな事、許して」

優子が泣きながら懇願するが、拓也は優子の小陰唇をクリップで挟み太ももに付けたベルトに固定し優子の性器の中身を剥き出しにする。

「怖いぃ、拓也くん。怖いよおぉ」

「はは、良いよ、優子ちゃん。もっと怖がってよ。興奮するなぁ。ふふ、それじゃいくよ」

拓也は、怯えて震える優子の性器に思い切り鞭を叩き込む。

ビシィィ！！！

「あうぅぅぅぅぅぅぅーーーっ」

一際大きな音が響き、優子の悲鳴も響き渡り、性器からは血が飛び散る。

「痛いよお、マンコ、痛いいいいーーーーっ！！」

「いいねえ、優子ちゃん。マンコの直打ち１００回いくからね」

拓也は楽しそうに鞭を優子の性器に振るう。そして、１００回のマンコ直打ちが終了した時には優子の性器は血塗れで床には血だまりが出来ていた。

「あっあっあっあっ」

号泣する優子に拓也は追い打ちをかけるように次の拷問について告げる。

「鞭はこれで終わりにするよ。次は爆破の拷問かな」

「ば、爆破？」

優子は恐怖でガクガクと震え、口をパクパクと動かすが声が出なくなっていた。

「大丈夫だよ、優子ちゃん。爆破っていっても、まだ優子ちゃんを殺さないからね。優子ちゃんが死にたくなるほど痛めつけてから殺してあげるからね」

涙を流し口をパクパクする優子の顔を見つめ拓也は、哀れな優子の姿を写真に撮りまくる。

「じゃあ、優子ちゃん。まずは優子ちゃんの顔から爆破していくね。大好きな優子ちゃんの可愛い顔が、どんな顔になっちゃうのか、楽しみだな」

優子は恐怖で絶叫するが、拓也は優子の頭も動かせないよう額にベルトを当て背後の拘束台に固定する。そして、優子の鼻にフックをかけ思い切り引き上げたまま固定し、口にも開口器を装着し口が閉じられないよう固定する。そして、拓也は優子のフックをかけられブタ鼻のようになった鼻の穴に爆竹を差し込む。奥まで差し込み１本だけではなく、もう１本差し込み導火線を捩り１本にする。もう片方の鼻の穴にも２本の爆竹を差し込み、両方の耳にも１本ずつ爆竹を差し込む。残った口にも入れられるだけの爆竹を入れ、導火線を一つにまとめた。顔の穴すべてに爆竹を詰められた優子は恐怖で大量の涙を流し小刻みに震えている。

「いいねえ、優子ちゃんのこの顔、最高!!」

拓也は、恐怖で歪んだ優子の顔を何枚も撮影する。

「顔の後は優子ちゃんのマンコを爆破するからね。マンコ用は、もっと大きな爆竹使うから期待しててね」

拓也は笑いながらライターに火を点け、優子の顔の近くでゆらゆらと火を揺らす。優子は目を大きく見開き、ライターの火を目で追っている。そして、火が顔に近付いてきたかと思うと左の鼻の導火線に着火された。ジジジッと導火線が短くなっていき爆竹が破裂する。

ボンッ!!

鈍い音が響き優子の鼻の穴から煙とともに血が流れ出る。拓也は、右の鼻の導火線にも着火する。

ボンッ!!

再び同じ音が響き、優子の鼻から煙と血が溢れだす。次に拓也はライターを二つ持つと左右の耳の導火線に同時に火を点けた。

ボ、ボンッ!!

優子の左右の耳で爆竹が破裂し、優子の耳からも煙と血が流れだした。

「さあ、次は口だよ。口には15本入ってるからね。今までより強力だよ」

拓也は導火線に火を点ける。導火線が短くなっていき、そして。

バンッ!!!

優子の口と鼻から血が噴き出し煙も漂い、優子は白目を剥いて失神していた。拓也は優子の頬を平手で何度も打ち覚醒させる。

「ダメだよ、優子ちゃん。これくらいで気絶したら。次はいよいよマンコ爆破だ。優子ちゃんの膀胱、直腸、膣、子宮、全部壊すからね」

拓也は拘束台を回転させ、拘束されている優子の体を上下逆にする。優子の頭が下になり大きく開かれた股間が上にきた。そして、鞭で打たれ血塗れになっている優子の性器を見ていると、拓也は衝動が

抑えられなくなってきた。

「ああ、もう少し痛め付けてからと思ったけど、もう我慢出来ないや。これから、すぐ優子ちゃんを処刑して殺すね」

「いやぁ！！　何でもしますから許して下さい。お願いします、拓也くん。お願い、お願い」

「大好きな優子ちゃんに、そこまでお願いされると弱いなぁ。じゃあ、僕の奴隷兼、助手になってくれれば許してあげる。それと、僕の事は御主人様と呼ぶように、そして僕の前にいる時は両手を上げ足を大きく開いて立つ事、僕に答えるときの言葉遣いにも気をつけてね。頭の良い優子ちゃんだから分かるよね」

「は、はい、御主人様。喜んで」

「ははは、さすが優子ちゃん。じゃあ、拘束を解く前にこれを優子ちゃんの子宮に入れておくね」

拓也は丸くて黒く輝く小さな物体を優子に見せる。優子はそれが何か分からず不安に包まれた。良いものであるはずがない。

「これはね。ヴァギナの卵なんだよ。これを優子ちゃんの子宮に入れておくよ。心配いらないよ。僕が毎日優子ちゃんを犯して中で射精するか、この薬品を優子ちゃんの子宮に注入すれば卵が孵化する事はないから」

「はい、どうぞ優子の子宮にお入れ下さい。それと御主人様、一つ質問してよろしいでしょうか？」

「ああ、なんだい？」

「有難うございます、御主人様。御主人様はどうしてその様なものをお持ちなのでしょう？」

「良い質問だね、優子ちゃん」

拓也はドアの方を振り向くと声をかける。すると、ドアが開いてヴァギナが入ってきた。

「ひぃぃぃーーっ」

優子が悲鳴を上げると拓也が優子の腹を思い切り殴り付ける。

「ごばぁ」

優子が胃液を吐き出し苦しみで顔を歪める。

「僕の友人に対して失礼だよ、優子ちゃん」

「も、申し訳ありません、御主人様。お許しください」

「分かればいいよ。それじゃ入れるね。子宮口、切開するからかなり痛いけど優子ちゃんなら大丈夫」

拓也は膣鏡を優子の膣に無理矢理挿入し大きく開いて、優子の子宮を確認する。小学生の優子にとって性器を開かれ子宮を覗かれるなど恐怖以外の何者でもないが、更に拓也はメスを優子の膣内に入れ子宮口に突き刺し切開する。

「あぎゃぎゃぎゃぎゃ！！　もうじわげごじゃいまじぇん、ごじゅじんざまぁ！！　ひめいをあげるゆうごをおゆじぐだぢゃい。あぎゃぁぁーーーーっ」

優子はブクブクと口から泡を噴いていた。拓也は優子の拘束を解いていくと立ち上がらせる。優子は体を震わせながら両手を上げ足を大きく開いて立つ。優子の性器からは血が滴り落ちていた。

「じゃあまず最初の命令だ。クラスメイトの里美を連れて来てくれ。ブルマ姿で連れて来るんだ。里美はブルマが似合うからね。里美のブルマから出る太ももは最高だよ。急いで連れてきて。優子ちゃんの処刑止めたから、もう我慢の限界なんだ」

「はい御主人様。少しお待ち下さい。里美ちゃんをブルマ姿で連れて参ります」

拓也は満足気に、ニヤリと頷いた。

35、ブルマ小学生・里美

35、ブルマ小学生・里美

里美は、優子に続いて部屋に入り辺りを見回した。部屋はコンクリートの打ちっぱなしで飾り気のない不愛想な雰囲気が漂う不気味な部屋だった。もし優子が一緒でなかったら絶対に入る事はしない部屋だった。

「優子ちゃん、ここ何？　何か嫌な感じがするんだけど」

「ここはね、里美ちゃん、処刑場なの」

里美は、優子の言葉を聞いてもピンとこなかった。白い体操着に濃紺のローカットタイプのブルマ、白いサイハイソックスを穿いた里美は、首をかしげ辺りを見回す。優子に、二人で動画撮影しようと言われついてきた里美だった。里美ちゃんは体操服で私はスクール水着で踊って撮影しようという優子の提案に面白そうと賛成した里美だったが、こんな暗い部屋の中というのは撮影には適さないのにと感じていた。確かに撮影用の機材等は置いてあるが……。

「ねぇ優子ちゃん。本当にここで撮影するの？」

「もちろん、撮影はするよ。里美ちゃん」

優子が、答えた時ドアが開く音がした。優子は急いで両手を上げ、

足を大きく開く。

「御主人様が来た。里美ちゃんも早く私と同じ格好をして」

里美は、訳も分からず優子と同じように両手を上げ足を大きく開く。入って来たのは男だと里美は、すぐに分かった。入って来た男は全裸だったから股間の性器も丸出しで里美は、つい目がいってしまう。しかも、体は全裸なのに革靴を履き、頭には女性用の下着を被っていた。

・・何、この人?・・

里美は、この男が同級生の拓也だとは気が付かず恐ろしくなり優子の顔を見るが、優子は驚く様子もなく平然としている。男は里美の前に来ると、里美の体を舐めるように見つめた。

「ああ、本当に里美のブルマ姿は可愛いな。このローカットのブルマたまらないよ」

そう言うと男は、いきなり里美の開いた股間を蹴り上げた。それも、革靴の甲ではなく爪先でだ。

ズドゥ!!

「ぶぎゃぁぁーーっ!!」

里美のブルマ越しに性器に爪先がめり込み、里美は悲鳴を上げ股間を両手で押さえ床に倒れ転げ回る。

「痛い、痛い、痛い、痛いぃぃっ!!」

「何やってるの、里美。早く起きなさい。殺されるわよ」

優子の言葉に里美は、ビクッと体を震わせヨロヨロと起き上がった。

「早く前と同じ格好をして」

里美は、訳が分からないまま優子に言われた通りに両手を上げ足を大きく開いた。蹴り上げられた性器が、ズキズキと痛む。とにかく自分が普通ではない異常な状況におかれていることは理解出来た。

「じゃあ、里美。その体操服脱いでブルマとサイハイソックスだけになってもらおうか」

男が嬉しそうに言うが、里美は反抗する。

「嫌っ！！何で脱がないといけないのっ！！警察呼ぶよっ！！」

男は里美の髪の毛をむんずと掴むと、その頬を思い切り平手で打った。

バシィ！！

「ぶぅっ！！」

続けて連続で里美の頬を打つ。

バシィバシィバシィバシィッ！！

「ぶぶぶぶぶぶぶぶぶぅっ！！」

頬を打たれ泣き出している里美に興奮した男は、里美の顔面を殴り出した。

バキィバキィバキィバキィ

「ばばばばばばばばばばばばっ！！」

たちまち里美の顔がボコボコに腫れ上がり鼻血と口から血が流れ出す。

「ごめんなぢゃい。もう止めてぇ」

圧倒的な暴力に晒され里美は、泣きながら許しを乞うが、男は許す気がなく殴り続け、里美の鳩尾にも強烈な拳を叩き込む。

「おっげぇぇーーっ！！」

里美は無様にゲロを吐いて床に転がった。

「分かったかい。早く上を脱ぎな」

床に転がる里美に、さらに蹴りを入れながら男が命令する。里美は泣きながら体操服を脱いだ。里美の、まだツルペタな胸が晒される。男は、里美の胸を一頻り眺めた後、里美の細い腕をとり肘の関節をバキッと折った。

「あっびゃーーーーーっ！！」

転げ回る里美を押さえ付け、もう片方の腕も折ってしまう。

「あびゃびゃびゃびゃびゃびゃびゃびゃあっびゃーーーーっ！！」

奇妙な叫び声を上げ、のたうち回る里美。

「さて、里美をどんな風に処刑したらいいと思う？」

男は優子に尋ねる。いきなり振られた優子だったが、ここで満足いく答えをしないと、今度は自分も痛め付けられると理解していた。

「ブルマ穿かせたままマンコとおしりの穴から2本刺しにしてはいかがでしょう、御主人様」

「さすが優子ちゃん、分かってるね。嬉しいよ。それじゃ準備してもらおうか」

「はい、御主人様。喜んで」

この不穏な会話が耳に入り里美は恐怖で逃げようとするが、当然ながらあっさり捕まり、今度は両足の膝関節を折られてしまう。もう、里美は動く事が出来なくなってしまった。優子は里美の処刑の準備の為、里美の口に開口ギャグを装着しようとしながら、里美を憎々しげに見つめ呟いた。

「本当にあんた馬鹿だね。こんな所にノコノコ着いてくるなんて、馬鹿の極みだわ。これから、あんたは処刑されるけど、いい気味だわ。物凄く苦しむように殺してもらうからね。ふふふっ」

「どうしてぇ優子ちゃん?私、何か悪い事したの?」

「さあ、別に。御主人様のあんたを見る目が嬉しそうだったから気に入らないのよ」

「なんで?私、こんな男の子知らないよ」

「ほんと馬鹿だわ。毎日、学校で会ってるじゃない」

「えっ?　もごぅ」

優子は、里美の口腔にギャグを押し込んだ。

「はい、、お喋りはおしまい」

里美は、開口ギャグを装着され、口を開けたまま固定された。そして、処刑台の上に運ばれていく。

「この処刑台、ネットで購入したんだけど良いだろう。女の子を処刑する動画で使ってた処刑台のレプリカなんだけど良くできてるんだ。本当はこれで優子ちゃんを処刑するつもりだったけどね。里美も可愛いからいいか」

男と優子は、カチャカチャと処刑台の上に里美を大の字に固定していく。そして、手足や腰にセットされたギロチンを見て里美は、冗談ではなく本当に自分が処刑されて殺されるのだと実感し、大きく震え出した。

★　★　★　★

美奈子を探す菜緒たちであったが、なかなか成果は上がらなかった。公園で3組に別れ別々に探し始めたが手がかりは得られていなかった。菜緒は、セーフティエリアの外の美奈子の家に行き、両親に色々尋ねてみたが、姉と共に帰ってきて居ないという周知の情報以外手に入らなかった。

「どこに居るんだろう、美奈子ちゃん?」

「ウテルス様、やはり一緒にいたというヴァギナが怪しいですね。美奈子ちゃん、何か弱味を握られて逃げられないのでは」

「うーん!」

菜緒は、いくら考えても解らなかった。芳樹くんが居れば、せめて留美子ちゃんや量子ちゃんが居てくれればなと他力本願な菜緒は思っていた。

・・もう!馬鹿の私に話振らないでよ・・

菜緒は佳乃を睨み付けるが、佳乃の方はどこ吹く風で平気な顔をしている。

・・ウテルス様が私を探している?どうして?・・

その美奈子は、菜緒たちを逆に尾行していた。電信柱の陰から菜緒たちを見つめる美奈子の目は疑問に満ちていた。自分の家に行かれても両親は、姉の桃香が殺されて食べられてしまった事も自分の事も何も知らない。ウテルスが、何のために自分の家にまで行って調べているのか、それが知りたかった。

★　★　★　★

十六夜は、二人の少女の後を気付かれないように着けていた。夕暮れの町並みが、これから徐々に暗くなってくる。逢魔ヶ時。何か起こりそうな時間帯である。そして、それは突然起こった。

「あなた、何者？何してるの？」

十六夜の背後から突然声がかかった。信じられないという顔で十六夜が硬直する。自分が〝ここ〟に居る事が分かる者がいるとは、あり得ない。しかも、この気配。もし十六夜が僅かでも動こうとしたなら即座に殺されるだろう。

・・殺される？この私が？ほぼ不死身の私が殺される？でも、本能が告げている。動けば間違いなく私は殺される・・

「私は十六夜といいます。あ、あなたこそ何者ですか？」

十六夜は、背後の人影に向かって震える声で呟いた。

36、小学生女子リリス

36、小学生女子リリス

十六夜は、今まで自分が殺されるなど想像した事もなかった。上級ヴァギナである自分が死ぬ事などあり得ない。それが、今や蜘蛛の巣にかかった虫のように逃げる事も出来ず殺されようとしている。この殺気は本物だ。十六夜は、生まれて初めて恐怖というものを味わっていた。体は抑えようとしてもブルブル震え、ついには失禁してしまっていた。十六夜のミニスカートの中心から尿が流れ落ち、黒いストッキングも濡らしていく。足元に十六夜の尿が水溜まりを作っていった。

「あ、あ、あ、あ」

止めようとしても止まらず小便を流し続ける十六夜の尿道に何かが突き刺され、それは十六夜の尿道を裂きながら、ずぼぅっと下腹部を貫いて頭を出した。十六夜は自分の下腹部から顔を出したものを見ると、ヴァギナの触手のようであった。

「私の前でそんな汚いモノを断りなく放出するとは、問答無用で殺してあげるわ」

十六夜は自分の性器に激しい衝撃を受けた。それは性器から体が二つに引き裂かれたかのような激痛だった。その激痛の後に何かが性器から自分の中に侵入してくる感覚があり、体中が中から犯され死

んでいくのが分かった。

・・再生出来ない・・

上級ヴァギナであれば多少の損傷など瞬時に再生出来るのであるが、再生する事が出来ない。涙をポロポロと流し動くことも出来ず震えている十六夜の意識が薄れてきた。これが死ぬという事？十六夜は自分の体が壊れていく感覚に涙が止まらなかった。もう最初に侵入された性器の辺りの感覚はなくなってきている。

「さあ、死になさい」

冷酷な声が告げる。

「助けて、死にたくない」

十六夜が必死に許しを乞うが、今度は両目にも激痛が走り目の前が真っ暗になる。

「あばばばばばばばっ！！」

十六夜は口を開け舌を突き出して苦悶の表情をした。そして、十六夜の右腕が途中から千切れ地面にボトリと落ちる。次に両足も崩れ十六夜は地面に転がった。自分でも気付かないうちに十六夜は号泣していた。もう自分で体を動かす事が出来ない。

「……申し訳ありません、パズス様……」

十六夜は、無意識で呟いていた。

「パズス……？」

後ろから問いかけるような声があったが十六夜はもう答える事さえ出来なかった。が、突然意識がはっきりし痛みも消える。

「あなた、パズスの仲間なの？　パズスに仲間がいるなんて初耳だけど」

「はい、私はパズス様の御命令で動いております」

すると急にそれまでの凄まじい殺気が消え、十六夜は動けるようになった。そして、体も再生され修復されていく。十六夜は、恐る恐る後ろを振り向いた。

「エ、エレシュキガル様」

そこに居たのは惨神の一人エレシュキガルだった。十六夜は慌てて跪く。

「パズスの仲間なら早く言いなさいよ」

エレシュキガルは言うが、そんな暇ありませんでしたと思う十六夜だった。もちろん、恐ろしくて口にはだせないが…。

「エレシュキガル様はなぜここに？」

「私は、お仕事よ。パズスに頼まれてね。前にパズスに頼まれた依頼失敗して散々小言言われて、その時協力しろって言われて強制的にね」

「お仕事ですか？」

「そう、人間を守るお仕事」

「人間を守るですか」

「そう。食べる分には仕方ないけど、ただ殺す目的の者は私が殺す。ヴァギナでも人間でもね。あなたは、あのメス二匹を食べるつもりもなく狙っているようだったから殺そうとしたんだけどね」

「申し訳ありません。あの二人もパズス様のお仲間なのです。パズス様は、人間が人間を殺して楽しんでいる組織を壊滅しようと考え、あの人間の二人に囮になってもらっているのです」

十六夜は、ハッと振り向くと少女二人の姿は消えていた。

「申し訳ございません、エレシュキガル様。失礼致します。あの二人を追わないと…」

「それなら心配はいらないわ。リリスが見張ってるから」

エレシュキガルは、それにしてもという顔で首をかしげる。

「パズスはどういう目的なのかしら？　まあ私は暇潰しになって楽しいけどね」」

エレシュキガルに問われても十六夜もパズスの目的は分からなかった。

「まあいいわ。それなら私も協力するわ。あの人間のメスは呼び戻

してリリスに囮になってもらいましょう。リリスは見た目は中学生女子に見えるから大丈夫でしょう」

「パズス様は小学生くらいがちょうどいいとおっしゃっていましたが……。だから、あの二人にも幼い格好をさせているのです」

十六夜が、恐る恐るエレシュキガルに進言するとエレシュキガルは、ハ～っとため息をつく。

「まったくパズスは自分が小学生だからって…。まあ、リリスにもっと幼くなってもらうわ」

さっそく、リリスに連絡をとり萌と若葉にも戻って来てもらう。リリスと戻ってきた二人は十六夜と一緒にいるエレシュキガルを見て本能的に畏怖の念を抱き深々と頭を下げた。十六夜も美人であったが、エレシュキガルは、その十六夜が霞んで見える程の恐ろしい美人であり、その圧倒的な存在感はけして逆らってはいけない神の如く感じられた。

「こんにちは、初めまして、私はエレシュキガル。パズスのお友達よ」

「パズス様のっ！！　私は青野萌。こっちは白鳥若葉です」

「萌と若葉ね。今日は御苦労様。あとは私たちが引き継ぐからもういいわよ」

エレシュキガルはリリスにもっと幼く見えるようにしなさいと命令すると、リリスは素早く体を変形させる。そして、あっという間に１３歳の萌や若葉より幼く見える姿に変身していた。

「リリスは変態だから、変態は得意なのよ」

エレシュキガルは笑って言うが、十六夜はここが笑っていいところなのか理解に苦しんでいた。見た目、9歳くらいになったリリスは、ぶかぶかになった服を脱ぎ捨て全裸になる。ツインテールの髪形にツルペタの胸、寸胴の体型にツルツルの恥丘の下に見える幼い割れ目。どうみても人間の女子児童だ。

「これで歩いていればいいのですね、エレシュキガル様」

「そうだな、すぐ行け」

が、そこで萌と若葉が待ったをかける。

「そんな素っ裸の恰好で歩いていたら逆に警戒されてしまいます。何か衣服を羽織られた方がよろしいかと思います」

「ふうん、そうなのか」

「私たちが服を選んできます。お金はパズス様にいただいているので」

萌と若葉が走り出し、すぐに服を買ってきた。グンゼの白い綿の女児用下着に体のラインを強調するピッチリしたピンクのタンクトップ、それに白の超ミニのプリーツスカートだ。足には白いオーバーニーソックスとピンクのスニーカーを履く。

「もう少しスカート短い方がいいかな」

萌と若葉は、リリスに穿かせたスカートを折り曲げ下着が見えてしまうぎりぎりの長さに調整する。そして、赤いランドセルも背負ってもらう。

「よし、それでは行動開始だ」

すっかり小学生女子児童に成りきったリリスが歩き出した。

★　★　★　★

里美は、この期に及んでもまだ自分が本当に処刑されるとは考えられなかった。でも、この処刑台に付いているギロチンの刃は本物に見える。何よりこの錆び臭いは血の臭いのように感じた。処刑台に大の字に拘束され、口枷も嵌められ喋る事も出来ない里美は、それでも処刑なんて有り得ないと思っていた。

・・それに同級生の優子ちゃんが居るのに、そんな事あるわけない。きっと私を怖がらせてそれを動画にとって喜ぶつもりなんだ・・

里美は、そんな考えでいたが、それは悪い方に考えたくないという里美の希望的考えに過ぎなかった。普通に考えて、冗談で手足の骨を折ったりするわけがない。里美は、現実逃避しているに過ぎなかった。そこへ、女児用下着を被った男が里美の顔を覗き込む。

「里美ちゃん、さすがだね。G型のブルマは最高だね。股上が深くてローカット、やっぱり小学生のブルマはこうでなくちゃね。里美ちゃんのブルマに包まれた割れ目と恥丘見てたら興奮してきたから、この口借りるよ」

男は、そう言うと勃起した自分の性器を里美の開口ギャグで開いたままの口へ突き刺した。そして、喉の奥の奥まで容赦なく突き入れる。

「ほごぅぅっ」

里美は喉奥まで突き入れられ息が出来ず涙が零れ落ちる。しかし、男は構わず腰を激しく動かす。

「ほごぅほごぅほごぅほごぅほごぅ」

処刑台に拘束され泣きながら喉を犯される小学生の里美。男の腰の動きはさらに激しさを増していった。

「ほごぅ！ほごぅ！ほごぅ！ほごぅ！！！」

そして、男は里美の喉奥に射精する。ドピュ、ドピュ。男は里美の頭を押さえ付け最後の一滴まで、里美の喉奥に絞り出す。

「おぼぅ、おぼぼぼぼっ」

里美が咽て口からドロリと精液が溢れだす。

「良かったねぇ里美。喉を犯してもらえて。でもね、マンコは犯してもらえないよ。里美のマンコはこの槍で串刺しにするからね。そろそろ覚悟いいかな、里美」

優子が、手に持った木製の槍を見せながら残酷に笑う。

「もうすぐ里美、死んじゃうからね。今のうちに言っておくわ。私はね、男子に可愛い子ぶりっ子してる里美が嫌いだった。私だけじゃなくて女子全員が嫌いだったと思うよ。いい気味だわ。私がマンコから、この口まで串刺しにしてあげるからね。その後、おしりの穴から口まで、また串刺しにしてあげる。私の手で処刑出来るかと思うと胸がスッとする。嫌われ者の里美はここで残酷に処刑されるの。ふふっ。そうそう、串刺しの前に御主人様がやりたい事があるとおっしゃっていたから楽しみね」

優子は、楽しくてたまらないという様子だったが、里美は自分が本当は嫌われていたというショックと処刑される恐怖で、涙を流し震えていた。

そして、里美の処刑が執行される。

37、リリス惨殺

37、リリス惨殺

リリスは薄暗くなった街を歩いて行く。赤いランドセルを背負って歩くリリスの姿は学習塾へ向かう小学生そのままであった。エレシュキガルと十六夜、萌、若葉の四人は後ろからリリスの様子を窺う。今のところ不審な人物は現れなかったが、だんだんと闇が濃くなるにつれ突き刺さる視線が、一人で歩くリリスに浴びせられるようになる。

「お嬢ちゃん、一人なの？　大丈夫？」

中には心配して声をかけてくる親切な人間もいるが、リリスは丁寧に断って一人で歩き続けた。そして、小さな公園の中に入った時、明らかに不審な人物が現れる。

「へへっ、一人なの？　お兄さんが良い事教えてあげるよ。気持ちいいよ」

舐めるような目つきでリリスの体を上から下まで見つめ、手を取ろうとする。様子を窺っていたエレシュキガルたちだったが、これは只の変質者だと結論した。女児を殺して金儲けしようなどと考えているようには、とても見えない小心そうな男だ。いたずら目的でリリスに声をかけたのだろう。面倒くさいのでエレシュキガルが出ていく。

「ちょっとお兄さん。何やってるの？警察、呼ぶわよ」

急に現れたエレシュキガルに男は驚いたように一歩後退り、ごくりと唾を飲む。

「何ですか、いきなり。僕は法律に触れる事はしてないですよ」

「はぁ？　どうしようもない馬鹿だわ。法律に触れなければ何してもいいって、もうそれが犯罪者の考えだわ。リリス、いいわよ。こいつはあげるわ」

「僕が犯罪者と同じ？　失礼な女だな。年増のくせに……」

口を開けたまま固まった男の頭にリリスの触手が突き刺さっていた。

「ありがとうございます。エレシュキガル様。それでは戴かせて頂きます」

リリスが男を食べている間、萌と若葉も憤っていた。

「あんな男がいるから世の中おかしくなるんだよ。法に触れてないってなんだよ。普通の人はそんな事考えないよ。そんな事考えるのがおかしいって分からない馬鹿なんだね」

「法に触れても、みんなが良いって思う事もあるんだよ。ばーか。性加害者が偉そうに言うんじゃないよ。みっともない」

「まあまあ、落ち着きましょうか。二人とも」

十六夜になだめられて、ようやく落ち着く二人だった。その後リリスは、わざと人気のない路地を歩いたり逆に繁華街を歩いたりしたが目指す人間は現れなかった。夜も更けてきたので今日はもう撤収しようと多少気が緩み始めた時、全員がリリスから目を離してしまった一瞬にリリスの姿は消えていた。

「あれ？　リリスちゃんは？」

萌が、まず気付き辺りを見回すがリリスの姿はない。どうしようと涙ぐみ慌てる萌と若葉だったが、エレシュキガルと十六夜は落ち着いている。

「リリスは大丈夫だから、安心しなさい。あなたたちでなくて良かったわ」

「でもエレシュキガル様。いくらリリスちゃんが不死身でも酷い目にあったら痛いんでしょう。可哀想だよ」

「まあ痛いことは痛いですけどね」

エレシュキガルは、リリスは変態だから痛いの大好きなのとは二人には言えなかった。それに、自分ではない個体の事を自分の事のように心配する二人が理解できずにいた。パズスの言う通り、人間に学ぶところも多々あるように感じたエレシュキガルだった。

「エレシュキガル様。リリスをさらった手口から、どうやら本命が現れたようですね」

「そうだな。拉致されたのが人間だったら詰みだが、私の部下を拉致するとは運がない。食料在庫を増加させてもらおう」

エレシュキガルが残酷に笑う。

★　★　★　★

リリスが気付くと全裸にされ手足に枷が装着され鎖で〝X〟字に拘束されていた。リリスの記憶では、背後から何かで口と鼻を押さえられ、それから気が遠くなっていった。

・・ここがどこなのか不明ですが、そのうちエレシュキガル様が来てくださるでしょう。それまで楽しませてもらいますね・・

リリスは、どんな事をされるのだろうとワクワクしていた。少なくとも以前エレシュキガルと、パズスの依頼で人間の少女を救いに行ったとき見たような処刑は私にもしてくれるよね。リリスがドキドキしていると男が一人現れ、リリスの前に立つといきなり鳩尾に拳を叩き込む。

「おげぇーーっ」

涙を流しながら口から吐瀉物を吐き出すリリスの鳩尾にまた拳が叩き込まれる。

「おげげぇぇーーーーーっ！！」

吐瀉物を足元にまき散らしながらリリスは号泣していた。

「まだ小学生の四年生くらいか。可哀想にな、お嬢ちゃん。もうす

ぐ、この世とお別れだな」

男は、リリスを楽しそうに殴り続ける。

「今日は新しい処刑機具のお披露目と言ってたからな。すぐ殺すと言ってたから、事前に思う存分痛めつけていいと許可もらったし、処刑開始までのあと少しの間楽しませてもらうぞ」

男は、リリスの股間を思い切り蹴り上げた。男の靴の爪先が幼いリリスの割れ目に食い込み小さな膣が裂け血が飛び散る。

「ひぎぃぃぃぃーーーーーーーーっ！！」

「ふはははっ！！」

男は繰り返しリリスの股間を蹴り続ける。リリスの股間から血が滴りだす。そこへ別の男が入ってきた。

「おい、時間だ。そのガキ連れていくぞ」

男は残念そうな顔をしながらリリスの拘束を解くと、ぐったりしているリリスを抱えて歩き出すが、その時リリスは男を振りほどき走り出す。しかし、子供の足では二人の男から逃げられるわけがなく、あっさりと取り押さえられてしまった。

「いやだぁ、助けてぇーーっ！！」

「おい、面倒だから足の骨、折っとけ」

リリスを押さえ付けた男が、もう一人の男に命令する。男は、リリ

スの足を持つと、割り箸を折るように簡単にリリスの両足の骨を折ってしまう。

「はぎゃぁいだいぃぃーーっ！！」

男たちは、ついでにリリスの両腕も折り、泣き叫ぶリリスを運びステージの上に投げ捨てた。待ち構えていた観衆が、おぉと盛り上がる。ステージ中央には円筒形の筒が立てられている。筒は上半分が黒く、下半分は透明なガラスの様であった。袖から、仮面をつけた処刑人が現れ、この処刑器具を説明する。

「皆さま、お待たせしました。これから、この幼い少女をこの処刑用器具で処刑いたします。この筒は上から入れた少女を1センチ間隔で輪切りにしていきます。この幼い少女が無様に体を輪切りにされ絶命する姿をお楽しみください」

処刑人が説明している間に、リリスは首にロープを巻かれ筒の上にぶら下げられていた。手足を折られているリリスは、両手両足をだらんと垂らしたまま首吊りの状態で吊るされている。

「それでは、処刑開始です」

リリスの体が少しづつ下がっていく。そして、両足が筒の中に入っていった。その直後。

「ぶぎゃぁぁぁぁーーーーーーーっ！！！！」

リリスの絶叫が響き渡り、処刑具の透明なガラス越しにリリスの輪切りされた足の肉片がボトボトと落ちていく。リリスの体がどんどん下がっていき、もう太ももまで輪切りにされていた。そして、リ

リスの両足が全て輪切りにされると一旦上に持ち上げられる。リリスの体は足から下が無くなり血が滴っている。リリスは、そこで床に下ろされ首のロープが外されると、今度はリリスの股間の割れ目に巨大な釣り針状のギャフが突き刺され、へその下から腹を突き破って切っ先が飛び出した。そして、リリスは性器に突き刺されたギャフで、逆さに吊り上げられていく。リリスは骨を折られている両腕をだらんと垂らしたまま泣き叫んでいた。そのリリスが、再び筒の中に下げられていく。

「あっびゃぁぁぁぁーーーーっ!!!」

リリスの指先からどんどん輪切りにされていき、いよいよリリスの頭が筒の中に入ろうとしている。リリスの涙と鼻水とよだれで汚れ、恐怖と苦痛に歪む顔がアップで背面の巨大なモニターに映し出されていた。そして、ついにリリスの頭が筒の中に消えていく。

「ほぎゃぁぁぁーーーーーっ!!!」

リリスの肩まで筒の中に入った時、それまで絶叫していたリリスの声が途切れ、輪切りにされたリリスの頭が落ちていった。そのままリリスの体は下げられていき、ギャフの刺さるへそまで輪切りにされ、残った下腹部から子宮と膀胱が取り出され抜け殻になった下腹部は筒に投げ込まれる。取り出された子宮と膀胱はテーブルの上で、みじん切りにされた後、鉄板で炒められていた。

こうして、リリスの処刑は終了した。

38、里美の最後

38、里美の最後

菜緒と佳乃は、美奈子を探している途中暗い夜道をとぼとぼと一人で歩いている赤いランドセルを背負った少女を見かけた。

「危ないな。私たちで送ってあげようよ」

菜緒が佳乃に言い、赤いランドセルの少女に声をかけようとした時、暗闇から突然現れた男が少女を抱え車に押し込む。そして、素早く車を発進させた。その一連の手慣れた様子から相手がプロであるのは一目瞭然だった。

「ナンバーを記憶しましたから本部に連絡します」

佳乃が、携帯ですぐに本部に連絡し車の追跡を依頼する。そして、菜緒と佳乃は車が消えた方角に向かって走り出した。奈緒は自分が拐われた時の事を思いだし、今の女の子があんな目にあったら大変だと慌てていた。そして、奈緒は途中で、空を飛んで追いかければ良かったと気が付いたが後の祭りであった。

★　★　★　★

リリスが拉致された場所を突き止め、その場所に急行したエレシュキガル一行であったが、その時には既にリリスの頭が輪切りにされているところであった。萌と若葉は悲鳴を上げそうになり口を押えて何とか堪えたが、目の前でリリスが残酷に処刑され膝がガクガクと震え立っていられなくなり、ぺたんと尻をついて座り込んでいた。

「リリスさん、あそこまでやられてしまうと再生出来ますかね？」

十六夜が真顔でエレシュキガルに尋ねる。

「ひっ！　そんなぁ」

「リリスちゃん、死んじゃうの？」

十六夜の言葉が耳に入った萌と若葉が泣きそうな顔でエレシュキガルを見つめる。エレシュキガルは二人の頭を撫でると十六夜に厳しい目を向ける。

「十六夜、子供たちが不安になる事を言うのではない」

「はい、申し訳ございません。エレシュキガル様」

「しかし、まあ確かにリリス一人では再生するのにかなり時間がかかりそうだから、私の体液でも分けてあげるとしよう」

「それはいいお考えです。エレシュキガル様の体液があれば再生スピードが加速されますので、リリスさんの回復も早いでしょう」

今度は十六夜の言葉に萌と若葉は、ほっとした表情をする。人間というのは面白いものだと考えながらエレシュキガルは、カツカツと

ハイヒールの音を響かせ一人ステージへ向かっていった。

「あなたたちは私のそばを離れないようにね」

「はい。でも、エレシュキガル様一人で大丈夫なのですか？」

「大丈夫ですよ。エレシュキガル様より強いものなど、この世に存在しませんから」

十六夜は、軽い気持ちでいた。この程度の数の人間なら自分一人でも充分だ。それが惨神の一人エレシュキガル様なら何も問題はないだろう。そう思っていた。

★
★
★
★

処刑台に大の字に固定され震える里美の処刑が開始された。怖い夢であってほしいと願っていた里美の願いは空しく散っていく。女児用下着を被った拓也は電動ドリルを手にするとスイッチを入れギュウーンとドリルを回転させる。

「ふふっ里美ちゃん。まずこのドリルで里美ちゃんのブルマに包まれたこんもりした恥丘に穴を空けてあげるからね」

「うぶぅうぶぅうぶぅ」

里美は必死に何かを訴えようとするが、ギャグを咬まされているので何を言っているのかまるで分からなかった。

さあ、いくよ。里美ちゃんの処刑の始まりだ」

拓也は、何の躊躇いもなく里美のブルマに包まれた恥丘の中心にドリルの先端を当て、力を入れ押し込んでいく。

ギュオーッ！！

「ぶびょぉぉぉーーっ！！」

里美が悲鳴を上げるなか、恥骨が削られていき、あっという間に穴が空く。

「この恥骨に空いた穴に、これを差し込んであげるからね」

拓也は直径1センチ程の中空の管を、今、穴を開けた里美の恥丘に管を突き刺し、ニヤリと笑う。

「少し痛いと思うけど我慢してね」

拓也は、里美の恥骨から更に奥に管を突き刺していき、膀胱まで突き刺した。突き刺された管から小便が噴水のように、ピューと噴き出す。

「ぶごぅぅぅーーーーっ！！」

「里美ちゃん、これくらいで騒いでたら、これからされる事に耐えられないよ。頑張ってよ」

そう言われても、とても我慢など出来るものではなかった。里美は大粒の涙をポロポロこぼし許しを乞うが、今さら里美がいくら懇願

しようともそれは無意味な事だった。

「ほら、里美。この槍でマンコからいくからね」

優子が楽しそうに里美に告げるが、里美は嫌々するように頭を大きく振る。

「ちょとぉ、頭動かしたら上手く口から出ないでしょう」

優子は、口が上を向くように里美の頭を厳重に固定してしまった。

「もごぉもごぉ！！」

悲し気に声を出す里美だったが、優子はもう構わず里美の膣に槍の切っ先を当て串刺しの準備に入る。

「いつでもやっていいよ、優子ちゃん」

拓也は、嬉しそうに里美の顔を見つめながら自分の性器を右手で握った。どうやら、苦痛に歪む里美の顔を見ながら自慰するつもりのようだった。そして、優子は槍を里美の膣に突き入れ始めた。槍はすぐに子宮に突き当たる。

「さあ、地獄の始まり。いくよ、里美っ！！」

ハァハァと息を荒くしていた里美が息を止めた次の瞬間……。

「ぶごぅぅぅーーーーっ！！」

里美の絶叫が響き渡り、口と性器から血が溢れ出した。槍は里美の

子宮を串刺しにし、そのまま胃にも穴を穿ったようだ。優子は里美の絶叫にも怯む事なく、どんどん槍を突き刺していく。

「ごばぁぁぁーーっ！！」

そして、ついに里美の口から血塗れの槍が飛び出した。拓也は、その涙と血で汚れた里美の顔面に向かって射精していた。里美の顔に拓也の精液がドピュッドピュッとかけられドロリと垂れていく。その時にはもう優子は2本目の槍を里美の肛門に突き刺し始めていた。

「フフッ、里美、まだ生きてるよね。2本目いくからね」

優子は、里美の肛門に槍を突き刺していき、里美の口から2本目の槍も血塗れで姿を現した。里美はもう体を貫かれ内蔵を破壊された激痛と呼吸が出来ない苦しさで、体を激しく痙攣させている。

「よし、急いでギロチンだ。里美が死ぬ前に手足切断するぞっ！！」

拓也と優子は手分けしてギロチンを操作する。腕のギロチンと足のギロチンが、ほぼ同時に落ち里美の手足は簡単に切断されてしまった。そして、二人は里美の胴のギロチンを操作する。

ズガッ！ズガッ！

里美のへその上下にギロチンが落ち、里美の胴体は寸断される。もう、里美は虫の息だが、まだ生きている。

「優子ちゃんは心臓潰して、僕は脳ミソを壊すよ」

拓也の言葉で優子は、切断された里美の胴から腕を突っ込み、まだ

動いてる里美の心臓を引き摺り出す。そして、里美の心臓をハンマーで何度も叩き、ぐちゃぐちゃの肉片に変えてしまった。その頃、拓也は里美の側頭部にドリルで穴をあけ、再び固く勃起した自分の性器を里美の頭に突き刺して腰を振っていた。心臓を潰され、頭の中をぐちゃぐちゃにされては生きていられる筈がない。里美は哀れにも地獄の苦痛を味わいながら残酷に処刑されてしまった。拓也は、ヴァギナを呼ぶと、もはや動かぬ肉片となった里美を、餌として与えてしまい、ここには里美の痕跡は全てなくなってしまった。

「次は誰が良いかな？　優子ちゃん？」

拓也はもう既に、次の犠牲者を誰にするか考えワクワクドキドキしていた。

39、ウテルスVSエレシュキガル

39、ウテルスVSエレシュキガル

カツカツとハイヒールの靴音を響かせステージに上がったエレシュキガルは真っ直ぐにリリスをバラバラに処刑した処刑具に向かって行く。

「すいません、美人のお姉さん。興奮したのは分かりますが、ステージに上るのはご遠慮下さい」

ステージ上に居る男が表面上は丁寧にエレシュキガルを制止するが、その目はこれ以上進めば命はないと睨み付ける。しかし、エレシュキガルは当然そんな脅しなど気にも留めない。平気で歩いてくるエレシュキガルにステージの袖からも飛び出してきた男たちが銃を構える。

「お姉さん、そこで止まりな。それ以上動いたら、お姉さんにもその処刑具に入ってもらう事になるぞ」

「私をあの機械に？　それは面白い。1回入ってみてもいいが、その前にやる事があるので悪しからず」

まるで何でもないというエレシュキガルの態度に男たちが一瞬怯むが、男の1人が威嚇の為に銃を発砲する。それを機に怯んでいた男たちも一斉に銃撃を開始した。途切れる間もない銃撃で観客席に居

る者からはエレシュキガルが蜂の巣になったと思われたが、銃撃が止みそこに平気で立っているエレシュキガルの姿に男たちは恐怖の表情を浮かべ逃げようとするが遅かった。エレシュキガルの体から触手が飛び出し、男たちを捕らえバラバラに引き裂いていく。

「この女、ヴァギナだ!!　早くあの銃を!!」

ステージの袖から現れた男がエレシュキガルに向かって発砲した。避けるまでもないと平然と弾丸を受けるエレシュキガルだったが、その直後驚愕する。

「どういう事だ?」

拳銃の弾丸などエレシュキガルにとって米粒をぶつけられた程度のものである筈だった。それが、たった1発の弾丸を受けた右腕が二の腕から千切れ吹き飛ばされていた。しかも、瞬時に再生される筈の腕が再生されずに千切れたままだった。

「よし、いけるぞ!!　もっと撃ち込め!!」

男たちは勢い付きエレシュキガルに向かい続けて発砲する。しかし、警戒レベルを上げたエレシュキガルは触手で弾丸を全て叩き落としていく。エレシュキガルは以前パズスが話していた事を思い出した。人間は個体としての〝力〟は恐れる事はないが武器を持ち集団で挑んでくる場合は注意が必要だ。特に武器を開発する能力が秀でている。いずれ我々にも有効な武器を開発するだろう。だから、その前に我々が有利な間に交渉するのだ。なるほど、パズスの言うことも納得出来る。自分の体を破壊するとは今までにない事だ。エレシュキガルは感心したが、それでもまだこの程度では恐れる事はない。

「なかなか良い武器を持っているではないか、人間。だがその程度では、まだまだ私には及ばない。残念だったな、私たちの食料になってもらうぞ」

エレシュキガルが光速で触手を伸ばし、男たちが発砲する弾丸を弾き落としながら切り裂いていく。

「怯むな!!もっと弾幕を張れ!!手榴弾も持ってこい!!」

男たちは銃を撃ちまくりエレシュキガルを退けようとするが、並のヴァギナならともかく相手は惨神の1人エレシュキガルである。いかに特殊な弾丸を撃ちだす拳銃を使用しても、それだけで渡り合える筈がなかった。

「この武器は持ち帰ってゆっくり分析させてもらうとしよう」

エレシュキガルは弾丸を弾き、余裕で男の頭を触手で貫こうとする。

ガシィ!!

が、エレシュキガルの触手を素手で止めた者がいた。

「止めなさい!!　私が相手になります」

触手を止めたスクール水着を着たツインテールの少女がエレシュキガルを睨み付けた。

「ウテルス様」

「ウテルス様だ!!　早くヴァギナを倒してください」

観客席から歓声が上がる。エレシュキガルも自分の攻撃を止めた少女を見つめる。

「お前がウテルスか。成る程、凄まじい力だな。だが私もここで退くわけにはいかぬ」

「私は自分の力に驕りがあった。その為に大切な人を失ってしまったの。だからもうヴァギナ相手に手は抜かない。ここで倒させてもらうから」

ウテルスの姿が更に輝きを増していき、ツインテールが天を衝く。

・・あれがウテルス。恐ろしい力だ。いけない、いかなエレシュキガル様でも片腕では不利だ・・

十六夜はステージ目掛けて駆け出す。

・・パズスが警戒するのも解る。私も全力でいくぞ・・

エレシュキガルが初めて構えをとる。だが片腕の分明らかに隙が生じてしまう。

「エレシュキガル様、私も加勢致します」

十六夜がウテルスに向かい構えるが、エレシュキガルは退けと手で合図する。

「十六夜、お前はリリスを回収して萌と若葉を連れて逃げろ」

「しかし、エレシュキガル様」

その間にウテルスは力を溜め構えをとる。

「シナイ契約。この拳を浴びれば逃げる事は出来ません。永遠の無に堕ちなさい。終わりです」

・・これがパズスから聞いたとニヌルタが言っていた敵を殺すのではなく消滅させるウテルスの技か・・

エレシュキガルも本能でこの拳を受けてはいけないと感じる。

「十六夜!!　早くしろ!!　私も、この化け物相手ではそれほどもたんぞ!!」

・・エレシュキガル様……・・

十六夜はリリスを回収するため処刑具へ向かおうとするが、ウテルスが十六夜に向けて攻撃を仕掛けた。

「一の……」

「貴様の相手は私だっ!!!」

エレシュキガルが十六夜の前に立ちはだかりウテルスの攻撃を受けてしまう。

「……拳」

・・これは?　ダメージはないが体が動かぬ・・

エレシュキガルは反撃を試みるが身体を動かす事が出来なかった。
続けてウテルスの二撃目がエレシュキガルに襲いかかる。

「二の拳」

・・くっ、私の身体が抉り取られていく。なんだ、これは？・・

エレシュキガルが目の端で十六夜を確認すると処刑具からリリスの肉片を回収しているところだった。

「三の拳」

ウテルスは容赦なくエレシュキガルに拳を撃ち込んでくる。

「早くしろ！！十六夜！！ウテルスが私に攻撃している間に逃げろ！！」

「四の拳」

・・私の身体が失くなっていく。恐ろしい女だ、ウテルス・・

「五の拳」

エレシュキガルは自身が生まれから初めての感情に捕らわれていた。

「六の拳」

・・これが、恐怖という感情か・・

「七の拳」

エレシュキガルは身体が動かせないのに、自分の身体が恐怖でブルブル震えている感覚に陥っていた。

「八の拳」

・・あと二回、この拳を受けてしまえば私は永遠の無に堕とされてしまうわけか・・

「九の拳」

・・ふふっ。まあ、恐怖という感情を知っただけでもよしとするか・・

「十の……」

ウテルスは最後の拳をエレシュキガルに撃ち込む直前で拳を止めた。エレシュキガルに二人の少女が庇うように抱きついていた。

「ウテルス様、やめて！！エレシュキガル様は悪いヴァギナなんかじゃない」

萌と若葉が涙を流してウテルスに訴える。

「私たちは恐ろしい人間の組織を潰すために囮になっていたんです。でも危険だからとエレシュキガル様が言ってくださり代わりにリリスちゃんを囮に…」

「でも、リリスちゃん処刑されちゃって…。悪いのは人間なんです」

ウテルスは萌と若葉が嘘をついている様にはとても見えなかった。

「シナイ契約を解除します」

ウテルスが宣言するとエレシュキガルは動けるようになり、抉り取られ消滅したように感じていた身体の感覚が元に戻った。

「ごめんなさい。私の早とちりでした」

ウテルスはエレシュキガルに頭を下げた。

「ウテルス、お前ほど恐ろしい奴はいないが、こうしていると普通の女の子だな。まあ、顔はあれだが……」

ウテルスは激しくショックを受けよろめいた所へ佳乃が失礼と、エレシュキガルの千切れた腕を確認しバッグから取り出した小瓶に入った液体を塗りつける。すると、再生出来なかったエレシュキガルの腕が元に戻っていく。

「なんだ？　どういう事なんだ？」

エレシュキガルが不思議そうに自分の再生した腕を見る。

「ウテルス様、これは大変な事態です。この方の腕を吹き飛ばしたのは私たちヴァギナ対策委員会が開発したウテルス様の尿から作成した弾丸です。今、ウテルス様の尿を中和する液体を塗布したところ、ご覧のように再生しました。問題なのは門外不出のこの弾丸を何故あの男たちが所有していたかです」

佳乃は厳しい目で男たちを睨み付けた。そして、佳乃が男たちに詰め寄ろうとした時、観客席から罵声が飛ぶ。

「ウテルス、何やってんだ!!早くヴァギナを殺せ!!」

「そんな危険な化け物、殺してちょうだい!!」

まるで観客席全体が1つの生き物のように、ウテルスにヴァギナを殺せと圧力をかけてくる。ステージの上でウテルスは惨神と云われるエレシュキガルよりも、この会場に居る人間の方が恐ろしく感じていた。

４０、審判（ジャッジメント）

４０、審判（ジャッジメント）

ウテルスは観客席からの圧力に恐怖を感じた。とても人間とは思えない。観客席で、ヴァギナを殺せと叫んでいる人間たちが恐ろしい化け物に見えた。

「ウテルス様、私にはここにいる人間が醜い怪物に見えてしまいます。ここに居る者を拘束した方がよろしいでしょうね。頻発している少女行方不明事件に関与している可能性もありますから」

佳乃がウテルスに告げた時、エレシュキガルがスマートフォンをウテルスに差し出す。

「この中に人間が人間の少女を殺す動画が入っている。信じなくても構わぬが私たちは、その組織を潰すために動いていた。パズスの考えだがな」

ウテルスは差し出されたまま動画を見てしまった。佳乃も後ろから覗き込む。

「こ、これは……」

ウテルスも佳乃も絶句する。

「この場に居た人間は皆殺しにして食材にしたが、この二人は助けられなかった。ここでまた同じような処刑が行われると考えて来たわけだ。案の定だったがな」

ウテルスはエレシュキガルの言葉が耳に入らなかった。顔が引き攣り唇が震え涙が溢れている。

「留美子ちゃん、量子ちゃん……」

残酷に処刑される留美子と量子。動画の中で留美子と量子は、恐怖で顔を歪ませ泣き叫びながら処刑されていく。ウテルスは以前自分が拉致され処刑された時の事を思い出すが、留美子と量子はそれよりもはるかに酷い仕打ちを受け惨殺されていた。

「ウテルス様、しっかり」

「すまんな、ウテルス。刺激が強すぎたか」

佳乃とエレシュキガルがウテルスを案じるが、ウテルスの体が輝きだしツインテールが天を衝く。ウテルスは怒っていた。その怒りは拳銃を持った男たちと、観客席から処刑される様子を楽しみながら観ている観客に向けられる。

「あなたたちは私には人間に思えません。私は人間を守ろうと戦ってきました。でも、人間の姿をした悪魔は許せません。覚悟してください」

ウテルスの怒りは収まらなかった。輪切りにスライスされたリリスの肉片が目に入る。

「あなたたちのような悪は人と思いません。私は今まで人間には力を使わないようにしてきましたが、それも今日を限りに撤回します」

しかし、男たちや観客席の人間が一斉にウテルスに罵声を浴びせる。

「ふざけるな、ウテルス。人間を裏切るつもりか」

「人間を殺すつもりなの。ウテルスもヴァギナと同じ殺人者なのね」

「私たちに手を出したら、人類すべてを敵に回すわよ」

すると、エレシュキガルがウテルスの前に出る。

「ウテルス、お前は手を出さなくていい。私が殺す。反吐が出る連中だ」

「いえ、エレシュキガル。大丈夫、私がやります」

ウテルスはエレシュキガルを制止すると体が宙に浮いた。

「本当に私たちを殺すつもり？ウテルスなんて結局ブスな女だけあって頭悪いのね」

「人類の希望なんて言われていい気になってんなよ」

「ブスなガキには分からないのよね」

聞いているうちに佳乃や萌、若葉も腹が立ってきた。しかし、ウテルスの怒りはそれ以上だった。

「うるさーい！！ここに居る全員に私の技を受けてもらう。公平にね。審判、ジャッジメントという技は、もし心が悪に染まっていれば消滅する。そうでなければ何も起こらない。公平でしょ」

「冗談じゃないわよ。私は帰らせてもらうわ」

「そうそう、ただショーを観に来ただけなのに、ふざけないで」

観客席の人間が雪崩を打って出口に殺到する。が、二か所の出口の前には数体のヴァギナが待ち構えていた。

「ひっ」

「な、なんでヴァギナがこんなに」

出口に向かっていた人間たちが後退る。

「十六夜、お前が呼んだのか？」

エレシュキガルが十六夜に尋ねるが、十六夜はいいえと首を振る。

「あなたたちをここから逃がす訳にはいかない」

一人の少女がヴァギナの前に立ち、ヴァギナに指示し人間を押し返していた。

「美奈子ちゃん？」

「どうして？」

ウテルスと佳乃が声を上げる。

「ウテルス様、お久しぶりです。ウテルス様が私を探しているようだったので後をつけて来てしまいました」

「そう、お話は後で美奈子ちゃん。あなたは早くここから逃げて」

「いえ、ウテルス様。私も審判を受けるべき人間です。気になさらず技を発動してください」

ウテルスは美奈子の目を見つめる。そこにある決意の光を確認しウテルスは頷いた。

「ひとつ訊いていいか。なぜ人間のお前がヴァギナを操れる?」

「私はウテルス様を探るためニヌルタ様にヴァギナを操る力を頂きました」

「なるほど、ニヌルタの力だったか」

エレシュキガルは、あいつはまったく自分で動くことをしない奴だなとブツブツ呟いていた。そこへウテルスが声をかける。

「佳乃さん、それにエレシュキガル。あなたたちはお仲間と一緒にここから出てください」

「ウテルス様、何を言うのですか。私はウテルス様と常に一緒にいますよ」

「まったくだ、今更何を言うウテルス。私たちが悪ならここで消し

ておいた方がよかろう。だが少しだけ時間をくれ。リリスを復活させてやりたい」

ウテルスが頷くとエレシュキガルは十六夜が集めたバラバラに切断されたリリスの肉片に自分の腕を切り体液をかける。するとリリスの肉片が発光し、だんだんと人の姿になっていく。

「リリスちゃん、よかったあ」

萌と若葉がリリスに飛びついた。リリスは最初戸惑ったような顔で二人を見たが、すぐに嬉しそうな表情になり二人の頭を撫でる。

「エレシュキガル様、ありがとうございます」

「礼には及ばぬ。復活して、すぐこの後消滅するかも知れないからな」

「はい、皆さんのお話は聞こえていました。ウテルスさんというのはパズス様の仰る通り本当に恐ろしい存在ですね」

「そうだな。ここで消えなかったら色々考えていこう。十六夜、お前も生き残ったらパズスに詳しく報告しておけ」

その頃、出口付近では男たちが銃撃を繰り返し何体かのヴァギナを倒していたが、ヴァギナの数がどんどん増えてくる。男の一人がヴァギナを操る美奈子に狙いをつけるが、ヴァギナに守られている美奈子に傷一つ付ける事は出来なかった。

「さあ、審判の時間です」

ウテルスの下腹部を中心に黄金色の光が広がっていく。それは、どんどん輝きを増し目を開けていられなくなった。

「ジャッジメント！！」

ここに居る全員の頭の中にウテルスの声が響いた。審判がくだされる。

41、下された裁き

41、下された裁き

「ジャッジメント!!」

ウテルスの声が響き、審判がくだされる。周囲一帯が全て黄金色の光に包まれ何も見えなくなるが、叫び声や泣き声、悲鳴が木霊する。

「何だ？　何が起こっている？」

エレシュキガルの卓越した視力聴力でも、今ここで何が起きているのか把握出来なかった。

「萌、若葉、居るか!!」

「はい、エレシュキガル様」

「よし、私の近くを離れるなよ。十六夜、リリスを守ってやってくれ。リリスはまだ完全には力が戻っていない。それと、ウテルスの付き人の女。居るならお前もこっちに来い」

佳乃もエレシュキガルの声の聞こえる方へ移動し、触れる程近くに来てようやくお互いの姿が認識できた。

「何が起こっているのでしょう？この悲鳴や叫び声はいったい？」

何も見えず気配も感じないが阿鼻叫喚の殺戮が行われているような嫌な雰囲気に佳乃が不安げな顔で呟いた時、目の前に何かが現れた。それは最初白い靄のような物だったが、見ているうちに形を成していく。そして、それは三面六臂の姿を現す。

「あ、阿修羅！！」

佳乃が声を上げるがエレシュキガルが怪訝そうな顔をする。

「阿修羅だと？何を言っている。ここにいるのは蜘蛛の化け物だ」

「いえ、エレシュキガル様。巨大化したミミズだと思いますが。ううっウネウネと気持ち悪い」

「違うよう。口がいっぱい集まったお化けだよ。あの口で私たちを食べるんだ」

「それぞれ違うものが見えるとは、ふん、幻覚か。いずれにせよ敵であるのは間違いない。みんな、離れていろ」

エレシュキガルは戦闘態勢をとる。しかし、目の前のそれは微動だにせず、ただ見つめていた。佳乃は何か嫌な予感がした。

「いけない！！エレシュキガル！！戦っては駄目。おそらくこれがジャッジ、いえ、ジャッジの最高位であるジャスティス」

佳乃の叫びで拳を突き入れようとしていたエレシュキガルは直前で拳を止め佳乃を振り向く。

「これが、この化け物がジャステス？」

「ええ、対象の心の中の苦手とするものに姿を変えるのでしょう。自分からは動かず見ているだけなのも、こちらの反応を窺っているのでは」

しばらく、エレシュキガルたちを見つめていたジャスティスは何もせずに消えていった。その頃、その他の場所では凄惨な殺戮が行われていた。

「何なの、こいつ？　やめてぇ」

叫び声を上げる女性に全身が刃のような怪物が襲い掛かっていた。女性は逃げようとするが足の腱を切断され転がってしまう。

「ひぃぃーーっやめてぇーーっ！私、処刑ショー観てただけなのにぃ」

仰向けに転がる女性の四肢が切断される。切断された手足が、ボンッと飛び床に転がった。

「あっびゃぁぁぁぁーーーーっ！！！」

女性は切断された手足から血を噴き出しのたうち回る。

「だじげでぇぇーーーっ」

怪物は女性の体を押さえ付けると鋭い刃を構え、性器に狙いをつける。そして、泣き叫ぶ女性の性器に突き刺しそのまま串刺しにしていった。

「おがががががっ」

ビャボゥウッ！！

女性の口から血が噴き出し刃の切っ先が飛び出した。女性はビクンビクンと激しく痙攣していたが、やがて動かなくなっていった。

美奈子は、目の前に居た女性が一人で激しく体を痙攣させたかと思うと天を仰ぎ動かなくなり足元から煙の様に消えていくのを目の当たりにした。女性は始めから存在しなかったかのように、この世から姿を消していた。

「何が起こっているの？　これがウテルス様の技？」

事態が把握できず戸惑う美奈子の前に、人の姿が出来つつあった。

「お姉ちゃんっ！！」

美奈子の前に惨殺された桃香の姿があった。桃香は美奈子ににっこりと笑いかけると近付いてくる。その手にはごついアーミーナイフが握られていた。

「お姉ちゃん、お姉ちゃんが私を裁いてくれるの？」

桃香は美奈子の前に立つといきなりナイフを美奈子の胸に突き立てた。そして、続けて何度も何度も美奈子の胸にナイフを突き立てる。

「ひぎぃぃぃぃーーーーーーーーっ」

美奈子は悲鳴を上げ崩れ落ちそうになるが、グッと踏みとどまった。
そこへ桃香の攻撃がタイミングよく重なり、美奈子の左眼にナイフが突き刺さる。

「あびゃぁ！！」

悲鳴を上げながらも美奈子は倒れずに桃香の攻撃を受け続ける。

・・お姉ちゃんはもっと酷い目にあって殺された。それに私の罪はこんなものでは許されない・・

美奈子は体中をナイフで突き刺され血がボトボトと滴り落ち、体が痙攣を始めていた。そして、意識が薄れてくる。その時だった。美奈子の頭の中に何者かが語り掛けていた。

・・美奈子、あなたはもう罪の意識をもたなくていいの。あなたは悪い事はしていない。納得できないなら、この後も生きて世の中の為に働けばいい。ここで死んで逃げようなんて思わないでね。私はあなたの事を恨んでいないし、今でも大切な妹だと思ってるよ・・

美奈子は、ハッと目を見開く。今まで美奈子に攻撃をしていた桃香の姿は消えていた。そして、あれだけナイフで刺された傷も一切なくなっていた。

・・幻だったの？　ううん違う。確かに私は刺されていた。もう、このまま死ぬと思ったけどお姉ちゃんの声が聞こえた。お姉ちゃんが私を助けてくれたんだ・・

ウテルスが発していた黄金色の光が弱くなり、宙に浮いていたウテ

ルスの体もステージに降りてくる。ステージに足をついたウテルスは力を使い果たしたようによろけたが佳乃がウテルスを支えた。

「大丈夫ですか、ウテルス様」

「ありがとう、大丈夫」

ウテルスは、ステージの上を見回しそこに居る人たちを確認し微笑んだ。

「エレシュキガル、あなたが一番心配だったけど良かった」

「ご挨拶だな、ウテルス。私が悪のわけがなかろう」

「そうですよ、ウテルス様。エレシュキガル様に失礼です」

すっかりエレシュキガルに懐いてしまった萌と若葉がウテルスに噛みつく。

「ははっ、ごめんなさい。そうだ、美奈子ちゃんは？」

ウテルスは出入口付近に目をやると、美奈子がポツンと立っていた。

「良かった、美奈子ちゃんも無事だった」

「ウテルス様、やはり元よりここにいた人間たちは皆消滅してしまったようですね」

こんな、女の子を処刑する見世物を開催する者や、それを見に来る者たちなので当然悪に染まりきっていたのだろう。消滅するのが当

たり前だとウテルスたちは思った。

「待て、ウテルス。一人残っているぞ」

エレシュキガルの指差す方向に一人の女性が腕組し長い足も組んで座席に悠々と座っていた。

「良かった。良い人間もいたんだね」

ウテルスは嬉しそうに言うが、エレシュキガルは険しい顔をする。

「ウテルス、早くあの女を殺せ。お前が出来なければ私がやる」

「ちょっと待ってよ、エレシュキガル。何で審判で生き残った人を殺すの？　それはダメだよ。そんな事したら、この審判が正しくないって事になってパラドックスが起こって世界が消滅してしまうよ」

「なるほど、ウテルスの力はそれほど強力なのか」

エレシュキガルは目の前の敵に手を出せないジレンマに歯ぎしりする。

「ウテルス、あの女をよく見ろ。あの女、笑っている。あの女は、この審判を生き残ったのだから、ある意味、悪ではないのは間違いないだろう。いいか、ウテルス。あの女は、快楽の為に人を殺す事を悪などと思っていないんだ。罪悪感など少しも感じていない。悪という感情が欠落している。あの女には、ウテルスのジャッジメントも無意味だ」

「ウテルス様、私もそう思います」

佳乃も驚愕に満ちた顔で女性を見つめている。すると、その女性がゆっくりと座席から立ち上がる。

「今日は何時もより刺激的で楽しかったわ。あなたたちには、こんな楽しい機会を与えてくれた事、感謝いたします。また、何処かでお会いしたいですね」

女性はそのまま振り向きもせずドアから外に出ていった。残されたウテルスたちは呆然とそれを見送っていた。

42、妄信

42、妄信

菜緒たちは、ヴァギナ対策委員会である人物を調べていた。ウテルスのジャッジメントを生き残り、悠々と帰って行った女性である。

「本当にエレシュキガルのいうような人なのかなぁ？」

菜緒はいまだに、良い人であってほしいと願っていたが、その結果は予想外のものだった。判明したのは名前のみ、個人のＩＤも不明で、どうやって生活しているのかまったく不明だった。

「どういう事でしょうか、ウテルス様。この女性「豪徳寺文月」に関する情報がまるでありません」

佳乃が当惑した表情で菜緒を振り返る。

「という事は普通の人ではないんだよね」

菜緒は残念そうに顔を伏せた。佳乃はそんな菜緒を優しく抱きしめた。菜緒は、留美子と量子の惨殺される動画を観てしまった後、自分がウテルスだからあの二人は殺されてしまったと思い、さらに自分がウテルスだったから大切な幼馴染みも殺されてしまったと自責の念に捕らわれ、この施設内の与えられた部屋に引きこもり出てこなくなっていた。そこへ、美奈子が自分の事を話しに来てくれた事

が、菜緒にとって立ち直るきっかけになっていた。美奈子は自分の罪について菜緒に語った。けして許されない罪であるが、あのジャッジメントを生き残った事で、罪を償う為にも生きて少しでも世の中の為に働こうと思い返した。ウテルス様のおかげですと頭を下げた。そして、ウテルス様のお友達は残念ですが、ウテルス様に命を救われた方も沢山います。ウテルス様は本当にみんなの希望なんです。元気を出してください。美奈子に励まされ菜緒は自分も負けずに前を向いていこうと顔を上げた。

・・この女の子は本当に大変な運命を背負ってしまった。これ以上この子に悲しい思いはさせたくない・・

佳乃は菜緒を抱きしめながら、せめて私がこの子の支えになれたらと思わずにはいられなかった。

★　★　★　★

「ウテルスは確かに超人類だ。とても私の敵う相手ではない」

「自尊心の高いエレシュキガルが素直にウテルスの力を認めるとは、どういう風の吹き回しだ？」

「何を言うニヌルタ。私は認める者は認める。私はウテルスと対峙して分かった。ウテルスは我々と次元が違う。それに私はウテルスが気に入ったようだ」

「パズスに続きエレシュキガルもか。美奈子からも報告を受けている。どうやらウテルスは本物らしいな。パズスはウテルスについて

どの程度知っているんだ？」

「僕は誰よりもウテルスについて知っているよ。ウテルスが、まだウテルスになるまえからね」

「パズス、お前の言ってる事はよく分からんが、ウテルスは何のために誕生したんだ？　私たちヴァギナを倒すだけなら、あの力があれば造作もないだろう」

エレシュキガルの疑問にパズスもはっきりとは答えられなかった。

「ただ何か嫌な影を感じないか？　暗闇に何か潜んでいるような」

「そういえば、ウテルスのジャッジメントを生き延びた人間がいたが、あれは人間のようで人間ではない印象を受けたな。ウテルスが調べてみると言っていたから今度尋ねてみるとしよう」

「すっかり、仲良しだな。エレシュキガル」

「言っただろう。私はウテルスが気に入った。顔はあれだがな」

そこで、パズスが爆笑する。

「エレシュキガル、それはウテルスが気にしてる事だからあまり言うなよ。可哀想だ」

「ははっ、パズスもウテルスと仲良さそうだな。なんだか僕も会いたくなったよ」

「そうだ、たまには自分で動け、ニヌルタ」

エレシュキガルは大きく伸びをするとニヌルタに言い放った。

★　★　★　★

拓也と優子が、里美を処刑した後片付けをしているとドアをノックする音が聞こえた。優子はギョッとした表情をするが、拓也は平気な顔でドアに近付きノブを捻り開ける。

「どうした？　麻衣」

「うん。お兄ちゃん、お腹空いた」

「分かったよ、麻衣。上で待ってな」

拓也は優しく言葉をかけると、優子に妹だよと紹介する。麻衣は優子に頭を下げると上に上がっていった。

「御主人様、妹さん可愛いですね」

優子は拓也にお世辞ではなく言ったが、返ってきた拓也の言葉に戦慄する。

「早く、麻衣を処刑しないと…。麻衣を処刑するために最高の処刑を考えないと…。性器を処刑して最高の苦痛を与えないといけないからな」

優子は背筋が凍りつくほどゾッとした。

・・麻衣ちゃんってまだ四年生くらいだよね。御主人様は、そんな幼い自分の妹も処刑する気なの・・

優子が拓也を見ると、拓也はぶつぶつ言いながら部屋の中を歩き回っていた。

「早くしないと時間がない。あの方の言う通りなら早く最高の苦痛を探し出さないといけない」

拓也は、くるっと優子に目を向けると、次の女子をすぐ連れて来いと命令した。優子が慌てて出ていった後、拓也は一人部屋の中で考えに耽る。

・・麻衣を救う為には最高の苦痛を与えて処刑して生まれ変わらせるしか方法がないと、あの方は言っていた。くくっ、麻衣。性器をグチャグチャに破壊して処刑してあげるからね・・

拓也は、ある人物に言われた事を妄信していた。

★　★　★　★

雄二は、処刑台の改良を終え満足気に一人頷いた。

・・ふふっこれで今度こそスムーズに処刑出来るぞ。僕はあの方に選ばれた人間だから、もっと女の子を処刑しないとな・・

動画を渡してくれた人物から、あなたこそが支配者になる器を持つ

お方、この動画を観てあなたの好みの女性を処刑するのです。処刑を重ねる度にあなたは力をつけていくでしょう。そういわれ瞳を見つめられた時、雄二は自分の中で何かが変わるのを感じた。

・・よし、狩りに出ようか・・

雄二は地下室から這いだし夜の闇に消えていく。そして、薄暗くなりかけた道を一人で歩いている赤いランドセルを背負った少女に目をつけた。周囲に人影はない。ここは特別エリア内の為、ヴァギナに遭遇しないと安心しきっている少女は隙だらけだった。雄二は手慣れたもので、薬を使い何の障害もなく少女を確保した。

・・なかなか可愛いな。すぐ処刑しよう・・

邪魔なランドセルを投げ捨て、大きなスーツケースに少女を押し込めると雄二は興奮した面持ちで家路を急いだ。そして、地下室に戻りスーツケースを開け、確保してきた少女を確認する。ツインテールの髪形にピンク色のタンクトップ、白のミニスカートに白いオーバーニーソックス。雄二は手早く衣服を脱がすと少女の両手を後ろ手に縛り上げた。少女はまだ薬の効果で眠っている。そして、少女のツルツルの恥丘を見ているうちに雄二は、処刑する前に犯してやるかと考え少女の足を開く。少女の桜色のピタリと閉じた性器が露わにされた。

４３、不安の前兆

４３、不安の前兆

佳乃は、正体不明の「豪徳寺文月」の事もそうだが、もう１つ抱えている不安があった。何故、あの男たちが、ここで開発した弾丸を所持していたかという問題だ。対ヴァギナ用に、ヴァギナ対策委員会で開発し、まだ発表も公開もしていない、ここの関係者でも一部の人間しか知り得ない弾丸が外部に流出している。明らかに内部の者が関わっているのは間違いなかった。

・・この委員会の中に裏切り者が居る。自分とウテルス様以外は疑ってかかった方が良いのかもしれない・・

佳乃は、タメ息をつきコーヒーを一口飲んだ。そこで、そのコーヒーの味が何時もと違う事に気付く。

・・刺激が強い、まさか？　・・

慌ててコーヒーを吐き出したが少しは飲み込んでしまった。佳乃の心臓の鼓動が早くなり、体が震えてくる。

・・そんな、誰が？　ここで私が死んでしまったら、次はウテルス様が危ない・・

佳乃は部屋から出ようとするが床に転がってしまった。助けを呼ぼ

うとしても声が出ず涙が溢れてくる。視界がぼやけてきたのは涙のせいか意識が薄れてきたからなのか、もう佳乃には判断出来なかった。

・・助けて、誰か来て・・

床をドアに向かって這いながら佳乃はスマートフォンを取り出し適当にコールした。もう目がぼやけて見えない為相手が誰か分からなかったが、誰でもいい、とにかく異変を感じて駆け付けて来てくれれば助かる。必死の思いで画面をタップした所で佳乃は動けなくなっていた。筋肉が弛緩し佳乃の股間から尿が溢れだし床に広がっていった。

★
★
★
★

「ここがヴァギナ対策委員会の内部か。良いのか？　ここは私たちを倒すために研究している所だろう」

エレシュキガルは、もし自分がここから大事な資料などを持ち出してしまったらどうするつもりなのだと逆に心配してしまう。

「大丈夫だよ。エレシュキガルはお友達だから。それに私と一緒なら誰もヴァギナだなんて思わないよ」

菜緒は平気で凄いことを言う。

・・こういうところは本当に子供だな。これがあのウテルスだとは、実際に見ていなければ信じられないところだ・・

エレシュキガルは、ウテルスの恐ろしさを思い出す。あの時、萌と若葉が庇ってくれなければ自分はもうこの世には存在していなかった。

・・これで見た目がリリス並みだったら、全人類の希望ではなく憧れになっていただろうに惜しいな・・

ククッと思わず笑いが零れてしまうエレシュキガルのスマートフォンが鳴り出した。

「済まんな、ウテルス」

エレシュキガルはスマートフォンを耳に当てるがすぐ離し、菜緒に佳乃の部屋は何処だと叫ぶように言う。

「どうしたの？」

エレシュキガルは菜緒にスマートフォンを渡し、聞いてみろと言う。画面には佳乃からの着信が表示されていた。

「何も聞こえないよ」

「いや、止まりそうな息遣いが聞こえる。何かあったに違いない。急げ、ウテルス」

菜緒の先導で飛び込むように佳乃の部屋に二人が入ると、床に佳乃が倒れピクリとも動かず失禁してしまっていた。

「ドアを閉めろ、ウテルス」

菜緒が急いでドアを閉めるとエレシュキガルは触手を伸ばし佳乃に突き刺し体液を注入する。しばらくすると佳乃がビクッと体を動かし顔を上げ、菜緒の姿を確認すると泣き出した。

「ウテルス様、有り難うございます」

ようやく落ち着いた佳乃が菜緒にお礼を言い、菜緒の隣に居るエレシュキガルに気付きぎょっとしたような表情になる。

「エレシュキガルが助けてくれたんだよ」

「私の体液を注入したから大丈夫かと思うが、何があった？」

「あ、有り難うございます。私も何があったのか把握してないですが、飲んだコーヒーが変な味がしたので吐き出したのですが間に合わなかったようです…」

エレシュキガルは転がったコーヒーカップとこぼれたコーヒーを見つめていたが、佳乃の方を振り向いた。

「狙われているようだな。それもこの状況からみると内部の者だ。佳乃、しばらく身を隠せ」

「はい、でも私、身寄りもないし、かくまってくれるような友人もおりません」

「心配するな」

エレシュキガルはスマートフォンで誰かに連絡をとり始めた。

「ニヌルタか、お前の系列のホテルで最上級のＶＩＰルーム１つ確保してくれ。直ぐにだ。ああ、分かった。これからすぐ向かう。それと美奈子を貸してくれ」

話が終わるとエレシュキガルは佳乃に手を伸ばした。

「すぐ行くぞ」

手を引いて佳乃を立ち上がらせたエレシュキガルは、佳乃を軽々と背負い歩きだす。菜緒もそれに続いて歩き出した。

★
★
★
★

ホテルの一室に落ち着いた一行はクッションの利いた大きなソファーに座り今後の対策を話し合っていた。佳乃も自力で歩けるまで回復し、シャワーを浴び着替えて座っていた。

「美奈子、いいか。ここに私かウテルス以外の者が入ったら躊躇なく殺せ。食事はルームサービスだ。ニヌルタのホテルなので問題ないと思うが、念のためヴァギナに先に食わせろ。油断するなよ」

「はい、エレシュキガル様」

「ごめんね、美奈子ちゃん。迷惑かけちゃって」

「とんでもない、ウテルス様。私は少しでも人のお役にたてるなら嬉しいです」

「リリスは今、囮捜査中だからな。済まんな」

エレシュキガルにも頭を下げられ美奈子は恐縮していた。そして、佳乃も全員に頭を下げる。

「私は幼い頃、家族全員ヴァギナに殺されて食べられたんです。なのでヴァギナに復讐する為に必死に頑張って委員会に入りました。でも、ウテルス様に出会い私は自分が変わったように感じました。不思議なんですが、エレシュキガルさんや十六夜さんに会ったとき、全然憎しみを感じなかった。あの時、処刑場にいた人間の方に嫌悪感を抱きました。それに今回命を助けて頂いて、さらに私を心配してこんな凄いホテルに匿ってくれた。私なんかの為にここまでして頂いて感謝の言葉しかありません」

佳乃は深く頭を下げた。

「変わったのは私もだ。私もウテルスの存在で変わったように思う。思うにウテルスが現れた事で世界の流れが変わったのかもしれんな。なぁ、ウテルス」

菜緒はみんなに見つめられ顔を真っ赤にしていた。

「何れにしろ私とウテルスで探ってみる。佳乃はここでゆっくりしていろ」

★　★　★　★

雄二は少女の幼い割れ目に口を近づけると、指で左右に開き性器の中身を舐め始めた。膣前底窟からクリトリスに向かい念入りに舐めていると徐々に濡れ始める。クリトリスやツルペタの胸で乳首も固く勃起していた。

・・子供のくせに体は正直だ・・

雄二は少女の小さな膣口に自分の性器を当てると容赦なく突き入れた。少女の膣が裂ける感覚が伝わり雄二の残虐性が加速する。雄二は根本まで自分の性器を突き入れると少女の腰を押さえ激しく腰を振りだした。薬で眠らされた少女は小さな声を上げているが、目を覚ます事はなかった。

「はぁはぁはぁはぁ」

雄二は少女の勃起した乳首に噛みつき、興奮の余り食い千切ってしまった。少女の胸から溢れた血を見て更に興奮した雄二は、もう片方の乳首にも噛みつき食い千切ってしまう。そして、少女の血塗れの胸を見ながら雄二は少女の中に射精していた。

・・もう我慢の限界だ・・

雄二は少女の体を処刑台に移動すると腕の拘束を解き、改めて処刑台に厳重に固定した。今度はギロチンもノコギリも正常に機能してくれる筈である。

・・あとは薬が切れて、この少女が目覚めるのを待つだけだ・・

雄二は、少女が目覚めるまで何時もの処刑動画を見ながら待機するつもりだった。もし、動画が終了しても目覚めないようだったら覚

醒剤を注入する予定だった。

・・高価だから、あまり使いたくないんだ。早く目覚めてくれよ・・

画面の中で泣き叫びながら処刑されていく少女を口許に笑みを浮かべながら楽しそうに見つめる雄二の瞳は確かに普通ではない光を帯びていた。

４４、進化、または退化

４４、進化、または退化

処刑台に固定した少女の目覚めを待っていた雄二だったが、一向に目覚めない少女に苛立ち覚醒剤を使用しようと決めた。

・・少し嗅がせた薬の量が多かったか。これからは注意しよう・・

雄二は注射器に入れた覚醒剤を持つと少女の股間の前に屈みこむ。

「ふふっ、ここに深く刺して注入してあげるからね」

左手で少女のクリトリスの皮を剥き摘まんでいるうちに固くなってきていた。雄二はそのまま左手で摘まんだクリトリスの先端に注射器の針を当て躊躇なく突き刺し、そのまま針の根元まで押し込んでいく。

「さあ、注入だ」

雄二は注射器のシリンダーを押し、覚醒剤を少女のクリトリスから体内へ注入していく。しばらく眺めていると少女の体がビクンビクンと痙攣し始め、ハァハァと息も荒くなってきた。そして、血走った目を大きく開けると、あぁーーっと叫び声を上げる。

「あれれっ、これも入れ過ぎちゃったかな。処刑する前に死んじゃ

いそうだな」

少女はうめき声をあげながら、目鼻口から血を流し出す。

「不味いな！失敗した。もうギロチン一気に落として処刑するしかないか」

仕方なく雄二は処刑台に付けられたギロチンを作動させる為のリモコンを手にした。本来ならば順番に四肢を切断していき苦しみ泣き叫ぶ姿を楽しんだ後に胴体を切断し最後に首を切断するという流れでいくのだが、その前に少女が死んでしまったら楽しめない。生きているうちに切断して楽しまなければと雄二は、ギロチンを落下させるスイッチを押そうとしたが、ふと気付いて一つだけボタンを押さなかった。

ダダーン！！

ギロチンが一斉に落ち、少女の手足と胴が一瞬で切断された。首を切断するギロチンだけ作動させなかった雄二は、少女の頭を持ち上げバラバラになった自分の体を見せつける。

「あっびゃゃゃーーっあびゃびゃびゃびゃびゃびゃ」

自分の無惨な体を目の当たりに見て少女は苦痛と絶望で発狂したように意味不明の叫びをあげる。

「そうそう、この叫びと表情が堪らなくいいんだよ。それじゃその表情のままサヨナラしようね」

雄二は興奮した顔でリモコンのボタンを押す。

ズガーン！！

再びギロチンの落ちる音が響き、少女の首は呆気なく切断された。
雄二は切断された少女の頭を掴むと、恐怖と苦痛で大きく見開いたままの目に自分の固く勃起したモノを突き入れた。

「食べるならともかく、そんな事をするなんて悪趣味極まりないわね！

突然女性の声が聞こえ雄二は文字通り飛び上がった。腰に付けていた少女の頭も床に落ち転がっていく。声のした方を見ると黒いスーツ姿の女性が腕を組んで雄二を見ている。

「誰だっ！！」

雄二は思わず叫んでいたが、女性は静かに、だが厳しい目で雄二を睨み付けていた。

・・なぜ、この地下室が分かった？　それに入り口にヴァギナがいた筈なのにどうして？・・

雄二は、理由は分からないが非常に不味いことになったのは理解した。

・・でも、この女一人だ。こいつを始末してしまえば何でもない・・

雄二は別に慌てる事はないと冷静になる。この女も趣味ではないが処刑してしまえばいい。雄二は仲間を呼ばれないようにと注意しながら、ポケットの中に忍ばせた発信器のスイッチを入れた。これは

雄二が飼い慣らしたヴァギナを呼ぶ為の発信器だった。すぐにドアを開けヴァギナがのそりと入ってくる。

「餌になってもらうよ。でも、その前に処刑させてもらう。ここに来てしまった事を後悔するんだな」

雄二が勝ち誇ったように言うが、女性は慌てた様子も怖がる様子もなく平然としている。

・・この女、バカなのか？　自分のおかれた状況が理解出来ないのか・・

それならそれでいい。さっさと始末しようと雄二はヴァギナに命じ、女性を襲わせようとしたが、何時もは雄二の命令に従うヴァギナが動こうとしない。それどころか、ヴァギナが震えているように見えた。

・・どういう事だ？・・

不安になってきた雄二に、女性はヒールの音を鳴らし近付いてくる。

「どうやら組織ぐるみではないようね。個人の異常者というところね。少し残念。釣れたのがこれだけだとはね。リリスも骨折り損だわ」

「なんだ？　何を言ってる？」

「まあ、いいわ。あなたにはここで死んでもらうから」

残酷にニヤリと笑う女性の目が本気であると雄二に告げている。雄

二は咄嗟に横に飛び床に転がった。その雄二がいた場所には数本の女性から伸びた触手が突き刺さっていた。

「なかなか勘がいいですね」

「お前、ヴァギナなのかっ！！」

雄二は転がりながら自分が呼んだヴァギナの後ろに隠れたが、女性は構わずそのヴァギナごと雄二を貫いた。

「ごはぁっ」

腹部を貫かれた雄二は口から血を吐き、がっくりと膝を落とす。

「あら、いけない。少し外してしまいましたね。まあ、すぐ死ぬでしょう」

女性はバラバラにされた少女の体を集め始めた。そして、集めた少女の体に瓶に入った液体を振りかけた。すると、たちまち少女の体が元の状態に戻っていく。

「まったく、毎回ここまでされなくともいいと思いますけど、リリス」

「これは私の趣味ですのでお構い無く。それより十六夜さん、後ろっ！！　何ですか、あれ？」

リリスの言葉に十六夜が振り向くと、そこには異様な物が立っていた。

「ヴァギナと人間が融合している？」

そうとしか思えない物がそこに居た。

・・いけない、これは危険だ・・

十六夜は本能的に危険を察知し、部屋の隅にあった機械に使用する燃料をその物に浴びせると火を点けた。

「ウゴォォ」

正体不明の物は絶叫しながら燃えていく。十六夜は、まだ再生仕切っていないリリスを抱え、驚愕の表情を浮かべながら燃えていく物体を撮影していた。

４５、再会

４５、再会

あるホテルのＶＩＰルームと呼ばれる最上階の一室。最上階フロアの約三分の一を占める広大な部屋のスペースに佳乃はいた。委員会には先日の処刑場の取り締まり以来体調が思わしくないという理由で休暇をとっている。ここでの生活は快適だった。委員会が用意してくれている自分の部屋よりも遥かに快適で、佳乃は心の底から感謝していた。

・・家族を殺された。それは間違いない事実。それでも、あの時に見た女の子を殺して楽しんでいる〝人間〟より遥かに人間らしい・・

佳乃は、ヴァギナ対策委員会に所属していながらヴァギナよりも人間の方に嫌悪を持つようになっていた。しかも、同じ人間に佳乃は殺されかけていた。

・・ヴァギナより人間の心の方が恐ろしい・・

とはいえ、すべての人間が恐ろしいとは佳乃も思っていなかった。自分の為に親身になってくれている人間もいる。ウテルスや、今、この部屋にいる美奈子は佳乃の為に動いてくれている。

「美奈子ちゃん、少し休んだら。ずっと気を張っていたら倒れちゃうよ」

「大丈夫ですよ、佳乃さん。私の事より自分の事を心配してください」

美奈子はそう言うが、佳乃は美奈子の体が心配だった。まだ小学生の女の子に大人の自分が守られている不甲斐なさに佳乃は自分でも何とかしなければと思うが、ではどうすればと考えるといい案が浮かばなかった。そこへ……

コンコン、コンコン

ノックの音が響いた。菜緒やエレシュキガルならば、ノックをせずにそのまま入ってくる。ルームサービスも頼んでいない。佳乃と美奈子に緊張が走った。

「佳乃さんは奥の部屋へ行ってください」

佳乃は素直に奥の部屋に向かい、それを確認した美奈子が、ヴァギナに指示を出しドアを開ける。そこに立っていたのは菜緒でもエレシュキガルでもなかった。

「殺りなさい！！」

美奈子がヴァギナに命令する。ドアの前に立っていた人物は、一歩部屋に足を入れた瞬間ヴァギナの触手で貫かれ、さらに首を刎ねられていた。その、床に転がった頭が苦笑している。

「おい、美奈子。僕だぞ」

「申し訳ありません、ニヌルタ様。ウテルス様とエレシュキガル様

以外は何人もこの中に入れるなとの命令ですので」

「分かった分かった。一旦出るから」

ニヌルタは頭をころころと転がし、体もよたよたとドアの外に出ていった。そして、すぐにエレシュキガルが入ってきた。

「合格だ、美奈子。きちんと仕事をこなしているな。油断していたとないえニヌルタを一瞬で倒せれば申し分ない。これから、ニヌルタともう一人パズスという男もこの部屋に入れても良いか佳乃に確認してくれ。一応二人とも男なのでな」

美奈子が聞きに行くまでもなく奥の部屋から顔を出した佳乃が、大丈夫です、問題ありませんと答えた。

「まったく酷い奴だな、エレシュキガル。前もって話しておけよ。せっかくのスーツがボロボロだ」

もう再生したニヌルタが、やれやれという顔で部屋に入ってきた。

・・この人が惨神の一人ニヌルタ・・

佳乃は、一見、上質なスーツを着た若社長という雰囲気のニヌルタをまじまじと見つめるが、ニヌルタは気にする様子もなくソファに腰を下ろした。

「あとは、ウテルスとパズスか」

「ようやく、ウテルスに会えるか。楽しみだな」

「気をつけろよ、ニヌルタ。失礼な事をしたら消滅させられるぞ。お前は失礼が服着てるようなものだからな」

エレシュキガルが、バンバンとニヌルタの頭を叩いているうちに菜緒がやって来た。

「来たか、ウテルス。こいつが私の仲間のニヌルタだ。失礼な奴だが大目にみてくれ」

「なんとも失礼な紹介だが、私がニヌルタです。あなたの事はエレシュキガルやパズスからよく聞いている。なるほど、噂通りの方で安心した」

「姫川菜緒です。少女戦士ウテルスと名乗っています」

「美少女と言わないところが奥ゆかしいですな」

エレシュキガルがニヌルタの頭を殴りつけた。

「まったく失礼な奴ですまんな、ウテルス」

「だ、大丈夫だよ、エレシュキガル。それより、大変な事って何？また、佳乃さんが襲われたわけではないよね？」

「違う。それ以上に重大なことだ。パズスが来たら話す」」

人見知りな菜緒は初対面のニヌルタから離れるようにソファの端、佳乃の隣に腰を下ろしたがニヌルタが話しかけてくる。

「ウテルスはパズスと随分仲が良いようだが、やっぱり同じような

年頃に見えるからなのかね？」

「えっ？　私、パズスって人は知らないですけど」

「いやぁそんな筈はない。そうか、違う名前を使っていたのかもしれないな」

「違う名前ですか？」

そういわれてもピンとこない菜緒は首を傾げるが、その時ドアから人が入って来た。その人物の顔を見た菜緒の表情が固まり、瞳から涙が溢れだした。

「なんだよぉ、やっぱり生きてたんじゃない」

菜緒は入って来た人物に飛びついた。

「どこに行ってたんだよぉ、みんな心配してたんだよ」

「悪いな、姫川。僕も、もっと早く顔見せるつもりだったけど、なかなかチャンスがなくて」

「なんだ、やはりパズスとウテルスは知り合いか」

ニヌルタの呟きに菜緒が反応する。

「芳樹くん、パズスって？」

「重ねて悪い、姫川。僕はヴァギナなんだよ」

「えっ、だって芳樹くん。小さい時から一緒にいたじゃない」

「そうだな」

「擬態？　まさか、芳樹くんに擬態しているの？　そうなら許せない」」

菜緒の体が光り始めツインテールが天を衝く。

「待て、ウテルス。落ち着け。パズスも何か言え」

エレシュキガルが慌てて菜緒を止めようとするが、パズスもニヌルタも落ち着いたものだった。

「おいおい、姫川。そんな顔するとドブスの顔がもっとブスになるぞ」

「そんな芳樹くんの真似してもダメだよ」

「確かに僕はヴァギナだ。本物の芳樹じゃない。でも、姫川の知ってる芳樹は間違いなく僕だ」

「そんなの信じられないよ」

「本物の芳樹は生まれてすぐ死んでしまった。僕はその時に芳樹の赤ん坊として擬態したんだよ。ただ赤ん坊に擬態した為に僕はヴァギナとしての記憶を失くして自分を人間だと思っていた。だから、姫川のことをヴァギナだと思って殺そうとしてしまったんだよ。そして、鬼沢に首を刎ねられた時に自分がヴァギナだと思い出したんだ」

「適当な事言って誤魔化そうとしても許さない」

そう言いながら菜緒の怒りは収まり瞳にまた涙が溜まってきていた。

「なんだよ。チューした僕を信じられないのか」

菜緒はぷるぷると首を振る。

「芳樹くんが居なくなって留美子ちゃんも量子ちゃんも殺されちゃって私どうしていいか分からなくて、でもみんなを守らなきゃいけないから」

菜緒は大声で泣き出した。

「綾辻と飯嶋は僕が気付くのが遅くて後手になってしまった。僕の責任だ。すまん、姫川」

パズスは菜緒に頭を下げた。

「こういうのを痴話喧嘩っていうんだよ、エレシュキガル。勉強が足りないな」

「お前に言われたくないわ、ニヌルタ。さて、全員揃ったので本題に入るか。まず十六夜が撮影した動画を観てもらおう」」

エレシュキガルは部屋にある大型モニターに動画を映し出す。

46、未知の敵

46、未知の敵

撮影された動画を見ながら全員が息を呑んでいた。そこに映っていたモノは今までに見たことのない新しい生物と云えた。

「な、何ですか、これは？」

佳乃が声をあげるが答えられる者はいなかった。

「十六夜が、女性を処刑して楽しんでいる異常者を撮影したものだ。元は普通の男だったらしいが、十六夜が始末しようとするとヴァギナと融合してこんな姿になった」

「そんな事が出来るの、エレシュキガル？」

「出来るわけがなかろう、ウテルス。あり得ない話だ。この化け物は、危険だと察した十六夜が燃やしてしまったから、この動画以外存在した痕跡は残っていないのが残念だ。もちろん、十六夜を責めるわけではないがな」

「火を使えば倒せるということか。生物である以上燃えないわけはないからな。しかし、僕らなら多少の炎なら再生して無事だが、この化け物はそこまでの再生能力はないようなのが幸いだな」

「いや、ニヌルタ。この個体だけで判断するのは危険だ。他の個体が存在するとしたらまるで違うモノなのかも知れない。でも、僕が感じていた闇に潜んでいるような嫌な気配の正体はこれのことだろう。姫川、佳乃さん、人間たちにも注意を促してくれ」

菜緒と佳乃は大きく頷いた。それから佳乃はエレシュキガルやニヌルタ、パズスを見回すと口を開いた。

「あの、皆様にこんなことを言うのは大変失礼だと思いますが、どうしても気になるので言わせてもらっていいですか？」

佳乃が遠慮がちに言う。

「佳乃さん、どうしたの？」

菜緒が何だろうという顔で尋ねる。

「あの、実は皆様に注意して頂きたくて……。この世にはお約束と云われる恐ろしい法則があるのです」

「お約束？　何だそれは？」

エレシュキガルがさっぱり分からないと肩を竦める。パズスもニヌルタも意味が分からずぽかんとした顔をしている。

「気を悪くしないで下さいね。実は、今までに敵だと思っていた強敵が、それまでの確執が消え仲間になると突然弱体化して死亡フラグが立ったりするんです。皆さんは大丈夫だと思いますが、こうして今まで敵同士だと思っていた私たちが仲良く話している姿を見ていると不安になってしまって……」

佳乃の言葉に一同顔を見合わせるが、パズスが爆笑した。

「そうだ、佳乃さんの言う通りだ。この世界ではそうなんだ。僕もしばらく人間として生活していたからよく分かるよ。パターンとしては、それまで無双の強さを誇っていた悪役が改心して仲間になると今までの強さは何だったのというくらい弱くなって、その挙げ句仲間を庇って犠牲になって死ぬのが定番化してるからね」

「ふうん。しかし強い者が弱い者を庇うのは当然だろう。それに私たちは不死身だから心配するな」

「こらこら、エレシュキガル。佳乃さんはそういう油断をするなと言っているんだよ」

「しかしまあ、恐ろしい法則だな。気を付けるとしよう」

ニヌルタは大真面目な顔で腕を組む。

「でもさ、それは私たちから見た場合でしょう？　芳樹くん側からみたら私が弱体化して死んじゃうって事だよね？」

「姫川はたまに鋭いな。あのウテルスに勝てる者なんて想像つかないが、姫川も注意した方がいいな」

「そうだな、ウテルス。私もお前が負ける姿など想像つかないが気を付けるに越したことはない」

エレシュキガルはここで顔を曇らせた。

「私はウテルスが気に入って、こうして人間とも普通に話しているがヴァギナの食物は人間であるのに違いない。上級ヴァギナなら無闇に人間を襲わないよう力で抑えられるが、下級ヴァギナだと本能で生きているので全てを抑えるのは不可能だ。そこで私は人間牧場を作っていた。お前たち人間からみたらおぞましい物だろう。そこの佳乃の親族も喰われたのだろう。その人間が本当に私たちと手を組めるのか？」

「うん、私は難しい事は分からないから今のこの状況で一番良いと思う事をしたい。さっきエレシュキガルが言ったみたいに強い人が弱い人を守るのが当たり前だから」

「私も、人間もヴァギナも関係ないと思います。人間も他の命を食べていかなければ生きていけない訳ですし、自分の身に降りかかった時だけ怒るのもおかしいですよね」

「でもさあ、人間牧場は見たくないなぁ。それ見たらエレシュキガルの事、殴ってしまいそうだし」

「別に私の事など殴ってくれて構わないぞ」

「なんだよ、もう」

菜緒は軽くエレシュキガルを殴るが、そのままエレシュキガルに抱きついていた。

「な、何をする？、ウテルス」

「あまり、良いキャラにならないでね。死んじゃったら大変だから」

菜緒の言葉に佳乃が慌てる。

「駄目ですよ、ウテルス様。そんな事をエレシュキガルさんに言ったら、それは死亡フラグ立てているようなものですよ」

菜緒は慌ててエレシュキガルから離れて、今のは無しと両手で　印を作った。

★　★　★　★

一人の少女が拘束されて放置されていた。そこへ数人の男女がやって来る。

「約束のものはそこに置いてあるぞ」

男が床に転がっている少女を指差す。

「ありがとう。確かに香織さんだね。それじゃあ約束通り私たちを好きに犯していいから……」

二人の男はニヤリと笑うと三人の少女を改めて舐めるように眺める。どの少女も地味で大人しそうだがミニスカートから覗く太ももはなかなかにそそるものがあった。

「スカートを捲って足を開いてもらおうか」

男の命令で三人の少女は自らスカートを捲り下着を晒し、それから大きく足を開いた。男二人はしゃがみ込んで少女の開いた股間を眺

めながら匂いを嗅ぐ。

「くっせいな、お前ら。ちゃんと洗ってるのか？」

男たちは下品な笑いを浮かべると、次の命令を下す。

「どうせ臭くて汚いマンコだからな。このまま小便してもらおうか」

「ほら、早くしろよ」

男の命令で二人の少女の股間から湯気を立てて透明な液体が溢れ出した。下着の中心から小便が溢れ出て、脇から漏れた小便は太ももを伝い少女が穿いているサイハイソックスを濡らしていく。

「ほら、お前も早く出せよ。他の二人は出してるぞ」

一人だけ小便を漏らしていない少女に男が詰め寄る。少女も必死に小便を出そうとするが、その努力と裏腹に小便は出てこなかった。

「仕方ねえな。下着脱いで足開け」

男の命令で少女は下着を脱いで足を開いた。男はチューブを取り出すと少女の性器を開き尿道口に狙いをつけ、チューブの先端を当てる。

「本当は滅菌の潤滑剤塗って医療用のカテーテル使うんだがかまわないよな」

男は何もつけないそのままの汚れたチューブを少女の尿道口から突き入れていく。

「い、痛いっ！」

少女が顔をしかめ腰を動かし逃れようとするが、もう一人の男に腰を押さえ付けられていて動かす事は出来なかった。男は少女の尿道にズブズブとチューブを突き入れていき、固い手応えを感じたところで一旦チューブを前後に動かし少女の尿道をほぐしていく。

「よし、膀胱に入れるぞ。覚悟はいいか」

男は少女の返事も聞かず、一気にチューブを膀胱に突き入れた。

「あううぅっ」

少女が悲鳴を上げ、膀胱に入れられたチューブから尿が流れ出した。

「なんだ、けっこう溜まってるじゃないか」

少女の尿道から垂れ下がるチューブから流れる小便を見て、男たちは大声で笑い出した。

47、少女凌辱

47、少女凌辱

男たちは少女たちの放尿する姿を笑いながら見つめていたが、そのうちにスマートフォンで撮影も始めた。

「ほら、ちゃんと前向いて顔も見せろよ。もっと大きく足も開け。漏らしてる股間をよく見せるんだ」

少女たちは素直に男の命令に従っていた。少女たちにしてみれば、こんなことを撮影されるのは何でもない事だった。今までされてきた事を思いだし少女たちは憎しみの気持ちを増幅させていたが、表面上は男たちにその気持ちを悟られないよう顔に表さないように努めていた。

「よし、お前は後ろ向いて尻を突き出せ。バックから犯してやるよ」

「お前はこの机の上に仰向けになれよ。俺は顔を見ながら犯すのが好きなんでな」

男たちは二人の少女に命令し、残る尿道にチューブを入れられた一人には股を開いたまま手を上げて待ってろと命令する。そして、男たちはそれぞれ少女を犯し始めた。まだ充分に濡れてもいない少女の膣へ無理やり自分のモノを突き刺していく。

「ひぃ、痛いっ」

思わず少女たちは悲鳴をあげるが、男たちは逆に興奮し構わず根本まで突き刺し少女の腰を押さえ付けて自分の腰を激しく振る。

「痛い、痛い、痛い、痛い、痛い」

少女は涙を流しながらうわ言のように小さな声で呟き続けるが、男は更に興奮し腰を振り続ける。

「この女、本当に処女だったんだな。この顔と、この体じゃ無理もないか。ちゃんと中に出してやるから有り難く思えよ」

バックから少女を犯していた男はほどなく少女の中に射精すると、今度は肛門を犯し始める。まず指を突き入れ肛門をほぐし、突き入れる指の本数を増やしていく。そして、三本の指が楽に入るようになったタイミングで自分のモノを根本まで突き入れ、少女の腰を押さえ付け、また激しく腰を振る。少女の肛門が裂け血がにじみ出していた。

「痛い、痛いよぉ」

泣きながら肛門を犯される少女の中に男はまた射精する。そして、男はそのまま少女の中にジョーッと放尿し始めた。

「ほーら、温泉浣腸だ。お前みたいな女にしてくれる男はいないだろうからな、特別サービスだ。たっぷり入れてやるよ」

男は少女の腸内に大量に放尿する。そして、放尿し終わると満足そうに自分のモノを少女の肛門から抜いた。

仰向けにした少女を犯していた男は激しく腰を動かしながら、少女の腕を縛り付けていた。そして、少女の頬を平手で打ち据える。

バシィ、バシィ、バシィ

容赦なく少女の頬を打ちながら、泣き出した少女を見て男は更に興奮していた。

「ほら、もっと泣けよ。遠慮するなよ」

男は始め平手で打っていたが、だんだんと興奮し拳で殴り始めた。両腕を縛られ抵抗できない少女の顔面を殴り続ける。

「ひぃぃぃ」

少女は悲鳴をあげ号泣するが、興奮した男は構わず殴りながら犯し続ける。少女の顔は腫れ上がり鼻血が出て唇も切れ血が出ていた。男はそんな少女の顔を残酷に笑いながら殴る事は止めなかった。そして、興奮の頂点に達した男は少女の中に激しく射精した。

「よーし、最後にお前だ。お前は二人で犯してやるからここに四つん這いになれ」

男たちは一人が少女の顔の前、一人が少女の腰に向かうと二人がかりで少女を犯し始める。

「ほら、あの女のウンコで汚れた俺のモノを口でキレイにするんだ」

男は少女の頭を押さえ付け、少女の口に汚れた自分のモノを喉の奥

まで突き入れた。

「おご、おごう」

苦し気な声を上げる少女に構わず男は、少女の頭を押さえ付け少女の喉を犯し始めた。もう一人の男は地面に転がっていた清涼飲料水の空き瓶を手にすると、それを少女の肛門に突き刺した。そして、なんと空き瓶を全部肛門に押し込んでしまう。少女は尿道にチューブ、肛門に空き瓶を入れられながら喉を犯されていた。

「さて、それじゃ最後の穴も塞いでやるよ」

男は少女の膣に自分のモノを突き刺して激しく腰を振る。少女は喉と性器を同時に犯されて呼吸も出来ず失神寸前だった。

「ははは、いいねえ。この無様な姿」

男たちは激しく興奮し、ほとんど同時に少女の喉と膣に射精した。その時、タイミングよく浣腸された少女が我慢できなくなり、ピューッと液状の大便を漏らし始めていた。泣きながら大便を漏らす少女の姿を見て、男たちは爆笑する。

「よーし、最後にプレゼントだ。そこに手を上げて股開いて立って並べ」

男たちは転がっていた三センチ角の汚れた角材を三本拾ってくる。その角材は泥で汚れ、錆びた釘が飛び出ていた。そして、男たちはなんとその角材を少女たちの性器にグリグリと無理矢理突き刺していく。

「もう二度と使えないように穴をぐちゃぐちゃにしといてやる。俺たちが最後の男だ。よかったな」

少女たちの膣は裂け、膣内も角材から突き出た釘で抉られ泥で汚れ酷い有り様になっていた。少女たちの股間から突き出た角材に赤い血が伝っていく。男たちは、その突き出た角材を一気に引き抜いた。

「あぎゃぁぁぁーーーーっ！！！」

少女たちが絶叫し股間を押さえてのたうち回る。少女たちの性器からは激しく血が溢れだしていた。

「いやあ、さっぱりしたわ。もう二度と会わないと思うけど元気でいろや」

男たちは、犯された上に性器を壊されて放心状態でぐったりとしている少女たちをそのままに、もう用はないとばかりに立ち去っていった。

しばらく放心状態でいた少女たちだったが、ハッと我に返ったように立ち上がり衣服の乱れを治してから、お互いの姿を見つめ苦笑いする。

「尚子ちゃん、酷い顔。殴られたの？」

「うん、でもこれからやる事を思うと全然平気。それより、亜季ちゃん、お尻の穴にも何か入れられてたけど大丈夫？」

「お尻の穴も、おしっこの穴も痛くてとれない。どうしよう？」

亜季は自分の肛門の中にスッポリと入っている空き瓶がどうしても

抜けなかった。それに、尿道に入れられているチューブも抜こうとするが痛くて引き出せないでいた。

「博美ちゃん、お願い。自分じゃ抜けないから一気に抜いてくれる？」

「分かった。それじゃ一気にいくから我慢してね」

博美は、亜季の股間に垂れ下がるチューブをしっかりと握ると一気に引き抜いた。

「ぷぴゃぁーーーっ!!」

亜季が悲鳴をあげ尿道から血が流れ出した。

「ごめんなさい。大丈夫？」

「うん。ありがとう。お尻の穴もとれるかな？」

亜季の言葉で博美と尚子、二人の少女は亜季の肛門を確認するが、空き瓶は肛門の中に収まってしまっていて取り出す事は困難だった。

「お尻の穴を切るか、瓶を割って小さくして取るしかないよ」

亜季は二人の言葉に顔面蒼白になるが、もう今はこのままでいいと二人に告げ、、奥に転がる香織の姿を見つめ笑みを浮かべた。香織は、手足を拘束され目隠しに猿轡をされ無様に転がっている。酷い男たちであったが、頼んだ事はきちんと仕事をしてくれたようだ。薬を嗅がされて眠っている香織を三人の少女は残酷に笑い見下ろしていた。

「私たちと同じ地獄を味あわせてやる」

小さな声で呟いたのは三人のうち誰だったのか分からないが、その表情は仮面を脱ぎ捨て憤怒の表情に変わっていた。

４８、復讐の時間

４８、復讐の時間

少女たちは薬で眠らされている香織の拘束を解き、改めて木製の拘束台に大の字に張り付けた。全裸で貼り付けにされている香織の姿に三人は満足そうに微笑んだ。

「ふふ、早く目が覚めてくれないかな」

「自分がどんな状態なのか分かったらどんな気持ちになるのかしら」

「無様に泣き喚く姿が早く見たい」

三人は香織が目覚めるまで、香織を処刑する準備を入念に整えていった。そもそもはほんの些細な事だった。見た目もよくクラスで人気のある香織は、地味で大人しく目立たない尚子たちとは何も接点はなく、関わりあう事はなかったが、ある時クラスのメダカの飼育当番を代わったのが始まりだった。当番だった香織が用事が出来早く帰るために当番を誰かに代わってもらおうとした時、香織の仲の良い一人が、こいつらクラスの行事や掃除なんかやらないんだから代わってもらおうよと提案したのである。勿論、そんな事はないのであるが目立たないので何もやっていないように見られてしまっていたのである。

飼育当番を代わった尚子たちであったが、どういうことか翌日水槽の中でメダカが死んでしまっていた。飼育当番が手を抜いてメダカ

にストレスを与えたのではないかと疑われ、本来の当番であった香織が責められクラス全員に謝罪するはめに陥ったのだ。香織は自分に恥をかかせた尚子たちを激しく憎み、それから陰湿なイジメが始まっていった。

無視する。物を隠す、壊す。そんな事はもちろん、トイレに行かせない事もあった。その時の被害者は亜季だった。亜季は我慢していたが、ついに我慢しきれず五時間目の授業中に漏らしてしまった。中学生にもなって漏らしてしまう恥ずかしさに亜季は泣き出していた。しかし、そんな事は序の口で三人に対するイジメはどんどんエスカレートしていった。椅子の座面に画ビョウを置かれ、そこに座らせられるのはいい方で、トイレに呼び出され肛門にホースを入れられそのまま水を入れられたりした。そして、脱糞しながら香織の仲間の男子の性器を口に入れられ、口の中に射精された。暴力行為だけでなく、金銭の要求もあった。自分達の小遣いが足りなくなると、尚子たちに金銭の提供を要請してくるのである。それでも、尚子と亜季はまだいい方だった。博美は、それこそボロボロにされていった。昼休みと放課後には香織の仲間の男子に犯されまくり、膣も肛門も口も、穴という穴は全て犯されそれが毎日のルーチンのようになっていた。もちろん、犯すだけではなく痛め付けることも忘れない。針を刺される。焼かれる。引き伸ばされる。吊られる。通電される。詰められる。潰される。博美の泣き叫び許しを乞う姿が楽しいらしく様々な形で痛め付けられていた。何も喋らなくなり毎日犯され痛め付けられる為だけに生きているように感じられる博美は、このままではいずれ殺されるか自殺してしまうだろうと思われた。そんな毎日を過ごすうちに彼女たちの心の中にどす黒い感情が生まれていった。それは、大人しい彼女たちの正反対の攻撃的な感情。その芽生えた感情は彼女たちの心の中でどんどん成長していった。

・・殺される前に殺してしまえ・・

だんだんと彼女たちの心に香織に対する確固たる殺意が根付く。それが、だんだんと成長し具体的な計画を立ち上げていくに至ったのである。

「最後はバラバラにして燃やしてやろうよ」

「頭は、虫みたいに潰したいな」

「子宮抜き出して溶かしてやろう」

残酷な事を平気で言いながら三人は、この日の為に用意した様々な器具を点検していた。

「うーん……」

香織の目覚める気配がして三人は緊張する。いよいよ地獄の始まりだ。香織は自分がどんな状態になっているのか分からずに、なぜ動けないのか怪訝な顔をしていた。

「おはよう、香織さん　今日はいい1日になりそうね　」

自分の前に腕組みをして立つ三人の少女に気が付き香織は馬鹿にした笑みを浮かべる。

「何なの、あんたたち　早くこの縄解きなさいよ　」

まだ余裕の感じられる香織だったが、いつものおどおどした三人とは違う狂気を宿した目に一抹の不安を感じる。

「これ、ほどいたら帰っていいから」

薄ら笑いを浮かべ動かない三人に香織は苛立ちを覚えた。

「早くしなさいよ、あんたたち」

大声で三人を怒鳴り付ける香織だったが、次の瞬間驚愕する事になる。

ビシィ！！

激しい音と共に激痛が走る。涙で滲む目で香織が三人を見ると、三人の内の一人、博美が一本鞭を手に握りヒュンヒュンと振り回していた。そして、再び体に激痛が走る。

ビシィ、ビシィ、ビシィ、ビシィ！！

「あひぃぃーーーーっ！！」

連続で鞭打たれ香織は大声で悲鳴を上げていた。しかし、それでも博美は休むことなく香織に鞭を叩き込む。

「あびゃぁーーっ助けてぇぇーーっ」

香織はたまらず泣き叫び許しを乞うが、博美は容赦なく香織に鞭を叩き込んでいった。尚子も亜季も、それを笑って見ている。それどころか、更に香織を痛め付ける為大量の針を用意していた。

★　★　★　★

十六夜とリリスが街中を歩いていると、微かに何か争っているような声が聞こえた。その声を辿り路地裏の狭い広場に行くと、数人の男女と二人の男が争っていた。

「ただの喧嘩みたいですね」

「私たちが関わらなくても良いですね」

十六夜たちは、そのまま路地裏を離れ歩きだした。

「エレシュキガル様に一応報告だけしておきましょうか」

「そうだね、報連相は大事だもんね」

二人がスマートフォンを手にした時、前から菜緒とパズスが楽しそうに話ながら歩いてくる。その後ろに佳乃がガードされるようにピタリと着いている。

「パズス様、ウテルス様、ご苦労様です。大丈夫なんですか、佳乃さん連れ出して」

十六夜とリリスが直立不動の姿勢で緊張しながらパズスに尋ねる。

「佳乃さんもホテルの一室に籠りきりじゃ気が滅入るからね。たまには外の空気も吸わないとね」

「僕と姫川でガードしているから大丈夫だよ。佳乃さんがスクール水着を買いたいと言うから買いに行くんだ。君たちも来るかい」

「ウテルス様のコスプレですか。私もそれを着たらウテルス様のように強くなれますかね」

十六夜が目を輝かせて言う。

「でも、十六夜さんは十分強いと思いますけど」

菜緒が言っても十六夜たちは、まだまだですと謙遜し私も是非欲しいので選んでくださいと頼まれてしまった。と、そこで十六夜が思い出したように、路地裏で人間同士の喧嘩がありましたと報告する。

「まあ、喧嘩くらいなら問題ないだろうと思うけど、何処でまたあの化物が発生するとも限らないからな。人間の負の感情が影響していると思うんだ。エレシュキガルに連絡して監視だけしてもらうか」

パズスはすぐにエレシュキガルに連絡し、じゃあ行こうかと歩きだした。

４９、負から生まれるモノ

４９、負から生まれるモノ

菜緒たち一行はデパートの水着売り場に繰り出した。学生服売り場ではないのかというパズスの意見を退け、水着売り場に来た一行であるが、さっそくハンガーに掛けられた女子用スクール水着の一群を発見する。

「ほら、やはりウテルス様が現れて以来、スクール水着はもう一般の水着を抜いて一番の売れ筋なんですよ」

佳乃が自分の事のように自慢気に講釈を垂れる。菜緒も、いつも着ているスクール水着はそろそろ傷んできたので新しい水着を買おうとハンガーを外して商品を品定めしていると他のメンバーがその様子を真剣に見つめていた。

「な、何？　どうしたの？」

それに気付いた菜緒が顔を赤らめて尋ねると、佳乃が鼻の穴を膨らませて言う。

「ウテルス様が選んだ物が本当の本物ですから、私も同じ物を買います」

「ウテルスさん、本人が選んだ物ですからね。私たちも同銘柄の物

を購入したいと思います」

菜緒はプレッシャーで固まり、目でパズスに助けを求めるがパズスもしれっとした表情で笑っていた。

「僕も姫川と同じ物を買おうかな」

「よ、芳樹くんが？　芳樹くんが着たら変態に思われないかな？」

菜緒がさらに動揺するが、そこへ女性の店員がにこやかに割ってはいる。

「最近は男性から自分に着れる女子用スクール水着のサイズはどれかなという質問が多くございます。みなさん、ウテルス様に憧れているのだと思いますよ」

そう言いながら菜緒の顔を見た店員は、おやっと一瞬驚いた顔をしたがすぐに元のにこやかな表情に戻る。

「お客様はウテルス様によく似ていらっしゃいます。それに貧乳で寸胴の体型なのでスクール水着がお似合いになると思いますよ」

店員はまさかここに居るのが本人だとは思わず、商魂逞しく菜緒にスクール水着を勧めていた。しかし、その歯に衣着せぬ物言いに奈緒は泣きそうになっていた。

その後、菜緒が選んだスクール水着と同じ型番の物を全員が購入していた。もちろん、スクール水着だけでなくサイハイソックスも同時に購入している。

「やっぱり私はこの旧スク水といわれるスカートタイプが好きだな。

生地も厚目で手触りも良いし、色も白や赤よりこの紺色が良いよね」

満足気に嬉しそうに笑う菜緒を、佳乃は本当に大切な者を見守るように見つめていた。

「よし、僕もさっそくこのスクール水着を着て歩くか」

「芳樹くん、それは止めて。せめて人がいない所でお願い」

「全員でスク水戦隊なんてしゃれてないか？」

いったいどこまで本気なのか分からず菜緒はガクッと脱力していたが、リリスが食い付いてきた。

「それ素晴らしいと思います。今度、エレシュキガル様とニヌルタ様にもスクール水着買って頂きましょうよ」

「委員会のウテルス様支援部隊も全員スクール水着着用なので、みんなそれで揃えば壮観ですね」

佳乃までが乗ってくる。

・・エレシュキガルは胸が大きいけど、まあ似合うか、でもニヌルタさんは小太りで体型があれだから見たくないかも・・

菜緒まで全員が女子用スクール水着で揃った姿を想像してしまっていた。

★　★　★　★

香織の全身はみみず腫れで赤くなり、香織は号泣していた。一本鞭を香織の体に叩き込んでいた博美も相当疲労したようで肩で息している。

「ふう、そろそろ次の拷問に移りますよ、香織さん」

三人はそれぞれ手に太い針を持つ。そして、貼り付けにされた香織の胸の両脇に尚子と亜季が立つ。博美は香織の股間の前にしゃがみこんだ。

「乳首とクリトリスに一斉に突き刺すよ。さあ、覚悟してね。3、2、1、それっ！」

博美の掛け声で三人は同時に香織の乳首とクリトリスに太い針を貫通させる。

「ひぎぃぃぃーーーーっ！！」

香織が絶叫するが、三人は位置を変えまた針を構える。今度は亜季が香織の股間の前にしゃがんでいる。そして、また博美の掛け声で一斉に針を突き刺した。

「あびゃぁぁぁーーーっ！！」

次には尚子が股間の前にしゃがみこんだ。

「三本目、いくよ。3、2、1、それっ！」

「ぶびゃぁぁぁーーーっ！！」

香織の乳首とクリトリスに太い三本の針が交差するように見事に貫通していた。

「さて、次は何をされると思いますか、香織さん？」

亜季が香織の目の前で黒いニッパーをカチカチと鳴らす。香織は恐怖に怯えた顔で、嫌々と云うように首を横に振っていた。

「分からないなら教えてあげる。これから香織さんの二つの乳首とクリトリスをこのニッパーで切断します」

「いやぁ、お願い。もう、あなたたちの前に現れないから許してぇぇっ！！」

しかし、三人の心はそんな言葉で揺らぐ事はなかった。三人は針を刺した時と同じように定位置に着く。冷たいニッパーの刃の感触が震える香織の乳首とクリトリスに当たっている。

「お願いしますぅ！　何でもするから許してぇぇ！！」

香織は必死に許しを乞うが三人の決意は固く、もう戻れない所まできている事を自覚していた。香織は、ここまで三人を追い詰めてしまったのは自分だと気付いていなかった。自分を中心に世界が回っている、そんな自己中心的な考えで世の中を生きてきた結果がこの始末だった。香織が、人の心を思いやる気持ちを持っていたならこの事態は避けられたに違いないが、残念な事に香織は、この場に至ってもその気持ちに気付きもしなかった。亜季も尚子も博美も、やりたくてやっている訳ではない。そこまで追い詰められていたのだ。

「フフ、これで香織さんの敏感な処ともお別れね」

三人は笑みを浮かべている。その目は暗く狂気に満ちていた。

「さあ、それでは切断します。いくよっ、3、2、1、0！！」

三人は一斉にニッパーに力と憎しみを込めて握る。

「ひぎゃぁぁぁーーーーーーっ！！！！」

香織の絶叫が響き、針が貫通したままの乳首とクリトリスがポトリと地面に落ち転がった。三人は、その転がった香織の肉片を石で叩き潰し、この世から消滅させる。

「いい顔になってきたよ、香織さん」

香織の恐怖と苦痛で歪み、涙と鼻水でグショグショに汚れた顔を見て三人は爆笑する。

「次は香織さんのマンコを破壊するね。この爆薬で子宮吹き飛ばすから」

笑いながら爆薬を見せる尚子に香織は恐怖する。

「や、止めて。そんな事されたら死んじゃうよ」

「えっ？　香織さん、生きて帰れると思ってたの。それは、ごめんなさい。香織さんはここで死んじゃうの。分かった？」

「気違いだっ！！　あんたたち頭がおかしいの？」

「うん、多分私たち頭がおかしいと思うよ。こんな事、平気でやっているもんね。でも、そうさせたのは香織さん、あなたのせいなの」

香織は口を開けたままぶるぶると震えている。ここにきて三人が冗談を言っているとは思えなかった。私は殺される。それが実感として感じられ体の奥から恐怖が沸き起こり体の震えが止まらなかった。

「もっと絶望に浸って貰いたいから、手足の骨も折っておこうよ」

博美の提案で巨大な採掘用のハンマーが持ち上げられる。それが大きく振られ香織の右足の膝に叩き込まれた。

「ぶぎゃぁぁーーーーーっ！！！」

香織の絶叫が響く中、次々にハンマーが振られ香織の両足と両腕の骨が砕かれていく。香織は口から泡を吹いて失神していた。

50、点火する憎しみ

５０、点火する憎しみ

拓也は優子をバックから犯していた。優子は両腕を背中で厳重に拘束され、目隠しと口枷、それに鼻フックを掛けられ涙と鼻水で汚れた顔を晒していた。

「あびゅ、あびゅ、あびゅ、あびゅ！！」

拓也と優子はもう何人もの女児、クラスメイトを処刑している。今夜も一人の女児が薬で眠らされ処刑台の上に拘束されていた。その女児の目が覚めるまで拓也は優子を犯して時間を潰すつもりだった。優子は性器に続き肛門まで突き入れられていた。初めは苦痛しかなかった優子であったが、もう肛門を犯される事も快感になっていた。しかし、拓也はもう優子の肛門にも飽きてきて次には優子の尿道に突き入れ犯そうと準備を進めていた。優子の尿道に拡張用のプジーを挿入したままにし、少しずつ優子の尿道を拡げていく。今ではもう2センチのプジーを尿道に挿入している程だ。指なら軽く入る程、拡張されている。まだ小学生の拓也の性器なら、もう少し無理すれば優子の尿道に挿入出来そうだったが、拓也は優子の尿道を切り裂いて入れてしまおうかと考えていた。その時、眠らされ処刑台に拘束されていた女児が、うーんと覚醒する。

「おっ、目が覚めたようだぞ」

拓也は優子を犯すより、そっちの方が大事だとばかりに優子の肛門から自分のモノを抜き拘束台の方へ歩いていく。もっと犯していて欲しかったと思いながら優子も、拓也の後を追い着いていく。

「良美ちゃん、お早う」

拓也が陽気に挨拶する。良美は、今自分がどんな状態でいるのかも分からずいたが、見知った顔を見て安心した表情になっていた。

「良かった、拓也くん。それに優子ちゃん。早くこれほどいてくれる」

良美は手足を固定しているベルトの事を言っていたが、拓也はとぼけて何をほどくの？と言っていた。

「私、裸で縛られているみたいなの。早くとってよ、二人とも。恥ずかしいよ」

大股開きで〝大の字〟に拘束されている良美が懇願するが、良美は自分の手足の上で鈍い光を放っているギロチンには気付いていないようであった。

「せっかくだから良美ちゃんのマンコ、よく観察して撮影しておこうか。優子、準備して」

「はい、ご主人様」

優子は恭しく返事をするとカチャカチャと器具を揃えていく。その二人を見ながら良美は嫌な予感に捕らわれていく。

・・よく見ると二人とも裸だ。それに優子ちゃん、拓也くんの事を〝ご主人様〟って。まさか二人が?・・

そう考えると楽しんでいるような二人の表情も納得がいく。拓也は良美の性器に虫眼鏡を当て、拡大して楽しんでいるようだ。

「うわっ、襞の間も膣の中も白いカスで一杯だ。良美ちゃん、お風呂でマンコ、ちゃんと洗っているの」

拓也が呆れたように声を出す。良美はこんな状態なのに羞恥で顔を赤く染めていた。

「ご主人様、ほら、膣の中に膜があります。まだ何も知らない処女なんですから仕方ないですよ」

優子の言葉で良美はさらに顔を赤くする。

「じゃあ記念にこのハサミで良美ちゃんの膜を切り取って保存しておこうか」

言葉に続いて良美の膣に冷たい金属の感覚が走り、良美は背筋を凍らせる。

「いやぁ、何なの切り取るって?そんなの許されるわけがないよ!!あぎゃぁぁーーーっ!!!」

しかし、拓也は良美の言葉などまるで耳に入らず良美の処女膜の中心の穴にハサミを入れジョキンと切断していた。

「ひぎぃぃーーーっ痛い、痛いよおぉぉーーーっ!!うぐぐうぅぅ

！！」

「痛い、良美ちゃん？でもね、女の子は誰でも一度だけ経験するんだよ。“破瓜“って云うんだよ。良かったね、良美ちゃん大人になれて」

大泣きする良美の口を優子がきつく押さえつける。そして、拓也はジョキジョキと良美の処女膜を楽しそうに切り取っていた。良美の幼い性器から血が溢れだした。

★　★　★　★

尚子たち三人は香織の手足の骨をハンマーで粉砕し、疲れたように肩で息していた。

「さすがに疲れたけど、これでこの女、もう動けないね」

「早く、子宮爆破しようよ。この女の泣き叫ぶ顔、もっと見たい」

「その後、串刺しにして、バーベキューみたいに丸焼きにするんだよね。楽しみ」

三人の少女たちは明らかにもう普通の思考ではなかった。香織を残酷に処刑する。それだけしか頭の中になかった。少女たちは〝大の字〟にしていた香織の足の拘束を解き、今度は天井からのロープで香織の足首を結ぶ。香織は足を開いた状態でロープに吊るされ性器を丸見えにされた。少女たちは作業を分担し流れるようにスムーズに香織の子宮に爆薬を詰めていく。そして、導火線を延ばし準備を

整えた。

「死ぬ前に香織さん、女じゃなくなるんだね。いい気味だね」

「香織さん、なんかに必要ないものだからね。ぐちゃぐちゃになって当然でしょう」

「さあ早く気付け薬で起こしてあげましょうよ。自分の子宮の最後を味わってもらわないと」

博美は香織に薬を嗅がせると、香織はハッと目を覚ました。そして、骨を砕かれた手足の激痛に悲鳴を上げ、夢ではなかったと思い知る事になる。

「手足、痛いよね香織さん。でももっと痛いことするからね。これ何か分かるかな?」

亜季は手に持った導火線を香織に見せる。香織はそれが何か分からないようだったが、よくないものであるのは間違いないと大きく震え始めた。

「分からないかな、香織さん。これは導火線。爆薬に点火するためのものなんだよ。ほら、何処につながっているか、確認してみなよ」

亜季の言葉で香織は、恐る恐る導火線を目で辿っていく。そして、それが自分の膣の中に消えている事に体を硬直させた。

「あんたたち、人間なの?こんな事して許されるわけがない。地獄に堕ちるから!!」

「へぇ、あたしたちに謝るんじゃなくて、そんな事言うんだ。さすが、香織さん。ふふ、それならサービスしてあげるね」

博美が香織に近付くと手に持っていた細長い筒状の物を香織の肛門に突き刺し押し込んでいく。その筒からも導火線が出ていた。

「いやぁ、お願い。ごめんなさい。許してください」

震える声で泣きながら許しを乞う香織の姿に満足したように三人は微笑み合う。そして、導火線に火を点けた。シューッと短くなっていく導火線を香織は恐怖に歪んだ顔で見つめていた。もうすぐ自分の子宮と肛門が爆破される。その恐怖に泣きながら……。

51、復讐の果て

51、復讐の果て

「消して！　早く消してよぉ、お願いぃ！！」

香織は短くなってくる導火線を見つめ、恐怖で顔を歪めながら泣き叫ぶ。このままいけば間違いなく数秒後には自分の子宮と肛門が爆破される。

「誰かぁ！　助けてぇ！　お願いぃ！　もう許してぇ！」

香織は無様に泣き叫ぶが、三人は残酷に笑う。そして、導火線の火はもう香織の股間から垂れ下がっている部分を登り始めていた。

「嫌だぁ！！　助けてよぉぉーーーっ！！！！」

しかし、ついに導火線の火は香織の膣と肛門の中に消える。続いて……。

ボスンッ！！！！

鈍い音が響き、香織の下腹部が一瞬膨らみ膣と肛門から肉片と血が噴き出す。

「あびゃぁぁぁ、あびゃびゃびゃびゃびゃびゃ！！！！」

香織は白眼を剥き口から泡を吹き出す。博美、亜季、尚子の三人は急いで香織を床に下ろし、拘束を解いて机の上に足を開いて載せる。

「急いで、香織さん死んじゃうよ。死ぬ前にもっと酷く痛め付けてあげないと」

尚子と亜季が香織の体を押さえ付ける。そして、博美は先端を加工して鋭く尖らせた鉄パイプを持ち、香織の爆破され煙を上げる膣に鉄パイプの先端を入れる。

「いくよ！！　しっかり押さえててね！！」

博美は渾身の力を込め鉄パイプを香織の膣から突き刺していく。

「ゴバァ、ゴバァ」

香織は口から血を吐き出し、体はビクンビクンと大きく痙攣しだす。

「頭、倒して口が上を向くようにして固定して。最後に蹴り入れて突き刺すから」

香織の頭が机の縁で上を向けて固定される。博美は足を振り上げて鉄パイプに狙いを付けると、思い切り鉄パイプを蹴り込んだ。

「ゴッバァァァーーーーッ！！！！」

香織の上を向いた口から鉄パイプの先端が血飛沫と共に飛び出す。香織は涙を流し苦痛で歪んだ顔で哀れにも絶命しているようだった。

「さあ最後の仕上げだよ」

三人は鉄パイプの両端を持ち上げ、香織を串刺しにしたまま移動させ二股のパイプの上に鉄パイプを乗せる。そして、その下に用意した着火材に火を点ける。着火材が激しく燃え上がり木材にも火が燃え移る。豚の丸焼きのように串刺しにされた香織の体も焼かれていく。無惨に串刺しにされ焼かれていく香織の姿を笑いながら見ている三人に何かが倒れる音が聞こえた。

「お前ら、何してるんだ!!　オイ、香織、大丈夫か!?」

続いて男の怒声が響く。三人はビクッと体を寄せ合ってかたまっていた。何時の間にか男が数人と女が二人、入って来ている。

「どうして？　どうして、ここが？」

普段自分達を虐めている集団の登場に、三人は恐怖で動けなくなっていた。入ってきた女二人は、串刺しにされ焼かれている香織の姿を見て悲鳴を上げる。

「てめえ、何してるか分かっているのか!!　お前らにも同じ事をしてやんよ!!!」

男の一人が激昂して怒鳴り、ドサッとボコボコにされた二人の男を投げ出した。

「コイツらが香織って女を拉致ったなんて自慢気に言ってたからな、ボコって居場所を訊いたんだよ。まさか、首謀者がお前ら三ブストリオだとはな」

「もうコイツら、徹底的に犯して殺していいんじゃね」

「当たり前だ。香織にこんな事しやがって。お前等とは価値が違うんだよ」

「コイツら、もっと酷い目にあわせてやろうよ。すぐに殺さないでさ」

三人に対する殺意が膨れ上がり、爆発寸前だった。三人は震え上がり惨めに許しを乞うと思っていた男女は、落ち着きを取り戻した三人に意表を突かれる。

「その二人は私たちに頼まれただけなのに酷いですよ」

「それに私たちが何故ここを選んだのか分かりますか?」

「ほら、肉の焼けるいい匂いが漂ってきました。あなたたちがここに来たのは却って好都合です」

あまりに落ち着いている三人に不気味さを感じた男女は、辺りを見回しそこに信じられないものを見る。人の焼ける匂いに釣られたのか数体のヴァギナが周りを囲んでいた。

「ここはヴァギナの通り道。そこにいい匂いを漂わせて誘き寄せたんです」

「今日ここに来たヴァギナはラッキーですね。お腹一杯食べられる」

「元々私たちは香織さんを処刑したら、ヴァギナに食べられて死ぬつもりでしたから」

男女は途端に慌て始める。相手が人間ならともかく、ヴァギナ相手に勝算などまるでない。

「きさまらぁぁ！！　殺してやる！！」

一人の男が激昂してナイフを持ち博美に襲いかかるが、その前にヴァギナの触手に捕らえられ空中に持ち上げられる。そして、服を剥ぎ取られ腕や足など触手に巻き付かれ空中で貼り付けにされた。

「助けてくれぇ！！」

男は震える声で助けを求めるが、誰も自分が逃げる事に精一杯で男の言葉など耳に入らなかった。

「ひぃぃぃーーっ！！」

空中で貼り付けにされた男の性器にヴァギナの触手が巻き付く。そして、睾丸毎男の性器を引きちぎった。

「ひぎゃぁぁーー！！」

絶叫する男の股間から血が噴き出す。その男の血をシャワーのように浴びながら博美、亜季、尚子の三人は笑っていた。あの二人には気の毒だけど、他の男女が全員ヴァギナに食べられればこんな痛快な事はない。三人の笑いが止まらなかった。空中に貼り付けにされた男は、もう手足も引きちぎられ食べられていた。その時、一人の女が必死に博美たちの所に辿り着く。

「お願い、助けて。あんたたち本当は逃げ道知ってるんでしょう？」

しかし、博美はすがり付く女を振り払う。女は床に転がり、そこでヴァギナの触手に捕らえられた。

「ひぃぃーーーーっ！！」

悲鳴を上げる女の服が剥ぎ取られ足が大きく拡げられると膣に触手が突き刺さる。そして、グリッと子宮が抜き出された。

「ひぎぃぃぃーーーーっ！！！！」

女が絶叫し、尿道から小便を、肛門から大便を漏らし、膣からは血が噴き出す。女は、そのまま性器に触手が入り込み串刺しにされていく。

「ゴッバァァーーーーッ！！！！」

女の口から血と触手が飛び出し、完全に串刺しにされた女はビクンビクンと痙攣しながら眼球も抉り取られ食べられていった。そして、鼻、耳、舌と順番に食べられていく。丸焼きにされていた香織はもう骨も残らず食い尽くされていた。まさに地獄絵図が繰り広げられている中、ついに三人にもヴァギナの触手が伸びてくる。服を剥ぎ取られ手足に触手が巻き付き身動き取れない三人の肛門にヴァギナの触手が突き刺さる。亜季の肛門に入れられていた空き瓶が砕け散りガラス片が突き刺さった。

「あびゃぁぁーーーーっ！！」

三人は激痛に悲鳴を上げるが、触手はそのまま三人の体を貫いていく。三人は涙を流し体を貫かれる激痛に絶叫するが、お互い繋いだ

手は離そうとしなかった。

・・苦い時いつも一緒だった。死ぬときも一緒だよ・・

三人は繋いだ手を通してお互いの意思を伝え合う。

「ゴッバァァーーーーッ！！！！」

三人は同時に串刺しにされ口から触手と血が飛び出した。そして、膣にも触手が浸入し子宮に絡み付いていく。

ズボウゥッ！！！」

三人同時に子宮も抜き出され食べられていく。ビクンビクンと痙攣を始める三人は更に尿道にも触手が突き刺さり膀胱も抜き出され食べられていった。そして、三人の卵巣も抜き出したヴァギナは美味しそうにそれを食べ、膣壁もバリバリと引き剥がすと口に入れた。もう三人は性器だけではなく眼球も鼻も耳も食べられ、胸もまず乳首が千切られ、胸の膨らみも抉り取られてなくなっていたが、つないだ手だけはヴァギナがいくら引き千切ろうとしても、１つの輪のようになり千切る事は出来なかった。それは彼女たちの肉体を超えた心の力だったのかもしれない。

その様子を静かに見守っている男女がいた。スラリとスタイルのいい体にぴったりとしたスーツ、それにハイヒールを履いた女性と、やはりスーツを着た小太りだか貫禄のある男性。二人はこんな地獄絵図にも関わらず動揺する事もなく冷静に事態を観察していた。

52、神、または悪魔の誕生

52、神、または悪魔の誕生

ヴァギナに食べられていく博美、亜季、尚子。しかし、それでもしっかりつないだ腕が白く光り始めていた。そして、そのまま光のリングのように頭上にも光が広がっていく。それは、まるで後光のように神々しい光だった。

「何が始まったんだ？」

「何か、とてつもなく嫌な感じがするな」

観察している男女二人の前で更に光は強くなっていき、目も開けていられなくなる。そして、その光に吸い寄せられるようにヴァギナが集まり吸収されていった。

「気を付けろ、ニヌルタ。この後、何が起こるか分からんぞ」

「お前も油断するなよ、エレシュキガル。どうも胸騒ぎがする」

さらに強くなった光がようやく消えた後に、〝それ〟はいた。惨神であるエレシュキガルとニヌルタをも戦慄させる〝それ〟は、ゆっくりと動き出す。

「なんだ？　ヴァギナでも人間でもない」

「構えろっ！　来るぞっ！！」

博美の顔がニヤリと笑う。その頭の両側に付いた尚子と亜季の顔も笑みを浮かべていた。〝それ〟は人間の女性の体に3面の顔が付いた頭に、6本の腕、6個の乳房、6本の足。そして、下腹部にはヴァギナの口のような3個の性器が口を開け粘液を垂らしていた。その得体の知れない〝それ〟は背中から生えたヴァギナの触手で二人に向かって攻撃を仕掛けてくる。エレシュキガルとニヌルタも触手を出し対抗するが、〝それ〟は6本の足で瞬間移動のようにニヌルタの間合いに入る。

・・しまった！　速い！・・

ニヌルタは咄嗟に腕でガードするが、〝それ〟はかまわず6本の腕で掌底を打ち込んできた。

「ガハァ！！」

ニヌルタは壁を突き破り吹き飛んでいく。が、その一瞬の攻撃の隙をエレシュキガルは見逃さない。〝それ〟の頭に必殺の蹴りを叩き込もうとするが決まったと思う寸前、側面の亜季の目がエレシュキガルをギョロリと睨み付け、一本の腕の関節がおかしなように曲がりエレシュキガルの蹴りをガードし、もう一本の腕がエレシュキガルの足首を掴むと軽々と振り回し、残りの腕がエレシュキガルに掌底を打ち込む。エレシュキガルも壁を突き破り吹き飛んでいった。

「なかなか、やるな」

ガラガラと瓦礫の中からニヌルタが立ち上がる。

「フフン、だがウテルスに感じた恐怖はこいつには感じんな」

エレシュキガルも立ち上がってきた。そして、二人同時に〝それ〟に向かって飛び出し攻撃を仕掛けた。惨神二人の渾身の攻撃。人間であれヴァギナであれ、この攻撃を受ければ一つ一つの細胞が破壊され塵と成るほどの攻撃だった。しかし、〝それ〟は6本の腕で攻撃を受け、6本の足で踏みとどまり微動だにしない。それどころか、その瞬間に背中の触手がエレシュキガルとニヌルタを貫いていた。さらに動きを封じられたニヌルタを次々に触手が貫き串刺しにしていく。そして、エレシュキガルの頭を6本の腕が両側から挟み締め付けていった。

「うぐぅ」

逃れようと〝それ〟の腕を掴むエレシュキガルであるが、〝それ〟の腕は6本ある。エレシュキガルの頭が潰れてきた。

「はごぉぉ」

おかしな声がエレシュキガルの口から漏れた次の瞬間、エレシュキガルの頭が潰され肉片となり血が飛び散る。頭を潰されたエレシュキガルは股間から尿と大便を漏らしビクンビクンと体を痙攣させていた。

★　★　★　★

買い物を終え歩いているパズスのスマートフォンに着信があった。

パズスは菜緒たちに失礼とことわり電話に出る。電話で話しているパズスの顔が険しくなっていく。そして、電話を切ると菜緒の腕をガシッと取る。

「姫川っ！　いや、ウテルス!!　一緒に来てくれ、エレシュキガルとニヌルタが危ない!!」

「エレシュキガル様が？　嘘っ？　」

リリスが信じられないという顔をするが、パズスと菜緒に続いて走り出す。十六夜と佳乃もそれに続いた。

走りながらパズスは菜緒に通話の内容を説明する。

「どうやら懸念していた新生物が誕生したようだ。エレシュキガルとニヌルタが二人で、それが外に出るのを防いでいるようだが、もうかなりのダメージを受けているようだ」

「惨神のお二人が信じられません」

十六夜が叫ぶが、パズスは険しい顔をしたまま、その信じられない事が起きていると呟く。菜緒も事情を察して走りながらウテルスに変身すると宙に浮き、ロケットのように飛び出した。そして、あっという間に見えなくなる。

「くそっ！　僕も飛べればっ！　ウテルス、頼むぞ!!」

「あれっ、パズス様は空を飛べたのでは？」

十六夜が疑問を口にするとパズスは苦笑いする。

「僕は人間の乳児に擬態してしまったから、まだ能力が完全に戻っていないんだよ。自分がパズスだという記憶が戻ったのも最近だし」

「そ、そうなんですか。失礼をお許しください」

十六夜は頭を下げる。パズスも全速力で駆けているが、その体は小学生である。そのスピードは自転車より速い程度だった。その時、佳乃が皆さんあそこへと一軒のバイク屋を指差す。佳乃は、ヴァギナ対策委員会の身分証を掲示し、そこからバイクを借り、穿いていたフレアスカートを脱ぎ捨てると白い下着を丸見えにして跨がった。

「運転出来る方は？」

「僕は無理だ」

「私もです」

パズスとリリスが答えるが十六夜はオーケーと、やはりタイトスカートを脱ぎ捨て下着姿になるとバイクに跨がる。

「パズスさんとリリスちゃんは後ろに乗って下さい。行きますよ」

佳乃と十六夜はそれぞれパズスとリリスを乗せ、アクセル全開で飛び出した。

★　★　★　★

良美の処女膜を切除し終えた拓也は優子に命じ、次の準備に入る。
カチャカチャと器具を用意しながら優子は泣いている良美に話しかける。

「痛い、良美ちゃん？　でも、もうすぐ痛くなくなるから大丈夫だよ。だって、良美ちゃん死んじゃうの。死んじゃえば、もう痛いことないからね」

良美は目を飛び出さんばかりに見開き、さらに激しく泣き出した。

「助けてぇ！　優子ちゃんたち頭がおかしいの。誰か、助けてよぉぉ！！！」

必死の叫び。届くはずがない必死の叫びが奇蹟を呼ぶこともある。

「何か声が聞こえなかった？」

美奈子に言われ、耳を澄ます萌と若葉だったが二人の耳には何も聞こえない。しかし、美奈子は確信する。ニヌルタから力を授かった美奈子は通常の人間の数倍の聴力も備えている。その耳が確かに女の子の声を捉えたのだ。

「誰かが助けを求めてる」

美奈子は辺りを見回した。

53、廃ビルの対決

53、廃ビルの対決

ウテルスは目指す廃ビルに飛び込んだ。そのウテルスの目に、頭を潰されて糞尿を漏らして横たわるエレシュキガルと、四肢と頭を切断され転がっているニヌルタの姿が入ってくる。

・・ごめんなさい、エレシュキガル、ニヌルタさん。でも、二人とも不死身だから大丈夫だよね・・

ウテルスは〝それ〟に目を向ける。

・・なんておぞましい姿なの。この世に対する恨みが固まって動いているように見える。こちらまで憎しみが高まりそうで怖い・・

ウテルスも、この怪物を世に放ってしまっては危険だと判断し、ここで怪物を止めなければと考える。ウテルスは腰の横に拳を当て集中する。ウテルスの拳が赤く輝き始めた。

「レッドセンセイション」

ウテルスは瞬間移動のような光速のスピードで〝それ〟との間合いに入る。そして、赤く輝く拳を〝それ〟の頭に打ち込んだ。筈だった。〝それ〟は6本の足で、ウテルスと同じスピードで攻撃を避け、逆に6本の腕で攻撃してくる。ウテルスは〝それ〟の攻撃を避ける

と後ろに跳び距離をとった。

・・速いっ！　私と同じ動きが出来るの？・・・

ウテルスが次の手を考えあぐねていると、後ろで何か動く気配がした。

「ウテルス、おそらくソイツには物理攻撃は効かない。私とニヌルタで散々攻撃を打ち込んだが、ダメージを与えられない。だが、ウテルス。お前にはこういう相手にも有効な技があるだろう。それを使え」

「エレシュキガル、良かった。でも、ダメだよ。シナイ契約は、一の拳を打ち込まないと。こんな速い相手だと、それが当てられない」

「もう1つあるだろう、ジャッジメントを使え。あれなら、広範囲に効果がある」

「でも、ジャッジメントは発動するまで時間がかかるの」

「心配するな、ウテルス。その時間は僕とエレシュキガルが作る。僕も遣られっぱなしじゃ気分が悪いからな」

エレシュキガルに続き、ニヌルタも立ち上がってきていた。

「ニヌルタさん、ありがとう。でも、一緒にジャッジメント受けたら消滅してしまうかも知れないよ」

「そうだな。私は生き残ったが、性悪のニヌルタは分からんな」

「構わん！　それより、こいつを消す事の方が重要だ」

即答するニヌルタにウテルスは驚いていたが、さすがにヴァギナの頂点に立つ惨神の一人だと尊敬の念を抱いた。

「うん、お願い！　エレシュキガル、ニヌルタさん」

エレシュキガルとニヌルタは〝それ〟に向かって再び飛びかかっていった。

「神だか悪魔だか知らんが、我らとて神と崇められている者、ウテルスの準備が整うまで貴様を足止めしてやる」

「僕の力がパワーだけだと思うなよ！！」

ニヌルタは両手の１０本の指先を〝それ〟に向けると、ニヌルタの指先から何かが発射された。

「ブラッドマシンガン！！」

それは、ニヌルタの血液を凝縮し撃ち出したものだった。無数の弾が〝それ〟を襲う。しかし、〝それ〟は雨のように無数に襲ってくる弾丸を触手で叩き落としていく。そこへエレシュキガルも同時に攻撃を仕掛けた。

「ガステックカッター！！」

エレシュキガルの大きく開けた口から黄色い光線のようなものが放出され、その光線は壁に突き刺さるとそのままエレシュキガルが頭を動かすにつれ、壁を溶かしながら切り裂いていく。それはエレシ

ユキガルの胃液が圧縮され、ダイヤモンドをも切り裂く水圧カッターのように放出された光線だった。エレシュキガルは〝それ〟に向かって壁を切り裂いていく。横の亜季の目で、エレシュキガルの攻撃を確認した〝それ〟はエレシュキガルに触手で攻撃する。しかし、エレシュキガルは触手で串刺しに成りながらも攻撃の手は緩めない。そして、ついに〝それ〟の足を2本切断した。さらに、バランスを崩した〝それ〟にニヌルタの弾丸が撃ち込まれ、〝それ〟の腕も2本、爆裂するニヌルタの弾丸で吹き飛んだ。

「ググ、ゲゲゲ……。ワタクシニ、テイコウスルツモリナラ、ケシテサシアゲマス」

〝それ〟は博美の声で喋り、唱和するように左右の尚子と亜季の声も響いた。

「ケシテアゲル」

「キエナサイ」

そして、切断された足も爆裂した腕も再生を始めていた。

「思った通り、ただ吸収しただけでなく、こいつヴァギナの再生能力も持っているか」

「まったく、厄介な奴だな。ウテルス、早くしろ！！」

エレシュキガルとニヌルタの猛攻にも耐えきった〝それ〟は、腕と足の再生をほぼ終了させ、次の攻撃の準備にはいっている。

「くそッ！！　来るぞっ！！」

「どうせ、防ぎ切れん。攻撃有るのみだっ！！」

エレシュキガルとニヌルタが迎え撃つ構えを見せた時、後方から黄金色の光が包み込んでいき、その光は〝それ〟も包み込んだ。

「審判の時間です。ジャッジメント！！」

ウテルスの声が響いた。

★
★
★
★

佳乃たちが目指す廃ビルに到着した時、黄金色の光がビル内から外に広がった。

「あの光はウテルス様のジャッジメント　」

佳乃の呟きを聞きパズスは、光を見上げる。

・・あれがエレシュキガルの言っていたジャッジメントか。あの技から逃げられるものはいないと言っていたが・・

パズスはそれでも胸騒ぎが止まらなかった。

「あれは、あの時の光」

「うん、あの綺麗だけど怖い光だね」

十六夜とリリスも黄金色の光を認め、その時を思いだし恐怖に震えた。

★　★　★　★

「この家から聞こえる」

美奈子は萌と若葉に言うと、隠れながらそろそろと家の中を窺った。家の中は誰もいないかのように静まり返っているが、美奈子の耳には近付くにつれ女の子の助けを求める声がはっきりと聞こえてきた。

「この家の何処かに助けを求めてる女の子がいる」

「私たちには聞こえないけど美奈子ちゃんが言うなら間違いないね。すぐ、パズス様に連絡しよう」

「うん、私もニヌルタ様に連絡するよ」

三人はいったん家から離れ、スマートフォンで連絡をとろうとするが、ニヌルタは戦闘中、パズスもバイクで疾走中で電話に出る事は出来なかった。

「ダメ、連絡つかない」

「私も」

「エレシュキガル様にもかけてみたけど出ないね」

普段ならすぐに電話に出てくれるエレシュキガルたちが電話に出ないということは、余程の事が起こっているのだろう。美奈子たちは何か緊急事態が起きているのだと直感したが、ここで助けを求めている女の子も緊急事態だ。

「私が行く」

美奈子は萌と若葉に、ここで待っててと告げると怪しい家に一人乗り込んで行った。

５４、審判の後

５４、審判の後

博美は全裸でいる自分に気が付いた。

・・どうして？　ここは何処？　・・

辺りを見回しても何もない。広大な空間の中に一人取り残されているようで博美は不安になっていた。すると目の前に何かが形作っていく。

・・何、これ？　・・

ブヨブヨした人間の脳の塊のような物体が宙に浮き、先端が刃になっている触手が何本も伸びていた。その物体はゆらゆらと博美に近付いて来る。

「あ、あ、あ、あ」

博美は逃げようとするが体が動かない。それどころか、バシッと空中に大の字に固定されてしまった。

・・何？　助けてっ・・

震える博美に得体の知れない化け物が迫ってくる。そして、シュッ

と触手が伸びてくる。

「あうぅぅーーっ！！」

博美は下腹部に鋭い痛みをおぼえ悲鳴を上げた。博美の性器に化け物の触手が突き刺さっていた。それは博美の膣に入り込み、子宮口を切り裂き子宮を串刺しにする。博美の股間から血がボトボトと流れ落ちた。

「ひぎぃぃーーーっ！　痛いぃぃーーっ！！　」

博美は性器を襲う激痛でシャッーッと小便を漏らし始めた。すると、今度は博美の小便を漏らす尿道にも触手が突き刺さる。

「あんびゃぁぁーーーっ！！！」

触手は博美の尿道を切り裂き膀胱を串刺しにして、さらに博美の下腹部を突き破り血塗れの先端が顔を出していた。

「あ、あ、あ、あ、あ」

博美は自分はここで殺されると恐怖した。しかも、一思いに殺されるのではなく。残酷に少しずつ体を壊され殺されていく。

・・もう、許して・・

博美は、自分は一度死んだと思っていた。ヴァギナに食べられて…。だが、何故か生き返りまた殺されようとしている。因果応報。博美は自分が犯した残酷な所業を思い浮かべる。

・・悪いのは向こうなのに・・

博美は納得がいかないが、また股間に激痛が走る。触手が博美の小陰唇を引き伸ばし切り取っていた。

「ふぅ、ふぅ、ふぅぅぅーーっ」

博美はあまりの苦痛に過呼吸になっていく。しかし、触手はかまわず博美のクリトリスも切断した。そして、膣の周りに触手が突き刺さると、ぐるりと周囲を切り裂き、膣壁を取り出していく。博美は生きながら性器を解体されていく。膣壁が取り出されると次には子宮が、ズボゥと抜き出される。さらに、２つの卵巣も抜き取られた。

「ふひゅー、ふひゅーっ」

大量の涙と鼻水を流す博美の汚れた顔面にも触手が伸びてきた。そして、博美の目に触手が突き刺さる。触手はそのままグリンと眼球を抉り出してしまう。その抉り出された眼球の穴に別の触手が突き刺された、博美の脳の前頭葉が破壊された。

「あびゃびゃびゃびゃ」

博美は意味不明な言葉を口走り、体がビクンビクンと大きく痙攣している。博美の意識は無に向かって堕ちていったが、その意識に直接声が聞こえた。

・・博美ちゃん、頑張って・・

・・博美ちゃん、一人じゃないよ・・

博美はその確かに聞こえた声に涙していた。

黄金色の光が薄れていき、ウテルスの体が宙から降りてくる。そこへ、到着した佳乃たちが駆け上がって来た。

「大丈夫か　エレシュキガル　」

パズスがエレシュキガルに駆け寄るが、ニヌルタの姿はない。

「あの馬鹿　やはり駄目だったか……　」

ポツリと呟くエレシュキガルは寂しそうな目をしていた。パズスも、そのエレシュキガルの呟きで察する事が出来た。

「ウテルス様、しっかり」

降り立ったウテルスだが、力を使い果たしフラフラとよろけるところを佳乃が支えていた。

「ごめんなさい　ニヌルタさん、ごめんなさい　」

姿の見えないニヌルタに気付きウテルスは涙を流しながらうわ言のように繰り返していた。

「気にするな、ウテルス　これは奴が自分で望んでしたことだ　気にやむ事はない　」

エレシュキガルもウテルスを慰めるが、ウテルスの後悔は大きかった。

「あ、あれを見てください！！」

その時、十六夜の叫びで全員が顔を上げ、十六夜の指差す先を見る。
そこには、３つの顔、６本の腕、６本の足の〝それ〟がいた。

「どうして？　どうして消えていないの？　」

愕然とするウテルスだが、他のウテルスのジャッジメントを知る者も唖然と〝それ〟を見つめていた。

「奴は、ジャッジメントで倒せない　あの生き残った人間と同じだというのか　しかし、あの化け物になるまえの女は明らかに罪悪感を持っていたのに何故なんだ　」

エレシュキガルが叫び、パズスが〝それ〟に飛び掛かろうとするのを止める。

「駄目だ、パズス　今は奴に手出し出来ない　世界が崩壊する　」

「しかし、このままではニヌルタが無駄死にだ　このまま行かせるつもりなのか、エレシュキガル」

普段なら冷静なパズスが感情に支配されていた。

「ごめんなさい、芳樹くん　私のせいだ！！」

ウテルスは佳乃の手を振り切りパズスに抱きついて引き留める。ウテルスに抱きつかれパズスも冷静さを取り戻してきた。

「いや、すまない　ウテルス、もう大丈夫だ　」

〝それ〟の背中から巨大な翼がひろがり、〝それ〟は黄昏の空に向かって飛び出した。そして、みるみるうちに小さくなり、やがて視界から消えていった。残されたウテルスたちは、この放たれてしまった化け物の脅威に戦慄していた。

★　★　★　★

美奈子が玄関のドアを開けようとした時、ドアは内側から開けられた。美奈子は身を隠す事も出来ず、その場に立ちすくんでいたが、中から出てきたのは美奈子より小さな女の子だった。その女の子もドアの前にいる美奈子を見て驚いた表情をする。

「ごめんなさい　少し、いいかな　私は桜宮美奈子　」

美奈子は女の子に警戒させないように自分の名前を名乗り笑顔を向けた。

「私は麻衣　吉崎麻衣です　何か御用ですか？」

「このお家には他に誰が居るの？」

美奈子の顔をじっと見つめていた麻衣は、この人なら安心と思ったのか、両親は死んでしまってお兄ちゃんだけですと素直に答える。

「他に女の子はいないかな？　この家から女の子の声が聞こえたんだけど　」

美奈子の言葉に麻衣はビクッと体を震わせ俯いてしまった。やはり何かある。美奈子は麻衣の態度から確信した。

55、次なる惨劇

55、次なる惨劇

ウテルスのジャッジメントが発動し、異様な新生命体を滅ぼせる筈だった。しかし、新生命体は逃げ延び、逆に同志でもあったニヌルタが消滅してしまった。ジャッジメントを放ったウテルスは、自分の犯してしまった事を後悔し立ち上がれなくなっていた。

「ごめんなさい、芳樹くん、エレシュキガル。私はあなたたちの仲間を殺してしまった。私にも協力してくれていたニヌルタさんを……。私は取り返しのつかない事をしてしまった。どうすればいいの」

「言ったろう、ウテルス。これは奴が自分で選んだ事だ。それにジャッジメントを使えと言ったのは私だ」

エレシュキガルもパズスもウテルスを責める事なく、逆に慰めてくる。

「ウテルス様、お気持ちは分かりますが、今はあの逃げた化け物をどうするか考えましょう」

佳乃もウテルスを支えながら声をかける。しかし、ウテルスは自分を責め続ける。無理もない、ウテルス様はまだ子供だ。こんな小さな子供が重責を背負い戦っている。佳乃はウテルスを抱えるようにして座らせた。

「パズス、お前はウテルスの事をよく知っているのだろう　お前に任せる　慰めてやってくれ　まったく、ニヌルタの奴、この酷い世界から上手く逃げやがって　」

十六夜はその時、エレシュキガルの瞳が潤んでいるの見て驚いた。エレシュキガル様が泣いている？十六夜にとってそれは信じられない光景であった。以前のエレシュキガル様からはとても考えられない出来事だ。エレシュキガル様もウテルスと出会って何かが変わってきているのかも、それは私たちにとってどんな影響を及ぼすのだろうか。十六夜はこれからの未来が大きく変わっていくのではと考えていた。

「んっ、若葉から着信があるな　」

スマートフォンの着信に気付いたエレシュキガルが呟くと、パズスも僕にも萌から着信があると気付き折り返し発信していた。

「あっ僕だ。すまない、緊急事態だったもので。ふんふん。分かった、僕も向かう。美奈子に無理するなと伝えてくれ。いや、ニヌルタは……。後で詳しく話す　」

電話を終えたパズスは十六夜を振り向く。

「十六夜、急いでバイクで送ってくれ　」

「はい、パズス様　」

「私も行く。佳乃、乗せてくれるか。リリス、ウテルスについてやってくれ」

若葉と通話を終えたエレシュキガルも現場に向かう決心をする。

「どうしたの？　何かあったの？」

ウテルスがパズスとエレシュキガルに訊くが二人とも何でもないと手を振る。が、ウテルスは二人の表情から何かが起こっているのを感じ取っていた。

「私も行く」

「お前は休んでいろ、ウテルス。ジャッジメントを使って体力のないお前はフラフラじゃないか」

ヨロヨロと立ち上がるウテルスにエレシュキガルは、たいした事じゃないから少し休めと言うが、ウテルスは言葉を強める。

「いやだよ。もう大切なお友達に何かあるのはいやだよ。留美子ちゃん、量子ちゃん、律子ちゃん、それにニヌルタさん。もう、いやだ。もし二人に何かあったら私、生きていられない！！！！」

ウテルスの言葉にしばらく固まっていたエレシュキガルだったが、ウテルスに近付くとギュッと抱き締める。

「その言葉、そっくり返そう。いいか、ウテルス。お前に何かあれば私も生きてはいられない」

今度はウテルスが固まっていた。

「リリス、ウテルスをしっかり押さえておけ。佳乃、急ぐぞ、美奈

子が心配だ」

茫然とするウテルスを置き、四人は駆け出していた。そのウテルスにリリスが羨ましそうに話しかける。

「ウテルスさんが羨ましいです。あのエレシュキガル様に生きてはいられないとまで言ってもらえるなんて……」

★　★　★　★

拓也と優子は、良美の処刑の準備を進めていた。大の字に拘束され、処女膜を切除された良美は股間から血を流し号泣している。

「まず、良美ちゃんの綺麗な恥丘に釘を打ってみようかな　どう思う、優子？」

「はい、このつるつるの恥丘に釘が突き刺さっている姿は興奮します」

「さすが優子だ。分かってきたね　良美ちゃんが自分でも見えるように顔を起こしてあげて」

優子は拓也の指示通り良美の頭を起こし、自分の恥丘が見えるように固定する。拓也は太くて長い五寸釘を用意しハンマーも手に持つ。そして、良美の恥丘の中心に五寸釘を当てた。

「いやぁぁーーっ！助けてぇぇーーっ！！」

良美が絶叫するが拓也はかまわず五寸釘にハンマーを打ち下ろした。

ガァンッ！！

鈍い音がして良美の恥丘に五寸釘が突き刺さる。

「あっ！！びゃぁぁーーーーっ！！！」

ガンガンガンガンガン！！

拓也は良美の恥丘にどんどん五寸釘を打ち込んでいく。そして、五寸釘の根本まで打ち込んでしまった。

「あひゅーっ、あひゅーっ」

過呼吸になって口から泡を吹いている良美の恥丘に拓也は2本目の五寸釘を当て、またガンガンと釘を打ち込み始めた。

「あらあら、可哀想にね。痛い？苦しい？ちゃんと自分の恥丘に釘が打ち込まれていくところ見ているんだよ。ふふっ、その無様な顔も撮影しておいてあげるからね」

優子は、恥丘に五寸釘を打たれ号泣する良美の顔を楽しそうに眺めスマートフォンで撮影している。拓也は良美の恥丘に3本の釘を打ち込むと満足したように次の準備を始める。切っ先が凶悪に輝く長い槍だ。

「さあ、いよいよ良美ちゃんの処刑の始まりだ。この槍でマンコから口まで串刺しにするからね　その前に優子、恥丘の釘を抜いてくれ。槍を突き刺す時に邪魔になるからな　」

「はい、御主人様」

優子は釘抜きを手にすると、良美の恥丘に根本まで打ち込まれた釘を抜き始める。それは、釘を打たれる時と同程度の苦痛を良美に与えた。

「あぎゃぁぁーーーっ！！！」

優子は楽しむようにグリグリと釘を捻りながら抜いていく。そして、3本の釘を時間をかけて抜き終えた。

「次の痛みはこんなものじゃないからね。マンコから串刺しにされる痛みを存分に味わってね」

もう言葉も出せず号泣している良美の性器の中心に狙いを付け、拓也は槍を突き刺していく。

「ひょ、ひょ、ひょ、ひょ」

自分の膣内に入ってくる冷たい槍の感触に良美の息が荒くなっていく。

「さあて、まずは子宮を串刺しだ」

槍の感触で良美の子宮に突き当たったと感じた拓也は一気に槍を押し込んだ。

「ふ、ぎょぉぉぉーーーーーーっ！！！！」

良美の絶叫が響き渡り、膣から血が溢れ出した。良美の処刑が執行され、まずは容赦なく子宮が串刺しにされた。

56、再びの悪夢

56、再びの悪夢

子宮を串刺しにされた良美に、処刑は執行されていく。

「どう、痛い？子宮を串刺しにされるなんて普通経験出来ないもんね。良美ちゃんは運がいいね。これから、もっと痛い経験も出来るんだよ」

優子が残酷に良美の耳元で囁くが、良美は自分の体を襲う激痛で優子の声など耳に入らなかった。そんな良美をさらに痛め付ける為、拓也は良美の子宮に突き刺した槍をグリグリと回転させる。

「あぎゃぁぁーーーっ！！！」

良美が絶叫し性器からは血が溢れ出してきた。

「よーし、優子。良美ちゃんの頭を上に向けてくれ。これから槍を蹴り入れて、口まで串刺しにするから」

はいと返事した優子は良美の頭を押さえ付け、固定具できつく性器から口まで一直線になるように固定していく。そして、涙と鼻水を流し呻き声をあげる良美の頭が完全に固定された。

「じゃあ良美ちゃん、いくよ。特大の苦痛だ」

拓也が足を上げ、良美の性器に突き刺さる槍を蹴り入れようとした、その時、ドアが破壊されヴァギナが雪崩れ込んで来た。

「な、なんだ？」

咄嗟に拓也は床に転がりヴァギナの触手攻撃から逃れる。転がりながら部屋の隅まで移動した拓也は、そこに待機させていた自分のヴァギナに侵入してきたヴァギナを倒すよう命令した。

「優子は？」

拓也が辺りを見回すと、優子は良美を拘束した処刑台の前でヴァギナの触手に貫かれていた。

★　★　★　★

佳乃は後ろに乗っているエレシュキガルに話しかける。

「エレシュキガルさんはウテルス様のことを大切に思ってくださっていたのですね。嬉しいです。私ではウテルス様を守る事が出来ませんので……」

「自分を卑下するな、佳乃。ウテルスの本当の助けになれるのは佳乃だろう。私などウテルスの盾になることくらいしか出来んよ」

「それだけではありませんよ。私はエレシュキガルさんや他の皆さんも心から尊敬しています。だって、エレシュキガルさんたちは私

の事を対等に扱ってくれている。私たち人間は、牛や鶏や魚を対等に扱った事などありません。それが出来るあなたたちは私にとって神に等しいです」

「まったく、人間は大袈裟だな。もし牛や鶏と言葉が通じてコミュニケーションがとれれば佳乃も同じことが出来るだろうよ。佳乃はそういう人間だ。ウテルスに対する態度を見ていれば分かる。それに、私はヴァギナの中では神と崇められている。今さら佳乃に神と言われてもな」

エレシュキガルの言葉の最後は笑い声になっていた。佳乃は、そんなエレシュキガルに強く惹かれている自分を感じていた。ウテルス様はもちろん、この方の為にも力を尽くそう、そう決意していた。

★
★
★
★

美奈子は処刑台の上の良美の姿を確認する。あの男女が何故ヴァギナを操れるのか不明だが、敵のヴァギナさえ倒してしまえば残りの男女を制圧するのに手間はかからない筈だ。それに女の方はもうこちらのヴァギナの触手に貫かれ深手を負っている。ヴァギナの数もこちらの方が多い。

・・問題ない。もう部屋の隅まで追い詰めている・・

美奈子は処刑台の良美の拘束を解いていく。意識はないがまだ生きている事を確認した美奈子は、良美の性器に突き刺さっている槍の処置をどうしようかと考えたが、下手に抜いて大出血がおきたら不味いのでパズスたちが到着するまで可哀想だがそのままにしておく

事にした。

「ごめんなさい、もう少し頑張ってね」

美奈子は良美に声をかけ、部屋の隅に目を向ける。敵のヴァギナは美奈子のヴァギナに取り囲まれ、触手で切り刻まれていた。もう制圧は時間の問題かと思われた、その時ドアから麻衣が飛び込んで来た。

「お兄ちゃん！」

「麻衣ちゃん、危ない！外にいて」

美奈子が叫ぶが麻衣は拓也に向かって走って行く。慌ててヴァギナに攻撃を中止するよう命令した美奈子だったが……。

「あびゃぁぁーーーっ！！」

麻衣の絶叫が響き渡る。麻衣の股間にヴァギナの触手が突き刺さっていた。

「あぶあぶあぶあぶあっぶぅぅーーっ！！」

麻衣の口から血が吹き出し、それと共に触手の先端が顔を出した。麻衣は股間から口まで串刺しにされビクンビクンと体を痙攣させていた。

「どうして？　なんであなたが妹を串刺しにするの？」

麻衣は拓也に命令されたヴァギナに串刺しにされていた。

「麻衣を処刑するのが僕の目標だった。少し早いが仕方ない。麻衣は処刑されて生まれ変わるんだよ」

「あっびゃぁぁーーーーっ！！」

拓也の隣で今度は優子が串刺しにされていた。そして、串刺しにされた麻衣と優子の性器にさらに触手が入り込み、ズボゥと子宮を引き摺り出す。拓也はその引き摺り出された二人の子宮を両手に持ち大声で笑い始める。

「これが子宮、ウテルスだ！　ウテルスは力の源。麻衣と優子のウテルスで新たな力が生まれる。麻衣も優子も生まれ変わるんだ」

拓也は美奈子の見ている前で抜き出した麻衣と優子の子宮に食らい付く。

「狂っている」

美奈子には拓也が狂人にしか見えなかった。もうここで始末しておいた方がいい。美奈子は震えながらヴァギナに命令する。美奈子の命令でヴァギナの触手が何本も拓也を貫いた。

「あぶぅぅっ」

拓也は血を吐いてよろけるが子宮に食らい付いたまま笑みを浮かべる。そして、拓也、麻衣、優子、ヴァギナの体が１つに融合していくように見え、光だしていく。

・・これは、まさか・・

美奈子は前に見た動画を思い出していた。そのうちに目を開けていられない程の輝きになる。

「美奈子、逃げろ！！」

誰かの声が聞こえ美奈子の体が軽々と抱き抱えられる。そして、あっという間に家の外に連れ出されていた。

「嫌な予感が当たったな」

「ここでも、あの化け物が生まれるとはな」

「パズス様、エレシュキガル様」

美奈子が辺りを見渡すと、既に良美は十六夜が処置を施し、一命を取り留めていた。

「今度こそ始末せんとな。パズス、お前のあれは使えるか？」

「ああ、だいぶ能力は戻ってきたからな。大丈夫だ」

「よし、では行くか」

家の中に向かおうとする二人を佳乃が慌てて引き留める。

「待って下さい。もし、お二人に何かあったらウテルス様が悲しみます。ここは私が行きます。この対ヴァギナ用の銃を持っていますので」

「確かにその銃は有効かも知れんが、佳乃、お前では無理だ。あのウテルスと同じスピードで動けるかも知れん奴だ。佳乃では当てられん。気持ちは嬉しいがここで待っていろ」

「そうだな、佳乃さんはここで菜緒が来たら止めてくれ。あいつの事だから必ず無理して来るからな」

パズスとエレシュキガルの二人はまるで近所のコンビニまで買い物に行くような気軽な感じで家の中に入っていった。が、中に入った途端、不穏な空気に包まれる。そして、目の前に〝それ〟はいた。

57、惨神　VS　クリーチャー

57、惨神　ＶＳ　クリーチャー

パズスとエレシュキガルは目の前の〝それ〟を油断なく見つめ戦闘態勢を整える。廃ビルで見た〝それ〟は３つの顔に６本の腕と足だったが、今目の前に居る〝それ〟は腕が４本の他は腹部に女性の顔が付いた人間の体のようであった。

「油断するなよ、エレシュキガル」

「分かっている　ニヌルタの仇をうってやる」

エレシュキガルの言葉にパズスは、あれっと思った。仇をうつ。以前のエレシュキガルであれば考えられない台詞だ。考えてみれば、惨神と呼ばれる仲間ではあるが、それぞれが孤高の存在であり、このように協力して事に当たることなど今までになかった事だ。ましてや、仇をうつなど考えた事もない筈だ。それが今、自然にその感情が込み上げてくる。

・・僕たちも進化しているという事か。感情が生まれてきている。僕も人間に生まれていれば姫川と将来結婚とかしたのかな……　・・

パズスは、そこまで考えて慌てて首を振る。

・・何考えているんだ、僕は。どうして、あんなドブスの姫川と…

・・・・

「おい、何、ニヤついているのだ。くるぞっ！！」

エレシュキガルの言葉でハッと我に返ったパズスに〝それ〟の拳が突き刺さっていた。そこへエレシュキガルの光速の蹴りが叩き込まれるが〝それ〟はズボッと拳を抜いて後方に退き、エレシュキガルの蹴りを避けると、エレシュキガルの膝に2本の肘を叩き込む。が、瞬時に腹部の傷を再生したパズスが〝それ〟の腕を掴みバキッとへし折った。

「ガステックカッター」

エレシュキガルの口から光線のような胃液が放出され、〝それ〟のもう1本の腕も切断した。〝それ〟は後方に退き、いったん距離をとる。

「どうやら、さっきの奴よりは弱いようだな」

「いや、まだ分からない。油断するなよ、エレシュキガル」

〝それ〟は不思議そうに首をかしげ、折られた腕と切断された腕を見ている。

「再生スピードもさっきの奴よりも遅い。畳み掛けるぞ！」

エレシュキガルは再び口から高圧の胃液を吐き〝それ〟の腕をもう1本切断する。そこへパズスも飛び掛かり口を大きく開く。

「ソニックミサイル」

パズスの口から高周波の音波がミサイルのように打ち出される。これに当たれば振動で細胞の結合が破壊され塵になるしかない筈だった。しかし、〝それ〟はエレシュキガルと同じように口から高圧の胃液を吐き、パズスの打ち出したソニックミサイルを切り裂き、そのままパズスも真っ二つに切り裂いた。そして、さらに細かく切り裂いていく。

「な、なんだと。私の技を……」

〝それ〟は次にエレシュキガルに顔を向け、口から音波を放射する。

・・いけない。これはパズスの・・

エレシュキガルは咄嗟に身をかわすが、家屋が破壊され外にいた佳乃たちが丸見えになっていた。

・・まずい。まさか奴は・・

エレシュキガルの危惧したように〝それ〟は佳乃に向かって音波を放った。

「ひっ！！」

佳乃は覚悟を決めたが、エレシュキガルが佳乃の前に立ちはだかる。そして、もろに〝それ〟の音波を浴びてしまった。

★　★　★　★

ウテルスは立ち上がるとヨロヨロと歩き出した。

「待って下さい、ウテルスさん。まだ無理ですよ」

リリスが引き留めるがウテルスは、もう大丈夫と笑った。

「ここでウテルスさんを行かせてしまったら、私がエレシュキガル様にお目玉をくらいます。それでもウテルスさんは行きますか？」

「うっ……」

そうリリスに言われるとウテルスは弱い。自分の為にリリスが怒られる事になっては申し訳ない。それでも、ウテルスはパズスとエレシュキガルの元に駆けつけたかった。

・・リリスちゃんが後で怒られたら可哀想だし……・・

ウテルスの頭では妙案が浮かばなかった。どうしようかとウテルスが悩んでいるとリリスが仕方ないというように、今から人を呼びますからその人に背負ってもらって現場に向かって下さいと言う。

「ニヌルタ様の側近の上級ヴァギナです。空を飛べますのでそれで現場まで送ってもらって下さい。ウテルスさんが自分で飛んでは体力を消耗してしまうと思いますので」

「でも私、ニヌルタさんを……」

「大丈夫ですよ。向こうに着けばエレシュキガル様もパズス様もいらっしゃいます。惨神のお口添えがあれば何も問題ありません」

リリスは軽く答えるとスマートフォンで用件を話し電話を切った。それから間もなく廃ビルの窓から一人のスーツを着た年配の男性がやって来た。見た目は普通の人間のようだが、その背には黒い大きな羽根が生えていた。

「遅くなりました、リリスさん。ウテルス様と云うのはそちらのお方で宜しいですか？」

「ええ、そうです。早くエレシュキガル様の元へ連れていってあげて下さい」

リリスは男に告げるとウテルスに向き直り、バアルさんですと紹介する。ウテルスも頭を下げ、早速バアルに背負われ飛び立っていった。リリスも走り出すが、すぐにウテルスとバアルの姿は見えなくなっていった。

★　★　★　★

その頃、とある山中で一人のセーラー服を着た少女が数人の男に暴行を受けていた。無理矢理車に詰め込まれ、こんな山の中まで連れて来られた少女は、車から荷物のように降ろされ周りを取り囲まれ恐怖でガタガタと震えていた。少女はもう嫌な予感しかしなかったが、現実は少女の予感よりもさらに酷い事になるのだった。

「一応、名前教えてもらおうか」

男の一人が少女の胸ぐらを掴んで凄むように言う。少女は答えようとするが、震えてしまって声が出なかった。すると、その男は少女の頬を思い切り平手で打つ。

ぱしぃぃーー！！

大きな音が響き少女の目から涙が零れ落ちた。

「泣いてんじゃねえよ。自己紹介しろって言ってんだよ」

男はもう一度少女の頬を打った。

「も、森山みどり、１３才です」

少女は震えながら泣き声で答える。

「そうかぁ、みどりちゃん、１３才かぁ。可哀想に１３年しか生きられない事になるんだな　でもその前に可愛がってあげるから運が良かったな」

男が話している間に他の男たちが機材を準備始める。

「みどりちゃんは俺らが創るスナッフビデオの主役に成れるんだ。嬉しいだろ」

みどりは意味が分からなかったが、男の口調や態度から自分の運命を悟り、大きく泣き出していた。

「おっ、いいねぇ。みどりちゃんの泣き顔最高。おい、この顔アッ

プで撮っとけよ」

黒髪三つ編みお下げで地味な顔のみどりが顔を歪めて泣いている姿がアップで撮影されていく。

「うーん、もう少しいい顔にしようか。お前ら、頭と腕を押さえ付けろ」

男の命令でみどりは頭と腕を動かせないように3人の男にがっしりと押さえ付けられた。そして、そのみどりの前の男はテニスのラケットを持っていた。それが何処に叩き付けられるかは明白であった。

「ひぃぃ、許してくださいぃぃ」

みどりは必死に許しを乞うが、男は構わずみどりの顔面をラケットで思い切り打ちつけた。

バシィ!!

「あひぃぃーー!!」

みどりの顔にラケットのガットの痕がくっきりと残る。

「なかなか良い顔になってきたな。続けていくぞ」

バシィ、バシィ、バシィ、バシィ、バシィ、バシィ、バシィ!!

「あぶっ、あぶっ、あぶっ、あぶっ、あぶっ、あぶっ、あぶぅぅっ」

「あれっ、タケシさん。この女、もう漏らしてますよ」

みどりの足元には湯気を立てて水溜まりが出来ていた。

「あれぇ、みどりちゃん。誰が漏らしていいと言ったんだよ。漏らすところをアップで撮影するのが台無しじゃねえか」

怒りに任せてタケシはみどりの顔面を殴り始めた。たちまち、みどりの顔面が腫れ上がり鼻の骨も前歯も折れてしまった。

「うぅうぅーー」

意識が混濁して呻き声を上げるみどり。だが、みどりの受難は始まったばかりであった。

58、守るべきもの

58、守るべきもの

エレシュキガルは〝それ〟の放った超音波をもろに浴びてしまった。エレシュキガルの体の末端部分から徐々に細胞が崩れていく。両手の指が塵となり消滅していった。

・・クソッ、このままでは再生が間に合わない・・

エレシュキガルの足先も消滅し始めていた。このままいけばエレシュキガルの細胞は全て塵になり、そこから再生出来るのかはエレシュキガル本人にも分からなかった。が、そこへ切り刻まれた体を再生したパズスが〝それ〟に飛び掛かり、頭部に強烈な蹴りを入れる。

「僕の技を使うだとふざけるなっ！！」

パズスは蹴りにも振動を載せていた。蹴り込まれた〝それ〟の頭部が激しく振動し血と肉片になり四散した。が、腹部の顔がパズスに向かい口から音波を放射する。パズスも対抗して口から超音波を放射した。二つの音波がぶつかりお互い干渉しあい、その威力が相殺される。その間に〝それ〟の破壊された頭部が再生され復活していた。が、それより前に破壊されたエレシュキガルの手足はまだ再生されていない。

「エレシュキガル様の再生スピードが落ちている」

それを見た十六夜が思わず呟いた。

「それはエレシュキガルさんが大きなダメージを受けているという事ですか？」

佳乃が問うと十六夜は首を振る。

「エレシュキガル様はウテルスさんを気に入って以来、人間を食べていないのです。他のヴァギナの為に人間牧場は稼働させていますが、ご自分では食事をしていない。私たちにとって人間は食べる程、力が増していきます。今のエレシュキガル様は本来の力の半分も出せていないでしょう。そうでなければ、あんな化け物に苦戦する筈がありません」

佳乃は激しくショックを受けていた。エレシュキガルはヴァギナから神と呼ばれるだけの事はあると改めて思った。私は、牛や鶏や魚が可哀そうだとそれを食べるのを断った事があるか。佳乃はエレシュキガルのその崇高な精神に尊敬の念を抱いた。そのエレシュキガルを見ていると、その動きは佳乃や美奈子への攻撃を自分の体を盾にして防いでいるのだと分かった。パズスは〝それ〟の音波攻撃を相殺するため動きを封じられていた。エレシュキガルは〝それ〟の触手攻撃を防いでいたが、再生した〝それ〟の頭が再びエレシュキガルに向けて音波を放った。〝それ〟がパズスの音波を胃液カッターで斬り裂いたように、エレシュキガルもガステックカッターを使えばいいのだが、すでに満身創痍のエレシュキガルにはその余力がなかった。

「十六夜、佳乃たちを連れて逃げろっ！！　私とパズスがまだ動けるうちに逃げるんだっ！！　いいか、そして、全力で守れ！！」

エレシュキガルの言葉に、佳乃が叫ぶ。

「エレシュキガルさん、私を食べてください。そうすれば、力が戻るはず」

「そうです。私も食べてください」

佳乃に続いて美奈子も叫ぶ。そして、萌と若葉も泣きながら食べてくださいと叫んでいる。

「見損なうなよ。私を誰だと思っている。惨神の一人、エレシュキガルだ。貴様らなど喰わんでも、こんな化け物に負けてたまるか」

エレシュキガルの体が黒い光に包まれていく。

「これは、まさか……」

十六夜が驚愕するが、佳乃たちは何が起こっているのか皆目見当もつかなかった。

「エレシュキガル様は擬態を解くおつもりだ。ヴァギナ本来の姿に戻るつもりなんだ。でも、エレシュキガル様は自分のその醜い姿が嫌いで人間に擬態していたのに……」

黒い光が消えた後には、普段見るヴァギナよりも巨大で漆黒のヴァギナがいた。そして、無数の触手で〝それ〟を攻撃する。そのスピードは人間に擬態していた時のエレシュキガルよりも数倍も早くなり、〝それ〟の体を貫いていた。

・・エレシュキガル、あれほど嫌悪していた、その体を曝すのか。
それほど、あの人間たちを守る事を優先しているのか・・

パズスもエレシュキガルの覚悟に驚愕していた。

・・クソッ、こいつ、いつまで音波を出し続ける気だ。このままでは動きがとれない・・

が、しかし、パズスも動けないかわりに〝それ〟も動きがとれない事も事実だった。〝それ〟はパズスに腹部の顔から音波を浴びせる一方、エレシュキガルにも音波を浴びせている。エレシュキガルは触手で〝それ〟の体を貫いて引き裂こうとしているが、エレシュキガルの触手も音波を浴び何本も消滅していっている。このままでは、エレシュキガルが〝それ〟の体を引き裂いてバラバラにするのが早いか、エレシュキガルが消滅するのが早いか。まったく、余談を許さない状況だった。そこへ、佳乃が拳銃を構えて、動きの止まった〝それ〟目掛けて発砲する。

パシュッ、パシュッ、パシュッ!!

佳乃の撃った弾は命中し〝それ〟の腕が吹き飛んだ。〝それ〟の腕は再生できずに、吹き飛んだ腕は地面に転がり動かなくなった。

「やった!!　この銃は有効です!!」

佳乃は続けて狙い撃とうとしたが、〝それ〟の触手が高速で佳乃を狙う。エレシュキガルが止めようとするが、全ての触手を止めきれず何本かが佳乃に向かって襲いかかる。

ザシュッ!!

触手に貫かれたのは十六夜と新月だった。二人は佳乃を守り、体を盾にして貫かれていた。

「十六夜さんっ！！」

佳乃が悲鳴を上げる。

「エレシュキガル様に全力で守れと指示されました。気にする事はありません」

が、次の瞬間十六夜は両足を切断されガクッと地面に転がる。

「ふん、十六夜。情けないぞ。後は私に任せろ」

新月が佳乃たちを守るため奮闘するが、手足を次々に吹き飛ばされていき芋虫のように地面に転がった。パズスは動きを止められ、エレシュキガルも体の半分がすでに消滅している。〝それ〟はニヤリと笑うと、佳乃たちを狙い触手を高速で伸ばしてきた。美奈子がヴァギナを呼びガードしようとするが、エレシュキガルや十六夜でさえ防ぎきれない攻撃である。ただのヴァギナでは、あっという間に突破されてしまう。佳乃や美奈子の眼前に触手が迫っていた。佳乃は拳銃で迎え撃つが、拳銃の弾は悉く外れ宙を飛んでいった。

・・私は子供たちを守る事も出来ないの・・

佳乃はギリッと唇を噛み締めると拳銃を投げ捨て、〝それ〟に向かって駆け出した。

ズガァッ！！

触手が佳乃の体を貫いていたが、佳乃はその触手をがっしりと掴むと注射針を突き刺した。

「これなら、どうだっ！！　直接、注入してやる」

佳乃は注射器の中の薬剤を注入する。それは、対ヴァギナ用に委員会が開発した薬剤だった。〝それ〟の触手が変色し腐ったように爛れていく。佳乃は満面の笑みを浮かべると、口から血を吐いて崩れ落ちた。佳乃の決死の攻撃で〝それ〟の動きが一瞬止まった時、上空から高速で黒い影が舞い降りてきた。そして、その黒い影の背に乗っていた光り輝く人物が、〝それ〟に飛びかかる。

「一の拳！！」

ウテルスの声が響いた。〝それ〟の時間は停止した……。

「ウテルス様……」

佳乃は地面に転がりながら涙を流していた。

「二の拳！　三の拳！　四の拳！　五の拳！　六の拳！」

次々に拳を突き入れるウテルスが佳乃の目には悪魔に戦いを挑む天使に見えた。

「七の拳！　八の拳！　九の拳！」

パズスやエレシュキガルの目にも光輝くウテルスの姿は神々しい無敵の闘神のように見えていた。

「十の拳！！」

ウテルスの最後の拳が叩き込まれ、〝それ〟は消滅していた。

それを遠くから冷静に見つめる目があった。

・・あれを消滅させるとは……。ウテルス、なんと恐ろしい奴だ……。だが、まだ研究はこれからだ・・

その人物は、フッと口元に笑みを浮かべると、カツカツとハイヒールの音を響かせて去っていった。

59、交錯する思い（前書き）

今回のお話から新たな勢力が登場します。
私の他のお話も読んでいる方は、んっと思うでしょうね。

59、交錯する思い

59、交錯する思い

ウテルスはシナイ契約で敵を倒す事に成功したが、力を使い果たしよろよろとよろける。それをパズスががっしりと支えた。

「大丈夫か？、ウテルス」

「うん、ありがとう」

ウテルスはお礼を言いながら倒れている漆黒のヴァギナの元に行こうとする。姿は違うが、そのヴァギナがエレシュキガルであるとウテルスは直感で分かっていた。

「エレシュキガル？　だよね……。大丈夫なの？」

「ふん、こんな姿を見られるとはな。情けない……。どうやら、再生にも時間がかかりそうで、しばらく動けんな……」

苦笑したように見えたエレシュキガルの元へ佳乃が這ってやって来ると、貫かれた下腹部の傷から流れる血をエレシュキガルに浴びせる。エレシュキガルの再生が早まったように見えた。

「何のまねだ、佳乃？」

「これくらいさせて下さいよ、エレシュキガルさん」
佳乃はさらに傷口から自分の腹に手を突っ込んだ。
「うぐぐぐっ」
そして、ズボッと子宮を取り出すとエレシュキガルの口に入れる。
続けて卵巣も掴みだしエレシュキガルの口に入れる。さらに青ざめた顔で膣も引き摺り出し、ブチッと千切ると同じように口に入れた。
「性器、好物なんですよね。私みたいな女のだから、美味しいのか分かりませんが……」
「貴様、こんな事をして自分がどうなるか分かっているのか？」
「私は1人で生きてきました。必死に努力して、やっと周りからも認めてもらえるようになって……。でも、独りぼっちなのは変わらないんです。そんな中で、私を本当に心配してくれる人に出逢いました。ウテルス様、そして、エレシュキガルさん、あなたです。私はあなたのためなら命など惜しくありません……」
佳乃は貫通された下腹部から自分で内臓を抜き出し、ドボドボと血を流しながらエレシュキガルの上に倒れた。
「佳乃さんっ！」
ウテルスが慌てて声をかけるが、佳乃はビクビクと痙攣したまま意識がない。
「バアルッ！！」

エレシュキガルが黒い羽根を持つ男を大声で呼び寄せる。

「はっ、エレシュキガル様」

バアルは恭しく胸に手を当て跪く。

「この娘を牧場に連れていってバルバドスに治療させろ。いいか、もしこの娘が死んだら、貴様も殺すとバルバドスに伝えろ。急げっ！」

エレシュキガルの命令でバアルは緊張した面持ちで佳乃を優しく抱えると飛び立っていき、あっという間に見えなくなった。

「佳乃さん、大丈夫かな」

ウテルスがエレシュキガルを振り返ると、エレシュキガルは黒い光に包まれていた。そして、その光が消えた後には、いつもの姿のエレシュキガルが立っていた。

「私は、佳乃の奴に助けられたな」

ポツリとエレシュキガルが呟いた。

★　★　★　★

山中で男たちに暴行を受けているみどりは、恐怖で小便を漏らしながら泣いていた。もう、顔面もボコボコに腫れ上がり、元の顔が分

からないほどである。

「よーし、ここからは俺たちも出演する訳だから覆面着けろよ」

リーダー格のタケシの号令で男たちは全員覆面を頭に被る。そして、楽しそうに笑い声を上げた。みどりはもう恐怖しかなかった。ブルブルと震え号泣している。男たちは、みどりの周りをぐるりと囲み、見下ろしていた。

「このガキの最後の夜だ。全員で犯して少しは良い気持ちを味わわせてやろうぜ」

タケシはみどりを台の上に仰向けに乗せると、他の男に手と足を押さえ付けろと命令する。みどりは台の上で、大の字に押さえ付けられた。まだ幼いみどりであるが、これから自分が何をされるかくらいは分かっていた。

「許してください、許してください」

みどりが泣きながら頼むが、タケシは自分のいきり立ったモノを押さえ付けられ動けないみどりの膣にズボゥッと突き入れる。みどりの膣から血が流れる。

「ひぎぃぃーーーーっ！痛いぃぃーーーーっ！」

「おほっ、いい顔だ。アップで撮影しとけよ」

タケシは指示を出しながら、みどりの膣に根元まで自分の性器を突き入れ腰を振る。

「きつくて具合良いぞ。犯してる感じがして最高だ」

「いや、タケシさん。感じじゃなくて本当に犯してるんですけど」

「バーカ、屁理屈言ってんじゃねえよ。よーし、このガキのマンコ、擦りきれるまで全員で犯すぞ」

その後、男たちは本当にみどりに休む間も与えず代わる代わる犯し続けた。一時間以上犯し続けられたみどりは虚ろな瞳で放心状態になっていた。

「よし、次はケツの穴だ。浣腸ぶっ込んで、中きれいにしろ　面倒だから、グリセリン、原液のままでいいぞ」

男たちは太いシリンジにグリセリン液を満たすと、みどりの肛門に突き刺し、グリセリンを注入していく。

「あぁぁぁ、冷たい、痛いよぉぉ」

一本目を全て注入し終えた男が、どれくらい入れますかとタケシに尋ねる。

「腹がパンパンになるまで入れてやれ。どうせ、殺すんだから、腹破れても構わねえ。目一杯入れてやりな」

タケシの言葉が耳に入ったみどりは大声で泣き出すが、その姿も楽しそうに撮影されていた。

けっきょく、みどりはグリセリン液が逆流し口から吐き出すまで浣腸されてしまう。

「おごぉ、おごぉ、おごぉ」

泣きながら苦しげに口からグリセリン液を吐いているみどりの、ぽっこりと膨らんだ腹が思い切り殴られる。

「おごぉぉぉーーーっ！！」

ブッシャーーッ！！

みどりは口と鼻と肛門からグリセリン液を激しく噴き出す。肛門からは大便も混じっていた。

「おっ、なかなか面白い画じゃねえか。もう一回やろうぜ」

みどりは、また口から吐くまで浣腸される。男たちは完全にみどりを玩具として遊んでいた。

★
★
★
★

ある地下の研究施設で実験が行われていた。白衣を着た長身の女は仮面を付け、その腕と脚も機械のようであった。サイボーグと呼ばれる、生体細胞と無機質の金属が融合したハイブリッドの体を持つ人間だった。

その研究室で1人の少女が実験用の献体として拘束されている。全裸にされた少女は大の字に固定され、頭部をすっぽりと覆う器具を被せられ、乳首や性器はもちろん、体の様々な箇所にセンサーを取り付けられていた。

「リツコ様、準備が整いました」

やはり白衣を着た男がサイボーグの女に報告する。リツコと呼ばれた女は、白衣を翻しコツコツと拘束されている少女の前に歩いて行った。そして、穿孔用のドリルを手に取ると少女のツルツルの恥丘に尖端を当てる。

キュイーン！

ドリルが回転し少女の恥丘に穴を空け、ガリガリと恥骨を削っていく。少女に取り付けられたセンサーが激しく反応し、モニターに波形が現れ記録されていった。

「どうだ？」

リツコがモニターの前に座る男に尋ねる。リツコの声は機械が発声したような合成音だった。

「大丈夫です。今のところ問題ありません」

男は答えながらリツコの顔を伺うが、仮面を付けたリツコは今、どんな表情でいるのか分からなかった。ただ、一つ、小さな呟きが聞こえた。

「橘の悲願。この〝ペイン〟で豪徳寺を滅ぼしてやる」

そして、気のせいか仮面が笑ったように感じた。

59、交錯する思い（後書き）

この新たな勢力が本格的に絡んでくるのはまだ先になります。

ご期待下さい。

60、様々な思惑

60、様々な思惑

ウテルスはエレシュキガルの運営する牧場に来ていた。ウテルスの想像する牧場はみどりの牧草が拡がる大地に牛が放牧されているイメージだが、ここは普通のビルだった。牧場と云っても、ここで飼育されているのは人間だった。人間が飼育され、交尾させられ、食料として出荷されていく。

「人間のウテルスから見れば反吐が出る場所だろう。構わんぞウテルス、私を思い切り気の済むまで殴れ。だが私も自分の種族の食料を確保する為、ここを閉鎖する訳にはいかない。閉鎖すれば、結果一般の人間に襲いかかっていくヴァギナが増えていくだろう。それを全て抑える事は不可能だ。それを考えると、結局我らと人間の関係は平行線という事だな」

「分かってるよ、エレシュキガル。確かに気持ち良くないけど、私たちだって牛さんや豚さんに同じ事してる。何か言う権利はないよ」

「人間の味方のウテルスがここを容認するか。私がお前を凄いと思うのはそこだ。立場が逆なら私は激怒してこの牧場を破壊していると思うぞ」

「それはエレシュキガルが優しいからだよ。私は優しくなんかない。私は自分の知っている人達が幸せならそれでいい」

「正直な奴だな。だから私はお前が好きなのかもな。おっと、ここだ」

エレシュキガルがドアを開けると、ベッドに横になっている佳乃がいた。エレシュキガルとウテルスの姿を見るとベッドの上で起き上がった。

「佳乃さん、良かった。元気そうだね」

「はい、おかげさまで快調です」

そこで佳乃はエレシュキガルに目を向ける。

「あのエレシュキガルさん、一つ訊いていいですか？」

「うん？なんだ。動けるならもう何時でも出ていって大丈夫だぞ」

「ありがとうございます。それではなくて、あの……」

佳乃は言い淀んでいたが、エレシュキガルは口を挟まず佳乃が口を開くのを待っていた。

「あ、あの、私は美味しかったですか？」

エレシュキガルもウテルスも思わず目を大きく見開いたが、エレシュキガルはベッドに近付くと佳乃の目を見て言う。

「ああ、旨かったぞ。今まで食した中で最上の味だった」

「良かった。もし不味いと言われたらショックでした」

佳乃が本当にホッとしたように言った時、トントンとドアがノックされた。そして、入ってきたのはこの牧場で飼育されている人間たちの健康を管理しているバルバドスだった。

「エレシュキガル様、いらしていたのですか」

白衣を着たバルバドスは一見、人間の医師のように見えた。エレシュキガルに頭を下げたバルバドスは、手際よく佳乃の体温や血圧、脈拍や心音等を確認し手に持った端末に入力している。

「どうだ、佳乃はもう出て大丈夫だろう？」

エレシュキガルが念のためバルバドスに尋ねると、バルバドスも頷く。

「はい、造った臓器も拒否反応なく正常に定着し機能していますので問題ないと思いますが、しばらくは激しい事は控えて頂ければと忠告します」

「激しい事ってなんですか？」

ウテルスが首を傾げて訊くが、エレシュキガルも佳乃もそれを訊くかという顔をしていた。が、バルバドスは真面目に答える。

「交尾。人間で云うところのセックスですな。それと自慰。オナニーと云うのですかね。そういった行為は控えて頂きたい。まだ、卵巣も子宮もその辺りの臓器は完全とはいえませんので、徐々に慣らしていく必要があります」

「あ、ああ、そうなんだ……」

ウテルスは自分で訊いておきながら顔を真っ赤に染めていた。

「まあ、自慰できないのは辛いが佳乃なら我慢できるだろう」

エレシュキガルが真剣な表情で言うが、佳乃は大きく手を振った。

「わ、私はそんなに自慰しませんよ」

「そうなのか？私は毎日時間があると自慰しているが」

そこでエレシュキガルはウテルスの顔を見る。

「お前はどうだ？ウテルス」

「えっ、私。私は、その、あの、毎日……」

「ほらみろ。これが普通だ」

エレシュキガルが勝ち誇ったように言うが、佳乃は二人の顔を見比べ、この二人似た者同士なのかもと思っていた。

★　★　★　★

その頃、パズスはヴァギナ対策委員会の幹部と委員会の中で会談を行っていた。美奈子と萌に若葉もパズスと同席している。人間が同

席していた方が相手も安心するだろうと云うことと、万が一の時は自分達が盾になってパズスを守る為だった。大体、委員会の本部の中に堂々とヴァギナと名乗って行くなど信じられない事だった。

「本日はこうして話し合う席を作っていただいて感謝します」

まず、パズスは頭を下げた。委員会の面々も頭を下げる。

「私はパズスというヴァギナを束ねているものの一人です。よろしくお願いします」

「私はヴァギナ対策委員会の委員長、伊東です。パズスさんですか、まさかこうしてヴァギナと話し合う時がくるなど思いもしませんでしたが、いや、失礼。私たちも大いに話し合いたいと思っておりました。お互い忌憚のない意見で建設的に話し合いましょう」

「ありがとうございます。願ってもない事です」

パズスは嬉しそうに微笑むが、隣の美奈子が小声でパズスに忠告する。

「パズス様、人間は裏があります。決して全て信じたりしないで下さい。それにここはヴァギナ対策委員会の中、何があるか分かりません。慎重にお願いします」

パズスは、ありがとうというように美奈子に微笑んだが、美奈子の心配は尽きなかった。人間である美奈子は平気で嘘をつく大人を数多く観ている。それは、萌と若葉も同じだ。３人にはヴァギナであるパズスの方が遥かに純粋で優しく感じる。３人とも手の中に発信装置を握りしめていた。武器は持ち込めない為、いざという時には

この発信器で、外に待機している十六夜やリリス、バアルが突入する段取りになっていた。それほど、美奈子は人間を信用していなかったのである。

★　★　★　★

みどりは肛門を犯され続け、さらに口の中にも男の性器を突き入れられ喉の奥まで犯されていた。

「おぐ、おぐ、おぐ、おぐ」

呼吸も出来ずみどりは涙を流し苦悶の表情を浮かべているが、男たちはかまわずみどりを犯し続ける。肛門と喉を同時に犯され、みどりは失神していた。それでも、男たちはみどりを犯し続けた。まだ、みどりの殺し方は考えていなかったが、このまま犯し続けて殺すのも一興かと軽く考えていた。

「そろそろ、このガキにも飽きたな。首吊りにしてやるか。首吊りで、だらーんとクソしょんべん漏らして無様に死ぬの画になりそうだよな」

タケシの言葉に男たちはまた盛り上がり始めるが、みどりは発狂したように大声で泣き出した。泣きながら必死に抵抗するみどりの腕が押さえ付けられ背中に回されると、ギリギリと縛り付けられた。そして、両足首も縛り付けられる。

「助けてぇぇーーーっ!!ふごぉぉ」

みどりは精一杯の大声で助けを呼ぶが、口を押えられて、口の中に脱がされた下着が詰められるとガムテープを何重にも貼り付けられ口を塞がれてしまう。そして、目の上にもガムテープを貼りみどりの視覚も遮断する。

「ふご、ふごぉぉーー」

手足を縛られ、目も口も塞がれたみどりは芋虫のように地面をゴロゴロ転がり必死に逃げようとしている。男たちは、そのみどりの無様な姿を撮影して笑っていた。

「よーし、吊るすぞっ！」

タケシの号令でみどりの首にロープが巻かれる。みどりの必死の抵抗も空しく、みどりは男たちに担がれ太い木の下に運ばれて行き、ロープが枝に通されぶらーんと吊るされた。それでも、みどりは逃れようと暴れるが、余計に首にロープが食い込んでしまう。

「重りも付けてやれ」

さらにみどりは足に、みどりの体重以上もある４０キロの重りを付けられた。みどりの身体は一直線に伸びきり、もう動けなくなっていた。両腕を縛られ、目も口も塞がれ、おもりを付けられて吊るされたみどりは、もう何も出来ず確実な死へ向かって進んでいく以外なかった。そして、しばらくするとみどりの尿道が弛緩し尿が漏れ始め、続いて肛門も緩み液状の便も流れ出してくる。哀れにもみどりは首を吊られ苦しみながら絶命していた。

61、ペインとデビル

61、ペインとデビル

惨殺されたみどりの体を様々な角度から撮影していた男たちは、もう絶命しているみどりの体をさらに酷い状態にするため相談していた。

「インパクトある画にしねえと売れ行きが良くねえからな。このまま手足ぶった斬るか、腹裂いてみるか。どうする？」

タケシは男たちの顔を見回すと、1人の男が手を上げる。

「あのう、頭切り落として、マンコの中に入れるのはどうですかね？」

「おっ、おもしれぇな、それ。やってみるか」

男たちはみどりの体を下ろすと、さっそく首を切断する。切断した頭のガムテープを剥がしてみると、みどりは白眼を剥いて苦悶の表情で事切れていた。

「まず、自分のマンコ舐めてる画を撮ってから、マンコの中に頭入れよう。ぷぷ、爆笑もんだな」

笑いながらみどりの体の股を拡げ、漏らして濡れている性器に、み

どりの頭の口を押し付ける。そして、みどりの膣にナイフを突き入れ切り裂くと無理矢理、頭を押し込んでいった。

「おい、顔こっち向けるようにしろよ」

すっぽり押し込んだみどりの性器の中から、みどりの顔が覗いている。

「わははっ、おもしれぇな。そいつの手も顔に当ててみろよ」

男たちは爆笑しながらみどりの体を完全に玩具にして楽しんでいる。とても、人間の所業とは思えなかった。その鬼畜な男たちの上空に何かが近付いて来ていた。

★
★
★
★

「ペインジェネレータ、エネルギー充填６９％」

男の声がスピーカーから流れる。

「よし、順調だ。そのままいけ」

白衣を着たサイボーグの女性リツコが機械の声で答える。

「エネルギー８０％、８５％、９０％」

男の声が緊張で大きくなってくる。リツコもモニターを見つめ興奮が抑えられなかった。

「麗香……。これでお前を甦らせてやる。お前は〝ペイン〟として復活するんだ」

バキャッ

リツコは興奮のあまり、握っていた端末を握り潰していた。

・・いけない。興奮し過ぎたようだ。この腕の力の加減がなかなか出来んな・・

リツコは自分の機械の腕を化け物を見るように人工の瞳で視ていた。

「ペインジェネレータ起動成功です。やりましたよ、リツコ様」

男の興奮も頂点に達していた。

「最終段階に進むぞ。冷凍保存してある麗香を連れてこい」

研究所内は慌ただしく動き出した。

★　★　★　★

ドアをノックする音に続き、男が部屋に入って来た。そして、クッションの効いたソファーに身を沈め自慰している女に恭(うやうや)しく礼をする。

「文月様、西園寺グループの残党に不穏な動きがあるようですが、

如何(いかが)なさいますか」

女は自分の股間で動かしていた指の動きを止めると、冷たい笑いを顔に浮かべる。

「ふんっ、別に気にする事はないわ。あんな奴らに何が出来るの、放っておけばいいのよ。それに少しは頑張って私に刺激を与えてもらわないとね。何もない平穏な人生なんて面白くないでしょ。まあ、万が一私に迫ってきたとしても〝デビル〟で返り討ちにしてあげるわ」

高らかに笑う文月だったが、男はその〝デビル〟の事ですがと声を潜める。

「1体、我々の制御を外れて行方をくらましています。本能以外の自我はない筈ですが、この本能が特殊だった可能性があります」

「ふん、そっちの方が問題ね。1体は、あのウテルスに消滅させられているし……。何故、制御出来ないのか調べなさい。それと布教活動をもっと増やして〝デビル〟の数も増やすのよ」

「畏(かしこ)まりました」

男は一礼すると静かに退室していった。

★　★　★　★

「私の力で一般の人間をヴァギナが襲わないようにする事を約束し

ます。その代わり、我々の食料として不要な人間を提供して頂きたい」

「不要な人間というのは？」

伊東がパズスの提案に質問する。

「それは、あなた方人間が決めて下さい。例えば犯罪者等、人間社会の役に立たない者などどうでしょう。人間の世界には裏社会などと云うものが存在しているようですね。そういったゴミを提供して頂ければ、我々も食料が確保出来ますし、あなた方人間にとっても良いことかと思いますが」

「ほう、それで一般の人には手を出さないと保証してくれるのかね」

「ええ、それは私が保証します。もし、一般の人間を襲うヴァギナがいたら、我々が処分します」

伊東は、それなら申し分ないと考える。死刑という人間が人間を罰するという罪悪感から逃れられ、一般の人を守るという名目で犯罪を犯した屑を排除出来る。何処までをヴァギナに提供する対象にするか線引きが大変であるが、これを法令化し周知徹底すれば犯罪に対する抑止力にもなるのではないか。伊東の心はパズスの提案に傾いていたが、さすがにこれ程重要な事案を独断で決定する訳にはいかない。

「パズスさん、その提案、実に興味深い。だが私一人の判断で採用する事は出来ない。しばらく時間をもらえないか。前向きに検討していきたい」

伊東は席を立つとパズスに頭を下げた。その時、突然席から立ち上がった幹部の1人が叫び出す。

「委員長、こんな奴の言うことを信じたら駄目だ。ヴァギナを束ねているなんていうが、ヴァギナにそんな知能があるものかっ！！」

その幹部はパズスに銃を向けて発砲する。それはもちろん、対ヴァギナ用に開発した弾丸だ。

バシュッ！！

赤い血飛沫が飛び散った。

「この馬鹿者がぁ！何をしている、湯田ぁ！！」

伊東が激昂し、湯田と呼ばれた幹部は周りの幹部に取り押さえられ拳銃も取り上げられた。

「早くストレッチャーとドクターだっ！！」

伊東の怒声が響き渡る。パズスは自分を庇(かば)って撃たれた美奈子に触手を突き刺し体液を注入していた。

★　★　★　★

「ねえ、エレシュキガル。今日、芳樹くん、委員会に行ってるんでしょう。私たちも行ってみようよ」

「でも、ウテルス様。パズスさんは真面目な話をしに行っているのですよ。ウテルス様が行かれても……」

エレシュキガルに代わって佳乃が答えたが、菜緒はぷぅーっと膨れる。

「佳乃さん、私が馬鹿みたいな言い方だけど、私だってそんなに馬鹿じゃないんだから」

「いや、ウテルスさんの知能は平均よりも僅(わず)かに、いや少しばかり低いようですな」

冷静にバルバドスに分析された菜緒は、激しくショックを受け力が抜けてしまい座り込んでいた。

「あはは、まあ私もウテルスはどこか抜けていると思ったが本当にそうだったのか」

エレシュキガルは爆笑しながら菜緒の背中をバンバンと叩く。菜緒は恥ずかしいのと痛いので涙ぐんでいたが、バルバドスは爆笑するエレシュキガルを見て驚愕していた。もう数十年エレシュキガルに仕えているが、エレシュキガルが笑っている姿など初めて見た。バルバドスも、エレシュキガルをこんなに笑わせるウテルスに興味を持ち始めた。

62、そして、ゴッド

62、そして、ゴッド

みどりを惨殺し、その亡骸まで徹底的に凌辱していた男たちの上空に何者かが接近していた。

「カナシミノハドウヲカンジル」

「エエ、クルシミモカンジマス」

「カナシミ、クルシミ、ユルセナイ」

3面の顔を持ち白く輝く翼で高速で飛行していた〝それ〟は男たち目掛けて降下する。突然、現れた異様な怪物に男たちは驚愕した。

「なんだ、こいつは？　ヴァギナじゃあないぞ！！」

「かまわねぇっ！ハチの巣にしてやれっ！！」

男たちは拳銃を構える。その拳銃に装填されている弾丸は、対ヴァギナ用に開発された特殊弾丸だった。男たちは〝それ〟に目掛けて拳銃を発砲する。〝それ〟は弾丸など避ける必要もないと、軽く弾丸を体で受けるが、その弾丸は〝それ〟の体を貫く。

「コレハ？」

「ケイカイレベルヲアゲマス」

「モンダイナイデショウ」

最初に自分を貫いた一発の弾丸で、危険性を見抜いた〝それ〟は残りの弾丸は全て避ける。男たちは必死になって拳銃を撃ちまくるが、その弾丸が〝それ〟に当たる事は二度となかった。

「どうなってる？全然当たらねぇ」

「おかしいだろ。こんな、至近距離なのに」

男たちには〝それ〟が動いていないように見えていたが、実際は超高速でほんのわずか弾丸を避ける分だけ動いていた。

「ヤバイぞっ！！逃げた方がよくねえか」

1人が叫び、それにつられたように恐怖が伝染し数人が逃げ出すが、逃げ出した男の目の前に〝それ〟はいた。

「ワタシハ〝ゴッド〟」

「ミンナ、シニマス」

「ヒャハハハッ」

六本の腕で掴まれた男の体が引き千切られ一瞬で内臓を撒き散らし肉片に変わる。

「うわぁぁーーー！！」

悲鳴を上げ男たちは四散する。が、自らをゴッドと呼ぶ〝それ〟からは逃げられなかった。次々にゴッドに捕らえられ殺害されていく。

・・ひぃぃーー・・

タケシは他の男を盾にして身を隠し震えていた。タケシの耳に仲間の絶叫や悲鳴が止む事なく響いてきていたが、しばらくするとその声が途絶えた。シーンと静まりかえった中でタケシは更に身を縮め震えていた。

「ミイーツケタ」

「オイシソウ」

「ノコリモノハフク」

「ひぃぃーーやめろぉぉーー」

タケシは触手で掴まれ空中高く持ち上げられる。

「タカイタカイ」

「グルグルー」

「ドスーン」

ぐるぐる振り回されたタケシは、そのまま地面に落とされる。

「おげぇーっ、た、助けてくれぇっ！」

叩き落とされた衝撃で口から血を吐きながら許しを乞うタケシだが、再び触手に掴まれ空中高く持ち上げられる。そして、衣服が全て剥ぎ取られた。

「やめて下さい。殺さないで」

残酷にみどりを殺害しておきながら命乞いするタケシだったが、当然ゴッドは聞く耳など持たない。タケシの肛門に触手を突き刺していく。

「あぎゃぁぁーーっ、助けてぇぇーーっ」

タケシの肛門から血が噴き出すがゴッドは構わず触手を突き入れ、タケシの性器にも触手が巻き付く。そして、二つの睾丸を締め付ける。

「あぎぃぃーっ、許してくださいぃぃっ」

脂汗を流し苦悶の表情を浮かべるタケシの睾丸をゴッドはさらに締め付けた。

バシュッ！

鈍い音が響きタケシの睾丸が二つとも破裂してしまった。タケシは泡を吹いて失神していたが、今度は陰茎が締め付けられる。そして、陰茎も潰され肉片となって飛び散った。鬼頭部だけが残り、コロンと地面に転がった。ゴッドは、それを掴むと口に入れ飲み込んだ。

「あひゃひゃひゃひゃ」

情けなく発狂してしまったタケシの終わりが近付いていた。四肢を切断され芋虫にされたタケシの胸に触手が突き刺され、ズバッと股間まで切り裂かれる。激しく血が噴き出すがタケシはまだ生きていた。タケシはこれから時間をかけて少しずつ内臓を食べられていった。

★　★　★　★

十六夜たちが委員会の内部に突入すると、そこは時間が凍っていた。十六夜、リリス、バアルの3人もその部屋に入った途端、恐ろしく冷たい殺気に動けなくなっていた。

・・何があったの？パズス様？・・

体は動かせず目だけ動かして十六夜は確認する。

・・うっ・・

パズスの目を見た十六夜は、かつてエレシュキガルに殺されかけた時の事を思い出す。

・・私はここで死ぬ・・

あの時の恐怖が甦ってきた。人間たちも誰一人動ける者はおらず、そのあまりの恐怖に固まっていた。パズスの足元に倒れている美奈子の胸から血が流れている。

・・馬鹿め、何て事をしたんだ、人間・・

この事態を引き起こした人間に十六夜は怒りを感じていた。恐怖という感情を知ってしまった十六夜は、この恐怖に耐えられず失禁していた。スカートから覗く足の間からシャーッと小便が漏れ、足下に水溜りを作っていく。十六夜の腕にしがみついているリリスも漏らしていた。ミニスカートに染みが出来、太ももを濡らし水溜りを作っていた。

・・もう後、数秒もせずに私は消える・・

漏らしながらガクガクと震える十六夜の後ろのドアがバタンと開いた。

「邪魔していいか？」

「芳樹くん、いる？」

エレシュキガルの声と能天気な菜緒の声が飛び込んできた。その凍りついた空気をまるで気にしないように二人は部屋に入ってくる。佳乃はドアの前で異常な雰囲気に気付き、そこで足を止めていた。

・・エレシュキガル様、パズス様を止めて下さい・・

十六夜は目で訴えるが、エレシュキガルは気付く様子もなく立ち上がっている面々に驚いている。

「何だ、みんな立ち上がって。会談というのは座ってやるものだと思っていたが、それが人間の流儀なのか？」

エレシュキガルがとんちんかんな事を言うが、菜緒は倒れている美奈子に気付いて走り寄る。

「どうしたの、美奈子ちゃん」

菜緒が声をかけるが美奈子はもうピクリとも動かなかった。

「すまん、姫川。美奈子は僕を庇って撃たれた。油断するなと言われていたのに僕のせいだ」

「ううん、美奈子ちゃんは誰かを助ける為に生きたいと言っていたんだ。だから、芳樹くんのせいじゃないよ。それより、美奈子ちゃん助かるよね？」

パズスは力なく首を振った。

「美奈子は死んだ。死んでしまった者はもう助けられない」

「そんな、嘘だよね」

パズスは項垂れ、エレシュキガルが菜緒の肩を叩く。

「命ある者は必ず死ぬ。不死身の私たちでも寿命はある。ウテルス、死は必ず誰にでも訪れる」

「分かっているよ、エレシュキガル。でも美奈子ちゃんは私を元気付けてくれた。美奈子ちゃんのおかげで立ち直れたんだ。それが、こんな理不尽に殺されるなんて許せない」

菜緒のツインテールが天を突き、体が光出し宙に浮く。

「誰がっ！誰が美奈子ちゃんを撃ったんだぁっ！！」

ビリビリと空気が震える。が、そのウテルスの怒気が逆にパズスを冷静にさせた。

63、謎の儀式

63、謎の儀式

「誰が美奈子ちゃんを撃ったの？」

ウテルスは殺気の籠った目で委員会の面々を睨み付ける。

「言いたくないなら構わない。全員平等に審判を受けてもらう。芳樹くんたちは出ていて……」

「ま、待て、ウテルス。この人たちは僕の提案に興味を示してくれた。この人たちは助けてくれないか」

「芳樹くん、私言ったよね。私の大切な人に何かあったら許せないって。もう、人間なんて滅びればいいんだっ！！」

ウテルスの怒りは治まらなかった。そこへエレシュキガルがズイと出てくる。

「ならばウテルス、お前が手をくだす必要はない。私が人類を滅ぼす。ウテルス、お前が私に手を出さず見ているなら、私一人で人類を滅ぼすなど造作もない。まずはここにいる者から始末していこう」

エレシュキガルは触手を伸ばし狙いを付ける。

「ま、待って下さい。この不手際。私とここにいる者の命は差し上げましょう。しかし、他の、何も知らない無辜の人々の命はお助け下さい。どうか、どうか、お願い致します」

伊東はウテルスとエレシュキガルに深く頭を下げる。

「今さら何を言っている。こうした会談の席に武器を持ち込み、それを使用するなど言語道断。こうなる事は覚悟の上での発砲であろう」

「仰る通りです。武器を持ち込み発砲した湯田と責任者の私は勿論ですが、ここにいる者は連帯責任で殺されても構いません。ですが、お願いします。私たちの命でお怒りを治めて下さい」

「成らぬな。お前たちは人類の代表として会談に臨んだのだろう。ならばその席で我々に発砲したという事は我らに対して宣戦布告をしたという事だ。もう全てが手遅れだと思い知れ」

エレシュキガルの触手が問答無用で伊東の頭を貫通した。と思われたが、その寸前で触手はがっしりと掴まれ止められていた。

「ごめんなさい、エレシュキガル。私、やっぱり罪のない人は殺せない。お願い、他の人は許してあげて」

「ふん、ウテルス。お前がそう言うなら是非もない。この湯田とかいう奴だけで勘弁してやろう」

「ありがとう。エレシュキガル。それじゃ委員長さん、その人を渡してもらいます」

「ありがとうございます。ウテルス様、エレシュキガル様。おい、早く湯田を引き渡せ」

「ふざけるなぁっ！！僕は正しい事をした。どうして僕が引き渡されなければならないんだ」

湯田は抵抗して逃げようとするが、あっさりとエレシュキガルの触手に捕らえられる。

「湯田とやら、正しい事をしたというなら胸を張って我らに殺されるがよい。だが貴様のしたことは、たった一発で人類の信頼を失くす大きな過ちだ。まさに名前の通り、人類の裏切り者だな、ユダ」

エレシュキガルはリリスに牧場に連れて行けと、湯田を引き渡す。

そこへ佳乃が近付いてきた。

「エレシュキガルさん、ありがとうございます。ウテルス様を止めて頂いて」

「分かっていたのか、佳乃」

「分かりますよ。エレシュキガルさんが人類を本当に滅ぼす気なら、わざわざそんな事を言わないで問答無用で滅ぼしますよ。でもエレシュキガルさんは自分が激怒しているとみせてウテルス様の怒りを静めようとした」

「ウテルスが単純な奴で良かったな。もし佳乃みたいな奴なら、私の事を止めたりしないだろうからな」

「えぇ、私そんなふうに思われているんですか？」

「違うのか？」

「いえ、そうでしょうね。もう人類なんて滅びてもいいと思ってますから」

「まったく、怖い奴だな」

そこでエレシュキガルはウテルスの肩を優しく叩く。

「早く美奈子を送ってやろう」

「うん……」

ウテルスは美奈子を背負うと歩き出した。エレシュキガルと佳乃がそれに続く。萌と若葉は美奈子の意思を継いでパズスを守るためここに残ると言い、十六夜とバアルも残ることになった。

「パズス、しっかり話をまとめろ。美奈子の死を無駄にするなよ」

エレシュキガルがドアを出る前にパズスを振り向いて言った。パズスが大きく頷くのが佳乃にも見えた。そして、そのパズスの瞳が濡れていたのが、佳乃にはハッキリと見えていた。

★　★　★　★

とある山中で怪しげな儀式が行われていた。祭壇のようなものが造られ、その前に一人の全裸にされた幼い少女が縛られ転がされてい

た。膨らみ始めた胸の先で桜色の乳首が震えている。そして、その少女に向かって一人の仮面を付けた男が呪文のような怪し気な言葉を唱えていた。男の後ろには十数人の全裸の男が正座をし、この儀式を神妙な眼差しで眺めている。

「それでは、我が神に供物を捧げます」

仮面を付けた男は、ナイフを手に取る。そして、後ろにいた男が二人立ち上がると前に回り、それぞれ少女の足を持ち左右に大きく広げた。少女のつるつるで桜色の割れ目が露に晒される。

「ふぐぅぅ、ふぐぅぅ！！」

口を塞がれている少女が悲鳴を上げるが仮面の男は構わず儀式を進行していく。仮面の男は恐怖で震える少女の割れ目にナイフを突き刺した。

ズドッ！！

鈍い音がしナイフは根本まで少女の割れ目に突き刺さっている。

「ふごぉぉぉーーーーっ！！！」

絶叫する少女の割れ目から血と共に小便がシャーッと噴き出す。仮面の男は少女の血と小便を浴びながら、そのままナイフで少女の割れ目を割れ目に沿って縦に切り裂いていく。そして、また二人。後ろにいた男が前に回り少女の切り裂かれた割れ目に手を突っ込み、ガバァッと大きく拡げる。裂けた割れ目が更にビリビリと裂かれていく。性器を裂かれる地獄の激痛に少女は白眼を剥いて泡を吹き気絶していた。仮面の男は拡げられた少女の股間に手を入れ何かをし

ていたが、ズボゥッと勢いよく手を抜く。その血塗れの手には少女の子宮が抜き取られていた。仮面の男は恭しく抜き出した子宮を銀のトレイの上に載せ祭壇に運ぶと、火の点いた松明を手に取る。

「それでは不浄の者を焼き払います」

仮面の男は火の点いた松明を、ズボッと少女の股間の裂け目に突き刺した。少女は体の中を焼かれ覚醒し絶叫する。

「ふんごぉぉぉーーーーっ!!」

涙を流し絶叫する少女に向かい残っていた男たちが集まってきた。手にはそれぞれ〝ノコギリ〟を持っている。少女は戒めを解かれると、大の字に押さえ付けられた。そして、その細い手足にノコギリが当てられる。二の腕、肘、太もも、膝。さらに股間の割れ目にもノコギリが当てられた。

キィキィキィキィキィ!!

耳障りな嫌な音が響き、少女の手足と性器がノコギリで引かれ始めた。

「ふごぉぉぉぉーーーーーーーーっ!!!」

口を塞がれていてもなお響き渡る少女の絶叫。ノコギリは規則正しく少女の性器と手足を引き続ける。

パカァ、ゴトン

そして、少女の性器はヘソまで真っ二つにされ、四肢も切断された。

「不浄の者を清めるのだ」

仮面の男の号令で、男たちは一斉に子宮を抜かれ性器と四肢を切断された少女に向かい放尿を始めた。生贄にされた少女は男たちの小便を全身に浴びながら静かになっていった。

64、洗脳

64、洗脳

祭壇の前に立った仮面の男は、銀のトレイに載せた子宮を高く掲げる。

「さあ、神の祝福を味わいなさい」

仮面の男は子宮の載ったトレイを一番前の男に渡す。その男は子宮に噛りつくと食い千切った。そして、次の男に子宮を渡す。その男も子宮を食い千切り次に渡す。男たちは順番に子宮を食い千切っていき、最後の男が残った子宮を全て食い尽くした。

「あなたたちは選ばれた人間です。そして今、神の祝福を受けました。これから、もっと子宮を喰らうのです。さすれば、神の力がその身に宿るでしょう」

仮面の男の演説に男たちから歓声が上がる。

「そして、我らがカタストロフ教の始祖 ”文月 ”様の為の世界をお造りするのです」

ウオォォと波のように歓声がうねりを上げる。仮面の下で男はニヤリと微笑んでいた。

★
★
★
★

クッションの効いた豪華なソファーに横になり、自慰している女の前に男が跪いていた。しばらくすると女の口から声が漏れ、息が荒くなってくる。そして、女は腰を持ち上げ爪先立ちになると性器から潮を噴き出した。女の体はガクガクと震え、女は放心状態になっていたが、控えている男に目を向けた。

「ふう、それで報告は？」

「はっ、滞りなく進行しております。このペースでいけば、文月様の世界が完成するのも、そう遠くない未来であると進言致します。まったく、愚かな男どもを洗脳するのは簡単でございますな」

「ククク、そのまま計画を進めろ。それと後で一人、１３年物くらいの活きのいいメスを連れてこい。また気持ちが高ぶってきた。マンコ、ぐちゃぐちゃに破壊しないと治まらないわ」

「それと文月様、西園寺グループが何か発明したとの情報が入っております。取るに足らない物とは思いますが、お耳に入れて頂ければ」

「西園寺か、頑張っているようだな。せいぜい足掻(あが)くがいい。私が恐れるのは、あのウテルスだけだ。デビルを消滅させた奴の力は侮(あなど)れない」

「そのウテルスの情報ですが、最近、ヴァギナと手を組んでいるのではという噂が流れております。先日も委員会の中で人間と対立し

ていたとの情報がありました」

「ウテルスがヴァギナと行動しているのはとうに知っていたが、ほう、ウテルスが人間と対立か。それは面白い」

豪徳寺文月は、超人的な強さを誇るウテルスを倒すためには通常の攻撃では不可能だと考えていた。自分が受けた〝審判〟という技、それにデビルを消滅させたあの技。人知を超えたウテルスの技にとても太刀打ちできるものではない。それにウテルスと共に行動しているヴァギナも普通のヴァギナとは思えない程の別格の凄まじい力を感じる。だが、デビルはまだ進化する。問題あるまい。「生き残るのは進化したものだけ」確か大昔の生物学者ダーウィンが「種の起源」という書物で残した言葉だ。ククク、そして、残るウテルスは……。

・・ウテルス、奴を倒すには心を砕いて廃人にする以外ない・・

文月は、まわりの仲間全てを殺され廃人になったウテルスを想像し笑いが込み上げてきた。この詰まらない世界に刺激を与えてくれる。ウテルス、お前は貴重な存在だ。ゆっくりと壊して楽しんでやる。文月は腹を抱えて笑いだしていた。だがしかし、文月には幾つか誤算があった。西園寺グループを、橘リツコを軽く考えすぎていた。常軌を逸しているという点では、文月だけではない。橘リツコもまた同類だったのだ。そして、デビルの制御を脱け出した〝ゴッド〟の存在を失念していた。〝ゴッド〟は進化成長を遂げまさに神に近い存在に登り詰めていた。それにパズスを侮っていた。パズスは早くからデビルの存在に気付き包囲網を築きつつあった。さらに、もっとも大きな誤算はウテルスは〝1人〟ではないという事実に気付いていなかった点である。だが、それはこの時点ではウテルス本人である〝姫川奈緒〟以外知り得る秘密ではなかったので仕方がなか

ったのかも知れない。豪徳寺文月の“狂気”、橘リツコの“執念”、ゴッドの“信念”、パズスの“思惑”、そしてウテルスの“秘密”。未来はさらに混沌に満ちていく。

★ ★ ★ ★

一組の男女がヴァギナに追われ必死に逃げていた。幸い二人とも学生時代は陸上部に所属し、社会に出てからも週末のランニングを欠かさなかった。しかし、逃げ回るのにも限度がある。早く、警察或いはヴァギナ対策委員会に逃げ込む必要があった。

「おい、こっちの道でいいのか？」

「うん、その角を右っ！」

二人はスマートフォンで確認しながら走り続ける。まだ、息は上がっていない。これ位走り続ける事など何でもなかった。普段のランニングであれば……。しかし、いくら余裕をみせているとはいえ、ヴァギナに追われているという精神状態は通常の数倍の体力を消耗していることに気付いていなかった。曲がり角を曲がった所で二人は急に息が上がってきた。

「どうしたんだ？俺がこれ位走っただけで……」

「待って、息が苦しい」

走るスピードが落ちた二人とヴァギナとの距離が縮まってきていた。もうすぐ、ヴァギナの触手が届く距離まで追い付かれてしまう。

「うわあ、助けてくれ」

「嫌ぁ、どうしてぇ」

必死に走る二人だが、思うように足が動かない。そして、足が縺れて男が転倒してしまう。

「うわっ、待ってくれぇっ！」

「ご、ごめんなさい」

女は倒れた男を振り切り走り出す。後ろで男の悲鳴と骨が砕け肉が千切れる不快な音が聞こえる。女は、男がヴァギナに食べられている間にヴァギナを振り切り逃げる算段だった。が、次の角を曲がった時、目の前にいるヴァギナに鉢合わせする。

「あ、あ、あ、あ、あ……」

茫然と立ち尽くす女のスカートに染みが広がりシャーッと湯気を立てて小便が溢れだし、足元に溜まっていった。

「嫌、どうしてぇ……。死にたくないよぉ……」

小便を漏らし泣き続ける女が触手で掴まれ衣服を切り裂かれていく。そして、腕を拘束され足を左右に大きく拡げられた。触手が女の性器を狙い高速で伸びてくる。そして、女の膣に突き刺さった。

「はっ、ぶぅぅーーーーっ！！」

いきなり膣を裂かれ子宮に突き刺さる触手に女は天を仰いで絶叫するが、続けて女の尿道と肛門にも触手が突き刺さった。

「あんぎゃぁぁーーーーっ！！」

女の３つの穴から血が噴き出す。

「ああ、神さまぁ、助けてくださいぃ……」

女は股間の３つの穴を破壊された激痛で意識朦朧となりながら神に救いを求める。奇跡とは信じる者に起こる事なのか。女の股間に突き刺さっていたヴァギナの触手が突然切断された。そして、女の前に光る人影が立っていた。

「ウ、ウテルス様？……じゃあない……」

女の前に立つ者は白い翼を大きく広げ６本の腕、６本の足、そして、３面の顔を持つ異様な姿だった。だが、その異様な者が自分を守ろうとしているのは感じられた。

「オンナイジメル」

「ユルサナイ」

「ハイジョシマス」

ヴァギナは突然現れた、この異様な者に数え切れない程の触手で攻撃する。女はこの白い翼の者が動けず串刺しになったと思ったが、串刺しになったのはヴァギナの方だった。ヴァギナより更に速い速度で触手を伸ばしていた。そして、串刺しにしたヴァギナを千切り

喰い始める。

・・ヴァギナを食べてる！！・・

女は出血と、助かったという安堵で意識が薄くなってきていた。

「ワタシハ〝ゴッド〟」

「アンシンシナサイ」

「ソシテイノルノデス」

ヴァギナを喰い尽くしたゴッドは一回り大きくなり、その体から発するオーラも増したように感じられた。

「ゴ、ゴッド……」

女は自然に跪き手を合わせていた。その名の通り神々しいオーラに涙も溢れてくる。女は手を合わせたまま気を失っていった。

65、ペイン、初陣

65、ペイン、初陣

気を失った女の後ろから、男を喰い尽くしたヴァギナが姿を現した。ゴッドは、そのヴァギナも喰い尽くそうとするが動きを止め、空を見上げる。そして、しばらく何かを確認しているようだったが急に白い翼を広げる。

「ナニカクル」

「キケン」

「テッタイスル」

ゴッドは翼を広げると空に飛び立ち、あっという間に見えなくなった。

「今のはなんだ?私の電子の眼でも捉えられない。デビルではないようだったが……」

「デビルかと思いやって来ましたが無駄足でしたな、リツコ様」

「いや、デビル以外にも得体の知れない奴が存在している事が分かった。おい、医療班。その気絶している女を助けろ。今の奴の事を何か知っているかもしれん」

「はっ、リツコ様。しかし、ヴァギナがやって来ています」

新たな獲物を発見したヴァギナがリツコたちに向かってやって来る。さらに女が漏らした小便の臭いに吸い寄せられるように数体のヴァギナが集まって来ていた。

「おやおや、私が排除してもいいが面倒だな。ペインを連れて来ているから、ペイン。待たせたな、ペイン。初陣だ。あのヴァギナどもを倒せ。ただし1体は残しておけ、研究用に確保する」

リツコが言い終わる前に、ヴァギナの前方に突然人影が現れる。それはまるで瞬間移動のようであった。そして、次の瞬間には1体のヴァギナが塵となって消えていた。バラバラに粉砕されたという訳ではない。文字通り、塵となって消えていった。そして、次々とペインの前にヴァギナは塵となって消えていく。圧倒的だった。人間に対する大いなる脅威として恐れられてヴァギナが、手も足も出せず消されていく。

「上出来だ、ペイン。まあ、ヴァギナごときでは当たり前だが……。さてと残り1体、私も久しぶりにこの体を動かすとしよう。捕獲用のリストレイントボックスを用意しておけ」

リツコはヴァギナの前に悠々と歩いていく。

「いくぞ、化け物。覚悟するんだな」

リツコが白衣を翻してヴァギナに向かっていく。ヴァギナはリツコを串刺しにしようと高速で触手を突き出す。しかし、ヴァギナの触手などリツコの電子眼にはまるでスローモーションのように映る。

そして、リツコの脚はその光速の動きに反応する力を持つ。軽く触手を避け、リツコの脚は大地を蹴りさらに加速する。一瞬でヴァギナとの間合いを詰めたリツコはヴァギナの急所に拳を叩き込んだ。それも一瞬の間に１０発もの拳を叩き込んでいる。ヴァギナは呆気なく地響きを上げ地面に倒れた。

「ふふふ、次こそはデビルを血祭りにあげるぞ、ペイン。ハハハ、豪徳寺。覚悟しておけ」

高笑いするリツコに白衣を着た男が話しかける。

「リツコ様、今の一戦でのペインのエネルギー使用量は９０％にも達しています。このままでは長期の戦闘になりますとエネルギーが底をつく可能性がございます」

「なるほど、かなり効率が悪いな。いくら強力な攻撃が出来てもエネルギーが切れては終わってしまう。まだ、改良しなければいかんな」

リツコが腕組みをしていると、もう一人白衣の男がやって来た。

「倒れていた女が気が付きましたが、錯乱していて要領を得ません。けれど、あの飛び去った者を“ゴッド“とよんでいます」

「ゴッド……。神だというのか……。ゴッドとデビル、これは何かの予兆なのか……」

リツコは空を見上げ、今まで停まっていた時代が動いていく感覚を感じていた。

★　★　★　★

「お願いします。許して下さい」

腕を後ろ手に縛られ革の首輪に付けられた鎖で引かれながら幼い少女はヨロヨロと歩いていた。

「助けて下さい」

少女は必死に鎖を引いている男にお願いする。

「そんなに助かりたいか？　俺は別にカタストロフ教の信者ではないからな　助けてやってもいいぞ　」

男は少女の身体を見つめる。全裸に太ももに食い込む黒いサイハイソックスだけ穿かされた少女は形よく膨らんだ2つの胸に、桜色の割れ目が僅かに見えている。

「俺の言うことを聞けば逃がしてやるよ　」

笑いながら言う男の言葉に少女は、藁にもすがる気持ちで大きく頷く。

「よし、それなら脚を開け　」

男の命令で少女は、おずおずと脚を開いた。

「ふざけてんのか　もっと大きく開けよ　てめえのマンコ、俺によ

く見せるんだよ」

少女はビクッと身体を震わせ、限界まで大きく脚を開く。男は少女の性器に顔を近付けると匂いを嗅ぐ。

「ションベン臭いな。まあシャワーも浴びてねえんだ、仕方ねえか」

男は少女の性器をクパァと開くと性器を舐め始めた。

「女のションベンの味も悪くねえ。おい、ガキ、ションベンしろ」

しかし、少女は震えるだけでなかなか尿が出てこなかった。

「何やってんだ、ガキ。早くしろっ」

男は立ち上がると少女の頬を平手で打つ。

バシィッ、バシィッ、バシィッ、バシィッ

「うっ、うっ、うっ、うっ」

少女は涙を流し、必死に下腹部に力を入れる。すると、やっとチョロチョロと尿が流れ出した。

「やっと、出しやがったか」

男は少女の性器に口を付けると、少女の漏らす尿を喉を鳴らして飲み始めた。そして、少女の尿を全て飲み干した男は、立ち上がりまた少女の頬を叩く。

「股、開いて寝ろ」

少女は泣きながら男の命令通り脚を開いて横になった。男は自分のいきり立った性器を少女の小さな膣に当てると、容赦なく突き刺した。

「ひぎぃぃぃーーーっ！！」

少女は悲鳴を上げ歯を喰い縛り、ブチブチと処女膜と膣が裂けていく激痛に耐えている。男は少女の膣から溢れる血と、膣が裂けていく感覚でさらに興奮し、残酷に性器を根本まで押し込み腰を激しく振る。

ブチ、ブチ、ブチ、ブチ、ブチィィッ！！

膣が裂け血を噴き出し、号泣する少女の腰を押さえ付け男はさらに激しく腰を振り、少女の中に大量の精液をぶちまけた。だがそれで終わりではなかった。

「今度は尻を突き出すんだよ、早くしろ」

男は、泣きながら尻を高く上げる少女の肛門に性器を突き刺した。少女の肛門も裂け血が溢れる。

「ひぎぃぃ痛いぃぃっ」

膣に続いて肛門も犯され裂かれる少女は、それでもこの男に好きなように犯されれば逃がしてもらえると思い耐えていた。男は少女の肛門の中にも射精する。

「ふへへ、それじゃ最後の穴も犯させてもらおうか」

男の言葉で少女は心得たように口を大きく開けるが、男は仰向けになって股を開けと命令する。少女が言われた通りにすると、男は少女の尿道に指を突き刺した。そして、膀胱まで指を突き入れる。

「ひぎぃぃぃーーーっ！」

「最後の穴ってのはここだよ。せっかく、股に三つ穴があるんだ。全部犯さなきゃ詰まらんだろうが。もう一本指入れて拡げるか」

男は少女の尿道に無理矢理もう1本指を突き入れる。

「あぎゃぁぁぁーーーっ！！」

少女が絶叫するが男は楽しそうに笑う。

「よーし、本番だ」

男は指を抜くと自分の性器を少女の尿道に当て突き入れた。膣は挿入される為の穴であるし、肛門もまだ挿入に耐えられるが、尿道はまったくそんな事に耐えられる訳がなかった。

ブチッ、ブチッ、ブチッ、ブチィィッ！！

少女の尿道は破壊される。少女は泡を吹いて白眼を剥き失神していた。

「この穴が一番具合いいじゃねえか。かり首が膀胱と擦れて具合いいぜ。このガキの膀胱の中にたっぷり出してやるぜ」

男は激しく腰を動かし少女の膀胱の中に射精する。そして、そのまま放尿も始めた。少女の膀胱の中に男の精液と尿が溜まっていく。男が性器を抜くと、ブシャーッと少女の破壊された尿道から白濁した精液と男の尿が噴き出した。その哀れな少女の姿を見て男は大声で笑っていた。

６６、悪魔の計画（前書き）

スク水少女戦士ウテルスも、いよいよ最終章に突入です。
最後の戦いに向けて物語は収束していきます。
ウテルスが、パズスが、リツコが、そして魔人“豪徳寺文月“が終わりに向かって駆け出します。

66、悪魔の計画

66、悪魔の計画

少女は尿道までも犯され破壊され号泣していた。しかし、自分の尿道を破壊して満足気な男の顔を見て、これで逃がしてもらえる、命は助かるんだと安堵していた。だが、そんな少女の希望も打ち砕かれる事になる。少女を見下ろして下品な笑いを続けていた男が背後から取り押さえられた。いつの間にか数人のマスクを被った男たちに取り囲まれている。そして、男の剥き出しの性器が先端が真っ赤に焼けた巨大なプライヤーで挟まれる。ジューッという音が響き、男の性器が焼かれ、それだけでも過酷な拷問であるが、男の性器はそのまま引き伸ばされる。そして、男の性器を鋭い剣が狙っていた。

「ひぃぃ、やめて。勘弁して下さい」

男が泣いて懇願するが、剣は容赦なく振り下ろされる。

スパッ！

男の性器は呆気なく切断され血が噴き出した。男は泡を吹いて悶絶している。

「このメスはどうしますか？処女ではなくなってしまいました」

「もう生け贄には出来んな。処刑ショーに出品するしかないだろう」

「参りましたな。こんな男のおかげで儀式が台無しだ。やはり教団以外の男に任せたのは失敗でしたな」

「この失態を早急に償わないと我らにも教祖様の制裁がくるぞ。教祖の文月様は恐ろしいお方だ」

「それなら先日、お達しのあったメス2匹を早急に探しだして捕らえましょう。誰よりも早くコイツらを捕らえれば汚名を返上出来るでしょう」

「そうだな。それしかないだろう。よし、お前たちは、このメスを処刑ショーの会場に運んでいけ」

リーダー格の男の命令で二人の男が泣いている少女を引き摺っていく。

「お願いします。何でもします。許して下さい。助けて下さい」

少女は必死に懇願するが、当然許される事はなくズルズルと引き摺られて行くと車に積まれ運ばれていった。

「この男はどうします？」

「見せしめだ。バラバラにして晒しておけ」

「了解しました」

指示を受けた男は、ニヤリと残酷に微笑むと剣を抜いて性器を切断され気絶している男に近付いていった。

★
★
★
★

ある大きな屋敷の地下で女が豪華なソファーに横たわって自慰をしていた。その周りには数人の男が直立不動の姿勢で立っている。女は男に見られているにも関わらず大きく股を拡げ、膣に指を突っ込んでいた。そこへ一人の仮面を付けた男がやって来た。

「文月様、如何致しましたか？」

「デビルの数はどうなっている？」

「はっ、今現在18体のデビルが誕生しております。近々にあと3体も誕生する予定です」

「そうか、それだけあれば、そろそろ頃合いだな。ウテルス処刑計画を進めるか」

「御意っ！」

「まず、ウテルスの周りの人間を捕らえ処刑しろ。容易（たやす）い事だろう。次は奴と親交のあるヴァギナだ。これも、デビルを使えば容易（たやす）かろうが、あの2体のヴァギナだけは要注意だ。単独でいるところを複数のデビルで襲え。ウテルスに関わりのある者、全て殺す。自分に関わってしまった為に殺されたと知ったウテルスはどうなるかな？フフッ、楽しみだ」

「文月様、恐れながら申し上げます。あのまだ幼い女子にそこまで

する必要があるのでしょうか？」

「ウテルスの力を侮(あなど)るなよ。幼く見えるが、その力は世界を破滅させる事が出来る力だ。私は奴の〝審判(ジャッジメント)〟という技を受けた事があるが、あの技を使われればデビルは全て一瞬で消滅するだろう。奴の力は恐ろしい。それにウテルスは不死身だという噂もある。ウテルスは殺されても復活するらしい」

「それでは、文月様。ウテルスを倒す事など不可能なのでは？」

「そうだ。奴を殺す事は不可能だ。では、どうすればいいと思う？」

「殺す事が不可能なれば、生涯幽閉しておく以外ないのでは？」

「そうだ。ウテルスには絶望と後悔の中、寿命で死ぬまで拷問で苦しんでもらう。死なないというのはいいものだな。どんな拷問も、し放題だ。ウテルスのマンコを毎日ズタズタにして破壊してやる。その時の事を思うと興奮して濡れてくるわ」

「成る程、それは文月様にとって良い玩具になるでしょうな。では、さっそくウテルスの周囲の人間を探り、始末していくとしましょう。文月様の期待に応えられますよう我がカタストロフ教団は精一杯努めさせていただきます」

仮面を付けた男は恭(うやうや)しく礼をすると退室していった。

「あとは橘か。せいぜい私を楽しませるよう足掻(あが)いてみてくれよ。期待してるぞ」

文月はまたソファーに横になると股を開き、自慰を始めた。心を壊

され廃人になったウテルスを毎日処刑する様を妄想した文月は、激しく潮を吹きイッてしまった。

★　★　★　★

二人の少女が歩いている後ろを男が後をつけるように歩いていた。二人の少女が止まると男も止まる。明らかに尾行しているものと思われる。しかし、少女たちはそんな男の存在に気付かず歩いていた。そこへ、もう一人の少女が現れ、二人の少女に合流する。

・・あれは確か人間に擬態しているヴァギナだ。デビルを呼び寄せておいた方がいいな・・

男は無線機で仲間に連絡し、デビルの手配を要請した。

「リリスちゃん、どおしたの？」

「エレシュキガル様から萌と若葉についてろと指示されましたので……。何やら不穏な動きがあるようですよ」

「不穏な動き？」

「ええ、どうやらまともに戦っても勝てないと思った敵が刺客を放って暗殺しようとしているようです」

「ええっ！暗殺っ！」

「そうです。だから決して一人にはならないで下さい。私も可能な

限りそばにいますので……」

「分かりました。でも、どうしてそんな事が分かったのですか？」

「ニヌルタ様の部下でベルゼブというヴァギナがいるんです。今はパズス様の下で動いていますが、このベルゼブという奴が情報収集に特化したヴァギナなんですよ。小さな虫のようなヴァギナで、色々な所に忍び込んで情報を仕入れています」

「そんな方もいるんですね」

「ニヌルタ様は自分で動かず、部下を動かすのが得意でしたからね。自分の代わりに動いてくれる部下が多かったですね。先日のバアルも空を飛べますので重宝されていたようですよ。エレシュキガル様は、ニヌルタ様に、自分で動けとよく言っていましたが……」

萌と若葉は今さらながらヴァギナの能力に驚いていた。エレシュキガルに助けられる前は、ヴァギナはただ人間を補食するだけの恐ろしい化け物と思っていたが、実際にエレシュキガルたちと知り合い会話しているうちに、ヴァギナは人間よりはるかに人間らしいと思うようになっていた。特にその裏のない言動は、処刑ショーなどという人間の汚い裏側を見た萌と若葉にとって、心の底から信じられるものだった。

だが、そんな平和も束の間、ウテルスを処刑するという悪魔の計画が動きだし、萌と若葉もその計画に巻き込まれていく。人間の悪意程恐ろしいものはなかった。

67、悪魔の犠牲者

67、悪魔の犠牲者

命を狙われた経験のある佳乃は、ここ数日、自分をつけている人影に気付いていた。それが何者なのか。おそらく、ヴァギナ対策委員会から機密事項の弾丸等を横流ししている者なのだろうと予想していた。命を狙われたショックから、しばらくはホテルで匿(かくま)われていた佳乃だったが、何時までもそうしている訳にもいかない。それなら自分自信を囮にして敵を誘きだしてやる。そう考え、今は通常に仕事をこなしているが、ようやく敵に動きがあったようだと感じた。それにしてもと佳乃は思う。委員会に入った当初は、敵は間違いなくヴァギナだった。佳乃自身も、家族を殺された恨みからヴァギナを倒す事だけに情熱を傾けてきた。それが、ウテルスに出会って以来、１８０度変わってしまった。敵視していたヴァギナの方が人間よりもはるかに素晴らしいと感じるようになっていた。

ヴァギナ対策委員会自体もパズスとの会談によって、その対策をデビルへと方向転換していた。人間の中の悪意。それこそが本当の倒すべきものだと気付いたのだ。だが、悪意は普段は人の奥深くに潜んでいてその姿を現さない。その悪意が姿を現した時には人間はもう人間でなくなっている。人間の悪意の塊と云えるデビル。その影が人の世に溢れだしていた。

佳乃がわざと人気のない公園の中に入り、ゆっくりと風に当たるように歩いていると草むらの中からナイフを持った男が飛び出してきて佳乃に襲いかかる。しかし、佳乃も油断していなかった。咄嗟に

身をかわし素早く銃を抜くと男に狙いを付ける。男は歯軋りしながら佳乃を睨み付けるが、佳乃は銃口を男に向けたまま笑みを浮かべた。

「上手くかかってくれたわね。さあ、言いなさい。誰に頼まれているの。逃げようとしたら遠慮なく撃つわよ」

「……」

「黙(だんま)りね。まあ、いいわ。捕まえてゆっくりと尋問する事にするわ」

佳乃が近付くと男は右に跳び逃げようとするが、弾より早く逃げられる訳がない。佳乃の銃で脚を撃ち抜かれ地面に転がった。

「ぐわぁっ！」

男は太ももを押さえて転げ回る。

「撃つって言ったでしょう。馬鹿なの、あなた」

佳乃は悠々と男の前に立ちスマートフォンを手に取ると発信した。

「ああ、嶋田さん。野上です。今、怪しい男を確保しました。リストレイントボックスを持ってきてくれますか。ええ、３丁目の公園です」

佳乃が、ウテルス親衛隊副リーダー嶋田三千代に、拘束箱を持ってきてくれるよう要請していると、男は這ってでも逃げようと足を引き摺りズルズルと必死に逃げていく。が、佳乃は呆れたように男の背中を踏みつけ、そのままゴロンと仰向けにする。

「ククク、スカートの中が丸見えだぜ。白いパンティとは、意外に純情なのか」

男が佳乃に言うが、佳乃は気にした様子もなく笑う。

「やっと喋ったと思ったら私の下着の心配？良いわよ、存分にご覧なさい。あなたにはこれから痛い目にあってもらいますから、サービスで下着くらい見せてあげるわ」

佳乃は男の腹部を思い切り踏みつけると、悶絶する男の顔の上で大きく脚を開く。

「ほーら、ご覧なさい」

佳乃が男をなぶっていると、三千代がやって来た。

「リーダー、その男ですか？」

「ええ、本部に連れていって尋問しましょう」

「分かりました。それではボックスに収納します」

三千代は、リストレイントボックスを展開するため佳乃の前にしゃがみこむ。そして、ボックスを展開するかと思いきや、突然佳乃のスカートの中に手を入れ、佳乃の股間に何かを当てる。突然の事で動けずにいる佳乃に三千代はニヤリと笑みを浮かべると、佳乃の股間に当てた物のスイッチを入れた。

「ひゃうぅぅーーっ！！」

佳乃は悲鳴を上げると股間からシャーッと小便を勢いよく漏らし、地面に倒れ白眼を剥いて無様に失神していた。佳乃が股間に当てられた物は、小型であるが強力なスタンガンだった。佳乃は性器や膀胱に強力な電流を流され、失禁して失神してしまったのだ。

三千代は倒れた佳乃の手から銃を奪い取ると、佳乃のスカートを捲り上げる。そして、佳乃の白い下着を晒すと、脚を拡げ佳乃の股間を見つめた。

「ウテルス親衛隊リーダー、ここに死す、か。残念ね、リーダー。あなたのマンコの穴から弾丸を撃ち込んで殺してあげるわ。いい気味ね。正義感ぶって、反吐が出るわ。もう、あなたはここでお仕舞い、さようなら野上佳乃」

三千代は佳乃の漏らしてぐっしょりと濡れている下着の上から膣の位置に銃口を当てると躊躇なく引き金を引いた。

ドウッ、ドウッ、ドウッ、ドウッ！！

銃声が響き、佳乃の膣から血が噴き出し白い下着を真っ赤に染める。三千代は弾倉を入れ換えると今度は佳乃の肛門に銃口を当てた。

「フフッ、うんこも撒き散らしなさい」

ドウッ、ドウッ、ドウッ、ドウッ、ドウッ！！

容赦なかった。佳乃の体は肛門から弾丸を撃ち込まれる度に手足が上下に人形のように動いた。

「ほら、うんこの付いた銃口、今度は口に入れてやるよ」

三千代は佳乃の大便の付いた銃口を佳乃の口に押し込み引き金を引いた。

ドウッ、ドウッ！！

さらに佳乃の下腹部、恥丘にも弾丸を撃ち込む。

ドウッ、ドウッ、ドウッ！！

佳乃の性器は徹底的に破壊された。

「ふはは、どうだい？マンコ、撃たれて気持ち良かっただろう」

三千代は銃を投げ捨てると、男に手を貸し立ち上がらせる。

「上手くいったな。マンコ撃たれて死ぬなんて、まったく無様な死に様だ」

「これで、ウテルスの仲間の一人を始末出来たわね。ちょろいもんだわ」

三千代は男に肩を貸し二人で公園の出口に向かって歩いていた。そして、公園の出口に停めた車の前に来たとき、二人の前に立ち塞がるように人影が立った。その人影を見て、二人の表情が恐怖でかたまる。

「の、野上佳乃……。どうして？」

「馬鹿な。マンコから蜂の巣にされて死んだ筈だろう」

二人の前に立った佳乃はニヤリと笑う。

「本当、ちょろいもんね。私の部屋のコーヒーに毒を入れられるなんて限られた人にしか出来ない。ばれると思わなかったの？まあ、もっとも私にエレシュキガルさんというヴァギナのお友達がいなかったら死んでいたでしょうから、ばれるなんて考えてもいなかったでしょうね。あなたの失敗は、私にヴァギナの仲間がいると思わなかった事。まあ、ヴァギナ対策委員会の私が、ヴァギナの仲間がいるなんて誰も思わないでしょうから仕方ないわね」

「まさか……。じゃあ、さっきのあれは……」

「ええ、私に協力してくれているヴァギナの方ですよ。ヴァギナは食べた人間に擬態出来るのよ。私は本当に自分が犠牲になるつもりだったけど、それは駄目だと自分から進んで私の身代わりになってくれたのよ。あなたには、こんな事をしてくれる仲間がいるかしら？」

そこへ、コツコツと十六夜がやって来た。

「この女、ホントに人間ですか？全部見ていましたが酷い事、してくれましたね」

「ごめんなさい、十六夜さん。あそこまで酷い事するとは思いませんでした。大丈夫ですよね？」

佳乃が心配そうに言うが、十六夜は問題ありませんと即答する。

「これは、嶋田さん。あなたを誘きだす為に仕組んだものだったん

ですよ。私の部屋に入れるのはウテルス親衛隊のメンバーだけ。その中で、私が必ずコーヒーを飲むと知っているのは嶋田さん、あなただけです。でも、正直、あなただと思いたくなかった。だから、試してみたんです。残念です、嶋田三千代。人類の敵、あなたを処刑します」

「私を処刑？ふざけるな、ヴァギナと手を組んで人類を裏切っていたのは、佳乃っ、あんたの方だろうっ！！」

「私は別に何を言われようと構いません。もう、人類などどうでもいい。私を2度も殺そうとした、あなたを許す事が出来ないだけです」

「クッ、ならば仕方ない。我がカタストロフ教団の為、ここで殉教するまで。佳乃、お前を道連れにしてなぁっ！！」

三千代は小さな球体を取り出すと地面に投げつける。

「あれはヴァギナ対策委員会が開発したヴァギナ用爆裂弾。いけないっ、十六夜さん、逃げてっ！！」

佳乃が叫ぶが、十六夜は佳乃を庇(かば)うように佳乃に覆いかぶさる。

・・そんな、私なんかを庇(かば)わなくていいのに・・

佳乃はまるでスローモーションのように爆裂弾が地面に向かっていくのを見ていた。

68、悪魔との対決

68、悪魔との対決

三千代の投げた爆裂弾が地面に叩きつけられ、自分の命も終わったと佳乃は思ったが、その爆発は訪れなかった。

「すまんな、再生に少しばかり時間がかかってしまった」

佳乃に擬態していたエレシュキガルが地面に叩きつけられた筈の爆裂弾を握っていた。

「さすがエレシュキガル様です」

十六夜ですら、エレシュキガルの動きは見えなかった。

「佳乃の性器を喰ったおかげでスピードが上がったようだな」

エレシュキガルは爆裂弾をポンポンとお手玉のように手の上で弾ませていた。

「貴様、佳乃っ！お前、自分の性器をヴァギナに喰わせたのか」

三千代は憎悪に満ちた目で佳乃を睨みつける。すでに十六夜の触手で捕らえられた三千代には佳乃を睨む事しか出来なかった。

「まったく、人間と云うのは酷いものだな。佳乃はお前の仲間ではないのか？よく躊躇いもせずにあんな残酷に殺せたものだな。まあ、私はマンコ撃たれて気持ち良かったがな」

「ヴァギナの分際で気持ちいい？貴様らなど全て我々カタストロフ教団が滅ぼしてくれるわ」

「なかなか生きが良いな。それでは佳乃、この二人は貰っていくぞ」

「はい、どうぞ。出来るだけ残酷に加工して下さいね」

佳乃が恐ろしい顔でエレシュキガルに告げる。

「加工？加工ってなんだ？」

三千代が怯えた目で佳乃に尋ねるが、答えたのはエレシュキガルだった。

「決まっているだろう。私の牧場で食肉用に加工するのさ。痛みを与えて苦しめる程、よい味になるからな。お前たち二人にはいい食肉になってもらう為に殺さないように少しずつバラバラに解体してやる」

「ふ、ふざけるなっ！やめろっ！一思いに殺せっ！」

「食肉の分際で何を言う。せっかくの食材を美味くなるよう加工するのは常識だろう」

「嫌だ、やめろっ！許してくれっ！そんなの嫌だぁぁっ！！」

「これだけ生きが良いと、お前のマンコは上手そうだ。私がゆっくりと活け作りで喰ってやる。そっちの男は十六夜、お前にやろう」

「はっ、それでは私も活け作りで戴くとしましょう」

三千代も男も恐怖で失禁していた。二人の股間から尿が溢れだし地面に水溜まりを作っていった。

「ふん、十六夜。それでは牧場に連れていけ。そして、痛め付けて味がよくなるようにしておけと伝えろ」

「畏まりました、エレシュキガル様」

悲鳴を上げながら三千代と男は運ばれていった。

「人間の醜いところをお見せしてすいません」

佳乃がエレシュキガルに頭を下げる。

「人間と云うものは恐ろしいものだな。ウテルスや佳乃のような人間もいれば、豪徳寺文月や今の女のような人間もいる。ウテルスやデビルが生まれてきたのは必然なのかも知れんな」

エレシュキガルがポツリと言い、その後に、なんだかウテルスの顔が見たくなったな会いに行くかと続けた。

★　★　★　★

萌と若葉、リリスは周囲に注意しながら歩いていた。

「どうやら、尾行されているようですね」

リリスの言葉に、萌と若葉は振り向こうとするが、リリスに駄目ですと止められる。

「気付かない振りをして下さい。ベルゼブに連絡をとって敵を探らせます」

それから、3人は普通に世間話をしているように会話しながら歩いていた。そこへ小さなものがリリスの耳元に飛んできた。リリスは何か聞いているようだったが、しばらくするとその小さなものは飛び去っていった。

「カタストロフ教団」

「えっ？」

「どうやら、その教団が黒幕のようです。私が処刑されたショーや、萌や若葉が捕らわれた処刑ショーも、その教団が主催していたようですね」

「カルト教団なのかなぁ？」

「間違いないですね。狂信者の集まりでしょう。あの角を曲がったら全力で走って下さい。私が尾行している者を捕らえます」

萌と若葉は頷き、次の曲がり角を曲がったところで猛ダッシュする。尾行していた男は意表を突かれて慌てて駆け出すが、走り出したの

は二人だけでリリスの姿がない事に気付いていなかった。

・・くそガキが……。俺から逃げられると思うなよ・・

男は全力で走り距離を詰めてくる。もう少し人気のない所でと思ったが、ばれてしまえば仕方がない。ここで始末する。男がニヤリと笑みを浮かべた時、何かに足を取られて転倒した。

「ぐわっ！」

地面を一回転した男は、すかさず起き上がり萌たちを追いかけようとするが、その時にはもうリリスの触手に捕らえられていた。

「くそっ、ヴァギナか。だけどな、お前の事は知っているぞ。あの、二人のヴァギナに比べれば取るに足らないヴァギナだと云うこともな」

「エレシュキガル様とパズス様の事ですか。当然です。あのお二人は私たちにとって神、比べられる事さえおこがましい。そんな私でも人間を殺す事など蟻を潰すくらい簡単です。私の質問に答えるなら楽に殺してあげますよ」

「ククク、随分上から目線だな。確かに人間がヴァギナとまともに戦える訳がない。でもな、人間を甘くみるなよ。お前らに対抗出来るもの。いや、お前らを滅ぼす者を我が教祖様は造りあげた。もうすぐ、お前たちの時代は終わるのだ」

男は触手に捕らえられながらも余裕の表情で高笑いする。

「狂信者というのは恐怖も感じないのですね。分かりました。それ

では死になさい」

ドスゥッ！！

鈍い音がして触手が体を貫く。

「こ、これは……」

体を貫かれたのはリリスだった。リリスが捕らえている男の後ろから、腕が４本ある男が現れた。その男から伸びている触手が、リリスを貫いていた。

「やれ、デビル。こいつを始末しろ」

・・くっ、デビル？ウテルスさんが倒したのに、まだいたの・・

リリスも触手で攻撃するが、全て弾き落とされ、逆に触手で貫かれ蜂の巣にされる。

・・再生が間に合わない。このままでは殺される・・

リリスは自分を犠牲にしても、萌と若葉を守りたかった。エレシュキガルからの指示という事もあるが、出会って以来一緒に行動しているうちに、二人がリリスにとって大切な友人となっていたのである。

・・このまま私が殺されれば、次は萌と若葉だ。それは何としても阻止する。手はある。私が自爆すればいい。エレシュキガル様やパズス様の攻撃も効かないデビルに私が自爆しても効かないのは分かっている。でも、私が自爆すればエレシュキガル様やパズス様は必

ず気付いてくれる。あのお二人が駆けつけてくれれば萌と若葉は助かる。それに賭けるしかない・・

リリスは後ろを振り向いた。萌と若葉が心配そうにリリスを見つめている。

・・大丈夫。私が守るから・・

リリスの心にもう迷いはなかった。自爆すれば当然、再生など叶わない。確実に死に至る。それでも、あの二人が助かる可能性があるのなら……。

「萌、若葉っ！私が戦っているうちに逃げろっ！エレシュキガル様の所に行くんだっ！」

「リリスちゃん、分かった。急いで助けを呼んでくる」

萌と若葉が駆け出し、それを見たデビルが触手を伸ばすがリリスが全力で押さえ付ける。

「あなたの相手は私。覚悟しなさい」

リリスはデビルを押さえながら触手で貫こうとするが、デビルを貫く事は出来ず、押さえつけていた腕を引き千切られてしまう。デビルは引き千切ったリリスの腕を口に入れるとグシャグシャと噛み砕き飲み込んだ。

・・私の力ではもう無理です。申し訳ありません、エレシュキガル様。サヨナラ、萌、若葉・・

リリスの体が激しく輝きだすと、激しい爆発が起こった。

69、救世主

69、救世主

委員会のウテルスの部屋で、エレシュキガルと佳乃は菜緒に淹れてもらったコーヒーを飲んでいた。

「どう？どう？」

それまでのドリップ方式から、フレンチプレスのコーヒー抽出に変えてみた菜緒が、二人に感想を求めている。

「美味しいですけど、私はドリップの方が好みかな」

「私はこっちの方が好みだな。味が濃いような感じがする」

「エレシュキガルは濃い味が好きなんだね。でも気を付けないと病気になるよ」

「病気？そんなものになってみたいもんだな……。んっ……」

「どうしたの？エレシュキガル」

表情が硬くなったエレシュキガルを覗き込むように菜緒と佳乃が顔を寄せる。

「リリスが死んだ……」

「えっ？」

「リリスちゃんが？」

「リリスには萌と若葉を守るように言ってある。何か起こったに違いない。ウテルス、来てくれるか」

「分かった。すぐ行こう」

二人は部屋を飛び出して行くが佳乃も後を追う。

「私も行きますから絶対に無茶しないで下さいね」

大声で二人の後ろ姿に叫びながら佳乃も全力で走るが、二人の姿はすぐ見えなくなった。

以前誘拐された菜緒は自分の位置を発信する小型の端末を常に携帯するようにしている。それを辿れば二人が向かった場所に行き付ける筈だ。佳乃は駐車場から自分の愛車である旧車を復活させたＣＢＲ２５０ＲＲに跨がりアクセル全開で飛び出した。

★　★　★　★

自爆したリリスと共に吹き飛んだかと思われたデビルは、ほぼ無傷で立っていた。そばにいた男もデビルに庇われ怪我一つなく悠然と立ち、服に付いた砂ぼこりをはたいていた。

「バカなヴァギナだ、自爆などデビルに通用すると思ったのか。無駄死にだったな。さあ、デビル。あの二人のガキを殺せ」

泣きながら必死に走る萌と若葉だったが、簡単にデビルの触手に捕らえられてしまう。

「ガキの始末なんてちょろいものだ。くくっ、一度も使わないで死ぬのは可哀想だな。マンコから串刺しにして殺してやるよ。最後にいい気持ちにさせてな……。俺って優しいだろう。くははっ」

男は高笑いしてデビルに指示を出す。萌と若葉は服を剥ぎ取られ、足を大きく広げられる。その二人の股間の中心にデビルの鋭い触手が伸びてきた。

「いやぁ、やめてぇ」

絶叫する二人の股間の割れ目からシャーッと尿が吹き出したが、かまわずデビルは二人の膣に触手を突き刺す。

ズンッ!!

「あぎゃぁぁーーーっ!!」

悲鳴をあげる二人にかまわず、デビルは高速で触手をピストン運動させる。そして、萌と若葉の乳首とクリトリスにも触手は巻き付き、ぎゅっと締め付けながら刺激する。さらに二人の肛門にも触手が突き刺さりピストン運動を開始した。

「あ、あ、あ、あ、あ、あ」

二人は泣きながら、それでも体が火照り生まれて初めての快感に頭が真っ白になり声が出てしまう。

「こんなの、いやだぁっ！助けてぇぇっ！」

高速のピストン運動で二人の膣からは粘液が溢れだし、肛門からは大便が漏れだしていた。二人は無様に大声を出し汗だくになっている。

「ダメぇっ！マンコ、イクぅぅぅーーっ！」

絶頂寸前の汗だくの萌と若葉を笑いながら男は眺めている。

「イッた瞬間に逝かせてやるよ。最高の瞬間に逝けるなんて嬉しいだろう」

男はデビルの触手に膣と肛門を同時に犯されガクガクと体を震わせる無様な萌と若葉を楽しそうに眺めている。

「あっぴゃぁぁーーーーっ！！」

一際高い声を上げた萌と若葉の性器から潮が噴き出した。

「よし、殺せ」

ドスゥッ！！！

萌と若葉が性器から串刺しにされたかと思ったが、萌の口からは何も突き出ておらず、デビルの触手が切断されていた。しかし、若葉の口からはデビルの触手が飛び出し、血も噴水のように噴き出して

いる。さらに肛門からの触手も若葉を串刺しにし、若葉の口が裂け2本の触手が飛び出した。触手が切断され地面に落ちた萌は、串刺しにされビクンビクンと体を痙攣させる若葉の姿を見て絶叫した。

「いやぁぁーーーっ！！」

悲鳴を上げる萌の目の前で、若葉の足首に絡みついたデビルの触手が若葉の脚を開いていく。限界まで開かれた若葉の串刺しにされた割れ目がビリビリと裂けていった。それと同時に若葉の乳首が切断され、少し膨らんだ乳房も切り裂かれる。そして、裂けていった性器から血が噴き出す。

ズバァッ！！

若葉の体が股間から真っ二つに引き裂かれる。若葉が惨殺される瞬間を目の当たりにして萌は声も出せず震えていた。その萌に向かってまたデビルの触手が迫ってくる。が、その触手は空から白い翼を持った異様な者が降りてきて、ガシッと掴み引き千切った。ゴッドだった。萌が助かったのは、たまたまゴッドが現れた方角に近い位置にいたからに過ぎなかった。ゴッドにしても、あの刹那に二人を同時に救う事は不可能だったのだ。そして、3面の顔に6本の腕、6本の脚を持つゴッドは6個の瞳で男とデビルを睨み付けた。

「なんだ、貴様はデビルではないのか。なぜ、命令に従わない」

男がデビルの陰に隠れながら叫ぶ。

「ワタシハ〝ゴッド〟」

「アナタタチ、ハイジョシマス」

「オンナイジメル、ユルサナイ」

「何がゴッドだ。かまわない、アイツも殺せ、デビル」

男の命令でデビルは動き出す。それは明らかに今までとは違う全力の動きだった。デビルの本能が、ゴッドを危険な敵と認識したのだ。だが、このデビルはまだ考えが甘かった。ゴッドの力を見誤っていたのである。デビルの攻撃は悉く(ことごとく)ゴッドに防がれ、逆にゴッドの攻撃でデビルの腕が、脚が引き千切られていく。そして、引き千切ったデビルの手足をゴッドは両側の顔の口で喰らっていた。

「デビルを喰っている？ふざけるな、デビルは無敵の存在だ」

男は銃を取り出しゴッドに向かって発砲するが、拳銃の弾などゴッドに通用する筈がなかった。そして、デビルを喰らったゴッドの力はさらに上がっていく。その白く輝くゴッドの体を震えながら見ていた萌は、ゴッドがまさしく神のように見えていた。

・・あの白い人、本当の神様なの？・・・

ゴッドの正面の顔の口が大きく開き、口からパズスの使ったものと同様の振動波が放出される。その振動波を浴びたデビルの体が崩壊していった。

「バカな。デビルが負ける？そんなことある筈がない。文月様はデビルは無敵だと仰(おっしゃ)った。何をやっている、デビル。そんな奴、早く殺せっ！」

しかし、ヴァギナや人間を何体も喰らい力を上げ続けているゴッド

には、いかなデビルといえど、まったく歯が立たなかった。

・・凄い。エレシュキガル様やパズス様でも勝てなかったあのデビルが手も足も出ない・・

萌はゴッドの強さに驚愕したが、それは個の強さに他ならない。戦いにおいて勝つのは、何時でも数において有利な方である。もし、その数の差も物ともしない者がいるとしたら、それはもう本当の神であると云えた。この戦いも圧倒的な強さでデビルを追い込んでいるゴッドであるが、この後、逆に追い込まれていくことになる。

「間に合ったか。早く、奴を倒せ」

新たなデビルが4体も現れていた。最初の1体のデビルはゴッドの攻撃で消滅したが、4体のデビルがゴッドに襲いかかる。3面の顔を持つゴッドであるが、4体が相手となると死角が出来てしまう。相手が人間やヴァギナであれば、4体であろうと何も問題はないが、デビルが相手ではそうもいかない。ゴッドの腕が千切れ、脚も吹き飛んでいた。ゴッドの体は即座に再生されるが、再生にもエネルギーを使うため攻撃の威力が弱まっている。

「ガッ！」

デビルの攻撃でゴッドの亜季の顔が吹き飛んだ。

「シカタアリマセン」

「テッタイシマス」

「……」

ゴッドは翼を広げ飛び立とうとするが、４体のデビルに翼や脚を触手で絡みつかれ飛び立つ事が出来なかった。

「フカク」

「イヤ、マダ……」

「……」

ゴッドは何かを感じて上空を見上げた。

「エレクトリカルハンマー」

空から現れたウテルスが1体のデビルの頭上に強烈な踵落としを浴びせた。デビルは同時に強力な電流も流され崩れ落ちるが、すぐに頭を振って立ち上がる。その間にゴッドを捕らえていたデビルの触手はエレシュキガルのガステックカッターにより切断されていた。

「まさか、こいつが萌を助けてくれるとはな。礼を言う。後は任せろ」

エレシュキガルもデビルに向かって間合いを詰める。その動きは以前のエレシュキガルより遥かに高速だった。デビルの触手をかい潜り、デビルの頭を鷲掴みにする。そして、凶悪な握力でそのままデビルの頭を握り潰した。デビルの頭がトマトのようにぐちゃぐちゃに潰れる。ゴッドが神なら、この時のエレシュキガルは黒い悪魔の化身のようであった。リリスと若葉を殺されたエレシュキガルの怒りは凄まじいものであったのだ。

70、デビル軍団

70、デビル軍団

「レッドセンセーション」

ウテルスの必殺拳が炸裂しデビルが燃え上がるが、すぐに炎は消えウテルスに襲いかかってくる。

「デストロイクロー」

さらにウテルスはデビルの頭部を破壊するが、瞬時に再生しデビルは、何事もないようにウテルスに迫ってくる。

「やっぱり、こいつら、死なないよ。どうしよう、エレシュキガル？」

「まったく、厄介な敵だな。だが、ここで退くわけにはいかない。私が4体を止める。その間に〝審判〟を発動しろ」

「4体を……。大丈夫なの？」

「ああ、少しの間なら大丈夫だろう」

エレシュキガルは内心、かなり厳しいと思っていたが、ここでデビルを倒すにはそれしか方法が思いつかなかった。そこへ、再生が終

わったゴッドが参戦してきた。

「コイツラ、ユルセナイ」

「ゼンイン、ハイジョ」

「ムクイヲアタエマス」

ゴッドはデビルの1体に襲いかかると、デビルを引き千切り喰らう。その凄まじさはデビルよりも凶悪だった。そして、またデビルを喰らったゴッドの力が上がっていった。

「クククッ、こいつが復活してくれて希望が出てきたな。ウテルスを待たずとも私とこいつでデビルを消してやる」

慌てた男はスマートフォンでカタストロフ教団に連絡していた。

「あっ、私です。すいません、信じられない事ですが、デビルがやられています。相手はウテルスとヴァギナ、それにデビルの裏切り者のようです。もう、2体のデビルが殺られています。支援、お願いします」

男が通話し終わった時にウテルスの声が響いた。

「審判の時間です」

ウテルスの声と共に黄金色の光が辺りを包み込んでいく。そして、その光はゴッドもエレシュキガルも萌も、さらにデビルも男も飲み込んでいった。エレシュキガルは萌の前に行くと、萌を抱き締めた。

「すまない。私が遅れたばかりに若葉を助けられなかった」

「いえ、私たちはあの処刑ショーで殺されていた身です。ここまで生きていられたのは皆さんのおかげです。エレシュキガル様が気にする事はありません」

しばらくすると宙に浮いていたウテルスの体が降下して黄金色の光が薄れてきた。そして、その後に残っていたのは、エレシュキガルと萌とゴッドだけだった。案の定、デビルと男の姿は消えていた。地面に降り、ふらついたウテルスをエレシュキガルと萌が支える。

「さすがウテルスだ。今日はもうゆっくり休め」

「ウテルス様、ありがとう」

エレシュキガルと萌に続き、ゴッドがウテルスの顔を見つめる。

「オマエ、ツヨイ」

「オマエ、イイヤツ」

「ソレデハ、テッタイスル」

ゴッドが白い翼を広げて飛び立とうとしたが、急に翼を戻し闇を見つめる。エレシュキガルも何かを感じゴッドと同じ闇を見つめた。

・・なんだ、とてつもなく嫌な感じがする・・

ゴッドとエレシュキガルが見つめる闇の中から、それは現れた。デビル。それも１０体も。

・・馬鹿な、いったい何体のデビルがいるんだ・・

エレシュキガルはウテルスを見る。ウテルスは〝審判〟を発動した反動でもう動けそうもなかった。

・・私ではデビルを足止め出来ても倒す事が出来ない。倒せるのは、このゴッドだけ。どうする？ウテルスと萌に逃げてもらって、その後自分も離脱するか。いや、無理だ。デビルが１０体もいては、今のウテルスでは逃げられない。このままでは全滅だ・・

エレシュキガルはゴッドを守り、ゴッドの負担を軽くし、ゴッドに１体ずつデビルを倒してもらう以外ないと考えた。１０体のデビルが飛びかかり触手攻撃してくる。

・・くそっ、速い上にこの数だ・・

エレシュキガルは必死に防御するが、ゴッドは１体のデビルを捕らえ引き千切り喰らっていた。

・・やはり、アイツは強い。ここはそれに駆けるしかない・・

エレシュキガルはデビルが自分を狙うように仕向け、デビルの攻撃を受け続ける。

「レッドセンセーション」

そこへウテルスが割って入ってきた。ふらふらの体で歯を食い縛りながら戦う。

「バカ、何をしている。お前は萌を連れて逃げろ」

「大丈夫だよ、エレシュキガル。萌ちゃんは佳乃さんに預けた。佳乃さんなら必ず逃げ切ってくれる」

「そうか、佳乃も来てくれたのか」

「こいつらは倒さなければならない敵。もう、こんなに増えているって事は、ここで倒しておかないとどんどん増えていくよ」

ウテルスの言う事ももっともだ。だが、デビルを倒せるのはウテルスとゴッドだけ。そのウテルスは万全の状態ではない。エレシュキガルは自分の力不足が悔しかった。せめて自分にデビルを倒す力があれば、3人ならなんとか出来るかも知れない。そう思いながらエレシュキガルは戦っていた。惨神としてヴァギナのトップに君臨していたエレシュキガルがこんな気持ちで戦う事は初めてだった。

「ウテルス、シナイ契約は使えるか？」

「ごめんなさい、まだ無理。もう少し回復しないと……」

〝審判〟の連発は不可能だ。あとは〝審判〟よりは負担の軽い〝シナイ契約〟だ。が、シナイ契約は1体にしか効果がない。ゴッドが今、1体を倒して残り9体。ウテルスが1体倒すとして、残り8体。それをゴッドが倒せるか？エレシュキガルは冷静に分析するが、その可能性は限りなく低いものだった。

・・このままではじり貧だ・・

ウテルスとゴッドを守りながら奮闘するエレシュキガルだが一度に

5体のデビルに囲まれてしまう。そして、エレシュキガルを狙い一斉に触手が襲ってくる。

・・ダメだ、防ぎきれない。ウテルス、すまん・・

自分がここで崩れればウテルスもゴッドも崩れていくだろう。エレシュキガルは無念だと天を仰いだ。そのエレシュキガルの目にパズスの姿が映った。

「ソニックミサイル」

デビルの触手が崩壊する。

「すまん、遅れた。リリスが殺られる程の相手だ。準備していて遅くなった。ウテルス、この中に入れ」

パズスはリストレイントボックスを展開し、ウテルスを中に入れる。

「これは拘束箱を改良した物だ。デビルの触手の攻撃力は約１００キロニュートンだ。それに耐えられるよう改良してある。その中で回復しろ。僕が代わりに戦う。それとエレシュキガル、これを使え」

パズスはエレシュキガルに小型の拳銃を投げた。

「なんだ、拳銃などデビルに効く筈がない」

「それは人間と共同で開発した対デビル用の拳銃だ。ただ倒すにはおそらく１０発以上撃ち込む必要がある。弾の予備はない。お前なら大丈夫と思うが、外すなよエレシュキガル」

「ククク、パズス。何をやっているのかと思っていたらこんな事をしていたのか大した奴だ。任せろ、私が外すわけがない。反撃開始だ」

エレシュキガルは銃を構えるとデビルを狙い撃つ。デビルの動きは人間では捉える事は不可能だが、エレシュキガルであれば可能だった。弾丸を撃ち込まれたデビルの脚が腐っていく。その動きの落ちたデビルのもう1本の脚もエレシュキガルは狙い撃った。完全に動きの止まったデビルにエレシュキガルは続けて弾丸を撃ち込む。

ドウッ、ドウッ、ドウッ、ドウッ、ドウッ、ドウッ、ドウッ!!

「トドメだっ」

エレシュキガルは最後の1発をデビルの頭に撃ち込んだ。デビルの体中が腐りそのまま溶けていった。パズスの援助で有利になったかと思われた戦況だが、それでもまだデビルの数はウテルスたちを全滅させるのに充分な数が残っていた。

71、神を超える力

71、神を超える力

デビルの猛攻は続く。3体が倒されたデビルであるが、それでもまだ7体の残っている。依然としてデビルが有利であるのは変わらなかった。

・・萌は逃げる事が出来た。あとはこいつらに出来るだけダメージを与えて撤退するのが正解か・・

エレシュキガルは冷静に戦況を把握する。

・・もう、デビルに有効な弾丸は撃ち尽くしてしまった。これで、デビルを倒せるのはまたウテルスとゴッドのみだ。私とパズスでウテルスとゴッドを守り突破口を開くしかないな・・

エレシュキガルはパズスをチラリと見るが、3体のデビルに攻撃されながら、それでも何かをしようとしているように見えた。

・・考えてみれば惨神が一緒に戦う事など最近までなかった事だ。こいつは昔から何を考えているのか分からない奴だったが、同じ惨神として信頼できる奴だった。この状況でまだ何かあるのか?・・

エレシュキガルの目には明らかに劣勢にたっているパズスが何かを狙っているように見えていた。パズスはその動きを最大に加速させ

3体のデビルを足止めしていたが、パズスをなかなか仕留められない事に業を煮やしたのか、デビルがパズスに狙いを集中してきた。そして、7体のデビルが一斉にパズスを串刺しにする。

「がはぁっ！」

動きの止まったパズスにトドメを刺そうと7体のデビルがまとまって飛びかかる。その時、パズスはニヤリと笑った。そして、手の中に隠し持っていた送信機のスイッチを押す。

「終わりだ、デビル。やれっ、伊東っ！」

その瞬間、遥か上空から1本の光の軌跡がかたまっている7体のデビルに落ちる。

「トォールハンマー、１０００００ケルビンの熱線だ。骨まで蒸発しろっ！」

「なんだ、これは？パズス」

「ヴァギナ対策委員会の人間と共同で開発した対デビル用衛星武器だ。デビルといえど生物だ。これをくらって無事でいられるわけがない」

「お前という奴は本当に何をするかわからん奴だな」

「ははっ、エレシュキガルに褒められるとはな。おーい、姫川。終わったぞ、出てき……がはっ！」

パズスの腹に触手が貫通し宙に持ち上げられる。

「馬鹿なっ、どうして？」

パズスが振り向くとデビルは白い蒸気に包まれていた。

・・空気の壁？熱伝導しにくい空気の壁を作って耐えたのか？なんて、奴だ。神を超える力を持っているというのか・・

「パズスッ！」

エレシュキガルがガステックカッターでデビルの触手を切断する。

パズスは地面に落ち、そのまま立ち上がれずにいた。

「どうした、パズスッ！ここで終わるつもりかっ！」

「いや、まだ姫川が、ウテルスがいる。倒れる訳にはいかない」

パズスは立ち上がるが、明らかに力が失くなったようであった。しかし、デビルの群れは容赦なく攻めてくる。

★　★　★　★

豪徳寺文月は部下の報告に激怒していた。

「デビルが殺られただと、そんな馬鹿な事があるかっ！誰がデビルを倒せると云うのか？まさか、ウテルスか？ウテルスには、まだ手を出すなと言っている筈だろうがっ！！」

「申し訳ございません。文月様の仰る通りウテルスでございます。ウテルスに近い人間とヴァギナを始末した際、ウテルスがそれに気付き現れてしまいました。それで、デビルが次々と倒されています」

「だから、言ったのだっ！ウテルスにはまだ手を出すなとっ！」

文月は飲んでいたワインの入ったグラスを床に投げつける。ふーふーと息を荒げていた文月だったが、自分を落ち着かせると凶悪な目で部下を睨み付けた。

「デビルの改良型は用意できているのか？」

「はっ、1体が改良に成功しております」

「よし、それなら、そのデビルを出撃させろ。現時点でウテルスにどこまで迫れるか試しておこう」

「承知しました。それではデビル改の出撃を指示します」

逃げるように男が下がって行くと文月はソファーに腰を落とした。

・・やはり、ウテルスは侮れない。改良型デビルはどこまで通用するか？その先も考えておいた方がいいな・・

文月はソファーに座り不敵に微笑んだ。

・・どこまでも楽しませてくれる奴だ、ウテルス。こんなに頭に血が昇ったのは久しく無いことだった。良いぞ、ウテルス。もっと私を楽しませてくれ・・

そこへ、改良型デビルが出撃しましたのでモニターでお楽しみ下さいと報告がきた。カメラはデビルの瞳の中に設置してあり、リアルな映像が楽しめますよという。

・・ほう、なかなか気が利くではないか・・

文月は大画面のモニターの前にどっかりと座り、唇を舐めながら凶悪な笑顔を浮かべていた。

★　★　★　★

その頃、7体のデビルと対峙しているゴッド、エレシュキガル、パズスは満身創痍になりながら、まだ希望を捨てずに戦っていた。ウテルスの体力が回復すれば、たとえ7体のデビルと云えども敵ではない。それまで耐えればウテルスの〝審判〟で一撃で片付けられる。それが支えだったが、リストレイントボックスの中でウテルスは、菜緒は胸に手を当てていた。

・・お願い、あと少し。もう少し待って・・

リストレイントボックスの中からは、外の様子が見えるようになっていた。ウテルスの力を信じて戦っている外のみんなの為にも、早く早くとウテルスの気は焦っていた。

「エレシュキガル、1体のデビルを狙って集中攻撃しよう。そして、ゴッドにデビルを喰わせるんだ。そうすれば、可能性は上がる」

「なるほど、分かった」

エレシュキガルも瞬時に理解し1体のデビルに攻撃を集中する。ゴッドも二人の意図に気付いたようで、その1体に攻撃を集中する。他のデビルからの攻撃はまるで無視して、再生が間に合わない程の傷を負いながら、それでも休まず攻撃を続ける。休んでしまっては、自分たちより再生速度の早いデビルにダメージを与える事は出来ない。

「ごがぁーーっ！」

ゴッドがデビルの腕を引き千切って、それを喰らう。ゴッドの再生速度が早まり、さらに攻撃の威力が高まった。元々、一対一であればデビルを凌駕するゴッドである。ゴッドは他のデビルからの攻撃を受けながらも、さらにデビルの脚を引き千切り喰らう。そして、1体のデビルを喰らい尽くしたゴッドの体が変化する。三面六臂に6本の脚に翼を持ったゴッドに尻尾が生えていた。

「カラダガカルイ」

「チカラガワキデル」

「コイツラセンメツスル」

覚醒したようにゴッドの動きが加速される。残り6体のデビルが集中してゴッドに向かうが、もはやデビルの攻撃はゴッドに当たる事はなかった。

「凄い、こいつの力は底無しか」

「ククク、パズス。このデビルは元はといえば人間とヴァギナが合

体したものだ。我らもデビルを喰らっても良いのではないか」

「なるほど、その通りだ。エレシュキガル、良いこと言うではないか。僕らも喰らわせてもらおう。僕もエレシュキガルも久しく喰っていないからな」

パズスとエレシュキガルはゴッドの覚醒に力を得て、それまでの受け身の攻撃からデビルを喰らう攻撃に切り替える。自分を突き刺したデビルの触手を喰らっていく。戦いはまさに混沌としてきた。だが、そこへ改良型のデビルが到着する。改良型デビルはゴッドに襲いかかっていった。戦いはさらに激しさを増していく。

72、無敵の力

72、無敵の力

「なんだ、こいつは？」

「今までのデビルと、また違うぞ」

パズスとエレシュキガルが驚くのも無理もなかった。覚醒したゴッドに襲いかかったそのデビルは、それまで6体のデビルの攻撃を軽くかわしていたゴッドに強烈な一撃を加えたのだ。ゴッドの動きが止まり6つの目が、そのデビルを睨み付けた次の瞬間、今度はゴッドの拳がデビルにヒットし、デビルは後ろに吹き飛びコンクリートの壁に激突した。

「とんでもない奴だな。見た目は普通の人間だが、あのパワーとスピードは今のゴッドと変わらないぞ」

「奴はゴッドに任せるしかない。私たちで他のデビルを止めるんだ、パズス」

改良型デビルの参戦で、また戦況は不利になってきていた。

「いけない、エレシュキガル。デビルが3体、ゴッドに向かった。奴ら、先にゴッドを始末する積もりだ」

「くそっ、分かっているが、こちらも動きがとれん」

パズスとエレシュキガルは何とかデビルを抑えようとするが、すでにデビルが3体ゴッドに攻撃を仕掛けていた。普通のデビルだけであれば問題ないが、改良型デビルと戦いながらの為、攻撃を悉く受けてしまう。ゴッドの手脚が翼が尾が引き千切られていく。

「いかん、ゴッドが危ないっ！」

パズスの叫びと同時にウテルスがリストレイントボックスから飛び出していた。

「ウテルス、ダメだ。まだ体力が戻っていないだろう」

「このままじゃ、ゴッドがやられちゃう。動けるのは私だけだから」

ウテルスはゴッドの前に立ち果敢に攻撃を受け止める。その間にゴッドが再生してくれれば申し分ない。ウテルスはそれに賭け、全力のパワーをデビルに向ける。改良型デビルもウテルスを認識し、攻撃を加えてくるが、その攻撃さえ全力のウテルスには当てる事は出来なかった。そして、逆にウテルスの攻撃がヒットする。

「デストロイクロー」

打ち込んできた改良型デビルの拳をウテルスが掴み、逆に粉砕する。拳を粉砕されたデビルの動きが一瞬止まったところへ、間髪入れずウテルスの次の攻撃が炸裂する。

「レッドセンセーション」

ウテルスの炎の拳が改良型デビルの胸を突き抜ける。胸にぽっかりと穴が空いたデビルは足がふらついていた。そこを見逃さずウテルスの次の攻撃がデビルの頭上を襲った。

「エレクトリカルハンマー」

電撃を帯びた踵落としがデビルの脳天を直撃する。さすがに改良型とはいえ、ウテルスの三弾攻撃を浴びて地面にガクッと崩れ落ちた。

「凄い、さすがウテルスだ」

エレシュキガルはウテルスの凄まじい攻撃に見惚れていた。パズスも言葉がなかった。それほどのウテルスの三連弾だったが、それでも改良型デビルは立ち上がってくる。

・・私の渾身の一撃だったのに。やはり、〝シナイ契約〟か〝審判（ジャッジメント）〟でないと倒せないの。でも体力が足りない・・

立ち上がった改良型デビルはみるみるうちに胸の穴が再生され塞がっていく。逆にウテルスの動きが目に見えて遅くなってきていた。

「ウテルス様、これをっ！」

佳乃の声だった。萌を連れて撤退していった佳乃が一人戻ってきて、ウテルスに向かって何かを投げた。ウテルスは空を飛んで、それを受けとる。

「それは短時間ですか体力を回復できるポーションです。そして、パズスさん、これを伊東から預かってきました。座標値の送信機です。プログラムを変えてさらに強力なトォールハンマーを撃てるそ

うです。けれど強力なために衛星自体も破壊されてしまい撃てるのは一度だけ……がふっ……」

佳乃の胸にデビルの触手が何本も貫通していた。

「佳乃ぉぉーーっ！！」

エレシュキガルが駆け寄りデビルの触手を切断するが、佳乃は血を吐いて体を痙攣させていた。

「エレシュキガルさん、今度こそ私を食べてください。躊躇してる時ではありませんよ。私はそれぐらいしかお役に立つ事は出来ませんから……」

抱えるエレシュキガルの腕の中で佳乃は静かに目を閉じた。

「ウテルスっ！私を軽蔑しろっ！私を憎めっ！私を殺して構わんっ！私は佳乃を喰う。そして、コイツラを地獄に落としてやるっ！」

エレシュキガルが黒い光に包まれる。擬態を解き、一口で佳乃を喰らうつもりだった。ウテルスは佳乃とエレシュキガルの断固とした覚悟に動く事が出来なかったが、パズスが一足先に動き出す。

「待てエレシュキガル。僕が奴に引導を渡してやる」

光速で動く改良型デビルの座標を送信するのは不可能だ。パズスは改良型デビルにしがみつき自分諸とも焼き尽くす考えだった。

・・そんな、みんな無茶しないで・・

ウテルスもポーションを飲んで最後の勝負に出ようとした時、何かが改良型デビルの前に現れた。人のようにみえるそれは改良型デビルの前でニヤリと笑う。次の瞬間、あの改良型デビルが体が飛び散ったように微細な塵となって消えていた。そして、瞳に仕込まれていたカメラも噛み砕かれる。

「やれ、ペイン。残りも片付けろ」

残ったデビルもペインの前に次々と塵となって消滅していく。正に無敵の力だった。

「くく、ペインの力の前ではデビルなど無意味だ。ペインリバース、ペインの攻撃は細胞分裂を加速させヘイフリック限界を強制的に突破させる。生物である以上逃れる術はない。細胞ごと消滅して塵となる以外ないのだ。豪徳寺文月よ、思い知れっ」

白衣を着たリツコは高らかに笑っていたが倒れている佳乃に目を向ける。

「医療班、この女を助けろ。急げっ！」

リツコの指示で機材を持った医療班が佳乃の治療を素早く開始する。

「助かるのか？」

「お前はヴァギナのようだな。心配するな、私に任せろ。死んでいても生き返らせてやる」

エレシュキガルはリツコの言葉に気が抜けたように座り込んだ。

「いけません、リツコ様。ペインのエネルギー残量が底を尽きそうです。残り2体如何致しましょう」

「うーむ、まだこの数を倒す事は無理か。デビル相手だとやはりパワーを使うようだな。仕方ない、1体は私がやる。もう1体は」

リツコはウテルスに目を向けると歩み寄る。

「お前はウテルスだと思うが……」

リツコの言葉にウテルスは頷いた。

「お前の力を見てみたいと思っていた。ここで見せてくれないか」

佳乃を始め窮地を救ってくれたリツコの頼みだ。ウテルスも迷いなく頷き、ポーションを飲んだ。ウテルスの体力が回復する。体力が回復したウテルスにとってデビルはもう敵ではなかった。シナイ契約を発動し、デビルは消滅していた。

「なるほど凄まじい力だ。人類の救世主と云われるのも分かる。その力も解明していきたいものだ」

リツコは満足そうに頷くと、最後のデビルに向かっていった。そして、デビルをあっさりと倒してしまう。

「私の攻撃は細胞の染色体を破壊する。X染色体とY染色体を強制的に打ち込む。通常、XY、XXである筈の性染色体を破壊するのだ。デビルを倒すには細胞から破壊するのが一番だというのが私の出した結論だ。もっとも私はペインと違い1体倒すのがせいぜいだがな」

そう言いながらリツコはパズスの持っている送信機に目を向ける。

「そこのヴァギナも面白そうな物を持っているな」

パズスはリツコに送信機の説明をする。

「なるほど衛星武器か、ヴァギナ対策委員会もなかなかやるではないか。んっ何か不満そうだが？」

「僕は人間とヴァギナが手を組めばデビルに対抗出来ると考えていたけれど、結局、人間の科学力の方が有効で僕らの力など必要なかったのかと思うと、少し残念な気持ちになったんですよ」

「何を言っているんだ。お前たちでなければ座標を送信出来ぬだろう。人間では送信する前に、みんな殺されてしまうだろう。それに、お前たちでもデビルに勝てるではないか」

「私でも、あの不死身のデビルに勝てるのか？」

エレシュキガルがリツコの言葉で立ち上がる。

「不死身の生物など存在しないさ。生物である以上細胞の分裂回数には限界がある。ペインの攻撃を見ただろう。つまり、休みなくダメージを与え続ける。再生しようがかまわない。どんどん再生させて細胞を分裂させればいい。そのうちに限界を迎えて消滅する。そういう事だ。だが、それはお前たちも同じことだぞ。つまり、ヴァギナも不死ではないという事を頭に入れておけ」

「デビルを倒せる。そうか、それが分かればもう悩む事はない」

エレシュキガルは拳に力を入れ握りしめた。

73、各々の想い

73、各々の想い

モニターでデビルの戦いを楽しんでいた文月は、興奮していた。

「さすがに生の戦闘は臨場感がある。カメラを仕込んだ奴には特別ボーナスを進呈しよう」

文月はご満悦でデビルとウテルスの戦闘を楽しんでいた。

・・さすがにウテルスだ。改良型デビルを相手にここまで戦えるとは……。だが、この程度の攻撃ではデビルを倒す事は不可能。あの技を使えウテルス、私にもう一度よく見せるのだ・・

文月はウテルスの〝シナイ契約〟を分析するため、デビルを犠牲にするつもりだった。あのウテルスの一撃をくらったら回避不能の技を解明出来るなら、デビル1体など惜しくはなかったのである。

・・早く使え、ウテルス・・

期待に手を握りしめモニターを食い入るように見つめる文月だったが、その直後顔色を変える事になる。突然、何者かが目の前に現れたかと思うと、カメラも破壊されたとみえて画面は砂嵐になっていた。

「なんだこれはっ！どうしたんだっ？」

怒気を含んだ文月の声に男が頭を下げ震えながら答える。

「改良型デビルが倒されたようです。私の端末からデビルのバイタル信号が消滅しました」

「改良型デビルがっ？しかし、ウテルスはまだ技を出していない。おい、最後の場面をスローで再生しろ」

「はっ、ただいま」

スローで再生していると突然人影が現れる。

「停めろっ！」

モニターの画面には一人の少女が映っていた。半袖の体操着に濃紺のブルマの少女が宙に浮かんでいる。異様なのは、その少女の両腕は背中に回され縛り付けられ、両脚は足首に付けられた枷の間にパイプが通され閉じられないように固定されていた。そして、その股間に太さの違う3本の棒状の機械のような物が突き刺さっていた。その股間に刺さる3本の機械は色の違うランプが点灯しているように見える。

・・尿道、膣、肛門に何らかの刺激を与えているのか？それにしても、なんだこの女は？手も足も使えず、どうやってデビルを倒したのだ？・・

文月はウテルス以外にも改良型を倒せる者が存在すると知り、少なからず衝撃を受けていた。

「この女の顔を拡大しろ」

画面の中にペインの顔が拡大される。

・・この顔は知っている。いや、私の前の随分古い記憶だ。〝香坂麗香〟、間違いない。という事はこの女を送り込んだのは橘理津子か。まさか、奴がデビルを倒せる程の力を持っていたとは……。甘く見ているつもりはなかったが考えを修正する必要があるな・・

文月は腕を組んで考えに没頭した。横に控えている男は、また叱責されるのではと怯えていたが、文月は宙を見つめたまま考えに耽っていた。

★
★
★
★

佳乃は目を開け辺りをキョロキョロと見回した。

「佳乃さんっ」

「佳乃っ」

ウテルスとエレシュキガルが嬉しそうに覗き込んでいた。

「私、生きているんですか?」

「そうだよ。あのリツコさんという人が助けてくれたんだ」

「ああ、何者か分からんが凄い奴だ。デビルも全て倒した」

「リツコ……？」

「ほら、あそこに立ってる白衣を着た女の人だよ」

ウテルスが指差すリツコを見た佳乃は驚愕し、立たせてくれとエレシュキガルに頼んだ。そして、エレシュキガルの肩を借りリツコの元まで歩いていく。

「命を救って頂いてありがとうございます。私は野上佳乃と申します。あの、橘理津子様でよろしいですか？」

「ほう、私を知っているのか」

「はい、古代の資料で拝見しました。そこに掲載されている写真とよく似ていたので……」

「古代？」

エレシュキガルが思わず聞き返すが、リツコは苦笑いしている。

「もう数百年前の資料にあなたの姿が掲載されていました。あなたは本当に橘理津子なのですか？」

「そんな昔のデータがまだ残っているのか。貴重なデータだ大事にするが良い」

「私の質問に答えて下さい。あなたは……」

「私は橘理津子であって、橘理津子ではない。オリジナルの橘理津子本人はとうに亡くなっている。当然だがな。私は橘理津子の意思だ。その意味では橘理津子本人と変わらない。私は〝豪徳寺〟、奴を滅ぼす為に存在している」

「それで、デビルを倒したというペインは……」

「ペインか……。ペイン、ここに来い」

リツコがペインを呼ぶと突然佳乃たちの眼前に人影が現れる。はっきりと間近で見るペインの異様な姿に全員が驚愕した。

「その、ペインのお顔も拝見した事があります。あなたの右腕と言われていた香坂氏のようですが……」

「ああ、麗香の体を使っている。だが意思の方は当初戻る予定だったが、まだ戻っていない。数百年という年月は長すぎたのかもしれない」

リツコは寂しそうに呟いた。

「あの私からもお礼を言わせて下さい。助けて頂いて有り難うございました」

ウテルスを始め、エレシュキガルもパズスもリツコに頭を下げる。

「礼には及ばない〝豪徳寺〟を、デビルを倒すのが私の目的だ。今回、以前出会ったあのゴッドという奴の反応が現れたのでペインを連れて来てみただけだ」

「〝豪徳寺文月〟というのは何者なんですか？　名前以外のデータがまるで無いのですが、そんな事この世の中であり得ない事です」

再び佳乃が疑問を口にするとリツコは当然という顔で答える。

「奴もこの世の人間ではないからな。奴も私同様過去の人間の意思だ。奴の元になっている人間は〝豪徳寺葉月〟という女だ。この女こそ、全ての元凶。この女が残した物は全て破壊して、この宇宙から消滅させねばならない。その為にお前らも私に力を貸せ」

リツコの言葉にウテルスたちは大きく頷き、佳乃が提案する。

「それでしたら善は急げです。これからヴァギナ対策委員会にみんなで来てください。こちらの設備や武器を見てもらって対策を練りましょう」

しかし、ゴッドは翼を広げると空に飛び去っていった。

「ゴッドは仕方ないよ。私たちで行こう、芳樹くん、エレシュキガル」

ウテルスは佳乃に答えるが、リツコはこちらからは私だけが行こうと言う。

「部外者は立ち入る事が出来ない委員会に入れるのは願ってもない事だが、大勢で押し掛けるのも迷惑であろう。ペインのメンテナンスもあるしな。それと、野上佳乃といったか」

「はい、何でしょうか」

「お前の命を救う為に細胞の分裂速度を早めた。お前は普通の人間より回復が早まり運動能力も高まるだろう。しかし、それは……」

「いえ、大丈夫。分かっています。長くは生きられないという事ですよね。私は今日死んでいる筈でした。それがこうして生きてまた皆さんと共に戦える。それで十分です。リツコさん、あなたは優しい方ですね」

佳乃はすっきりとした顔できっぱりと言い切った。佳乃にじっと見つめられたリツコは、ふんと顔を背けると白衣を着た男に顔を向ける。

「西園寺、お前も来るか？」

片付けの作業をしていた男は驚いたように顔を上げる。

「良いのですか、リツコ様」

「ああ、お前は私の脚だろう」

「腕ではないのですね」

「腕は麗香がいるからな」

「分かりました。有り難うございます。よーし、みんな積み残しの無いようにな。ペインのメンテナンスもマニュアル通りにやるように、二重チェックを忘れるな。帰ったら私もチェックするから」

西園寺の指示が響き、リツコのスタッフたちはきびきびと動き出した。その様子を眺めながらウテルスは胸に手を当てていた。そして、

そのウテルスの様子を複雑な表情でパズスが見つめていた。この時点でウテルスの秘密に気付いているのは、幼い頃から一緒に育っているパズスだけだった。パズスはウテルスに声をかけようとしたが、言葉を呑み込んで自分の頭を叩いた。

・・まだ大丈夫……。それに何かあれば僕がウテルスを守る・・

パズスは心の中で決意した。

７４、終わりの予感

７４、終わりの予感

豪徳寺文月は改良型デビルが破壊された事に衝撃を受けていたが、それでも所詮は無駄な事とたかをくくっていた。結局、デビルを量産すれば数の論理で敗北はあり得ない。戦闘において絶対に有利になるのは数の多い方なのだ。その数をものともしない者がいたとしたなら、それはもう人ではなく神の領域だといえた。

・・当初、無敵と思われたヴァギナも委員会の人間の数で駆逐されている　そのヴァギナを凌駕するデビルが大量に現れれば人間の時代は終わりを告げる・・

文月は、近い将来訪れるであろう世界を妄想し笑みを浮かべていた。

・・ウテルスと橘か……。楽しませてくれる奴らだ・・

確かに文月の考えは間違っていなかったが、個々を相手にするのではなく、それが連合になった時の強さを見誤っていた。自分の考える数の有利を敵も備えている事に気付かなかった。よもや、全ての者が連合するなど考えてもいなかったのだ。１本の枝は簡単に折れても、４本、５本と集まれば簡単には折れなくなる。文月もまた自分の運命には逆らう事は出来なかった。

★
★
★
★

エレシュキガルはペインと対峙していた。

「いいか、ペインの攻撃を全て避けろ」

リツコの声が飛ぶ。その途端、エレシュキガルの目の前にペインの姿があった。超スピードというよりも瞬間移動に近い。デビルと戦う時のペインは両腕を拘束しているが、この時のペインはフリーの両手にナイフを持っていた。そのナイフがエレシュキガルを襲う。

ザシュッ、ザシュッ、ザシュッ

エレシュキガルはペインの攻撃を辛うじてかわすが、こちらから攻撃する暇がないほどの超高速のペインの攻撃だった。

・・ウテルスの数倍速い。くっ、避けるのが精一杯だ・・

ペインのナイフの切っ先がエレシュキガルの体をかすめていく。エレシュキガルは全身に傷を負いながらも致命の一撃を避け、まさに逃げまくっていた。

「よし、まずはそこまでだ」

リツコの言葉でペインは攻撃を中止する。エレシュキガルは息を切らしガクッと膝を着いた。

「初見でペインの攻撃をかわすとは、なかなかセンスがあるようだな」

「こいつは……。このペインというのはなんだんだ。信じられないスピードだ。私とて惨神と呼ばれるヴァギナの頂点に立つ者、それが避けるだけで精一杯とは……」

「ペインはデビルを倒す為だけに生まれた。言ったろう。デビルを倒す為には、デビルの攻撃を避け、攻撃あるのみ。お前もペインの攻撃を避けられるなら素質がある。あとは攻撃を叩き込むのみだ。理想はデビルの攻撃を全て避け、こちらの攻撃は全てヒットさせる事。さあ、ペインのエネルギーを充填したら、また始めるぞ。時間は有限だ」

「望むところだ」

エレシュキガルは立ち上がり構えをとった。

★　★　★　★

菜緒はパズスと委員会に与えてもらった自分の部屋の中にいた。

「芳樹くんが私の部屋に来たいってくれたの初めてだね。どうしたの？」

パズスは菜緒の部屋の中をキョロキョロと見回していたが、タンスに目をつけると引き出しを開けた。そこには菜緒の下着が入っていた。

「ちょ、ちょっとぉ。私、女の子なんだから勝手に引き出しを開け

ないでぇ」

菜緒が慌てて引き出しを押し戻すがパズスは平気な顔で菜緒を見つめる。パズスにじっと見つめられ菜緒は顔が赤くなってきていた。

「おいおい姫川、ブスのくせに何を期待してるんだよ」

「えっ別に何も……」

菜緒は慌てて取り繕うが、何かを期待していたのがみえみえだった。

「姫川、服を脱いでくれないか」

「ええっ、どうして？」

「少し確かめたい事があるんだ。いいだろ、姫川」

「芳樹くんが、どうしても見たいなら良いけど」

菜緒は小さな声で答えると服を脱ぎ始め、白い下着一枚だけの姿になる。

「それも脱いでくれ」

「えっ、これも……。芳樹くん、私のマンコ見たいの……」

「おいおい、ブスの姫川のマンコなんか別に見たくないよ。言ったろう、確かめたい事があるんだ」

菜緒はがっかりした顔で下着も脱いでいき、全裸になりパズスを見

つめるが、パズスは菜緒の裸体にまるで興味がないようにしながら、次の指示を出す。

「両手を上げて、足を大きく開いてくれ」

「芳樹くん、やっぱり私のマンコ見たいんじゃない」

「いいから、早く」

菜緒は、しぶしぶ脚を開き、両手で万歳する。すると、パズスは菜緒の胸に顔を近付け、さらに股間にも顔を近付け菜緒の性器をまじまじと観察する。

「ちょっと、芳樹くん。そんな近くで観られたら恥ずかしいよ」

菜緒は顔を赤らめて言うが、パズスはまた次の指示を出した。

「それじゃ、姫川。そのまま自慰してくれ」

「ええっ、芳樹くんの前でオナニーするの。無理だよ。いくらなんでも恥ずかしいよ。そんな姿、見られたくないよぉ」

「ちゃんと自慰したら、姫川のマンコ舐めてあげるよ」

「えっ……」

菜緒は芳樹の言葉に心が動いていた。

・・オナニーすれば、芳樹くんが私のマンコ舐めてくれる。どうしよう、マンコ舐めてもらいたいよぉ・・

「ちゃんと普段やっているように自慰しろよ。そうしないと意味がない」

「わかったよ、オナニーする。だから絶対約束だよ。私のマンコ、絶対舐めてよ」

「分かったよ、約束する」

菜緒は準備をするからと言い、洗濯ピンチを2つ手に取ると、それで自分の勃起している乳首を挟む。

「うっ」

小さな声を出しながら菜緒は左右の乳首を洗濯ピンチで挟んだ。そして、今まで穿いていた自分の白い下着を頭に被る。それから、ようやく自慰を始めた。右手の掌で勃起しているクリトリスを擦り、指で性器をクパァと開くと膣に指を入れる。そして、左手は後ろから股間にむけ、その指を肛門に突き刺していた。

・・おいおい、姫川。それが小学生の自慰かよ。大人の女みたいじゃないか・・

パズスが半分呆れて見ているうちに、菜緒の息が荒くなり声が漏れ始める。

「おっ、おっ、おっ、おっ、おっ」

菜緒の指の動きがさらに速くなり、全身から汗が吹き出してきた。

「イクゥ。芳樹くん、イッチャうよぉ」

菜緒の股間からシャーッと勢いよく潮が吹き出し、その後菜緒はガックリと崩れ落ちた。パズスは、その菜緒の姿を見て頷くとドアを出て行こうとした。

「ちょっと、芳樹くん。どこ行くの。約束だよ」

放心状態かと思っていた菜緒がパズスに向かって叫ぶ。パズスは仕方ないなという顔で戻ってくると、菜緒に脚を開きなと言う。菜緒は、これ以上開けないというくらい大きく脚を開く。自慰仕立てでグショグショになっている菜緒の性器があった。パズスは菜緒の股間に顔を埋めると、指で菜緒の割れ目を開き舐めだした。

「はうぅぅーーー」

菜緒の小学生とは思えない女の声が響いていた。

75、ウテルスの特訓

75、ウテルスの特訓

なかなか離さない菜緒を思い切り振り切り蹴り飛ばして出てきたパズスは深刻な顔をしていた。

・・やはり、姫川の奴……。今日確認して分かった、もうあまり時間が残っていない・・

パズスは確信を持っていた。

・・それまでにデビルを全て滅ぼさないと・・

こちらの戦力を考えると、ここで最終決戦に持ち込まないと勝利は覚束ない。今、ヴァギナ対策委員会では急ピッチで兵器の開発が進められている。トォールハンマーの改良型だ。衛星に負担をかけないようにプログラミングし直して、特大のトォールハンマーを一発ではなく数発撃てるようにしているところだった。リツコはペインのエネルギー効率を見直して、さらに活動可能時間を増やす準備をしている。そして、エレシュキガルもそれに協力しながら自分のレベルも上げるため日々精進している。ゴッドはおそらく何処かで少女を救いながら、自分の力を高めているだろう。おそらく今が戦力的に最高の状態だ。この機にデビルを殲滅し、豪徳寺文月を倒す。

・・僕も何かデビルを倒す有効な武器を手に入れないとな・・

パズスもまた、リツコから聞いたデビルも不死身ではないという言葉に勇気を貰っていた。パズスの頭の中に一つのアイデアがあった。それを開発出来ればデビルを倒す事が可能になる。試作を繰り返しているが、ようやく完成の目処がたったところだった。ただこの武器は一人では使用できない。誰かパートナーが必要だった。ウテルスはダメだ。ウテルスは一人でもデビルに対抗出来る。その、せっかくの戦力をこちらに割くわけにはいかない。エレシュキガルも同様だ。かといって佳乃では力不足だし危険だ。そうなると候補は一人しかいない。これは二人の呼吸を合わせる事が重要になる。パズスも、その武器が完成するまでにパートナーと呼吸を合わせる特訓をしなければと考えていた。

★
★
★
★

菜緒はパズスに逃げられ、一人ふて腐れて自慰をしていた。パズスが出ていく時に、これでも使っていろと投げていったバックの中には様々な、いわゆる大人の玩具が入っており、知識では知っていたが実際に見るのは初めてな菜緒は興奮していた。

・・大人の女の人はこんな大きいのマンコに入れているんだ・・

菜緒は手に取った巨大なデルドゥを見て顔を赤らめていたが、まず口に入れてみた。

・・男の人には、まず口で〝御奉仕〟するのが良いんだよね・・

大きく口を開けてデルドゥを入れてみる菜緒だったが、小学生の菜

緒の小さな口ではとても入らなかった。

「おごっ、おごっ」

それでも菜緒は無理矢理デルドゥを押し込んでいく。

・・これを入れられないと男の人に喜んで貰えないよ・・

「おげえぇぇぇーっ」

無理矢理喉奥まで入れてしまい菜緒は吐いてしまった。

・・吐いちゃったりしたら気分悪くされちゃうよ。もっと奥まで入れられても大丈夫なように訓練しないと・・

他のみんなが対デビルの為に必死に修行や開発に励んでいる時に、菜緒はまったく別の事に必死になっていた。菜緒は、このバックに入っている性具を全て使いこなせれば男の子を喜ばせる事は間違いないと確信し、そのためにパズスが置いていったものと思っていた。

・・芳樹くん、本当はこれを使って私の事を調教したかったんだね・・

バックの中にはデルドゥなどの性具の他にもロープや蝋燭、鞭、イルリガートル、カテーテル等様々な道具が入っていた。菜緒の知識では何に使用するのか分からない物も多々あったが、ネットで調べその使用方法を理解した。

・・大人の女の人って凄い。こんなにいろんな事をされるんだ。マンコに入れられるだけじゃないんだね。お尻の穴も、おしっこの穴

にも物を入れられて、おっぱいやマンコに針も刺されるんだ。今度、佳乃さんに訊いてみよう・・

菜緒は大いに勘違いしていたが、一人ではこの道具を全て使うのは不可能だと気が付く。

・・どうしよう。クラスの誰かに手伝ってもらおうかな・・

同級生の顔を思い浮かべながら菜緒は、一人の男子生徒に狙いを付けた。芳樹の次に菜緒が好みの男子だった。

・・吉川直哉くん。彼なら大人しいし真面目だしちょうど良いかも・・

菜緒は早速クラス名簿を開き、直哉に電話する。詳しくは話せないけどウテルスの戦いに重要な訓練があって手伝って欲しいと、嘘と本音を織り交ぜ直哉を呼び出す事に成功した。そして、菜緒はバックを持つとウテルスのトレーニング用に用意されている部屋へ向かった。トレーニングルームは学校の体育館程の広さがあり、トレーニング用の備品も用意されている。菜緒はそこで全裸のまま直哉を待っていた。

「ウテルス様、お待たせしました。えっ？」

トレーニングルームに入ってきた直哉は全裸のウテルスを見て驚いて顔を背けると足を止めた。

「どうしたの直哉くん。早くこっちに来てよ」

「い、いやでもウテルス様、裸で……」

「直哉くん、女の子の裸、見たくないの　」

「えっ、そ、そんな事はないよ」

直哉は顔を赤くして俯いてしまう。菜緒は直哉に近付くと服を脱がしていく。

「ちょ、ちょっと。ウテルス様、何を……」

直哉は抵抗するが菜緒は、直哉の服をパンツまで全て脱がしてしまう。直哉は両手で股間を押さえて足を閉じている。

「直哉くん、私の特訓に協力してくれるって言ったよね　これから私の言う通りにしてね　」

「うん、分かったよ。ウテルス様」

「では、まず脚を大きく開いて腕を高く上げてください　」

菜緒の命令で直哉は恥ずかしそうに脚を開き両手を頭上に上げた。まだ小学生の皮を被った性器が直哉の股間で揺れていた。それを見た菜緒は跪くと直哉の小さな性器を口に入れた。

「あっ、ウテルス様、汚ないよ」

直哉は慌てるが菜緒は平気な顔で直哉の性器を口に入れ吸っている。

「女の子は、男の人のチンチンを舐めてあげるのが普通なんだよ　」

菜緒が直哉の性器を口に含んでいると、直哉の性器が大きく勃起してきた。

「大きくなったよ直哉くん　そのまま私の頭を押さえて腰を動かしていいよ　女の子は口も犯して貰えると嬉しいの　あっ、でもその前に私の腕を縛ってね　苦しくて抵抗しちゃうといけないから　女の子の口を犯すと直哉くんも絶対気持ちよくなると思うから私が気絶しても遠慮しないで犯してね　」

直哉は指示通りに菜緒の両腕を背中にまわしきつく縛りあげると、菜緒の頭を両手で押さえ付け口の中に性器を突き入れ激しく腰を動かした。菜緒の喉奥まで性器を突き入れ犯しているうちに直哉は経験した事のない快感に囚われていた。

「あっ、あっ、あっ」

直哉は菜緒の喉を犯しながら声を上げていた。腰の動きがどんどん早くなる。

「おごっ、おごっ、おごっ、おごっ」

菜緒は涙を流し苦しげな表情で必死に腕の戒めを解き逃れようとするが、直哉はもう自分の快感の虜になり菜緒の状態など気にもせず腰を振っている。

「あぁぁーーっ」

ドピュゥッ、ドピュゥッ

直哉は生まれて初めての射精を経験していた。菜緒の喉奥に放出し

た直哉は初めての経験で戸惑っていたが、菜緒は口から直哉の性器を抜くとごくっと直哉の放出した精液を飲み込んだ。

「直哉くんの精通した記念の精液は私が飲んだからね。女の子の口の中に射精した気持ちはどう?教えて直哉くん」

「気持ち良かったです。こんな気持ち初めてです。女の子の口がこんなに気持ち良いなんて知りませんでした。ウテルス様のおかげです」

「そんなに気持ち良かった。じゃあ、お礼に私の口の中におしっこして。全部は出さないでね。後でまたしてもらうから」

「そ、そんな事して良いんですか、ウテルス様。汚ないですよ」

「女の子は男の人のおしっこ飲むんだよ。あと、身体にかけられても嬉しいから私の顔にもおしっこかけていいよ。それと強制的に飲まされる方がお互い気持ちいいみたいだから、その開口器使って私の口を閉じられないようにしておしっこ飲ませてね」

直哉は腕を縛られている菜緒の口に開口器を押し込みベルトをきつく締め固定する。そして、遠慮なくカチカチと最大まで奈緒の口を開いていく。奈緒は顎が外れそう程、強制的に口を開かれ、喉の奥が丸見えになっていた。直哉はそれから菜緒の頭を押さえ、大きく開いている菜緒の口に狙いを付ける。

ジョーーッ

直哉は菜緒の口の中に小便を放尿する。ごぼごぼと苦しげに小便を飲む菜緒の顔にも直哉は小便をかけ、さらに菜緒の頭にも胸にも股

間にも小便を浴びせた。直哉は、菜緒に自分の小便を飲ませ身体に浴びせる事で、女の子の菜緒を征服しているような感覚に陥り激しく興奮していた。

76、カタストロフ教団の暴虐

76、カタストロフ教団の暴虐

菜緒はまだ直哉とトレーニングルームにいた。直哉の小便を飲み干した菜緒は開口具を装着したまま四つん這いになり尻を高く突き上げ肛門を直哉の前に晒していた。口がきけない為、菜緒はメモ帳に次の指示を書く。

「お尻の穴を犯すんですね」

直哉が確認すると菜緒は頷いた。直哉はすでに勃起している自分の性器を菜緒の肛門に当て突き入れていく。まだ小学生の直哉であるが、女の子の穴に自分の性器を入れると気持ちいいと認識していた。そして、菜緒に指示される前に、菜緒の腰を押さえ付けると激しく腰を振りだした。

ズポッ、ズポッ、ズポッ、ズポッ、ズポッ

「あがっ、あがっ、あがっ、あがっ、あがっ」

菜緒は肛門を犯され声を上げていた。

ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ

程なく直哉は、菜緒の中に射精する。菜緒は汗だくになりながら次

の指示を直哉に出した。直哉も、もう次にどこの穴に入れればいいか理解していた。

「ここが女の子は一番気持ちいいから思い切り犯してね」

菜緒は大きく足を開いて受け入れ体勢をとる。直哉もすっかり慣れたように菜緒の割れ目に自分の性器を当てた。

ズリュッ

「あうっ……」

菜緒が小さく声を上げるが、直哉はまた菜緒の腰を押さえつけて腰を振りだした。そして、経験のない直哉はすぐに射精してしまう。

ドピュッ、ドピュッ

菜緒の中に放出した直哉は流石に疲労困憊の様子で、菜緒の体に重なったまま肩で息していた。その様子を見た菜緒は、あまり無理させてもいけないと思い、今日のトレーニングはここまでと宣言し、拘束を解いてもらい服を着る。直哉は初めての経験でよほど疲れたのか服を着たとたん座り込んでいた。

「ありがとう、直哉くん。また、手伝ってね」

菜緒に明るく言われ、直哉は顔を赤くして照れながら帰っていった。ある意味、平和な時間だった。しかし、菜緒と直哉は生きて再び会う事はなかった。菜緒は、文月の考えた悪魔のような計画を当然知る由もなかったが、その計画は今でも実行されている。すでに、リリスと若葉が殺害されているが、文月の魔の手は、菜緒の周囲に張

り巡らされていた。委員会から出てきた直哉をカタストロフ教団の信者が冷たい瞳で観察していた。

★　★　★　★

教団の男は生け贄に捧げる少女を物色していた。生きの良い若い女が望ましい。男は学校の終業時間を狙い下校してくる女子生徒を物陰から観察していた。早急に教団の信奉者を増やせ。それが教団本部からの指示であった。文月の狙いはもちろんデビルの量産である。世の中全てを支配下におき、自分の好きなように生きる。それが豪徳寺家に受け継がれてきた精神であった。教団の男は豪徳寺文月に心酔していた。文月のためならばどんな事でも厭わない。それが悪魔の所業であろうと構わなかった。

・・あの女がいいか・・

男は、ランドセルを背負った一人の女児に目を付けた。これくらいの年齢の女なら簡単に済ませられる。中高生になると一瞬で眠らせないと抵抗が凄くなってくる上、体も大きくなり運ぶのも大変だった。その点、小学生女児であれば問題ない。生け贄の年齢は特に定められていない為、手早く済ませるには小学生女児はうってつけだった。男は何気なく歩いていくと周囲の様子を確認する。当然、児童の登下校時には警官が警備しているが、ここは特別区域内でありヴァギナの襲来はほぼ考えられない為、警官にも緊張感が皆無で手元の端末の画面に釘付けになっていた。

・・警備の意味がないだろう。まったくだらけた警官だ。給料分はキチッと働け・・

男は心の中で罵りながら警官に近付いて行くと、警官はチラッと男を見たがすぐに画面に視線を戻す。これで警官の運命は決まってしまった。男は服のポケットに忍ばせたナイフを握りしめる。音を立てずに一撃で仕止める。男は警官の横に来ると素早く口を押さえ胸にナイフを突き刺した。警官は何が起こったのかも分からないうちに絶命していた。

・・自分の迂闊さを呪うんだな・・

警官を倒した男は素早く標的の女児にスタンガンを当て気絶させる。そして、呼んであった仲間の車に押し込んで、その場をすぐに立ち去った。残されたのは警官の遺体だけだった。

★
★
★
★

教団の支部で儀式が行われようとしていた。前方には祭壇が組まれ、赤々と火が燃えている。その祭壇の両脇には仮面を付けた男が立ち、なにやら怪しげな呪文を唱えていた。それを１２人の全裸になった信者が見つめている。男女比はちょうど半分の６人ずつだった。そして、生け贄の少女が引き出されてくる。少女は全裸にされ目隠しをされた上に口も塞がれ、両腕も背中に回されきつく縛りつけられている。その体を見ても、まだ膨らんでいない胸につるつるの恥丘に続く割れ目から少女というよりも女児といった方が適切であるといえた。女児は激しく泣いているのが分かる。まだ幼いとはいえ、この場の異様な雰囲気から自分が辿る運命を感じているのだろう。女児は泣きながら足首にベルトが巻かれ、そのまま開脚され逆さに吊るされた。

「ふごおっ、ふごおっ、ふごおぉぉーーっ」

さらに激しく塞がれた口で号泣する女児だが、お構いなしに儀式は進行していく。

「我が教団の中でも特に信仰心の厚い者たちと思われる優秀な信者を選抜させてもらった。君たちはその選ばれた特別な信者である」

左の仮面の男が告げると場内に歓声が上がった。続いて右の仮面が声を出す。

「それではこれから降誕の儀式を開始する　まずは生け贄の体を浄める事から始める。君たちの聖水をこのメスの体に浴びせ、このメスを浄めるのだ」

仮面の指示で信者の男女たちは吊るされた女児の周りを囲み一斉に放尿した。逆さに吊られた女児の体に小便を浴びせ、女児の体を小便まみれにしていく。

「次はこのメスの体から穢れを追い払うのだ。このメスの穢らわしい性器に一人１０発の鞭を打ち込みなさい」

信者たちは鞭を手渡され女児の前に順番に並んだ。そして、最初の信者が女児のまだ幼い割れ目に思い切り鞭を叩き込んだ。

ビシィィィッ！！

「ふごおぉぃぉぉーーーーっ！！」

口を塞がれていても女児の絶叫が響き渡る。

ビシィィ、ビシィィ、ビシィィ、ビシィィ、ビシィィ、ビシィィ、ビシィィ、ビシィィ、ビシィィ、ビシィィィィッ！！！

「ふがあああぁぁぁぁーーーーっ！！！！！」

一人目が終わった時点で、絶叫する女児の性器は激しい鞭の打撃でみみず腫れがいくつも出来、血が滲んでいた。その女児の性器を浄める為に、痛々しい女児の性器に塩が刷り込まれていく。

「んごおぉぉーーーーっ！！」

再び絶叫する女児の性器に入念に塩が刷り込まれ、次の信者が鞭を構えた。

ビシィィッ、ビシィィッ、ビシィィッ、ビシィィッ、ビシィィッ、ビシィィッ！！

次の信者も容赦なく女児の幼い性器に鞭を叩き込む。その後も次々に信者が女児の性器に鞭を叩き込み、塩も塗り込まれ、信者全員が鞭打ちの儀式を終了した時には、女児の外性器はぐちゃぐちゃに破壊されていた。一度も使われなかった女児の性器が哀れに壊される。女児の性器を無惨に破壊した事で信者たちの気持ちも高揚していた。逆さに吊られた女児は性器を破壊され失神している。そのまま失神していられれば女児は幸せだったかも知れないが、女児は残酷に覚醒させられ、この後地獄の苦痛を味わう事になる。

「それでは、この生け贄を捧げます」

仮面の男の指示で信者たちはそれぞれ教団内で聖剣と呼ばれる〝レイピア〟を持つ。〝レイピア〟とは、刺突武器と呼ばれる細身の突き刺す為の剣である。そして、吊るされている女児の後ろに踏み台が用意された。信者は一人ずつこの踏み台に乗り、レイピアを女児に突き刺していくのだ。どこに突き刺すかも決まっている。穢れを祓い生け贄の魂を捧げる為、女児の尿道、膣、会陰、肛門に突き刺していく。それを12人の信者全てが終了した時、初めて浄化が完了するのだ。

「それでは、始めなさい」

仮面の男が厳かに告げる。信者の最初の一人が踏み台に乗り哀れな女児の性器に狙いをつけた。

77、降誕の儀式

77、降誕の儀式

開脚され逆さ吊りにされた女児の性器を鞭でぐちゃぐちゃに叩き潰した信者たちは、いよいよ生け贄である女児の性器を浄化し魂を捧げる為、レイピアを手に持った。細い針のような刺突用の剣〝レイピア〟を女児の穢れた性器に突き刺す事で儀式は完了する。突き刺す箇所は四ヵ所。尿道、膣、会陰、肛門。この四ヵ所を信者がレイピアで突き刺していく。もちろん、そんな所をレイピアで突き刺されていけば女児が絶命するのは明らかだった。

「よし、それでは始めなさい」

仮面の男が号令をかける。信者の一人が女児の後ろの踏み台に乗り、眼下の幼い割れ目に狙いを付けた。

「いやぁぁーーっ」

掛け声と共にレイピアを女児の割れ目の尿道に突き刺す。

ドスゥッ！

「ふごおぉぉぉーーーーっ！！」

絶叫する女児のへそのあたりから腹を突き破り、尿道に突き刺され

たレイピアの先端が突き出ていた。苦しそうに呻き声を上げる女児に構わず、続いて第二撃が女児の膣に突き刺される。

ドスゥッ！！

「ふごおぉぉぉーーーーっ！！！！」

今度は女児の下腹部からレイピアの先端が突き出る事はなく、おそらく女児の子宮を串刺しにしたものと思われた。さらにレイピアは突き刺される。

ドスゥッ、ドスゥッ！！

会陰と肛門にも鋭いレイピアを容赦なく突き刺され、もう女児は虫の息になっていた。幼い女児が性器を串刺しにされ殺されていく。二番目の信者は女だったが、楽しそうに女児の性器にレイピアを突き刺した。もうこの場にいる全ての信者が異様な精神状態になっていた。抵抗出来ない女児の性器にレイピアを突き刺す行為に何のためらいもなかった。むしろ、それを楽しそうに行っていた。苦しげな声を上げていた女児の声が途切れたのは何人目の信者の時かは定かではないが、女児はようやく苦しみから解放された事になる。この幼い女児は、まだ何も知らないうちに性器を蜂の巣にされ絶命した。儀式は終了したが、まだ供物を祭壇に捧げなければならない。信者たちの中の女が集まり女児の性器の解体を始める。小陰唇、陰核を切除し銀のトレイに載せる。そして、膣の周りにメスを入れぐるりと膣を抉り取り、トレイに置いた。女たちの目は血走り、それを見ている男の信者の目も普通ではなかった。女たちは女児の性器を切り裂き、その割れ目に手を突っ込むと子宮を握り締めた。

ズボッ

そして、力任せに子宮を引き摺り出す。さらに小さな珠のような卵巣も取り出される。トレイの上には、子宮、卵巣、膣、小陰唇、陰核が置かれていた。その、女の性器、そのものを祭壇に恭しく捧げると仮面の男は信者たちを振り向き手を上げて告げた。

「それでは、性交を始めなさい」

また仮面の男の号令で信者たちは男女で対になり、女の膣に男の陰茎が突き刺された。異常な精神状態の中で信者たちは忽ち絶頂に達していた。

ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ

シャーーーッ

男は射精し、女は潮を吹いて全員が虚ろな表情をしている。

・・ヴァギナを放す頃合いだな・・

仮面の男は合図を送り、鉄のドアが解放されると6体のヴァギナが部屋の中に入ってきた。そして、触手を伸ばし重なっている男女を喰い始めた。

「あぎゃぁぁーーーっ!!」

そこかしこで悲鳴が上がり、血飛沫が飛び散った。が、そのうちに悲鳴は失くなり、シーンと静まり返った中には6体の新たなデビルが誕生していた。

「文月様に報告だ。６体のデビルが誕生した」

仮面の男は、仮面の下で笑いを必死にこらえていた。

・・まったく馬鹿な信者共だ。この調子でデビルを増産していこう。文月様の天下になるのももう少しだ・・

仮面の男は、もうすぐやってくるであろう理想郷にこらえようとしても笑いがこぼれてしまっていた。

★　★　★　★

ヴァギナ対策委員会の近くの公園で吉川直哉の惨殺死体が発見されたが、それはニュースにならずに一部の者にだけ伝えられた。直哉は四肢を切断され、さらに幼い性器も切断されていた。切断された性器は直哉自身の口に押し込まれ、直哉の肛門には切断された右腕がすっぽりと入れられていた。その凄惨な死体を菜緒は見てしまった。

「私のせいだ。私が直哉くんを呼んだりしたから……。留美子ちゃんも量子ちゃんも、リリスちゃんも若葉ちゃんもみんな私のせいで殺された」

菜緒は頭を抱えて半狂乱になっていた。以前、留美子と量子が殺された時には、菜緒が立ち直るきっかけを作ってくれた美奈子ももういない。佳乃は黙って菜緒を抱き締めていたが、言葉がなかった。本人が望んだわけではないのに過酷な運命に巻き込まれている菜緒の力になって上げたいが、それが出来ない自分が歯痒かった。こん

な時にエレシュキガルがいればと思うが、エレシュキガルはリツコの元で特訓に励んでいる。

「姫川はブスだけど一応女だからな。吉川は姫川とやれて嬉しかったと思うよ。男にとって最高の経験をしたんだ。姫川のおかげさ」

「でも、そのせいで殺されちゃったんだよ」

菜緒はパズスの顔を睨み付けるが、パズスは平気な顔で言う。

「僕なら姫川とやるなんて自殺もんだけど、普通の男は女とやれれば嬉しいもんだよ。それを経験出来たんだから吉川も良かったと思わないとな。だって、何も経験しないうちに事故で死ぬ事だってあるだろう。それに比べれば幸せじゃないか」

「芳樹くん、私とやりたくないの？」

菜緒はジトッとした目でパズスを見つめていた。パズスは、そっちかよと思いながら佳乃に目で合図して連れ出す。

「リリスと若葉が何故狙われたのか考えていました。それでもしかしたらと思った事があったけど確信がなかったんです。でも今回吉川が殺されて確信を持ちました。ウテルスは誰よりも強い。この宇宙で最強でしょう。でも姫川はまだ子供なんです。精神的には弱い。敵は姫川の心を壊すつもりです。姫川の関係のある人たちを殺していくつもりでしょう。野上さん、あなたもそのターゲットに入っていると思います。これを渡しておきます」

パズスは佳乃に小さな黒いボールを二つ手渡した。佳乃はそれが何か分からず首を傾げている。

「それは僕が作ったカプセルヴァギナです。危険が迫った時にはそれを地面に叩き付けて下さい。中からヴァギナが現れて戦ってくれます。相手が人間なら有効でしょう。もし、相手がデビルだった場合は、二つ同時に投げつけてヴァギナを壁にして下さい。その間に逃げられるよう祈っています」

「ありがとうございます。でもヴァギナはあなたのお仲間ではないですか。私の為に犠牲になる事はないと思います」

佳乃はきっぱりと言うがパズスは無理矢理佳乃に受け取らせる。

「もし、あなたが殺されたら姫川は悲しむでしょう。僕は現時点ではあなたと萌が一番危険だと思っています。ですから気を付けて下さい。教団は何処に潜んでいるか分かりませんので」

「そうですね。委員会にも教団の信者が入り込んでいましたからね。でも狙われるとしたらウテルス様と一番長い付き合いのあなたが一番じゃないですか？あなたの強さは分かっていますが、あのデビルという化け物が何体も襲ってきたら危ないのでは」

「まったく、その通りですね。僕も十分気を付けるようにします」

パズスはそう言うと、運ばれていく直哉を見ている菜緒の肩を叩いた。菜緒は落ち着いたように見えるが、菜緒の心はパズスも分かっていた。

・・豪徳寺文月という女は本当に人間なのか。こんな残酷な計画を立てるなんて……。でも、一つ誤算だったな。ウテルスはそんなに弱くない。今のウテルスは怒りの感情で一杯だ。滅びるのはお前の

方だよ、豪徳寺文月・・

自分の為に友人を殺された菜緒はこれ以上犠牲を出さない為に、早急に豪徳寺文月とデビルを倒す決心をしていた。今まで守る為に戦っていたウテルスが、自分から戦いを仕掛けようとしていた。最後の戦いが始まるまで、もう残された時間は僅かだった。

78、教団支部の戦い

78、教団支部の戦い

ヴァギナ対策委員会で徹底的にカタストロフ教団の情報を入手してもらい、菜緒はその教団の拠点を潰していこうと考えていた。表向きは宗教団体である為、委員会や警察が直接動くことは出来ない。そういった事情もあり、今までは決定的な証拠がない限りこちらから動く事は控えていたが、委員会や警察内部の有志たちで独自にカタストロフ教団壊滅の為、動き出す事になった。それは佳乃や伊東の尽力は勿論、今までウテルスが救ってきた人たちの力も後押ししていた。

「野上さんと青野ちゃんには24時間、完全にガードをお願いします。敵の狙いはウテルスの心を壊す事なので……。そして、今度は僕たちから討って出ます。なぜなら早急に教団を壊滅させなければ、あの〝デビル〟という怪物をどんどん造り出されてしまうからです」

委員会の本部にある会議室でパズスが熱弁を奮う。あのデビルが増え続けたら、手の施しようがなくなる。今のうちに潰さなければならない。この所頻発している少女拉致事件も教団の仕業であるのは間違いなかった。

「教団はどういう目的で少女を拉致しているのだろうか？営利目的の誘拐でもなし、何か意味があるのか？」

伊東が疑問を呈するが、パズスが明快に答える。

「あのデビルを誕生させる為に必要なのでしょう。私が見た男も少女を処刑した後にデビルに変貌しました。少女を処刑するという精神的な儀式が必要なのだと思います」

「つまりデビルを誕生させる為に少女を生け贄にする必要があるということか。なんとおぞましい」

伊東がブルッと身震いするが、隣の委員会幹部がすぐに行方不明少女の数を調べていた。

「今現在で届けがあるだけで13名の少女が行方不明になっております。勿論、届けていないものや、確認されていないものもあるでしょう」

幹部の報告に全員が身を引き締める。少なくともデビルが13体はいるとみて間違いないだろう。

「あのデビルがすでに13体も誕生しているというのか」

伊東が嘆くように言うが、事態はもっと切迫していたのである。伊東たちは少女一人の犠牲で1体のデビルと考えていたが、実際には一人の少女の生け贄で数体のデビルが誕生するのだ。そこを読み違えていた。デビルの数は伊東たちが考えるよりも遥かに多くなっていたのである。

★　★　★　★

菜緒とエレシュキガルはある建物の前にいた。大きな2階建てのお屋敷と呼べる建物である。

「ここが教団の支部の一つというわけか」

「うん、普通の大きな民家みたいだけど委員会の人が探してくれたんだ」

「それでは踏み込んで壊滅しますか」

十六夜が二人の後ろから声をかける。十六夜もリリスを殺された事で殺気だっていた。

「まあ、落ち着け十六夜。万が一普通の人間の家であれば、委員会が問題視されてしまうからな。念の為だ、ベルゼブ探ってこい」

エレシュキガルの命令で小さな虫のようなヴァギナが飛んでいった。ベルゼブも自分が近くにいながら何も出来ずリリスが死んだ事に深い憤りを持っていた。ヴァギナの中では戦う力は皆無に等しいが、それでも敵の壊滅の為には命も惜しまないという決意を持っていた。ベルゼブは屋敷の窓を見て回るが、どの窓も灯りは点いているが厚手のカーテンが降りており中の様子は窺えない。

・・うむ、危険であるが中に侵入する必要があるな・・

ベルゼブは屋敷の周りを飛び回り換気口を発見した。ベルゼブの体の大きさなら入り込める。ベルゼブは迷わず中に侵入した。そして、大広間のような場所で怪しげな儀式を行っている集団を発見する。祭壇の前で全裸にされた少女が開脚され逆さに吊るされていた。少

女は腕も縛られ口を塞がれ震えていた。そこへ鋭いレイピアを持った男が近づいて行く。そして、少女の股間、性器を目掛けてレイピアを突き入れた。

ガシャッ！！

レイピアは男の手から飛ばされていた。男は手を押さえて何が起こったのか分からないという顔をしている。ベルゼブは男の手に一撃を加え、レイピアを弾き飛ばし、すぐに離脱していた。目にも留まらない早業である。ベルゼブにとって人間の少女などどうでも良かったが、また自分の目の前で命が失くなっていくのは我慢が出来なかったのだ。
ベルゼブにレイピアを落とされた男は、落ちたレイピアを拾うと再び少女の性器目掛けてレイピアを構えた。

ガシャッ！！

また男がレイピアを落とす。さすがに不審に思ったのか祭壇の脇にいた仮面をつけた人物が袖に引っ込んだかと思うと、女性のような人物を連れてきた。その人物は異様な雰囲気を放っている。それは、ベルゼブも以前感じた事のあるオーラだった。

・・まさか、あれは……・・

ベルゼブは悩んだ。今ならまだ気付かれていない。撤退出来るだろう。だが、自分が撤退すれば、あの人間の少女は殺されるだろう。撤退してどんなに急いでもエレシュキガルたちが、ここに飛び込んでくるまでには時間がかかる。それまでに少女は生け贄として捧げられてしまう。

・・一つだけ方法がある。この方法ならば、すぐにエレシュキガル様たちに伝わる・・

ベルゼブは決意した。もう目の前で命が奪われるのはたくさんだ。男はまたレイピアを構えていた。ベルゼブは男の手を目掛けて飛び出した。

ガシャッ!!

三度男がレイピアをとり落とす。ベルゼブはすぐに飛び去ろうとしたが、あの女の指に摘まれていた。目の前の女の顔がニヤリと笑う。

・・くっ、やはりコイツ、デビル・・

ベルゼブを捕えたデビルは、そのまま指に力を込める。ベルゼブの体が潰れていく。しかし、ベルゼブは満足していた。

・・これで、コイツラの位置がエレシュキガル様に伝わる・・

ブチッ!!

ベルゼブの体を潰したデビルは指をグリグリと擦り合わせベルゼブの体を粉々にしていった。

・・ふーむ、こんなヴァギナもいるのか。デビルを控えさせておいて正解だったな。途中で邪魔されてもいかん。部下に周囲を警戒してもらうか・・

仮面の人物は一時儀式を中断し、袖の方に姿を消していった。

一方、屋敷の外にいる菜緒たちが息を潜めて待機しているとエレシュキガルと十六夜がバッと立ち上がった。

「えっ、どうしたの？」

菜緒が驚いて声をかけるが十六夜はもう我慢が出来ないという形相で屋敷の玄関を突き破っていた。

「ベルゼブが殺された。ここは間違いなく教団の支部だ。行くぞ、ウテルス」

エレシュキガルも菜緒の返事も聞かず飛び出していく。慌てて菜緒も後を追って屋敷の中に踏み込むと、そこには地獄の光景が広がっていた。リリスとベルゼブを殺され、もう精神に抑制のかけられない十六夜が大広間のような講堂に集まっていた教団の信者と思われる男女を虐殺していた。そして、エレシュキガルは一人の女性と対峙している。

・・あの女の人、デビルだ・・

菜緒はエレシュキガルに加勢に行こうと思ったが、祭壇の前で逆さに吊られている少女に気が付いた。

・・あの女の子を先に助けないと・・

菜緒はウテルスの力を解放して瞬時に少女の元に移動し、吊られていた少女を助けだした。そして、そのまま屋敷の外に出ると委員会に連絡する。すぐに隊員が急行してきて少女を保護してくれる筈だ。やきもきしながらウテルスが待っていると、一台の車が猛スピード

でやって来て止まった。そして、中から武装した隊員が降りてくる。

「この女の子の保護をお願いします」

ウテルスが隊員に少女を引き渡そうとした時、少女の口が動いた。

「ウテルス様、ありがとう。あの小さな虫もウテルス様が私の元に送ってくれたのですか？私を何度も守ってくれたのに、あの気味の悪い女に殺されちゃった。ウテルス様、お願いします。仇を討って下さい」

少女は泣きながらウテルスに訴えていた。

「うん、わかった。必ず仇は討つよ。安心して休んでいて」

ウテルスは少女にニコッと微笑むと、屋敷に向かって飛び出した。

ウテルスのツインテールがウテルスの心情を表すように激しく天を衝いていた。

79、一つの勝利

79、一つの勝利

ウテルスは再び屋敷に飛び込んでいく。大広間では十六夜がヴァギナ対策用の弾丸を打ち込まれ苦戦していた。それでも、怒りに燃えた十六夜は怯む事なくカタストロフ教信者を血祭りに上げていた。

「人間など食料にしか思わなかったが、その人間にこれ程怒りを覚えたのは初めてだ。貴様ら皆殺しにしてやるっ」

十六夜は怒りの形相で信者たちを殺戮していくが、それでも多勢に無勢、四方八方から銃弾を打ち込まれ再生も出来ずにボロボロになっていく。

・・いけない、十六夜さんが危ない・・

かつてヴァギナ対策委員会に在籍していた嶋田三千代が教団に横流ししていた弾丸は、ウテルスの尿から精製したヴァギナ対策用の特殊な弾丸だ。ヴァギナである十六夜に多大なダメージを与え再生不能にする。十六夜は弾丸を打ち込まれた部分は再生も出来ず、触手も何本も引き千切られ、もう残り2本になっていた。それでも、十六夜は戦う。十六夜は、以前は崇拝する惨神以外には何の感情も持たなかったが、ウテルスたちと出会い人間と交流するうちに、一緒に行動する個体に対して〝仲間〟という意識が芽生えていた。同じ物を見て感じて経験して時間を共有する。その人間の感情が新鮮で

十六夜は初めての感情に嬉しさで興奮していた。その仲間であるリリスとベルゼブ、そして人間ではあるが若葉を殺され十六夜は怒りの感情を止められなくなっていた。十六夜が冷静であったなら、ここで一度撤退する道を選んだだろうが、この時の十六夜に撤退の道はなかった。

「このヴァギナの脚を狙えっ！動きを封じろっ！その後、頭を破壊して終わりだっ！」

信者たちは十六夜の脚を集中して狙い始める。ウテルスは敵を一度に葬りされる〝審判〟を発動しようと思ったが、ここで〝審判〟を発動してその後にまたデビルが現れてしまったら、こちらの敗北は必至だ。ウテルスは、チラッとエレシュキガルに目を向けた。エレシュキガルはデビルと互角以上に戦っていた。デビルの触手も高速の拳も鋭い蹴りも全てかわしながらデビルに攻撃をヒットさせダメージを与えている。

「遅い、遅いぞっ！こんなものか、デビルっ！ペインの攻撃に比べれば止まっているようなものだ」

デビルはエレシュキガルの攻撃で手を脚を触手を吹き飛ばされていくが瞬時に再生していく。以前のエレシュキガルであれば、この果てのない戦いに心が折れるところであるが、リツコと出会いペインと修行した今のエレシュキガルに迷いはない。何度デビルが再生しようが構わず攻撃を打ち込んでいく。

・・エレシュキガルは大丈夫だ・・

ウテルスは十六夜に銃を向ける信者に向かった。

「エレクトリカルハンマー」

ウテルスの電撃を帯びた踵落としが信者の脳天に決まり一撃で粉砕する。さらに放たれた電撃で周囲にいる信者も倒れていた。以前のウテルスであれば、人間には決して手を上げなかったが、今のウテルスは人間でも容赦はしない。あの〝豪徳寺文月〟のように人間でも悪魔よりもどす黒い人間もいるのだ。悪に染まった人間は勿論、悪を悪とも思わない人間は始末する。ウテルスは例え自分が地獄に堕ちても、もうそのような人間は許す事が出来なかった。

・・留美子ちゃんや量子ちゃんを殺した人間なんて許せる訳がない。でも美奈子ちゃんや若葉ちゃんのような良い人もいる。だから、そんな人を守る為に私は悪魔にもなる・・

「レッドセンセーション」

今度は炎の拳が信者を貫く。胸を貫かれた信者は一瞬で燃え上がり床に転がりのたうち回る。

「デストロイクロー」

ウテルスが女性信者の頭をぐしゃっとまるでトマトのように握り潰す。

「貴様ぁ、ウテルス。貴様は人間の味方ではないのかぁ。我々は人間の敵〝ヴァギナ〟を倒す為に精進していると云うのに」

「ヴァギナを倒す為に？ならこの儀式はなんなの？女の子を犠牲にして何も思わないの」

「ふん、ウテルスとはいえ所詮子供、大義の為には犠牲もやむを得んという事が分からぬとはな」

「犠牲？ふざけるなぁ。そんな犠牲を強いるものは大義とは言わないよ」

「ふん、もう構わん、ウテルスも殺せ。我らにはデビルがいる。もうウテルスなど必要ない」

仮面を被った男は信者たちに命令する。信者たちは、もう半死半生の十六夜からウテルスに攻撃対象を変えた。今度はウテルスが信者の銃弾を四方から浴びる。しかし、ウテルスは銃弾を避けようともせず信者の人間を倒していく。銃弾はウテルスに命中してはいるがダメージを与える事も動きを止める事も出来なかった。

「お前ら、人間など地獄に堕ちろっ！！」

ウテルスはカタストロフ教の信者を次々に倒していく。まさに一方的な殺戮だ。そのウテルスの姿は古の悪魔のように信者たちには映っていた。

「これをつけろ、十六夜。佳乃から貰った中和剤だ」

すでにデビルを倒してきたエレシュキガルが十六夜に弾丸の効果を無効にする薬を渡し、信者を相手に戦っているウテルスを見る。

「馬鹿な人間だ。人間ごときが私よりも強いウテルスにダメージを与えられると思っているのか。しかも、本来味方である筈のウテルスを敵にするとはな。救いようがないとはこの事だ」

「エレシュキガル様、ウテルスさんは私を助ける為に同胞である人間を敵に回したのですか。それでしたら申し訳ないです」

エレシュキガルは十六夜をチラリと見ると、またウテルスに視線を戻す。

「少し違うな。勿論それも引き金になっただろうが、元々ウテルスは真面目な奴だった。今までは同じ人間である同胞に遠慮していたのだろう。だが今は自分の中で正義と悪をきっちり分けたという事だな。ウテルスの凄いところは人間を食料としている我らを悪と決めつけないところだ。そんな人間も存在するんだ。それまで人間を食料としか思っていなかった私はショックを受けたよ。他にも佳乃やリツコのような人間もいる。パズスが人間に興味を持ったのも今なら分かる。今のウテルスはもう人間でも悪に染まった者は容赦なく殺すだろう。人間だからといって許すつもりはないだろうな」

十六夜はエレシュキガルの言葉に頷いていた。そして、そこへこのカタストロフ教の支部を壊滅させたウテルスが歩いて来る。その顔は、敵を倒してスッキリとした笑顔ではなく苦渋に満ちた顔だった。

「さすがウテルスだ。それにしてもウテルス、あの台詞を言った時の顔、デビ○マンみたいだったぞ」

「えっ、えぇぇっ！私の顔、そんなに怖かった？」

菜緒は遥か昔の資料で見た古い漫画の1シーンを思い出していた。人類に向かって炎を浴びせる憤怒の形相の悪魔の顔を……。しかし、それまで険しい表情だった菜緒が、とたんに表情を崩していた。

「う、嘘だよ。それに私、口から炎なんて吐いてないもん」

「口からは吐いてないが、拳から炎が出ていたな。人間をデビル○ンのように容赦なく焼き殺していた。ははっ、まさに悪魔だ」

「ううっ」

菜緒はエレシュキガルに言い負かされ次の言葉が出てこなかったが、十六夜はエレシュキガルが軽口を言う事で菜緒の気持ちを軽くしたのだと理解した。そして、十六夜も菜緒を庇うように言葉をかける。

「ウテルス様、怒りに委せて冷静さを欠いていた私を助けていただきありがとうございます。ウテルス様のおかげで私はこうして生きています。ウテルス様に救って貰ったこの命、惨神の皆様は勿論ですが、ウテルス様にも捧げたいと思います」

十六夜は深く菜緒に頭を下げていた。そんな十六夜を菜緒は照れたように顔を赤く染め、エレシュキガルはやれやれという顔で見ていた。

★　★　★　★

カタストロフ教団の支部を一つ壊滅させた菜緒たちだったが、こちらにも犠牲が出た。こちらの戦力は少ない。これ以上の犠牲を出す訳にはいかない。その為には早急に敵の本拠地を探し出し叩く必要があった。そこへ、佳乃から連絡が入った。

「ウテルス様、やっと見つけました。カタストロフ教団の、豪徳寺文月のいる屋敷です」

佳乃は興奮した口調で喋っていた。菜緒たちにも緊張が走る。

「ラスボスの居城か。いよいよ最終決戦だな。いいか、ウテルス。この戦い、負けるわけにはいかないぞ」

「当たり前だよ、エレシュキガル。絶対に勝つよ」

菜緒は、胸に手を当てた。つるぺたの胸だった菜緒の胸が少しずつ膨らんできている。

・・あと、少し……。あと少しだけ待って……・・

菜緒は心の中で祈っていた。

８０、最後の戦い

８０、最後の戦い

佳乃が、豪徳寺文月の屋敷を発見したのは、まさに地道な努力の結晶だった。豪徳寺文月の屋敷はミラージュ投影により、一般の民家のように擬装されていた。衛星からの画像でもまったく別の建物に映っている。毎日、自分の足で、自分の眼で、豪徳寺文月の屋敷を探して歩いていた佳乃は、ある一画でふと疑問が浮かんだ。季節外れの暖かさで桜の木が勘違いし、各地で花を咲かせているというニュースが流されるなか、その一画だけ花が咲いていない。佳乃は詳しく調べているうちに、それがミラージュ投影で映し出されていた虚像であると確認出来たのだ。投影されている虚像はリアルタイムで更新されている為、普通はこの様な事は起こらないのであるが、このイレギュラーな事態には対応出来ていなかったのである。佳乃は、この民家数十件分に見える区画の全てが１件の豪徳寺文月の屋敷であると突き止めた。

・・ここが全て豪徳寺文月の屋敷。こんな屋敷が今まで誰にも気付かれずにいたなんて・・

佳乃は、その文月の力に驚愕した。これだけの事が個人の力で出来るものなのか。佳乃は改めて豪徳寺文月の恐ろしさを認識した。

・・こんな人間は今ここで倒しておかなければならない・・

佳乃は屋敷には深入りせず、報告の為急いで踵を返した。この素早い決断が佳乃の命を救った。今まで豪徳寺文月の屋敷の秘密に気付いた者も少なからず存在した。しかし、その者たちは全て屋敷に忍び込もうとして発見され始末されたり、屋敷の周囲を警戒しているガーディアンに発見され殺されたりしていた。佳乃がガーディアンにも発見されずに立ち去れたのは、すぐにこの区画から離れたからに他ならない。まさに佳乃にとって僥倖であると共に、ウテルスたちにとっても僥倖であった。

★　★　★　★

菜緒たちは佳乃の報告で、豪徳寺文月の屋敷に向かう準備をしていた。屋敷に直接踏み込むのは、ウテルス、パズス、エレシュキガル、十六夜、バアルの5人と決まり、後方支援として伊東たちヴァギナ対策委員会の面々が新型トォールハンマーの準備を整え何時でも照射可能にしておく。佳乃と萌は、参加すると言い張ったが全員から却下され唇を噛み締めて下を向いていた。

「どうした佳乃、お前らしくないな。こんな事でへこんでどうする」

エレシュキガルが下を向いている佳乃の肩を叩く。

「私は自分の力不足が悔しくてなりません。こんな重要な局面で何も力になれないなんて……」

「私は佳乃を力不足などとは思っていないぞ。私は何度お前に助けられていると思っているんだ。誰もお前を力不足などと思っていない。みんながお前を外したのは、この戦いの後を考えての事だ。私

たちは必ず勝つ。だけど、それは生き残れるという事とは別問題だ。せっかく勝利しても、その後の世界を導いていく者がいなければまずいだろう。それを佳乃に託したいんだよ。それがウテルスを始め我々の願いだ」

「そんな……。皆さん、死ぬおつもりですか。そんな事を言わないで逃げて下さい。人間の為に死ぬ事などありませんよ」

「人間の為？それは違うな、佳乃。私はそんな事の為に戦わない。みんな、それぞれ理由は違うだろうが、私はあの女が、豪徳寺文月が気に入らないから叩き潰すだけだ。ごく個人的な理由だよ。奴を倒す為には命もかけてやるさ。もう、あの女と同じ空気を吸っている事が我慢ならん」

エレシュキガルは佳乃に向かって笑いかける。佳乃もエレシュキガルに微笑み返すが、心の中では涙を流していた。

・・本当にこの人たちはヴァギナなの。人間よりも遥かに純粋で人間らしい。私が負担に思わないように、気遣ってくれている。もしかして、ヴァギナが現れたのは、この時の為に、この星を守るために神様が遣わしてくれたの・・

佳乃は思う。これが最後の戦いだ。この戦いが終われば、勝ち残った方の世界が始まる。歴史は残酷だ。何時でも勝った方が正義になる。もし豪徳寺文月が勝ち残ったのなら、私たちは皆、反乱を企てた悪として歴史に名前を残すだろう。カタストロフ教団は、唯一無二の教団として他の教団を弾圧し、その教えを拡げていくだろう。そんな未来を想像すると佳乃は胸が痛くなる。

「エレシュキガルさん、あのドブスの豪徳寺文月を必ずぶっ殺して

下さい」

佳乃は拳を握り締めてエレシュキガルにエールを贈った。

「ははっ佳乃、心配するな。必ずぶち殺す。それにしても相変わらず怖い女だな、佳乃お前は」

エレシュキガルも拳を握り締めて佳乃の拳にコツンとぶつけると、またニヤリと笑った。その時、ウテルスがやって来た。

「エレシュキガル、リツコさんにここの座標が送れないんだよ。妨害されてるみたい」

「まあ、それくらいやっているだろうな。私たちが豪徳寺文月の屋敷に乗り込む事は伝えてあるのか？」

「それは委員会から伝えてあります。でも座標は現地からではないと送れないので……。こんな妨害があるなら一緒に来た方が良かったですね。座標が分からずに、ここを見つけた私以外の者が辿り着くのは至難の業ですよ」

佳乃は心配そうに言うがエレシュキガルはまた佳乃の心配を吹き飛ばすように軽く答える。

「あのリツコなら自力でここを発見するさ。まあリツコが来る頃には私が全てを終わらせておいてやるがな。そうだろう、ウテルス」

「もちろんだよ。でも、少しは残しておいてあげないとリツコさん可哀想だよ」

ウテルスもエレシュキガルに合わせて殊更軽い口調で言うが、それほど簡単にいくとは誰も考えてはいなかった。あのデビルが何体いるのか。さらにデビルを改良した上位デビルの存在は。そして、早くここを潰さなければ周囲の支部から応援のデビルが集まって来るだろう。こちらの数は少ない。リツコたちを欠いた今、さらに厳しくなるだろう。その為、なおさら敵に気取られる前に潰さなければならない。

「どうだ、伊東。妨害されているようだが発振器は使えるのか？」

「ああ、その発振器は出力を上げているので問題ない。しかし、使用した時点で敵にもこちらの位置が判明してしまうので、奇襲をかけようとしている我々はタチバナリツコさんに座標を送る事は出来ない。肝心のトォールハンマーを撃つ時まで使用は控えてくれ、パズスさん」

「了解。それでは僕たちだけで突入するしかないな。十六夜、用意はいいか。何時でも使用できるように準備は怠るなよ。それと敵の数によっては新月も使うかも知れない。すぐに出せるよう用意しておいてくれ」

「はい、パズス様」

十六夜も緊張した面持ちで答える。そんな十六夜を見つめていたパズスは、十六夜を強く抱き締めた。

「こんな時、人間はキスするらしいが、あっちでウテルスが睨んでいるからな。これで我慢してくれ」

十六夜は雲の上の存在、惨神の一人パズスに抱き締められ、まるで

天に登ったような気持ちだった。

「そんなパズス様、私ごときに勿体ない。私の全ての力をこの戦いに使い必ず勝利します」

十六夜は感激のあまり緊張も吹っ飛び燃えるような瞳でパズスを見つめる。それを見ていたエレシュキガルもなるほどとウテルスを抱き締めた。

「私もハグしてやるぞウテルス。これが人間式の激励か」

「ありがとう、エレシュキガル。でもエレシュキガル、胸が大きくて苦しいよ」

まだ子供で身長の低いウテルスはエレシュキガルの胸で顔を潰され呼吸困難になっていた。

「ブハァァーーッ」

ようやくエレシュキガルのハグから逃れたウテルスが大きく息をする。

「私もエレシュキガルくらい胸、大きくなるかな？」

「ははっお前はまだ子供だからな、ウテルス。大人になれば大きくなるさ」

「でも、佳乃さん、大人なのに大きくない」

「はあっ？ウテルス様、今聞き捨てならない言葉が聞こえましたが」

顔がピクピク硬直する佳乃の顔がウテルスに迫ってきた。

「ご、ごめんなさい、佳乃さん。気にしてたの？」

「当たり前じゃないですか」

佳乃はウテルスの頭をコツンと軽く殴る。そして、ウテルスの前にしゃがみ込んだ。

「ウテルス様には負けませんよ。ですから、この戦い必ず勝って生き残って胸の大きさ競争しましょうね」

佳乃はウテルスに小指を出して指切りする。その二人を見ながらエレシュキガルは何故か感動している自分に驚いていた。

それぞれの思いをのせて最後の戦いが始まる。この戦いが終わった後に生き残っているのはどちらの陣営なのか。ついに戦いの火蓋が切っておとされる。

81、決戦の刻

８１、決戦の刻

「バアル、僕たちの突入と同時にまず敵のミラージュ投影装置を見つけて破壊してくれ」

パズスが空を飛べるバアルに指示を出す。

「まず、敵の幻影を潰せばタチバナリツコもここを発見しやすくなる。僕たちは地上から屋敷に侵入して行くが、幻影に惑わされないように慎重に行くぞ。ガーディアンという敵もいるらしいから気を付けていこう」

「最終決戦の開始だな。ところでウテルス。もう、豪徳寺文月を殺しても問題ないんだよな。最初に奴と会った時は、ジャッジメントを生き残った人間は殺せないと言っていたが」

「勿論だよ、エレシュキガル。ジャッジメントを受けて1日経てばリセットされる。だってそうでしょ。善人だった人が突然悪人に変わる事もある。だから、以前は生き残っても今度は生き残れるとは限らない」

「くくく、これで安心した。今度こそ奴に引導を渡してやる」

「油断するなよ、エレシュキガル。あの女は人間であって人間でな

い。不気味な感じがする。それに相当数のデビルが控えている筈だし、あの時見たデビルの進化した奴もいるかも知れない」

パズスは気を引き締めるように言うが、エレシュキガルはもう自分の感情に歯止めがきかないようだった。パズスはそんなエレシュキガルを危惧し、十六夜に耳打ちする。

「すまんな、十六夜。体力を消耗させて悪いが、新月をエレシュキガルに同行させてくれないか。一人だと無茶しそうで心配だ」

「はい、パズス様。了解しました」

十六夜はすぐに体を分裂させ、新月が現れる。

「最後の決戦なのに私は呼ばれないのかと心配したぞ、十六夜。パズス様、お話は聞こえておりました。この身を犠牲にしましてもエレシュキガル様はお守り致します」

新月はパズスに一礼すると、エレシュキガルの元に駆けて行った。

「芳樹くん、私もバアルさんと一緒に行くよ。私も飛べるし、二人の方が装置を壊すの早いと思うから……」

「いや、駄目だ。ウテルスは地上から突入だ。バルバドス、来てくれ」

普段冷静なパズスの強い言葉に菜緒は驚いたが、バルバドスが来るとパズスは菜緒の体を診察させる。

「な、なに?私、別にどこも悪くないよ」

怪訝そうに言う菜緒の肩にポンと手を置いたパズスはニッコリと笑う。

「大事な戦いの前だからな。念のためだよ」

パズスは菜緒の元を離れるとバルバドスを呼び、小さな声で話し出す。

「どうだった？」

「かなり、高い数値が出ていますな。順調に成長しているという事でしょう。もう、いつきてもおかしくありませんな」

バルバドスは、すくすくと成長してくれて結構結構と顔を綻ばせるが、パズスの顔は曇っていた。

・・今日の戦い、ウテルスは参加しない方が良い。でも、あいつの性格からいって本当の事を言っても納得しないだろう・・

パズスは腕を組んで考え込んでいた。

★　★　★　★

「よし、ペインのエネルギーチャージ完了だな。すぐに出発するぞ、準備はいいか」

「はい、リツコ様。しかし、豪徳寺の屋敷の座標が分かりませんが」

「委員会に連絡して衛星から熱センサーで探知してもらえ、豪徳寺の屋敷が幻影で隠されていると分かった以上、いくらでも手はある。すぐにウテルスたちが突入するだろう。あいつらはお行儀よく訪問などしないだろうから、特大の熱量が観測された場所が最終決戦の場だ。豪徳寺の居場所を発見した、あの佳乃という女、大金星だな。おそらくすぐに場所が分かるさ。ふふふっ、今日を豪徳寺の命日にしてやる」

リツコたちも準備を整え、車に分乗して走り出す。

「いいか、委員会からの映像に注意していろ。見逃すなよ。取り敢えず、場所が判明している支部へ向かえ。ただし、豪徳寺の屋敷が判明したら、そこが最優先だ」

そこで、リツコは隣に乗る白衣の男に目を向ける。

「西園寺、今までご苦労だった。礼を言う」

「ありがとうございます。ですが、まだ終わりではないですよ。私はこれからもリツコ様に仕えさせていただきます」

「そうだな……。だが、これで一つの区切りがつくような気がする。なぜかな、私は一人で暗闇の中泣いてる夢を最近よく見るんだ」

「それは、おそらくリツコ様も誰かに頼りたいという心の表れですよ。今まで一人で先頭に立って走ってこられたので、きっと少し休みたいと心の何処かで思っているのでしょう」

「そんなものかな」

「そうですよ」

リツコはそこで言葉を区切り車載の無線のマイクを取る。

「今ここにいる私についてきてくれた諸君には心から感謝する。ここまでくれば私とペインの力でいけそうだ。諸君は自分の命をまず第一に考えて行動してくれ。以上だ」

リツコの言葉に連なって走っている数台のワンボックスカーのボディが震える程の雄叫びが上がる。乗車している者たちの眼も今までになく熱い光が宿っていた。誰もが今日を最後の日にする決意を秘めた眼だった。

★
★
★
★

大きな屋敷の地下で壁一面のモニターを男がチェックしている。少しでも不審なものが見えればすぐにそれを報告する。それが男の仕事だった。男は長年この仕事を任されており、一度として不審者を見逃した事はなかった。その事から男は〝鷹の目〟と呼ばれ他のスタッフからも尊敬されていた。男も、そう呼ばれる事に対して誇りを持っていたのである。

・・今日も今のところ異常はないな・・

〝鷹の目〟と呼ばれる男はモニターを確認しながら定時連絡用のシートに異常無しと記入しようとしたが、何か引っ掛かっているものがある。なんだろう。〝鷹の目〟の目付きが変わった。まさに鷹の

目である。全てのモニターを注意深く観察する。不審なものは何も映っていない。しかし、何か違和感がある。屋敷の北側。そこだけが他のモニターに写し出されている画面と違う雰囲気を感じるのだ。男は迷うことなく緊急警戒用のボタンを押した。自分の直感を信じたのだ。屋敷に緊急ブザーが鳴り響き、警戒用のドローンが飛び出した。屋敷の中は慌ただしくなっていく。

「なんの騒ぎだ、これは？」

全裸に赤いハイヒールを履いた女が側近の男に問い質す。男はすぐに各所に連絡し確かめた後に女に報告した。

「監視画面には不審なものはないそうですが、監視をしていた者が、異様な気配を感じ緊急ボタンを押したそうです。いかがなさいますか？」

「監視していたのは〝鷹の目〟か？」

「はい、その通りです」

「ならば、間違いなく何かが起きている。最大の警戒体制をとれ。他の支部のデビルも呼び寄せろ」

「はっ、文月様。至急手配致します」

男は慌ててドアを開けて出ていった。一人残った文月は足を開き腰に手を当てて笑い始めていた。

・・まさか、ここが突き止められるとはな。なかなか、やるではないか。しかし、問題はウテルスとペインだけ。残りを皆殺しにすれ

ばウテルスは所詮子供心が折れるだろう。となると残るはペインか。こいつの情報はほとんどないが、こいつがあの麗香だとしたらリツコを始末すれば止められるかも知れんな・・

文月は、館内連絡用のマイクを取り上げ大声を上げた。

「神楽坂沙也加はいるか」

「はい、文月様」

すぐに一人の女性が現れる。

「これから外に出て敵の動きを探れ。お前はまだ顔が知られていないからな。それでタチバナリツコという女を見つけたら殺せ。しくじるなよ。わかったらすぐに行け」

「畏まりました」

女性はやっと自分の出番がきたとばかりに、ニヤリと口許に笑みを浮かべると風のように姿を消していた。

★　★　★　★

ヴァギナ対策委員会でも慌ただしい動きになっていた。

「警察に連絡してZエリアのB地区から住民を避難させてくれ。地殻変動の兆候を確認したとか理由は何でも構わん。急げっ」

「衛星の照準の補正を忘れるな。1ミリのズレも許されないぞ」

「後方支援の部隊の準備はどうだ？積み込み漏れのないように確認を怠るなよ」

伊東を始め全員がピリピリとした緊張の中で動いている。じっとしている事など出来なかった。誰もが、この戦いが最後の決戦であると感じている。人の中の善の心が勝つのか、あるいは人の悪意が世界を席巻するのか。最後の戦いが始まる。

82、最初の犠牲者

82、最初の犠牲者

豪徳寺文月の屋敷へ突入する前にパズスは菜緒を呼び考えた作戦を伝えていた。

「いいかウテルス。重要な作戦だからな自分の役目を忘れるなよ。もう一度言うけど、屋敷に突入するのは僕とエレシュキガル、十六夜、新月にバアルだ。ウテルスは後方支援部隊と待機。僕たちの切り札はウテルスだからな。力を温存しておくんだ。僕が合図を送るから、そうしたら突入してきてくれ。いいか、ウテルス。自分が切り札だということを忘れるなよ。僕が合図するまで絶対に動くなよ」

「う、うん。わかったよ。でもみんなが危なくなったらどうするの？助けに行かないと」

「違う、ウテルス。これはもう最後の戦いなんだ。誰かが犠牲になっても仕方ない。最後に勝つ事が一番大切なんだ。そして、その最後を任せられるのはウテルスしかいない。辛いだろうが分かってくれ」

パズスは必死に菜緒を説得していた。ウテルスを戦いに出すわけにはいかない。おそらくウテルスはもう……。パズスはウテルスに合図を送る気などさらさらなかった。とにかく、ウテルスをここに留めて自分達で全てを終わらせる覚悟だった。何故ウテルスをここま

で心配するのか自分でも理解出来なかった。以前のパズスであれば自分以外どうなろうと知った事ではないし、他の者と協力するなど考えられなかった。だが、今パズスは、その考えられなかった方向に動いている。人間に擬態して長い間過ごしてきた経験がパズスの精神にも影響を与えているのは間違いなかった。そして、それをパズス自身も不快とは感じていなかったのである。

・・大丈夫だ、まだあれからそれほど時間は経っていない。あの時以上のデビルがいなければ僕たちで勝てる筈だ・・

菜緒はパズスに伝えられた作戦に渋々従い、とぼとぼと後方支援で待機している委員会のマイクロバスに向かって歩いていた。

「あれ、ウテルス様。どうしたんですか？」

やはり待機組の佳乃がバスから降りてきてウテルスを迎える。

「うん、なんか作戦で私は切り札だから待機していてくれって芳樹くんが言うんだよ。芳樹くんの言うことだから間違いないと思うけど、私もみんなと一緒に戦いたかったよ」

佳乃はパズスが菜緒に言ったという作戦を訊いてみたが、ウテルスを最後まで温存する意味が分からなかった。ウテルス程の戦力を欠いてしまっては、いくらパズスとエレシュキガルが強いといっても数も分からないデビルの軍団に勝てるのか不明だ。逆に最後の敵、豪徳寺文月であればウテルスの力を借りなくても倒せるだろう。リツコによって強化されている今の自分でも豪徳寺文月は倒せるのではと思っていた。それなら、何故パズスは菜緒を待機させるのか。佳乃は考えたがパズスの真意が分からなかった。

・・いったいパズスさんは何を考えているんだろう。まるで、ウテルス様を戦いに参加させたくないような・・

佳乃はうーんと顔を上げた時、空を飛行しているドローンが目に入った。

「ウテルス様、早くバスの中へっ」

佳乃は菜緒の手を引き、バスの中に引っ張り込む。そして、身を隠しているように告げ自分も椅子の陰に隠れながら窓から外を覗く。ドローンは何かを探るように空中を飛び回っている。それもよく見ると1機ではなく数機のドローンが飛んでいる。佳乃は委員会からの連絡でこのB地区の住民は避難していて誰も残ってはいないと知っていた。なので、このドローンを操縦しているのは住人ではない。また、委員会の人間が使うドローンとは型が違う。そうなると、このドローンは豪徳寺文月が放ったドローンと推測出来た。

・・いけない、見つかった?・・

見つかってしまえば敵の本拠地へ奇襲する作戦がふいになってしまう。強力な敵の戦力が整う前に奇襲をかけ、敵の総大将、豪徳寺文月を倒す。それが、戦力的に劣るこちらの作戦であったのにと佳乃は身を隠し覗きながら空を見ていると、飛んでいたドローンは飛び去っていった。

・・良かった。見つからなかった・・

佳乃が安堵したのも束の間、バスの前後に巨大な牛が立ち上がったような怪人が現れる。そして、ずんずんとバスに迫ってきていた。

・・あれはミノタウロス。古代神話の怪物だ。いけない、やはり見つかっていた。でもどうして、みんな注意していたのに・・

佳乃は知らなかった。敵に〝鷹の目〟と呼ばれるとてつもない監視者がいる事を。〝鷹の目〟はその呼び名の通り、目に見えない気配さえも見つけ出す。彼の目から逃れる事は不可能なのだ。そして、佳乃はパズスたちが危険に晒されている事に気付く。

・・不味い、急いでパズスさんたちに知らせないと、罠が仕掛けられている可能性が大きい・・

佳乃はパズスたちが突入を止めるよう無線で連絡をとろうとするが、すでに突入の準備をしているパズスたちは誰も無線にでなかった。

・・直接行って止めるしかない・・

佳乃はバスから飛び出したが、それを見たミノタウロスが巨大な斧で佳乃に襲いかかる。以前の佳乃であれば、これで身体を両断され絶命しているところであるが、リツコによって身体能力を強化されている佳乃はミノタウロスの斬撃をかわしていた。しかし、もう一体のミノタウロスも佳乃に襲いかかってくる。佳乃は二体のミノタウロスに襲われパズスの元に行くどころか、バスの前から一歩も動けずにいた。菜緒はパズスの指示通り動かずにバスの窓から佳乃の窮地を見ていた。

・・芳樹くんは合図があるまで絶対に戦うなというけど、このままじゃ佳乃さん殺されちゃうよ・・

菜緒はバスの中で拳を握りしめ、飛び出して行きたい思いに必死に耐えていた。佳乃はミノタウロスの攻撃をかろうじてかわしてはい

るが、徐々に退路を断たれ追い詰められている。

・・ごめんなさい、芳樹くん。私、やっぱり無理・・

菜緒はウテルスに変身し佳乃の前に立つとミノタウロスに向かって攻撃を開始した。

★
★
★
★

パズスたちは文月の不意を突くため屋敷に奇襲を仕掛けようとしていた。バアルが空中よりミラージュ投影装置を見つけ出し、委員会の技術者がそれを無効にする。パズスたちの目の前に現れたのは、正真正銘、豪徳寺文月の屋敷であった。委員会が開発したセンサーを使い、そこかしこに設置されている監視カメラの死角を通り屋敷に向かって進んでいく。ここまでは、順調に進んでいた。

「くくく、あの女、すっかり油断しているな。自分の力に思い上がっているのだろう。この分なら、あっさりと首が獲れるかも知れんな」

エレシュキガルが思わず笑みを浮かべた時だった。先頭を歩いていたエレシュキガルの周囲に突然地面から檻が飛び出し、エレシュキガルが檻の中に閉じ込められてしまう。そして、空中に数十機のドローンが現れヴァギナ対策用の銃弾をエレシュキガル目掛けて撃ちまくった。

ズガガガガガッ！！

「エレシュキガル様っ！！」

新月が飛び出すが、その前にデビルが立ちふさがってくる。

・・・くっ、もうデビルが出てくるのか。待ち伏せされていたみたい・

・

新月は委員会から貸与された銃を腰のホルスターから手に取った。以前エレシュキガルがデビルを倒した時よりも更に強化した銃と弾丸だ。上手く急所に当たれば以前より短時間でデビルを倒せる筈であった。しかし、デビルも一体ではなく、数体のデビルが現れていた。明らかにパズスたちの動きが敵に知られている。

「くそっどうやら僕たちの奇襲は敵に読まれていたらしい。でも、もうここまできて退くわけにはいかない。こうなれば、強行突破して豪徳寺文月を倒すぞっ！」

パズスに言われるまでもなく全員がデビルに対峙している。しかし、その間にも檻に閉じ込められたエレシュキガルに向かって銃弾が雨のように激しく撃ち込まれていた。蜂の巣などというレベルではない。まさに蟻の這い出る隙間もないほどの弾幕だ。いかにエレシュキガルと云えど、これだけの銃弾を休みなく撃ち込まれては無事で済むとは思えなかった。

83、守れなかった思い

83、守れなかった思い

「エレシュキガル様っ！」

新月は自分の不覚を呪った。

・・なぜ私が先頭を歩かなかった。いや、違う。私はエレシュキガル様に庇われたのだ。あの時、急にエレシュキガル様が前に出られた。何かに気が付いたのだ。私など守る価値のない者の為にご自分が罠に嵌められた・・

新月の前に立ち塞がるデビルが触手を伸ばして攻撃してくる。

・・まだ、間に合う。エレシュキガル様ならまだ再生出来る筈だ。早くこいつを倒してエレシュキガル様を救出する・・

エレシュキガルは檻に閉じ込められたままドローンからの銃撃を受け続けている。いくら高速の動きが出来るエレシュキガルでも全ての弾丸を避ける事は不可能だ。それに、ドローンから撃ち出されている弾丸は当然ヴァギナ対策用の弾丸だ。この弾丸で撃たれては再生も叶わない。ドローンの数はどんどん増えてくる。文月はここで厄介な敵の一人エレシュキガルを始末するつもりのようだった。

「貴様っ！邪魔だっ！どけぇぇっ！」

新月はデビルの触手で腕を脚を貫かれながら微動だにせず銃を構えてデビルの急所に狙いをつける。

ドウッ、ドウッ、ドウッ、ドウッ！！

新月が撃った弾は正確にデビルを貫いていた。デビルの体が崩れ落ちるが、ダンッとデビルは踏みとどまり倒れる事を拒否する。そして、新月に更なる攻撃を仕掛けてくる。

ビシュッ、ビシュッ、ビシュッ

ドウッ、ドウッ、ドウッ、ドウッ

新月も体を貫かれながら銃を撃つ事を止めない。しかし、新月の体も再生が間に合わず右腕が引き千切られ照準がずれてしまう。そこへ、新たなデビルが参戦してきた。新月は二体のデビルを相手に窮地に追い込まれていた。左腕も引き千切られ銃を持ったまま地面に落ちて転がる。両足も太ももを貫かれ動きも封じられた。頭も眼も胸も貫かれてしまい、新月はこのままデビルに倒されてしまうかと思われた。

「ふざけるなぁぁ、私は何の為にここにいるっ！」

新月は自分に活を入れ触手を伸ばしデビルに攻撃を仕掛けるが、手負いの新月よりデビルの触手の方が速いうえに相手は二体いる。デビル対策用の銃を使用して初めて互角に戦える相手に、銃を失い、さらに二体に攻撃されては新月が勝てる可能性は僅かでもなかった。

・・申し訳ありません、パズス様。エレシュキガル様をお守りする

事が出来ませんでした。十六夜、すまん、後は頼んだ・・

その時、デビルの注意が新月に向いている隙に空中でバアルがドローンを破壊していた。空中でのバアルの動きは電光石火。次々とドローンを破壊していくが、自分も銃弾を浴び傷を負っていく。しかし、致命の一撃を避けながら懸命にドローンを破壊していた。

地上では二体のデビルが新月に向かって同時に攻撃を繰り出す。その攻撃を受けてしまえば自分の体は再生する事も叶わず永遠に消滅するだろう。新月は迫ってくるデビルの攻撃を残った眼を大きく開いて見つめた。

・・これが死ぬという事か。恐怖はないが残念だな。でも惨神の皆様にお仕え出来て、私にも多少価値があったと思いたい。十六夜、私はお前が羨ましかったが、こうして最後に私を呼んでくれて感謝する・・

新月は数秒にも満たない自分の残った時間を噛み締める。そして、音速を超えた強烈な一撃が放たれ周囲にソニックブームを巻き起こった。その一撃の衝撃波で空中のドローンは全て破壊され、飛んでいたバアルも地面に叩きつけられる。そして、新月も地面に吹き飛ばされていた。二体のデビルは、その一撃を放った者を振り返る。そこには檻を破り外に出た無傷のエレシュキガルが立っていた。デビルはエレシュキガルに飛びかかっていくが、エレシュキガルはそれより速く間合いを詰めデビルに致命の一撃を叩き込む。エレシュキガルの拳がデビルの胸を貫いていた。しかし、それだけではエレシュキガルの攻撃は終わらない。再生速度が早いデビルは、よろけながらも胸の穴が塞がってきていたが、次のエレシュキガルの一撃がデビルの頭を吹き飛ばす。デビルの頭は肉片となり飛び散った。あのデビルがエレシュキガルの攻撃を受け、その体を破壊されていく。１０発、２０発、４０発、８０発、１６０発。悪鬼の形相のエ

レシュキガルの凄まじい攻撃を叩き込まれデビルは塵となって消滅していた。

・・凄い、さすがエレシュキガル様・・

地面に倒れた新月は、デビルを葬ったエレシュキガルを改めて尊敬の眼差しで見ていた。

・・それに、あのヴァギナ対策用の弾丸をあんなに打ち込まれてもご無事でいらっしゃったなんて、私ごときがお助けしようなんておこがましかったようですね。でも、本当にエレシュキガル様がご無事で良かったです・・

思わず涙を流している新月に近づきエレシュキガルは自分の腕を切り体液を新月に垂らしていく。エレシュキガルの体液を浴びた新月の再生速度が早まった。エレシュキガルはバアルにも体液を浴びせると、二人を立たせ頭を下げる。

「お前たち二人のおかげで窮地を切り抜けられた。礼を言う」

エレシュキガルに頭を下げられ、新月もバアルも恐縮していた。

「私がエレシュキガル様の盾になるのは当然の事、お礼などもったいなく存じます」

バアルがエレシュキガル以上に頭を低く下げる隣で新月も頭を下げていた。

「申し訳ありません。私ごときを助けて頂いて言葉もありません」

「惨神である私が仲間であるお前たちを助けるのは当然の責務だろう。頭を下げる必要などない」

エレシュキガルは後方のパズスたちを見ると、パズスたちもデビルを撃退したところであった。

・・パズスの奴もデビルを倒せるようになったか、さすが惨神の一人だ　奴がいてくれる事は心強いが、何故ウテルスを温存するのかわからんな・・

エレシュキガルにしても、パズスがウテルスを待機させた真意を測りかねていた。

「エレシュキガル様、申し訳ありません。私が先頭を歩くべきでしたのに……」

新月はさらに頭を下げるがエレシュキガルはそれを手で制し、何か嫌な気配を感じたのでなと軽く言う。

「でもさすがエレシュキガル様です。あの凄まじい銃撃にも無傷でいらしたなんて……」

「いや、それは違うぞ新月。さっきも言ったが私が無事でいられたのはお前とバアルのおかげだ。お前たちのおかげでデビルを倒す事が出来たのは間違いない」

「それでも、あの銃撃を防ぎきったわけですから」

「はは、それも私の力ではない。さすがに私でもあの数の銃弾を全て避けるのは不可能だ。檻の中に入れられていたしな。ここに突入

する前、私に命を大切にしてくれと佳乃の奴がこれを渡してきた」

エレシュキガルは小さな箱を地面に投げると、人が入れる大きさのリストレイントボックスが展開された。

「改良型のリストレイントボックスだ。デビルの攻撃にも耐える代物だ。パズスと委員会が共同で開発したらしいが、無理矢理持たせてきた。まあ、そのおかげでこの中に入って無傷で済んだがな」

エレシュキガルが自嘲気味に笑ったところへパズスたちもやって来る。

「どうする？　この先も何か仕掛けがあるかも知れないぞ」

「敵の諜報技術も侮れないな。不意を突こうという考えが甘かったが、こうなったら第一に豪徳寺文月を発見して倒す。デビルはなるべく回避して体力を温存してくれ」

パズスが言い終わった瞬間、笑い声が響いた。

「私を倒す？面白い事を言うヴァギナですね。そんな事が出来るか試してみるとよろしいでしょう」

全員が声の主に目を向けると、そこには豪徳寺文月本人が立っていた。

８４、ウテルスの最後

８４、ウテルスの最後

豪徳寺文月はまるで見下した様に高らかに笑っていた。文月の両側にはデビルが控えている。そのデビルは明らかに普通のデビルとは異なる遥かに格上の気配を漂わせていた。

「くくく、お前たちの最後だ」

文月が、サッと右腕を上げるとデビルの軍団が現れる。文月の命令で全ての支部から呼び戻されたデビルだ。その数は、なんと千体以上。多く見積もって十数体と想定していたパズスたちの思惑は大きく外れた。デビルは倒せる。しかし、この数はあまりにも多すぎた。

「どういう事だ、何故この短期間でこれほど数が増えるのだ。答えろっ豪徳寺文月っ！」

「くくく、お前たちは勘違いしているようだな。一人の生け贄でデビルが１体。違うな。デビルは人間の心の闇で誕生する。闇に染まった人間がいれば、その数だけデビルは誕生するのですよ。お分かり？さあ、絶望の中、死んでいきなさい」

文月の号令で千体のデビルが一斉に襲いかかってくる。

「うおぉぉぉーーーっ！！」

エレシュキガルが雄叫びを上げデビルを迎え撃つ。

ドウッ、ドウッ、ドウッ、ドウッ、ドウッ

新月も銃を乱射し、数体のデビルの動きが止まるが焼け石に水であった。巨大な津波のようなデビルの軍団が襲いかかってくる。エレシュキガルがパズスが新月が十六夜がバアルが今までにない決死の動きでデビルを倒していく。しかし、あまりの戦力差に徐々に追い詰められ、周囲を囲まれもはや風前の灯となっていた。

「文月様、申し上げたき事が……」

「ふむ、〝鷹の目〟か……」

文月は耳に装着したイヤホンマイクで何事か話していた。そして、ニヤリと笑う。

「うおぉぉぉーーーっ！！！！」

エレシュキガルは音速を超える凄まじい攻撃でデビルを倒し続けている。その数はすでに１０体以上だ。しかし、休む間もなく襲いかかってくるデビルにさすがに息が切れてくる。

「十六夜、頼むっ！」

「はい、パズス様」

パズスがデビルを触手で捕らえ十六夜に向かって投げる。十六夜はリストレイントボックスを展開してデビルを閉じ込めた。その瞬間、

リストレイントボックスの中で数百のレーザーが照射されデビルを貫いていく。リストレイントボックスはデビルのパワーで破壊されない強度で作成してある為、逃げる事は出来ない。デビルは再生するが際限なく照射されるレーザーでヘイフリック限界を突破してしまい消滅する。一対一の戦いであれば強力無比な装置であるが、このデビルの数ではとても有効な武器であるとは云えなかった。それは、パズスと十六夜も想定済だったが、ここまでデビルの数が多いとは全くの想定外だった。彼らは多少の負傷は覚悟のうえで目の前のデビルだけを倒しつつ文月に近付き、文月を倒す。その為のコンビネーションを繰り返してきていた。このデビルの壁を抜ければ文月に手が届く。パズスと十六夜は愚直に繰り返してきたコンビネーションで文月に迫ろうとするが、デビルの壁はあまりにも厚かった。バアルは、空から文月を狙われるのを防ぐ為、真っ先に集中的にデビルに狙われ、すでにボロボロの状態になっていた。
新月も、すでに弾丸を撃ち尽くしてしまい、触手でデビルを攻撃しているが、それは儚い抵抗でしかなかった。
もう、エレシュキガルたちは文月のデビル軍団の前に呑み込まれ消滅していく以外道はなかった。

・・ここで終わりか。だが最後まで抵抗してやる・・

全員が頭の中で決意する。

・・窮鼠猫を噛むという諺がありますが、噛まれたから何だというのです。噛まれたからといって鼠が猫から助かるわけがない。鼠は鼠、食い殺されて終わりですよ・・

文月は爆笑していたが、その時頭の中に声が響く。

「審判の時間です。ジャッジメント！！」

ウテルスの声が響き渡り、辺りを黄金色の光が包む。しかし、文月は、笑みを浮かべていた。それはまるで、全て自分の思い通りに進んでいるかのような会心の笑みだった。

しばらくの後、黄金色の光が薄まりウテルスが空中から降りてくる。地面に足を着いたウテルスはグラッとふらつくがエレシュキガルがだき抱えるように支えていた。あれだけいたデビルは全て消え去り、豪徳寺文月だけがポツンと残っていた。

「なるほど、ウテルスを温存したのはこの為か。デビルの数がとてつもなく多いと読んでいたのだな、さすがパズスだ」

エレシュキガルはパズスを称賛するが、パズスはいや違うとウテルスに目を向ける。ウテルスはエレシュキガルに支えられながらパズスに向かって右手を握り突き出した。パズスも拳を出し、ウテルスの拳とコツンとぶつける。

「芳樹くん、早く豪徳寺文月を」

「ああ、分かってる。十六夜、行くぞっ！これで終わりだっ！」

パズスと十六夜が文月に向かって飛び出す。しかし、文月は動じた様子もなく腕を組んだまま悠々と立っていた。

「待てっ十六夜、何かおかしい」

パズスと十六夜は足を止め銃を構える。危険な気配を察知し、近付かずにここから銃で手足を撃ち抜き拘束する。普通の人間である文月には銃から逃げる術はない。

ドウッ、ドウッ、ドウッ、ドウッ、ドウッ

パズスと十六夜は文月に向けて発砲する。文月は二人の銃弾を浴びて、もう動く事は出来なくなったと思われたが、なんと、先程まで文月の両脇で控えていた進化型デビルが文月の前に立ち銃弾を防いでいた。

「どういう事だ。ウテルスの〝審判〟で消滅したのではないのか」

「私も随分甘くみられたものですね。ウテルスが現れる事は想定済。ウテルスが〝審判〟を発動する前にデビルの一部を〝審判〟の効果が及ばないエリアまで退避させておいたのですよ」

文月の周りに戻ってきたデビルが百体現れた。文月の前にいる二体だけであれば何とかなったかも知れないが、百体。しかも、ウテルスはもう体力が回復するまで〝審判〟は使えない。文月はこれで勝負がついたと確信した。文月は〝鷹の目〟からの報告でミノタウロスを倒したウテルスがこちらに向かっていると知っていた。この数のデビルであればウテルスは間違いなく〝審判〟を発動するだろう。〝審判〟を発動した後のウテルスは体力を使い果たしもう怖くない。その為にデビルを犠牲にする事に文月は躊躇いの一つもなかった。

・・ここまで追い詰めておきながら万事休すか・・

あと一歩の所まで文月を追い詰めながら、その最後の一歩がパズスにはとてつもなく遠いものに感じられた。

「芳樹くんっ！」

そのパズスをウテルスが呼んでいた。パズスたちはデビルの攻撃に

備えてウテルスを囲むようにして構えながらウテルスの話を聞いていた。

「私にはまだ豪徳寺文月の知らない力がある」

「知らない力？でも〝審判〟を発動してそんな状態で使えるのか？」

パズスには、ふらふらの状態のウテルスが使える技などあるのか半信半疑であったし、あったとしてもこの状態でデビルと文月を倒せる威力があるのか心配だった。

「〝エターナルリバース〟、この力を使って豪徳寺文月を倒します」

ウテルスは自信たっぷりに言うが、この追い込まれた状況でそのウテルスの自信が理解出来なかった。

「そんなに威力のある技なのか？その体力で使えるのか？」

「ううん、威力とかそういう技じゃない。それに体力もいらない。私が死ねばいいんだから……」

全員が一瞬硬直する。

「ちょっと待てウテルス。玉砕するという事か？それなら私も付き合うぞ、お前一人では逝かせない」

「ありがとう、エレシュキガル。でも違うよ。これは私が死ぬ事で発動する力。私は死ぬと運命が巻き戻って、また元に戻るの」

「それじゃウテルス、僕があの時感じた違和感は本物だったのか」

「そうだよ。私は芳樹くんに本当に殺されたんだよ。何回も……」

パズスは絶句していた。

「私がここで死んで運命が巻き戻って、またこの戦いが始まった時、私には豪徳寺文月が何処に、何時、姿を現れるのかすでに分かっている。だから、真っ先に豪徳寺文月を狙って倒せる　豪徳寺文月は理由が分からず死んでいくでしょうね　」

ウテルスはニヤリと残酷な笑みを浮かべる。全員がごくりと唾を呑んでいた。

「そんな力もあるとは、お前が本当に恐ろしいぞウテルス。これではお前に勝てる者など存在しない。お前が敵でなくて良かったと心から思う」

「なんだよ、エレシュキガル。そんなに怖がらないでよ。お友達でしょ」

ウテルスはエレシュキガルに抱きついていた。

「そうだな、友達だ。私に初めて出来た友達だ」

エレシュキガルもウテルスを強く抱きしめる。そして、二人は離れるとウテルスは一人、文月に向かって歩き出す。デビルは警戒し文月を守るように構えていた。ウテルスは堂々と一歩一歩文月に近付いていく。

「あっ！」

その時、ウテルスが小さな声を上げた。そして、歩みを止めたウテルスの股間に赤い染みが出来ていく。それを見たパズスが飛び出していた。

「エレシュキガルッ！！ウテルスを守れっ！！」

パズスの叫びが響いていた。

８５、大切なもの

８５、大切なもの

ウテルスは歩みを止め下腹部を押さえていた。ウテルスの股間には赤い染みが出来、その染みが拡がっていく。そして、ウテルスはガクッと膝をついてうずくまってしまった。そこへパズスとエレシュキガルが駆けつけ、ウテルスに手を貸し元の位置まで戻り再びウテルスを囲むようにデビルに備えていた。ウテルスは唇を震わせていたが、絞り出すように全員の顔を見ながら声を出した。

「ごめんなさい。もう私、足手まといにしかならない」

「よせ、ウテルス。お前が謝る事じゃない」

ただ一人事情を知っているようなパズスがウテルスの顔を見つめながら庇うように言う。

「そうなんだ。芳樹くん、分かっていたんだ。だから私を戦闘から外したんだね。こんな時にこんな事になっちゃってごめんなさい」

ウテルスはまた謝っていた。

「バルバドスがすくすくと成長していると言っていた。謝る事じゃない。良い事じゃないか」

二人の会話を他の者はわけも分からず聞いていた。

「おい、パズス。何を言っているのか、分からん。説明して貰おうか」

パズスは、もう隠しておくことは出来ないと覚悟を決めた。

「みんなも落ち着いて聞いてくれ。ウテルスは、もうウテルスじゃないんだ。別の言い方をすれば、ウテルスの力を失ってしまった。ウテルスはもう普通の小学生、姫川菜緒なんだよ」

「まだ分からん。どうしてウテルスの力をいきなり失うんだ。何かやってはいけない禁忌があるのか。人間のウテルスが、汚らわしいヴァギナの私とハグしたからか。それなら、私の責任だ」

「違うよ、エレシュキガル。違う、違う。エレシュキガルは何も悪くない。私に生理がきたからだよ」

「生理？人間の女の二次成長というやつか」

「そうだね。僕が思うにはウテルスのパワーというのは、人間の女が生命を生み出す力なんだと思う。それが、生理が始まる事で本来の生命を産みだす方に使われるようになるからウテルスのパワーが消えたんだよ」

「この局面でウテルス様の力がなくなってしまったのですか」

十六夜が絶望して思わず失言してしまう。

「十六夜さん、ごめんなさい」

「いや、何度も言うが謝る必要はない。すくすくと成長しているんだ。喜ばしい事だろう。十六夜も要らぬ事を言うな」

パズスの怒気の籠った言葉で十六夜は自分の失言に気付き項垂れてしまう。

「はい、申し訳ございません、パズス様。ウテルス様、失言でした。お忘れになって下さい」

十六夜がウテルスに深く頭を下げ、新月も自分も同罪だとばかりに頭を下げていた。

「すまんな、ウテルス。この馬鹿どもの発言忘れてやってくれ。後できっちりお仕置きしてやるからな」

「うっ、は、はい。エレシュキガル様、遠慮なくお仕置きお願いします」

「しかし、豪徳寺文月にウテルスの力がなくなった事を知られる訳にはいかない。ここは悔しいがウテルスを守りながら撤退しよう」

「そんな、やっと敵の居場所見つけてここまできたのに。また、何処かに隠れられちゃうよ。それにデビルの数もまた増えちゃう」

「でも正直、ウテルスの力を欠いて、あのデビルの群れを突破して豪徳寺文月を倒せるとは思えない。どうだ、エレシュキガル」

「ふん、私は一人でもあの傲慢な女をぶち殺してやる」

「あーっ、君に聞いたのがバカだったよ。そんな事をしたら君はもちろん、このウテルスも殺されるぞ」

「いいよ、私なんか殺されても。留美子ちゃんも量子ちゃんも律子ちゃんも殺された。私だけ生き残ってるのは悪いよ。私なんか気にしないで思うように戦ってね、エレシュキガル。もう私、ウテルスじゃないから守る価値もないよ」

「違うだろ、菜緒。僕が気にするんだよ。僕が嫌なんだよ。幼馴染みでブスで変態の菜緒がいなくなるのが嫌なんだ。僕は何と言われようと僕の大切なものを守る」

「私もだ、ウテルス。私もお前がウテルスであろうとなかろうと関係ない。初めて出来た友達は失う訳にはいかない。前に言っただろう、お前に何かあったら生きてはいられないと……」

「だから撤退する。だからといって諦めたわけではない。こちらも体勢を立て直して豪徳寺文月は必ず倒す」

パズスたちは文月に気付かれないように撤退の準備を始めていた。菜緒はそんなパズスたちを見て胸が締め付けられる思いだった。

・・みんな、本当はここでけりをつけたいんだよ。それなのに私の為に……・・

菜緒はデビルに守られている豪徳寺文月を見る。ここでこの女を倒さなかったら、また犠牲になる女の子がたくさん出てくる。菜緒は唇を噛み締めた。その時、頭の中に声が聞こえる。

・・ウテルス様、聞こえますか。ウテルス様・・

菜緒は辺りを見回したが、声の主は見当たらない。

・・私は、二階堂……二階堂遥(はるか)……・・

また、声が聞こえた。菜緒は試しに心の中で思ってみた。

・・私はウテルスだった、姫川菜緒といいます・・

菜緒はしばらく自分の頭の中に聞こえてくる声と、頭の中で会話していた。

「みんな、聞いてっ」

菜緒の突然の大声に全員が驚いたように顔を上げる。

「ウテルスは一人じゃない。私には分かっていたけど確信がなかったの。だから今まで言えなかった。けど、今確信が持てた。ウテルスは必ずここに来る。だから、ここで決着をつけようよ」

「ちょっと待て、ウテルス。ウテルスは一人じゃない？だったら、どうして今まで出て来なかったんだよ」

「ごめんなさい、言い方が悪かったかな。ウテルスは私一人の力じゃない。私の力がなくなったから別のウテルスが生まれたと言えばいい？」

「つまり他の人間がウテルスになった。そういう事か」

「その通りだよ、エレシュキガル。そのウテルスがここに向かって

る。だから、ここで豪徳寺文月を足止めしていれば、倒す事が出来るんだよ」

「その新しいウテルスさんもお強いのですか？」

十六夜がおずおずと口を挟む。

「もちろん、私と同じウテルスだよ。私の使える技は全部使えるよ。さっきレクチャーしたから大丈夫」

「さ、さっきですか？」

「うん、さっき」

「十六夜、あまり突っ込むな。こいつはこういう奴だ」

そう言いながらエレシュキガルは菜緒の頭をグリグリと乱暴に撫でる。

「ちょっとぉ、エレシュキガル。髪の毛が乱れるよ」

「髪の毛が乱れる？ぶはは、なるほど成長して早速色気づいてきたわけか」

エレシュキガルに揶揄（からか）われ菜緒はぷぅーっと膨れていた。先刻までの暗く重い雰囲気が嘘のようにエレシュキガルが爆笑し、周囲の雰囲気も明るくなっていた。

「よし、それじゃあ、新ウテルスが到着するまで豪徳寺文月を逃がさないように戦っていくぞ。十六夜、お前はウテルスを、菜緒を守

ってくれ」

「はい、パズス様。私の命に代えましても」

十六夜は恭しくパズスに頭を下げる。それは彼女の決意。惨神であるパズスの命令を何があっても守り抜くという固い決意の表れだった。

「ウテルス、念の為これを渡しておく、佳乃から貰ったリストレイントボックスだ。危ないと思ったらこれに入れ」

「でも、気を付けろ菜緒。これに入れば豪徳寺文月は、体力を回復して“審判“を使う気だと思って集中して攻撃してくるだろうから、使うタイミングを間違えないようにな」

「芳樹くん、私だってそんなに馬鹿じゃないよ」

菜緒はふくれるが、パズスとエレシュキガルは心配そうに顔を見合わせた。

「バアル、お前は伊東に連絡を頼む。トゥールハンマーを操作する以外の人間を援軍として出撃するよう伝えてくれ。奇襲は失敗した。こうなれば総力戦だ。ここを最後の戦いの地にするぞ」

パズスの指示でバアルは密かに戦線を離脱して、待機している委員会のバスへ向かう。だが、それを見逃す程“鷹の目“は甘くはなかった。

★　★　★　★

「行くぞっ、豪徳寺文月を絶対に逃がすな」

エレシュキガルが一直線に文月に向かうが、その前に進化型デビルが立ち塞がる。

「どけぃっ、下郎っ！」

エレシュキガルは音速を超える拳を進化型デビルに叩き込む。

キィィーーン！！

まるで空間が裂けたかのような高い音が響いたと同時にソニックブームが周囲に広がる。その衝撃で周囲のデビルは吹き飛ぶが、進化型デビルはエレシュキガルの拳をがっしりと受け止めていた。

「うおぉぉぉーーーーーっ！！！」

雄叫びと共にエレシュキガルは超音速の拳を連続でデビルに打ち込む。進化型とはいえ、このエレシュキガルの凄まじい攻撃にデビルは防戦一方になっていた。

「うおぉぉぉーーーーーっ！！！！！」

エレシュキガルの攻撃は止まらない。デビルの腕はエレシュキガルの攻撃で消滅しては再生するを繰り返していた。

・・くそっ、こいつは普通のデビルとは違う。まだヘイフリック限界を越えないか。リツコが言っていたな、生物によって”テロメア

〝の長さが違うと。〝テロメア〝は細胞が分裂する度に短くなっていく。分裂を繰り返して〝テロメア〝がどんどん短くなっていき、やがて限界を迎える。だから、〝テロメア〝が長い程、分裂回数は増える。こいつは〝テロメア〝が随分長いようだ。だが必ず限界はくる・・

エレシュキガルは進化型デビルを相手に一歩も退かず、攻撃を続けていた。

８６、忍び寄る惨劇

８６、忍び寄る惨劇

エレシュキガルは超音速の拳を進化型デビルに打ち込み続ける。それを受けている進化型デビルの腕は消滅と再生を繰り返しているが、未だに消滅する気配はない。

・・くそっ、いったいどれだけ打ち込めば限界を迎えるんだ・・

エレシュキガル焦ってきていた。自分がこの一体のデビルで足止めされている事で、他の者が大量のデビルと戦うはめになっている。もう、こいつは無視して他のデビルを数多く倒した方が良いのか。しかし、このデビルが他の者に向かっていったらウテルスがいない現状で勝てる者はいないだろう。パズスでさえ、このデビルには勝てるという保証はなかった。その時、エレシュキガルはドキッとした。視界の端に映った文月の横に控えていたもう一体の進化型デビルの姿がない。文月を守る為に動かずにいると思ったが、その姿が消えていた。

・・いけない、何処に行ったのだ・・

エレシュキガルは、その所在を見つけだそうとするが、このデビルを相手にしながら、もう一体のデビルを探す行為は困難を極めていた。

・・動かないと思っていたデビルが行動を開始している。何を狙っている豪徳寺文月・・

エレシュキガルは胸騒ぎがして止まらなかった。

・・嫌な予感がする。早くこいつをなんとかしなければ・・

ここでエレシュキガルは気付いた。

・・こいつが攻撃してこないのは、出来ないのではない。防御に徹して私を足止めする為か・・

エレシュキガルは唇を噛んだ。敵の策略に乗ってしまった自分の迂闊さを悔いていた。

★　★　★　★

新月はようやくデビルを倒すコツを掴んでいた。

ドウッ、ドウッ、ドウッ

デビルの頭に3発。これでデビルを行動不能に出来る。腕や足では四肢全てを吹き飛ばさないと行動不能に追い込めない為、弾丸が最低4発必要になる。しかも常に動いている手足では外す可能性も高い。外してしまえば更に弾丸が必要になる。それに比べて、動きの少ない頭部なら3発で完全に破壊出来るので弾丸の節約になる。新月は正確に狙っていくが、敵の攻撃を避けながらの銃撃だ、どうしてもミスはでてしまう。それでも、新月は何体ものデビルを行動不

能にしていた。

「ソニックミサイル」

パズスも囲まれてしまわないように注意しながら確実に一体一体デビルを倒していた。

・・無理は禁物だ。ここで耐えていれば新しいウテルスが来る。それまではデビルの注意を僕に集中させる。菜緒の方にはいかせない。その為には注意を引かなければならない。ふふ、豪徳寺文月、度肝を抜かれろ・・

パズスはデビルが固まっている場所を素早く指定して送信機のスイッチを押す。その瞬間、遥か上空の衛星から一本の熱線が照射された。それは固まっているデビルを直撃する。それはまさに神の雷と呼ぶに相応しい凄まじい一撃だった。以前は空気の壁でトォールハンマーを防いでいたデビルだったが、この改良型トォールハンマーを浴びたデビルは跡形もなく蒸発していた。

・・衛星武器か。人類もなかなかどうしてやるではないか。まったく大層な兵器を使ってくる。だがな、デビルを蒸発させる程の熱量を出すという事は、連発は出来まい。必ずクーリングタイムが必要になってくる。それは、致命的だな・・

文月は冷静に判断して連発出来ないトォールハンマーは恐れるに足らずと考えた。文月にとって驚異と感じるのは、やはり別格の力を持つウテルスだった。〝審判〟を発動して体力の失くなっている今がウテルスを捕らえる絶好のチャンスだと考えている。ウテルスを捕えて痛めつけ続ける。文月はその場面を想像しぞくぞくする程興奮し股間を濡らしていた。

・・ふはは、我慢出来ないわ・・

文月はあろうことかミニスカートを腰まで捲り上げると、股間に手を伸ばし自慰を始めていた。

「あっ、あっ、あっ、あっ」

声も出している文月は、巨大なバイブを手に取ると自分の膣に突き刺した。そして、根本まで押し込みバイブのスイッチを入れる。

「あひっ、あひっ、あひっ、あひっ」

もう止まらなくなった文月は、長さ３０センチもある巨大なアナルバイブも肛門に挿入しスイッチを入れた。

「あはっ、あはっ、あはっ、あはっ」

戦場で一人自慰に耽り声を上げる文月の姿は異様だったが、そのあまりの異様さにエレシュキガルもパズスも背筋が凍りついていた。そして、自慰に耽りながら文月はウテルスを捕える為の手はすでに打ってあった。百体のデビルに進化型デビルを紛れさせウテルス確保に向かわせていたのだ。この乱戦では、どのデビルが進化型なのか区別するのは至難の技だろう。気付いた時にはウテルスはもう自分の手の中に落ちている。文月は興奮でイキそうなのを必死にこらえていた。

・・不味いぞ。奴は何処に行った・・

エレシュキガルは、早く文月の守りを離れ行動を開始したデビルを

探して足止めしなければと考えるが、目の前のもう一体の進化型デビルに動きを封じられていた。

★　★　★　★

その頃、菜緒はバアルが連絡の為、撤退していった方向にデビルが数体向かって行くのを見た。

・・いけない、気付かれたの・・

上級ヴァギナとはいえデビル数体に襲われてはひとたまりもないだろう。このままではバアルはデビルにやられてしまう。しかし、自分にはもうウテルスの力はない。菜緒は自分に近付いてくるデビルを必死に撃退している十六夜に声をかける。

「十六夜さんっ、バアルさんが気付かれたっ、デビルが追っていったから助けてあげてっ！」

「しかし、ウテルス様をお守りするようにとのパズス様の御命令です」

「お願い、十六夜さん。十六夜さんの銃ならデビルを倒せる。もう誰にも死んでほしくないっ」

「でも、ウテルス様に万が一があったら……」

「私はエレシュキガルに貰ったボックスに入るから、しばらくは大丈夫。バアルさんを助けて、すぐに戻ってきて下さい」

十六夜は、菜緒の必死のお願いに不承不承頷いた。

「分かりました。それでは先にボックスを展開して下さい。それを見届けてからバアルを助けに行きます」

菜緒も頷くとリストレイントボックスを展開して中に入る。十六夜はそれを見届けてバアルのもとへ駆け出した。十六夜がいなくなり、それまで十六夜に抑えられていたデビルが菜緒に向かってくる。数体のデビルがボックスに向かって攻撃を繰り出す。菜緒はボックスの中で震えていた。もうウテルスの力がない菜緒は、このボックスが破壊されたら最後だろう。なす術なく性器を集中的に狙われて残酷にバラバラにされていく。

・・デビルの攻撃に耐えられるって言ってたけど、こんなにたくさんのデビルの攻撃にも耐えられるの・・

菜緒は不安で仕方がなかった。改めて一般の人が感じる恐怖を思いしっていた。しかし、ボックスは菜緒の不安を他所にデビルの攻撃に耐えていた。デビルがいくら攻撃を加えようが、何体で襲いかかろうがびくともしなかった。

・・凄い。さすが芳樹くんと委員会が共同で開発した防御用のボックスだよ。これを、人類全員が携帯出来るようになれば、少しは安心して暮らせるようになるね・・

菜緒はボックスの中でようやく安堵していた。これで、十六夜が戻って来てくれれば、新しいウテルスが到着するまで安心していられる気がした。菜緒のその気持ちは間違いではなかったが、一つだけ間違っていた。デビルの中に未知数の力を持つ進化型デビルがいる

という事実を見逃していた。頑強な堤防もたった一つの小さな蟻の穴から決壊する事が多々ある。その小さな穴が穿たれた。菜緒の運命は、そこから決壊していく。それは、無慈悲なほど残酷に……。

87、逃れられぬ運命

87、逃れられぬ運命

エレシュキガルが足止めされ、パズスと新月もデビルに囲まれ動きがとれずにいた。そして、菜緒を守っていた十六夜が離脱した事で、飴に群がる蟻のようにデビルの群れが菜緒に襲いかかっていた。菜緒はリストレイントボックスの中で一度は安堵したものの、このデビルの数に恐怖を感じずにはいられなかった。

・・大丈夫、この中に居れば安全だよ。すぐに十六夜さんが戻ってきてくれるし、ウテルスの遥ちゃんだって来てくれる・・

菜緒は自分に言い聞かせ震えながらその恐怖に耐えていた。

その頃、十六夜はバアルを追っていったデビルに追い付き戦っていた。

ドウッ、ドウッ、ドウッ、ドウッ

委員会が開発した〝対デビル用新型銃〟普通の人間ではその反動で標的に当てる事は不可能であるがヴァギナである十六夜は、その拳銃を使いこなしデビルを倒していく。しかし、十六夜であっても高速で動くデビルに命中させるのは至難の技で、どうしても外して無駄な弾を使ってしまう。

・・くっ、こいつら一発では倒れないと分かっている動きだ。せめて、私がもう一人いれば。新月を残していなければ、こんな奴ら・・

「バアル、早く行けっ。私がなんとか食い止める」

十六夜の叫びでバアルは走り出す。デビルの攻撃でバアルの翼はもぎ取られ、再生する間も無く走っていくしかなかったのである。そのバアルをデビルが追っていこうとするが十六夜が拳銃と触手で足止めする。デビルは厄介な銃を持つ十六夜に集中して攻撃を仕掛けてきた。

ドウッ、ドウッ、ドウッ、ドウッ、ドウッ

数体のデビルの手足を吹き飛ばすが、それだけではデビルは止まらない。この対デビル用の銃で撃たれれば、デビルも再生する事は出来ないが、頭を吹き飛ばさない限りデビルは活動を止める事はない。

ドウッ、ドウッ、カシッ、カシッ、カシッ

・・くそっ、弾切れか・・

デビル用としては強力な武器であるが、弾が無くなってしまえば何の意味もない。十六夜は襲ってくるデビルに触手で応戦するが、明らかに火力が落ちデビルの触手で身体中を貫かれ、もう再生が間に合わなくなっていた。このままではいずれ消滅してしまう。自分が消滅してしまえば、今エレシュキガルたちと共に戦っている新月も消滅する。そうなれば、もう自分達の敗北は確定してしまう。十六夜は必死に応戦するが、もう自分の体から力が抜けていくのが分かった。そして、気が付いた時には目の前にデビルの顔があり、その口が耳まで裂け十六夜の頭を飲み込もうとしていた。

・・ああ、申し訳ございません。パズス様、エレシュキガル様・・

逃れる事が出来ないと悟った十六夜が覚悟を決めたその時、目の前のデビルの頭がトマトのように潰れ吹き飛んでいた。デビルは頭を飛ばされ崩れ落ちる。倒れたデビルを見た他のデビルが動きを止めた瞬間。

バスッ、バスッ、バスッ、バスッ、バスッ、バスッ！！

次々にデビルの頭が吹き飛んでいき、十六夜の周りにいたデビルは全て倒れていた。

・・狙撃？ヴァギナではこんな事が出来る者はいない。いったい誰が・・

十六夜が肩で息をして自分の体を再生していると、十六夜さーんと呼ぶ声が聞こえた。十六夜が顔を上げると翼を再生したバアルが空中から佳乃を連れて降りてきた。佳乃の手には狙撃銃マクミランが握られていた。

「佳乃さん、だったのですね。凄い腕前ですね。感服致しました」

「いや、ほら私は普通の人間とは違いますから。それより、バアルさんに聞きましたがウテルス様が力を失ったって」

「そうです。パズス様のいうには人間の二次成長が関係してると言っていました。とにかく今ウテルス様は普通の人間です。私は早く戻らねば。佳乃さんは委員会の人たちと後から来て下さい」

十六夜はすぐに菜緒の元に戻らねばと駆け出すが、佳乃も後をついて来る。

「佳乃さんは危険ですので委員会の方たちと来て下さい。今、あそこはデビルの群れで一杯です」

「でも、ウテルス様が危険ではないですか。今は普通の女の子なんですよね 」

「確かにそうですが、ウテルス様はボックスに入っておられます。それに私が必ずお守りします」

「ですが、あのボックスも絶対無敵という訳ではありませんし、十六夜さん一人では先程のように多数に囲まれてしまっては不覚をとる可能性もあります」

「人間があの場所に来たら、たぶん死にますよ。私たちのように再生も出来ませんから」

「どうせ私は長くは生きられない身です。ウテルス様はまだ子供、これから長い人生があります。私の命とどちらが大切か。それは言わずもがなでしょう。ここが私の命を賭ける場所です。私はウテルス様を助けに行きます」

「私は人間の事はよく分からないし、惨神のエレシュキガル様とパズス様以外に興味はありません。けれど佳乃さん、今、あなたの感情をダイレクトに感じる事が出来ました。これが人間なのですね。分かりました、行きましょう佳乃さん。バアル、あなたは後から来る委員会の方の道案内を頼みます」

最後、十六夜は叫ぶように言うと駆け出した。佳乃もそれに続いて走り出す。普通の人間で十六夜についていく事はかなわないが、リツコによって能力がアップしている佳乃は、十六夜のスピードに遅れる事なく走っていった。

★　★　★　★

菜緒にとって1分が1時間に感じる程、時間が経つのが遅く感じた。

・・十六夜さん、早く来て。遥ちゃんもお願い・・

デビルの攻撃は休む事なく続いている。今のところボックスはデビルの攻撃に耐えているが、このボックスの耐久力がどの程度あるのか、それは未知数だ。これほどの長時間の攻撃に曝されてまだ耐えられるのか。菜緒は胸の前で手を合わせ祈るような気持ちでボックスの中からデビルの攻撃を見ていた。

ビシッ！

今までと違う小さな音が響き菜緒はビクッと体を震わせる。

・・な、なに……・・

菜緒は周りを見るとボックスの壁の一部に小さなひびが入っていた。

・・うそっ、嘘だよね・・

菜緒はボックスの中央で体を小さくしていた。

ビシッ、ビシッ、ビシッ！

小さな音がだんだん多く聞こえるようになってくる。

「ひいぃぃぃっ」

菜緒は悲鳴を上げていた。

ビシッ、ビシッ、ビシッ、ビシィィッ！！

そして、ついにボックスの壁が破られた。一つ穴が穿たれると、そこから崩れるようにボックスの壁が崩壊していく。

「あ、あ、あ、あ、あ、あ」

ぶるぶると震える菜緒の前にデビルの姿があった。しかも、そのデビルはボックスの壁を破壊した進化型のデビルであった。もう、菜緒の運命は決定してしまった。ヴァギナでさえデビルには勝つのは容易ではないと云うのに、ウテルスの力を失った人間の菜緒では抵抗する事も出来ず解体され殺されていく。本当の死を前にして菜緒は恐怖で漏らしてしまっていた。今までは死んでも再び生き返るという信じられない程の凄まじい力を持っていただけに、今の菜緒はその恐怖と絶望で、震えながら漏らすだけで動く事も出来なかった。

「助けて……、怖い……」

菜緒の足元に尿の水溜まりが出来拡がっていく。そして、ついにデビルの触手が菜緒の手足にぐるぐると巻き付いてきた。

「いやあぁぁぁーーーっ！」

絶叫する菜緒の身体が空中に持ち上げられ大の字にされる。そして、スクール水着やサイハイソックスが切り裂かれていき、菜緒は空中で全裸にされた。

ドスゥウッ！

「はうぅぅーーーっ！」

次の瞬間、菜緒の尿道、膣、肛門にデビルの触手が突き刺さっていた。一瞬にして菜緒の股間の三つの穴は裂け、血が激しく噴き出す。菜緒にとって恐怖と絶望と苦痛の時間が始まった。

88、菜緒、無惨（前書き）

今回は凄惨なシーンが多くあります。苦手な方はご注意下さい。

８８、菜緒、無惨

８８、菜緒、無惨

菜緒は空中で大の字にされ尿道、膣、肛門にデビルの触手が突き刺されていたが、それが一旦抜かれた。

ぶり、ぶり、ぶりぃぃっ

触手の抜かれた肛門から菜緒は大便を漏らしていた。菜緒の肛門の括約筋が破壊され、大便が垂れ流しになっているのだ。空中で大の字にされ、大便を垂れ流す菜緒の姿を楽しむように眺めていたデビルは再び触手を伸ばしていく。そして、菜緒のようやく膨らみ始めた胸の先端、乳首に突き刺さると、そのまま左右の乳首を引き千切った。

「ひぎぃぃぃぃっ！」

菜緒の胸から血が噴き出し悲鳴を上げるが、菜緒がこれから味わう凄まじい激痛に比べれば、乳首の切断などまだ序の口だった。デビルは、菜緒の乳首を引き千切った後、それを口に入れ租借して飲み込むと、菜緒の手足に巻き付いている触手で更に締め上げる。

バキッ、バキッ、バキッ、バキッ、バキィィッ！！

「あぎゃあぁぁぁぁーーーーーっ！！」

絶叫と共に菜緒の手足の骨が粉々に砕かれていく。菜緒は涙と鼻水で顔を汚し号泣しているが、当然、こんなものでは終わらない。デビルの触手がまた菜緒の性器に向かう。

ズボウゥッ！

「ひぶうぅぅーーーーっ！！」

菜緒の尿道に数本の触手が侵入し膀胱を突き破る。そして、そのまま膀胱に絡み付き尿道を裂いて膀胱を抜き出した。

ズボゥゥッ！

「あばあぁぁぁーーーーーっ！！」

菜緒の膀胱は尿道も尿管も千切れ摘出され、そのままデビルの口に運ばれた。そして、次には菜緒の膣に数十本の触手が集中して突き刺さる。それは菜緒の子宮を串刺しにしていた。

「あっぴゃあぁぁぁぁぁーーーーーっ！！！」

天を仰いで絶叫する菜緒の膣がバリバリと裂かれていく。菜緒の性器から激しく血が噴き出し、そこから子宮が取り出される。

ズバァァッ！！

「あびゃあぁぁぁぁーーーーーっ！！！」

菜緒のピンク色の子宮が摘出され、争うようにデビルが子宮を切り

裂いて口に入れる。

・・助けて……、もう気が狂いそうだよぅ……。お願い、誰か助けてぇぇ……・・

菜緒は必死に祈るが、無情にもデビルの次の攻撃が菜緒を襲う。

ドスウゥゥッ！！

菜緒の股間、裂かれた膣に今までより太く強大な触手が突き刺さっていた。

「おっ、おっ、おがあぁぁぁぁっ！！」

その触手の先端が菜緒の口から飛び出す。菜緒は性器から口まで串刺しにされビクンビクンと体を痙攣させる。そして、さらに菜緒の手足に巻き付いていた触手が、菜緒の手足を引き伸ばしていく。

ブチッ、ブチッ、ブチッ、ブチッ

筋肉が千切れていく嫌な音が響いていく。菜緒は串刺しにされ叫ぶ事も出来ず、涙を流して苦しんでいたが、容赦なく手足は引き伸ばされ血が噴き出した。

ブチィィィッ！！

「おごおぉぉぉーーーーっ！！！」

菜緒の手足は引き千切られていた。さらに四肢を切断され血を噴き出している菜緒を串刺しにしている触手が高速で回転を始める。

「おぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼっ」

菜緒の口と性器からも血が激しく噴き出す。ここまでされては、もう菜緒は生きていられる訳がなかった。菜緒の本当の死へのカウントダウンが始めっていた。

・・ごめんなさい、留美子ちゃん、量子ちゃん、律子ちゃん、私、まだ死にたくないよぅ。誰か助けてぇ・・

ここまでされながら菜緒は死ぬのが怖かった。無理もなかった。菜緒はまだ小学生なのだ。一度は死を覚悟した菜緒だったが、実際に自分が死の縁に立った時、それを受け入れるのは怖かった。

「ウテルス様っ」

「そんな、ウテルス様が……」

十六夜と佳乃だった。手足を引き千切られ、性器から口まで串刺しにされ大便を漏らしている哀れな菜緒の姿を見て茫然としていたが、徐々に二人の表情に怒りの感情が爆発する。

「貴様らぁ、絶対に許さないっ！一匹残らず殺してやるっ！」

「ウテルス様、私が命を駆けてお守りする筈でした。申し訳ありません、ウテルス様一人では逝かせません。私もお供致します。それまで一匹でも多くこの化け物どもを始末していきますのでお許し下さい」

十六夜と佳乃は悪鬼の形相で菜緒に群がるデビルを駆逐していく。

あのデビルが完全に十六夜と佳乃の気迫に押されていた。しかし、やはり多勢に無勢。十六夜と佳乃も追い詰められていった。

ドウッ、ドウッ、ドウッ、ドウッ、ドウッ、ドウッ！

バスッ、バスッ、バスッ、バスッ、バスッ、バスッ！！

二人は銃弾を撃ち続けデビルを倒していくが、その銃弾も底をついてしまった。

ハァ、ハァ、ハァ

弾切れの二人にデビルの群れが迫ってくる。

・・新月、すまない。こいつらは絶対許せない。私の命が尽きるまで戦う・・

「うおぉぉぉーーーっ！！」

十六夜が咆哮し、その身体が紫色の光に包まれる。

★　★　★　★

「これは……」

パズスたちと最前線でデビルと戦っている新月が思わず呟く。

「どうした？新月」

「パズス様、申し訳ありません。私はもうすぐ消えます」

「何っ、まさか十六夜が殺られたのか？」

「いえ、違いますが何かあったのは間違いないでしょう。十六夜が人間の擬態を解きます。私はその瞬間消えてしまいます。パズス様、ここは一度退いた方がよろしいかと思います。十六夜が擬態を解くなど考えられません。ウテルス様に何かあったのかも知れません。お急ぎ……」

新月の姿は何かに引かれるようにグニャリと歪むと消えていった。

「エレシュキガルっ！僕は一度退く。菜緒が心配だっ！」

パズスは叫ぶようにエレシュキガルに告げると駆け出していた。

・・くそっ油断した。十六夜がいて、あのボックスがあれば安全だと思っていた。理論上、あのボックスをデビルが破壊出来る訳がない。大丈夫だよな、菜緒。無事でいてくれ・・

パズスは新月が消える時に落とした銃を乱射しながらデビルの群れの中を駆け抜けていた。エレシュキガルも、そのパズスの姿を見て激昂していた。

・・もしウテルスに何かあったら絶対に許さない。何があっても地の果てまでも追い詰めて殺してやる・・

「うおぉぉーーーっ！！」

エレシュキガルの音速の拳がさらに加速する。それはもう光速の拳。進化型デビルが再生する前にエレシュキガルの次の攻撃が叩き込まれていく。それまで、エレシュキガルの攻撃を腕で受けていたデビルの、顔面に、胸に、腹に、エレシュキガルの拳が叩き込まれる。初めてデビルが後退していた。

・・うぬ、あのヴァギナ、想定以上の力を持っているようだな。やむを得ないな、デビルを呼び戻すか・・

文月は、もう一体の進化型デビルに戻って来るよう指示を出す。ほどなくして戻ってきたデビルはエレシュキガルに襲いかかった。

・・くそっ、これでは完全に動きを封じられた。パズス、お前も惨神の一人なら必ずウテルスを守れ・・

エレシュキガルは二体の進化型デビルを相手にするが、さすがに今度はエレシュキガルが後退していく事になっていた。

★
★
★
★

パズスは紫色のヴァギナがデビルを喰らいながら、破壊されていくのを見た。デビルの攻撃を避けもせず攻撃している。その身体は再生も間に合わず崩れていた。

・・十六夜……・・

エレシュキガルに憧れ、その姿も真似ていた十六夜が、全てを捨ててなりふり構わず戦っている。しかし、その姿はもうボロボロだっ

た。そして、その十六夜の足元には血塗れの佳乃が力尽きたように倒れている。

・・野上さん、君もか・・

パズスは顔を上げる。そして見てしまった。四肢を切断され性器から口まで串刺しにされ大便を漏らしている菜緒の姿を……。パズスはその菜緒の姿を見て身体が凍りついていた。

・・嘘だ、菜緒……。嘘だよな、そのブスな顔でいつものように笑ってくれよ・・

茫然と立ち尽くすパズスをデビルの触手が貫いていく。しかし、パズスは微動だにしなかった。

「もう、こんな世界はいらない。全てを無に還す」

ぼそつと呟いたパズスの身体が赤い光で包まれていく。それは、まるで世界の終焉を暗示するような光だった。

88、菜緒、無惨（後書き）

「スク水少女戦士ウテルス」最終話まであと僅か。
戦いは最後の場面に突入していきます。

89、世界の終わり

89、世界の終わり

二体の進化型デビルと戦っているエレシュキガルは後退しながらも決して負けてはいなかった。

「うおぉぉぉーーーっ！」

エレシュキガルの光速の拳。それはもう目で捉えるのは不可能であった。エレシュキガルの肩から先が消えて見える。いかなデビルといえど、そのエレシュキガルの拳を避けるのは不可能だった。しかし、デビルは二体いる。上手く攻撃をチェンジしながらエレシュキガルを後退させている。その時、今まで誰一人経験した事のない凄まじい破壊の気配が溢れてくる。

「なんだこれは？　〝鷹の目〟、見えるか？」

文月も慌てて鷹の目に確認する。が、鷹の目からの返答はなかった。代わりに他の者の報告が文月の耳に入る。

「文月様、鷹の目は殺(や)られました。赤い光が見えたと思った瞬間、鷹の目の眼球が破裂して、その後に頭が爆発しました。そして、監視カメラも全て破壊されています。文月様、あの光は何ですか。いったい何が起こっているのです」

その報告に文月は初めて動揺していた。おそらく、鷹の目は人並み外れた視覚と異常を感知する感覚を持っていた為に、あの破壊の光の影響を諸に受けてしまい爆死してしまったのだ。そして、文月は巨大な火柱が天空に向かって噴き上がるのを見た。

「メギドフレイム……。もうこの惑星(ほし)は終わりだ。メギドの炎は全てを焼き尽くす。全てのものが消滅する。ここまで奴を怒らせてしまったのは貴様らだ。奴がここまで激怒するという事はウテルスに何か不測の事態が起こったという事だろう。ならば、私も付き合うぞ、パズス。もう、何もいらない。この惑星(ほし)毎滅ぼしてやる。ジュデッカロック……。全てを塵(ちり)に変えてやる」

エレシュキガルの身体が黒い光に包まれていく。文月は驚愕した。惑星(ほし)毎滅ぼす力。そんな力を持つ者がいるとはさすがに想定外だった。

・・ソドムとゴモラを滅ぼしたメギドの炎に、地獄の最下層“嘆きの川“の畔、永久に溶けないジュデッカの氷だと、こいつらヴァギナはそんな力を持っているというのか・・

もう何処にも逃げ道はない。この惑星上の全てが消滅するのだ。

・・ここまでか。まさかこんな運命が待っているとは考えもしなかったが、ソドムの炎にジュデッカの氷、そんなものが観られるなら良しとするか・・

一度は驚愕した文月だったが、もう落ち着きを取り戻し腕組みをして悠々と立っている。光に包まれているパズスとエレシュキガルにデビルは攻撃を仕掛けようとするが、まるで見えない壁に阻まれるように二人に近付けずにいた。消える事のないソドムの炎と、絶対

零度であるジュデッカの氷。この二つが発動してしまえば、この惑星の全ての生命は失われる。それは、パズスとエレシュキガルも同様であった。こんな力を使えば自分の身体も崩壊して消滅する。しかし、二人にはもうそんな事はどうでも良かった。大切な者を守れなかった。その思いが全てだった。もはや、この惑星の運命は決したかに思えた。

・・ありがとう、芳樹くん。エレシュキガル。でも、もういいよ。私はこの惑星が好きだから、この惑星にはいい人たちもたくさんいる。だから、その人たちの為にこの惑星を守りたかったの。だから、お願い、芳樹くん、エレシュキガル、もう止めて・・

パズスとエレシュキガルの頭に菜緒の声が響いていた。

「菜緒……。生きていたのか、分かった、ごめん」

「ウテルス、お前がそう言うなら……」

パズスとエレシュキガルを包んでいた光が消えていく。それを見たデビルが二人に攻撃を開始し、何本もの触手が二人の身体を貫いていた。パズスとエレシュキガルは力尽きたようにがっくりと膝をつき崩れ落ちた。

「なんだ、もうおしまいか。興醒めだな。よし、それではウテルスの首をはね頭部を破壊しろ。例え不死身であってもしばらくは動けんだろう。それで回収して終わりだ」

文月の指示でデビルが菜緒の首に触手を巻き付ける。さらに菜緒の頭部にも触手が巻き付いていった。これで菜緒の首をはね、頭部を潰すつもりのようだった。もう生身の体である菜緒が頭を潰されれ

ば、それは完全な死といえた。デビルの触手が菜緒の首を締め上げていく。

ズバァァッ！

激しい音とともに、それは切断された。しかし、切断されたのはデビルの触手だった。菜緒は六本のゴッドの腕に抱かれていた。

「オンナイジメル、ユルサナイ」

「コイツラ、ハイジョスル」

「ムクイヲ、ウケナサイ」

・・ゴッド……。そうか菜緒はもうウテルスではない普通の女の子だ。だから、菜緒の祈りにゴッドが気付いたんだ・・

ゴッドはパズスの前に菜緒を横たえると、六つの瞳でデビルをギロッと睨み、あっという間に1体のデビルを捉え始末する。デビルは、もう動けないパズスとエレシュキガルは無視してゴッドに集中して襲いかかっていた。しかし、ゴッドもあれからまた進化しているようで通常のデビルでは相手にならない。数十体のデビルがまとめて襲いかかってもゴッドに触れる事が出来ないばかりか、逆に少しずつ倒され喰われていき数が減ってきていた。

「うぬ、デビルの制御を外れた不良品の分際で私に歯向かうつもりか　ならばこちらが排除してやろう　行けデビル、その女のヴァギナはもう動けんだろう」

進化型のデビルは膝を着いているエレシュキガルをそのままにゴッ

ドに向かって飛びかかっていった。もし、エレシュキガルに力が残っていたならば文月を倒す絶好のチャンスであるが、最後の力を使うためエネルギーを消費してしまったエレシュキガルは文月の読み通りまったく動く事が出来ずにいた。

・・くそっ、動けん。すぐそこに豪徳寺文月がいるというのに……。なあ、ウテルス、これで良かったのか。お前は優しすぎるのではないか。一度全て壊してしまえば、悪も全て消える。その後、また新たに生まれてくる生命に未来を託した方が良かったのではないか。このままではこの悪魔のような人間にこの惑星（ほし）を支配されてしまうのではないか・・

エレシュキガルは文月を睨みつけながら唇を噛んでいた。あと一歩。もうあと一歩で諸悪の根源を倒す事が出来るのに、それが届かない悔しさでエレシュキガルは涙を流していた。

・・涙……。これが涙というものか・・

エレシュキガルは生まれて初めての経験に驚いていたが、エレシュキガルとパズスが動けない状態で孤軍奮闘しているゴッドも多数のデビルに進化型のデビルも加わり苦戦を強いられていた。

・・いけない、このままでは菜緒の望んだこの世界を守れない・・

パズスはゴッドとデビルの戦いを見て、進化型のデビルを一体でも倒せば、残りはゴッドの力でいけるのではないかと考えた。

・・新型トォールハンマーのクーリングタイムは過ぎた。進化型のデビルにしがみついて座標を送信してやる。僕もろとも消滅しろっ・・

パズスは力を入れ立ち上がろうとしたが、そのまま前に転んでしまう。そのパズスの体を6割がた再生の終了した十六夜が支えていた。

「パズス様のお考えは分かります。ですが、そのお体では無理があるでしょう。そのお役目、私にお任せ下さい」

「ありがたいが、十六夜。僕は惨神だ。仲間を守る責務がある。必ず死ぬと分かっている死地に君に行かせる訳にはいかない」

「ですが、パズス様がいなくなられては私たちは誰についていけば宜しいのでしょう。パズス様には残って頂けなければなりません」

「十六夜、心配するな。僕がいなくてもエレシュキガルがいる。それに、十六夜、お前はもう充分僕の代わりが出来るさ。うぐっ……」

パズスは突然意識を失って倒れていた。そのパズスの後ろに人影が立っていた。

90、集う者たち

90、集う者たち

「あ、あなたは……」

倒れたパズスの後ろに立っていたのは白衣を着た人物だった。

「まだ、こいつを失う訳にはいかないのでな。眠ってもらった」

「ありがとうございます。リツコ様」

十六夜の言葉にリツコは注射器を手にニヤリと笑う。そして、後ろの男から何かの包みを受けとると豪徳寺文月に向かって歩き出した。デビルがリツコの行く手を塞ぐように立ちふさがるが、リツコの体がデビルをすり抜けるように、まるで障害などないように歩いていた。

「私自身の体もチューンアップしてアクセラレーターを強化した。短時間であればデビルの攻撃をかわす事など造作もない」

そして、文月の前に悠然と立つと手にした包みを文月の前に放り投げた。

「お返しだ。こんなプレゼントで私が喜ぶと思っていたのか。まあ、おかげでここに到着するのが少し遅れてしまったがな」

文月の足元に転がる包みから髪の毛のようなものが見えている。文月が包みを開いてみると中から出てきたのは切断された人間の頭だった。

・・沙也加……。やはりお前では橘理津子の敵ではなかったか・・

包みから転がり落ちた神楽坂沙也加の切断された頭を文月はグシャッと踏み潰し、リツコを睨みつけた。

「ふん、沙也加などただの駒の一つ。倒されたところで痛くも痒くもないわ」

余裕で腕を組む文月の前でリツコもまた余裕の笑みを浮かべていた。

「ここであなたを倒すのは造作もない事。だけど〝本物のあなた〟を倒さねば意味がない。まあ、あなたには意味が解らないでしょうけどね」

「はあ？本物の私？本物は私に決まっているでしょう。どうやらあなたの頭も耄碌してしまったようね。残念だわ」

文月とリツコは互いに微笑みながらも視線は絡み合い火花を散らし対峙していた。

★　★　★　★

一方、リツコにパズスが眠らされ戦力を大きく欠いた十六夜たちは、

細胞分裂が活性化し動けるようになった佳乃とリツコの部下たちで、これ以上菜緒の体が破壊されないように必死に守っていた。

「佳乃さん、パズス様がやろうとなされた事を私が実行します。援護、お願い出来ますか」

「でも、そうしたら十六夜さんが……」

「パズス様の思われた通り、あの進化型のデビルを一体でも倒せればこちらにも勝機が見えます。ここが正念場です。迷っている時ではありません」

十六夜はパズスの握っている送信機を奪い取り進化型のデビルに狙いを付けるが、その動きは他のデビルに比べて格段に速く、目で追うのがやっとだった。

・・くそっ、私では捨て石にさえなれないのか・・

十六夜が唇を噛んだ時、リツコの部下が声をかけてくる。

「ペインのエネルギー充填がもうすぐ終了します。それまで我々を守って下さいませんか」

十六夜と佳乃が振り向くとリツコの部下たちが乗ってきた車をデビルの攻撃から必死に守っている。あの中にペインがいるものと思われた。

「分かりました」

十六夜と佳乃は二つ返事で菜緒とパズスの体を車の元まで運び、周

辺のデビルから守る事に撤する。ペインが稼働すれば、ゴッド以上の戦力になる。リツコの部下が持っているデビルの細胞を破壊する銃も、委員会の銃に勝るとも劣らず優秀な銃であるが、やはり数発は撃ち込まないと行動不能にする事は出来なかった。それに進化型のデビル二体には十六夜でさえも弾丸をヒットさせる事が出来ずに苦戦している。一体の進化型はゴッドが足止めしているが、もしゴッドが崩れるような事があれば総崩れになるのは火を見るより明らかだった。

「あと、何%だっ？」

「残り５％です」

「よし、残り5分程度です。なんとか死守して下さい」

しかし、ペインの気配に気付いたのか進化型のデビルが突進してくる。それは十六夜と佳乃の防御を抜け、ペインのエネルギーを充填している車に迫っていた。

「いけないっ！」

「不味いぞっ！」

ズガァァッ！！

「がはぁぁぁっ！」

リツコの部下の西園寺が自分の体を盾にデビルから車を守っていた。西園寺の腹にデビルの腕が突き刺さり突き抜けている。

「そ、送信機を下さい。僕もろともこいつを始末してやる」

西園寺は自分の腹に突き刺さったデビルの腕を掴み、もう片方の手を十六夜に伸ばす。だが、それより早くデビルの拳が西園寺の頭を目掛けて振り下ろされていた。

グシャァァーーッ！

何かが潰れる音が周囲に響いた。十六夜と佳乃も目を見開いてその様子を見ていた。潰されたのはデビルの拳。西園寺の前にペインの姿があった。

「馬鹿っ！なぜペインを起動させた。僕の事などほおっておけっ！」

「違いますよ、主任。ペインが、自分で動いたのです」

「ペインが自分で……？」

デビルは突然目の前に現れ自分の拳を砕いたペインに驚異を感じ、素早く退くがペインからは逃げられなかった。退いたデビルの目の前にペインの姿がある。

・・ペインが自分の意思で……。まさか麗香さん、意識が戻ったのか。僕を守ってくれたのか・・

西園寺は、しかし心配だった。エネルギー充填が完全ではないペインで、あの進化型のデビルに勝てるのか。だが、西園寺の心配は杞憂に終わる。

「ごがあぁぁぁーーーっ」

ペインの攻撃であの進化型のデビルでさえも徐々に塵となって消滅していく。しかし、デビルの消滅とともにペインもガックリと膝を着いていた。

・・一体のデビルを倒しただけでエネルギーが失くなったのか。あのデビルはそれほどの力を持っていると……。いけないっ、もう一体の進化型が来る・・

ゴッドと戦っていた進化型のデビルは、進化型の一体がペインに倒されたのを見て、ゴッドを他のデビルに任せペインに襲いかかる。エネルギーの切れてしまったペインは防御する事も出来ずにデビルの攻撃を受けている。

・・いけない、このままではペインが……・・

西園寺は医療班に腹部の傷を応急処置されながら震える手でリツコに連絡する。

文月と対峙しているリツコは西園寺からの緊急コールを受け話していたが、顔色一つ変えず電話を切った。

「どうした?私を倒すのではないのか?」

「言ったでしょう。〝本物のあなた〟を倒さなくては意味がないと。今は退かせてもらうわ」

リツコは文月の前から瞬時に姿を消していた。そして、西園寺の前に現れる。

「リツコ様、申し訳ない。ペインのエネルギー充填が完了する前にペインを起動してしまいました。一体の進化型デビルは倒したのですが、それでエネルギー切れを起こしました」

「一体倒しただけでエネルギー切れ？それになぜ充填完了前に起動させたのです」

「麗香さんの意識が戻ったようです。それで僕を守る為に自分で動きました」

「麗香の意識が戻った……」

リツコはペインを見る。ペインはデビルの攻撃を避ける事も出来ずに攻撃を受けている。そして、両足を掴まれると股間にデビルの鋭く思い蹴りが叩き込まれた。

「あがっ！」

ペインの股間の機器が一撃で破壊される。さらにデビルはペインの股間に蹴りを入れ続ける。ペインの股間から血が滴り落ちてきていた。

「リツコ様、早くペインを救出しませんと」

西園寺がリツコに進言するが、リツコはいいように攻撃されているペインの姿を見て笑っていた。

「麗香が意識を取り戻したか。ならば、安心しろ西園寺。ペインは勝つ。本当のペインジェネレータが動き出す」

リツコの言葉に西園寺は耳を疑った。本当のペインジェネレータ、そんなものがあるのか。ペインの股間のジェネレータは破壊されてしまった。どう見てもペインに勝ち目はない。西園寺は、リツコがショックのあまり気がふれてしまったのかと思ったが、デビルに一方的に攻撃されていたペインが股間に打ち込まれたデビルの脚を受け止めていた。そして、片手でデビルの脚を押さえつけ、もう片方の腕で高速の肘をデビルの膝に叩き込む。

バキャァッ！

デビルの膝が一撃で砕かれ、ふらつき動きの鈍くなったデビルにペインは必殺の攻撃を放つ。

「ペインリバース……。これで、決まったな」

進化型デビルの体がボロボロと崩れていき塵となって消滅していった。その瞬間、リツコはペインに向かって駆け出していた。ペインは再びエネルギーが切れ膝を着いていた。そこに向かって残りのデビルが襲いかかる。

・・痛みをエネルギーに代えるペインジェネレータだが、これだけ敵の数が多いとエネルギーが貯まる前に破壊されてしまう。ここでペインを失う訳にはいかない。進化型のデビルがいなければ切り抜けられるとは思うが、私の体もチューンアップしたおかげでエネルギー効率が悪い。いつまで動けるか・・

リツコは迫り来るデビルの群れを撃退しながら不安を抱いていた。

・・これ程の数のデビルがいるとは豪徳寺の奴、やはり侮れんな・・

リツコが、ゴッドが、十六夜が、佳乃が、それぞれ獅子奮迅の活躍をするが、やはり数において圧倒的な差があった。リツコたちは徐々に追い詰められていく。

「理津子さん、お久しぶりです。でも、すぐにお別れになりそうですね」

「そうだな、麗香。でもまたこうしてお前と話せて私は嬉しいよ。豪徳寺に殺(や)られるのは癪(しゃく)に触(さわ)るがな」

「ふふ、そうですね。西園寺くんだけでも逃げて欲しいですけど、彼は逃げないでしょうね」

「だろうな。ここで逃げる男だったら良かったのにな」

「あら、理津子さんはそちらの方が好(こ)のみなんですか」

「麗香は違うのか。一緒に死んでくれる男より、私の仇(かたき)を屠(う)ってくれる男の方が良いだろう」

「それは理津子さんが強いから一人で死ぬ事をなんとも思わないからですよ。私は一緒にいてくれる人がいいです。今、私の為にここにいてくれる理津子さんのように……」

「そうか、ありがとう。麗香……」

リツコのエネルギーももうすぐ底をつく。十六夜と佳乃の弾薬も底をつきそうだった。ゴッドも休みなく襲ってくるデビルの群れに、さすがに疲労の色濃くその動きに精彩を欠いていた。もう、リツコたちはデビルの数の前に飲み込まれる小さな船のようであった。エ

レシュキガルは倒れたデビルを喰らいながら、リツコたちを救出に向かおうとするがまだ脚が動かない。そして、デビルの群れが容赦なく津波のようにリツコたちに襲いかかった。豪徳寺文月は、その様子を見て腹を抱えて爆笑していた。

「うははははっ、馬鹿どもが無様な最後だな。心配するな、貴様らの仲間はすぐに同じ処に送ってやるさ」

その高笑いしている豪徳寺文月の頭に、そして、その場にいる全ての人の頭に神聖な声が響く。

「審判の時間です。〝ジャッジメント〟」

90、集う者たち（後書き）

「スク水少女戦士ウテルス」、完結まであと2話となります。
それぞれの運命はどう巡っていくのか。世界に平和が訪れるのか。
次回、全ての決着が……。

91、決着（前書き）

ついに戦いに決着が……。

91、決着

91、決着

「審判の時間です。〝ジャッジメント〟」

周囲を黄金色の光が包みこんでいく。豪徳寺文月は取り乱していた。

「あり得ない。ウテルスはあそこで倒れているではないか。こんな事は絶対にあり得ない」

文月は髪を振り乱し目を見開く。しかし、これは明らかにウテルスの〝審判（ジャッジメント）〟だった。そして、一刻の後、辺り一帯を包んでいた光が消えていく。そこで文月は見た。空中から降りてくるスクール水着を着た少女の姿を。濃紺のスクール水着にサイハイソックス。それはウテルスと同じ姿だ。だが、顔と髪型が違っていた。凛とした顔に黒髪のポニーテール。文月が初めて見る顔だった。

「誰だ、貴様はっ」

文月は怒気を含んだ声で少女を問い詰める。

「私は二階堂遥遠（にかいどうはるか）。二代目ウテルスです」

「二代目？二代目だと？そんな事あり得ない」

「信じようと信じまいと構いません。あなたはここで滅ぶのですから」

「くくっ、やはり偽者か。本物のウテルスが使った〝審判（ジャッジメント）〟ならば、生き残った者は殺せない。どのようなからくりで〝審判（ジャッジメント）〟に似せたのか分からんが、その言葉でメッキが剥げたわ」

「仰有る通り、私ではあなたを殺せません」

遥（はるか）は倒れているエレシュキガルの前に屈み込むと小瓶を渡した。

「あなたがエレシュキガルさんですよね。ここに来る途中に会った委員会の方々から戴いたポーションです。体力が回復しますので飲んで下さい」

エレシュキガルがポーションを飲むと体に力が湧いてきた。エレシュキガルはスッと立ち上がると遥（はるか）に礼を言う。

「初代からお願いされていました。最後はエレシュキガルさんに任せて欲しいと」

「ふん、どちらにせよ同じ事だ。〝審判（ジャッジメント）〟を生き残った私を殺す事は出来ない」

文月は、また余裕を取り戻して小馬鹿にしたように吐き捨てる。

「ええ、そうですね。私ではあなたを殺す事が出来ません。ですが、同じ〝審判（ジャッジメント）〟を生き残ったエレシュキガルさんなら問題ありません。生き残った者同士ですからね。〝審判（ジャッジメント）〟の判断には影響ないという事です」

「なにっ！」

「そうなのかっ！」

文月とエレシュキガルが同時に声を上げる。

「しかし、ウテルスは殺せないと言っていたぞ」

「おそらく初代は優しいのでしょう。優し過ぎるので、そう思い込んでいたのだと思います。私は自分で言うのもあれですが冷酷ですから、冷静に分析しました。大丈夫ですよ、エレシュキガルさん。私を信じて下さい」

「なるほど、確かにウテルスは優しいが頭が足りない処があるからな」

菜緒が聞いたら怒りそうな事を呟きながらエレシュキガルは、ニヤリと残酷に笑っていた。

「豪徳寺文月、もう終わりだ。もう私からは逃げられん」

「うぬぬ……」

文月はどこかに逃げ道はないかと探すが、あの進化型のデビルと互角以上に戦っていたエレシュキガルからは逃げられそうになかった。

★　★　★　★

黄金色の光が消え遥が降りてきた時、佳乃は菜緒の元に駆け寄っていた。

「ウテルス様、間に合いましたよ。新しいウテルス様が来てくれました」

リツコの医療班に救急の処置を受けている菜緒はにっこりと笑ったようだった。

「ウテルス様も大丈夫ですよ。私を治してくれたリツコさんならウテルス様も治して貰えますよ。それにヴァギナのバルバドスさんもいます」

佳乃はすぐにリツコに菜緒を診てもらおうとリツコの姿を探すがリツコの姿が見当たらなかった。佳乃がリツコを探している様子に気付いたペインがボソッと呟いた。

「リツコさんは〝審判（ジャッジメント）〟によって消えました。リツコさんは豪徳寺を倒す為に、人には言えないような事もしてきました。リツコさんは強い人なのでそれを表には出さずにいましたが、きっと後悔していたのでしょう」

佳乃はショックを受けていたが、それ以上にショックを受けている人物がいた。

「そんな馬鹿な、なぜリツコ様が消えるんだ。あり得ないだろう。あの豪徳寺が残ってリツコ様が消えるなんておかしいだろっ」

興奮して機材を振り回す西園寺をペインが叱りつける。

「落ち着きなさい、西園寺くん。理津子さんが消えたからといって、そんなに取り乱してどうするの。それより、理津子さんは必ず戻って来ます。そう信じて理津子さんが帰って来たときにすぐ活動出来るように準備しておくのが西園寺くんの務めじゃないの」

ペインの言葉で西園寺は力なく項垂れ、そして泣き続けた。

★　★　★　★

リツコは黄金色の光に包まれていた。

・・これが以前聞いた事のあるウテルスの”審判（ジャッジメント）”か　私はここで裁かれるというわけか・・

そのリツコの前にぼんやりと人影が出来てきた。

・・なんだ、これは？・・

リツコが見ているうちに、それはどんどん形を成していく。そして、人間の女性であると認識出来た。

・・誰だろう、どこかで見た事が・・

リツコは考える。三つ編みお下げに眼鏡をかけた大人しそうな顔。セーラー服姿で立っているその少女をリツコは間違いなく何処かで会っている人間だと思った。それが、なかなか思い出せない。

・・何処かで会っている。間違いない・・

少女はリツコに自分が誰か思い出させるように、セーラー服とスカートを脱いでいく。そして、白いブラと下着も脱いで両手を上げ脚を大きく開いて口も開く。少女の口には歯がなく、体には焼き印が捺され、性器には数え切れない程のピアスが入れられていた。その少女の姿を見たリツコに、遥か遠い記憶が甦った。

・・渡邉ゆかり……。そうだ、渡邉ゆかりだ・・

リツコの前のゆかりはニコッと微笑むと、股間に手を伸ばし自分の膣からズルズルとナイフを取り出した。そして、そのナイフでリツコを突き刺した。

ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ

リツコは声が出なかった。

・・そうか、それは恨まれているよな。恨まれて当然か・・

ゆかりにナイフで滅多刺しにされリツコの意識は暗い闇に堕ちていった……。

★　★　★　★

エレシュキガルは残酷に笑う。もう誰もエレシュキガルを止められない。エレシュキガルから伸びた触手が文月の体を捕らえる。文月は空中に大の字にされ衣服を剥ぎとられた。

「いい様(ざま)だな、豪徳寺文月。これからお前を処刑してやる」

「ヴァギナごときが、私はまだ負けてなどいない」

文月の言葉と同時に数千体のドローンが現れ、エレシュキガルに銃撃を始める。再生不可能にされる銃弾がエレシュキガルに撃ち込まれていくが、エレシュキガルは頭部を守ったまま微動だにせず笑みを浮かべていた。

「この痛みはリリスや若葉やベルゼブが受けた痛みとして受けてやる。豪徳寺文月、お前にもそれ以上の痛みをくれてやろう」

ドスゥッ！

鈍い音がして文月の性器にエレシュキガルの触手が突き刺さっていた。触手は文月の膣を裂き子宮を串刺しにしていた。そして、そのまま文月の子宮を破壊する。触手はそこから更に文月の中に抉るように食い込んでいく。

「おごっ、おごっ、おごっ」

ビッシャーーーッ！

ぶりぶりぶりぃぃぃーーっ！

文月の尿道と肛門から、小便と大便が勢いよく噴き出していた。無様に大小便を漏らす文月の姿を残酷に笑いながら見ていたエレシュキガルは、その大小便を漏らす文月の尿道と肛門にも触手を突き刺さす。そして、その触手も文月の体にどんどん深く深く突き刺さっ

ていった。

「エレシュキガル様、ドローンは私たちが」

十六夜、佳乃が両手に銃を持ちドローンに向かって銃撃を繰り返す。そして、空からもゴッドと委員会の後続部隊を引き連れて戻ってきたバアルがドローンを破壊していく。

「大丈夫ですか、パズスさん」

気付け薬を注射しパズスを助け起こしたのは伊東だった。

「なんだ、伊東まで来たのか。指揮官が出てしまって委員会は大丈夫なのか」

「大丈夫というか、ここで負けたら終わりですからね。命を惜しんでも仕方ありません。どうやらコントロールルームは屋敷の中のようです。特大の花火をぶちかまして、私たちで制圧しようじゃありませんか」

伊東はパズスに送信機と銃を渡すと微笑んだ。パズスは生命維持の為の緊急治療を受けている菜緒を見る。リツコの医療班に、委員会のスタッフ、それにバルバドスも加わっている。パズスはエレシュキガルに目を向ける。こちらもドローンさえ攻略すれば問題無さそうだ。一番の障害であったデビルが一掃されたのが大きかった。パズスは新しいウテルスに目を向ける。遥(はるか)はエレシュキガルを銃弾から守ろうとしたが、大丈夫と制止されエレシュキガルを見守っていた。

「ようし、特大の花火、いくぞ伊東っ」

パズスは屋敷の座標を送信する。そして、遥か上空の衛星から一筋の光が放たれた。トォールハンマー。その巨大な熱線は豪徳寺文月の屋敷を破壊する。

「行くぞっ！屋敷の中を完全に制圧するぞ」

「ドローンのコントロールルームが最優先だ」

パズスと伊東に続き、リツコの、そして委員会の面々が文月の屋敷に雪崩れ込んでいく。もう完全に形勢は逆転していた。ほどなくしてドローンのコントロールルームはパズスたちに制圧され、数千のドローンはコントロールを失い地面に墜落する。そして、豪徳寺文月にも最後の時が迫ってきていた。

「おがががががっ！」

文月は天を仰ぎ声をあげ体を痙攣させている。その顔面は涙と鼻水で汚れ苦悶の表情が表れているが、当然ながらエレシュキガルは容赦などしない。文月の体は尿道、膣、肛門からエレシュキガルの触手によって串刺しにされようとしていた。エレシュキガルは、ただ串刺しにするのではなく文月の体の中を抉るように内蔵を破壊しながら串刺しにしていった。

「ごっぱぁぁーーっ！！」

文月の口から鮮血が飛び出す。そして、それに続いてエレシュキガルの触手が飛び出してきた。文月は股間から3本の触手で完全に串刺しにされ、ビクンビクンと体を大きく痙攣させていた。

「エレシュキガル様、勝手なお願いで申し訳ありません。私にもあの女に一太刀浴びせる許可を頂けませんか」

十六夜が、エレシュキガルの前に跪き深く頭を下げて懇願する。エレシュキガルはそんな十六夜をまるで自分の子供のように愛おしく感じた。

「お前も〝審判（ジャッジメント）〟を生き残った一人だ。構わぬ、好きにしろ」

「ありがとうございます、エレシュキガル様」

十六夜は立ち上がると素早く触手を伸ばす。それは一瞬にして文月の四肢を切断していた。文月の腕が、脚が、宙に舞い、切断面から血が噴き出す。

「少しは気が済んだか、十六夜」

「はい、ありがとうございます。エレシュキガル様」

「そうか、ではもうこの女には消えて貰おう。もうこの女を見ている事さえ苦痛だ」

エレシュキガルは文月の体から触手を抜く。

「ごあぁぁぁーーっ！！」

口と股間からも激しく血を噴き出しながら、胴体と頭だけになった文月が空中から落ちてくる。

「うおぉぉーーーーっ！！」

エレシュキガルの光速の拳。今までの怒りが全て込められた光速拳が文月の顔面に胸に腹に数百発ヒットする。文月の体は爆裂し全てが細かい肉片となり消滅していった。

「ふうーっ」

エレシュキガルは肩で大きく息をすると、手を出さず見守っていてくれた遥(はるか)に頭を下げ菜緒の下に歩いていった。

「終わったぞ、ウテルス。豪徳寺文月は消滅した。もう安心していいぞ」

エレシュキガルの言葉は菜緒に伝わったようで、菜緒はにっこりと笑った。そして、菜緒の唇が微かに動いた。

「なんだ、ウテルス？」

エレシュキガルが耳を近づける。

「泣いて……るの……エレシュキガル……」

エレシュキガルの瞳からは涙が溢れていた。

「馬鹿を言うな。私は惨神のエレシュキガル。泣いてなどいない」

「エレシュキガルさん、こんな時は素直になられた方が良いですよ。それと、初代。申し訳ありません。私が遅れたばかりに……。なんとお詫びすればいいのか」

「ううん……気に……しないで……遥ちゃんの……顔が……見れて……良かったよ……」

菜緒は遥に向かいにっこりと微笑むと静かに眼を閉じた。

「ウテルス様、私と胸の大きさ競争するって約束したじゃないですかっ！」

佳乃が絶叫するが菜緒はもう目を閉じて黙ったままだった。戦いには勝利した。だが、その代償は大きかった。

91、決着（後書き）

次回、いよいよ完結です。

最終話、未来に向けて

最終話、未来に向けて

豪徳寺文月の屋敷での死闘から数ヶ月が過ぎていた。文月は消滅したが残ったカタストロフ教団は地下に潜り、委員会や警察の追跡から逃れていた。しかし、それもウテルスとヴァギナ、そして委員会の協力で次第に勢力を失っていった。野良ヴァギナに襲われる人間もあったが、それは公約通りパズスたちがすぐに対処し、重罪を犯すとヴァギナの食料にされるという法案も議会を通過し施行された。これにより、世の中は平穏に向かっていくと思われたある日、戦場となった豪徳寺文月の屋敷跡で異常な磁場が委員会の計器に観測された。

「委員長、これは何か不穏な事態かも知れません。ウテルス様にも連絡して現地を調査された方がよろしいかと思います」

部下から報告を受けた伊東は、すぐにパズスに連絡をとりヴァギナにも協力を要請した。そして、ウテルス、パズス、エレシュキガルの3人に加え、リツコの研究所のスタッフ、それに委員会からも人材を選抜し万全の体制で調査に向かった。

豪徳寺文月の屋敷跡は、危険な薬品や武器も多々発見された為、立ち入り禁止にされており、現在は人のいない荒れ地と化していた。

「まさに、兵(つわもの)どもが夢の跡、ですね」

ウテルスが数ヶ月前の戦いを思い出して呟いた。

「さすが、遥(はるか)だな。前のウテルスでは出てこない台詞だ」

遥(はるか)は、エレシュキガルに向かってにこりと微笑んだ。

「本当にエレシュキガルさんは、初代の菜緒さんが好きなんですね。羨ましいです」

「何を言っている、遥(はるか)。私は前のウテルスは少し頭が足りないと言っているだけだ」

照れたように顔をそらして言うエレシュキガルに、周囲からも小さな笑いが起こっていた。そして、ウテルスたちは、手分けして屋敷跡を調査していったが特におかしな処、怪しい処なども見当たらなかった。

「おかしいですね。確かに委員会の計器では磁場が湾曲して測定されるのですが」

委員会から派遣された職員が首を傾げる。と、その時、その場にいる全員に異様な音が聞こえた。

ピシッ、ピシッ

「なんだ、この音はっ？」

パズスが叫び、全員に緊張が走る。ウテルスもエレシュキガルも戦闘態勢をとっていた。

「あそこです！」

佳乃が指差している先を見ると、空間にピシピシと亀裂が入っていた。そして、その亀裂が徐々に大きく拡がっていく。

「空間が裂けています。これは、いったいどういう事でしょう」

ウテルスが緊張した顔で、油断なく亀裂を見つめながら言う。その亀裂から人の手がニュッと出てきた。

「何か来るぞっ！気を付けろっ！」

エレシュキガルが叫び、全員が構える前で、空間に出来た亀裂から一人のスーツを着た小太りの男が出てきた。その男の姿を見たパズスとエレシュキガルが同時に叫ぶ。

「ニヌルタッ！」

「おや、お揃いでお出迎えか」

ニヌルタは笑いながら地面に足を降ろす。そして、その後ろから白衣を着た女性が姿を現した。

「リツコ様っ！」

今度は西園寺が叫んでいた。

「よくご無事で」

西園寺はリツコに抱きついていた。

「ほんの少し会わない間に、随分大胆になったな西園寺」

リツコが笑いながら言うと、西園寺は公衆の面前でリツコに抱きついている自分に気付き顔を赤くして慌てて、失礼しましたと離れていた。

「この様子を見ると決着がついたようだが、豪徳寺文月はどうなった？」

リツコが皆の顔を見回して尋ねた。

「豪徳寺文月は私が始末したよ、リツコ。奴の体は消滅して、もうこの世には存在しない」

エレシュキガルの言葉にリツコは頷いたが、ここにいるメンバーに話しておく事があると言う。

「虚無の空間で自我を維持するのに残りのエネルギーをほとんど使ってしまった。そこの男がいなかったら脱出は不可能だっただろう。二人で力を合わせてなんとか空間から脱出出来たわけだ」

「そうか、リツコ。ニヌルタを連れてきてくれて感謝する」

エレシュキガルとパズスがリツコに頭を下げていた。

「そうか、その男、ヴァギナだったのか。それで納得がいく。誰もが無に帰してしまう、あの虚無の空間で意識が分散せず自我を保っている者を発見した時は驚いたものだ。それで協力を要請したのだ

が、成る程な。ニヌルタというのか、私も敬意を表する。お前のおかげで脱出出来た」

「僕のほうこそ、あの空間で無事な方がいるとは驚きました。もう少し会うのが遅ければ僕の意識も散り散りになっていたでしょう。僕からも改めてお礼を言わせてもらいます」

ニヌルタもリツコに深く頭を下げていた。リツコもニヌルタに頭を下げ、顔を上げるとお互い握手していた。

「初代はニヌルタさん、私はリツコさんを消してしまった事が心の中にトゲのように刺さっていましたが、これでそのトゲが取れました」

遥(はるか)が晴れ晴れとした顔で言うとリツコは改めて遥(はるか)の顔を見つめる。

「お前が新しいウテルスか。前のウテルスと違い利口そうな顔をしているな」

リツコがしみじみと言うと、エレシュキガルが爆笑していた。遥(はるか)は困ったような顔をして、菜緒さんが聞いたら怒りますよと呟いていた。リツコはそこで再び全員の顔を見渡す。

「早速で済まないが伝えておくべき事がある。私は“豪徳寺“を倒す為に長い間戦ってきた。そして、それで得た知識がある。その結論は、豪徳寺文月は滅んだが〝豪徳寺〟は滅んでいないという事だ。あの豪徳寺文月は、本人さえも知らなかっただろうが〝豪徳寺葉月〟という女のクローンに過ぎない。〝豪徳寺葉月〟を滅ぼさない限り第2、第3の豪徳寺文月が生まれてくる。まだまだ平和には遠いという事だ」

リツコの言葉に一同言葉がなかった。

「だがな、あの豪徳寺文月を倒した頼もしい仲間たちがここにいる。恐れる事はない。ウテルスがいる。ヴァギナもいる。そして、人間が一つになれば必ず〝豪徳寺〟を滅ぼす事が出来ると私は信じている。これからの未来を守るために、この時代で決着をつけようと思わないか」

リツコの言葉に全員が決意を新たにして拳を握りしめていた。

★
★
★
★

とある頑強な地下室の中央に棺のようなものが安置されている。その棺には数多くの配線が血管のように張り巡らされていた。

「葉月様、クローンが一体消滅したようです」

その棺に向かい男が恭しく報告する。

・・ほう、私のクローンを倒す者がいるとは素晴らしいですね。そんな楽しい事があるのなら、眠らずに起きていた方が良かったかしら・・

「ははっ」

男はさらに頭を下げる。

・・それでは、すぐに次のクローンを用意しなさい。今度は私も起きて経過を楽しみましょう・・

「はっ、仰せのままに」

男はすぐに準備に取りかかる為、一礼し退室して行った。

★　★　★　★

「ウテルス様、ずるいですよ」

佳乃は、すっかり膨れていた。

「別にずるくないよ。これが今の私の体に間違いないもの」

胸の大きさ比べでウテルスに完敗した佳乃は納得がいかなかった。

「ずるいですよ。リツコさんに造って貰ったボディなんて反則です。私は認めません」

佳乃は膨れているが、その横でエレシュキガルは笑っていた。

「ははは、それでも私には敵わないな、ウテルス」

「エレシュキガルこそ反則だよ。なんなの、その胸の大きさ」

ウテルスもぷぅーっと膨れていた。それを見ているパズスとニヌルタ、そして萌からも笑顔が零れていたが、リツコは頭に手を当てて

考え込んでいた。

・・そうか、もっと胸を大きくした方が良かったのか・・

……了

最終話、未来に向けて（後書き）

最後まで読んで下さりありがとうございます。
「スク水少女戦士ウテルス」はこれで完結となります。凄惨な場面も多々ありましたので、最後はホラーの王道を採り入れた上でハッピーエンド風にしたかったのですがどうでしょうか。
感想頂けると有り難いです。
よろしくお願い致します。

ありがとうございました。

番外編　二階堂遥の敗北（前書き）

今回、タイトル通り2代目ウテルスである遥が敗北します。
遥の性器が破壊される酷い描写があるので気を付けて下さい。

番外編　二階堂遥の敗北

番外編　二階堂遥の敗北

遥（はるか）は人里離れた山中でデビルと戦っていた。豪徳寺文月が滅び、デビルも壊滅した筈であるが、ゴッド同様、文月の制御を離れ最終決戦に参集しなかったデビルがまだ存在しているようで、パトロールしていた遥（はるか）が偶然発見したのである。デビルは一人の女性を捕らえてきており、犯したうえに性器を破壊し喰らっているところであった。女性の膣や子宮、それに卵巣も取り出し、口の周りを血に染めてばくばくと喰らっている。女性はビクンビクンと大きく痙攣し、もう虫の息だった。

・・くっ、間に合うか・・

遥（はるか）は空から急降下し、デビルの頭上に蹴りを浴びせる。

「エレクトリカルハンマー」

電撃を帯びた遥（はるか）の蹴りがデビルの頭上に見事に決まり、デビルは悲鳴を上げ後方に倒れていた。が、しかしデビルは、プスプスと頭から煙をあげながら立ち上がってくる。

・・やはり、デビルは厄介ですね。このまま力技で限界を突破させても良いのですが、時間がかかってしまいます。シナイ契約で一気にけりをつけましょう・・

遥（はるか）は女性を救う為、もう時間はかけられないと判断し、シナイ契約を発動しデビルを消滅させる決心をした。そして、デビルを牽制しながら力を溜めていく。

・・それにしても、このデビル、どうして豪徳寺文月の制御から逃れたのでしょう・・

遥（はるか）は倒れている女性にチラリと目を向ける。女性は性器だけが完全に破壊されていた。他の部分には手もつけていない。衣服もそのままである。

・・このデビル、マンコに異常に執着があるのかも……。その異常な執着で豪徳寺文月の制御からも逃れたのかも知れない。あのゴッドは三人の女の子の、自分達に対する〝いじめ〟への憎しみの強さから豪徳寺文月の制御から逃れていた。強い執着や思いがデビルになった後も残っていて、それが制御を放れた理由なのかも知れない。だとしたら、このデビルは私のマンコを必ず狙ってくる筈だ・・

遥（はるか）は意識を集中する。デビルが自分の性器を狙い飛び込んで来た瞬間、シナイ契約の一の拳を打ち込むつもりだった。が、デビルも警戒しているのか、なかなか踏み込んでこない。

・・いけない、急がないとあの女の人が……・・

遥（はるか）はデビルを誘うように股を大きく開き股間に手を当て擦り始めた。

・・どう、女の子のオナニーだよ。マンコに執着するあなたは、もう私のマンコも壊したくてたまらないでしょう。早く踏み込んで来なさいよ・・

遥はデビルを刺激し誘い込もうとしたが、そのうちに自分の息が荒くなってくる。

「うっ、うっ、、うっ、うっ」

遥のスクール水着の股間に、じわーっと染みが拡がっていく。

・・いけない、本当に気持ちよくなってきちゃった。もう、なにやってるの私・・

膝もがくがくと震えてきて遥は立っているのもきつくなってきていた。

・・もう、早く私のマンコ壊しに来なさいよ・・

遥が焦れてきた時、ようやくデビルが左右にフェイントをかけながら遥に向かって飛び込んで来た。

・・来たっ・・

遥は股間から手を放し、自分の分泌液でぬるぬるに濡れた拳を握りしめる。

「一の……」

遥がデビルに拳を叩き込もうとした瞬間、遥の股間に性器から体を裂かれるような凄まじい激痛がはしった。

「おっぱあぁぁぁーーーっ!!」

遥の性器に背後からもう一体のデビルの蹴りが叩き込まれていた。
デビルの爪先が遥の膣に激しくめり込んでいる。まだ小学生の遥の処女膜は一撃で突き破られ血が噴き出す。遥は両手で股間を押さえると地面をのたうち回っていた。

「あううぅぅーーーっ」

遥はデビルを一体だと思い込み、目の前のデビルに集中し、背後から迫って来ていたデビルにはまったく気が付いていなかった。その為、無防備に攻撃を受けてしまっていた。

・・うぐうぅぅっ、マンコ痛いぃぃ、マンコ壊された・・

地面をのたうち回る遥の股間を押さえる両手が二体のデビルに掴まれる。

バキィィッ！

「あびゃあぁぁぁーーーっ！」

遥の両腕が、木の枝のように簡単にへし折られていた。そこへ、遥の絶叫を聞き付けたのか、なんともう一体のデビルが加わってくる。三体になったデビルは、涙を流し苦痛に顔を歪める遥を眺めると笑みを浮かべた。そして、二体のデビルが遥の足をそれぞれ掴み大きく拡げ、股間を無防備に晒す姿勢に押さえつける。

「うぐぐぐっ」

遥は性器に蹴りを入れられた激痛と両腕を折られた激痛で呻き声を

上げ動けずにいる。デビルは、その大きく開かされた遥(はるか)の足の中心、股間の血を流している性器に思い切り蹴りを叩き込んだ。

ドスゥウッ！！

「あびゃあぁぁぁーーーーっ！！！」

絶叫する遥(はるか)の膣にデビルの爪先が深く突き刺さっている。遥(はるか)の膣は裂け、その激痛に　遥(はるか)は漏らしてしまっていた。スクール水着の股間が赤く染まり、尿が漏れている。しかし、デビルは遥(はるか)の股間を蹴り続ける。

ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスウッ！！！

「あ、びゃ、びゃ、びゃ、びゃぁぁぁーーーっ！！」

絶叫する遥(はるか)の股間は血塗れになっていた。それでも、デビルは容赦なく遥(はるか)の性器に蹴りを入れ続ける。遥(はるか)の性器は、蹴りを入れられ続け、もう小陰唇はズタズタに千切れ、クリトリスは潰れてしまっていた。膣も裂け、子宮頸部も潰れてしまっている。　遥(はるか)は性器を破壊され意識が遠くなってきていた。

・・私、ここで殺される。マンコを壊されて殺されるんだ。一人の人も助けられないで殺される。菜緒さん、ごめんなさい……・・

遥(はるか)は自分の不甲斐なさに涙していたが、遥(はるか)の足を掴んでいたデビルが遥(はるか)の足の骨も砕いていく。

バキャッ、バキャッ、バキャッ！！

「ぶぎゃあぁぁあーーーーっ！！！」

手足の骨を折られ、性器を破壊された遥は無様に泣きわめき大便まで漏らしてしまっていた。遥の足の骨を砕いたデビルは、それだけでは飽き足らず両側から遥の膣にスクール水着を突き破り手を入れる。そして、思い切り左右にそれぞれ引き始めた。デビルの蹴りで裂けた遥の膣が、さらにビリビリと裂かれていく。

「あびゃあぁぁあーーーーっ！！！！！」

絶叫する遥の膣から血が噴き出し、遥の体はビクンビクンと痙攣していたが、そこでデビルは止めたりしない。さらに力を込めて遥の膣を引き裂いていく。

「だじげでえぇぇえーーーっ！！」

女性を助けに来た遥は返り討ちにあい、無様にも今度は自分が助けを求めていた。しかし、当然こんな山中に助けなど来ない。いくら遥が助けを求めようと、それは無駄な事だった。

・・うびいぃぃぃーーっ、マンコの穴、裂かれてるぅ。もう私、死ぬうぅぅ・・

手足の骨を砕かれ動けない遥は、いいようにデビルに性器を壊されていった。遥の膣は大きくビリビリと裂かれ、もう尿道と肛門までつながってしまっている。その時、遥の膣を裂いている二体のデビルを見ていた、もう一体のデビルが遥の裂かれている膣にズボッと腕を突き入れた。そして、遥の子宮を鷲掴みにする。遥の子宮を掴んだデビルは抉るようにして、遥の子宮を裂けた膣から抜き出して

しまった。

ズボゥウッ！

「おっ、びゃあぁぁぁーーーーっ！！」

一体のデビルが遥の子宮を抜き出したのを見て、二体のデビルも遥の裂けた膣に同じように腕を突き入れ、ズボッと卵巣と膀胱を取り出していた。

「あびゃびゃびゃびゃあぁぁ……」

もう遥の体はビクンビクンと激しく痙攣し、このままでも遥にはすぐに死が訪れるのは確実だったが、デビルはなおも遥の性器を破壊しようとする。デビルは遥の膣を裂かれ子宮も卵巣も膀胱も抜き出され空洞となった性器に、なんと何処から手に入れたのかプラスチック爆弾を詰めていた。デビルは遥の性器を徹底的に完全に破壊するつもりのようだった。遥は、抵抗や逃亡されるのを防ぐために手足の骨を砕かれた以外は、性器のみを集中的に狙われ破壊されていた。このデビルの女性器に対する執着は相当なものであるといえる。そして、遥の性器を完全に消滅させる為に、信管がセットされる。

・・これ以上、まだ私のマンコになにかするの。もう私のマンコ、完全に壊されているのに。もう、マンコは許してぇ・・

遥は、この執拗なデビルの自分の性器への攻撃に恐怖を感じていた。しかし、まさか自分の性器が爆破されるとまでは想像もしなかった。デビルは遥を楽しそうに開脚逆さ吊りにすると、躊躇いなく起爆させた。

ボオンッッ！！

「！！！！！！！！！！！！」

鈍い音が響き遥（はるか）の性器が爆破される。遥（はるか）は性器だけでなく下腹部全てが爆裂し肉片となって消滅していた。吊られていた遥（はるか）の上半身が地面に落ち、足だけがぶらぶらと吊られて揺れている。遥（はるか）は性器を爆破され、もう完全に絶命していた。

★　★　★　★

遥は、ハッと気が付いた。

・・ここはパトロールに出る前の場所・・

遥はスクール水着の中に手を入れ自分の性器を確認してみる。そこには、まだ処女の割れ目が確かに存在していた。遥は、ホッと安堵の息を吐く。

・・これが菜緒さんから聞いたウテルスの力、エターナルリバース……。凄い本当にこんな力があるんだ・・

遥はパトロールに出る前に委員会に向かった。菜緒はもうウテルスではないが、委員会の部屋にいる筈だった。

「こんにちは、初代。菜緒さん居ますか」

遥が、菜緒の部屋に入っていくと、そこには菜緒だけでなく、エレ

シュキガルと佳乃もいた。

「皆さんお揃いでちょうど良かったです。私に力を貸して下さい」

いきなり頭を下げる遥に戸惑う三人だったが、遥は頭を下げたまま話し始める。

「私は自分の、ウテルスの力に思い上がっていました。この力があれば無敵だと慢心していたのです」

「ウテルスは確かに無敵だろう。ウテルスに勝てる奴など想像つかないが、遥、どうしたのだ」

エレシュキガルが遥の態度に何かを感じたのか問いかける。

「ウテルスの力は無敵だと思います。でも、その力を使う私がポンコツなんです。初代にはとても及びません。私は殺されました。マンコ壊されて、マンコ爆破されて殺されてしまいました。あの女の人を助けられませんでした。でも、あの女の人は私が殺された時、まだ息がありました。菜緒さん、私が死んだ時にまだ生きていれば、その人は助ける事が出来るんですよね」

「う、うん、大丈夫。遥ちゃんが殺された時に生きていれば助けられるよ」

「良かった。それで皆さんに加勢をお願いしたいのです。力を貸して下さい。もちろん、私には敵の数も場所も分かっていますので」

「遥が殺されるとなると相当な敵だろう。パズスやリツコたちも呼んだ方がよくないか」

エレシュキガルが提案するが、遥は恥ずかしそうに答える。

「いえ、敵はデビル三体です。進化型ではなく通常のデビルですね」

「そんな普通のデビルにマンコ爆破されて殺されたのか。油断しすぎだな、遥」

エレシュキガルや菜緒、佳乃にじとっと冷たい目で見られて遥は小さくなっていた。

「そうだ、ウテルスネットワークで報告しておきましょう。二代目ウテルス、マンコ爆破されて死亡、皆さんも油断しないようにと」

佳乃がすぐにスマートフォンを操作し始める。

「ううっ、佳乃さん、それとても恥ずかしいですけど……」

「何言ってるの遥ちゃん。事実でしょ。それにきちんと報告して注意喚起しないとね」

佳乃の言葉に二の句が出ない遥だった。

「ドンマイだよ、遥ちゃん。エレシュキガルなんて何回も敗けて、それでも挫けずに強くなったんだよ」

「それは当てつけか、ウテルス。今のお前なら私の方が強いと思うがな。試してみるか」

エレシュキガルはバキバキと指を鳴らすが、菜緒は聞こえない振り

をしている。そして、サイボーグの手を上げる。

「それじゃ、早くデビル倒して女の人が被害にあう前に助けよう」

菜緒の号令で一同は、遥が惨殺された山中に向かった。そこで、デビル三体が呆気なく倒されたのはそのすぐ後の事だった。

番外編　二階堂遥の敗北（後書き）

お読み下さりありがとうございます。
たまに、また番外編を書くかもしれないので時々見にきてもらえると嬉しいです。
ありがとう御座いました。

1、囚われた遥（前書き）

二部の開始です。
ウテルスは完結させて二部を書く予定ではなかったのですが、またリョナ小説を書きたくなってしまい申し訳ありません。番外編で書いてもよかったのですが、どうせなら一部の黒幕との対決もきちんと書こうと思った次第です。
一部を読んでいてくれた方、新たに興味を持ってくれた方、お付き合い頂ければ幸いです。
念の為書いておきますが、この作品はグロ、スカ、変態シーンの連続です。エロいシーンなどありません。それは一部から変わりません。主人公はある理由（一部を未読の方もいると思いますので伏せておきます）で小学生女子ですが、ロリとのエッチシーンもありません。それを念頭に置いて読んで下さいね。
よろしくお願い致します。

1、囚われた遥

1、囚われた遥

二階堂遥は学校からの帰宅途中、何者かにつけられている気配を感じた。

・・誰っ？はぐれヴァギナか、はぐれデビル？・・

豪徳寺文月が倒れ、世の中に平穏が戻ったかに思えたが、まだまだ文月の管理から外れていたデビルや、やはりパズスやニヌルタ達の管理から外れたヴァギナが人間を襲う事件も無くなったわけではなかった。ヴァギナ対策委員会は引き続き警察とも協力して警備に当たっている。そして、リツコの研究所も今では国からも補助を受け大きく成長していた。ある程度平和を取り戻したと思われる世界で、依然として警戒が解かれないのは、一般には知らされていないが本当の黒幕の存在があるからである。その黒幕を倒し、悪の芽を駆逐するまでは気が抜けないのであった。

遥は、わざと急に走ったり、立ち止まってみるが、やはり何者かの気配は消えなかった。

・・バカな奴ね。私をウテルスだと知らないのかしら・・

何時でも対応出来るように遥は警戒しながら歩いていく。すると急にコツコツと速足で背後から近付いてくる者があった。

・・この気配、人間ではない。足音からしてヴァギナでもない。デビルか……・・

遥はウテルスの力を解放し、振り向きざまに拳を叩き込んだ。つもりであったが、そこには何もいない。

・・えっ、どういう事？・・

遥が一瞬気を抜いた瞬間、股間に激痛が走った。

「えぐうぅぅぅーーっ！」

股間を両手で押さえて飛び上がった後、遥は道路に転がりのたうち回っていた。その遥の両手が掴まれカチッと手枷が装着される。そして、遥の足首がそれぞれ持たれ、大きく開脚された。その遥の足首にも足枷が装着され、さらに足枷の間に不思議な輝きを放つ金属状の棒が取り付けられ、遥は足が閉じられないようにされてしまった。遥のミニスカートは大きく捲れ上がり、白い綿の下着が露に晒されている。

・・一人じゃなかったんだ・・

遥は今更ながら自分の迂闊さを悔やんだ。無敵の力を持つウテルスに成り、慢心していたのも確かだろう。豪徳寺文月を倒した事で、油断がなかったとも言えない。その、押さえ付けられている遥の耳に、コツコツと響くハイヒールの音が聞こえてきた。その音は遥の大きく開脚された足の前で止まった。遥は顔を上げて、その人物を見て驚愕した。

・・嘘だ、この目で見たんだ。あの女が滅びるところを・・

遥の瞳には、倒した筈の豪徳寺文月が映っていた。

「豪徳寺文月っ、なぜ生きているのっ。お前はエレシュキガルさんに肉片に変えられ消滅したはず。私も、この瞳で見ていた」

「豪徳寺文月?誰、その女。そんな女は知らないわ。私は同じ豪徳寺ですが〝皐月〟。豪徳寺皐月ですよ」

皐月と名乗った女は遥を見下ろして残酷に笑いながら言う。その姿は、豪徳寺文月にそっくりだった。そこで遥はリツコの言葉を思い出した。豪徳寺文月は、元凶の豪徳寺葉月のクローンと言っていた。

・・この皐月という女もクローンなんだ。だとしたら危険な女だ。ここで倒しておかないと・・

遥はウテルスの力を最大まで高め、押さえ付けている男を倒し、皐月も倒そうとした。が、力を出しても手枷も足枷も破壊できない。

「あらあら、可哀想。残念、あなたはもう無力ですよ。その装着した手枷と足枷は、あなたの力では壊せない。私の研究所に残っていたデータで、ウテルスの力はどれくらいのパワーがあるのか解析済みですからね。どんなに暴れても無意味です。もう、あなたはただの女の子と同じですよ」

皐月は勝ち誇ったように遥を見下ろし、遥の股間に目を向ける。

「このまま研究所に運び込もうと思っていましたが、せっかくですから少し痛め付けてから運びましょうかね」

皐月は、遥の股間目掛けて足を振り上げると思い切り蹴りを叩き込んだ。

ドスゥッ！

「ひぎぃぃぃぃーーっ！」

遥の膣に皐月のヒールの爪先がめり込んでいる。

「ああ、いい感触に、いい反応ですね」

ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ！！

「ひぃぎゃあぁぁぁーーーーっ！！」

連続で性器に蹴りを入れられ遥は口から泡を吹き始めていた。

「いけない、いけない。壊してしまっては研究する事が出来ませんね」

皐月は自分を落ち着かせ、デビルに遥をこのまま研究所に連れ去るよう指示した。デビルは遥を持ち上げると車に向かって歩き出す。

「さて、二階堂遥さん。あなたをこれから研究所でウテルスの力の秘密を解明する為、解体していきます。ああ、大丈夫。生きていないと秘密が解明出来ないと思いますから、殺さないように生かしたまま解体していきますからね。死ぬ心配はないと思いますよ」

皐月の言葉で遥は狂ったように泣き叫び暴れたが、ワンボックスカ

ーの後部に詰め込まれ、何処かへ連れ去られて行った。

★　★　★　★

「遥ちゃん、遅いね」

「そうですね。時間にルーズな初代様と違い2代目の遥さんは、きっちりと時間通りに来るのですがね」

「佳乃さん、その言い方悪意を感じるよ」

菜緒は佳乃を睨むがエレシュキガルは爆笑していた。パズスは苦笑いし、ニヌルタも腹を抱えていた。伊東は何やら変な機械を操作し悪戦苦闘していた。

「あははっ、確かに菜緒は時間を少しは気にした方がいいな」

エレシュキガルにも指摘され菜緒は膨れていたが、そこへ白衣を着たリツコがコツコツとやって来る。

「おやっ、まだ揃っていないのか。遥が遅れるとは珍しいな」

ここは西園寺グループの研究所。今日はここでの定例会議の日だった。遥以外のメンバーは揃ったが、肝心の遥がいない事には会議を始められない。各々、コーヒーを飲んだり、会議の資料に目を通していると、部屋の中央にバチバチと電磁場が発生した。全員が離れて見守っていると何かが転送されてくるようだった。

「ここの座標を知っている者は、そういない筈ですが、一体なんでしょう」

西園寺が首を傾げるが、空間転移された物は床にポトッと落ちていた。

「メモリーのようですね」

西園寺は、念のためウイルスを警戒し、他の機器とは接続していないスタンドアローンの機器でメモリーを再生する。モニターに映し出されたそれは、何処かの研究所のようであった。その中央の台の上に全裸の女性が大の字に拘束されている。頭の部分は黒い箱のようなものが被せられていて顔は見る事が出来なかったが、その華奢な体つきに、少し膨らんだ胸、ツルツルの恥丘から察するに、まだ幼い女の子であると推察出来た。

「何、この映像。カタストロフ教団の残党の仕業なの」

佳乃が声を上げるが、他の者も何か嫌な予感がしてモニターから目が離せなかった。少しするとモニターの中で大の字にされている女の子に向かって、アームに取り付けられた回転ノコギリが四方向から迫ってきた。回転ノコギリはそれぞれ、少女の右肩、左肩、右太もも、左太ももに狙いを付けているようだった。そして、回転ノコギリの付いたアームが動き出す。それは予想通り少女の四肢を切断するように動き、少女の体から血飛沫が上がった。音声は消されているのか少女の声は聞こえてこないが、少女が絶叫しているのは間違いなかった。程なくして少女の四肢は切断されてしまった。まるでダルマのようになった少女の体はビクンビクンと痙攣している。そこへ、コツコツと黒いスーツに黒いタイトスカートの女が歩いて来た。そして、カメラの方に顔を向ける。

「バカなっ、なぜこいつが生きている」

エレシュキガルが立ち上がっていた。豪徳寺文月。エレシュキガルが倒し肉片に変えた筈だった。すると今まで消えていた音声が突然入ってくる。

「皆さん、初めまして。豪徳寺“皐月“と申します。これから、よろしくお願いしますね」

皐月は、ニッコリと微笑むと少女に被せてあった黒い箱を取り除く。皐月が登場してから全員がまさかと思っていた顔がそこにあった。四肢を切断され無惨にダルマにされていたのは、二階堂遥だった。

2、性器解体される遥（前書き）

この作品自体がグロ、スカ多めですが、今回は丸ごとグロなので苦手な方は飛ばして下さい。
菜緒やリツコは登場しません。遥が酷い目に遭うシーンばかりです。

2、性器解体される遥

2、性器解体される遥

皐月の研究所で四肢を切断されダルマにされた遥は泡を吹いて失神していたが、すぐに覚醒させられ、また絶叫していた。

「ふふっ、お目覚めですね。それでは解体を始めていきましょうか。ああ、そうそう。もう分かっていると思いますが、万が一暴れられても困りますから、腕と脚は切断しておきましたからね。良いですか、自分は正義のヒロインなんだから、そんな酷い事はされないなんて思ってないですよね。自分だけはなんて思うのは人間の悪癖ですよ。それでは、まず生殖器官から解体しますよ。一番何かウテルスの秘密がありそうな部位ですからね」

皐月はダルマになり何も抵抗出来ない遥の体も厳重に動けないよう固定している。それだけウテルスの力を警戒しているという事だった。遥は鋭いメスを持った皐月を見て過呼吸になっていた。

「はひゅーっ、はひゅーっ、はひゅーっ」

涙を流し震える遥の臍の下、正中線にメスを当て切り裂こうとした時、皐月の頭に遥か昔の記憶が甦る。それは、臍から恥丘まで切開された少女がぶりぶりと大便を漏らしている記憶だった（注）

・・これは一体、なんの記憶？・・

皐月は訝しみながらも、大便を漏らされては汚れてしまうと、先に遥の腸内を浣腸して汚物を抜いておこうと考えた。すぐにグリセリンを用意し、シリンジで遥の肛門から注入する。

ギューーーーッ！

５００ミリのシリンジがすぐに空になる。皐月は、すぐにまたシリンジにグリセリンを満たし遥の肛門から注入する。皐月はそれを繰り返し、遥の中に3リッターものグリセリンを注入してしまった。そして、ぷっくりと膨れた遥の下腹部を皐月はグイッと思い切り押す。

「うぐうぅぅぅーーっ！」

ブシャァァァーーーーッ！！

遥の肛門から汚物が激しく噴き出していた。そして、しばらく汚物を出し続ける。遥の肛門から何も出なくなると、皐月はまたシリンジで浣腸した。それは、遥の肛門から排泄されるものが無色透明になるまで続けられた。

「さて、汚物は出しきったようですから始めますか」

皐月は再びメスを握り、遥の臍の下にメスを当てる。そこで皐月はまた手を止めていた。

「いけない、いけない。私とした事が忘れていました。私も興奮しているのでしょうかね」

皐月はメスを置いてマジックペンを持つと、遥の臍の下から、股間の割れ目、陰核の上までキューッと黒い線を引いた。そして、満足したように頷くとメスを描いた線の上部、臍の下に当てる。

「お、お願いします。許して下さい。何でも話します。ウテルスの秘密も話しますから、許して下さい。助けて下さい。お願いしますぅ。マンコ解体されるなんて怖いぃぃっ。そんなの許して、お願いしますぅ」

遥は号泣しながら必至に皐月に許しを乞う。皐月が普通の人間であれば、まだ小学生の遥に泣いてお願いされれば心が動くものであるが、皐月にはそもそも心などというものが存在しない。遥が何を言おうと止める気など毛頭なかった。

「あらあら、正義のヒロインがそんな秘密を漏らすなんて言ってはいけませんね。それに、あなたに話して貰わなくとも、私は自分で発見する事に意義を見いだすタイプなんですよ。さあさあ、もう諦めて覚悟なさいな。生きながら性器解体されるという普通には経験出来ない事を経験出来るのですよ。もっともあなたは性器解体だけじゃなくて他の処も解体されますからね。泣くのではなく、もっと喜んで下さいよ」

皐月は、もう聞く耳持たないという雰囲気でメスに力を入れる。

プツッ

「あぎゃあぁぁぁぁーーーーっ！！」

臍の下にメスが突き刺され遥が絶叫する。

「いだいぃぃぃっ！ゆるじでえぇぇぇっ！おねがいじまぢゅうぅぅぅっ！！！」

遥が泣き叫ぶが皐月はツゥーッと黒い線に沿って正中切開していく。遥の切開された下腹部から血が流れ出す。

「はぶうぅぅぅっ、いじゃいぃぃぃーーーっ！」

皐月は泣き叫ぶ遥の切開した下腹部に開創器を挿入し広げていく。そして、白っぽい皮下脂肪を掻き分け遥の子宮を確認する。

「おぼぼぼぼぼっ！おっぼおぉぉぉぉーーーーっ！！」

絶叫する遥の体はビクンビクンと痙攣していた。皐月は指を鳴らしてスタッフを呼ぶと遥の静脈に点滴針を刺し点滴を開始する。そして、遥の痙攣が収まったのを確認した皐月はニトリルグローブを着け両手を遥の腹の中に入れると子宮を掴んだ。

「目視と触診では普通の子宮ですね。変わったところもありませんね」

しばらく遥の子宮を触っていた皐月はスタッフにクーパーを要求する。

「いずれにしろ摘出して調べましょう」

皐月はスタッフから受け取ったクーパーで卵管をジョキンと切断する。そして、子宮頸部と繋がる膣もジョキジョキと切断していった。

「あっびゃあぁぁぁぁぁーーーーっ！！じぬうぅぅぅーーっ！！

だれがぁ、だじげでえぇぇぇーーーっ！！！」

皐月は遥の絶叫などまるで無視して、子宮を摘出してしまう。そして、次にまた遥の下腹部に手を突っ込みコロッとした親指大の卵巣も抉り出してしまった。

「ふうむ、可愛い卵巣ですね。でもこれも普通の卵巣のようですね……。取り敢えず全て摘出しておきますか」

皐月は遥の恥骨も剥がし、膀胱も尿管と尿道を切断し取り出す。更に残っていた膣も摘出した。

「膣壁に何か秘密があるのでしょうかね。開いてみますか」

皐月はトレイの上に乗せた遥の膣をメスで縦に裂いて広げてみる。しかし、そこにも特別なものは何もなかった。念のため皐月は膣壁の粘液を採取して試験管に入れておいた。更に遥の外性器も全て切除してしまう。陰唇、陰核、それに膣前庭もくり貫いてしまった。遥は白目を剥いてぶくぶくと泡を吹いていたが、皐月は次の作業に移る。

「性器には何もないようですね。となるとエネルギーを吸収する腸が怪しいですか。あれだけのウテルスのパワーを引き出す為には相当なエネルギーが必要ですからね」

皐月は遥の肛門の周りにメスをドスッと突き刺し、そのままぐるりと肛門を切っていき、遥の肛門は丸く切り取られてしまった。皐月はそのまま肛門を抜き出し、肛門に繋がっている腸を引き摺り出す。直腸、S状結腸、下行結腸、上行結腸、ずるずると遥の腸が引き摺り出されていく。

「あぎゃあぁぁぁぁーーーーっ！！あばばばばばばばばばっ、あばあぁぁぁぁぁーーーーっ！！！」

腸を引き摺り出される激痛に遥が再び絶叫する。それは、まさに断末魔の悲鳴といってよかったが皐月は苦笑いする。

「本当にうるさい子ですねぇ。正義のヒロインたる者がもう少し静かに我慢出来ないものですかねぇ。そんなに騒がなくても、まだ殺しませんよ。心臓と脳は動かしておいてあげますよ。まあ、最後には脳も解体してみますがね」

遥の抜き出した腸をクーパーでジョキンと切断した皐月はまたマジックペンで遥の首の下から臍まで黒い線を描きメスを当てる。

「今度はここから切開してみましょうか」

皐月は残酷に呟くが、遥はもう皐月の呟きなど耳に入らなかった。絶叫する遥の首下、正中にメスを当てた皐月はメスに力を入れ、スーッと正中切開していく。そして、最初に切開した臍の下まで切開し、遥の身体の正中線は完全に切開された。

（注）「檻の中の幸福、三人少女の章」で豪徳寺葉月に処刑された柚月である。柚月は下腹部を切開され、子宮、卵巣、膣、膀胱を摘出された際に大便を漏らしていた。

3、終わらない惨劇（前書き）

前回からの続きでグロシーンばかりです。
誤って来てしまった方は読まないよう飛ばして下さい。
遥が最後まで壊されてしまいます。エロいシーンはありませんので気を付けて下さい。

3、終わらない惨劇

3、終わらない惨劇

遥の首から下に引かれた黒い線に沿って、遥の体が正中切開された。皐月は切開した胸の部分に両手を入れ指をかけると、ガバァッと遥の皮膚を引き剥がしていく。

「あぎゃあぁぁぁぁーーーっ！うぼぼぼぼぼぼぼうぅぅぅっ！」

絶叫。文字通りの絶叫を発する遥の生皮を皐月はバリバリと容赦なく剥がしていく。遥の筋肉組織がべろりと剥き出しになり、四肢も切断され腹の中の臓器や生殖器も抜かれている遥は、断末魔の悲鳴をあげ続けていた。それでも遥が、ショック死したり発狂したりしないのは、大量の薬剤が注入、投与され遥を生かす為に手が打たれているためである。遥は、こんな状態にされながら、死ぬことも狂うことも許されず、残酷に生き地獄を味わっていた。

「ごろじでえぇぇぇっ！もお、ごろじでぐだぢゃいぃぃぃぃっ！！あぶうぅぅぅっ、あっぶうぅぅぅっ……」

「うるさいわね。少し静かにしなさい。あなたは無敵の少女戦士ウテルス。正義のヒロインでしょう。自覚なさい。みっともないわよ。まあでも正義のヒロインがマンコを犯されるならともかく、体をバラバラに解体されるなんて、あまりないでしょうからね。でも過去にはヒロインが殺されて切断されて晒されたり、食べられてしまう

漫画もありましたからね。前例がない訳ではありませんよ。しかし、うるさいものはうるさいですわね」

皐月は遥の喉にメスを突き立て、遥の声帯も破壊してしまった。

「口を塞ぐより手っ取り早いでしょう。どうせ残った頭部も解体していくし……」

「おぼぼぼぼぼぼぼぼっ、ごっばぁぁぁぁっ！！」

遥は意味のない音を喉から発し、口から大量の血を吐いていた。

「ごばっ、ごばっ、ごばっ、ごばっ」

苦しげに大量に血を吐き続ける遥の様子を見て皐月はまたスタッフに指示を出す。

「あらあら、苦しいわね遥ちゃん。可哀想に……。でも大丈夫よ、酸素は直接、血管に送って上げるから。だから、肺も摘出して調べさせて貰うね」

皐月は遥の肺も気管から切断し摘出するとトレイに載せる。そして、次々に遥の臓器を抜き取っていく。

「脳にだけ血液がいけば良いから、あとは鉗子で止めておくわ」

皐月は遥の血管を鉗子で挟んでいくと、次に遥の顔面に黒い線を引き、またメスを手にした。何をされるか理解した遥の瞳から大量の涙が流れ落ちる。

「じゃあ、お顔の皮膚も剥いであげるわね。この可愛いお顔の下から何が現れるかしら、楽しみ」

「おぼおうぅぅぅぅっっっ！！」

目の前に迫ってくるメスの冷たい輝きに遥は大量の涙と鼻水を流し、もう喋れない破壊された声帯で絶叫する。しかし、皐月は遥の額、正中にメスを当てた。

プツッ

ツゥゥーーーーッ

遥の顔面の正中線が切開される。皐月は遥の額に指を入れると、顔面の皮膚も剥がしていく。

「ぼぼぼぼぼぼぼぼぼっ、ぼぼぼぼぼおぉぉぉっ！！！」

まるで獣のような声を上げる遥の皮膚をずるりと引き剥がした皐月は、そのまま遥の頭部の皮を全て剥がしてしまう。皐月は筋肉と頭蓋骨が剥き出しになった遥の頭部を楽しそうに見つめていた。そして、皐月はドリルを持つと遥の頭蓋骨の周囲に穴を空けていく。ぐるりと穴を空けた皐月は、カパッと帽子を取るように遥の頭蓋骨頭頂部を取り外した。遥の脳が皐月の前で震えている。この白い脳が破壊されれば遥という人間はこの世から消滅する事になる。心臓は動いていても、もうそこには二階堂遥という人間は存在していない。

・・さあ、楽しみますか・・

皐月は両手に電極棒を持つと唇に笑みを浮かべた。皐月は遥の脳に

直接通電して反応を楽しむつもりだった。

「もともと脳はニューロンが電気を発生させていますが、それ以上の電気をあなたの脳に通電してみますね。シナプスが崩壊しないように気をつけますが、壊れたら仕方ありませんね」

皐月は遥の脳の前頭葉に電極を差し込むと通電を始めた。遥は成す術もなく皐月に脳まで壊されていく。

「ウテルスは不死身という事ですが、脳を破壊されても平気なのでしょうかね。ワクワクしますね。まず、この前頭葉を焼いてみますか。思考力や判断力が失くなる筈ですが、どうでしょう。楽しみですね」

皐月に遥の脳に電極を刺したまま電圧を上げていく。

「ぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼうぅぅぅぅっ」

遥の喉から意味のない音が漏れ、ポンッと眼窩から眼球が飛び出してしまった。

「あらあら、少し強すぎたかしら」

そう言いながら皐月は電気を弱める事もなく、飛び出した遥の眼球を掴むと、ブチッと視神経を引き千切りトレイに載せる。

「眼球がウテルスのパワーの源とは思えないですが、一応開いてみますか」

皐月はトレイに載せた遥の眼球をメスでスパッと二つに切り裂く。

切開された眼球は硝子体が流れ出してしまい潰れてしまった。

「やはり、何もありませんね」

皐月は、もう遥の眼球は放り出し、また脳の破壊を楽しみ出した。

★
★
★
★

「どうだ、遥の拉致監禁されている場所は分かったのか？」

リツコが西園寺に尋ねるが、西園寺の返答は喜ばしいものではなかった。

「スマートフォンの位置情報から、遥さんが拉致されたと思う場所は掴めたのですが、そこから先が皆目見当がつきません。油断しました。遥さんの体にはＧＰＳ　追跡装置を埋め込んでありません。まさか無敵のウテルスさんが狙われるとは思わなかったもので……」

「こうなれば、その拉致地点から衛星画像で探していくより他ありませんな。それは私と野上と委員会の面々で当たります。怪しい場所がありましたら連絡しますので皆さんは現地に行って確かめて下さい」

伊東はそう告げると、佳乃と共に急いで委員会に戻って行った。残されたメンバーでパズスとニヌルタは一度戻り拉致地点の周囲を聞き込みしてみると言い駆け出した。菜緒とエレシュキガルは遥が四肢切断されている動画をチェックしていた。この中に何かヒントになるものはないかと画面の隅の細かな部分までチェックするが、さ

すがに皐月がそんな初歩的なミスを犯す筈もなく、動画から得られるものは何もなかった。

「なあ、菜緒。最悪、遥が殺されても大丈夫なんだろう？確かウテルスの力で時が戻ると言っていたとおもうが……」

エレシュキガルの問いに菜緒は頷くが、同時に暗い顔をした。

「うん、ウテルスには〝エターナルリバース〟という力があるから殺されても生き返るというか、その前に戻るんだよ。殺されればね」

「どういう事だ」

菜緒の言い方にエレシュキガルが首を捻る。

「もし遥ちゃんがギリギリ生かされていたら、その力は発動しないの。どんな残酷な事をされても、そのままその拷問を受けるしかないんだよ。それに上手く力が発動出来たとしても、殺される寸前の記憶は残っているの。だから自分がどうやって殺されたのか明確に憶えているんだよ。その痛みまで鮮明にね。だから、あまりに酷い殺され方をしたら、戻ったとしても心が壊れてしまうかもしれない。そして、あの豪徳寺皐月という女は、それをやりそうな気がするんだよ。遥ちゃんが、もう普通に暮らせなくなる程の凄まじい拷問を平気でやりそうだもの。遥ちゃんが壊れてしまったら私の責任だ。私がウテルスだったから遥ちゃんを巻き込んだんだ。ウテルスにならなければ遥ちゃんは、こんな目に遇わずに済んだんだよ」

菜緒は、四肢を切断されてしまった遥が心配で涙が流れ出していた。エレシュキガルは、そんな菜緒の肩をポンッと叩く。

「遥がウテルスになったのは菜緒の責任ではないだろう。それに大丈夫だ、その前に助け出すさ。さあ、もう一度動画をチェックしよう。私たちに出来る事をやろう。元気を出せ。パズスもニヌルタも佳乃も伊東も頑張っている。必ず見つかるさ」

エレシュキガルは菜緒を慰めるが、もうそれは手遅れだといえた。確かに遥はまだ生きていたが、それは心臓が動いているという事だけだった。この時、四肢を切断されていた遥は、もう生きながら解体され臓器も摘出され脳も壊されようとしていた。遥の僅かに残っている意識は、自分の体が壊されていく圧倒的な恐怖と絶望と激痛で、ただ早く死にたいという意識しかなかった。

・・もう嫌だ、もう嫌だ。誰も助けてくれない。どうして私まだ生きてるの。こんなに体、解体されて生きてるのおかしいよ。復活しても二度と逆らいませんから、もう殺して下さい。奴隷として扱って下さって結構です。だからもう殺してく……・・

そこで、遥の最後の望みも叶えられず脳が破壊される。電極で脳を焼かれ、遥の意識は静かにバラバラに拡散するように底無しの闇に堕ちていき、もう二度と戻る事はなかった。そして、2代目ウテルス二階堂遥は心臓が動いているだけの、四肢を切断され内蔵も抜き取られ皮も剥がされ脳も壊されたただの醜い物体になっていた。皐月はその遥の体を溶液を満たしたカプセルに収納し、観察する事にした。

「この状態でもウテルスは復活出来るのですかね。実に楽しみです」

カプセルは、万が一ウテルスが復活したとしても破壊出来ない強度を備えていた。皐月は撮影装置をセットすると笑みを浮かべながらドアを出て鍵をかけると、カツカツとヒールの音を響かせ歩いてい

った。

4、永遠の拷問玩具（前書き）

前回に続いてリョナ多めなのは勿論ですが、スカ要素も多めです。
今回も遥が痛めつけられるシーンばかりです。苦手な方は飛ばして下さい。

4、永遠の拷問玩具

4、永遠の拷問玩具

皐月は目を疑っていた。

・・本当にこんな事が起こるのですね。まったく、恐ろしい。ウテルスの力というのはとても計り知れない強大な力という事ですか。ですが、残念ですね。せっかくのパワーも、それを使うのがこんな子供では宝の持ち腐れです・・

遥の体を収納したカプセルの中では、なんと遥の肉体が修復されていた。スキャンしてみても骨も内蔵も元通りに戻っている。切断された四肢も戻っていた。

・・失われた部分まで戻っている。これはまさに再生ですね。脳まで再生していますが記憶の方はどうなのでしょう。それにしてもこれは最高の玩具を手に入れた気分ですね。何度でも再生するなら永遠に痛めつけて楽しめるではありませんか・・

皐月は遥の体をカプセルから外に出し、ウテルスの力を封じ込める手枷と足枷を装着し、頬を激しく打った。

「あっ、うっ……」

目を開けた遥は、皐月の顔を見て悲鳴を上げる。

「ひいいいいいーーーっ！もう許して下さい、お願いしますぅぅっ」

遥の体は恐怖で激しく震え、引きつった顔の瞳からはポロポロと大粒の涙を流していた。そして、股間からは、ショォォーーッと湯気を立てて尿が溢れだし、床に水溜まりを作っていた。

「復活していきなりお漏らしとは躾がなっていませんね。舐めなさい。早くっ。自分で漏らした尿を綺麗に舐めるのですよ」

「ううっ……。助けて、もう嫌だ……」

遥はもう皐月の姿を見ただけで怯えてしまって体が震え動かなかった。

「私の命令が聞けないのですね。それなら、また正中切開して少しずつ臓器を摘出してあげましょうか。どちらがいいですか」

「ひいいいいいーーーっ！許して下さいいいいっ！舐めますっ、何でも舐めますぅぅっ」

遥は四つん這いになると震えながら、自分の漏らした尿を舐め始めた。

「ふふっ、無様ですねぇ、ウテルス。正義のヒロインが自分の漏らした尿を舐めているのですからね。この姿を全世界に発信してあげましょう。ほら、顔をあげなさい」

皐月は顔を上げた遥の、涙を流し恐怖で怯え震える顔ををアップで

撮影し、また尿を舐めさせる。

「舐めるだけではなく、すすりなさいよ。まったく頭が回らないメスですね」

皐月に叱責され、ビクッと体を震わせた遥は床に口をつけると尿を吸いだした。

チュクッ、チュクッ、チュクッ、チュクッ

「いいわね。それじゃ、そのまま排便しなさい。返事はっ！」

「は、はい、皐月様……」

しかし、遥は息んでも大便は出てこなかった。

「何やってるの、使えないわね。すぐ出せないなら、また肛門をくり貫いて腸を引き摺り出してあげるわ」

「ひいいぃぃぃーーーっ！お許し下さいっ、今ウンコ出しますからあぁぁっ！」

遥は腹を擦り、肛門に指を突っ込んで刺激する。もう必死だった。生きながら腸を抜かれる地獄の責めをもう味わいたくない。その一心だった。その遥の必死の努力が実って、ようやく遥の肛門が大きく拡がり大便が顔を出した。

ぶり、ぶり、ぶり、ぶりぃぃっ

遥の肛門から汚物がぼとぼとと落ちる。

「いいですねぇ、正義のヒロイン、ウテルスの排便シーン。それでは上と下の口でウンコを残さず食べて貰いましょうか。まず下の口に一杯まで詰めなさい。残りを上の口で全部食べるのです」

「うっ、うっ、ううっ」

遥は泣きながら自分の膣に大便を詰め始める。

「ほら、ちゃんとカメラを意識しなさい。マンコの穴にウンコ詰めてるところをしっかりと良く見せなさい」

遥は皐月に命令されるがままに自分の膣に大便を詰めていく。そして、遥の膣に大便が山盛りに詰められると皐月は針と糸を持ち、遥に動かないよう命令する。そして、遥の股間の小陰唇を摘むと針を突き刺した。

「ひぎぃぃぃっ！」

遥が悲鳴を上げるが皐月は、そのまま針を貫通させ、ズルズルと糸を通していく。そして、遥の性器をチクチクと縫っていった。遥は大便が膣から落ちないように性器をしっかりと縫い合わされてしまった。

「さあ、残ったウンコを残さず食べなさい」

「ううっ……」

遥は泣きながら手で大便を取るが口の前まで持ってきてから、なかなか口に入れる事が出来なかった。

「命令を聞けないなら切開するしかないわね。楽しみだわ。今度はマンコの穴から切開していきましょう」

「嫌あぁぁっ！お願いしますっ、許して下さいぃぃっ」

遥は泣きながら狂ったように自分が排泄した大便を口に入れる。そこにはもうスク水少女戦士ウテルスとして活躍していた面影は微塵もなかった。そして、遥は自分が排泄した汚物を全て口に入れ飲み込んでいた。

「やれば出来るじゃないの。初めから素直にやれば良かったのに本当馬鹿ね。それに、もう遅いわね。あなたのマンコは切開します」

「嫌だあぁぁっ！何でもじまぢゅがらあぁぁっ！おねがいじまぢゅうっ！おゆるじぐだぢゃいぃぃっ！」

遥は、みっともないほど無様に泣き叫び皐月にすがり付くが、皐月はそんな事で許すような人間ではなかった。

「なら一回だけチャンスをあげましょう。この私の命令が聞ければ今回の切開は許してあげますよ」

皐月は残酷に笑って遥の首輪に付いた鎖を持つ。遥は鎖を引かれヨロヨロと泣きながら皐月についていった。そして、窓一つない証明が一つだけ点いた暗い部屋に連れていかれる。その部屋の中央には台に設置された回転ノコギリがあった。通常は木材などを切断する回転ノコギリだが、ここでは当然そのような意図で置いてあるとは思えなかった。皐月は遥の両腕を後ろ手に拘束すると、小さな木片を遥の口の前に出す。

「さあ、これを咥えなさい」

遥は口を開けて皐月が差し出した木片を咥えた。すると皐月は回転ノコギリのスイッチを入れ、楽しそうに笑った。

「それでは命令します。この回転ノコギリに跨がって自分でマンコを切断しなさい。お臍まで自分で切断したら許してあげますよ。どうです、優しいですよね、私は」

「ううっ……」

遥の瞳から大粒の涙が零れ落ちる。遥は自分で性器を切断するか、皐月に性器を切開されるか、選択を迫られていた。いずれにしても自分の性器が破壊されるのには間違いなかった。それでも遥は自分で性器を切断する方を選んだ。皐月に切開された場合、切開だけで済むとはとても思えなかったのだ。

「早くしなさいっ、また全身解体してあげましょうか」

皐月のイライラした様子に遥は震え上がり、回転するノコギリの上に立った。そして、腰を落としていく。

チュイィィーン

遥の性器の割れ目に高速で回転する刃が僅かに触れる。

「ふぐうぅぅっ」

その恐怖で遥は腰を上げてしまっていた。

「なにやってるの、まったくだらしないわね。次出来なかったら、また解体するわ。今度は臓器摘出じゃなくて壊していってあげる」

「ふごうぅぅっ」

遥は嫌々というように激しく左右に首を振る。遥の涙が左右に飛び散りキラキラと輝いていた。

「いい、位置を決めたらきちんと正面を向いてマンコを切断しなさい。カメラの方を向いてあなたの苦しむ顔を見せるのですよ」

再び回転ノコギリの上に跨がった遥は、背筋を伸ばし顔を上げ少しずつ腰を降ろしていく。遥の鼻息がどんどん荒くなっていった。

「ふひぃっ、ふひぃっ、ふひぃっ」

・・怖いぃぃっ、もう許して下さいぃぃっ、もう嫌ぁぁぁっ、誰かぁ助けてえぇぇっ・・

遥は心の中で必死に助けを求めるが、救いなど来る筈がなかった。

チュイィィーーン

また、微かに遥の割れ目に高速で回転する刃が触れる。遥の性器を縫っている糸は簡単に切断されてしまった。そこで遥は、咥えている木片を思い切り噛んだ。そして、一気に腰を降ろしていく。

ヂュイィィィーーーン!!

「おぶうぶぶぶーーーーーっ！！」

遥の割れ目が本当の割れ目になり、血と肉片が周囲に飛び散る。

「おぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶ、ぶぶうぅぅっ！！」

遥は思い切り木片を噛み締めて下腹部が切断される激痛に耐えていた。遥の膣も子宮も真っ二つになり、切断面から腸が飛び出していた。そして、もう臍の下まで遥の下腹部は切断されていた。

「楽しかったわ。よく出来ました。これ以上切断すると死んでしまいますからね。ここで止めておきますね」

皐月は回転ノコギリのスイッチを切ると遥のまだ小学生の小さな体をグイッと軽々と横に放り投げる。遥の切断された下腹部から内臓が零れ落ちていた。遥はビクンビクンと大きく体を痙攣させている。

「前回は心臓だけ動かしておいたら復活しましたが、心臓を動かす脳幹を破壊したらどうなるでしょう。試してみますか」

皐月は痙攣する遥の体を仰向けに固定し、遥の頭の上に１０トンはあるコンクリートブロックをクレーンで吊り下げる。

「さあ、それではあなたの頭を潰してみますよ」

僅かに意識のある遥は自分の顔の上で揺れている巨大なコンクリートブロックを見つめていた。

・・私、あれで頭潰されるんだ・・

遥は嬉しかった。前回のように長時間苦しまずに済む。あれなら一瞬で頭が潰され意識がなくなる。すぐに楽になれる。

・・早く、あれを落として下さい・・

遥がそう思った時、皐月がクレーンのボタンを押した。その途端巨大なコンクリートブロックが高速で落ちてくる。迫ってくるコンクリートブロックを見て遥は喜びで一杯だった。

・・早く私の頭を潰して……・・

グシャッッッ!!

遥の頭はトマトのように潰され周囲に血と肉片をばら撒いていた。頭を潰された遥の体は、壊れたロボットのように激しく手足を上下左右に動かしている。その哀れな遥の姿を皐月は笑いながら見ていた。そして皐月は、遥の体をまたカプセルの中に収納していった……。

5、繰り返される処刑

5、繰り返される処刑

西園寺グループの研究所で動画をチェックしているエレシュキガルのスマートフォンが鳴り出した。往年のプログレッシブロックのバンド、キングクリムゾンの「21世紀のスキッツォイドマン」のメロディだ。

「うん……、ニヌルタからだな」

エレシュキガルは席を立つと部屋の隅に行き、ニヌルタと会話していた。エレシュキガルは誰からの着信かメロディで分かるように、それぞれ変えていると言っていた。

・・ニヌルタさんの着メロは「21世紀のスキッツォイドマン」なんだね。なんか可哀想・・

菜緒はしみじみ思っていた。この曲は昔「21世紀の精神異常者」というタイトルだったが、レコード会社が差別用語と気を使ったのか、いつの間にか日本語訳ではなく原題をそのままカタカナに直したタイトルに変えられていた。菜緒は自分の着メロは何が使われているんだろう、と気にはなっていたが、ショックを受けたら嫌なのでエレシュキガルには訊かないでいた。そこへ、通話を終えたエレシュキガルが戻って来る。

「菜緒、遥を拉致した車の行方が分かったそうだ。委員会の伊東が衛生画像から見つけ出したとパズスに連絡があったそうだ。パズスとニヌルタはすぐに向かうと言っていた。私も向かうが、お前はどうする、菜緒？当然、デビルもいるだろう」

「私も行くよ。もうウテルスの力はないけど、リツコさんに造って貰ったこの体は、ある程度の戦闘力はあるから。遥ちゃんを早く助けないと、あの豪徳寺皐月に何をされているか分からないもん」

「良いのか……。見なければ良かったというものを見てしまうかも知れんぞ」

「ど、どういう事？……」

菜緒は、ドキッとした顔でエレシュキガルを見つめる。

「菜緒、お前も言っていただろう。遥が、もう普通に暮らせなくなる程の凄まじい拷問を受けてしまうのではないかと……。あの動画で遥は四肢を切断されてしまっていた。ウテルスが易々とそんな事をされる筈がない。おそらく何らかの方法で力を封じられているのだろう。そして、あの豪徳寺が四肢を切断したくらいで終わりにする筈がない。お前も考えているのだろう、菜緒。それ以上の凄まじい拷問、いや処刑に近いものを遥はされてしまっているのではないかと……。おそらく豪徳寺は、遥を生きながら解体したりするかも知れない。菜緒、お前は優しい。豪徳寺に解体されてバラバラになった遥の姿を見て、お前は耐えられるのか……」

「優しいね、エレシュキガル。大丈夫だよ。私も成長した。あの留美子ちゃんや量子ちゃんの処刑動画を観てしまった時とは違う。遥ちゃんが酷い姿にされていようと必ず助けだしたいんだよ。絶望だ

けの中に希望を与えてあげたいんだよ。それに私もエレシュキガルが言った事を考えていた。もし遥ちゃんが、そんな目にあっていたら体は復活出来ても、心が壊れてしまう。まだ小学生の遥ちゃんが、これから先、楽しい未来が待っている筈なのに廃人にされてしまう。だから、その前に助け出したいんだよ」

菜緒とエレシュキガルの予想は当たっていた。遥はもう体を解体され、脳まで破壊されていた。二階堂遥は、その心も壊され、皐月に絶対服従を誓う只の玩具にされてしまっていた。遥自身も、もう皐月に従順に従う事が自分の運命だと思ってしまっていた。そして、遥は今日も皐月に痛ぶられ体を破壊されているのである。

★
★
★
★

「あぶうぅぅぅーーーーっ！」

パシッ、パシッ、パシッ、パシッ、パシッ、パシッ、パシィィッ！！

遥は皐月に鞭で打たれ悲鳴を上げていた。両手を万歳のように上げ、足を大きく開いた彩音の股間、性器に一本鞭の激しい打撃が叩き込まれていた。まったく手加減する事なく容赦なく叩き込まれる鞭の打撃に彩音の小陰唇、大隠唇、膣前庭の皮膚は裂け血が飛び散っていた。

「ほら、撮影しているのですから、今何をされているのか自分で説明しなさい」

鞭を遥の性器に叩き込みながら、遥に命令する。

「ううっ、私、二階堂遥は、今、マンコを鞭で打って頂いています。マンコがとても痛いです」

遥は泣きながら答えると、さらに激しく性器に鞭が打ち込まれる。

「ああ、興奮する。もっと泣きなさいっ。もっと叫びなさいっ」

パシッ、パシッ、パシッ、パシッ、パシッ、パシッ、パシッ、パシッ、パシッ！

「あぶうぅぅぅーーーっ！マンコ、じぬうぅぅぅっ！ゆるじでぐだぢゃいぃぃぃっ！！」

皐月はここで一旦鞭を置くと、頭上に上げている遥の手枷に天井からの鎖を取り付け、腕を降ろせないようにする。そして、左右に広げた足首の枷にも鎖を取り付け、足を閉じられないようにした。

「あははっ、やっぱり我慢出来ないわ。あなたのマンコ、切開するね」

皐月が持ったメスの輝きを見て、遥は狂ったように叫び出す。

「いやだあぁぁぁっ！ゆるじでっ、ゆるじでぐだぢゃいぃぃぃっ！！」

遥は絶叫しガチャガチャと鎖を鳴らし、必死に逃れようとするが、ウテルスの力を封じられている遥の力では鎖を引き千切って逃げる事など出来ない。今の遥はただの小学生の女子なのだ。

「ほらほら、暴れると他の処も切れますよ。私は構いませんけれどね」

「ううっ、ゆるじでっ、ゆるじでぐだぢゃい、皐月様ぁ」

大人しくなった遥のツルツルの恥丘にメスを当てると皐月は、ツウゥゥーーッと遥の恥丘を切開していく。そして、そのまま隠核も膣前庭も会隠も切開し、肛門まで切り裂いてしまう。

「あびゃあぁぁぁっ、あびゃびゃびゃびゃびゃあぁぁぁっ！！」

ショォォォーーッ

ぶりっ、ぶりっ、ぶりぃぃぃっ

切開された遥の下腹部から血が流れだし、股間からは尿と大便が漏れだしていた。

「まったく締まりがないわね。まず、大腸を引きずり出してあげるわ」

皐月は、また遥の肛門をくり貫くと、遥の直腸を握りズルズルと引き出していく。

「おぶうぅぅぅっ！おぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶ、ぶっぶうぅぅぅぅぅっ！！」

遥は天を仰いで絶叫していた。皐月は遥の臀部から腸を垂らしたまま、今度は遥の膣前庭にメスを当て、ぐるりと膣の周りを切開して

いくと手を突っ込んでズボッと遥の膣を引き抜く。

「あびゃあぁぁぁぁっ、だじげでえぇぇぇぇっ、ゆるじでぐだぢゃいいいいいっ！！！」

絶叫する遥の股間から膣とともに子宮まで飛び出してしまっていた。

「あらあら、子宮まで出ちゃいましたね。せっかくですから子宮も抜いてあげましょう」

皐月は、あっさりと遥の子宮を膣諸とも抜き出してしまう。遥はもう白眼を剥き、口から泡を吹いて体を痙攣させていた。

6、撮影される遥（前書き）

引き続き遥に対する容赦ない暴力が行われます。
この作品としては軽い方ですが、グロ描写がありますので気を付けて下さい。

6、撮影される遥

6、撮影される遥

今日も遥は皐月に痛めつけられていた。もう、遥は皐月の姿を見るだけで、恐怖でチョロチョロと小便を漏らし、手足がブルブル震えて動けなくなっていた。

「許して、許して下さい。もう堪忍して下さい」

「あら、まだ喋れるのね。言葉も喋れなく成る程壊していってあげるからね。楽しみだわ、ねぇ遥ちゃん。それで今日も動画撮影を行うからね、よろしく遥ちゃん」

皐月は舌を出し唇を舐めると、そんな遥の体を立たせたまま大の字に拘束していく。そして、皐月はスタッフを４人、それぞれにニッパーを持たせ遥の手足の指を鋏ませていた。

「さあ、遥ちゃん。撮影を開始するからね。はい、笑顔、笑顔。笑顔を忘れないようにね。それじゃ、いくよ。せーの、それっ」

バチーン

「あびいぃぃぃぃーーーーっ！！」

絶叫する遥の手足の指が一本ずつ切断されていた。

「あぁ、ダメだよ、遥ちゃん。笑顔忘れちゃ。撮影してるんだからね。もう一回いくよ、ちゃんと声出して笑いなさい」

スタッフは遥の次の指をニッパーで挟む。

「はーい、それじゃ笑って遥ちゃん。今度は順番にいくからねぇ」

遥は泣きながら引きつった笑顔で笑い声を上げる。

「あひゃはははっ」

パチーン、パチーン、パチーン、パチーン

「おぶっ、おぶっ、おぶっ、おぶうぅぅぅぅっ！！あひゃひゃひゃひゃぁ」

手足の指を切断されながら遥は必死に笑顔を作り笑い声をあげる。

「うーん、どうもイマイチだわね。もう一回いこうか、遥ちゃん」

再び遥は指を切断されていく。結局、遥は手足の指、全てを切断されてしまった。

「お許し下さい、皐月様。遥は一生、皐月様のメス奴隷になりますから、もう痛いのは許して下さい」

遥は泣いて許しを乞うが、皐月は許すつもりなど毛頭ない。まだ、小学生女子の遥の体をを徹底的に痛めつけ心も壊して廃人にしていくつもりだった。

「さて、指も失くなっちゃったし次にいきましょうか。次は、もっと楽しい処を切断しますよ。乳首とクリトリスです。まだ小学生の遥ちゃんの、おっぱいの先と割れ目の突起を切断するなんてワクワクすると思いませんか。この動画を観る人も期待に胸を高鳴らせてくれると思いますよ。それでは準備にかかりますか」

大の字に拘束されている遥の乳首と陰核に強力な媚薬が塗布され強制的に勃起させられていく。

「ハァハァ、ハァハァ、ハァハァ」

泣きながら息を荒くしている遥の幼い三つの突起が硬く勃起したのを確認した皐月は残酷に笑った。

「それじゃあ、このテグスの付いた釣り針を突き通して遥ちゃんの三つの突起を切断し易いように引っ張ってあげるね」

皐月は遥の勃起した乳首を摘まむと針先を乳首の横に当てる。

プツッ

「いだあぁぁぁっ！いだいよおぉぉっ！」

プツッ

遥が悲鳴をあげるが、皐月は構わず釣り針を乳首に貫通させる。そして、もう一つの乳首にも釣り針を貫通させ皐月は遥の股間を覗き込むと、遥の勃起している小さな陰核の皮をクリッと剥き、針先を当てる。

・・可愛いわね、遥ちゃんのクリトリス。まだ桜色でポチッとして遥ちゃんの大切で敏感な突起、ここを切断しちゃうのだから最高だわ。クリトリスを切断された遥ちゃんの無様なオマンコ。想像するだけで濡れてくるわ・・

皐月は笑みを浮かべながら指先に力を入れる。

プツッ

「いぢゃあぁぁぁぁっ！うびいぃぃぃぃっ！！」

遥の陰核の中を針がずるずると通っていく。そして、プツッと反対側に釣り針が貫通した。

「あぶぶぶぶぶぶっ、ぶぶうぅぅぅっ」

遥は号泣しているが、皐月は釣り針に付いているテグスをリールで巻き取っていく。遥の三つの突起が引っ張られ千切れそうな程、伸びきっていった。

「いぢゃあぁぁぁぁっ！乳首とクリ、千切れりゅうぅぅぅぅっ！！」

「大丈夫よ、遥ちゃん。千切ったりしないわ。切断するのよ」

大の字で乳首と陰核を引き伸ばされ号泣している遥の三つの突起にニッパーを持ったスタッフがそれぞれ配置され、乳首と陰核をニッパーの刃で軽く挟み準備を整えた。

「じゃあ、遥ちゃん。いくよ。今度は笑わなくて良いから、思い切

り泣き叫んでね。それでは、カウントダウン開始っ」

皐月の言葉で遥に見えるように置いてあるモニターの画面に大きく〝１０〟と映し出された。そして、その数字が減っていく。考えるまでもなく〝０〟になった時が遥の乳首と陰核が切断される瞬間だ。遥は涙を流しながら、減っていく数字を見つめ、その瞬間に耐えられるよう歯を食いしばっていた。

「ふひっ、ふひっ、ふひっ、ふひいぃぃぃっ」

遥の鼻息がどんどん荒くなった瞬間、その時はきた。

バチィィィン

「あっびゃあぁぁぁぁぁーーーーーっ！！！」

ショオォォォッ

ぶりっ、ぶりぶりぶりいぃぃぃぃっ

まだ小学生の遥の乳首と陰核、クリトリスが残酷に切断され、遥は絶叫し尿と大便を漏らしてしまっていた。そこへ、切断した３ヶ所の止血の為、真っ赤に焼けた焼き鏝が容赦なく押し付けられる。

ジュウゥゥゥゥッ

「あっぶうっ、ぶぶぶぶぶ、ぶうぅぅぅぅっ」

遥の肉が焼ける臭いが漂い、遥は白目を剥いて、ブクブクと泡を吹いていた。その遥の頬を皐月がパンパンと叩く。

「ほら、しっかりしなさいよ。みんな、少女戦士ウテルスが頑張っている姿が見たいの。頑張っているけど敗けちゃって徹底的に痛めつけられる姿を期待しているの。視聴者は残酷なのよ。ふふ、分かった、遥ちゃん」

皐月は泡を吹いている遥の小陰唇を摘まむと、そこに次々に釣り針を突き刺し、錘をぶら下げていく。遥の二つの小陰唇は、びろーんと無様に引き伸ばされていた。

「ふうん、遥ちゃんのビラビラ。小学生なのに、よく伸びるわねぇ。ふふっ、今度はこのビラビラを切除してあげるわ。どう、嬉しいでしょう。マンコ壊されていくのは気持ちいいわよね、遥ちゃん」

そして、有無を言わせず遥の錘で伸ばされている小陰唇の根本が鋭利なハサミの刃で挟まれる。

ジョキッ、ジョキッ、ジョキッ、ジョキッ、ジョキッ、ジョキッ

「はぶうぅぅぅぅぅーーーーーーっ！！！」

天を仰いで絶叫する遥の顔は、涙と鼻水と口からの泡で激しく汚れていた。その遥の顔もアップで撮影しながら、遥の小陰唇は切り取られていき、きれいに切除されてしまった。そして、止血の為の焼き鏝が遥の割れ目に押し付けられる。容赦なかった。小学生の遥のまだ幼い性器が壊されていき、その様子が鮮明に撮影されていた。

「さあ、遥ちゃん。今日の撮影は次で終わりだからね。頑張ろうね。次は、いよいよオマンコの穴だよ。遥ちゃんのオマンコの穴に太い

ドリル、ぶち込んで削っていくからね。これで遥ちゃんのオマンコ、失くなっちゃうね」

皐月は手に持った直径１５センチも太さのある電動ドリルを遥に見せていた。

「いやぢぁぁっ、ゆるじでぐだぢゃいいいっ、ごわいよぅぅぅっ」

遥は、もう正義の戦士ではなく普通の女子小学生の様に涙を流し震えながら許しを乞うが、皐月はその怯える遥の姿を見て興奮していた。

「さあ、いくよ。遥ちゃんのオマンコの最後だね。遥ちゃんのオマンコはオマンコの穴だけじゃなくて全部削られるからね。もちろん、子宮も卵巣も削ってあげるよ」

チュイーーーン

皐月が電動ドリルのスイッチを入れ、ドリルが高速で回転を始める。皐月は遥の股の間に潜り込むと、遥の膣穴に狙いをつけドリルの先端を当て押し込んでいく。

ヂュイーーーン

「あびゃあぁぁぁぁぁっ、あびゃびゃびゃびゃあぁぁぁっ、だれがあぁぁっ、だぢゅげでえぇぇぇぇーーーっ！！」

絶叫する遥の股間からドリルで削られた膣や性器の肉片と血が飛び散っている。皐月は、それを浴びながら遥の性器にドリルをどんどん押し込んでいった。もう、遥の膣は全て消滅してしまい、子宮頸

部も肉片に変わっていたが、皐月はまだ遥を許さず、遥の性器にドリルを押し込んでいた。性器や下腹部を完全に破壊されながら遥は、手足の付け根にマーキングされ、同時に四肢も切断され始めた。哀れにも遥はドリルを性器に突き入れられ残酷に削られながら、四肢も切断されダルマにされていた。

7、遥の膣破壊

7、遥の膣破壊

エレシュキガルと菜緒の前に古びた屋敷が立っていた。住宅街から離れた森の中に佇むこの屋敷は異様な雰囲気を放っていた。エレシュキガルたちが屋敷に近付くと、先に来ていたパズスとニヌルタの姿が見える。

「この雰囲気、間違いないようだな」

「ああ、あの豪徳寺独特の嫌な気配がする」

「でも、人の気配を感じないのは何故なんだ？」

「ニヌルタさんが来た時から、こんな感じなの？」

「そうなんだ、静まりかえって気配が感じられない。でも、あのデビルが多数潜んでいるかも知れない。慎重にいかないと墓穴を掘るからね」

「伊東に連絡して援軍を頼んである。対デビル用の武器を備えた精鋭だ。彼らが到着したら踏み込んで行こう」

以前の豪徳寺文月との戦いでデビルの脅威を身に染みて理解しているパズスが屋敷の様子を窺いながら言う。それは菜緒も同感だった。

あの時、体の大半を失いながらリツコのサイボーグ技術で九死に一生を得た菜緒もデビルの恐ろしさを実感していた。個々の能力もだが、それが集団になった時の戦闘力はウテルスの〝審判〟でなければ対処不可能だと思われるほどだった。

・・遥ちゃん、無事でいて……・・

菜緒は祈るような気持ちで不気味な屋敷を見つめていた。

★　★　★　★

二階堂遥は今日も皐月に痛めつけられていた。遥はもう皐月の命令に従順に従うメス奴隷に堕とされていた。

「ほら、両手を上げて足を大きく開きなさい。オマンコを見せるように腰を前に突き出すのよ。はい、顔も上げる」

遥は皐月に命令されるがままに、言われた通りの姿勢をとっていた。

「いい、遥ちゃん。まずオマンコを１０００回鞭で打ちます。動かずに耐えられたら、次に移行。もし動いたら、もう１０００回追加。それだけじゃなくて、またオマンコを切開してバラしてあげる。わかった？」

「は、はい、皐月様……」

「ああ、そうそう。おしっこやウンチは漏らして良いからね。気持ち良かったら潮吹いてもいいわよ」

まだ小学生の遥に残酷に告げた皐月は鞭を構える。バラ鞭ではなく、苦痛度が高い一本鞭だ。それも連発で打てるように短めの鞭になっている。

「さあ、始めるわよ」

ヒュンという風切り音の後、鋭い音が響き遥の割れ目に鞭が叩き込まれた。

ピシィィッ！

「あぶぅぅぅぅっ！」

遥は太ももをぶるぶる震わせながら性器への鞭の打撃に耐えていた。が、皐月は遥が身構える間を与えず連続で鞭を打ち込んでくる。

ピシッ、ピシッ、ピシッ、ピシッ、ピシッ、ピシッ、ピシッ、ピシッ、ピシッ、ピシッ、ピシッ！

「あぶぶぶぅぅぅぅっ、あぶぅぅぅぅっ！」

遥は涙と鼻水を流し、性器の割れ目に打ち込まれる鞭の激痛に必死に耐えている。

「どうせなら、もっと豚みたいに鳴きなさい」

皐月は遥に命令し、さらに激しく鞭を叩き込む。

ピシッ、ピシッ、ピシッ、ピシッ、ピシッ、ピシッ、ピシッ、ピシッ、ピシッ、ピシ

ッ、ピシッ、ピシッ、ピシッ！

「ぶひっ、ぶひっ、ぶひっ、ぶひいいいぃいいぃーーーーっ！！」

遥は皐月の指示通り豚の鳴き真似で悲鳴をあげていた。

「アハハっ、いいわね。もっと鳴きなさい、豚のように激しくね」

皐月はスイッチが入ったように、更に激しく遥の性器に鞭を叩き込む。

「ぶひいいぃいぃーーーーっ！！」

遥はなんとか最後まで耐えきっていた。

「成長しましたね、遥ちゃん。出来たじゃないですか。えらい、えらい。今日はオマンコの切開は止めておきましょうね」

「あ、ありがとうございます、皐月様」

遥は泣きながら皐月にお礼を言っていたが、次の皐月の言葉で凍りついていた。

「我慢できた御褒美に今日は遥ちゃんのオマンコの穴を破壊してあげるわ。ズタズタにして完全に壊してあげるから楽しみにね。どう、嬉しいでしょう」

「はい、皐月様。どうぞ、遥のオマンコの穴をズタズタに壊して下さい」

遥は絶望で泣きながら皐月に答えていた。

★　★　★　★

遥は後ろ手に縛られ、大きく開脚され逆さに吊られていた。皐月は１０センチ角の角材を手にもっている。どうやら、その角材を遥の膣に挿して、膣を破壊するつもりのようだった。まだ小学生の遥の小さな膣にそんな物を挿されたら当然膣は裂けてしまうだろう。しかし、皐月はその角材に更に加工して凶悪で残虐な凶器に変えていく。皐月は、その角材に釘を打っていった。それも完全に打ち込むのではなく、角材から釘の頭が突き出る様に何本も釘を打つ。角材はまるで針山の様に変貌していた。それだけではなかった。その針山になった角材に皐月は有刺鉄線を巻き付けていく。皐月はそれを遥に見せていた。

「この角材を遥ちゃんのオマンコの穴に挿してあげるね。挿しただけでオマンコの穴、壊れちゃうだろうけど、ちゃんとグリグリと抉ってあげるからね。嬉しいでしょう。遥ちゃんはオマンコ壊されるの大好きだからね」

遥は、その凶悪な角材を見てポロポロと涙をこぼしていた。

「はい、遥はオマンコ壊されるの大好きです。どうぞ、遥のオマンコの穴、グチャグチャに壊して下さい」

遥は号泣しながら宣誓していた。

「ふふ、大丈夫よ遥ちゃん。遥ちゃんのロリマンコにいきなりこん

な太いの入らないでしょうから、媚薬使ってほぐしていってあげるからね。ヌルヌルのオマンコにして挿してあげる。気持ちいいわよ」

皐月は、まず遥の口を開け経口摂取用の媚薬を無理矢理飲ませる。遥は泣きながら、その媚薬を飲み込んでしまった。次に皐月は塗布用の媚薬を遥の乳首、陰核、膣前庭にたっぷりと塗っていく。これは皮膚から浸透する強力な媚薬だ。更に皐月はは注射器に媚薬を満たし、遥の会陰に針を突き刺すと媚薬を遥の体内に注入してしまう。続けて膣前庭、陰核にも針を突き刺し媚薬を注入する。

「あああぁぁぁぁーーーーっ！」

そんな薬物に耐性のない、まだ小学生の遥は強力な媚薬を飲まされ、塗られ、注入され、もう狂った様に舌を突き出し声をあげ逆さに吊られたまま腰を激しく振っていた。遥の幼い割れ目からは粘液が泉のように湧きだし股間一帯をヌルヌルにしていた。皐月は遥の割れ目をくぱぁと開くと、膣に指を突っ込んで確認する。

「うーん、いい具合に濡れていますね。それじゃ、そろそろいきますか」

皐月は角材の先端を遥の膣口に当てる。スタッフが横から遥の腰を厳重に押さえつけた。

「それじゃ、いくよ遥ちゃん。遥ちゃんのオマンコの穴の最後でーす。それっ！」

皐月は全体重をのせて遥の膣に角材を押し込んだ。

ズリュウゥゥゥッ！

ぶちっ、ぶちっ、ぶちっ、ぶちいいいいっ

「あぎゃあああぁぁぁぁぁーーーーーっ！！」

遥の幼い膣が裂け血が噴き出すが、皐月は構わず２０センチも遥の膣に角材を突き挿していた。そして、次に角材をグリグリと回転させる。角材に突き立てられた釘と巻かれている有刺鉄線で、遥の膣がズタズタに破壊されていく。

「いじゃあぁぁぁぁーーーーっ！ゆるじでえぇぇぇぇーーーーっ！マンゴ、じぬうぅぅぅーーーーっ！！」

絶叫する遥は、白目を剥き口から泡を吹き、膣からはごぼごぼと血が湧き出てくる。それでも、皐月は楽しそうに角材を回転させていた。

ショウウウーーーッ

ぶりっ、ぶりっ、ぶりいいいっ

遥は、大小便を漏らしながら膣を破壊されていく。まだ小学生の遥の膣は裂かれた上に、釘と有刺鉄線で徹底的にズタズタにされ、完全に破壊されていた。

「ごめんねぇ、遥ちゃん。やっぱり、切開させて貰うわ。今、遥ちゃんのオマンコの穴がどうなっているのか、ちゃんと見せてあげないとね」

皐月は意識を失ったように、だらんと吊られている遥の角材が挿さ

った膣にメスを突き刺すと、そのままツーッと臍まで正中切開していく。そして、開創器で切開した部分を大きく開き、恥骨や膀胱を摘出して、ズタズタになっている遥の膣も切開する。切開された遥の膣内は角材でパンパンに拡げられ、釘と有刺鉄線が膣を抉っている様子がはっきりと確認出来た。その遥の無惨な膣内は鮮明にアップで撮影されていた。

8、遁の受難（前書き）

今回は軽めの内容になっています。激しいリョナやグロを期待していた方、申し訳ありません。

8、遥の受難

8、遥の受難

遥は旧タイプのスカート型スクール水着に太ももに食い込むサイハイソックスを穿き、スク水戦士ウテルスとして戦う時の格好をさせられていた。もちろん、ウテルスの力を封じられる手枷で後ろ手に拘束されている。そして、遥は首輪に付いた鎖を引かれヨロヨロと歩いていた。何度も何度も残酷に処刑される。許しを求めても許されない。救いの手が現れる事もない。毎回、性器を徹底的に壊される。その救いのない絶望で、もう、遥の心はズタズタに壊れてしまっていた。ただ毎日、死ぬ寸前まで豪徳寺皐月に徹底的に痛め付けられる。

・・もう嫌だ。こんな毎日、耐えられない。苦しい。もう私を殺して下さい・・

遥は首輪の鎖に引かれて歩きながら、今日はどんな残酷な事をされるのだろうと考えると、ここで突然死ぬ事が出来たらどんなに幸せだろうと考え涙が出てきていた。

「うっ、うっ、うっ」

泣きながら歩く遥を皐月は振り返ると足を止めた。

パアンッッッ

皐月は、遥の頬を激しく叩く。そして、続けて頬を連続で叩く。

パンッ、パンッ、パンッ、パンッ

遥の頬が腫れ上がる程、皐月は叩き続けていた。

「正義のヒロインがみっともないですね。今日は趣向を変えていこうと思います。あなたも、たまには体を動かさないと鈍ってしまうでしょう。だから思い切り動かさせてあげますよ」

皐月は遥を巨大なドーム状の空間に連れていき、そこの中央で遥を繋いでいる鎖を床に固定する。遥は両腕を拘束されたまま、ドームの中央にポツンと残されていた。

「それじゃあ、運動を開始しますか、遥ちゃん」

皐月がスイッチを押すとドームの一部の壁が開き、その中からデビルがゾロゾロと現れた。

「ひいぃぃぃーーっ！」

遥がデビルの姿を見て悲鳴を上げる。その姿はスク水少女戦士ウテルスではなく、まったく普通の小学生の女の子のように、顔は恐怖で歪み体はぶるぶると震えていた。

「デビル、１００体よ。あなたなら楽に勝てる筈よね、遥ちゃん」

皐月は分かっていながら残酷に告げる。ウテルスの力が使えるならまだしも、力を封じられて鎖に繋がれている遥に、この数のデビル

と戦える訳がない。一方的に攻撃され、体を破壊されていくだろう。

シャアァァーーーッ

遥の股間から湯気をたてて尿が漏れだしていた。そして、そんな怯える遥にデビルが襲いかかってくる。遥は恐怖で体が硬直し動く事も出来ずにいた。そこへデビルの容赦ない攻撃が加えられる。

「ごっばあぁぁっ！」

遥の鳩尾にデビルの拳がめり込み、小さい遥の体は宙に浮き、口から胃液を吐き出していた。両腕を使えない遥はデビルにいいように痛め付けられていく。遥の両足首が二体のデビルにそれぞれ掴まれると大きく広げられた。遥は大開脚で押さえつけられたまま、股間に蹴りを入れられる。

ガスゥゥゥッ！

「あぶうぅぅぅーーーっ！」

鋭い蹴りが容赦なく遥の性器に叩き込まれ遥は絶叫するが、デビルは続けざまに遥の性器に蹴りを入れていた。遥の股間、スクール水着に赤黒い染みが拡がっていく。遥の外性器はぐちゃぐちゃに破壊されていった。デビルは血塗れになった遥の股間のスクール水着を切り裂き、遥の性器を剥き出しにすると、その無様な状態を見て大声で笑い始めた。

「それでは、デビル。そのメスの穴を全て犯してやりなさい」

皐月の命令でデビルたちはニヤリと笑い、自分たちの硬く大きくい

きり立ったモノを晒していた。遥は１００体のデビルの巨大なモノに囲まれて、涙を流し震えていた。それでも、遥はいつものように処刑されるよりはマシだと安堵していたのは事実だった。

「さあ早く気の済むまで犯しなさい」

その皐月の言葉を合図にデビルたちは我先にと遥に襲いかかっていった。遥は、あっという間にデビルに三つの穴を犯される。

ズリュウゥゥッ

ズボッッウゥゥッ

ニュルウッッッ

「ふごうぅぅーーっ」

遥は、膣深くまで突き入れられ子宮を突き上げられ、肛門も裂けS状結腸まで到達され、喉から食道を拡げられ胃にまで先端を突き入れられていた。そして、そのまま激しく腰を振られる。遥は呼吸も出来ず、腹の中を乱暴に掻き回される激痛で、瞳からは大量の涙を流していた。

「いい様ですね、遥ちゃん。この動画を全世界に配信してあげますよ。タイトルは「スク水少女戦士ウテルスの敗北」とでもつけましょうか。人類の希望の星と云われたウテルスが、デビルに敗けて犯される様子はウケるでしょうね」

そうしているうちにデビルに遥の中に一斉に射精する。

ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ

デビルが遥の穴から自分のモノをズボッと抜くと、白濁した液がどろりと溢れ出てきていた。当然ながら遥への凌辱は、これで終わりではない。すぐに次のデビルが遥の穴に突き入れ犯し始めた。小学生の遥は、容赦なく犯されボロボロにされていく。そのうちに順番を待ちきれなくなったデビルが、遥の手や足の指に噛みつき、そのままブチッと噛み千切った。

「ふんごおぉぉーーーっ！」

口から喉奥、胃まで犯されながら遥が絶叫するが、デビルはどんどん遥の指を喰い千切り、そのまま咀嚼し飲み込んでいく。そして、遥の指が全て失くなってしまうと、今度は腕と脚を喰い始めた。遥がダルマ状態になってしまうまで、さほど時間はかからなかった。しかし、遥はダルマにされてもまだ3つの穴を犯され続けていた。

★　★　★　★

豪徳寺皐月の屋敷だと思われる不気味な洋館の前で身を隠し待機しているパズスたちの所へ静かに人が集まって来ていた。パズスの要請で駆けつけた武装集団は、ヴァギナ対策委員会の中でも、対デビル用に訓練してきた精鋭だ。その中には佳乃の姿もあった。

「初代様はここで待機していて下さい」

佳乃が菜緒に言うが、菜緒は首を振る。

「遥ちゃんがここに囚われているかも知れないのに、じっとしていられないよ」

「初代様、その可能性が高いから初代様には残って欲しいのです。あの動画を観ましたでしょう。ウテルス様は四肢を切断されてしまっています。あの豪徳寺が、そこで止めるとは思えません。きっとウテルス様は、もっと酷い事をされているのは間違いありません。初代様は、その姿を冷静に観られますか……」

佳乃の言葉に、菜緒はうっと言葉が出なかった。それでも、菜緒は自分の跡を継いだ遥の事が心配だった。

「大丈夫だよ、佳乃さん。私も、もう子供じゃない。ほら胸だって佳乃さんより大きいでしょう」

佳乃は、顔をピクピクとひきつらせながら、分かりましたと頷いていた。

「よし、それじゃ慎重に行くぞ」

パズスの号令で一同は銃を構え、静かに豪徳寺の屋敷に向かって歩き出した。

9、怪しげな洋館（前書き）

今回、遥は登場しません。実は遥は自分の別作品の方に出張してたりします。処刑トーナメントに出場させられて相変わらず酷い目にあっていますので、ご心配なく。

9、怪しげな洋館

9、怪しげな洋館

パズスたちは豪徳寺皐月の屋敷と思われる古びた洋館を取り囲んでいた。そこへ、ヴァギナ対策委員会の伊東から連絡があった。

「パズスさん、その屋敷の周りに固定の監視カメラは確認出来ませんでした。ただし、あの時のようにドローンで監視している可能性もありますし、ミラージュ投影で実物を隠している可能性もあります。くれぐれも気をつけて下さい。なにしろ、敵はあの豪徳寺なのですから」

「分かった、ありがとう伊東。周囲の監視は続けてくれ。それと、トォールハンマーの準備をしておいて貰えるかな」

人間とヴァギナ、違う存在でありながら伊東とパズスは、もうすっかり旧知の仲のような関係になっていた。豪徳寺とデビルと戦い続けているうちに彼らの絆は深くなっていったのだ。

「どうする、パズス」

ニヌルタがパズスに尋ねてくる。パズスは菜緒の姿を見る。菜緒は佳乃と突入前の準備をしていた。パズスはあの戦いの時、菜緒を守れなかった自分の後悔が甦ってくる。

・・菜緒をあんな姿にしてしまったのは僕だ・・

リツコのサイボーグ技術で一命を取り留めた菜緒だが体の大半を失ってしまっていた。菜緒は全然気にしていないようだが、パズスはその菜緒の姿を見るたびに自分の無力さに怒りが湧いてくる。

「ニヌルタ、君の力でヴァギナを数体用意してくれないか。まず僕たちとヴァギナで先に突入する。どんな罠があるか分からないからな。佳乃さんたちは僕が合図したら進んできて下さい」

「そういう事だ、菜緒。私に任せておけ」

パズスに続いてエレシュキガルが言うが、パズスはエレシュキガルにも後詰めを要求する。

「おいおい、お前らだけだとデビルが大量に現れたら終わりだろう。十六夜もいないパズスなど戦力にならんぞ」

今回、十六夜は万が一の時、西園寺の研究所を守る守備隊に加わっていた。パズスは十六夜との連携でデビルを倒してきたが、その十六夜が不在なのである。エレシュキガルが心配するのも無理はなかった。

「いや、おそらくここにはデビルはそれほどいない。数体くらいなら僕とニヌルタでなんとかなる。エレシュキガルは菜緒を守ってくれ」

「まったく、お前はいつまで気にしてるんだ。菜緒はお前が思うほど弱くないぞ」

「いや、しかし……」

いつまでも話しが纏まらない二人にニヌルタが割って入っていた。

「まあ、ここは僕に任せてくれよエレシュキガル。前は活躍出来なかったからな、今度は僕の見せ場を作らせてくれ」

「そう言われると是非もないな」

エレシュキガルは渋々頷いていた。

「よし、ニヌルタ。ヴァギナを頼む」

ニヌルタは、あっという間にヴァギナを１０体呼び寄せていた。

「芳樹くん、気を付けて」

菜緒の言葉に送られてパズスとニヌルタとヴァギナたちは豪徳寺の屋敷に入っていく。屋敷の中はシーンと静まり動くものの気配はなかった。

「僕は一階を調べる。ニヌルタは二階を調べてくれ」

パズスたちは二手に別れ屋敷の中を探索していくが、遥の姿もデビルの姿も発見出来ない。

・・おかしいな・・

パズスとニヌルタは一階と二階を探索しながら違和感に捉えられていた。

・・やはり、おかしい。外から見た屋敷の大きさに比べて、中がやけに狭い気がする。どこかに隠された何かがあるに違いない・・

二人は、さらに慎重に壁や窓なども調べていく。当然、箪笥や机も移動して裏側も確認していた。

★　★　★　★

数体のデビルが捕らえられた人間の女たちに襲いかかっていた。女たちは泣きながら逃げ惑うがデビルは楽しむように女を追い詰めていく。

「お願いっ、誰か助けてえっ」

閉鎖された空間で女たちは絶望に押し潰されながら、それでも救いの手を求めて神に祈っていた。だが、この残酷な世界に救いの手は現れない。まだ幼いセーラー服を着た少女がデビルの触手に捕まっていた。

「嫌だぁっ、許して下さいっ」

少女は触手に足を掴まれながら必死に逃げようとする。しかし、少女の力でデビルから逃げる事など叶わない。デビルは笑みを浮かべると、そろそろ終わりにするかという表情で少女の両足首に触手を巻き付けた。そして、ぐいっと逆さに持ち上げる。少女のスカートが捲れ、白い下着が露になる。少女は慌てて手でスカートを押さえるが、その手も触手に巻き付かれどかされてしまう。

「誰かっ、助けて、助けて、助けてぇっ」

少女は泣き叫ぶが、その口にも触手が侵入する。

「おぼうぅっ」

少女の喉奥から胃にまで触手が入り込み、少女は苦しさで身を捩るがデビルは実に楽しそうに少女を見ていた。そして、デビルは少女の足を大きく開く。少女の白い下着の股間部に染みが出来ていた。どうやら少女は漏らしてしまっていたようだ。その染みを見たデビルは、まるで舐めるように触手を少女の股間に這わせていた。

「うひいぃぃーーっ」

少女は自分の股間を這う触手の感触に悲鳴を上げていた。それを待っていたようにデビルは触手を少女の膣に突き刺す。

ズボウッ！

「あびゃあぁぁーーーっ」

絶叫する少女の白い下着が赤く染まっていくが、デビルはさらに捻り込むように触手を少女の膣に突き刺していく。デビルの触手は少女の子宮まで串刺しにしていた

「うびゃあぁぁーーっ、だじげでえぇぇーーっ！」

デビルは嬉しそうに少女の子宮も突き破り串刺しにしていく。

「あぶぶぶぶぶぅぅぅっ、ぶっぶぅぅぅっ！」

ビクンビクンと大きく痙攣しだした少女が口から大量の血を吐き出した。

「ぶぼうっ」

その直後、少女の口からデビルの触手が飛び出してくる。少女は哀れにも性器から口まで完全に串刺しにされていた。

★　★　★　★

・・何か声が聞こえた気がするが……。絶対にこれは何かある・・

パズスは何処からか少女の絶叫のような声が聞こえたのは間違いないと自分の聴覚を信じていた。

・・隠し部屋のようなものがある。地下か……・・

パズスは床にも注意を払い、何かないかと慎重に探していると、二階のニヌルタから連絡があった。

「隠し部屋を見つけた。おそらくここが動画撮影された場所だ。拘束用のベッドの上にメモリーのような物が置いてある。再生出来る機器はあるか。すぐに再生して手がかりを見つけよう」

「分かった、委員会の佳乃さんが持っている筈だ。今のところ敵の姿はない。佳乃さんにエレシュキガルと一緒に来てもらおう。僕も

二階に行く」

パズスはエレシュキガルに連絡をとると急いで二階に上がって行った。ニヌルタは二階の奥にいた。廊下の壁の一部がスライドしたように消えている。パズスはニヌルタの隣に行くと周囲を見るが、何処にも二階堂遥の姿はない。ただベッドの上に小さなメモリーがポツンと置かれていた。

「持って来たぞ」

エレシュキガルが佳乃と共に部屋に入って来る。その二人の後ろに菜緒の姿を見て、パズスはやっぱりと複雑な表情をしていた。このメモリーにはおそらく酷い動画が残っているだろう。出来ればそれを菜緒に見せたくなかったが、菜緒の性格を考えるとそれは不可能だろう。遥は殺されてはいない。殺されていればウテルスのエターナルリバースが発動している筈だった。パズスはそれを思うと、遥は殺されるよりも酷い仕打ちを受けているのではと確信していた。

・・あの動画の時点で遥は四肢を切断されていた。それ以上の事が遥にされているだろう。菜緒、いいか。もし遥が酷い目にあっていても、それは菜緒のせいではないからな。全て豪徳寺皐月が悪いんだ。いいか、一人で抱え込むなよ・・

パズスが菜緒の心配をしているうちに佳乃は再生の準備を整え、再生のアイコンをクリックしていた。モニターに映像が再生される。

「ようこそ、皆さん。ご苦労様ですね。これから皆さんの労をねぎらって楽しい映像をお届けします。存分に楽しんで下さい」

モニターには豪徳寺皐月が映り、大声で笑っていた。そして、皐月

の姿がフェードアウトしていきベッドに拘束された四肢を切断された遥の姿が映し出されていた。

１０、地下室の惨劇

１０、地下室の惨劇

モニター画面に映る遥に皐月が近寄っていく。四肢を切断されベッドに拘束されている遥は恐怖で怯え泣き叫んでいた。そして、遥は浣腸され液状の便を排泄させられていた。その後、メスを握った皐月を見てパズスは菜緒に退出するよう促すが、菜緒は断固として拒否していた。

「大丈夫、私は初代ウテルスとして見なければならない責任がある。遥ちゃんが、どんな酷い目にあっても、それを見届けないと遥ちゃんの心が分からない。だから、目を背けたりしない。そして遥ちゃんを必ず助けるんだ」

菜緒の決意は固かった。おそらく菜緒にも遥がこれから何をされるか想像がついていた。それでも菜緒は、そこから逃げたくなかった。自分がウテルスの力を失った時、遥は別に自分達を助けなくても良かったのだ。知らんぷりをしていれば誰も遥の事に気付かなかった。それを彼女は駆けつけてくれた。菜緒は、そんな遥を見捨てる事など出来なかった。モニターの中で皐月は遥の下腹部を切開していた。そして、絶叫する遥の開いた腹に手を突っ込み、なんと子宮を取り出してしまっていた。それだけではなかった。卵巣も膣も、外性器である陰核も陰唇も切除されている。遥は哀れに口から泡を吹いて白目を剥いていた。

・・酷い……。この悪魔のような女、絶対に許せない・・

菜緒はギリギリと歯軋りをしながらモニターを睨むように見ていた。すると、佳乃が動画の再生を止めていた。

「どうした、佳乃。気分が悪くなったのか」

エレシュキガルが心配した顔で佳乃に尋ねるが、佳乃はいいえというように首を振る。

「ここで見るのはここまでにしましょう。皆さん、今、何か音がしたのに気がつきましたか？私は敵の気配を逃さないように耳に小型の高性能集音器を装着してきました。もちろん、近くの大きい音を拾ってしまうと鼓膜が破戒されてしまうので遠くの小さい音のみを拾うように設定してあります。その集音器に何か聞こえたのです。ここには私たち以外に何かいますよ。二階に隠し部屋があったという事は一階にも何か仕掛けがあるのでしょう。デビルが潜んでいる可能性があります」

佳乃の言葉に全員に緊張が走っていた。

「そうだ、僕も一階で声を聞いたような気がした。やはり何かあるのは間違いないな」

パズスも一階を探索していた時の違和感を話し、この部屋に遥がいない事を再度確認し一階に降りていった。しかし、全員で探してみても何処にも通路やドアなど発見出来なかった。

「変だな、本当に何もない。佳乃、パズス、声が聞こえたのは間違いないのか」

エレシュキガルが二人の顔を見るが、二人とも間違いないと声を合わせていた。

「これは考えたくはないが、あの狂人の事だ。出入りする気はないのではないか。つまり、閉じ込めたまま外に出す気はない。もう古い古代の人間の書物で読んだが〝蠱毒（こどく）〟というものがある。一つの壺の中にたくさんの毒蟲を入れて争わせ最後に残った蟲が最強の毒になるという呪術の一種らしい。それをここでやっているのでは……」

ニヌルタの説は皆を納得させる説得力があった。外に出れない隠し部屋でデビル同士を争わせ、最強のデビルを造る。

「豪徳寺皐月の奴ならやりそうな事だな。でも、外に出てこれないなら放っておくか。どうする？」

エレシュキガルの言葉に皆は考え込んでいた。わざわざデビルを外に出す必要がないが、いずれ最後の1体になった時皐月が外に放つだろう。そうなる前に潰しておいた方が無難だろう。それに佳乃とパズスが聞いた声は人間の声だったという。

「やはり、ここはデビルを殲滅しておくべきだろう。人間も捕えられているかも知れないし、2代目ウテルスがそこに入れられているのかも知れない」

全員、いったん外に退避してトォールハンマーで屋敷を破壊する事で意見は一致した。

「伊東、送った座標にトォールハンマーの一撃を頼む。ただし、出

力は少し抑えてくれ」

パズスからの連絡を受けた伊東はすぐにトォールハンマーを起動する。遥か彼方の衛星から熱線が放射された。

ピッ

空の一点が光ったと思った次の瞬間、目の前の屋敷の一部が破壊されていた。どうやら、入る事の出来なかった一階の空間はニヌルタの予想通り、コンクリートで塗り固められていたようだ。そのコンクリートが破壊され、その下に地下への通路が見えていた。

「この下か……。おそらく下にいるのはデビルで間違いないだろう。僕、ニヌルタ、エレシュキガルの三人とニヌルタが呼んだヴァギナで行く。他のみんなは待機していてくれ」

今度は菜緒もパズスの言葉に大人しく従っていた。パズスの言う通り下にいるのはデビルだ。自分が行ってしまったらパズスの足手まといになってしまう。閉鎖空間でそうなったら総崩れになってしまう恐れがあった。菜緒は佳乃と共に銃を構え、地下に降りて行くパズスたちを見送っていた。

★　★　★　★

串刺しにされた少女に他のデビルも群がってきた。少女は貴重な食糧である。特に好物の性器には何本もの触手が突き刺さり、奪い合いになっていた。卵巣や膣、子宮は真っ先に狙われデビルに喰われていく。あっという間に少女の下腹部は空洞になっていた。次に少

女の小さな胸の膨らみも千切り取られ一口で喰われていた。もう少女は絶命したように動かなくなっているが、デビルは少女の体を喰い尽くすまでは止まらない。少女の眼球が抉り取られ喰われると、鼻も耳も削ぎ落とされ喰われた。腕も足も引き千切られ喰われていく。もう少女はただの肉袋になっていた。その肉袋が切り裂かれ内臓も喰われていく。内臓はそれぞれ好みがあるようで、胃や腸、そして肝臓や腎臓など好みの部位を確保すると実に美味そうに喰らっていた。そこへ、頭上で巨大な破壊音が響き、凄まじい振動と共に崩れたコンクリートが落ちてくる。デビルは食事の手をいったん止めると、頭上に注意を払っていた。

★
★
★
★

地下への通路を降りていったパズスたちの目に頑丈そうな鉄の扉が入ってきた。取っ手を持つと鍵はかかっていない。通路の上をコンクリートで固めたので鍵をかける必要がなかったのだろう。パズスはニヌルタとエレシュキガルに目で合図をすると扉を一気に開けた。中から腐った肉のような臭いと獣の咆哮のような声が聞こえる。

「間違いない、行くぞっ！」

パズスは先頭をきって飛び込んでいた。それにニヌルタ、エレシュキガルが続き、その後にヴァギナの群れが雪崩れ込んでいた。

11、教団の胎動

11、教団の胎動

とある地下室で二人の女性が処刑台の上に仰向けに固定されていた。一糸纏わぬ姿で大の字に拘束されている女性は恐怖で号泣している。一人の少女は17歳くらいであろうか、茶色がかった髪を肩まで伸ばしたセミロングの髪型に幼く見える顔、適度に膨らんだ形の良い胸に括れたウエストに陰毛を処理した恥丘に続く程よく肉のついた太ももが興奮を誘う。そして、もう一人は更に幼く見えた。おそらく10歳前後であろう。黒髪のツインテールに本当の童顔。そして、つるぺたの胸に寸胴の幼児体型。つるつるの恥丘に筋が一本。まさにロリータというに相応しい少女だった。その二人の泣き声だけが地下のコンクリートの部屋に響いていた。

「ひぐ、ひぐ、ひぐ」

「誰かぁ、助けてぇ」

周囲の蝋燭の灯りだけでぼんやりと照らされた部屋の隅には祭壇のような物が置かれている。そこに祀られている2体の神像はまるで悪魔のような不気味な姿をしていながら、それは男根のようにも見えていた。少女たちは、この不気味な静まりかえった部屋に拘束され不安で泣く以外なかったのである。

ギィィッ

錆び付いているような嫌な音を立ててドアが開き、フードを被った男が二人入って来た。二人の男はフードと一体になったマント以外は全裸で、その股間では硬く勃起した男根が大きく反り返っていた。二人の男は祭壇に向かって深く頭を下げると、しばらくその姿勢で、なにやらぶつぶつと経文のような言葉を唱えていた。少女たちは男が何を言っているのか分からなかったが、最後の言葉だけははっきりと聞こえた。

「……それでは、聖水の採取を開始します」

言葉は聞こえたが二人の少女は意味が分からなかった。ただ自分たちに迫って来る男たちに嫌な予感を感じたのは確かだった。

「ひいぃぃぃーーっ、止めてっ、許してっ」

年上の少女が悲鳴をあげるが、まだ幼い方の少女は恐怖で硬直し声を出す事も出来ず震えていた。そんな少女に男たちは無言で迫ってくると、少女たちの股間に手を当て、くぱぁと性器を拡げる。

「嫌だぁっ、許してくださいぃぃっ」

「うぴいぃぃぃーーっ、怖いぃぃぃーーっ」

泣き叫ぶ少女たちの尿道に男たちはカテーテルを挿入していた。

「い、痛いぃぃぃーーーっ」

「だじげでえぇぇぇーーっ」

生まれて初めて尿道に挿入されたカテーテルの冷たい感触と激痛に少女たちは激しく泣き叫んだが、男たちは構わず少女の尿道にカテーテルをズルズルと押し込んでいく。そして、膀胱の括約筋までカテーテルを挿入すると、そこでカテーテルを前後に動かし、括約筋をほぐしていく。少女たちは尿道を擦られる激痛で号泣していたが、括約筋を充分ほぐした男たちは力を入れカテーテルを少女の膀胱に突き刺していた。

プスッ

「「いだあぁぁぁーーーっ！」」

少女が声を合わせて絶叫する。しかし、男たちは少女の膀胱内にカテーテルをどんどん押し込んでいった。そして、カテーテルの反対側からチョロチョロと流れ出してきた少女の膀胱に溜まっていた尿をガラスの容器に採尿していく。

「ふむ、けっこう出ますね。余程溜まっていたのか」

「多いにこした事はありません。こちらのメスもまだ出るようです」

男たちは少女の尿で満ちた容器をそれぞれ手に持つと祭壇に向かい、そこに捧げる。そして、また意味不明の経文を唱えていた。少女たちは横目でその男たちの姿を見て、これから自分たちがどうなるのか不安で涙が止まらなかった。

★　★　★　★

エレシュキガルは暗闇に目が慣れるまで聴覚と嗅覚を総動員して、

この地下室の様子を探っていた。かなり広い部屋のようで、その奥の方から獣のような咆哮と気配が近付いて来る。

「来るぞっ、油断するなっ」

パズスが叫び戦闘態勢をとる。当然、エレシュキガルとニヌルタの警戒モードもマックスだ。そこへ、風のようにデビルが襲いかかってきた。

・・速い……。この暗闇の中で過ごしていた分、私たちより闇に慣れている。しかし、私たちも遊んでいた訳ではない。以前より確実にパワーアップしているのを思い知るがいい・・

エレシュキガルは以前より更に速くなった高速拳を繰り出す。デビルは防戦一方で再生を繰り返すがヘイフリック限界を超え消滅していった。

・・くくく、脆いもんだな、デビル。あれほど苦戦して私を絶望に追い込んだデビルも、今では私の敵ではない。これも人間でありながら私を励ましてくれたウテルスと、私に成長するアドバイスを与えてくれたリツコのおかげだ。この二人の為にも私は貴様たちデビルを根絶やしにしてやる・・

デビル一体を瞬殺したエレシュキガルが次に襲ってきたデビルにも高速拳を叩き込む。その隣ではパズスがデビルを倒していた。

「ソニックアーム」

パズスはデビルを両手で掴むと自分の腕全体を振動させる。

「うがががっ」

超振動を伝播されたデビルの体がボロボロと崩れていく。デビルの細胞が超高周波の振動で破壊され再生も叶わず消滅していった。これもリツコがアドバイスしてくれた、デビルを倒すには細胞を破壊するという助言を元にパズスが特訓して会得した技であった。そして、ニヌルタも又同様にデビルを倒していく。

「ブラッドワールド」

デビルはニヌルタの血液で作られた球体に閉じ込められていた。デビルはその球体を破壊しようとするが、一斉に球体の内部にレーザーのような血液の光線が四方八方から照射される。

「うごうぅっ」

デビルは再生も間に合わず消滅していった。そして、しばらくすると襲いかかってくるデビルもいなくなりエレシュキガルたちは肩の力を抜いていた。

「片付いたようだな」

「そのようだね。かなりの数のデビルであったけど、もう僕らの敵ではないな。ニヌルタ、どうやら君の予想は外れていたようだね。喜ばしい事だよ」

「そうだな、パズス。僕も外れてくれて嬉しいよ」

3人は安堵の息を吐き、パズスが聞いた人間の声の主を探す為、地下室の奥に歩いていった。

「まだ生きている事を祈りたいな。人間を助け出せれば菜緒が喜んでくれる」

「まったく、エレシュキガルも変わったものだ。これがあの恐ろしい惨神のエレシュキガルとは思えないぞ」

「貴様、ニヌルタ。お前は私の事をそんな風に思っていたのか」

「まあ、良いじゃないかエレシュキガル。誰でも変わっていくものだ。過去の事より未来の事を考えていこう」

パズスが二人の間に割って入り笑顔を向ける。

・・一番変わったのはお前だぞ、パズス。人間を虫けら以下の存在としか思っていなかったお前が人間と手を組んで戦っている。これも、あの姫川菜緒という人間の影響か。パズスもエレシュキガルも変えてしまった姫川菜緒という人間こそが、真の人間の救世主だったのだろうな・・

ニヌルタは心の中で菜緒の顔を浮かべていた。その時、急に嫌な気配が漂ってきた。

「待てっ」

エレシュキガルもパズスもその気配に気付いたようであった。３人は足を止めて気配を探る。地下室の奥から、ぐちゃぐちゃと何かを食べる音が微かに聞こえていた。

・・なんだ、この気配は……。デビルとは違う、それ以上の嫌な感

じがする……・・

３人の額に汗が浮かび流れていった。

この作品の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
https://novel18.syosetu.com/n9967il/

スク水少女戦士ウテルス

2025年9月12日02時12分発行